



# Icpát

The king of a flame

*mimico.*



「...骨折している」

一人の兵士が、足元を見て唸った。

「こんなところで...樹からでも落ちたのでしょうか」

しゃがんで、もう一方の兵士が首を捻る。そのごつい手が向かった先には、白くて小さな塊があった。

竜が出るという森。人里から遠く離れた、隣国との国境沿いに隔たる大きな山脈の中腹で、二人の兵士は困惑に眉を顰めていた。

「どうします、大佐」

大佐と呼ばれた長身の男は、しゃがみ込んだ男の上からその塊を覗き込む。

——一塊は、少女の白くたおやかな肢体だった。

「...ひどいな」

ぼろぼろの衣服は、どこかの山村の出を思わせた。だがそれも、あちこちに裂け目が生じて、ほとんど何も着てはいない。その散り散りの布のあいだから、少なくはない血が滲んでいる。うずくまるように丸めた体を抱きかかえる手は、だらりと力なく、後方にねじれてしまっていた。脱臼か、骨折か。よほど複雑な落ちかたでもしなければ、こうはなるまいという程だった。

「...ワルター大佐、息が」

しゃがんでいた男が、驚いたように顔を上げる。

「なんだと」

おおよそ死んでいるだろうとふんでいたのに、なんと幸いな娘であろう。丸められた背中が、その微かな命の拍動で上下していた。——呼吸している。

普通なら生きていることもできないであろう重傷の傷なのに、この娘はより強運に恵まれたとしか言いようがない。

「運びましょう」

兵士の口からでた息が、ふわりと白く立ち昇る。気温もすでに肌寒さを超えていた。

骨折、切り傷、出血多量、しかももうじき雪も降ろうかというこの寒さ。いくら幸運に恵まれたといっても、このままここに放りおけば彼女は間違いなく死ぬ。

「たしか...軍医を連れて来ていたな、コンツェ」

「アン・トスカルナ少尉です」

ワルターは、髭の生えた顎をしばらくさすって頷く。

「アン・トスカルナ少尉のところまで運ぶように」

「はっ」

コンツェは小さく敬礼を返す。振動を与えないようそろそろと少女を抱き上げると、自分の身に着けていたマントで丁寧に包んでやった。

ずっとずっと、夕暮れの紅い空が嫌いだった。

燃えるような夕日を見ると、怖くて怖くて仕方が無い。まるで地獄の業火ようだと、よく思う。炎に焼かれて紅く染まった雲が、ゆっくりと頭の上を流れていくのを、フェイリットは顔を歪めて見つめていた。

生い茂る森に囲まれていても葉の隙間から漏れ出る紅い光は、否応なしに降り降りる。昼間は溢れんばかりの光を映し零していたその葉も、その紅い光によって、ごうごうと焼かれているように見える。

フェイリットは小さく身震いをして、空から顔を背けた。

じき森の中にも夜が訪れる。それまでの辛抱だ。

傍らにあった大木に身を寄せて、ため息を吐きながら瞼を閉じる。

「こんなところにいたのか」

さくりと木葉を踏む音が、フェイリットに迫る。彼女はゆっくりと振り返った。

見上げるばかりの長身の男が立ち、力強い手が頭を握る。

「サミュン」

「そろそろ雪が降る。そんな薄着では風を召されるぞ」

「ごめんなさい」

フェイリットは男の、深く抉られた左目の傷跡を見上げた。彼特有の濃い金髪に隠されてはいたが、それでもその傷が他人に与える圧迫はかなりのものだ。生まれてこのかた一緒に暮らしているが、時おり鬱蒼とした空気を感じるのはいつ見ても辛い。片目を無くしたことで、かつては剣豪として馳せていたその名も消えてしまったのだから。

「まだ怖いかな」

サミュンの濃い金髪が風に流れる。フェイリットは軽くうつむいて、ため息を漏らした。

「叱ったりはしない」

「……だいじょうぶ。昔みたいに、夕焼けを見て泣き叫んだりはしないわ。ただ気味が悪いなって思っただけ」

「そうか」

サミュンはわずかに微笑んで、フェイリットの頭に手をかぶせる。

「……じきにお前はあすこへ還る」

夕陽の紅さはだんだんやわらかな空の青に溶け込んでいき、やがて深い群青色へ変わっていく。小鳥たちのさえずりと交代し、夜行性の動物たちの囁きが聞こえ始めた。

サミュンの瞳は上空を見上げていたが、その目が見つめるのはその先にある王国——メルトローであるに違いない。かつて彼がその身を仕え、欲しいままに名を轟かせた輝かしき過去の国。メルトロー王国は、緑に囲まれた美しい国なのだという。だが、いくら美しく、よい国だと説かれても、気持ちが進まないのは仕方のないこと。

フェイリットは首を振る。

「サミュン、あたしはあんなところに還るのはいや。たとえそれがどんなに誇らしいものだと説



かれても同じだわ」

「おまえは竜なのだぞ」

サミュンは傷のあるほうの瞼を、わずかに引きつらせた。苛立ったときの悪い癖だ。フェイリットは思わず顔を伏せる。

「あすこへ還り生き続けるか、ここへ留まり滅びるか。お前には二つの選択しかないのだ。お前も重々承知だろうが、主と契約を結ばねば竜は人間より薄命だ。二十年と生きられない、わかっているだろう」

「あたしは、ここでサミュンと死ねたら幸せなのに」

「馬鹿を言うな」

「でも……」

サミュンは呆れ果てたと言わんばかりにため息を吐き、背を向けた。その大きな背中にも、深く抉られた、大蛇のような傷跡が残るのをフェイリットは知っている。

「ここで育ってきたんだよ。メルトロローが故郷だと言われても、今はこのほうが大切に思うの」

「お前がここで十五年間生きてこられたのは、あの方のお陰だ。そのご恩は忘れてはならない。俺もお前も、あのお方の計らいがなければ十五年前に死んでいたのだ」

「私欲と権力ばかりを肥やそうとする老いぼれよ」

「フェイリット！」

サミュンの怒声にフェイリットは肩を竦める。その肩に両手を置いて、サミュンは身を屈めた。

「お前の父上になんということ。たとえ親子であろうとも、侮辱は死刑とわかっているだろう」

「…わかっているわ」

「けして、もうそのようなことを口走るな、サディアナ」

「……はい」

本名を呼ばれたことにどきりとしながら、フェイリットは肩を落とした。

ふと静かに、サミュンが呼吸する。身を屈め、フェイリットを覗き込んだまま微かにわかるほどの笑みを浮かべた。

「――昔、空には沈むことのない太陽があった。片時も休まず、まばゆく気高い光を地上へと降らせていた。神はそんな太陽が好きだった。片時も側から離さず、その明るく美しい彼女を愛し、慈しんでいた。

だが、ほどなくして月が生まれた。儂くか弱い、その白肌は触れることも躊躇うほどに淡く輝いている。神は一目で月を愛してしまう。

……太陽は嘆き悲しんだ。だがいくら太陽が嘆き、叫んでも、神の瞳はすでに彼女の元には向かなかつた。月に嫉妬し、羨んだ太陽は、ならば月を燃やしてしまおうと自らを炎に包ませる。寸でのところで恋敵の暗殺は失敗に終わり、月は太陽から遠く逃げ去った。

神は平等な愛を与えてやれなかつたことに後悔し、太陽と月を交互に愛でると彼女たちに約束

した。

しかし元々ひとりだけ愛を得ていた太陽にとっては納得がいかない。でも正直に嫉妬を打ち明けてしまったら、そのとき本当に神に嫌われてしまうかもしれない。彼女はくやしきのあまり、月が昇るたびに涙を流した。

……太陽の流した涙は炎へと変わり、紅く地上に降り注いだ」

「懐かしい。サミュン」

このあたりに古くから伝わる、説話だった。幼いころは何度もせがんで、サミュンに聴かせてもらっていたのに、いつしかそんなことも忘れてしまっていた。

空を見上げれば、そこにあったのはすでに燃え上がる夕陽ではなく、白く輝く月の姿だ。

「お前は月になる。やわらかな愛を落とし、暗闇を照らす美しい月に」

漆黒の闇に浮かぶ月は今宵も、太陽の流す涙の業火から逃れて輝いている。彼女たちは永遠に追いかけて、逃げている。

「月は太陽になることはできない。太陽もまたそうだ。だが、お前は違う。望めば太陽にも、また月にもなれるだろう。激しさを愛し、やさしさを生め。強さを誇りに持ち、弱さを慈しむのだ」

サミュンの金髪に、月光が降る。あわく輝いた濃い金色は、本当に暗闇の月を思わせた。

「出発は明日だ」

突如フェイリットは青ざめて、彼の顔を仰ぎ見る。その顔には、悲しみも焦燥も、浮かんではいなかった。

「迎えの者がもう到着している」

「サ……ミュン！」

どうして黙っていたの！ 半ば悲鳴にも似た声で、フェイリットは叫んだ。

生まれたときから待っていた——いや、待たされていた。メルトロウからの迎えが来るのを待って、日々を生きてきたと言える。でも、まだまだずっと先だと思っていたのに。まさかこんなにも唐突だとは……。

「お前はメルトロウで千年も長きに渡り、名を刻むはずだ。かのエレシンスをも凌ぐほどのな。剣豪だと謳われはしたが、俺にもできなかった大役だ」

「そんなのうれしくないよ！」

フェイリットはサミュンの懐に飛び込んだ。腕を回して、固く抱きつく。離れたくない、好きだ——そう言っても、きっと彼は何も言わない。

だから黙って、その腕に力を込めるしかなかった。胸が痛い。手足が痺れて、目の奥がじわりと疼く。声を上げて泣いてしまいたかった。

待っても待っても、彼の力強い大きな腕が、抱き返してくれることはない。

「そんなのいや……」

わかっているのに、辛かった。

## 02 狩る者

コンツェはあくびをこらえて、軍用テントの黒幕をめくった。

「おはようございます」

山には初雪が積もったが、まだこのあたりはテントを張れるだけの暖かさが残っていた。その証拠に、日光を集める黒色のテントの中からむっとする熱気が体を包む。

周囲に広がる遊牧民の草原と、高冷なアルマ山脈を見上げる自然豊かな場所。ここに総勢五十余名の小隊が配備されたのは、ちょうど三日前のことだった。はっきり言って退屈なところだ。用事がなければ鍛錬か、昼寝か、そのどちらかを延々と続けていなければならない。

幸いコンツェには「用事」があったのだが、そのために徹夜だった。

「早いな」

テントの主が、笑顔で返す。赤髪が燃える、長身の女性だ。

「お疲れ様です、アン少尉。ちょっと様子を見に来たんですけど」

「ああ、大丈夫だよ。入って」

さきほど運ばれてきた「患者」の衣服をはさみで裂きながら、アンはコンツェを促した。

「もう三日か。今年も狩りは失敗に終わったな。とんだ拾いものまで」

困ったように笑うアンの手元には、山中で見つかった少女の白い裸体がある。なるべく見ないように目を逸らしながら、コンツェは頷き返した。

皇帝陛下の命は、副都アンリへ国立軍の一小隊を駐屯させること。アンリは帝都アデプから離れた公爵統治領。名目は荒涼なアンリの地質調査だ。

しかし副都アンリは、アデプとさほど変わらぬくらい大きな都で、政治でも重要な都市。民衆は農耕や牧畜よりも貿易や商売をしたほうが、はるかに身を立てられることをとうに理解している。

わざわざ回りくどい地質調査だの、アンリの領主の訪問だのをしに来るほど帝都の連中だって暇ではない。

本当の駐屯理由、それは狩りだ。それも、ただの狩りではなく、近隣の諸国はおろか国内領主たちにすら知られてはならない極秘のもの。

――竜狩り。

名を聞くだけで、普通人々は震え上がる。なぜなら竜は「破壊の象徴」だからだ。

人を喰い国を荒らし壊滅させる、触れてはならない、伝説上の化獣。

しかし、真実はそうではない。竜は人にも馴れ、たやすく飼いならすことのできるおとなしい獣なのだという。いったん馴れさせることさえ叶えば、竜の忠義は他の獣たちより屈強でもある。使い方しだいで、この大きな大陸、アルケデアを制覇することも不可能ではなかった。その長い寿命による豊富な経験と知力、戦場に連れ行くことのできる強靱な体躯。それらはどれをとっ

ても人間に敵うものはいない。

竜を手に入れた国はあっというまに勢力をつけ、強大な国へと育つのだ。

だが、ひとつ問題があるとすれば、「竜」の実態がわからないことだった。蛇のように長い体躯を持つとか、蜥蜴のような姿で二足歩行をするとか、さまざまなことが囁かれてはきたが、そのどれもが伝承にすぎない。本当にいるのかもわからないのだから、それを信じて長年捜し回ってきた宮廷上部たちには呆れたものだ。

しかし隣接するメルトロー王国とリマ王国。この二カ国にだけは、負けてはならない。砂漠が半分を占めるイクパル国土は、緑の広がるメルトローや鉱山の豊富なリマとは違い、およそ豊かとはいえない状況だった。それを打破するのが、三国に覇を称えることができる竜の存在。だからイクパルは、それを喉から手が出るほどに欲していたのだが。

「アルマ山に初雪が降ったとなると、もう登れないわけだ」

ふと、アン・トスカルナが苦い表情で肩を竦めた。コンツェと変わらぬ程の上背で、髪を短く刈り、立ち居振る舞いも男のようだ。宮廷の流行の衣装をまとい淑やかに微笑めば、引く手も数多の美女なのに、ずっと前からこの女性はそれを望んではいないようだった。

「そうですね」

「せっかくお前とワルター大佐がようやく偵察に出たってのに、残念だね」

本来ならば燃えるように赤いアンの髪が、軍用テントの暗がりの中で赤銅色にけぶっている。冗談じみた笑みを浮かべつつも、鍛えられてささやかに引き締まった体をきびきび動かし、少女を手当てしていった。深かった傷の縫合を終えて傷口を消毒、包帯を巻いて、痛み止めなのか注射を一本打つ。見ていて惚れ惚れとする手際のよさだ。

「冬間近になると、アルマ山脈の上を竜が飛ぶ……っていうのは、きっと昔話でしかないんですよ。とくに今回の目撃例だってそうです。きっと夕陽に染まった帯状の雲でも見かけたんでしょう」

このあたりには、未だ遊牧の民が暮らしている。竜が飛んだという目撃情報が入ったのがちょうど三日前。それを聞いたイクパル皇帝に命ぜられ、半日で軍をかき集めてここへ乗り込んだのだった。

「コンツェ、ワルター大佐はどこだ？ この娘をどうするのか話し合いたいんだけど」

ひととおり手当ても済んだのか、安らかな寝息を立て続ける姿を一度覗き込み、アンは少女にやさしく毛布をかけてやる。

「大佐ならご自分のテントにいらっしゃるはずですけど……じゃあ、もうこの子は大丈夫なんですわね」

「発見が早かった。あの降り始めの雪の中、あれ以上あそこに放置されていては今頃死んでいただろう。お前たちの手柄だ」

コンツェは嬉しそうに笑んだ。その笑顔に、アンがしっかりと頷く。

「左腕の骨折と、体中の切り傷。血の量が多かったから一時は呼吸もまばらだった。本当にぎりぎりだよ」

この子は運がいい、とアンは言った。

銀に近い色の金髪と象牙色の肌。山中見つけたときは泥と血に汚れてわからなかったが、洗い落とすと整った顔立ちをしていた。

伏せられた長い睫毛が上げれば、どんな色の瞳が現れるのだろう。緑か青か、それとも髪と同じ金色だろうか。コンツェはひとりそんなことを考えながら、この日何度目かわからぬほど少女の顔を覗き込んでいた。

「さてと、あとはアンリで遊んでる皇帝陛下のご到着を待つだけになったな」

「…まさか、陛下もいらっしゃってたんですか」

鼻から息を噴くコンツェを面白そうに眺めてアンが苦笑する。

「何を考えているものやら。まあ、あの方の考えてることはいつになってもわからないものだ」

アンは二六歳で、陛下より三つばかり年上だ。十代の半ばから顔を付き合わせてきたというから、その関係は驚くほど長い。

「なんだか、この子を置いていくことになったら可哀想ですね。もし身寄りがなかったら、アンリの娼館しか行き場がない」

「たしかにな……………なんだ、その娘を連れて行きたいのか」

アンはふと顔を緩める。コンツェは赤くなって首を横に振った。

「アルマ山中で見つけたということは、きっと麓の村の娘でしょう。親が心配しているはずです。送り届けなくてはいけないと思っていただけですよ」

内心、連れ帰って妻にしたかった。だが親元に帰してやりたい気持ちも本当だ。しかしそれを言ってしまっただけはアンに性格上、面白がってワルターに報告するに違いない。そうなったら最後、この娘は有無を言わせず自分の妻に据えられることだろう。それではこの子の意思がない。

コンツェはさぞ心配そうに、娘の顔をまた覗き込む。

ずっと安らかだった少女の顔が、わずかにひきつった。泣いている。

「夢でもみているのだろうか。さっきから、度々泣いている」

「さっきから？」

「おそらくは心因性…か」

アンは治療に使った器具をカチャカチャと片付けながら、コンツェの背中を振り仰いだ。

「大佐がこの子を運んできたとき、少し意識があったんだよ。真っ青な顔して、嘔吐がひどくてね」

たしかにアンの言うとおりの狭いテントの中は、消毒液と少女が流した血、それと吐瀉物のせいか、えもいわれぬ汚臭となっている。

「大佐んとこの小姓に香煙を持ってきてくれるように頼んでおいた。この子が起きたとき、いくぶん気分もよくなるようにね」

「そうですね」

心配げに顔を歪めたコンツェを見て、アンはまた笑った。

「とにかく、ワルターを呼んでこなければな。処遇はそれからだ」



アンの含んだ笑顔に、コンツェは顔を膨らませた。

「わかりました。でも、その子が目覚めて平気なようなら村へ送りとどけますから」

「ほう、いいのかそれで。お前がいないなら、私がつれて帰ろうかなあ」

「少尉、変な気おこさないでくださいよ……」

テントを出がけに大仰に振り返ったコンツェの若々しい表情を見、アンは大声で笑った。

「だから冗談だって言ってるだろうに」

駐屯している兵はこの国イクパルと、隣国メルトロロー王国との国境沿いに位置する、アルマ山脈の麓に広がる平原にテントを並べていた。

コンツェはその、数十と並ぶテントのうちから、一番前線に張られた大きな黒いテントの外幕を捲る。

「第一中隊隊長、コンツ・エトワルト・シマニであります。ワルター・サプリズ大佐をお呼びしに参りました」

入り口で敬礼し、小姓の少年が会釈をしたのを見て中に入る。ワルターはすぐに見つかった。

「目覚めたか」

食事の為の円卓について、移動食の干し肉をはさんだパンに噛り付いていたワルターは、手を止めて厳しい表情を崩した。

「いえ、まだですが、アン少尉が今後のことについて話したいとおっしゃってます」

「今後のこと？ やつめ、俺と結婚でもする気になったか」

「あの少女のことですよ」

ワルターは顔を渋め、笑った。

「冗談の通じんやつだな、お前も。同じようなことをアンにも言ったが」

「...どうだったんですか」

「真面目な顔で丁重に断られた」

「アン少尉も、冗談ばかりなんですけどね」

「あいつは長年付き合ってきた陛下からの伝染病だろう。根は素直なやつなんだがな。……トリノ、こいつに茶でも出してやれ」

ワルターは肩を竦めて、トリノと呼ばれた小姓に片手をあげて合図する。

「いいですね、ここは。自分がいるテントは一人でもきついくらいですよ」

食事の為の卓より、寝床を入れるので精一杯なのだ。それで二人部屋にでもなれば、さらにきつい。

「ま、昇進することだ。中隊なんぞで留まってないで、大隊でも率いてみたらどうだ。誘われてるんだろうが。お前は貴族の息子だし、今頃は大隊長にまで昇っていても不自然ではない。階級だってやろうというのに」

戻ってきたトリノの手から茶が並々と注がれた器を受け取って、コンツェはワルターに向き

直る。

「昇進っていうのも、面倒なんですよ。軍に入るのも反対した両親ですからね。これ以上多忙になって家を空けるとなったら、考えただけでも恐ろしい。……ところで、少女のことなんです」

「ああ、本題だな。麓の村をあたらせてみたんだが、行方不明になっている同じ年頃の少女はおらんそうだ」

「さすがお早いですね。……となると、リマ側でしょうか」

アルマ山脈はそれ自体が国境にもなっている。それはまるで蛇の背のように大陸に這い回る、自然の防壁だ。高い標高と寒冷な気候のせいもあり、登山者、越境者はほとんどいない。だが、ごくたまにリマやメルトローから麓に住む村人などが迷い込んできたりするため、他国の者である可能性もありうる。

「だろうな。だが村娘ひとりのために、わざわざ絶縁状態のリマ王国まで潜り込むこともできん。連れ帰るかアンリに置くか、選択は二つに一つだ。陛下も、じきアンリから戻られる。竜狩りの失敗を告げて叱責を受けねば。…まあ、話はそれからだな」

「叱責ですか…きっと減俸でしょうね。苦しい生活に拍車がかかりそうですよ」

陛下は遊んでいるくせに、という言葉をぎりぎりで飲み込んでコンツェは苦笑する。貴族の息子といっても、寝泊りが兵舎では豊かに暮らせるはずがない。誇張ではあっても、うそではなかった。

「お前はあの娘を貰い受けたら更に苦しくなろうしな」

突然のワルターの言葉に、コンツェは茶を噴き出した。

「大佐までそんなこと言わないでくださいよ……」

「ちょうど、そろそろいい娘でも見つけてやろうと思っていたところだ。出世のできる男には美人な女が必要なものだ」

「なら、ワルター大佐だってそうじゃないですか」

「俺は、女は一人じゃないと思ってるからな。ばか正直なお前には、何人も女は相手できんだろが」

「それは……」

否定できない。コンツェは頭を搔いて、顔を伏せる。

ここへ来る途中、物資の補給に寄ったアンリでも、同僚は娼館に通いづめて何人もの女達と戯れていた。だがコンツェだけは、気が乗らぬまま気立ての良さそうな大人しい女を見つけ、夜が明けるまで世間話をしていたのだ。

「娼館はおしゃべりする場所じゃないぞ。せっかく日ごろの鬱憤を晴らさせてやろうと大枚をはたいてやったというのに、お前は」

「ああいう場所が苦手なだけです」

コンツェはうんざりだ、とでもいうように顔をしかめた。

「お前は堅すぎるんだ。もう少し物事を柔らかく見てみろ。陛下もなかなか女をお決めにならないが、あれでお前ほど堅くはないぞ。なんせ根っからの女好きだ。お忍びで娼館にいかれたと

きも、顔を見せた女たち全員相手してやったというからな。それを見習って少しは……」

「いいです、もう」

ワルターの話の遮って、コンツェは空になった器を卓上に置いた。

「ごちそうさまです。アン少尉には会われないんですか」

「ああ、残っている仕事を片付けなければならん。陛下に言い訳も考えんとな。だから仕方がないが処遇は後回しだと、アンにも伝えておいてくれ」

「わかりました。陛下の日ごろの武勇伝もしっかりご報告しておきます」

そう言って返されたワルターの渋い表情に満足しつつ、コンツェは大テントを後にした。

### 03 空を嫌うけもの

フェイリットは膨れ面をして、食卓の上の干しいものスープを啜った。

何も言わないサミュンの顔を時々見ながら、皿の中身をぐるぐるとスプーンでかきまぜる。彼の隣には、フェイリットに向かい合うようにして座る「お客」の微笑む顔があった。

「それにしても、美しくお育ちになりましたね。そのきれいな水色の瞳など、まるで森の湖水のように透明でいらっしゃる。お肌の色もまるで…」

「お世辞は結構です」

フェイリットはうんざり、というようにため息をつく。自分のたかが知れた容姿など、褒められても嬉しくはない。それに今、自分はひどい顔をしているに違いないのだ。泣き腫らした目はぼんやりと重たく、顔全体がなんだか熱っぽい。

「…ご気分を害されましたか。申し訳ありません…」

「お客」は自らをカランヌと名乗った。メルトロローまでフェイリットを送り届ける仲立ちの役目をしているという。

アルマ山はメルトロローとイクパルを仕切る国境だが、しかし地元の民だけが知る抜け道が何本かある。その獣道ほどの裂け目を通れば、両国の行き来は簡単だ。

山を降りて一度メルトロローの麓まで出て、そこから都まで、待たせている馬車に乗る手はずらしい。ひととおり説明を終えて、カランヌは穏やかな表情を浮かべた。

「まさか食事をご一緒できるとは思っていませんでした」

感激だといわんばかりに、目に涙を溜めたカランヌは笑った。

「無礼講だ。今日は門出なのだからな」

酒を煽りながらサミュンが返す。

いたって冷静なサミュンの表情は、言いようのない寂しさだけをフェイリットに募らせる。たまに見せるやさしい笑顔も、今はない。彼は物心ついてからこれまでずっと育ててくれた父であり、兄であり、いろいろなことを教えてくれた師でもある人物なのだ。そんな人に、別れを惜しんでもらえないのは辛かった。

「サミュン、……あたし」

「顔を拭け」

いつの間にかぼろぼろと溢れていた涙を、彼に指摘されて袖口で乱暴に拭う。もう、何を言ってもだめなのかもしれない。

「サミュンはここに残るの？」

質問には答えず、サミュンは呆れたように瞼を閉じた。

「食べる。早めに寝て、日が明けないうちにここから出て行くんだ」

「サミュエル・ハンス様、そのようなことを申されてはサディアナ様がおかしいそうです」

「サディアナなんて呼ばないで！」

いきなり血相を変えたフェイリットを見て、カランヌが申し訳なさそうに顔を伏せる。

「お前はフェイリットと呼ばれることはもうなくなる。メルトロローに帰ったら、サディアナ王女

に戻るのだ」

「サミュン！」

フェイリットが悲鳴にも似た声で叫ぶ。

メルトロー王国第十三王女、サディアナ。

病弱なため隔絶された城の頂上で、生まれてこのかた病床を離れることができない悲運の王女——という噂が流れるようになったのはいつの頃からだったか。

だがサディアナ王女本人はメルトローを脱し山奥で育ったのである。フェイリットという名を隠れみものとして。

「お前は極めて濃い血を残す竜だ、サディアナ。普通の人間として幸せに生き続けることは不可能だ……お前の母親のようにはな」

メルトロー国王の二十番目の愛妾。それがフェイリットの、生まれて一度も会ったことのない母親だった。

一国を強大なまでに育て、大陸制覇も叶えることができるという、竜……母は人間ではなかった。それを死ぬまで父に告げなかったのだという。

父——メルトロー国王は、自分の愛妾の中に「竜」がいたことを酷く悔しがった。それに気づき血の契約さえしていれば、「竜」は死ぬことはなく、しかもより強大な国家を創り上げることができていたのだ。

本来千年を生きると言われる竜は、主を持たない場合、二十年も生きられない。自分の血を主に飲ませて初めて、契約が結ばれるのだ。

同時に、世界が手に入る。

真実の愛だけを求めて人間であることを貫いた母は、死に際にひとつだけ、国王の実弟であるサミュンに願った。——娘を連れて逃げてくれ、と。

竜の血を持つ赤子は、戦乱を招く。野心を持つ者なら誰もが欲しがる竜が、極めて扱いやすい形——赤ん坊として存在していること自体、危険なことなのだ。

「国王陛下は、危険な状態からお前を守ることに賛同した。だが同時に十六を迎えたら帰すことも約束させた。血の契約をし、生涯をかけて仕えよと。お前はもう寿命が近い。お前の母リエダ様でも、お前を生んだその年十八歳の若さでお亡くなりになったのだからな」

「…誰とでも契約ができる？」

サミュンは悲しげに笑った。

「それができるなら、きっとリエダ様はそうしていたはずだ」

「——どういう…」

「お別れだ」

フェイリットは彼を見上げて、悲痛に眉根を寄せた。

「いや…サミュン、どこにも行かないで、一緒に来て」

サミュンは答えず、静かに食事を再開した。食卓には麓の村からとりよせた、めったに食べることができない山羊肉まである。この料理の多さだけで、フェイリットには十分だった。

これがきっと、彼にできる精一杯のはなむけなのだ。



サミュンの胸に飛び込みたい。その衝動を必死に堪えて、フェイリットは力なく笑う。もともと叶わない夢だとわかっていた。サミュンの心は空よりも遠い場所にあるのだから。

うっすらと目を開けた。あれから寝てしまったのだろうか。だが、何かがおかしかった。

背負われている...？

思う間もなくフェイリットは暴れだしていた。

「サディアナ様！」

自分を背負っていたカランヌが、慌てたように降り返る。その背から転げ落ちて、フェイリットは彼を睨みつけた。

「どうしてなの」

立ち上がらせようとするカランヌの手を振り解き、喉元を目がけて殴りつける。カランヌは大きく咳き込んで、その場に膝をついた。

今居る場所は、小屋ではなかった。木々がうっそうと林立した、森の中だ。いつからかカランヌに背負われて、山中を延々と下っていたことには間違いない。

「...さすが隙がない。サミュエル・ハンス生き写しでらっしゃる」

「冗談言わないでよ」

フェイリットの厳しい眼差しを受けて、カランヌは小さく首を振った。

「あなたが寝ている間に運び出せと言ったのはサミュエル様なのです」

カランヌの言葉に、ようやく我に返る。サミュンなら、考えかねない。

「そんな...」

最後の別れくらい、させてくれるものだと思っていたのに。フェイリットはふらつきながら、周囲を見回した。子供の頃からこのあたりを走り回っているから、自分のいる位置はだいたいわかる。

「戻るわ。別れくらいさせて」

カランヌの顔が曇る。

「それはなりません...麓に馬車を、待たせてありますから」

「大丈夫よ、逃げたりしないわ」

言い終わるや否や、フェイリットは駆け出す。

「サディアナ様！」 カランヌの悲鳴にも似た叫びを背後に聞きながら、裸足で森の中を走った。

「お待ちください！」

ぱしぱしと折れゆく小枝を踏みつけながら、見たことのある木々に手をつける。ここで遊びながら育った。山を駆け、サミュンに怒られながらこっそり麓の村に下りたこともあった。

フェイリットは泣きながら走っていた。この森には、思い出が詰まりすぎている。

しばらく無心に走った。湖水を抜けると、小屋が見える。

丸太作りの家を見つめて、息をつく。家がないのでは、という不安があったのだ。だが、ふと流れた臭いに、フェイリットは鼻を覆った。

「これは…！」

どうして自分は鼻がいいのだろう――。この臭いの元が何なのか、はっきりとわかってしまう自分が嫌だ。

「サミュン、サミュン…」

泣きながら、軋む家の扉を開け放つ。

今更ながら、あの時のサミュンの言葉の意を理解した。お別れだ、と。扉を開けたことで、より強く錆びくさい臭いが鼻孔に流れ込む。

まぎれもない血のにおい。

入り口を開けると小さな客間がある。客間を抜けていくと、食卓も兼ねた台所。その台所の、開け放された扉の前で立ち止まり、フェイリットは嗚咽を漏らした。

「…サミュン！」 扉を開けて目に飛び込んだのは、一面の赤。

血に塗れたサミュンの体が、無残にも床に転がっていた。

「ひどい……」

恐れていたことが、起こってしまった。駆け寄って抱き起こすと、サミュンの体はぐたりと重みを増す。こんなにも重いのに、彼の瞼は閉じられたままだ。

「サミュン、サミュン、起きてよ…。サミュエル…」

彼の手握られた短刀は、元の色がわからないほどに血で濡れている。フェイリットはサミュンの胸に顔を埋めた。もう、鼓動は聞こえない。

「こんなに血を流して…痛かったよね。わたしのせいで、こんな…、こんな辛い思いをさせてしまった」

自分で腹を貫いて、それでも死ねずに喉を掻ききって…。ずいぶんもがいたことだろう。苦しんだだろう。

「どうしてサミュンが死ぬのよ…どうしてあたしに死なせてくれないの！」

人に死ぬなと言い置いて、自分だけ。

「ねえ、置いていかないで！」

叫んでも、サミュンは何も言わない。

不思議なことに、さっきまであれほど流れていた涙が一滴も出てこなかった。

泣きたい。大泣きすれば、きっと彼は起き上がって、その大きな手で子供のころのように乱暴に頭を撫でてくれるだろう。抱きしめてくれるだろう。

「起きて、サミュン…」

顔をぐしゃぐしゃに歪めてサミュンを抱きしめた。まだ温かい。呼吸も、脈拍も止まっているのに、体だけが温かい。

「起きてよお…」

彼の肩を揺さぶると、手から小刀が滑り落ちる。開かれたその手の中に、何かが包まれているのを見つけてフェイリットは目を見開いた。

「これは・・・」

一枚の小さな紙片。くしゃくしゃに折りたたまれているのを丁寧にほぐしてやると、懐かしい彼の字で一言、

愛している――――。

「サディアナ様」

追ってきたカランヌが、いつのまにか背後に立っている。気配をまったく感じなかった。カランヌが早々に現れた驚きよりも、悲しみのほうが勝っていた。

「どういう...ことなの？」

今度はカランヌがたじろぐのがわかる。

「―――自ら命を絶ったのです」

「どうしてなのよ！ どうして彼が死ぬ必要がある？」

振り返ると、カランヌはその場に両膝をつき、怯えたように肩を震わせていた。フェイリットの金髪が淡く輝き、風もないのにゆらゆらとなびいていたせいだ。自分でもそれを感じていたが、今さら怒りを堪えるのには遅すぎる。カランヌのこの世の者ではないものを見る目つきを、苦笑して見つめた。

「なぜなの」

「サミュエル様は陛下と...十六年前、約束をなさいました」

「十六歳になったわたしを、王国に帰すことでしょうか？」

カランヌは震えながら、首を横に振った。

「ちがうのです。約束はふたつありました。一つ目は、あなたの言ったとおりですが、もうひとつは.....十六年間あなたを育てたサミュエル様が主として選ばれることのないように...自決、し」と

「そんな.....」

「サディアナ様、どうか...怒りを、お静めください。サミュエル様は、」

カランヌの言葉を聞き終わらぬうちに、フェイリットは倒れこむ。突然襲い来た壮絶な目眩で、ちかちかと視界が点滅している。

「.....サミュン...は、...？」

体が痛い。

もがいているうちに、びちびちと手の皮膚がちぎれる。

皮膚がぴんと突っ張る感覚から、ぶちりと弾けて血肉が飛んだのだ。それをきっかけとするかのように、全身に激痛が走る。だらだらと血が噴き散っていく。

その壮絶な光景は、たとえ自分の身体でも嘔吐を誘う。

フェイリットは悲鳴を上げるだけでは耐えられず、床に両手をつき首を振った。

「いやだ！ いやだ・・・！」

目眩と吐き気が次々と襲い、フェイリットは吐瀉する。変わってしまう。人間から、竜へと...

「くるし・・・い、サミュ・・・」

引き裂けた皮膚からは血が流れ出し、だらだらと体の上を伝っていく。こんなにも苦しいものだとは思わなかった。気絶してしまえたら楽なのに、それが許されない。どんどん研ぎ澄まされていく意識が、眠るな、と告げていた。視界が血塗られたように赤くなってゆく。

…出てくる。

彼女は短い咆哮をあげると、小屋の天井を突き破り、  
——飛翔した。

草原に張っていたテントの撤収が決まった。

ワルターは給仕の少年たちに指図しながら、外幕をくぐり出る。朝日が昇りかけて、外はもう明るくなっていた。

「おはようございます。ワルター・サプリズ大佐」

「アンか」

目の前に立つ長身のアン・トスカルナの姿を認めて、ワルターは苦笑した。

テントを片付ける混雑のなかでも、彼女の声は張りが強くよく通る。

「なぜ笑うの」

「いや。ちょっと思い出しただけだ」

「コンツェの言っていた、陛下の武勇伝ですか」

聞きましたよ、とアンは呆れたように息を吐く。

ワルターは「いや」と言って首を振るが、わかっているのだろう、彼女は再びため息をついた。目線がなぜ、と問い続けている。

「陛下の武勇伝に、まさか少尉が含まれていようとは誰も思わんだろうな、と思ってな。このお堅い少尉どのが」

「もう忘れて欲しいものですね。私にも若気の至りというものはありません」

「ふはは、陛下の毒牙にかかったって誰も責めはせんさ。あいつの女癖の悪さは周知だ。とくにトスカルナ家のアン嬢とあっては」

成人もせぬうちからあっちこっちと女を誑かして、泣かせて回った男だ。ごくごく身近にあったアンがその対象から外される謂われはない。

「まったく……八年も前の話でしょう、口外されては困ります。その分では、コンツェにも話したんですね？」

「なんだなんだ、心配するなよ。俺がコンツェに話したのは八年前の武勇伝ではない。最近あったらろう、アンリの」

「ああ」

納得したのか、アンはわずかに苦笑する。

「俺に口外するなと釘を刺しにでも来たのか？」

面白そうに聞くと、アンは小さく咳払いをした。

「あの少女のことです」

テントを片付けていた少年たちの、「飲み物をお持ちしますか」という問いに片手で断りながら、アンは呆れたように肩を竦めた。

「ずいぶん楽をしているようですね」

「おもしろい。同じことをコンツェも言っていたな。少尉クラスなら給仕を雇ってもよかろうに」

「私は何でも自分でしますから」



「ああ、然様で。お前はどうか考えているんだ、あの娘をどこへやるか」

「医者としては、患者の完治を見届けたい」

「医者としては…か」

「なんです、その言い方。他意はないわよ」

アンの区切りをつけた返答に苦笑して、ワルターは歩き出す。足はアンのテントへと向かっていた。

「目覚める気配はなさそうだな」

「ええ。テントの中だけでは限界もあります。このまま眠り続けたらいつそう衰弱するだけ」

目覚めていれば、自宅に帰してやることも考えられる。しかしそれが無い今、アンリに住処を与えてやるか、誰かが王都へ連れ帰るといった選択も考慮しなくてはならない。

「だが、残念ながら陛下はもうすぐお見えになる。少女の身寄りをどこかで探すのにも時間が足りないわけだ」

ワルターの言葉に頷いて、アンはため息を漏らした。

「私が連れ帰ってもいいでしょうか。治療もできるし」

「ああ、そうしてくれると助かる。いきなりコンツェに預けるのもどうかと考えてたところだ」

「わたしもです」

ワルターは歩みを止めて、後ろを歩くアンの瞳を振り返って見つめる。青い双眸が、柔らかく細められた。

「口には出していませんが、コンツェはあの娘をいたく気に入っています。うまくくっつけてあげたい。私はあの子にいろいろと助けられましたから」

「そうだな…」

アンの背には縮れた大きな傷がある。戦争でうけた傷ではなく、幼少にできたものだと以前彼女に聞いたことがあった。肩口から腰まで、ばさりと斬られたような痕だ。だが、それが幼少にうけた傷でないことなど、ワルターにはわかりきっている。口ぶりから見て、それをアンも承知しているようだ。

「陛下にも早くお后をお決めになってもらわねばな」

「たとえ連夜宴を催しても、女に本気になることはないでしょうね、あの方は」

アンのテントを訪ねたコンツェだったが、当の本人はどこかへ用事で出かけているらしい。怪我人がいるからと撤収も遅らせたテントは、必要最低限の道具しか出されていない。

空っぽのテントの端にぽつんと置いてある椅子を引き寄せて、コンツェは寝台の上の少女を覗き込んだ。

「早く目覚めてくれよ」

蒼白だった顔は幾分ましになったが、それでも白い頬に赤みがさすことはない。この長いまつげがフワリと開いて、自分を見つめたとき、彼女の白い頬が薔薇色に輝いたらどんなにいいだ

ろう。

一瞬ためらったが、見ている者がいないのを確認すると、手を伸ばして少女の金髪を指に絡めてすくってみる。するりと解けて、おちる。やわらかく、なめらかな感触。それはどこか雛の羽毛を思わせた。

「うう...」

身じろいで、少女がかすかに目を開く。

身を振じらせたせいか、少女の金髪はぼさぼさに四方へ散ってしまった。外から吹き込んできた風で、前髪がわずかにふわりと浮き上がる。やわらかそうな印象は変わらない。再び触れたい衝動がこみ上げて、コンツェは小さく首を振った。

「あ、」

ふと、少女のまなこがぱちりと開き、コンツェの視線とぶつかる。

苦しそうに何かをつぶやいたが、コンツェは首を傾げることになった。イクパル語ではない。語学に乏しい彼だったが、それだけはわかった。

「大丈夫か？」

少女は瞳を大きく開く。透き通った水色の瞳。森中の湖水のような。

透明なその球体に自分の顔が映るのを見止めて、コンツェはぼんやりと口を開けた。彼女の瞳は群青でも金色でもなかった。

「ここは...イクパル？」

少女は小さく呟いた。その呟きを聞き取って、コンツェは頷く。少女の話した言葉は、今度はコンツェにもわかった。同時に、彼女の体が小刻みに震えていることに気がつく。少女の瞳には、はっきりとした怯えが浮かんで見える。

「僕はイクパル帝国軍近衛師団、中隊長、コンツェだ。心配しなくとも、君は無事家まで送り届けるよ」

「わたしは――フェイリット。どうして...」

「冬のアルマ山の中腹で、瀕死だったのを見つけたんだ」

フェイリットが頬を引きつらせたのを、コンツェは見逃さなかった。何か事情があるにせよ、聞き出すのが困難ならそれでいい。しかしそれに勝る好奇心が、コンツェにはあった。

「左腕骨折に出血多量の切り傷がいくつか。俺は医者じゃないが、君の負ったのは並大抵の怪我じゃない.....なにがあったのか、教えてはくれないか」

フェイリットは自らの左腕を見おろし、息を呑んだ。麻酔が効いている、と言ったアンの言葉に偽りはなかったらしい。痛みを感じていないのか、動かそうと揺さぶっている。

「やめたほうがいいぞ。後から泣くことになる。外れた骨を入れ直すのは吐くほど痛いんだ」

「メルトローに行くはずだった」

「ひとりで？」

「連れがいたわ。でも...途中ではぐれてしまって、というかわたしが逃げてきたの」

「それは...、」

考えたところで、コンツェはふと気づく。

人買い。

奥地では、食扶ちを減らし生活資金を得るため子供を売る習慣が残っている。

「まさか、人買いに売られたのか」

売られた子供は奴隷になるか、娼婦になるか。運が良ければ主と結婚することもできるが、それは多妻制の残るリマ王国のみでの話だ。メルトロローやイクパルでは、普通の生活はまずありえない。

コンツェの目前で弱る少女は、まさに運のいいほうの人間かもしれない。

「人買い？ ...そう、似たようなものかも」

「じゃあ追っ手にやられたんだな、その傷は」

「違うわ。逃げてる途中で――」

「お姫様のお目覚めだな」

テントの幕が外から開かれ、長身の女性が顔を出した。赤い短髪と頬に散った火の子のようなそばかす。日焼けした顔に並ぶ二つの青い目がこちらに向かって細まる。

「アン少尉」

コンツェは名を呼ぶと、はっとして恥ずかしそうに顔を赤らめた。勝手にテントに入っていたことが、ばれてしまった。加えて、その後ろからずんぐりした、これまた長身の体躯が現れる。

「大佐...」

「おう、王子のキスで目覚めたか？」

ワルターだった。二重の恥ずかしさで、頬がさらに熱くなる。

「おはよう。っていってももう夕方だ。お嬢さん、そろそろ腕が痛くなるころだと思う。注射で鎮痛剤を打つか、それとも痛み止めの薬を飲むか。どっちがいい？」

がつんがつんと軍用のブーツを鳴らしながら歩き、アンは側にあった卓に乗る銀の盆を無造作に掴んだ。

「何か違いが？」

フェイリットは不安げな眼差しをアンに向けている。

「早いか遅いかだけだよ。さして変わらない。注射なら効きは早いけど、ちょっと痛い。薬は効くまで時間がかかるから、やっぱり痛い」

選べ、という言葉とは裏腹に、アンの手は注射器を持ち、薬を入れているところだ。フェイリットはコンツェを見遣るが、彼は何も言う気はなかった。アンに従うのが一番だからだ。

それを見た彼女はひょこりと肩をすぼめて、苦笑した。

「名前を聞いてなかったね、私はアン・トスカルナ。近衛師団の軍医だよ」

「俺はワルター・サプリズ。近衛団長だ」

「フェイリット、です」

恥ずかしそうに、フェイリットは笑った。

人の話し声や、馬の嘶きがテントの外からざわざわと聞こえてくる。

目覚めて、フェイリットは思わず自分の両手を見つめた。竜の——忌まわしいあの獣の毛皮が、むき出しになっていては困る、そう思ったからだった。だがあの時千切れたであろう人間の皮は、元通りになっていた。

ヒトの皮を被ったヒトじゃないもの。フェイリットは小さく震えて、目を閉じる。

夜には医療テントも片付けるからと、アンに言付けされていた。だがいっこうに彼女の姿は見えない。あれから注射をされてすぐ眠ってしまったようで、目覚めたときには気がまったくなかった。

しばらくぼんやりしていると、あの苦痛が蘇える。

人間の皮が千切れて竜になるときの、あの痛みといたら。思い出だけで吐き気が込み上げる。視覚、聴覚、嗅覚——感覚すべてにおいて体の急激な変化が起こるのだ。ぐるぐると回転する視野にふらつき這いまわると、今度は皮が千切れて絶叫する。

——あんな思い、二度としたくはない。

そして気がつけば空の中を飛んでいた。自分の姿は見えなかったが、両手が黄金の毛でびっしりと覆われているのを見て恐怖した。上を上げば真っ赤に燃える朝焼けの空。正気を保っていられたのが不思議なぐらいだ。人間の姿に戻ろうともがいているうちに、遙か上空から落下するはめになってしまったのだ。

「まさか生きてるなんて」

普通の人間があの高さから落ちたなら、間違いなく即死だろう。重症とはいえ数ヶ所の骨折と切り傷ですんだのは、他ならぬ自分の忌まわしい血のせいだ。

破壊の神、霸王を生む化け物、伝説の軍鬼……その呼び名は無限と言ってい。ある時は怪談、ある時は野心の夢として長らく語り継がれていた。その多くは誇張も多い。国一国を一夜で滅ぼし、王に永遠の力を与えて豊穡をその地に降らせると。だが、そんな都合のいい話があるわけがない。竜も「人」だ。少しばかり血のねじれ曲がった人間。主と結べば永遠に近い時を生きることもできるが、斬られれば血が出るし簡単に死ぬことだってある。軍神やら軍鬼だのと讃えられるのは幼きよりの鍛錬のたまものだし、それが、受け継がれる優れた身体的特徴とするところであっても、何もせずに一端の人間くずれが最強などなれるものではない。否、自分もそうだ。伝説に聞く、唯一表舞台にのし上がった「最強の竜」——エレシンスと自分が雲泥ほどに遠いことも、わかっている。たとえこんな自分を捕らえたとしても、何の役にも立たないのだ。不老長寿を叶えることはできるが……。王がただだらだらと長生きしても、国は都合よく栄えてはくれない。そこに伴う竜の武力や才智が豊穡を呼ぶのだ。伝えられる伝承や説話をみな良いように解釈し、畏れている。夢物語もいいところである。

だが、この世界にいったいどれだけの「竜」が生き残っているのだろうか。人々の尾ひれのついた伝承がまことしやかに囁かれるようになったのも、竜という存在が滅多に歴史の表に出てこないせいなのだ。もし、フェイリットの他にわずかでも残っているとすれば、恐らくは人間の目

も届かぬ辺境の地で短い生涯を絹糸を紡ぐように細々と生きていることだろう。どんな経緯にせよもう知ることはならないが、「人間の地」に出でてしまったフェイリットの母はよほど稀有な存在だったのだ。――そして、その血を引く自分も。

メルトローの国王は、果たしてそれを知っているのだろうか。役に立たない未熟者の「竜」がいることを。竜のことを聞いたのはサミュエルからであった。彼が知っているくらいだから、その兄である国王が知っていてもおかしくはない。なら、彼が自分を欲する理由はいったい何なのか。

フェイリットはゆっくりと起き上がった。

とりあえず、今はこの状況を考えねばなるまい。なにしろメルトローの敵国、イクパルに拾われてしまったのだから。

「早くしないと。今頃きっと…」

いや、きっとではない。もうすでに、カランヌが「はぐれた王女」に向けて追っ手を差し向けたことだろう。早く、それまでどこか遠くに逃げてしまわなければ。……でも、どこへ？ 頼るつてが何もない自分は、結局何もできないのだ。

寝台から起こした体の怪我をあれこれ確かめ、フェイリットは顔をしかめる。――左腕がひどかった。添え木と包帯でぐるぐる巻きに固められている。かなり複雑な折れ方をしているにちがいない。残った右手と両足は切り傷なのか包帯だけ。歩くだけならなんとかできそうだった。

そろそろと寝台を降りる。膝頭まである着心地のいい白布の服を着ていた。するすると滑らかで光沢があり、手触りもいい。きっと高価な布だ。うっかり転んで汚してしまわないように恐る恐る歩いて、フェイリットはようやくテントの幕を捲った。

暗闇の中、あちらこちらに松明らしき炎が見える。コンツェが明日の明朝に帰還すると言っていたから、その最後の準備なのだろう。

どちらにせよ、逃げ出すなら騒がしい今のうちしかない。

いつの間にか、不思議と夜目が利いていることに驚く。松明しか目に入らなかったのが、動いている人々や引かれている馬の姿、運ばれる荷などが昼間のようにはっきりと見えた。これなら本当に、誰にも見つからずに逃げることができるかもしれない。考えて、フェイリットは歩き出す。少し足を引きずってしまうが、仕方ない。

そうして、テントを離れて暗闇に紛れ込もうとした刹那だった。

驚くほど唐突に、何者かの手がフェイリットの右腕を掴んだのだ。

誰もいないと気配で察していたはずなのに……フェイリットは慌てて振り向き見上げるものの、見上げたその顔は見知らぬものだ。

「――誰？」

全身を闇で包んだような風体の男が、こちらを見下ろしていた。

この闇中に溶けこむ黒髪と、同じような闇色の目。それがわずかに細まってフェイリットを見下ろす。

恐ろしい。フェイリットはそう感じた。

何かに絡めとられるような、いやな心地がする。この男と目を合わせてはだめだ。本能が警鐘



を鳴らすのに、思わず見つめてしまう。男の漆黒の瞳は、実在の夜闇とは違い見通すことができない。それが恐怖を与えているのだろうか。

「トリノか、ワルターはどこだ」

深い声で言って、男は猛禽のような鋭い顔をフェイリットに近づけた。松明も持たず、暗がりでも顔もわからないのに違いない。接近した鋭利な印象を与える風貌は、まるで陰影を計算つくされた彫刻のよう。誰かと人違いされているようなのに、それをどう言ったらいいかわからない。フェイリットは戸惑った。

「あの、」

かろうじて声をあげると、そこで初めて男の目に驚きが形どられる。だがその漆黒の瞳のなんと恐ろしいことか。獲って喰われそうな印象まで受けて、思わず身を引いてしまう。

「…女？ 新参の侍女かなにかか」

「——ち、…ちがう」

暗闇の中の黒い相貌を見上げて、必死に声を絞り出す。言ってしまってから、はたと考える。顔いしてしまえば楽だったのに——今は早くこの男から離れたい。そうしなければならない。恐怖に似た、それとも違うような恐ろしい感覚…感触。この男の前に、一時でも居たくはない。

「——たいていの顔は知ってるんだが」

男は何かを考えるように眉を寄せ、その大きな手でフェイリットの顎首を掴む。

恐ろしさに喉の奥で吐息を詰まらせ、フェイリットは小さな悲鳴をあげた。

「どっちにしろお前は俺の顔を知らないようだ…まあ、ちょうどいいな」

「えっ…、わ！」

フェイリットは情けない声を上げた。男の手が腰に回されて、あっという間に横抱きにされてしまう。暴れようにも、しっかりと抱かれてしまってできない。

「や、やめてください！」

この男は何を考えているのだろうか…——身体を抱き込むその腕の力強さに、身の毛が粟立ってぶるぶると震えた。

「は、はなして！ 人違いです！」

えもいわれぬ恐怖で、気が狂いそうだった。渾身の力を込めて自らの体を抱く男の腕から逃れようと必死になる。無理だとわかっているけども。

だがそんなフェイリットの唇を、何かが覆う。

それが何なのか考える間もなく呆然とするフェイリットを見下ろし、

「少し黙れ」

酷薄にそう言った。

見上げると、鋭利な瞳と目が合う。

抱きかかえられたまま、いずこかへ運ばれようとしている。フェイリットは男の眼差しから目を逸らして、困惑に顔をしかめた。

——さきほどの「事故」が頭の中でぐるぐると回っている。唇をふさいだ柔らかな感触……キス……いいや、あれは違う。ふさぐように、押し付けるように、そして男は「黙れ」と言った。両手でフェイリットを抱きかかえ、なおも暴れようとする自分を止めるためにやったのに違いない。

だがどうだろう。あれはフェイリットにとっては初めての——。

恐怖に加えて、怒りまでもがこみ上げてくる。相手の承諾もなしにあんなことをするなんて。「あの、」

文句のひとつでも言ってやろうと再び見上げるものの、つと合わせられる背筋を貫くような鋭い瞳にびくりとする。どうやってこの腕から逃げよう。そんなことを考える余裕もなくなってしまった。

そも、歩いている方向は全く定まらない。少なくともワルターやアンがいるであろう、松明で囲まれたひと際明るい最前地には向かっていなかった。誰かの名を口にしたり、自分と間違われたその人物はそのどちらかの従者のはずだ。ならば当然どちらかを捜しに足を進めているのかと思っていたが……。

そんなフェイリットの考えもよそに、男は準備に追われる近衛兵たちの間を、つつかたとすり抜けるように進んでいく。

「侍女でないなら何者だ、松明も持たずに。遊牧民か」

「……あの」

「遊牧民が紛れ込んだにしては、お前の服は上等だが」

フェイリットは俯いた。こういう場合何と返答すればいいのだろう。いつの間にかまた震えはじめている自分の体が気になった。怖い。目つきや猛禽のような印象だけではない、もっと腹の底からじわじわと背筋に流れるような違和感。

「……た、松明ならあなただって持ってない」

とっさに口を突いて言葉が零れ落ちる。その言葉に、男は目を細めて笑った。

「——たしかに。では、名は何という」

もうその顔を見上げることすらできない。フェイリットは泣きそうになりながら、首だけを横に振った。

「……はなして」

かすれた声でようやく言い切ったのは、解放の懇願。男は沈黙したが、しばらくしてゆっくりと地に下ろされた。まわりには兵たちの姿は見え、気がつけばずいぶんとはずれのほうに来ていたようだ。アルマ山を前方に、ぽつぽつと灯る松明の明るさが遙か向こうに見えていた。

フェイリットはほっとして息をつく。ようやく離してもらえて、いやな汗がひいていくのが

わかった。――が、漆黒の瞳は未だこちらを見下ろしているまま。ふと視線をやると、またもその黒の瞳に絡めとられる。

「不思議な娘だな」

「――え？」

「明かりも無いのに、お前の瞳の色がわかる」

フェイリットは慌てたように、顔を俯けた。暗闇で自分の顔を見たことはない。だが夜目が利くとしたら、自分の眼はこの男にとって闇夜にぼんやりと光る猫のように見えているのかもしれない。

「・・・月明かりの、せいです」

言い訳のようにぼそぼそと呟いて、自分の体に「お前は人間、人間・・・」と繰り返し言い聞かせる。山小屋でカランヌに見せたような肉体の変貌は許されない。

「・・・そんなに緊張するな」

男の大きな手が伸びてきて、顎のあたりにつと触れる。

「夜空を見ながらというのも粋だろう」

その手をするりと頬に流し頭の後ろに来たかと思えば、導くように男の胸元に鼻先を寄せられた。驚くほど自然な動作に、しばらく抵抗も忘れてしまう。

高貴な――・・・乳香の香り。

「フェイリット！」

肩が跳ねる。男の手は、今まさにフェイリットの着衣を解こうとしていた。突然にかけられた声は目の前にいる男のものではない。ようやく自分を取り戻し、かろうじて動く右手で男の体を押し戻す。

その声に相手も驚いていたのか、頭と上背に回された手は、はらりと容易にほどけた。押し戻した力の反動でフェイリット自身がよろめいてしまう。

「フェイリット！」

もう一度呼ばれる。今度こそ視線を巡らすと、すでに見慣れた赤毛の女性の姿があった。

「アン...！」

「どこ行ってた？ 心配したんだよ」

困ったような、うれしいような表情。

アンの顔を見て、フェイリットは思わず泣き出しそうになるのを必死にこらえた。ついさっき逃げ出したはずなのに。けれどももうそんなことはどうでもよかった。早く、この男から逃れたい。

「...なんだ。お前のところの娘か」

アンの所に駆け出しその腕にしがみついたフェイリットを見て、男は何とも表しようのない複雑な表情を浮かべる。

「私のところで預かることになった娘です。お手を出さぬよう」

「面白いことを。私が怪我人を抱くとでも？」

「私の目が間違っていないなら、今まさに手をお出しになるところでした」

フェイリットの着衣の乱れを直してやって、アンは深いため息をつく。

「…松明も持たずに歩き回って危ないじゃないですか。どこへ行くつもりだったんですか」

アンが自ら持っていた明かりを近づける。炎の明るさに目を細めて、男は不機嫌そうに笑った

。

「明かりを持っていたら目立つ。私が陣にいるのは内密だというのに、わざわざ顔を見せびらかして歩けとはな」

「誰もこんなところに貴方がいるなんて考えもしませんよ」

フェイリットは首を傾げた。この男が高貴な身分だろうことは使っている香や雰囲気だけでわかる。特に乳香は貴族ですらめったに手に入らない、貴重な品なのだ。

アンが敬語を使うとなるとそれより上位。まして顔を見せてはいけないなど、よほど高位の軍人でもあるのだろう。

「ようやくお戻りになったかと思えば、さっそく次のお相手探しをなさるとはまったく…」

アンという言葉を受けて、男は面白そうに笑った。

「周辺貴族たちが駐屯に気づき始めているぞ」

「それは…本当ですか」

「ああ、明日にも公爵あたりの諜報が来るぞ」

「…アンリで遊んでいたわけじゃなかったんですね」

「――遊んでいても責務は怠らん。ワルターは、」

結局遊んでいたんじゃないですか、とアンは視線を前方の明るみ――松明がたくさん焚かれて  
いるほうへと向ける。

「前線の指揮です。明朝には出発すると」

「そうか。一応このことを伝えておけ」

桃色に変わり始めた空を見上げて、男が言った。

「わかりました。…言っておきますが、なるべく誰にも会わぬようお願いします」

アンという言葉に肩を竦めて、男は何も言わず行ってしまった。

風に乗ってまた残り香がふと漂う。獰猛そうでいて壮麗な顔、日に焼けた褐色の肌…闇に溶け  
込む漆黒の瞳。

ふと目で追った背中では、まるで夜闇に紛れる黒豹のように見えた。

「あの、…こんなにたくさんの軍隊で、戦争でも起きたんですか」

ようやく不安げながら口を開いたフェイリットに、アンは微笑を向ける。

「たくさん…ていうわけでもないけどね。何をしていたように見える？」

「少なくとも散歩には見えません」

「ははは、そりゃあそうだね。狩りさ、戦争でもなんでもない」

「…狩り？」

「そう。とっておきの、でっかいやつをね。でも毎年失敗してる。今年も」

アンが松明を左右に揺ると、燃えている部分から小さな火の粉がぱちぱちと舞っていく。ふと耳をすませると、風が鳴いているのがわかった。びゅうびゅう、まるで動物の鳴き声のように

。「ほら見て、風が強いだらう？ もうじき寒くなる。イクパルは砂漠地帯だけど、北のこっこのほうでは雪も降るんだ。とくにアルマ山に雪が降ると、もう狩りにも入れなくなるからね」

「狩りなら、春か夏のほうが」

でっかいやつ、アンはそう言った。ならば熊か、鹿か。この冬に近いとき、確かに熊は肥え太っている最中だ。そこを狙って落とすというのも頷けるが、だいいち相手は夏でも仕留められる獲物のはず。

「伝説では、この時期なんだ」

「…伝説？」

ぽつりと呟くように言ったアンに問い返すと、彼女は困ったように眉を下げて笑った。

「宮殿のやつらはこの時期の熊が好物なのかな。一一さあ、夜も明ける。出発だから私たちも戻ろうか、コンツェが馬を用意しているはずだ」

アンは歩き出すが、ふとフェイリットは足を止める。

ついて来ないフェイリットを不思議な表情で見返し、アンが「どうした？」と柔らかな、何も知らない笑顔を向けてくる。

「逃げようと…思ったんです」

「え？」

あまりにも唐突な言葉だったのか、つかみ損ねたような表情を浮かべて彼女は首を傾げた。

「死にそうなところを救っていただいて、感謝しています。けれど、」

「追っ手が来てるかもしれないってことは、コンツェに聞いたよ」

「ですからこれ以上は…ご迷惑になると思います」

フェイリットの言葉に、アンは困ったように眉をひそめる。

「その傷でどこに行けるっていうんだ」

「リマ側のほうに出ようかと…」

「リマから来たのに、リマへ抜けるって？ おまけに追っ手はメルトローの売人なのだろう」

フェイリットは頷いた。たしかにそうだ。アルマの山脈から来たのだと知らぬ彼女たちは、自分のことをリマ人だと思っている。そのリマからメルトローへ売られそうになったところを逃げてきたとするなら。

「もしそうだったのなら、関係の無いイクパルへ来るのが道理じゃないか」

「一一はい」

思ったことがそのまま、アンの口から言葉になって出てきた。

敵国であるイクパル…しかもその中枢である宮殿。どう考えても思いつかないだろうそこへ逃げ込むことが、もしかしたら今自分にとって一番の選択…。

「しかもこんなに軍人がそろってるんだ。追っ手というには腕の立つ者なのかもしれないけど、うちの近衛がそこらの人にやすやす負けたりはしないよ」

アンは人好きのする笑みを浮かべて、まかせてと胸を張る。

コンツェに話したのは人買いから逃げてきたという真実ではない話。それでも追っ手がいるの

は本当なので、フェイリットは口をつぐむ。

追っ手...カランヌは、今どこにいるのだろう。ここがアルマ山のふもと――家から全く離れていない場所だということを考えても、危険なことは変わらない。もし今の時点で自分を見つけることができたとしても、イクパル軍に囲まれていては手が出せない。まして帝都に入ってしまうえば、カランヌも大っぴらに動けなくなる。

これは思っていたより、いい隠れ場なのかもしれない。ただ――正体さえばれなければ。

「さてそろそろ出発だな。私たちも馬をもらいに行こう」

アンに従って、今度はフェイリットも歩き出す。麻酔がきれて両足がひどく痛んだが、我慢できないものではない。

ふと見上げると、アンの朗らかな笑みが目に入る。――しばらくここに、居てみるのもいいかもしれない。

そう思って、ふと先ほどの男の影が脳裏に浮かんだ。

「さっきの男の人って...偉い人なんですか？」

見るからに良い服を着て、貴重な香をつけているあの男。どうしてこんなに印象に残ってしまうのかわからない。けれどもう二度と会いたくないのは確かだ。

ふと聞いた質問に、アンは苦笑した。

「もうあの人に近づいたり、ついてったりしちゃだめだ。ひどい目にあうからね」

イクパルは砂漠の帝国なのだという。

一年を通して肌を焼く太陽が天に昇り続ける。

フェイリットは馬の背に乗りながら、ぼんやり目を閉じた。

...暑い。山中では経験できない暑さだ。どんな気候にも順応できる体を持っているはずなのに、どうやら涼しい環境で育った経験のほうが勝っているらしい。

明朝に出発してから、蛇のように連なる近衛兵たちの行列に混じって馬に揺られていた。あたりには草一本生えていないが、想像していた足がずぶずぶ埋まるような柔らかな砂が一面に広がっているわけではないらしい。馬の蹄でも十分に歩けるほどの、安定した乾いた大地が続いていた。

「大丈夫？」

前に跨るコンツェが、わずかに振り返ってフェイリットを見る。怪我を負っている自分の体を気遣い、コンツェが相乗りしてくれていた。「大丈夫」と言いたいところだが、この暑い気候と怪我による微熱のせいでなんだか気持ちが悪い。

「大丈夫、ありがとう」

笑顔を返して、首を振った。しっかりしなくては――自分はずっと頑丈だったはず。そう思いつつ、暑さから気を反らそうと目を閉じる。

「帝都までは遠いの？」

「夕方には着けるはずだ。本当はラクダで砂漠の真ん中を突っ切ったほうが早いんだけど、こうしてぎりぎりに沿って行ったほうが安全なんだ」

「真ん中を？」

「そう。イクパルの地形図は見たことあるか？」

「たぶん、一回くらいは見たことがあると思うけど...」

「そうだな、イクパルは砂漠の国とは言われてるがほとんどが乾燥した高原に覆われてるんだ、黄茶色の小岩がごろごろしているようなね。砂漠は国土の中心部になる。今俺たちがいるのは東側で、帝都は西になる。だから帝都へ帰るには砂漠を突っ切るか、迂回するかで道が違うわけだけど。行軍で砂漠を突っ切るなんてまだ聞いたことがないよ。兵の消耗も激しいし、大きな町もないから休息もできない」

「へえ...ずっと砂漠だらけの国だと思ってた」

「無理もない。エルベ海を隔てたテナンみたいな公国としか、国交も貿易もないからね。そのテナンもイクパルの属国だ。ほかに国が四つ、皇帝の直轄領も入れて全部で六つの領地で帝国が成りたってる」

見上げると、彼の焦茶の髪が目に入る。アンは赤毛だし、ワルターはコンツェより薄い色の茶毛だった。タベ出合ったあの男は黒。

サミュンからイクパルは民族の入り混じった国だと習った覚えがあるが、その記憶は正しいのかもしれない。いくつかの王国と公国が集まりできているイクパル帝国。

「フェイリットはリマに住んでいたんだらう？」

コンツェが振り返る。空を思わせる青い瞳が、優しげに細まった。

「アルマの山の麓に住んでいたわ、ほとんど山の中。でもリマに近かったから、何度か降りて遊んだりしてたの」

「それじゃあ君が最初に話した言葉、あれリマ語だったのか」

どうりでわかんないわけだ、と納得したようにコンツェが頷く。

山で暮らしていた頃も、使っていたのはメルトロローではなくリマの言葉だ。リマに近かったし、ふもとに降りても危ぶまれないよう習慣づけていた。そんな習慣も空しく、まさかイクパル人に拾われるとは思ってもみなかったが。

「コンツェは、イクパル人よね」

「うん、だけど出身はテナンだ。父が貴族でしょっちゅうこっちに渡って来ててね。それにくっついてあちこち回ってるうちに、大佐に引っこ抜かれたんだ」

「ワルターさんも貴族？」

フェイリットが不思議そうに聞き返す。ワルターは貴族と言うよりは、生粋の軍人といった雰囲気醸し出していた。体格がよく、野性味を帯びた切れ長の眼が印象に残っている。

「いや、大佐は皇族。でも軍学校出のエリートだ。俺も三年だけ入ったけど、大佐クラスになると八歳ごろから入学するから十二年ぐらいか。とにかく、今の時代貴族や王族は肩書きだけの軍人が多いから。ワルター大佐はエリートのエリート。そういえばアンも皇族」

「アンも？」

驚きの声をあげるフェイリットを振り返ったコンツェが面白そうに眺める。

「見えないか？ アンの父親が前代の皇帝の宰相だったんだ。だから今の皇帝陛下やワルター大佐とは古い仲」

「前代の皇帝の宰相っていうことは、今は違う人が宰相なのね」

「そう。今はアンの兄上が就いてる。――疲れないか？ 馬は初めてだろう」

「ちょっとだけおしりが」

「どこかで休めたらいいんだけどな」

あたりを見回しながら、コンツェが言う。

ワルターやアンがいるあたりとは、だいぶ離れた後方を走っていた。後ろのほうが速度が遅いためだ。痛み止めも多めに打ってもらったが、何かあったら前線まで馬を跳ばすよう言われている。

「そうだ」

馬を走らせたまま振り返って、コンツェはフェイリットのわき腹を抱き上げる。

「掴まって」

言われるがままコンツェの肩に右手を乗せると、

すとんー、ぐるりと引っ張られて、コンツェの前に座るよう体を降ろされた。

「よっかかって。きっこっちのほうが楽だ。暑いかもしれないけど」

肩の辺りを引き寄せられて、そのまま背中をコンツェに預ける。なるほど、後ろでバランスをとるよりかは楽な気がした。

「…あ、ありがとう」 でもなんだか、この体勢は恥ずかしい。ほどよく体を包んだ彼の腕は思っていたよりも太く、がっしりしていた。

「どういたしまして。まだまだ帝都は遠いから、しばらくそうやって寝てるといい。なるべく静かに走るよ」

ぼんやりと頷いて、フェイリットは瞳を閉じた。



雪に湿った土を踏みしめて、はて自分はいったいどれだけ歩いたことかと息を吐く。

しんしんと寒さの凍るアルマを、少し軽視していたかもしれない。時はまだ十月、いくら標高い山とはいえ冬の訪れはもう少し先であろう。そんな考えからろくな服装を整えてこなかった。

手は感覚がおぼつかないほど冷えきり、足は濡れ雪を吸った革靴に体温をじわじわと奪われていく。

だから延々と続くかと思われた木々の群れがふと拓け、美しく補整された石畳が眼下に広がったとき、彼はさすがに安堵の息を漏らさずにいられなかった。

補整された道はすなわちメルトロ。道幅は狭いが、小さな馬車なら余裕で走らせることすらできる。彼はちらと目線を動かし、小柄な馬車が道脇に停められているのを確認する。やはり、来ていたか。うんざりとした面持ちで、その馬車の戸が音を立てて開けられるのを見つめた。そこから一人の女が地面に降りて、険しい顔がさらに濃くなる。

「最悪でございますね」

開口一番、女は無然と言い放った。最早五十へと足をかけたであろう、皺の寄った能面のような顔が、しっかりとこちらを見定める。歳を重ねた身であるはずが、その空気は安寧というよりどこか無骨だ。南方特有の蜂蜜色の肌、頭上に束ねられた黒色の頭髪。彼女が生粋のメルトロ人ではないことは、一目でわかる。迎えが来ると聞いていたが、この女が来るだろうとは思ってもよらなかった。

スリサファン、と女の名を小さく呼んでから、カランヌはその顔に渋面をつくる。

「スリサと呼ぶようにと、前にもご忠告したことはございませんでしたか」

「侍女頭がお出ましとは思わなかったのですよ。いや、お乳母と言ったほうが宜しいでしょうかね」

小さな息を吐いて、答える。国王も、うがった人選をしてきたものだ。あの王女が「普通」でさえあったなら、今ごろは王宮でぬくぬくと育ち、この女を「義母上」とでも呼んでいたのだろう。

「…サディアナ王女は、どちらへいらっしゃったのですか」

しかしまるで抑揚のない声が、そんな感慨すら責めたてるように続けられた。

怒りを眉根にかき集める彼女の顔をうんざりと見つめて、カランヌは首を横に振る。

閉ざされた山で育ち十六年。さぞかし従順で大人しい少女に育っているだろうとは、浅はかな幻想だった。育て親の死に激昂、力を解放し、あげく変化して飛びたってしまうなど…なんと未熟なことか。

「呆れたこと…、やはり失敗なされたのですか。山上から竜が飛び去るのをこの目でしかと見ましたよ」

「…ええ、しかも困ったことに三日も捜し歩いて見つけた王女を、イクパル兵に横取りされてしまいましたね」

こんなに眠らなかったことはない。そう皮肉って、鼻で笑ったカランヌの頬に、熱い平手が飛んてくる。

「なんたることです！！」

「お怒りもごもつとも」

竜へと変ったサディアナが、しかしそう遠くまで飛べるはずがないことはわかっていた。きっとあれが初めての变化。人間に育てられた竜が、自在にその力を操れるはずはない。そう思いながらも着地を待っていたというのに、まさか着地どころか落下してくるとは。

王女が落ちた地点は、ここから遙か東のイクパル寄りだった。そこまで到達するのでも二日はかかったというのに、その苦労も呆気なく当のイクパル人に踏みにじられてしまったのだ。

「あの寒さで、生きていたことすら奇跡ですよ。見つけたときには、物凄いお怪我をなさっていましたから」

びりびりと痺れる頬の痛みを左手で抑えつつ、カランヌは肩で息をつく。

「そんな王女を、二日も野ざらしになさったと！？」

声を荒げるスリサファンを忌々しげに見やっ、カランヌは「ですが、」と穏やかに言った。「二日も野ざらしになり、しかも今にも死ぬかというサディアナ様をここに連れ帰ったとしても、私には救える自信はありませんね。向こうには軍医がいる――。スリサ、貴女が私の立場にあったなら貴女もまた同じ事をしたはずでは？」

スリサファンは鼻で笑って、ただその口元を歪めた。

「予定がだいぶ狂ってしまいましたが、王女を連れ戻しにもう一度イクパルへ入ろうと思います」

「お居場所は、おわかりになっているのですか」

その質問に、カランヌはやや間を置いて微笑む。

「しっかりと」

なぜここで笑うのだ、とでも言いたげに、彼女はため息をついた。

「ご助力は致しませんよ。イクパルは嫌いですからね」

「わかっています」

その顔でよく言うものだ。カランヌは心中で毒づきながらも、やれやれと馬車に乗り込んだ。

「なんです、引き返すのでは？」

また山に戻るとでも思っていたのだろう、馬車に体を移したカランヌを見やっ、スリサファンが疑問を示す。

「海路を使いますよ。もうこの山は懲り懲りです」

鎖国をしているイクパルとは、公式な貿易の海路が開かれているわけではない。だがそのあたりはとうとうともなる。密売船にでも金を叩いて乗り込めばいいのだ。そのためにはイクパルに一番近い沿岸までかなりの陸路を行かねばならなかったが、あの凍った山脈よりかはまだましだ。何より陸路には宿屋も食事所もある。

「一度どこかで休ませてください。このままではこっちが死にそうですからね」

山を降りて一気に上がった周囲の気温が、カランヌの雪のついた衣服を一層湿らせていた。体

は温まったが風邪を引いてしまいそうだ。

「本当に、呆れたこと」

ここ一番長いため息を捻り出して、スリサファンは御者台へと上っていった。

イクパルはアルケデア大陸の真中に位置し、乾燥した季節が年のだいたいを占めている。そのため国土の半分は乾燥地帯でろくな作物は育たず、丈の短い草が生えるばかり。こんな土地では家畜を飼うぐらいのことしかできない。だから下層の人々の収入源は、草原に放した山羊や羊、牛などを追う遊牧・酪農がもっぱらだ。そうして得た毛皮や乳製品を売って身を立て生活している。

——産物に欠しい地帯で遊牧と酪農だけで国を潤すというのは、難しいだろうな。

延々と続く砂地を見下ろして、フェイリットはぼんやりと思う。

しかもこの国は、たしか何代も前のころから鎖国をして帝国の領土以外の国とは国交すら無いのだった。

荒れた土地を潤すのに必要不可欠なのは灌漑。だがイリアス公国を出、砂漠に沿って見てきたが、ここまでそれらしい設備は見当たらなかった。灌漑の技術が開発されて、まだまだ日も浅い。他国と交わりのないイクパルのこと、その技術を知らないのも当然だろうが……。——それにしても、灌漑には水脈が必要だわ。この地帯は、水脈にも恵まれなかったのかな。

ため息ながらに、フェイリットは苦笑する。幼い頃から嫌々ながらも受けていた教育が、なんだか役に立っていた。サミュンの受け売りだから多少国の情勢には時差があるだろうが、それでも瑣末なことをのぞいてその知識は正しい。

この国の領土は三方を自然国境である高山アルマに囲まれ、本来ならば自然の要塞ともなりえる環境にある。諸国を治めるには、良い地理を持っていると思うのに……。水がないというその一点だけで、こんなにも——…、

「みず…」

ふと、遠方に聳えるおぼろげな山脈を見つめる。竜の背にも喩えられる、凹凸の激しい白きアルマ。

「喉が渴いたのか、フェイリット」

唐突に頭上からかかる声に、するすると現実へ引き戻される。

「…え？」

コンツェの顔が、覗き込むようにして隣にあった。

「水って言わなかったか？ほら、水筒」

たぶん、と差し出された革の水筒を見つめて、フェイリットは目を瞬かせる。

「…わたし水って言った？」

「ああ」

口に出したかどうか、覚えてはいなかった。だがせっかくの水だ。ありがたく受け取って、袋の口紐を解いていく。

「起きてたんだな。音沙汰無いから、ずいぶん深く眠り込んでるんだと思ってた」

「眠ろうと思ったんだけど、…」

おしりの辺りが強張って痛い。馬に揺られ続け半日と経ったであろうか。馬の揺れをコンツェ

がずいぶんと抑えてくれていたが、それでも慣れないことに変わりはない。擦れて痛いおしりを気にしていたら、眠気なんて吹っ飛んでしまった。

「考え事してたら眠気が吹っ飛んで」

わずかに、訪れる沈黙。――「追っ手」のことを考えて、不安がっているように見えたのだろうか。素直にお尻が痛くて眠れなかったと言ったほうがよかったか。そうになると、歳の近い青年に向かって「尻が痛い」と訴えなくてはならなくなるわけだ。やっぱり恥ずかしい。

余計な心配をかけたと申し訳なく思いながら振り返り、彼の顔を伺った。この国特有の日に焼けた肌と、並ぶ濃茶の瞳。切れ目がちなのに、目つきが悪いとは思わせない、優しい眼差しだ。黒かと思ってよくよく見れば、陽の光で「ああ、茶色なのか」とわかる程度の微妙な色合いの。

ふと視線をずらして見ると、彼の頬が土汚れている。それがなんだか面白くて、フェイリットはふと息を漏らす。ずいぶん長い時間、砂風から守ってくれていたのだろう。風が吹いているなど、気にも留めなかった。

「え、なに？」

文字通り、自分の顔になにかついているのかと、戸惑っているコンツェ。

「なんでもない」

微笑んで、来ていた服のひらひらした袖の部分をかき集め、彼の頬を拭ってやった。

拭われた自らの頬に手をやって、コンツェが穏やかな笑みを浮かべる。口角に浮かぶかすかな笑窪…。

「ありがとう」

コンツェの笑顔を見ていたら、いつの間にやら見つめ合うような格好になった。それに気づき、フェイリットは慌てて視線をわきへ逸らす。

「あ、見て」

コンツェが指を差し、前方を示す。その指の向こう――とつとつと見え始める黄砂の色の人家の群れ。

「あれは…」

先頭を行く馬の列が、その家々の間を縫うように入っていく。領土を仕切るための囲いは無く――高台に立つ城を中心として城下の家々が、迷路のごとく放射状に広がっていた。

「そう、あれが帝都だ」

うねうねと連なる城下の黄土色の家々。大きな水瓶を背負い歩く人、露店には見たこともないような果物や毛皮、美しい布が並べられ、それを見にちらほらと人が集まっている。

「他国のように門扉は無いんだ。地利の無い者が入り込んでも、案内無しには城まで辿り着けないからね」

馬に乗った「城の人たち」を見上げて、住民は恭しく頭を下げていく。

優雅な会釈で返して見せ、コンツェが頭上高くを見上げた。

「あれがイクパル城だ」

連なる土色の壁の最奥に、かすかに見える大きな建造物――。フェイリットは目線を空近くまで動かして、口を開けた。

「赤い――城」

張り巡らされた水の無い堀の向こうに、台形状に上へ昇る赤色の城がこちらを見下ろし聳えていた。城下に広がる土色の街と見事な対色を描いている。幾重もの城壁に囲まれた、その最も高いところに広がる一番大きな横長の宮殿――その中央部分には、いくつかの球形の屋根も並んで見える。

――なんて、

「美しいだろう？ あの赤い色は赤砂岩なんだ」

――そう、美しい。城ならばどこでも同じだろうと踏んでいたのに、絵画でだけ見たことのあったメルトロウ王宮とは、明らかに違う。

メルトロウの王宮も確かに美しい。他国の人間が見たら、指を咥えるか感嘆に涙するとさえ言われる宮殿だ。しかしメルトロウ宮殿の連なる均一さと正確な左右対称は、どこか人の手を感じさせずにいられないもの。

イクパル城は、単一色の赤といい無駄な装飾を省いた外壁といい、どこか人智の力を越えたものを感じさせる。メルトロウの芸術的な美とはまた違った、何とも不思議な美しさと威厳が漂っていた。完璧な城塞だというのに、そこに感じられる意匠は惜しめない。

「俺はこの城が一番好きだな。故郷は違うけど、なんだか『還ってきた』って感じがするんだよな」

「...うん」

じんわりと、胸を締め付けてくるような焦燥感。不思議な感覚を味わいながら、フェイリットはじっと城を見上げ続けた。

「城の門を三つくぐった一番奥に王宮が...見える？あの丸い屋根だ。あの前には貯水用の大きな泉が広がって、月夜の晩には水面に浮かぶもうひとつの宮殿を見ることができるんだ」

水面に漂う赤色のイクパル宮殿。それはさぞかし幻想的だろう。天を指す美しい針と呼ばれるメルトロウ宮殿とは、やはり対極だ。国によって、こんなにも違いがあるなど思いもよらなかった。

「台形みたいな型をしているけど、いくつもの宮に分かれてるの？」

造りを見上げて、ふと思う。ひとつに繋がっているかと思われた建物は方々に途切れ、緩やかな坂ごしに連なっている。

「そう。あの門の向こうも、独立した街みたいになってるんだ。その中でも皇帝が住まう宮殿はあの一番上の部分だけで、行政もすべてあそこで取り仕切られてる。下のほうの宮はみんな皇族貴族の宮だ」

堀にかかる橋を渡りゆるやかな勾配を上っていくと、大きな城門が迫ってくる。楕円のアーチを描く門の両脇に立つ衛兵が、行列とは遅れて馬に乗るコンツェの顔を見つけて敬礼した。

「門は三つある。今潜ったのがジャイ・ハータ門、次がアル・ケルバ門、王宮につながる最後の

がタルヒル門」

門兵に敬礼を返しつつ、コンツェが説明を続ける。

「ジャイ・ハータ門とアル・ケルバ門の間に練兵場と兵舎がある——俺やアンが暮らすのは大体このあたり。その他にも下級の貴族の屋敷があったり、高級商人が露店を開いたりする」

「なるほど、街だね。ジャイ・ハータ、アル・ケルバ、タルヒル……なんだか人名みたい」

久しく剣には触れていない。練兵場とやらがここからは見えないことに心中で落胆しながら、フェイリットは感心したように息をつく。

「うん、もとは人名らしいよ。昔の皇帝の名前だったか、将軍の名前だったか……まあここでは皇帝も将軍も兼任するようなものだから皇帝って言ったほうが正しいのかな」

ふと見遣ると、前方を行っていた近衛兵たちが二番目の門であるアル・ケルバを通らずして進路を左へと向けている。練兵場と兵舎がこの狭間にあるというから、そのどちらかへ戻るのだろう。

コンツェの駆る馬はそれには習わず、アル・ケルバ門へと向かった。

「アル・ケルバ門とタルヒル門の間に皇族の屋敷が並んでる。君をアンの実家に届けるよう言われてるから」

「……そういえば、アンは皇族なのに兵舎で暮らしてるの？」

さきほどの兵舎の説明では、そういうことになる。真っ先に出るだろうワルターの名が上らなかったのは、彼がちゃんと自分の屋敷に居を持っているからだろう。同じ皇族なら、アンだって実家に住んでいたほうが自然なのに。

「アンは前帝の宰相の娘って言ったのは覚えてるか？」

「ええ、それで今はお兄さんが継いでるって」

「そう、元凶はその兄。——ああ、ようやく来た」

ぞろぞろと過ぎ去る馬の列から逆行して、白馬を駆るアンの姿が見える。

コンツェは軽く手を降って見せ、すんと馬から飛び降りた。

屋敷に着くと、見知った顔が出迎える。長い赤毛をゆるやかに括り、そばかすの乗った白い頬に柔らかい笑みを浮かべる美しい人。

「おひさしぶりです、母上」

懐かしい顔にアンは微笑んだ。

ここしばらく、何かと理由をつけて兵舎で過ごしていたため屋敷に戻るのは本当に久しぶりだ。仕事ではあっても、ジャイ・ハータの門を潜るのも久しい。

「おかえりなさい。最近貴女の姿が見えなくて寂しかったのよ。しばらくは家に居られるのでしょうか？」

人に安らぎを与える柔らかい声——ああ、いいな、…そんなことを考えながらも、アンは頬に苦笑を乗せる。出迎えなど侍女にやらせればよいものを、自ら屋敷の入り口までおいでになるのは困ったもの。代替わりして多少緩められてはいるものの、女性の外出を規制する前帝の法はまだ健在なのだ。

「すみません、忙しくてなかなか。…兄上は？」

薄い濃紫のヴェールが彼女の頭から風で飛んでゆかぬよう押さえてやって、此処からでも見渡せる回廊の列柱の向こう——彼の部屋があるあたりに目を凝らす。

「ウズは今しがた宮殿のほうに上がりましたわ。…まあ、お客様が？」

後ろに控えるようにしていたコンツェとフェイリットを見つけると、母——エセルザは朗らかに首を傾げた。

「コンツ・エトラスト・シマニ、師団の中隊長にあります」

視線を受けたコンツェは、軍隊式の礼をとる。宰相宅は皇家でもあるため儀礼は宮廷式と決まっているが、着ているものが軍服では仕方ない。アンは苦笑してエセルザを見た。

「じゃあ、お噂の中隊長さんね」

エセルザはふと口元に手をあてると、得心したようにコンツェを見、頷く。

「噂…ですか？」

「ええ、ワルター殿から聞いていますわ、昇進を拒み続けてる中隊長がいらっしゃるって。貴方なのでしょう？ テナン公国の公子殿」

エセルザの言葉に、コンツェは困ったように笑った。

「いいえ。私は末子ですので一介の貴族と同じようなものです」

「末子でも肩書きは変わりません。後にテナンの王になられるから、昇進を避けられているのだと皆が思っていますでしょうに」

アンは小さなため息をつくとき、エセルザを見つめる。こうなってしまったら、この人の好奇心は留まらない。

「…お母様、立ち話もなんですから」

「まあ、私ったら…ごめんなさいね。アン、そちらのお嬢さんは」

「この子はフェイリット。怪我をしているのでしばらく家に置くつもりです」



寄越した目線の先に小柄な少女が居るのを見止めて、エセルザは微笑む。

「...わかりました。軍医さんのお仕事ごくろうさまですね」

エセルザは含み顔で頷いた。突然連れてきた患者に、何かわけがあると察したのかもしれない。

フェイリットには追っ手がいる。城下に部屋を用意したのでは、その追っ手から隠れる意味がない。とりあえずはここで静養させて、落ち着いたらここで生きていけるよう身の回りを整えてやろう。ワルターと話し合い、それが一番いいのではということになった。怪我が治ったからと、身寄りの無い年頃の娘を「自力で生きていけ」と放り出すような真似はさすがにできない。

「どうぞお庭で休んでいて。あとで冷たいお茶も運ばせますわ」

「ありがとう母上」

エセルザの代わりに年若い女中が奥から出てきて、アンとコンツェの帯剣を預かっていく。高貴な身分の家に上がるには、帯剣は許されない。

庭は屋敷の入り口から一段高い、外側の回廊から周って中央に位置する。どの部屋にも均一に陽光を取り入れることの出来るよう、ひとつひとつの部屋が庭に面しているのがこの国の邸宅の造りだ。

「...フェイリット？」

ふと横を見ると、青ざめた顔でフェイリットが俯いている。呼びかけに気づいて答えようと顔を上げるが、やはりその顔に気はしない。

「どうした？」

「いえ...大丈夫です」

その額に手をあてると、思った以上に熱い。うっすらと浮かぶ汗も脂じみている。

「副作用だな...多めに痛み止めを打ったから。眩暈がするだろう？」

「はい...、でも」

「もともと療養のためにここに来させたんだから、気は使うな。コンツェ、運んでやってくれ」

「了解」

携帯していた熱冷ましに効く薬草をフェイリットに噛ませ、コンツェに抱き上げさせる。華奢な体を軽々持ち上げて、ふとコンツェは苦笑した。

「...どうした？」

「いえ、疲れてたんですよ。馬に乗るのは初めてだと言っていましたから。ほら、」

促されるままにその腕の中を覗き込むと、フェイリットの安らかな寝顔が目に入る。あっという間に眠りの世界へと旅立ったようだ。

「...なんだお前、けっこう懐かれてるんじゃないのか」

フェイリットが何ゆえか気を張り詰めていたのは、早々から気づいていた。追っ手を恐れるが故だろうと思っていたが、身の安全を得て暫らくしても一向にその糸は途切れることがないようだった。それで心配していたのだが...コンツェに身を預けた途端、驚くほど静かに消えていったではないか。

「そうですか？」

「よかったな、当初の目的が果たせるかもしれないぞ」

「当初の目的って...」

「そりゃあ、フェイリットをお前の妻にするっていうやつだよ」

コンツェの顔がどんどん赤くなっていく。面白いのでそのままにやにやしながら眺めていると、大きなため息を吐かれた。

「忘れてましたけど、ここに連れ帰ってきたのって結局ソレでしたね」

「何を言ってる。怪我が治っていざ身の振りを考えた時、養ってくれる者がいたほうが安心だろうが」

まして女が自由に働くことのできないイクパルで、少女一人はやはり危ない。

「...そうですね」

アンは、洗面ながらも顔くコンツェを満足げに見つめる。

メルトローに売られるはずだった村娘。その彼女の命を拾い助けたのは、他にもないこの若い青年だ。なにかの縁で妻を娶るとしたなら、これがいわば天命とでもいうやつなのかもしれない。

「適任はお前だと言ってるんだ。医療テントに忍び込んで、頭撫でてるぐらいだからな、きっと大事にできるだろう」

「からかわないで下さいよ。言っておきますけど、俺は嫌がる子を妻にはできないですからね」

「だろうな」

回廊を歩きながら、アンは和やかに微笑んだ。

彼の優しさなら大丈夫だ。そして、この子が楔となって彼を繋ぎ止めておいてくれたなら。

紺色の薄布が、頭上でひらひら揺れている。フェイリットはうっすらと目を開けて、日差しを受け透けている薄布を寝たまま見上げた。

洗濯を干したまま寝てしまったのだろうか…頬を撫でていく風が暖かい。なんて気持ちがいいのだろう。アルマ山はもう冬だというのに、珍しい日もあるものだ。

「稽古しなきゃ」

呟いて、ふと考える。稽古は昼からだったような気がした。赤っぽい太陽の日差しは、明らかに夕暮れを思わせる。

…稽古をさぼってしまった。

「うっわ、サミュンに叱られっ…！」

慌てて起こした体に、激痛が走る。その痛みが、急速にフェイリットの頭を現実へと引き寄せていった。

「ああ、」

…そうだ。ここは、もうアルマではない。

「サミュン、に叱られる…か」

鬼のような稽古をつけるサミュエルも、すでにこの世にはいない。

——ろくなお別れもできぬまま。

フェイリットは小さな、けれど重い息を吐いた。

思い起こせば涙でも出てくるものだろうと思っていたのに、ぽっかりと空いた虚ろな感情しか湧きあがらない。自分はもう、忘れてしまったのだろうか。痛みを。

「…しばらく剣も握ってない」

あれほど日課にしていた剣の稽古をさぼっているなんて知ったら、それこそサミュンは角を生やして怒るだろうな…、そんなことを考えながら苦笑する。アルマに移り住んでサミュンに育てられ、以来ずっと王に遣えるための知識や武芸ばかりに勤しんできた気がする。自分は人間ではないのだと、常々言い聞かせられてきた。フェイリットの願いなど——普通に恋をして子を産み育て生きることなど、この血の前では嘲りにも等しいと。けれど、この身体を流れるもう半分の血がそれでは嫌だと悲鳴をあげる。

洗濯物と間違えた紺色の薄布は、寝台に垂れ下がる天蓋だった。手で触れるとすると逃げた薄布をめぐって、寝台から足を降ろす。寝台の高さは膝下ほどもなく、床には毛の短い絨毯が敷かれていた。

足裏に絨毯の心地よさを感じながら、フェイリットは部屋を見渡す。

広い部屋にはフェイリットの眠っていた寝台と、わずかな調度品が置かれているだけ。人が二人、両手を広げて立っても余るぐらい大きな窓がひと際目立つ。メルトローで見かける窓のように窓枠やはめ込みの硝子はなく、分厚い壁をざっくり切り取った型だ。その先の廊下に、おそらく庭と建物を仕切る為か、列柱がぽつぽつと並んでいる。窓枠の代わりのようなそれを見つめて、一年中雨や雪にさらされることがあまりない南国だからこその造りなのだろうと思いつ

った。

ふと庭が見たくなって、恐る恐る立ち上がる。二三步足を進めてみるが、不思議と痛みは感じなかった。

廊下に出て列柱のひとつに身体を預ける。深呼吸をすると、フェイリットはたちまち瞳を輝かせた。

「すごい……」

窓外に広がっていたのは一面の花園。咲き乱れる手のひらほどの花卉は、艶やかな紅色だ。ちらほら、白い蝶が舞うのを見つけて、思わず庭まで降りていく。

「気持ちいい香り。何の花だろう」

柔らかい芝生のおかげで、裸足でも痛くはなかった。ふと見遣れば、庭のあちらこちらに水の流れる細い水路が廻らされている。どこかから水を引いてきて、草花の根に吸わせているのだろう。水の少ない地域で、これだけ贅沢に花を生かすことができるなんて、さすが「宰相宅」とでも言うべきか。そして驚くべきは、これがイクパルに伝わっているはずが無いだろうと思っていた、灌漑の技術を使ったものであるということ。一体誰が……、

「これをもし自分で考えたとしたら、すごいわ」

風に乗って流れる花の匂いを吸い込みながら、目を閉じる。この庭の生気が、まるで体に溢れるように染み込んでいく。自然を感じるなんて、アルマを降りてからすっかり忘れていた。風のこえ、草花のささやき、身体に染み入る生気。ただひとつ、自分が竜であることを拒絶なく受け入れられる瞬間。

ぼんやりしていると、庭に人の気配が混じりこんだ。感覚が戻ってきたのだろうか。フェイリットは振り返り、その気配の主を見上げた。

「薔薇というのですよ、きれいでしょ」

エセルゼー—初めて会った時はぼんやりしていたから確信はないが、アンの母上だったはず。精悍な印象をうけるアンとは対照的な、温和な空気をかもし出す知的な美人。フェイリットが出てきた部屋の窓縁に立って、こちらを見ている。

「ばら？」

耳慣れぬ言葉に首をひねったフェイリットを楽しそうに見つめ、エセルゼは頷いた。

「ええ、この花の名前ですよ。棘があるから、あまり近づいては駄目。でもお好きなら後でいくらか切って、お部屋に持って行ってあげましょう。もうお加減はよろしくなったかしら？」

「はい、お世話になってしまって…すみません」

見ず知らずの娘を、こんな形で。感謝の気持ちを込めて深々と礼をすると、エセルゼは微笑んで、いいの、というように首を横に振って見せた。

「あれから三日も眠り続けていたのですよ」

「三日…?!」

「このまま目を覚まさないのではないかと心配していました。でもよかったわ、すっかりお顔の色もよくなりましたもの」

「そんなに眠ってたんですか…わたし」

「ええ。それに...」

くすくすと可愛らしく笑って、エセルザはつなげる。

「三日のあいだ、色々な方がお見えになったんですよ」

「色々な？」

「そう。あれほど家によりつかないアンは毎日ここに帰ってくるし、コンツェ殿も暇さえあれば様子を見に来るといった感じでしたし、ワルター殿も昨日いらして、貴女が起きていないのを残念がっていましたわ。それに...」

と言いかけて、ふと気づいたように口を紡ぐ。なんだろう。フェイリットが首を傾げてその先を促そうとするも、エセルザは曖昧に微笑んで誤魔化した。

アンの母上というのだから年齢もそれなりなのだろうが、エセルザにはまるで歳をとるのをふと忘れてしまったような、少女のような印象が垣間見える。こうして見ると、アンとは対照的な性格をしているようだった。

「さあ、もうお入りなさいな。目が覚めたばかりなのだから、あまり無理してはまた倒れてしまうわ」

背中に温かい手が添えられて、フェイリットは素直に頷く。

「今アンを呼んで来させますからね」

フェイリットを寝台の上に寝かせて、まるで子供にするかのように額の上を優しく撫でる。感じたことの無い母親のぬくもり——きっと「母」というのは、こういう人を言うのだ。自分の母も、こんな人だったらいいな。

ぼんやりと思いつつ、フェイリットははにかんだ。

「フェイリット！」

しばらくして、アンが部屋に入ってきた。仕事から帰ったところなのか、着ているのは軍服だ。その後ろから、見慣れぬ銀髪青年が入ってくる。軍服ではない宮廷衣を纏ったその姿を見て、フェイリットは誰だろうと考える。

「よかった、顔色もいいね」

アン言葉に答えるように、フェイリットは寝台から身を起こしてぎこちなく微笑んだ。手当てをしてもらい、こうして家にまでお世話になってしまったのに、何にもお礼ができそうもない。

「あの、何て言ったらいいか...本当にありがとうございます」

「いいんだよ」

アンが嬉しそうに返して、傍らの銀髪青年を見遣った。

その視線を受けて青年は、やや前に身体を置く。フェイリットからも見やすく、青年もフェイリットを観察できる、けれどけして近づきすぎない距離だった。

「ウズ・トスカルナです」

視線を受けて青年が発する。

「――ウズ……さん」

鸚鵡返しに呟いて、はたと気づく。「ウズ」といえば、アン兄のはずだ。だが目の前に立つ青年は、おおよそアンと兄妹だなどとは言えぬ容姿。長い銀色の髪と薄い北方の肌色……それに加えて冰山を思わせる無表情な整った顔、張り出た額は骨ばって広く、眉間には「不快」の二文字が張り付いているような皺が縦に二本。唯一似ていると言えるなら、瞳の形ぐらいなものだ。僅かにつり上がって、顔の造りをこれ異常ないほど引き締めている。同じ形でもアン紺碧の瞳ならまだ温かみを感じられるのだが、彼の色は冬空を思わせる灰色。あの燃えるような赤毛を持つエセルザから、こんなにも冷めた色が生まれ出でようとは――…。

「異母兄妹なんだ」

さっぱりとした口調でアンが言う。まるで今までの思考が読まれてもしたかのような気分で、フェイリットは自分の頬が赤らむのを感じた。

「あの、わたしは」

「フェイリット、と言いましたか」

ウズは、フェイリットが先ほど唯一アンと似ていると思ったその瞳を、微かに細めてこちらを見つめた。いきなりの鋭い視線に、フェイリットは頷きながらも戸惑う。

それが何かしたのだろうか、再び口を開こうとした途端、

「……うぐっ」

ウズの長く細い指が伸びてきて、フェイリットの顎首をがっちり掴み上げる。アンが驚きの声を上げるのを耳の端で聞いたが、それでも解放されることはなかった。

喉元を引き伸ばされて、驚きとともに潰れたカエルのような嗄声をあげるフェイリットを気に

もかけない。顎を掴んだまま右へ左へと向かせられ、フェイリットは僅かに顔を顰める。まるで検分でもするかのように。

「なにか...」

「生まれは」

氷のような冷たい声が、間近から浴びせられる。

「リ、リマ」

「メルトロー、ではなく？」

ひやり、心臓が縮むのを感じるが、顔には出さない。

「はい」

ウズは片眉をつんと吊り上げて、可笑しいですね、と言った。

「フェイリットという名は確か、メルトロー王国第十三王女殿下がご生誕為された折につけられた、仮名ではありませんか？なゼリマ生まれの貴方が敵国の王女の名など」

「それは...」

——顔色が...青ざめぬよう気を保つのに精一杯だった。

ばれて、いるのだろうか？

たとえ愛妾の子だとて、王族の血が少なからず流れている。自分の顔かたちに歴代の王たちの特長や、雰囲気は全くないとは言い切れないが...いや、そんなはずはない。いつだったか聞いてみたことがあったのだ。自分は父に似ているのかと。メルトローを統べる第87代国王・ノルティスは、完璧なメルトローの色系を保持していることで有名だった。象牙のように白い肌、澄み渡るような青空の色の瞳に、麦穂の色の金髪。他国との交流も多く人種が混じりつつある今、このように原色が現われることは珍しくなったのだという。その特長と自分の容姿を比較してみても、やはり違っていると自信が持てた。濃くはない金髪と霞んだような水色の瞳、山麓暮らしが長いせいで、肌は生まれた時より格段に日焼けしている。王族を思わせるような宮廷の所作だって、ああいう生活をしていけばつくわけがない。

「父がメルトローの出身でした。ちょうど王女のご生誕と時期が重なったので、祖国を懐かしんで付けたと聞いています」

「確かに、よくある名ではありますね」

そう、ごくありふれた名前。メルトロー王国の首都に行きその名を叫んだら、人込みの雑多のなか振り向く者が必ず一人や二人混じっているほど。

通常王族と同じ名を子にあつらえるのは禁じられているが、幼名となると話が違って来る。それは幼名...仮名とも言うが、正式な名が国の中枢部や宗教を通して決められてくるまでの、ほんの二ヶ月程度しか使われない名であるからだ。祝事にあやかって、幼名を頂くことを規制する法は正式名とは異なり何も無い。国民達はそこを自由に解釈して、自らの子に名をつける。王族の幼名を頂くと、出世するとか良縁に恵まれるとか、そういった風説がいつの間にかできあがっていた。サディアナ・シフィーシュ・ファロモ＝フィディティス——この長い名前の一節でも混じってさえいなければ、法に触れることは無い。

だから幼名をあやかって付けたと言ってしまうえば、格段疑われるようなことは何もない...はず

だが。この目の前の青年の、疑うような眼差しは未だ解けない。

『リマの血が混じっているとっていましたが...その完璧なメルトロ一色の容姿で?』

唇を嚙んでウズの瞳を見つめた。完璧...、この霞んだような色の容姿を、どう間違えたら完璧だと言えるのか。イクパル語ではなく、流暢なメルトロ一語——それも民草には理解できない宮廷古語——での問いに思わず驚きの声を上げそうになるが、フェイリットはただわからないとでも言うように首を傾げて沈黙するだけにした。リマ出身の自分が、宮廷古語を操れるはずが「ない」。張りつめた雰囲気は漂う。わからないふりをしていても、背中を伝う汗はひんやりと冷たい。捕まれていた顎からその手が外されて、フェイリットはようやくほっと息をついた。

「...いいでしょう、本当に何も知らぬ村娘のようです」

ウズは言うままに立ち上がって、その切れた眼差しをどうしたものかと横に居て逡巡するアンへ向ける。

「お前さっき、何て言ったんだ？」

胡乱そうな眼差しで、視線を受けたアンが問う。

「アンジャハティ」

問いには答えず、その冷たい声のままウズは繋げた。

「この娘を貰います」

「は、」

唐突な言葉を理解できなかったのか、アンが聞き返す。フェイリットも何事が起こったのかと、目を見張る。

「貰うって、ちょっと待てよウズ...どういう意味だ?まさか側女にするだなんて言うなよ」

半ば怒りを含ませた口調で抗議するアンにため息をついて、ウズはその目をフェイリットへと戻す。

「私の執務室に置いて雑用を。前から一人くらい雇えと貴女にも言われていたはずでしょう。それとも何ですか、私に眠るなど？」

「そりゃあ...お前が忙しすぎるのはわかるさ」

アンはぼそぼそと言い淀んで、フェイリットの顔をちらと見つめる。きっと、意思を求めているのだろう。その視線をウズも認めて、しばしの間沈黙が降りてくる。

「あの」

フェイリットが口を開くと、アンは小さなため息をついた。

「フェイリット、無理すること無い、しっかり怪我が治るまであたしのところに居ればいいんだ。母さんも何やかんやで喜んでいるし」

執務室でする雑用と言ったら、きっと給仕のような仕事なのだろう。...ウズの給仕になる。それはイコールで敵国宰相の給仕になるということだ。いくら顔も名前も国家的に伏せられているとはいえ、王女サディアナの正体がばれる危険は増す。

——だが...

「行きます」

フェイリットの返答に、ウズは微かに頷いて見せた。無感情で無機質な表情。



メルトローに帰るわけにはいかない。帰るべき本当の場所ももうない。ならばここで残りわずかな寿命を食いつぶすしか、道は残っていなかった。それに竜である自分が、人間として生きられるのはもう二年とない。

「いいのか？」

アンが不安げに眉根を下げる。

「お世話になってばかりでは悪いです。拾っていただいて、何もせずでは」

些かうつむき加減にそう言うフェイリットに、アンはため息で返した。

「ウズ、せめてフェイリットの怪我が治るまで待っててくれよ」

アンの言葉を受けて頷くのかと思ったが、思いに反してその視線はこちらに向く。

「右手は自由に動かせますね？歩くことは」

問いに素直に頷くと、「ならば問題は無い。明日の夜に迎えをやります」という抑揚の無い声が返ってきた。

「ウズまさか...！」

「アンジャハティ、貴女がこの家に居て私に意見が通るとは思わない方がいい」

「...お前がそれを言うか！！」

言い残して立ち去る彼の背中に怒りを向けて立ち上がる。

――彼女の握る拳が、かすかに震えて見えた。

## 12 寝ものがたり

強い風で土埃が舞い上がる。目の前に黄色い霧がかかるような練兵場で、コンツェは自分の隊に号令をかけた。

中隊長という役職は、近衛軍の中で下層も下層。新人の兵たちを鍛えたり、戦争では前線に出て指揮の伝達をまかなったりしている。皇族貴族なら、名前だけでも階級を授かるのが普通だ。尉官にでもなればこのように練兵場に顔を出すことなく、卓と書類の山に囲まれることになる。二十にもなった貴族の息子が中隊長の位で留まっているのは恐らく自分だけだが、同僚が階級を重ねて書類に埋もれていくのを見て、あっちの方がきつそうだと考えているのも自分だけだろう。

「ガジラ！死ぬぞ、馬に乗れ！」

いくつかの組に分け、騎馬で模擬試合をするのが鍛錬の殆んどだが、けして「模擬」というほど生易しいものではない。一对一の試合ではなく、一对三から始まって、できる者には十人の騎馬と戦わせたりする。やられたらやられたで、当然落馬だ。しかしそこでくたばっては、馬の足に踏まれてあつという間に命を落とす。落馬したまま大の字で空をぼんやりと見上げていた騎馬兵の一人ーガジラを叱咤して、試合の流れがよく見渡せる位置まで馬を戻した。

「エトワルト隊長」

馬を駆りながら指示を出していると、足元の方から声がする。騎馬が入り乱れる中、丸腰の間が紛れ込んだとあっては危険極まりない。コンツェは慌てて目線を落とし、瞠目した。

「トリノ！？」

乳色の、丈の短い衣装。どこの小姓かとよくよく見れば、ワルターの所のトリノだ。舞い散る土埃に顔を顰めながら、必死になって騎馬上のコンツェを見上げている。

「何やってんだ！」

手を差し伸べて、小柄な身体を引き上げる。馬に轆かれて怪我でもさせたら、ワルターに面目が立たない。

コンツェの前に座らせて、たずなを横に引っ張った。騎馬の群れから少しはずれた場所まで移動し、トリノの額を小突く。

「馬鹿、死にたいのか」

「申し訳ありません、大佐が至急の言伝をと。宜しいでしょうか」

「は、俺に？」

頷くその顔をまじまじと見つめて、職務中に珍しいなと首を傾げる。

「わかった、言ってみろ」

「テナン公爵がお見えだそうです。面会をお求めだと」

再び目を丸くして、コンツェはトリノの言葉に軽く頷く。父が、帝都に来るのは何年振りであろうか。バスクス帝が即位と同時に元老院を凍結して以来...だったような気がする。

「来訪の理由は知らないな？」

問いかけに「はい」と答えるトリノを降ろして、自分はワルターの居る執務区まで馬を駆った

「元老が集結したですと...!？」

驚きの声を上げる元老院議長——トゥールンガを横目で睨みつけ、ウズは小さく息をついた

驚くべきことではない。イリアス公爵...いや、イリアス公王にまで、先の竜狩りの話が届いたのだろう。それが他の公王に流れたのは、至極当然のこと。

「ご存知ありませんでしたか」

ウズの問いに、トゥールンガの顔はみるみる青ざめていく。

「陛下との謁見をご所望のようですが、その前に帝国元老院議長であるトゥールンガ元帥閣下に、真意の程をお聞きしようとかと思ひましてね」

皮肉を込めてそう告げる。まさか二年も前に凍結したはずの議会のことで、呼び出されるとは露ほども思っていなかったのだろう。議会の用事でもなければ、この男が「宰相」の執務室などに呼び出されるはずがない。あろうことか足取りも軽やかに現れたこの男の頭を、花でも咲いているのではないかとうんざり眺める。

軍事主義国であるイクパルに於て、元帥が元老院の議長を務めるのは慣例のこと。皇帝直轄領サグエの公爵である彼が、その階級だけで元帥だなどという大きな位を授かったのも、それが単に能力上の問題ではなく世襲だから、ということを考えればさして使える人物でないことが伺える。上申機関である元老院を凍結したのにはそれなりの理由があったが、ただ媚び諂うだけが特技のようなこの男に宰相として同等の目線を交わしているのは耐えられるものではない。

「トスカルナ宰相...只今確認して参ります。陛下には、今しばらくお留まり下さいますようどうか、」

「必要ありません」

「...は、といたしますと」

きょとん、と肩を落とすトゥールンガに溜息をかけて、

「議会は凍結したはずです。陛下は元老を拒んでいらっしゃる」

ウズは目を細めて言った。トゥールンガは視線を受けて小さくなったが、しばらくしてようやく「ではそのように計らいます」と礼を残して足早に立ち去っていく。

「...性格の悪さが窺えるな」

小さな笑いととも、仕切りの後ろから男が出てくる。朝にはきっちりと着込んでいたはずの衣装も崩れたり広がったり——大きく開いた胸元を見て、ウズは苦笑する。昼間から、大方の行き先は検討がついた。

「自分の性格の悪さは熟知しておりますが、トゥールンガ公爵は世襲の能無しです」

きっぱり言い捨てると、男は肩を竦めて苦笑した。

「私も世襲なんだが。まあ、能無しというのは否定しない。トゥールンガも私もな」

この国の中枢部の人間は殆んどが世襲だ。もちろん自分もその類の中に収まっているのだが、

単に位だけ継いだのとは訳が違う。目前のこの男もつい二年前まで、牢獄のような場所で監禁されていた。それを知る者は恐らく”関係者以外”片指の数ほどもいないはず。

「...面白いものだ。所詮寝物語の竜一匹に、大の大人が子供のように駆けずり回る」

たかが竜など、本気で信じているわけではなかった。ただ本気で信じている側の人間に「竜を狩った」と、匂わせただけだ。今ごろ焦りに焦った元老たちが、保身のために動き回っていることだろう。思惑に嵌められているとも知らずに。

「四公王にはお引取り願います」

「ああ、お前のその毒口で精一杯焦らしてやるといい」

憎らしげに吐き出すその表情は、どちらかという楽しんでいるように見える。そこで初めて片膝を床につき、ウズは略礼をとった。

「御意に」

ウズの礼を受けて、イクパル帝国の若き皇帝――バスクス二世は、ゆっくりとした動作で椅子から立ち上がる。

「まずはバツソスカ」

呟くようにそう残して、執務室の扉が音を立てて閉まった。

「...リット、フェイリット」

名を呼ぶ声に目覚め、寝台から体を起こす。ぼんやりとした目で声の方を見上げると、エセルザの顔があった。イクパルに来て四日目の夜。

彼女は寝台に乗り出し、その長くきれいな手をフェイリットの額に充てるとわずかに頬を緩める。

「よく眠れたみたいですよわね。もう微熱もなくなったわ」

「すみません...何だか寝てしまったみたいで」

あらかじめ夜に迎えが来ると言われていたのに、夕食をご馳走になってから部屋でぼんやりしていたら、いつの間にやら寝てしまっていたようだ。

アンも来ているのだろうか。視線を巡らすと、彼女の姿はどこにもない。夕食にも顔を出さなかったぐらいだから、きっと今日は忙しい日なのだろう。そう考えつつ寝台から降りる。部屋の中は窓から差し込む月明かりで、ほんのわずかに明るい。

「大丈夫ですよ、まだまだ刻限まで時間がありますわ。着替えられますか？」

その言葉を待つように、彼女の後から侍女が二三姿を見せる。

エセルザは侍女から布のようなものを受け取ると、フェイリットに手ずから渡した。自分で着替えるという意味らしい。が、それを受け取ったフェイリットは思わず首を傾げてしまった。

「あの、これ」

大きな一枚布。広げてみても、袖の通し口も足を通すところも何もない。縫い目のないただの布だった。ところどころに繊細な刺繍が施されてはいるが、華美すぎない程よい細工。

「ああ、そうですわね...」

エセルザは得心言ったように頷いて、軽くはにかんだ。

「着かたを教えてさしあげなくてはね」

「着かた？」

「これがこの国の衣装なのです。軍服や鎧はメルトローや諸外国を倣ってどんどん近代化していますが、宮廷の衣装だけは昔から変わりませんのよ」

言われてみればエセルザの着ている服も、柔らかそうな紗布で幾重にも重ねられた着衣で、よくよくみれば縫い目が見当たらない。目の前で広げられている、一枚の大きな布と同様のものらしい。

「着かたも結び方もたくさんあります。綺麗でしょう？」

問われて、フェイリットは頷く。

どうやらイクパルの衣装は、大きな布を体に巻きつけるようにして首や腰元でゆるく結ぶ形のものらしい。腰元に一度布を巻きつけて、首元で結ぶ。裾は膝より長く、素肌に布の感触が心地よい。ごく薄い布なのに肌が擦れ擦れのところで見えないようになっている。外出の折は黒いヴェールと上套をすっぽりと被る。これだけは女達に限られるようで、この国に来たとき道端で見かけた男達は至って簡略な格好をしていた。

「少し顎をおあげください」

侍女の一人に言われて顎をついとあげると、肩すれすれの長さの髪を高めにはっきりと結び上げられる。短めの髪に侍女たちは辟易していたようだったが、それでも何とかなるものだ。鏡を見て、彼女たち侍女と同じ髪型にきちんと結われているのに小さな感動を覚える。山暮らしをしていると、こういう少女らしいことに欠けてしまうから何だか嬉しい。

「終わりました。ウズ様は宮殿にてお待ちですが、私は入り口までしかお連れすることは適いませんので、着き次第別の者が同行いたします」

ウズの元に案内するという侍女のひとりが、するりと背中を向けて部屋と廊下を仕切る垂れ幕を捲って出て行く。

「さあ行ってらっしゃいな」

エセルザの優しい微笑みが向けられる。

「はい、ありがとうございます」

エセルザの笑顔に頭を下げて、フェイリットは仕切り布を捲り廊下へ出た。

宮殿の中はしんと静まりかえり、物音ひとつ響かない。今日が特別なのだろうかと思えるほど、すれちがう侍女の数も少ないものだ。

「ここからが皇帝宮です。私たちは立ち入り出来ませんので、ここでしばらくお待ちください」

立ち入れないとはどういう意味だろうか。内心首を傾げるも、去っていく侍女の背中を礼を言ってみ送る。

回廊の床は光沢のある薄灰色の石が隙間無くはめられていた。メルトローにあるような大理石とは少し違う、柔らかいような印象だ。タイル、という名なのだと、いつだったか教わった気がする。その回廊の向こうからフェイリットと同じような背丈の少年がひとり、小走りに駆けて来て目の前で足を止める。

「お待たせしました」

「あっ、いえ」

軽く息をつきながら、少年はにこりと笑む。頭にぐるぐると布を巻いて、衣装の丈は膝ほども無い。剥き出しの手足はすらりと長い蜂蜜色。ふ、と眼が合っただけでじろじろ見てしまっていたかと頬が熱くなった。メルトローではあまり手足を出す衣装を着ることがない。こちらより肌寒い気候のせいでもあるだろうが、長く住んだりマでも同じようで、どうしても珍しい物として見てしまうきらいがある。

「トリノです、この先までご案内します」

合わせられた目は琥珀色で、かすかに透き通って濡れているようだった。

「...トリノ...」

名を聞いて、思わず首を傾げる。どこかで聞いたような。

「どうかしました？」

「いいえ。あの、フェイリットです」

言って、笑いかける。トリノもはにかむような笑みを返して、行きましょうかと歩き出した。「ウズ様のお部屋は北区です。北が家臣たちの執務区、東が陛下のご寝室とその奥が後宮ハレムになっていて、西は陛下の御家族が住まう宮があります」

南から入って来たから...と頭の中で地図を組む。では自分が今歩いているのは西側のあたりだ。列柱の並ぶ回廊を右へ右へと曲がっていくと、トリノはひとつの部屋の前で立ち止まった。扉は無く、幾重にも重ねられた布が目隠しのように垂れ下がっている。ここに来るまでいくつかの部屋部屋を通過してきたが、やはりそのすべてに扉はなかった。

トリノは幕の側で静かに膝をつき、「――失礼します、お連れいたしました」と囁いた。

「お入りなさい」

宰相執務室――そう言って通された部屋は、予想よりこぢんまりした空間だった。石床に毛の短い絨毯が敷かれて、そこに直接座るのがイクパルの生活様式。だがウズの部屋は例外なのか、わりと高めの卓と椅子が並べられている。その上で帳面のようなものを捲りつつ、何かを書きつけたりまた別の書類のようなものを捲ったりしている姿が目に入った。

「――遅れて申し訳ありません」

フェイリットはおずおずと宮廷儀礼をとる。床に手をついて跪き、頭を深く垂れるというもの。夕食の折、エセルザに習ったものだ。急仕込みにしてはよくできた気がした。

「トリノ」

名を呼ぶ彼の声に、入り口ごしに控えていたトリノが立ち上がる気配がした。ウズの側まで足音も立てず寄り、机の近くに膝をつく。

「はい」

「持って来なさい」

礼を返事の代わりに、立ち上がって奥の部屋へと入っていく。しばらくして彼が戻り、よくよく見るとその手に何枚かの布が乗せられているのに目が留まった。エセルザが着せてくれたのと、同じような布。

「お持ちしました」

礼をしたまま伏せていた顔をあげ、布をウズに渡してトリノが立ち上がる。そのまま静かに部屋の隅に移動して、控えるように壁を背にした。

「フェイリット」

するり、ウズが立ち上がった。急な動きに驚いて、わずかに目線を上げてしまう。彼は軍服ではなく、宮廷式の衣装を着ていた。これも縫い目の無いものなのだろうか。無地ではなく、フェイリットが着ている布とは違い華美な刺繍が施されている。不思議な模様のそれを目で辿っていると、その衣装がだんだんと近づいて来た。

「お立ちなさい」

厳しい口調が降りかかり、反射的に立ち上がった。何だろうと思う間もなく、長身のウズに手首を掴み上げられる。

「痛！」

「こちらへ寄りなさい」

いきなり掴んでいた腕を引き寄せられた。体勢を崩すような格好でふらつきながらも、何とか彼の目の前に堪え立つ。自由の利く方の手首を引き上げられたままで、じわじわとくる痺れに眉根を寄せる。一体何をされるのかと見上げると、ウズの細い指が衣装の結び目に差し向けられた。

「何...するんですか?!」

フェイリットの動揺を見、ウズが笑みを浮かべる。形だけの、冷たさを思わせる微笑。まるでわけがわからない。

「大人しくしていなさい」

ウズの手はあっさりとしてフェイリットの衣装を解き、脱がせていく。

「ひ、やああ!!」

衣装を解かれている現状で混乱しているうちに、あっというまに衣装は一枚の布になる。丸裸にされて、フェイリットは恥ずかしさのあまりにしゃがみ込んだ。

「お立ちなさい」

「い、いやです!」

「...立つのです」

「いや! ...がああ!!」

先ほどとは逆に骨折しているほうの腕を掴まれて、声にならない悲鳴をあげる。激痛が走り抜けて、ふらふらとウズの身体に凭れかかってしまった。

痛みに涙を浮かべていると、今度は骨折していない方の手を引かれる。ずるずると自分の足で立たされて、フェイリットは唇を噛みしめた。一体何だと言うのだ。怒りと恐怖に震えていると

「...両手をあげなさい」

どこから取り出したのか、ウズは薄くて長さのある布をフェイリットの胸にきつく巻きつけていく。

「え...」

目を丸くしているフェイリットをちらと見て、ウズが晒う。

「無理やり抱かれるとでも思いましたか」

あの状況でそう思わない者がいるだろうか。なのにウズの今の行動は、どう考えてもフェイリットに衣装を着せ付けているとしか思えない。それも随分と手際がいい。

「着方を覚えなさい」

無表情でそう言って、てきぱきと着替えさせていく。何が起きているのかいまいち理解できないまま、気づいたら着替えが完了していた。

屋敷で着せてもらったのとは明らかに違う、丈の短い乳色の衣装―――そうだ、ちょうどトリノと同じような。

「頭を」

言われたままに差し出すと、ウズがハサミをこちらに向ける。



「な・・・！」

抵抗する間もなく、じょきじょきと髪が切られていく。肩少しまでであった髪の毛が、みるみるまに短くされてしまった。これでは切るというより、刈るといったほうが正しい。驚きに何も言えないまま呆然とした。女が髪を切るという風習は、やはりまだどの国でも見られない。聖職者か、姦淫の罪か。そのどちらかでは、女が髪を切る理由をフェイリットは知らない。そういえばアンの髪もフェイリットより短い、あれは軍人だからなのだと思う。自分は何もしていない。これから軍人になるわけでも、聖職者になるわけでも、まして姦淫の罪など。

悔しさと驚きで瞼の奥がつんとなるのを、必死で堪える。唇を噛み締めていたら、今度は長い布がぐるぐると頭を覆っていく。

「な...なんですかこれ」

重いのと苦しいので声を歪めてウズを見やる。

「ターバンです」

一言短く答えて、ウズはその「ターバン」の端をうなじの辺りの布の中に差し入れた。ますますトリノに近づいた格好を眺めて、彼は納得したように軽く頷く。

「違和感はありませんね」

「...どうして」

「貴女が今着ているのは小姓衣といって、皇帝宮に仕える少年たちが着るものです」

「小姓...皇帝宮...」

鸚鵡返しに呟いて、フェイリットはぽかんと口を開ける。

「宮殿の中で女たちが入れるのはハレムだけです。お前をここに連れてきた侍女も、皇帝宮の手前で帰っていったはず」

確かに、彼女は此処から先に入れないと自分で言っていた。

「でも、どうして小姓なんですか...」

わざわざ性別を隠してまで、フェイリットを小姓に仕立てる理由が全くわからない。女しか入れぬなら、ハレムで自分を雇えばいいのだ。床磨きだって皿磨きだって、着ている物が違うだけで一緒なのに。

「ハレムの方が良かったと？」

その問いに即座に頷くと、ウズは嘲って首を振る。

「あそこは陛下の愛妾たちが暮らす宮。侍女のひとりに至っても、ハレムに居る以上は陛下の手がつく可能性は大いにある。お前はそういう出世は望まぬと思っていたのですが。どうしますか。それでもその方がいいのなら、こちらとしても手がかからない」

愛妾たち...。では、自分を皇帝宮まで送り届けたあの女性も、愛妾のひとり...なのだろうか。

「小姓で、いいです...」

そう言うしかない。まさか敵国の皇帝の寝所に侍るなど、考えただけでも恐ろしい。

フェイリットの返答を聞き、ウズは冷たい笑みを頬に貼り付けて見せた。

「立太子しろ」

久方ぶりに顔を合わせた息子に、父はいきなりそう宣った。

「は...、今なんと？」

聞こえていないわけではなかったが、コンツェは驚きのままに問い返す。職務中に尋ねてきたから何事かと思ったのだが、まさかそんな話だとは。

「立太子しろ、と言ったのだ」

ワルターの執務室にしながら、父は群青と黍色の毛が複雑に折り込まれた図案の絨毯の上にあぐらを組んで座っている。いささか痩せた父の顔をまじまじと見つめていると、「とりあえず座れ」と促された。部屋の主であるワルターの姿はない。

「ワルター殿には無理を言って空けて戴いた」

促されるまま父の前に対峙して座る。ワルターは皇族といえど元々はテナン系の血筋。曾祖母ほどまで遡らねばならないが、コンツェを引き抜いた縁もあって前から父とは懇意にしている様子だった。

「...いったい、どうしたというのです」

「狩りに行ったそうだな」

いささか声の調子を抑えて、唸るように父が言った。狩り...といえば竜狩りだろう。確かに行ったが、それはこの国を他勢力——リマやメルトロウに立ち向かう力を得るためのものだ。竜を手に入れられれば益にこそなれ、同じイクパル帝国に属する父が顔に皺を寄せる必要はさしてないはず。

「何か、狩ったか」

正すように問われて、腑に落ちないながらも首を横に振った。

「本当なのだな？」

「はい、従軍しましたから」

父はまるで心底安堵するかのような表情を見せた。

「そうか...やはりな。あの木偶の坊は、いつまで我々を遠ざけているつもりなのだ」

木偶の坊...と頭の中で反芻して、ああ陛下のことかと得心する。晩年、狂気に侵され次々と悪法を布いていく先帝を見ながら、皇太子という責務ある立場にあってもそれを律さず、自らが玉座についたのちも政は宰相に全て任せ切り。即位後したことと言えば、本来彼を支える機関であるはずの元老院を凍結したぐらい。無能で女狂いの世襲帝——そう呼ばれているのだった。

閉め出されて一年と少し、その元老のひとりである父が憤りを感じるのも無理はない。

「最近ではハレムの女をことごとく抱いては捨て、子を成そうともしないと言うではないか。慰みに扱われたと他公の送り出した姫君たちが泣き戻って来たと聞くぞ。せめて次への希望があるならいいものの...」

「はあ、そうなのですか」

「そうなのですか、ではない。いいように邪険にされ、これでは四公国の立場もないのだ」

国ではない、貴方がた「公王」たちのだろう。そう思ったが口には出さない。悔しそうに絨毯に拳を立てると、父はまるで吐くように、

「だからお前を立太子させる」

と呟いた。その言葉にコンツェは思わず片眉を上げてしまう。

「話のつながりが解せません。私が立太子したとして、何がどう変わるわけでもないでしょう。それに私は第五公子、お忘れですか？」

長子継続のテナンで、五番目の公子がまさか立太子できるわけがない。まして自分の上には三人の兄が居て、その一番上は今年三十九にもなる。父親ほども年の離れた兄を差し置き自分が王太子になるなど、もはや笑い話だ。

「テナン公子、であるお前には用は無いのだ。知っての通りテナンには長子に王位の継承権が与えられる。しかもお前は側室の子、本来ならば継承権は空ほどに遠いな」

「わかっておいでなら、」

「だがそれを覆すものをお前は持っているだろう、コンツ・エトワルト。他の兄弟には出来ぬことと聞いて、解らぬ程の頭でもなかろう？」

覗き込むように見られて、コンツェは眉根を寄せた。

「.....解らぬようです。あくまで私はテナンの第五公子で、勉学に勤しむよりは体を鍛えて参りましたから」

「...ふん」

何もかも見透かしているのだろう。鼻で笑い、父は立ち上がった。六十を超している体なのに、未だ衰えを知らぬかのような身動き。それを見上げて、そういえばこの人も武人であったと思い出す。

「解らぬなら考えろ。私たちがお前をテナンに据えてすることと言ったら、一つしかない」

篡奪。元から図りかねていた言葉を脳裏に浮かべて、やはりそうかと視線を落とす。「私たち」というのはもはや「四公王」というのと同義だろう。とうとう結託したのか、父たちは...

コンツェは自らも立ち上がり、軍隊式の礼をする。テナン公国の公王に対してその息子がする礼ではなかったが、こちらのほうが気がまぎれた。

「忙しい身ですので、おいおいに考えてみます。この頭ではよほど時間がかかるかと思いますが」

「まあいい。竜を得たとでも言うなら事は急を要した。だが違うのならばまだまだ時間は残されている。ゆっくりと己の置かれている場所を見なおすことだぞ」

ワルターは知っているのだろうか。テナン公が篡奪へのあしがかりに息子呼び出したなどと。いや、考えもしないだろうな...と考えながら、退室していく父親の背中を見つめた。ワルターは曾祖母にテナンの血を持ってはいるが、育ったこともないテナンに愛国の情など持たぬはず。

「お前があの方と同じように、能無しでないことを祈っている」

ふわりと捲れる父の上套の中心に公国の紋章を見つけて、コンツェは静かに息をついた。

月が真上にたち昇り、満月に近いそれに街路の石畳がぼんやりと照らされている。

コンツェはぼんやりとジャイ・ハータの門を潜った。門兵が居たが、顔見知りだったためにすんなり通ることが出来た。眠れずに兵舎を飛び出してきたものの、結局こんなに夜中では酒場か花宿しかやっていないことに今更気づく。しかし城下にさえ出せば、その辺をぶらついていても怪しまれることはないはずだ。寝際だったために軍服も着ていないし、顔を見て「城の中の人間」と気づかれるほど有名でもない。

城下へ渡っている橋を降りていると、ふと前方にとぼとぼと歩く小さな背中を見つける。小姓衣——トリノだ。こんな時間に、いったい城下で何をしようというのだろう。そう思いながらもその背中を追いかける。

「トリノ」

声をかけると、やはり少年は振り返った。...が、その顔を確認してコンツェは啞然とする。

「フェイリット？」

小姓衣を着て、髪をターバンに包んで。姿は紛れもなく少年のものだったが、しかしその印象に残る水色の透き通った瞳は彼女のものだ。

「コンツェ、びっくりした」

本当に驚いたかのように目を丸くして、フェイリットは苦笑する。

その唇につい先ほどまで噛みしめていたかのような血の痕を見つけて、コンツェは眉根を寄せる。外に出てからしばらく経っているから暗闇の中でも充分に周りが見えたが、少女の顔色は、さして良いとは言えない。

「泣いてたのか」

いや、正しくは泣くのを堪えていたのか、だったが、この際どちらも同じだろう。

「ううん、」

強がりだとわかっているのに、フェイリットは否定する。

「...そうか」

追求されたくないのなら、それでいい。そう思いながら、彼女の横に並んで歩く。きっと、互いに行き先など考えてもいないはずだ。

城下へ出て、迷路のように狭く入り組む民家のあいだの道を、しばらく黙ったまま連れ立った。しばらくの頃合を見計らい、

「正面から出てきたんだろ？よく門兵に止められなかったな」

コンツェのほうから口火を切って、隣を歩くフェイリットに目を向ける。

「え、自由に出入りできないの？」

「普通は二三、問答を受けるとか身分の提示とか」

小姓という立場で、この時間帯の門外外出はまず認められない。彼女がもしここまで何もなく通ってきたというなら、外壁を乗り越えるとか気配を消すとか、鍛錬している一端の兵士相手に相当なことをしなくてはならないはずだ。

「普通に門は潜って来たけど...止められなかったっていうか、気づかれなかったっていうか。ど

うしよう、帰りも立ってるんでしょ、あの人たち」

「帰りは俺が居るから大丈夫、」

だが、真正面を堂々と通ってきたなどと、首を傾げずにはいられない。夜番に選ばれるのは割と勤の働く者が優先されているため、年端もいかぬ少女がひとり、やすやすと通れるところではないはずなのだが。現に横を通ったコンツェにさえ、彼らは声をかけることを忘れなかった。

「変だな、あいつらが気づかないなんて...」

「...あ、あのね。小姓になったの、って格好見ればわかるだろうけど」

こちらを僅かに見上げて、フェイリットが照れたように言う。幾分はぐらかされたような気がしないでもなかったが、コンツェはさして気にとめなかった。はにかんだように笑う彼女の顔には、先ほどちらと見えた泣きそうな気配は微塵もない。あの顔の原因はそこかと思っていたのに、この反応では間違いだったのだろうか。

「小姓って、」

アンのか。そう聞こうとしていたら、彼女自らの口から「ウズさまの」という言葉が続けられた。ウズの小姓...？あの、侍女すら側に置きたがらない男の。

「見て」

言われて、視線を向ける。コンツェの目を見上げながら、ふわり、彼女は頭を包むターバンを解き放った。

「...！！」

フェイリットの髪が、まるで少年のように刈られていた。くせ毛がくるくると巻かれていっそう彼女の愛らしさに拍車をかけているのだが、素直には誉められない。以前の肩ほどの髪でさえ一般には短すぎる長さだったのに、あれ以上とはまるで罪人だ。

「ウズにやられたのか」

憤りを押し殺して、そう聞く。娘にとって、髪を切られること以上の辱めがあるだろうか。この歳の少女のこの髪を見て、罪ゆえだと思わぬ人はまずいまい。思い当たる罪状は、ただひとつ。

コンツェの怒りを察したのか、フェイリットが歩みを止める。こちらを覗くように見上げて、どうってことないと苦笑して見せた。

「小姓になるのに、髪の毛は邪魔なんだって。どうして小姓なのかって聞いたら侍女じゃ皇帝宮で働けないらしいし、かといってあのままアンやエセルザさんにお世話になりっぱなしも悪いから」

「そんなことは...」

やはり、さっさと妻にでもしておけばよかったとコンツェは思う。自分の力で生きていけるほど、イクパルは女性に甘くない。

「フェイリット。何も辛い思いして男に成りすまさなくてもいいんだよ、俺の...」

俺の女になればいい、という二の句が喉に突っかかって出てこない。

「ううん。これもこれで、何だか面白くなってきた」

いたずらを思いついた子供のような表情を浮かべて、フェイリットが答える。

「それに、この国で女の人って不便じゃないのかな。外に出るときに羽織る黒い外套、あれすごく重そうだし暑そう」

なるほど、「男」である小姓なら彼女の言う不便を味わわずに済むわけだが…。コンツェは小さく笑って、仕方ないなと思直した。

「ハレムよりは、ましだな」

かくいうコンツェも、小姓をしていた時期があった。イクパルにおいて小姓は、お偉方の側人を育てるための養成機関のようなものだ。軍人としての才を見込まれれば押し出してもらえ、文才を認められれば側人として生涯仕えられたりする。ウズがどういうつもりでフェイリットを小姓にしたのかは未だ掴めないが、少なくとも身分に関係なく、気に入られればとことんまで出世できる場所ではある。

とことんまで出世できるという点は、ハレムでも変わりはない。だが、現帝の治める今のハレムで女としての出世は望み薄だろう。数ある愛妾の中からは、より寵愛を受けたとされる

ギョズデ・ジャーリヤ

側室に昇れたものが未だ一人も出ていないという。在位二年目にもなれば十や二十、ギョズデ・ジャーリヤが出ていてもおかしくはない頃合。テナン公の言った「女を抱き捨てる」というのが、なんだかわかった気がした。

「うん。貴族も皇族も王族も、まっぴらごめんだわ」

過去に、何か気に障ることもあったのだろうか。吐き棄てるように言ったフェイリットを見遣り、苦笑する。自分も一応王族なのだが、まあ分らないならそれでもいい。エセルザがコンツェの正体を明かしたとき、たしか彼女は熱やら副作用やらで朦朧としていたのだった。

「そろそろ戻ろうか。…ああそうだ、ウズのところから抜け出て来たのなら宮殿から来たんだろ？またよく見つからなかったな…」

コンツェは今度は呆れたように息を吐いた。ここまでされては兵士たちも面目がたたない。

その視線を受けてフェイリットは、

「今度から、抜け出したりしないよ」

と小さく肩を竦めて見せた。幾分気もまぎれてきたのだろう。城門で会ったときに見た思いつめた顔も、もうすっかりなくなっていた。

コンツェは満足げに笑んで、フェイリットの澄んだ横顔を見つめた。

しんと静まり返る深夜。ふと目を覚ますと、フェイリットは顔をしかめて腰をさすった。

「いたた...」

いくら絨毯が敷いてあるとはいえ、石床の上で寝るのはやはり痛い。

着替えを終えてからトリノに通りの教示を受けると、執務室の裏にある小さな小部屋でこれから寝泊りするようにと告げられた。

――だが部屋に入ってフェイリットは啞然とする。

人ひとりが縮こまってようやく寝れるかというほどの絨毯が、石床の端に丸めて立てかけられていただけだったのだ。部屋の中にあったのは、それきり。あくまで小姓の待機場所である小部屋に、窓や寝台といったものはなく、入り口は執務室からわずかに薄い仕切りの布で区切られたひとつのみ。まるで小さな石牢だ。

夜明けまで眠れと職務を続けるウズに命じられては、やはりここで眠るしかあるまい。フェイリットはしびしび、丸められた絨毯を広げて横になった。それが多分何時間か前のこと。

「あー...まだ夜明けじゃないなんて...」

ひっそりと呟いて、フェイリットは絨毯の上にあぐらを組む。さすがは宮殿の絨毯というだけあって、肌触りだけは心地いい。

元々優雅な生活を送っていたわけではないから、野育ち山育ちの自分にとって、床で眠るなどたいした苦痛にはならなかった。だが今、ふと目を覚ましてずっと腰に来る痛さに顔をしかめている。

――そういえば、まだウズは卓に向かっているのだろうか。

ふと執務室にいるはずの「主」のことを思い出し、そろそろと這って部屋を仕切る薄布をさらりと捲った。...のだが、

「ウズ...さま？」

ふと呼んでみて、フェイリットは首を傾げる。椅子にぐたりと仰向けにもたれかかって、誰かがぐっすりと眠っているのだ。ウズではない。思わず仕切りを越えて執務室に入るが、やはり部屋の中にはその人しかいない。

いったい、誰だろう。背中しか見られぬこちら側から、恐る恐る前へと回る。

「っ！！」

思わず悲鳴を上げそうになって、フェイリットは寸でで自らの口を覆い隠した。

椅子に眠るウズではない人物を、驚きのまま見やる。後ろへと流された漆黒の髪と、日に焼けた肌の男。きりと上がった眉の下の影の出来た眼窩、その両の瞳は閉じられているが、猛禽を思わせる鋭さは寝ていても変わらない。忘れもしない恐ろしい顔。

――あの男だ。背筋を撫でゆく恐怖が、まざまざと蘇る。拾われて、手当てを受けたあのテントから逃げ出そうとした夜のこと。

卓の上は、ウズが居た頃より増して紙やら帳面やらが山積みされている。もしや居ないウズに入れ替わって、何かしていたのだろうか...？紙の山のわずかな隙間をねらって、そっと卓に手を

ついた。近寄ると、思ったとおり覚えのある乳香の香りが鼻元に流れくる。

綺麗な顔...というより、野性を思わせる壮美さとでもいうのか。あの時は余裕がなさすぎてよくよく見るまでは至らなかったが、今は違う。いったい誰なのだろう。ウズの部屋に、まるで我がもの顔で寝ている男の整った顔を、フェイリットは疑問ながらに見つめる。だがじっと見ていたら、鳥肌が立ってかたかたと手が震えだした。...やはり怖い。

気どられぬよう部屋に戻ろう。そう思いつつ身を引こうとした刹那、

「見惚れていたのか」

「わっ！！」

ごく近くにあった卓の上の手が、がちりと掴まれる。

「...ほう、面白いものを見た」

いつぞやの娘ではないか。目を細めて眩き、口元に薄い笑みをのせる。

「なぜ小姓衣など着ている。あいつにそんな趣味は無かったように思うが」

あいつ、というのはきっとウズのことだ。いいや、今は考えている場合ではない。飛んでいきそうになる思考を引き戻して、フェイリットは掴まれた腕を外そうと引く。

「は、離してください...！！」

「離すと思うのか？」

「...やっ！！」

気付いたときには遅い。抗えぬほどの強い力で引き寄せられて、易々とその膝の上に抱き寄せられる。

「白い肌の女は滅多に抱けない」

男の長い指がフェイリットの頬を撫でて、逃げようと身を仰け反らせた瞬間に唇を奪われる。

「.....っ！」

男は片方の手でフェイリットの頭を支え、もう片方を腰に回した。逃げ場のない捕まえ方をされて、もはや自由の利く右手で力一杯男の胸辺りを押し退けるしかない。

「んっ・・・」

だが呼吸もままならないせいで、そんな抵抗の力も抜けていく。

全身に鳥肌が粟立ち、男の胸倉を掴んでいた右手ががたがたと震えていた。フェイリットはくらくらと回らない頭の中で、どうしよう...どうしよう...と繰り返す。

すでに着衣は脱がされて、一枚の布に変わり果てたそれが椅子の足元でたわんでいる。あとはウズにきつく巻かれた胸を平らにするための薄い布と、下履きのみ。

ふ、と視線を這わせた先に偶然にも男の長剣を見つけた。とっさにすらりと抜きさって、柄の部分強く握る。徐々に味わう真剣の感触――よかった、忘れてはいない。

幸運に喜びを噛みしめる間もなく、ひたり、フェイリットは剣の刃先を男の項のあたりに寄せた。

「...お前」

まったく殺気を感じなかったのに違いない。驚ききった表情で、男が唇を離していく。その隙を逃さずに、フェイリットは男の膝から転げ落ちた。



「っ痛！」

受身を取り損ねて、石床に体を打ち付けてしまう。けれど、もたもたしてはいられなかった。

口の端からつるりと伝った唾液の雫。それを忌々しげに拭い取り、フェイリットは男の長剣を投げ捨てる。

「次、会ったら、斬ります！」

脱がされた衣装を引っ掴んで、吐き捨てるようにそう叫ぶ。

だがとっくに驚きも通り過ぎたのか、そんなフェイリットを見ても男はわずかにその闇色の目を細めただけだ。それどころか口元には、楽しそうな笑みまで乗せられている。

「...っ、最低！」

フェイリットは怒りのまま、執務室を飛び出した。

回廊を全速力で駆けながら、未だ恐怖に震えている体を片手で押さえる。あっという間に宮殿を抜け出しタルヒル門、アル・ケルバ門、ジャイ・ハータ門と順番に通り過ぎると、唐突に城下の町並みが眼下に広がった。

「わっ！！」

足を止めて、息をつく。城下まで出てしまっは、さすがにまずかったかも...そんなことを考えつつも、水のない堀にかかる橋のような坂道をとぼとぼと下った。

頭のなかに、怒りと悔しさが渦巻いている。

あの男...、二度目までも、いったい何だと言うのだ。奪われた唇をもう一度拭って、固く噛み締める。途端に血の味が口中に広がったが、それでいい。触れられた唇の感触を洗うように、何度も自らの唇に歯を立てた。

しばらくぼんやりしながら歩いていると、背後から人の気配がする。まさか追われてきたのだろうか。

逃げ出すか逃げ出さないか逡巡していると、

「トリノ」

自分ではない名が呼ばれた。

「...やれやれ」

目前に広がる迷路のような黄砂の町並みを見やって、カランヌは息をついた。

帝都アデブ。領地が増えるたびに拡大と増築を繰り返してできたという町。...この町並みができあがったのはそうした過程による偶然なのだろうが、結果外敵から城を守るための「門」の役割を担うことになった。地理に疎い者が入ろうものなら、あっという間に迷い人となる。そもそも案内者なしにアデブを訪れようとは誰も思わぬらしい。

だが自分はそうは言ってははいられない。なるべく誰の印象にも残らぬように、サディアナ王女の行方を突き止めねばならなかった。

目立たぬよう、この国のしきたりに倣ってターバンなどというもいもので頭をすっぽり覆っている。同じようにしきたりに習いヴェールと外套を纏うスリサファンを横目で見やって、

「貴女を連れて来てよかったですよ」

カランヌは呟いた。少なくとも彼女と一緒に居さえすれば、自分のメルトロロー色の強い容姿も幾分カムフラージュできるというもの。

「...早く終わらせて帰りましょう」

虫唾が走って仕方ない。いまにもそう吐き出しそうな口ぶりで、スリサファンが答える。吹いてくる砂混じりの暖かい風が、彼女の黒い外套をばさばさと叩いていった。

嫌がっていたのを無理やり連れてきたのだから仕方ないにしろ、そんなに自分の生まれた国を嫌悪しなくてもいいだろうに。そんなことを考えながら、カランヌは黄土色の道を歩き出した。その後ろを、イクパルの女性らしくスリサファンが着いて来る。

平衡感覚を失いそうになるほどの坂道や下り道が、家と家の間の狭い空間に挟まっていた。それがいわゆる道として機能しているのだ。大きな道もあるにはあるが、その殆んどで路商が行われておりメルトロローで言うような馬車道にはならない。舗装もされてはおらず、家の壁と同色の黄砂の硬い地面が延々と続いている。お世辞にも良い道とは言えない。

人種の交じる国、イクパル。その多くは色の濃い肌と暗系の髪色の人々で埋められている。だが、さすがは人種の混合する民族だけあって、海を越えた南方諸国のような色濃さはない。南方の民は深い大地の色の肌をもつが、この国に溢れる人々はそれよりもわずかに薄い蜂蜜色か麦穂色。もっと薄い者だっている。

メルトロロー人との違いがあるとしたら、その肌の色ぐらいなものか。だが金銀の髪色と寒色系の瞳に代表されるメルトロローにも、人種の混合がなかったわけではない。だからいくら色が薄いとて、サディアナのような色系が出るのは珍しいことだった。淡い月光のような金の髪と、湖水の色の瞳、白すぎない象牙の肌。父親であるノルティスとは全く似ていないし、20人いる彼女の兄弟姉妹とも全くといって違う色。だが間違いなく六代も遡れば、彼女の色系がまぎれもなく王族の血であることが証明される。薄い色を保持していた最後の王——竜を得て560年の治世を布いたと言われる——タントルアス王の容姿とまさにサディアナは一緒なのだ。そもメルトロロー王族の色系の混合は、そうして大陸を統一したタントルアスが大陸中から妃を集めたことに由来

する。

サディアナ王女生誕の折、出生が傍出だというのにあそこまで盛大に国をあげて祝われたのも、彼女の「先祖還り」の容姿に忌憚るもの。その先祖というのがタントルアスだったものだから、よりいっそう喜ばれた。メルトロー国民はタントルアスにがる英雄談を、特に好むきらいがある。

「...カランヌ殿、確かお居場所を特定なさっていたはずでは」

ふらふらと、道を上ったり下ったり。見たことのある風景を何度か目にして、いい加減この焼くような暑さにもうんざりとしてきた頃、背後のスリサファンの硬い声色が耳に届く。

「そんなこと、言いましたっけ」

言った、のは自分だって忘れていないわけではない。

「下山なされてすぐ、仰っていたはずでしたが」

「ああ...そんなこともあったような気がします」

「この暑さにとうとう頭まで溶け出したようでございますね」

「溶けているとすれば私の”鼻”でしょう」

うんざりと返して、カランヌは目を閉じる。

ずっと追ってきたサディアナの気配——己を隠すことを知らぬ、未熟な竜の気。それが何だか、アデプに近づくとつれみるみるうちに掻き消されてしまったのだ。サディアナがこの都にいるのは間違いない。だが例えるなら、その「気」が都中、どこに居ても同じ強さで感じてしまうせいで、それを察知し判別する体内の方位磁石のようなものがまるきり狂わされている状態。

「鼻？サディアナ殿下をお感じになれないのですか」

「...ええ」

背後で、スリサファンが短い溜息をつくのがわかる。

仕方がないのだ。血の薄い自分には、せいぜいサディアナの尻尾を追いかけるか、彼女の逆鱗を撫で付けて竜への覚醒を促すことぐらいしか出来ない。

「この辺りに診療所か何か、病人を収容できる場所はないでしょうか」

「診療所？」

つつつかと歩を進めたスリサファンが、ふいに大通りの路商の旦那に道を尋ねる。関わらぬと決めたではないか——という批難は、役に立たぬカランヌが言える台詞では最早なかった。

スリサファンに尋ねられた初老の旦那は、深い紅色の絨毯を目前で織りながら肩を竦める。

「城に近いほうに何軒かあるが、口で言っても辿り着けないだろうよ。誰か病気なのかい」

「ええ、バツスからここへ出稼ぎしている末の息子なのですが」

流暢なイクパル語が、すらすらとスリサファンの口から流れ出る。カランヌはイクパル語が話せない。聞き取りは何とかできるが、自らの口に乗せて発音するのは苦手だ。

やはり、スリサファンを引っ張ってきたのは正解だった。カランヌはひとり満足して、会話を続けるふたりへと意識を戻す。

「かわいそうになあ」

絨毯を織るその節くれだった大きな手をひたと止めて、路商の旦那はしばらく何かを考えて

いる。

「俺が案内できたら一番いいんだが...この町が他域のやつらに歩きにくいのはよくわかる。早く息子さんのところ行ってやりてえだろう」

「ええ。...どこの診療所にいるのかもわからないのです。出来ればそのうちの何件かでも、案内をお願いできればいいのですが」

サディアナが診療所にいるという確信はない。だがしらみつぶしに町中を徘徊するより、彼女が負傷していることを考えれば医者関係であつたほうがいい。スリサファンの考えは、そうだったものだろう。

「地の理に詳しい方なら誰でも構いません。お願いします」

「そうだな、うちに遣いでよくくる小姓がいるんだが...、」

「小姓？」

「城の表側に遣えてる男の子だ。主人の遣いや用事を足しに城下によく下りてくるのがたまに居るんだ。あの子達ならこのあたりに一番詳しい」

今日は来るかどうか知れないが、と呟く旦那に「お願いします」と返してスリサファンは頭を下げる。その後ろに倣って、カランヌも頭を下げた。

小姓はその仕事うえに情報に長け、道にも詳しい。これは思ってもみない幸運だ。

「いつもなら今頃来てておかしくないんだが」

そう言って視線をめぐらす旦那の目先を追い掛けて、ターバンを巻き丈の短い衣装を着た少年の姿を見つける。あれが小姓か、と納得した。整った目鼻立ちとそれゆえの中性的な雰囲気。武力を重んじるこの国においてきっと重要な役割を担っているのだろう。戦場での軍人への奉仕。側人としての認識が強いが、小姓とは本来「そういう」ものだ。

「ウトウム、悪いが道案内を頼まれてくれんか」

ウトウムと呼ばれたその小姓が、小さく頷きわかりました、と答える。

「旦那にはいつもおまけしてもらっているし、喜んで引き受けます。まだ一年ぐらいしかここに居ないのでお役に立つかはわかりませんが」

絨毯を二枚、旦那から受け取るとウトウムはこちらを見やってそう告げた。

寝台が五つに、間仕切りの薄灰の布がそれぞれを仕切る狭い空間。わざわざ首をぐるりと回さずとも、この部屋に患者の姿はひとりもない。

診察室の奥の小部屋に隙間なく詰められた無人の寝台を眺めて、カランヌはため息を捻りだした。これで五件目、もうため息をつくのも飽きた。

「すみません、城下の診療所はここで最後なんです...」

カランヌのため息を、まるで自分の失態のように責めた口調でウトウムが呟いた。だが、その言葉にふと首を捻る。

「城下の？」

年輪を重ねて低く擦れた声があとに続いた。どうやらスリサファンも、同じ疑問を持ったらしい。

問いに頷いたあと、ウトウムが診療所の医者に会釈する。

「...アデプの者なら、最初の門まではくぐることができます」

診療所を出て、歩きだした。

スリサファンと二人、あんなにぐるぐると迷わされた路なのに、イクパル城の門が視界に飛び込んだのは思っていたよりも早い。

「城の、いいえ、その門の向こうにもあるのね？」

「はい」

ウトウムが答えて頷く。

「けれど、アデプの民だという証明が必要になります。あるいはバツソスの許可証でしょうか」

「その証明には何が？」

「住民録です。戸籍を取り寄せてそれと一緒に。とてもではないけど、今日明日で息子さんにお会いするのは不可能だと思います」

肩をすくめて、ウトウムが小さな息をはく。

「他の方法はないの？」

「あるにはあるんですが.....、どうかなさいました？」

カランヌは門へと続く水のない堀に架けられた、緩やかな橋の上で立ち尽くしていた。

ふと、身を包んだ黄金の気を――感じたのだ。門の向こうから流れ来る、身の内を焦がすような感触。

カランヌは大きく息を吸い込むと、思わず口の端に笑みを乗せた。間違いない。

サディアナが、この向こうにいる。

「教えてください。何が何でも行かなくてはならなくなりました」

この国に来て、初めてイクパル語を吐き出す。口の利けぬ男、とでも思っていたのか、ウトウムの顔が啞然となるのを視界の隅で認めて、スリサファンへと真正面に向き合った。

「わかったのですね？」

彼女の鋭さに、心底満足を覚える。いちいち説明をせずとも、いつもぴりぴりとした彼女の神

経が、一を聞いて十を察するからだ。侍女頭などと言ってはいるが、その身の半分は護衛の方に向いている。自分達は、実はひっそりとその女だてらの武骨な手で護られているのだということに、メルトロウ王族たちは気付かない。

侍女として、護衛として働ける有益な人材。ノルティス王の人選に初めて感謝を込めながら、カランヌは彼女に向かって苦笑を見せた。

「やはり間違っただけではありませんでした。……ウトウム、もうひとつの方法を教えてくださいませんか？」

「隊商にまぎれこむことです」

ウトウムの静かな言葉に納得して頷く。たしかにこの国の特色を考えればそれが一番いい。商人なら、城下であれ城内——場所は限られるが——であれ自由に露商を営んでも良いようだった。

「では、そうしましょう」

カランヌたちは、もと来た路に引き返した。

「アン少尉お客さまが」

露商のようですがどうでしょうか。表の小間使いをすべて任せている小姓が、仕切り幕をめくって顔を覗かせる。

「テギ」

灰褐色の髪と焼けた肌、深い群青の瞳の子供。小姓に自分の世話をさせるのはあまり好むほうではなかったが、この仕事の場合そうも言っていない。

「おかしいね、病人か何か？」

いくら城の中での露商を許されている商人でも、軍直属のここへ気軽に訪ねてこられるわけではない。あくまで軍人の傷病の治療をするのが、軍医であるアンの役目だった。

「それが…」

そのまま部屋に入ってきて、テギはアンの傍に寄る。

「ウトウムが連れてきたので、」

「ウトウムというと…」

ベシャハ少佐の小姓か、と記憶を探り出す。コディ・タイハーン・ベシャハ。

あまりその名に関した噂は聞かない男だが、それでも少佐という地位と伯爵家ベシャハの家名は無下に出来ない。

「わかった、出よう」

「四、五十代の女性とお若い男性の二人連れです」 仕切り幕をめくってアンを通しながら、テギが小さな声で続ける。

診察に使っている部屋の、ちょうど入り口の辺りに三人の人影を見つける。逆光のせいで真っ黒なのだが、テギの言うとおりの二人連れにウトウムが合わさった人数だ。

「どうぞ、中へお入りください」

「子供を探しているのですが」

女性の方が、つかつかと部屋の中に入ってくる。黒いヴェールのせいで目元だけしか見ることができなかったが、色の黒さで言うならイクパル人だ。

「子供？」

「ええ、怪我をして医者にかかっているはずなのです。歳の頃は十六、いえもっと幼く見えるかもしれません」

ふと、脳裏に浮かぶ少女の姿。自分が知っている十六の子供と言えば、フェイリットぐらいのものだ。まさか、追っ手が？ そこまで考えて、ふと入り口に立ったままの男性へと目を向ける。

「生憎とこちらは軍直属ですので。そちらの方は？」

努めてさり気なく、男の存在を気にしてみる。もう少し部屋のなかに入ってくれたなら、その顔を見ることができた。

「兄です」

柔らかな声が、一步、近づく。背の高いその顔を見つめて、アンは驚愕の表情を浮かべてしまった。

髪はターバンで隠されていて、肌の色はわりと薄い。瞳の色は淡い芝色。たが、そんなことはどうでもよかった。「誰の」兄だという、その主語を聞かずともはっきりとわかる。

似ているのだ、...フェイリットに。

雰囲気というのか、特徴というのか。例えるなら彼女が男に生まれていて、あと十年歳を加え、その体色を濃くしたような。

「...見覚えがおありですか」

流暢なイクパル語でそう問い、「兄」と称した男が髪を包んでいたターバンを解き放つ。

もう自分の表情を、知らぬ存ぜぬと偽ることは不可能だった。

フェイリットよりはやや濃い金色の髪は、やはり彼女と同様、柔らかそうなくせ毛で緩やかに流れていた。少なくともその血のつながりを、疑うことはできない。

「...存じません、申し訳ないのですが。やはり一般の方となると城下ではないでしょうか」

明らかに、自分がフェイリットを見知っていることは察しているはずだ。それでもこう言わずにはおれない。

フェイリットを追っていたのは、血縁関係などなにもない、ただの人買いであったはず。兄だと言われて、そうかと納得できてしまうほどの男が彼女を捜しているとしたなら、本当のことを...彼女を預かっているということ、告げるべきなのか。

「どうぞそれらしい者を見かけたらお教え下さい。私の名前をお伝えくださり、どこへも行かぬようこの町に留めていただけたらそれで構いません」

食い淵を減らすために子供を売ったとは思えぬ、優雅な空気を男は持っていた。フェイリットは村の出だと自らを称したが、彼を見ていたなら首を傾げざるをえない。裕福な商人か、地主か、もしくは...。そういった印象だ。

「わかりました。あなたのお名前を聞いておきましょう」

「カランヌ、と」

丁寧な動作で、男はその整った綺麗な顔を礼と共に伏せた。



「アン少尉...あの人たちの捜している人って」

来訪者の後ろ背を見送って、テギが呟く。

はて、彼はフェイリットを知っていたらうか。内心首を傾げながら、アンはテギへと視線を向けた。

「あの新しい小姓じゃないんですか？」

「小姓?!」

思わず裏返る声を咳払いで正して、アンは苦笑する。

「女の子だ。その相手が、私の知っている子ならね」

小姓であるはずがない。ウズのところに仕えさせるとは言っていたが、まさか皇帝宮まで引っ張っていくことはないだろう。てっきりハレムにでも入れるのかと焦ったのだが、エセルザの話の聞いている限りそれも無さそうだった。

ハレムに入ったら、フェイリットは間違いなく潰される。今の「皇帝」では、彼女にとって良い男には決して成り得ない。コンツェの妻にしてやろうと連れてきた娘なのに、とんだ事態になるところだった。まして、彼女が目覚めたその日に「未遂」を目撃しているからこそ。あと少し遅かったなら、間違いなくフェイリットは泣き目をみている。

ウズの企みが、てっきりトスカルナ家の存続に向いているのかと思っていたのに。フェイリットをハレムに入れてギョズデ・ジャーリヤに、果ては子を産ませてサグエ・ジャーリヤにさえしてしまえたなら、その籍をトスカルナ家に移して養子にしてしまうことは簡単だ。サグエ・ジャーリヤは他国で言うなら皇后。――このイクパルという国において、女が唯一頂点に立てる場所。その愛妾ジャーリヤを排出した家は、皇帝の在位が続く限りでなく次代の在位にまで権勢を誇れることになる。

トスカルナを継ぐ者が一人も居ない今、一族は「宰相」の任にあるウズただひとりに支えられているといっても過言ではない。このままでは何人も皇帝を排してきたトスカルナの家名が、ここで終わってしまう。ウズはトスカルナの出ではあるが、庶子ゆえ正式に家名を継いでいるわけではないのだ。子を得られぬ彼のこと、養子をとるという案は前前からきつと考えてはいるはずだった。その矛先がフェイリットへと向けられるのなら、全力で阻止せねば。そう意気込んでいたところを、エセルザに宥められた。「それはない」と、どこから来るのかいつものおっとりとした姿勢で言われてしまっは、アンとしても動くわけにはいなくなる。

「女の子? じゃあ違いますね、小姓は男ですから」

納得したようにテギが頷いている。

「新しい小姓、入ったの？」

彼らは家から離れて城の中に生活のすべてを置いている。その仕事のほとんどを皇帝宮でするものだから、食事は宮の厨房の隅で摂ることになるのだが、何せ飯時ともなれば皆時間が重なるもの。そこで知り合い、小姓同士で友情を得ることも少なくは無い。テギも例にもれず皇帝宮で食事をさせているため、新しい顔などには敏感だ。

「綺麗な子が。ああ、確かに女の子っぽい感じはしますが...、男の子にも見えるような」

「お前と変わらないんじゃないか」

小姓は皆、どっちつかずの子が多い。小姓の殆んどは引き抜きなので、その引き抜いた「主人」の好みにもよるのだが、並べてみれば女性的な雰囲気を持つほうが目立っているに違いない。

「そうですか？ ああ、最近男らしくなれてきた気がしてたんですけどね...」

「やめてくれ。急に髭とか生えてきたら複雑だから」

そろそろ仕事も切り上げだ。使っていた備品を片付けながら、テギの成長を考えて変な気持ちになる。十ぐらいから引き取って、まるで母か姉のような気でいたのに。なんだか言われてみれば段々大人らしくなってきたようだ。

「もう十五ですよ。そういえばコンツェ中隊長も、小姓だったんですよ。あんな風になれたらいいな」

「コンツェ？」

記憶を掘り起こして、彼の少年時代を思い出してみる。あれはどちらかというと、決して「女性的」では無かった。もともと軍人にするためにワルターが引き抜いたのだから、無理もないが。

「まあ、頑張ることだ。私はお前が軍医になるなら、全力で応援してあげられるけどね」

途端、目を輝かせて大きく縦に頷いたテギは、やはり子供らしさに溢れていた。これは本格的に育てるのももう少し後かな...などと考えて、アンは微笑む。

「なんとまあ、優雅に欠けた城だ」

呟いて、カランヌは自嘲するように唇の端を吊り上げる。

赤砂岩でできた赤い城。完璧なシンメトリーと、大陸最高の美術を結集させた白い針と字されるメルトロウ王城とは、とうてい比較にはならない。

広大さなら足並みを揃えるところだが、やはり城とは王の権威を顕わすもの。単に敵から身を守るためだけに、要塞として恐ろしいまでに特化させたこの国の城など、「下品」の一言に尽きる。何十代と続いた軍帝統治と度重なる鎖国のせいで、情報も去ることながら国の威信に関わる文化すら遅れをなしているのだ。イクパルは。

その広大で荒削りな赤い城の内部——サディアナはここに居るはずだった。

皇帝宮と呼ばれる奥の宮殿の庭で、カランヌは城を見上げる。

仮にも一国の最高宮。忍び込むのは決して容易ではなかったが、どうやら自分の血はこういう方には向いているらしい。サディアナのように変化ができたり空を飛んだりとはいかぬまでも、さすがはエレシンスの血とでもいうのか。

ウトウムという少年はスリサファンに任せ、本来の目的はばれないように計らってきた。後はこのまま身を隠しつつ、出てきたサディアナ王女を連れ去るのみ。

遠回りしてしまっただが、これですべてが丸く納まる。

身を寄せていた円柱をひとつ移って、宮の内部に意識を這わせた。サディアナの“気”の匂い。確かに途切れなく流れてくる。...思っていたよりも外側に居るのだろうか。そんなことを考えながら、回廊を歩いていく小姓や宮廷人たちに気どられぬように、庭ごしの一段下がった石台で伏せるようにして待っていた。

――それにしても、とカランヌは思う。

どうして途中、彼女を見失ってしまったのだろう。不思議なことに、あれは「見失う」というよりも「見えすぎる」といったほうが正しかった。帝都を.....いや、イクパル帝国内を、まるで循環のように充満する竜の“気”など.....ありえるはずがない。何せあの“気”は本当なら猫の髭か昆虫の触角のようなもの。せいぜいが自分の周りにいくばくかの範囲をおいて発するだけ。だからこうして居場所を判断することができる。帝国中に隈無く触角を伸ばせるなら、国の端にいて端の時勢を、ものの瞬時に探知できることになる。――サディアナが主を見つけ覚醒したなら...言わずもがな、恐ろしいことになるはずだ。彼女を手中に収める者は、文字通り「覇」を約束されるのだから。

「いや、まさか...」

呟いて、自分自身がはっとする。

まさか、この国に居るのでは...？

エレシンスの血を最も濃く引くサディアナの、「王」が。だがそうすれば、すべてに納得がいく。一度にあんなにも強い力が出現した根本の理由が、仕えるべき「王」の側に居たからだとしたなら。

「違う、そんなはずは」

背中を伝っていく汗に、ようやく自分は焦っているのだと気付かされる。

そんなはずは無い。サディアナはメルトロー国王ノルティスのためだけに、ああして山奥で育てさせたのだ。それでなくとも彼女が選ぶ「王」は、どうあってもメルトローにいるはず。竜が仕えられるのは一国のみ。彼女の血を遡り、たどりつく先がエレシンスなら、その忠誠はメルトロー以外ありえない。他でもない自分がそうであるように、また妹がそうしたように。何千年も前に誓った忠誠は、時を経ても尚この血により約束されているのだ。

額にまで噴き出しはじめた汗が、頬を伝って喉元に流れた。

考え込んでいる場合ではない。動き始めた彼女の気配が、徐々にこちらへ向かって来ていた。

確かめなければなるまい。もしこの国に未来の霸王がいるならば、その息の音を早々に止めておく必要がある。

すらり。静かに立ち上がると、カランヌは自らに向かい歩いてくるひとつの“気”に、意識を研ぎ澄ませた。

「つかれた…」

細く深いため息を吐き出しながら、フェイリットは厨房に向かい回廊を歩く。

ようやく夕食の時間をもらえたのだ。

小姓たちはそろって厨房の一画で食事をするが、もちろん仕え主の許可が無いかぎり向かうことはできない。ここ何日か、忙しすぎて三食のうち一回は必ず抜かれてしまっていた。その殆どが夕食なのだが、今日は珍しい。

政務の書類をお偉い方に届けたり、言伝を頼まれたり、軍事のことについて兵舎のある区画まで大佐方に相談に行ったり、室ではウズの使い終わった帳面やら資料やら膨大な数の片付けをしたり……とにかくやることなら山積みで、次から次へと湧いてくる。慣れてきてわかったが、どうやらウズは「宰相」の仕事ではないもの——そのほとんどが皇帝がらみだが——まで一手に担っているらしかった。一日の予定表を作って、「伯爵と謁見」やら「練兵場の視察」やら。思わず首を傾げてしまうが、実はそれらはすべて皇帝がやるべき政務。

いったい皇帝は、どこで何をしているのか。一度も目にしたことがないので、実は最初から皇帝など存在しないのでは、なんて思えてくる。小姓たちの間ですら「皇帝は無能」説が流れているぐらいだ。きっとそれは本当だろう、と思う。なにせ宰相なら、日の何度か皇帝と顔を合わせていてもいいはず。なのにその宰相につく自分が見たことがないのだから、「無能」の信憑性も増してくる。

ただ——、疲れきり小部屋で就寝した以降はわからない。どうやらどこかに出かけているような気配を室ごしに感じるものの、ウズが何をしてどこに行っているのか、把握できているわけではなかった。が、まさか夜中に皇帝に謁見しに行く宰相など、どこの国にいるものか。

やはりこの国の皇帝は、とんでもない男なのだろう。ひとり、そう結論づけて満足げに頷く。

小姓になって一週間。最近はウズの、あの氷のように固まったまま動かない表情が、いつか動きはしないかとかっそり観察できるまでに慣れた。

厨房は南区。文字にしまえば簡単なものだが、実際北区から歩けば結構な距離がある。回廊添いには、隣接する室のすべてに陽光がいきわたるようにと、庭がいくつも造られている。長い距離を歩くとき、人々の目を潤すのも役目の一端だ。ウズの宮にあった薔薇ほどではないが、人の手を借りて美しい緑が広げられていた。謁見の間もある表立った政務の場・中央区の庭には、貯水も兼ねた大きな泉まであるらしい。けれど、裏方の身ではまだまだ見られることは無さそうだと、残念に思う。

並ぶ円柱を何とはなしに目で追いながら、フェイリットは裸足でひたひたと歩く。お腹が空きすぎて、少し気持ちが悪い。——今日の賄い何かな。昨日の棗のパンはおいしかったな、あれ出ないかな……。考えることまでが食べ物一色になってきたころ、ふと、何かの気配を感じた。ほんのり鼻先を霞めるような、明らかに故意に抑えられた気配。

「…………？」

覚えがあるような無いような、出かかっている答えに首を捻って考えるが、思い出せない。立

ち止まってあちこちかぎ回るのも怪しげなので、あえて歩調は変えなかった。

——誰だろう。

意識の隅にその気配を置いて、だんだんと近づいていく。

「...のわ！」

突然、手をひかれて庭に落ちる。

「カッ...カラ...！」

仰向けになって転がり落ちたフェイリットを、真上から見下ろす人物。——カランヌ！ 覚えのあった気配によく合点がいて、顔をしかめる。

「お迎えに上がりましたよ」

微笑んで、フェイリットの体を抱き起こす。

「.....どうしてここが」

わかったのだろう。敵国の、それも中枢を担う城のなかだ。普通なら、考えも及ばないのに。

「貴女は気づいてないようですね」

「な...」

「何をもって、ご自分の顔を鏡で御覧になったことは無いのですか？」

鏡なら、それは見ないわけにはいかない。一応これでも女であるし、竜の片鱗——尻尾やら爪やら牙やら——が見えていないか、確認だってしている。だが今さら鏡を見て何の感慨を抱けというのだ。美人とも思えぬ自らの顔に見惚れるほど、暇でもない。

「...これも竜の欠点でしょうかね、人間の容姿に頓着なさないでしょう。それにしても全く気づかれていないとは」

呆れたように呟いて、カランヌは自らのターバンをぱっと解く。

「見覚えは？」

両肩を捕まえられて、驚くほどの至近距離にカランヌの顔を見つめ——...フェイリットは青ざめた。

「.....わ、たし」

「そうです、似ているとは思いませんか」

気づかなかった。会うのは初めてではないし、一度面と向かって食事までしているというのに。だがそれが、どうして自分の居場所を察せるに至ったのか、未だに理解できない。

「.....まさか、貴女の母親に、双子の弟がいたことも知らされていないのですか」

「竜.....!？」

母の出事も、生い立ちすらサミュンは語ることをしなかったのだ。知るわけがない。だが、自分は母の血を継いで竜になった。それが姉弟.....なら、この男も。

ようやく行きついた考えに啞然とするフェイリットを見やり、カランヌは満足そうに頷く。

「貴女と違って濃い血は持ちません。寿命やら忠誠やら面倒を誓うことはありませんがね」

ただ、歳をとるのは忘れてしまったようです。そう苦笑するカランヌの顔は、なる程どう多く見ても二十代半ばにしか感じられない。母と双子ならば、もう三十も半ばであろうに。

「わかりましたか。貴女の未熟な竜の気をたどれば、どこに居たって捜し出せます」

―――では、どうあっても逃げられない。メルトローに、帰らなければならないというのか。

「わたしは帰らない、わ、……っ……！」

「サディアナ様」

急に襲った眩暈のせいで、地べたに片膝をつける。

「やはり…この国に」

覚えのある眩暈にぐらぐらしていると、上の方でカランヌがぼそりと呟いた。何がこの国に？そんな疑問が意識の隅に上るが、口に出すことができない。口を開けたら最後、きっと嘔吐してしまう。

「サディアナ様。決して、正体を明かされることのないよう。さもないと貴女を殺さねばなりません」

今まさに変化してしまいそうなのに、無茶を言う。だったら助けてくれと、カランヌの手を掴むが、握り返されただけで一向に何も変わらなかった。

「自分の力も制御できぬようでは、いけない」

諭すように、カランヌは言った。その額には汗が光っているから、あながち彼も平静ではいられぬはずだったが。

「…っぐっ…！」

ドクン――、血が唸る。

メルトローには帰りたくない。なぜだか分からぬその衝動を、どうしても抑えることができない。びりびりとした痛みが全身を駆け抜けて、フェイリットを襲った。

忘れることの出来ない、変化の激痛。

「どうして…」

体が竜へと変わっていく。カランヌが何かを叫んだが、聞き取ることはできなかった。視界がびかびかと点滅して、地面になすりつけるように身を落とした頃には、すでに体中に焼けるような痛みが駆け回っていた。

嗅覚の変化により突如流れ込む空気の濃さ。鼻がもげそうなぐらい痛い。破れていく皮膚からは、血が勢い良く吹き散っていく。

ここで完全に変化を終えてしまったら、まずいことになる。

―――なんとか…抑えなくては。

フェイリットは、破れた皮膚の上を思い切ってばしばしと叩く。よけいに血が飛んで激痛を伴ったが、気さえ強く張っていればそれ以上に変化をすることは無いのに気づく。

「痛い…痛い…」

どこか、人のいない場所にいかなければ。

「サディアナ様っ！」

カランヌの制止を振り切り、庭から回廊へ勢いよく飛び出す。どこへ向かっているのか自分でも分からなかったが、とにかく人間の気配を避けて、人気の無いところへ…。それだけを願って一心に走った。

「っ！！」

回廊を曲がるところで、"何か"が体にぶつかった。

その反動のまま抱きとめられる。

——人...？ 視界がぐらぐらする。フェイリットは声にならない言葉をあげた。相手が誰にせよ人間である限り、このままではだめだ。

———お願い離して！

早く離してもらわなければこのまま変化が終わってしまう、そう焦っていたのに.....痛みはまるで嘘のようにするすると引いていく。

流れていたはずの血も、まるで妄想だったかのように身体の中に染み込んでいった。

「...なんだ、静かになったか」

低い声が降りかかり、その主がフェイリットを見下ろす。

「今度は自分から飛びついてくるとはな」

「...！！！」

自分より頭二つも高い相手の顔を見上げて、フェイリットは驚きに目を開けた。漆黒の髪、猛獣を思わせる闇色の瞳と顔立ち.....、忘れもしない嫌な男。

キス魔...！ 勝手につけていた字を心中で叫んで、男を突き飛ばす。

が、ふらふらとよろけたのは自分の方だった。敷き詰められたタイルの上に尻もちをついて目を瞬かせていると、

「血が、」

驚いたように男が言った。

血？ まさか変化が残ってしまったのか。焦ってその視線を追うと、右脛の内側を流れる一本の赤い筋が見える。

「あ、」

変化の血ではない。

伝い落ちる血の元を瞬時にそう悟って、慌てて立ち上がる。月のもの.....だ。最近なかったから、ほとんど忘れていたのに。よりもよってこの男に見られてしまうとは...。恥ずかしすぎて顔から火が噴き出そうだ。

「ウズルダンの所だろう」

「え」

立ち上がった身体を持ち上げられて、フェイリットは呆然とする。確かに自分はウズの小姓だが、「こういう」時に運ばれるならアンの所であって欲しい。男で、しかも医者でもない彼の所に運ばれても困るだけだ。

「あの！ いいです！ 自分で歩いて行きます」

何よりもまた自分を抱き上げている男から、早く離れたい。間近に見下ろすその鋭い顔を、憎しみを込めて睨んでやった。

「小姓がそんな所から血を流して走り回られても困るだろう。安心しろ、あの男は専門だ」

何が専門なのだ。抗議する間もなく歩きだした男の腕に渋々抱えられて、フェイリットは宰相室へ向かった。

「……それは一体何です？」

男とフェイリットが部屋に入るなり、ウズは明らかに眉を吊り上げて言った。いつもの不機嫌な視線は、もちろん男の腕に抱えられるフェイリットに向けられている。

「届け物だ」

「…その血の方です」

遮るように言って、ウズがフェイリットの足首へ伝う赤い雫に視線を寄越す。そしてそのまま、眉間の皺をいっそう深く寄せて男を見やった。

「…言うておくが違うぞ。私ではない」

「信じられたものではありませんね」

何の話をしているのか、フェイリットには理解できない。自分の足を伝う血が、どうしたらこの男の所為になるのだろう。月のものは、怪我でも何でもないのでから。会話の内容に疑問を残しながらも、フェイリットはウズの視線からおずおずと顔を俯けた。「専門」だか何だか知らないが、やはり異性に見られることには抵抗を感じるもの。

「あの、」

早く床上に降りしてくれないだろうか。男の顔をちらと仰いで、フェイリットは声をあげる。

「あの、もう…ひゃっ!？」

「…私の“所為”なら今頃自分で何とかしているだろうよ」

見せつけるようにフェイリットの太ももを優しく撫ぜながら、男が嗤った。フェイリットはその太ももを這う手を、がっちりと掴んで男を睨み上げるが、男は知らぬ顔だ。

「ええ、お慣れでしょうからね」

「相変わらずきついことを言う」

ウズの飄とした言葉をうけて、男が苦笑する。

「たまには冗談ぐらい言わせて戴きたいものです。毎日誰のせいで隈を作っているのか、忘れそうになりますので」

「これでも感謝しているんだが」

二人の会話を聞きながら、どのあたりが“冗談”であったのかと首を傾げていると、すっとんと床に降ろされた。

「養生しておくことだ。三日後にはバツソスなのだからな」

「バツソス…？」

問い返すが、男の方を見やるとすでに去りぎわの背中だった。何も掴めぬままその背中が仕切りの幕を抜けていくのを呆然と見つめる。

バツソスといったらイクパル帝国の領土、バツソス公国のことだ。小姓の仕事をしているうちに、随分とこの国の地理にも詳しくなった。イクパルを占める砂漠のほとんどが、バツソスに分布していること。――文字通り砂漠の中の公国だ。大きな河川のないイクパル領土内で、もっとも水の問題に貧窮している国でもある。国民の殆どが遊牧の民で、それ以外の民も小さなオ



アシスにぽつぽつと集落をつくって生活しているらしい。遊牧民もオアシスも時期がくれば移動する。国民が定住しないということは、さぞかし「治めにくい」土地になっていることだろう...情勢やら地図やらの書類を垣間見て、そう思ったのを覚えている。徴税するにも何をするにも、国民が移動するとあってはその数に於いて正確さが損なわれるはずだった。

「ウズさま。バツソスって、」

「こちらにおいでなさい」

いつもの淡とした声で言われて、フェイリットは素直に従う。

「腹痛は？」

「ええと、少し」

ウズの前に立つと、裾の短い衣裳を太ももの辺りまで捲られる。

「ひゃっ」

驚きに声を上げて、捲られた衣裳をウズの手ごと掴んでしまった。

「...あの方が私について、何か言っていたはずです」

「あの方？」

と言うなら、さっきの男のことだろう。

「...“専門”とか、ですか？」

頭の中をひっくり返しながら答えると、ウズが頷く。

「ハレムに居たのです。ここに来る前のことですがね」

「ハレムって...男の人は入れないんじゃない、」

「ええ、理由は何故だか分りますか」

ハレムは皇帝の“世継ぎ”をもうけるため集められた、女たちが暮らす場所。そこが男子禁制なのは、皇帝の他に子を作る存在の危険を、完全に排除するためだ。

言葉に頷いて、フェイリットは首を傾げる。ウズはどう見ても青年の男。女装をしたところで、その肩幅の広さからどうやったら「女」には見えない。男子禁制のハレムに居られるはずがないのだ。

「なぜと問われたら、私は子を成す機能を持たぬからという答えになるでしょうね。と言うより自分で取り扱ったと言うべきですが」

「それは...」

ひとつの可能性が思い浮かんで、フェイリットは言葉を濁す。

「宦官なのですよ」

聞いたことがあった。宮廷に出仕するために、身分の低い者が自ら宦官となって貴人の側へ仕えるという話。だがそれは、もっと東のほうの国でのことだと思っていた。まさかイクパルでもあるなんて。

銀色の頭髮と、紺碧の瞳、そしてイクパル人より遥かに薄い肌の色。見た目でわかるが、ウズは北方系の容姿をしている。アんと、そしてエセルザー—赤毛が目立つあの宮で、「異母兄妹なのだ」と言われて紹介されたことを思い出す。皇族という極めて高い身分に居ながら宦官にならねばならなかった理由は、その辺りにあるのだろうか。

宮廷への出仕の為、自らそういった道を選ぶとは。そこまでの執心を、フェイリットは未だ知らない。どんな気持ちだったのだろう...そう考えて、想像もつかないことに恐ろしくなった。

ふと見やると、部屋の隅の戸棚を開けて、小さな布袋を取り出すウズの背中に気付く。

「もう使うことも無いと思っていたのですが」

こちらに向き直り、ウズはその袋の中から手のひらに乗るほどの包み紙を取り出し見せる。

「宦官の仕事は女たちの身体の管理でした。“専門”というのもそのことでしょう。...これもそのひとつです」

「薬、ですか？」

小さな白い紙の中に、茶褐色の粉末が包まれているのを見つけて、フェイリットが問う。

「腹痛が辛くなったら飲みなさい。それ用の下着をいくつか手配しておきますから、その間にハمامへ行って身体を清めるように」

「はい...ハمام？」

「公衆浴場です。後宮のハمامハレムを使えるよう、言い渡しておきます」

「...ハレム、ってあの、わたしは」

あくまで小姓である自分が、ハレムのハمامなど使えるはずもない。何より性別を偽っているというのに。

「ちょうどいい。三日後にバツソスへ行くというのは聞いていましたね」

「はい」

「貴女はそこでギョズデ・ジャーリヤになるのです」

一瞬、フェイリットはぽかんと口を開けて固まった。ここで暮らし始めて一週間も経つ。まさか自分の耳が、イクパル語を聞き違ったのだろうか。そんなことを考えながらも、

「ギョズデ...」

口に出して青ざめる。

ギョズデ・ジャーリヤ  
最も愛される者。「側室」の意味も持つこの称号は、ハレムにいる愛妾たちが「皇帝陛下」と関係を持った後に、気に入られて階級を上げるもの。どうしてそんなものが、自分につけられることになるのかさっぱりわからない。関係を持つどころか、その顔すら未だ見たことがないのだ。

———それに、

「わたしはハレムは嫌です」

ここに来た時、ウズ自ら「嫌だろう」と問うてきたのを覚えている。ハレムでも出世など望まぬところだろう、と。それを今更、愛妾ジャーリヤだなんて。

「ハレムに入れとは言っていません。宰相命令です、タブラ・ラサ。お前はギョズデ・ジャーリヤになる」

「そ...んな」

顔の血が、どんどん冷えていくのが感じられた。

敵国皇帝の愛妾になる。この国で言う「ギョズデ・ジャーリヤ」が、他国でいうところの「妃」であるのなら...それは、どんなことよりも素性が知れる危険が増すということ。———サディ

アナ王女という、「表向き」の顔が。

フェイリットは呆然としながら、自分の小部屋の蒼い仕切り幕を捲った。

——<sup>タブラ・ラサ</sup> 白紙。 “真っ白な紙”という古い言葉が、まさか自分の名前となることには、この時まで気づいてはいなかった。

「とうとう決まったそうですわね」

「ギョズデ・ジャーリヤ？」

「わたしも驚きましたわ。あの何にもご執着なまらない陛下が、まさかギョズデ・ジャーリヤだなんて」

「ほんと。わたくしてっきり、ギョズデはアジクムさまがなるのだと思っていましたわ」

「アジクムさま、もう五回もお召しを戴いてらっしゃるのに」

口々に喋る女たちの言葉を聞きながら、アジクムは息をつく。

侍女が運び入れた氷菓子の皿から、桃色の甘そうな菓子をひとつ摘む。むっとした蒸気がたちこめる暑い大浴場の中で、指先のひんやりとした小さな菓子はゆっくりと溶けた。

女たちの会話はとどまることを知らず、皆口々に「ギョズデ・ジャーリヤ」の噂を流す。最近の話題と云ったら、顔も見たことが無い愛妾がギョズデ・ジャーリヤに召されたと、こればかりだ。“バスクス二世陛下がついにギョズデ・ジャーリヤをお召し上げになった”、“それも一目でお気に召したらしい”——などと。だいたい、ハレムにすら入宮していない娘が陛下のお目に留まったなんて馬鹿げた話だ。ヴェールを被り滅多に人前に姿をさらさず、しかも見かけたら見かけたで目だけしか露出がない。そんなイクパルの女を、どうしたら目に留めてお気に召すことができようか。

ギョズデ・ジャーリヤはハレムに入宮した愛妾の中から、特に陛下気に入りの女に与えられる階級。陛下と寝所を供にして、初めて大部屋暮らしから部屋持ちに昇格、そしてその先にギョズデ・ジャーリヤの地位が待っている。だがそれは、部屋持ちですらなかなか手に入らない地位。部屋持ちがそのままギョズデ・ジャーリヤに昇れるのが先帝までの慣例だったが、現帝の三十余数にもなる部屋持ちの女たちには、未だそれは与えられていない。「部屋持ちになったのに、いっこうに陛下はギョズデ・ジャーリヤの称号をくださらない」——出戻る女たちのほとんどが、この理由だろう。帝国のトップを飾る四公国の王女たちも例にもれず、怒った公王に連れ戻された。

バスクス二世陛下は女好きで有名だったが、先帝アエドゲヌのように女に執着なざる御方ではない。一度は必ず御召しくくださる。だがそれから先、二度目に呼ばれることはまず無いのが普通。二度呼ばれば快挙、三度目は奇跡...女たちの間でそんな噂たてがあるくらいだった。

だからこれまでに五度、呼ばれたアジクムは奇跡も奇跡、御子を宿すことが出来ればサグエ・ジャーリヤさえも夢ではないと囁かれていたのだが。

「アジクムさま？」

沈黙を続けていたアジクムの横顔を、わきに居て噂話に花を咲かせていた女のひとりが心配げに覗き込む。蒸し風呂で霽のかかった空気が、ふとした沈黙に流れた。

「見苦しい。結局のところ誰も姿を見たことが無いなんて、ただの人の話に尾鰭がついた噂でしょう。ハレムにも入宮していない娘が、部屋持ちを追い抜いてギョズデ・ジャーリヤだなどとありえないって、あなたたちが一番知っているはずなのに」

もたれながら、アジクムはふう、とため息をつく。その体を起こすと、香油を塗られて艶やかに照る蜂蜜色の肌に、麦穂の色の長い髪がするするとすべり落ちた。

――わかっていた。この恵まれた容姿が、陛下の寵を五度もつなぎ得たのだと。自分も見初められた女の一人。だが、とアジクムは思う。あの陛下の言う“愛している”など、突然降りくるチャダの雨に等しい。ぱっと降り注いで、すぐに乾いてしまう。砂漠の水同様に。だからいくら気に入りの娘を見つけたとて、長く続くわけが無いのだが…。

「一目で…」

…まさかね。

無能だなどと罵られているが、二度も肌を重ねれば誰しものが気づくことだ。決して「愚鈍な男ではありえない」と。野心と類い稀な才知を、長年ハレムで燻らせていたただの宦官を、一目で見抜いて手元に置き、宰相にしてしまうぐらい。

件の娘が“一目で”ギョズデ・ジャーリヤに召し上げられたと、そんな話を聞いては本当のところ心中おだやかではいられなかった。前例が全く無いとは、言えないからだ。

「たんなる噂なののでしょうか…アジクムさまの言う通り、まだ誰も姿を覩たことが無いのは本当ですわ。ギョズデの名前だけが、なぜだか一晩もかからずに皆の耳に渡って」

「一晩で？」

たちこめる蒸気の中、急速に喉の渴きを覚える。記憶にも新しい――、一週間ほど前。ハレムを仕切る宦官たちが、口に始めた噂だったはずだ。当のアジクムも、その一人から耳にした。

傍らの女に目線をくると、間髪入れずに水差しから檸檬水が運ばれてくる。

「困ったものね」

自分も、ここに棲まう女たちも。

「暗い顔をなさらしないで。アジクムさまにこそ、ギョズデ・ジャーリヤが相応しいのですから」

力強い口調でそう言う侍女に、アジクムは苦笑を返す。

“侍女”とはいえ彼女達も歴とした愛妾、そして下級貴族の令嬢だ。チャダ小国の小さな部族頭の娘であるアジクムなどとは、身分でいえば雲泥ほどの差が開く。それでもこうして忠実なのは、陛下をより多くアジクムの寝所に通わせることが叶えば、当然それに仕えている彼女達にも陛下のお目に留まる機会が増えるからに他ならない。

公国の公女や直轄領の伯爵令嬢は、とっくに実家へ出戻っている。本来ならばハレムに入ったら最後、外の世界を見ることは適わなくなるのだが…バスクス帝においてはそれすらも頓着なされないようだった。戻らないのは自分達のような、なんとしてもギョズデ・ジャーリヤに、サグエ・ジャーリヤにと、胸に炎を燃やす女たちだけ。だからこそ負けられない。

「アジクムさま、」

驚いたように、侍女の一人が声を上げた。

その視線の先に小柄な白い肌の少女を見つけて、アジクムも目を見開く。

初めて見る顔だった。象牙のような肌色に、金の髪、瞳の色もとても薄い――北方系の娘。

小柄な身体にすらりと伸びた四肢はまるで少年のようで、髪の毛までもが短い――姦淫の罪でも犯したのかというほどに。そうして見れば、不思議な色香が漂うように思える。だが「男」も知らぬ娘にも、見えることは確か。

「ありえませんわ」

侍女の心情を悟って、アジクムは切り捨てる。あの娘が件のギョズデ・ジャーリヤでは？  
...気持ちもわからなくはない。

華美すぎぬ綺麗な顔と、淡々とした出で立ち。それはどこか砂漠の白い<sup>タイン</sup>虎を思い起こさせる。人を襲うことは滅多ない、だが決して慣れようもしない肉食の美しい獣。

けれど陛下を虜にするような豊満な身体も無いし、いくら綺麗とはいえ「絶世の美貌」と字するほどでもない。見るからにまだ子供なのだ。出るべきところは出て、引っ込むべきところは引っ込んでいる――陛下はそんな女がお好みだ。五年も経ったならまだしも、どちらにせよあれを“一目で”お気に召されるはずがなかった。

「13か14か、まだ子供みたいではないの。ギョズデなはずない」

おおよそどこかの下級の貴族が、愛人にでも産ませた子供を、口減らし同然にハレムに押し込んだのに違いない。イクパルは貧窮しているから、貴族といえど安心してはいられない。アダブに住む皇帝に集まるなけなしの財力を回してもらうために、彼らも色々と予断が無いのだ。

ハレムの風呂は初めてなのか、娘はきょろきょろと物珍しそうに辺りを見渡している。じっと見つめていたら、こちらの視線に気づいて身を固めた。

「アジクムさま」

立ち上がり、娘のほうへと歩く。侍女の制止などは聞かぬふりをした。

ギョズデ・ジャーリヤとも思えぬが、名前ぐらい確認してみるのもいい。本来なら昨日今日に入宮した新顔の元に、部屋持ちのジャーリヤが話し掛けるなどありえないことだったが、

「おまえがタブラ・ラサなの？」

冷たい声をつくり、アジクムは問うた。ギョズデ・ジャーリヤの、噂と同時に流れた名前だ。うろ覚えでしかなかったのだが、確かそのような名前でもよかったはず。

問われた娘はアジクムを見上げて、目を瞬かせた。まるで初めて聞いた、とでも言わんばかりに。やはりこの様子では、ギョズデ・ジャーリヤとは言えない。ほらみろ、と後ろの女たちを見遣って苦笑する。

「違うなら別の名前を名乗ったらどう」

「名前？」

「そう、ここにいる女たちは、皆おまえより目上なのよ」

「...申しわけありません」

驚いたような顔をした後に、娘はそう言って頭を下げる。

「フェイリットです」

その娘の真直ぐな瞳と簡素な返答に、アジクムは思わず顔を歪めてしまう。曲がりなりにも貴族の娘なら、もう少し彎曲した言い方があるだろうに。

「ほんとにタインみたいですよこと」

触れた手を噛まれたような心地で、アジクムは再び礼を残して立ち去る白い背中を見つめた

。

「これは」

執務用の卓に積み上げられた、何千あるかという書物に埋もれながら、ウズは思わず目を瞠った。

四方が擦り切れた一本の古い巻紙。長年の保存に耐えかねて茶色く変色してしまったそれに描かれるのは、遠い遠い時代の人物画だった。ウズはそれを、食い入るようにじっと見つめる。

「...面白いものを」

——確かにこれは、面白い。

見開きに描かれる若き英雄タントルアス。長年の保存にずいぶんと色褪せ、霞んでしまっていたが、それでも描かれた人物はその彩色まで判別できた。

「見つけたか」

驚きに目を丸くしていると、まるでこちらの頃合いを見計らったかのように執務室の入り口に人が立つ。

ウズは必要最低限、使用人を自らにつけない。面倒だからというのもあるが、自分以外の人間がうろちょろと視界に映るのが耐えられないからだった。身の回りの世話も客人——もっとも宰相執務室を訪れることができるのは皇帝と四公王ぐらいしかいないのだが——の出迎えも、すべて彼自らが行う。

皇帝陛下すら自らの手で捲らねばならぬその入り口の仕切り幕を、その本人は片手で持ち上げ立っていた。

「まさかご存知だったのですか」

「ああ」

「これ」を探せと言った皇帝陛下は、今更巻紙など見ずともいいぐらい、この人物を熟知している。...ならばこれは、自分に納得させるためのものだったのかと、ウズは息をついた。口で一言言えばいいものを、わざわざこんなにも多量の書物を探させまでして。

「そんなに血の巡りが悪く見えますか」

淡とした言葉に憤慨を乗せて、ウズは皇帝の鋭い眼光を見遣る。使用人を使わぬから、たかが巻紙ごときに一日がかりだ。常人なら一月とかかっただろうことは間違いない。

「口で言っただけでは信じぬだろうがお前は」

呆れたと言わんばかりに、皇帝は肩を竦めた。

「...それは、」

そうだった。ウズの本質は、どうも現実主義に傾いている。千年も前の英雄の名をあげられたところで、「なんだそれは」と鼻で笑うぐらいしてしまう自信はある。

深夜を迎えて数本の燭台に火を灯しているだけの執務室は、ぼんやりと暗い。そのわずかな明かりに闇色の風体を一層濃く染め上げ、皇帝は隙無く笑う。

「それはもう許せ。どうだウズルダン。お前に昼間、あれを見に行かせた甲斐もあっただろう」

トスカルナの宮で死んだように眠っていた少女。



その姿が、ウズの脳裏を過る。

突然宮に現われて、寝台に眠る少女の顔だけ見にきたウズを、さぞかしエセルザは不審に思ったことだろう。

銀色に近い金の巻き毛に、象牙の肌、そしてなによりその顔立ち。お前の宮に、面白いものがある、そう彼に言われ向かったときには何も感じなかったことだが、...今ならばわかる。

もう一度、手元の肖像画へと目線を落とし、ウズは頷いた。

「――似ています」

千年以上も前に、大陸の統治という偉業を為し得た、若き英雄タントルアスその人に。

大陸の統治を為した“若き”英雄だなどと最初は首を傾げたが、なるほど探せば若い姿を描き取らせた肖像画ばかり。どれもが二十代の半ばか、それよりやや過ぎたぐらいの年齢だった。これでは「500年も生きた」やら「歳をとらなかつた」やら、云われるのも無理はない。話が伝わっていくうち、ねじ曲げが起こったのだろう。

王族という極めて高い身分をもつタントルアスが、限られた肖像画しか残さなかつた。その奇妙に興味を抱いた過去の誰かが、「彼は不死身だったのかもしれない」と説く。不死身伝説のできあがりだ。

「いいものを拾ったな、ワルターは」

「陛下のご推察が正しいなら、あの娘おそらく...」

「ああ」

――メルトロ王国第十三王女・サディアナ。

生まれてより英雄似のその容姿に称賛を受け、庶子でありながら“十三”の号まで与えられた王女。のちの消息は一切掴むことができないが、これは逆に喜ばしい。

利用できる。確信を持って呟いて、ウズはバスクス帝を見やった。

「居るか居ないか判らぬ竜を求めるより、よほど建設的な話ですね」

ようは人心の掌握が成されれば、それだけでよい。竜がもたらす効果もそれと同じこと。名前が「竜」であるか「タントルアスの生き写し」であるかの違いだけだ。

「本物だろうが偽物だろうが“タントルアスの血を身の内に流す娘”に、民は心を傾ける。大陸を統一した王の名を、イクパルの民とて忘れてはいまい」

人民の心をよく掴んだ「善良な王」だったのだと、伝説は語る。嘘か真か、そういったものはさして問題ではない。

「私が動くに越したことはないが、それもできん」

サディアナ王女という確信はまだない。証明もないのだから、利用価値すら半減するわけだ。

「...では、私が確かめに」

名前を操るだけならば、そこらの北生まれの娘を拾ってくればよいこと。あの娘が「使う」に相応しい、タントルアスとの類似をもっと多く持っているなら...

「それにしても、よくお気づきになったものです」

ウズは自分の宮に、どこぞの娘が運び込まれたことすら掌握できていなかったというのに。おそらくはどこかでちらと見かけて、娘の血筋を一見にして見抜いたのに違いない。タントルアス

の顔をよく見知り、あまり話題に上らぬ隣国の情勢と王女の存在を熟知していなければ、これは到底不可能な話だ。

「各国の王家代々は、たいてい血筋を辿るのに容易い顔をしてる。あれは随分古い顔立ちをしているから、お前にもわからなかっただろうがな。使えろと判断したら、あとは任せる。ジャーリヤに上げるも、お前の側につけて様子を見るも」

「御意に。...四公の方はどう致しますか」

「来たのだったか。竜狩りに感づいて諜報を寄越したぐらいだ、“何か狩った”と思せるのは容易い」

「...では、本当に竜を狩ったと匂わせましょうか」

真実などどうせ直ぐに知れる。「竜」は最も証明の難しい獣だ。そこら辺の蛇やらとかげやらを捕まえてきて、竜だと放ったところで、いったい誰が信じようか。目前にその姿を晒してやらぬ限り、四公とて容易く信じはしないはず。ならばそのかわり、精一杯慌てさせてやったほうがいい。

「テナン公に目をつけろ、あれはおそらく息子に行く。ワルターにも通しておけ」

「そろそろでしょうか」

バスクス二世帝陛下は、自嘲めいた笑みを口端に浮かべて鼻で笑った。

それから二日、ウズはアンジャハティを伴いトスカルナ宮へと向かう。ウズはすでに充分見知っていた少女を寝台の上に見止めて、無表情に言った。

「ウズ・トスカルナです」

「――ウズ...さん」

アンジャハティが異母兄弟であることを隣で告げる。僅かに目を瞠って、娘はぽかんと口を開けた。

「あの、わたしは」

「フェイリット、と言いましたか」

その小さな顎を掴み上げ、ウズは検分するように娘を眺める。

ゆるやかに巻かれた銀に近い金髪と、水色の瞳、象牙の肌。たしかに今時、見かけぬ色の薄さだ。誕生の折、これらの「先祖還り」に感嘆して、タントルアスの幼名までその正式名の中に入れたと聞いたが、きっと当時は思いもよらなかっただろう。まさかその顔立ちにすら、王女がかの英雄の面影を映すことになろうとは。

随分と不躰に接してやったつもりなのに、娘は怯えるどころか怪訝にこちらを見返している。

王女というのが本当なら、さぞかし気の弱い、言いなりの教育を受けた娘なのだろうと思っていたのだが。

「...なにか」

視線に屈したのだろう。伸ばされた喉元から嘎れた声をひねりだして、娘は顔をしかめた。

「生まれは」

何と答えるのだろうか。幽閉されているはずのメルトローの王女。なぜ国外に出て村娘に身をやりし生活していたのかは知れないが、どちらにせよ何を答えるにも矛盾が生じる。

「リ、リマ」

「メルトローではなく？」

「はい」

やはり。ウズは片眉を吊り上げて、可笑しいですね、と言った。

「フェイリットという名は確か、メルトロー王国第十三王女殿下がご生誕為された折につけられた、仮名ではありませんか？ なぜリマ生まれの貴方が敵国の王女の名など」

「それは...」

途端に娘の表情が固まる。だがさして考える間も持たずに返答が返ってきた。

「父がメルトローの出身でした。ちょうど王女のご生誕と時期が重なったので、祖国を懐かしんで付けたと聞いています」

「確かに、よくある名ではありますね」

もともと用意していた答えなのか、咄嗟の機微で思いついたのか。どちらにせよ、この小振りな頭は空ではないらしい。ならば、

『リマの血が混じっていると断言していましたが...その完璧なメルトロー色の容姿で？』

メルトロー宮廷の、教養にしか使われなくなった古語。ウズは完璧にそれを発音してみせ、娘の顔が隠しようもないほどに気色ばむのを確信を持って眺めた。

――決まりだ。メルトロー王国、第十三王女。胸中に広がる満足感に、思わず笑みを浮かべてしまう。

「...いいでしょう、本当に何も知らぬ村娘のようです」

ウズは言うままに立ち上がって、その切れた眼差しを横に居たアンジャハティへと向ける。

「お前さっき、何て言ったんだ？」

胡乱そうな眼差しで、視線を受けたアンジャハティが問うてくるが、彼女には無論関係の無いこと。

「アンジャハティ」

問いには答えず、その冷たい声のままウズは繋げた。

「この娘を貰います」

この扉の向こうが――皇帝の愛妾たちが住まうハレム。

黒くて厚い小さな扉。太股まであるだろうかというその扉を見下ろして、フェイリットは表情を堅くする。皇帝宮の三分の一にも及ぶ広大な宮殿には、入り口が三つしかなかった。

まずは女たちが入宮するとき、初めてくぐる正面の大きな門。愛妾たちはあくまで皇帝の「妃」であるので、いかに身分が高かろうと低かろうと――それがたとえ奴隷であっても――この門をくぐれば皆等しく「ジャーリヤ」となる。唯一許される親戚筋との面会も、その正面の門からしばらく入ったところで行われていた。

二つ目はもちろん、皇帝陛下の寝室へ通じる扉。普段は堅く閉ざされて、陛下の許しがなければハレム側からは開けることができない。「伽の扉」と呼ばれているらしいが、まさに言葉通りだ。

――そしてフェイリットが目前に立つ、三つ目の入り口。北向きに据えられたそこは、宮殿の中に於いてどこか物寂しく、見渡しても庭園の切れ端すら目に入れることができない。

「死の扉...」

呟いて、薄ら寒さに震えてしまった。

ハレムに入ったら最後、死ぬまで出ることは許されない。三つ目の扉は、この宮殿を去ることができる唯一の「出口」なのだった。

「生きた人がここから“入る”のは、きっと初めてでしょうね」

面白そうに呟くのは同じ小姓である少年、トリノだ。

「なんか気持ち的に、あまりいい気分じゃないんですけど」

フェイリットは眉根を寄せて、何重もの扉の鍵がトリノの手によってひとつずつ外されていくのを見ていた。

ハレムに入宮するわけではないと、ウズに言われて疑問を持つべきだった。まさか死体を運び出すための扉からこっそり入って、またこっそり抜け出てこなければならぬとは。

「でもウズ様も僕も、ここから出たんですよ」

がちり、一番最後の錠前が外されて、重い音をたてて扉が開く。

そうだった、トリノも――。フェイリットは複雑な思いで自分の隣にいる少年を見やる。宦官――高貴な者の側に仕えるため、人為的に不能とされた従者たち。薬をウズから貰い、着替えたところに実はトリノもそうなのだと言われ、受けた衝撃は小さくはなかった。しかもトリノは何もわからぬ幼い頃に「それ」が為されたため、まったく自分の意志はなかったという。自分といくらも歳の変わらぬ少年が――...そう考えただけで腹立たしい。

「ウズ様が宰相になられてから、新たな宦官の当用はなされていません。きっとこのまま消えていくでしょう」

トリノは笑ってこちらを向いた。哀れんでいると、そう思われたらだろうか――傷つけてしまった...。フェイリットは申し訳ない気持ちで、トリノの瞳をじっと見つめる。

「僕も一緒に行きます。不安に思うことは何もない」

フェイリットの思考の機微は、とっくに察しているはず。なのに人を案じれる彼の言葉に、頭が下がる思いだった。

「ありがとう」

ぽっかりと口の開いた小さな扉の前にひざをつき、フェイリットは笑顔を返した。

ハレムの中のハمامは、散り散りに六つもあるものらしい。殆ど個人用の小さな浴場から、女たち全員を入れられるほど大きい大浴場まで。そのすべてが鮎壺型の末広がり、一番奥のドーム型の浴場まで五つの部屋に分けられていた。

一番最初の部屋で服を脱ぎ、次の部屋は休憩場。長方形に広がっていて、奥から流れる空気ではんわりと暖かく、長椅子とふかふかの枕が並べられていた。うつぶせに休む裸の女たちを横目にちらと見て、フェイリットはため息せずにはられない。皆が皆、とても女然とした豊かな身体をしていた。こうして比べても、やはり自分には女らしさというのがない。長年の剣技の稽古のせいで、丸みよりも筋肉が目立つ。もしかしたらウズは、この乏しい身体を考えた上で「ハレムでの出世は望まぬだろう」と言ったのかもしれない。

「次の部屋は蒸し風呂です。毛穴が開くまで絨毯の上で寝ていてください」

「えっ、トリノは？」

「僕はここまでです。垢すりを言いつけてあった侍女が待っていると思うので...」

腰だけに布を巻くトリノに比べて、フェイリットはもちろん素っ裸だ。こちらを見やったりトリノの鼻面に手を当てて、「ちょ、直視はやめてください」と呟く。

「僕を男だって思わなければいいですよ、ほら、他のジャーリヤたちだって目もくれないでしょう」

宦官はハمامまでの立ち入りを滅多にしないが、したところで誰も何も言わない。苦笑して、それでも前を向きながらトリノは言った。

「それは...ごめんなさい...」

うな垂れて言うと、トリノは声をたてて笑った。

「じゃあ、さっきの休憩場で待ってますから。いっぱい汗かいてきてくださいね」

最初の部屋の方角にトリノの背中が消えていき、フェイリットは蒸し風呂の中でひとりぼんやりと立ち尽くす。

あちらこちらで、敷かれた絨毯の上に女たちがうつぶせに寝転がっている。三番目の部屋であるからか、今までよりここは随分と暑く、蒸気で視界も白い。ゆっくり寝て汗をかけと言われたが、すでにふつつつと額に滴が浮いてきた。

絨毯へと移動するためにきょろきょろと見渡していると、ひとりのジャーリヤと目が合った。

——うわ、美人。

蜂蜜色の肌に、麦穂のように暖かい色の金髪が、きれいな輪郭を囲んで腰元まで落ちている。琥珀色の瞳も形の良い木の実型で、目が合うだけでこちらの動きを止めてしまう程の強い意志

が宿っている。

慌てて目を逸らし、陣取りをどうしようか迷っていると、

「タブラ・ラサ？」

いつの間にか先程のジャーリヤが目前に立っていた。タブラ・ラサ……なんだかどこかで聞いたことがある。フェイリットはしばらく考えるものの、ウズが自らを呼んでそう言ったなどとは思わない。

「違うのなら別の名前を名乗ったらどう？」

人違いでは、そう答える前にジャーリヤが繋げた。

「名前？」

「そう、ここにいる女たちは、皆おまえより目上なのよ」

言われて、周囲を見渡す。その場に居合わせた十人ほどの女たちが、皆一同にこちらを睨みつけている。驚きつつも、フェイリットは慌てて頭を下げた。

「...申しわけありません」

名前、名前...こんなところで本名を言うのはもっての外。フェイリットはやはり、一番使い慣れた名前を名乗った。

「フェイリットです」

目前のジャーリヤを見上げそう返すと、何がいけなかったのか、あからさまに顔を歪められてしまった。

逃げるようにもう一度ジャーリヤの前で礼をして、部屋の奥まで小走りに走った。周りに人が居ない絨毯を選んで、やれやれと寝そべる。

フェイリットは他のジャーリヤたちを見ないように――また目が合うと厄介なので――ひたすら汗をかくことに必死になった。

そうして四番目の浴場に入るところには、フェイリットは蒸気と暑さにふらふらだった。

トリノには侍女が待っているとされたものの、誰なのかわかるはずもない。見渡す限りたくさんの女たちが、皆一様に身体を洗ったり香油を塗ったりする姿が広がる。

どうすれば良いのかときよろきよろしていると、隅で一人の女が手招いている。侍女の元へとぼとぼと歩いて行って、フェイリットは息をつく。

「あなたは...」

見たことのある顔だった。ウズの小姓になったその日、トスカルナの宮から皇帝宮の手前まで、自分を案内した侍女だ。

歳のころは二十の前半だろう。焼き菓子の色の濃い肌と、鳶色の瞳。彼女も愛妾のひとりかと思っていたが、ここで会うということは、やはりそうなのだ。

少しだけ目線の高い彼女は頷くと、厚くて魅力的な唇を笑みの形にした。

「覚えていて下さって嬉しいですわ。言い付かっておりましたタラシャです。お身体を擦りますので、こちらの椅子に」

「...あの、ありがとうございます。ジャーリヤたち、こんなのを毎日やってるんですか」

頑張ったつもりだったが、時間にしてはさほども経っていないはずだ。自分より随分と先に居

たであろうに、平然としていたジャーリヤたちを思い出す。

一瞬驚いたような顔をして、タラシャは笑った。

「彼女たちも必死ですから。でも慣れるといいものですわ。……すごい汗ですね、喉乾きませんか」

もっと短い時間でも良ろしかったのに、そう言いながら彼女は持っていた水差しから水を酌みフェイリットに飲ませる。喉を落した水は、檸檬の香がほんのりと香った。

「…はあ、わたしどうしてここに居るのでしょうか」

傍から聞けば大丈夫かと案ぜられるような呟きであったが、フェイリットにとっては切実だ。椅子に座ってタラシャに垢を擦られながら、考えはそちらに傾く。何せいきなりギョズデ・ジャーリヤだなどと言われ、ハمامで身体を磨かれているのだから。

「この奥に身体を浸ける湯槽があるんですけど、今日は香油をぬって終わりにいたしましょう」

ここに来るまでふらふらになったフェイリットだが、肌がすべすべになるという香油はさすがに癖になりそうだった。垢擦り場から移って長椅子に寝そべり、背中から四肢へ香油を塗り込んでもらう。――全身の凝りが和らげられて、心地よい眠気が襲ってくるのだ。誘われる眠気にまかせて、そのまま眠ってしまうほどに。

「そうでした、言伝てを預かっておりました」

「……ことづて？」

眠気に回らぬ頭で、フェイリットは顔を上げる。

「はい。バツソスへ行く前に色々と準備がございますので、このままハレムにお留まりいただきます」

「…え！ 私、やっぱりハレムに入らなきゃならないのでしょうか！」

慌てて寝そべらせていた身体を起こし、背後のタラシャを振り返る。

「いいえ、ご安心なさって。バツソスまでの三日だけ――あら、」

背中から移り、腕に香油を塗りこんでいたタラシャが、声を上げる。

「なにか…」

「確かこちらの腕でしたわね、痛くありませんでした？」

強く擦りすぎてしまいましたわ、彼女はそう言いながら申しわけ無さそうに首を傾げた。

痛い…？ そう考えて、フェイリットはようやく気づく。

骨折していたはずの左腕が、痛みも無く動いていたことを。

「――うそ…」

身体を起こして、左腕を見下ろす。握ったり開いたり、回しても痛くない。…まさか…昼間の変化で？

そんなはずはない。と思うのだが、それしか原因を考えることができない。あの不完全な竜への変化が、負傷していた腕をくっつけてしまったと…。どうりで最初の時より痛みが強かったわけだ。湧き上がるような力と、それにも増す激痛。そして行かなければと――、

…どこへ？

「申しわけございません。包帯をお取りしてよろしかったのですか？ よければ持って参ります

けれど」

必死で「人の居ないところへ」と回廊を走ったが、本当に人の居ないところを目指すなら庭園を突っ切った反対側になる。そこなら例え変化を終えてしまっても、植えられた木々が身体を隠してくれたはずだ。

一体自分はどこへ向かって逃げていたというのか。皇帝宮を「表から」出たのでは、当然人にだって会う。それだけ冷静さを失っていたといえ、話はつくわけだが。

「フェイリット？」

「あの、ハレムに三日間“ずっと”居なくては駄目ですか？」

「どうかなさったのですか？」

「アン少尉に少し、腕を診てもらえないかと思って」



診療所の戸口に立った人物を見て、アンは微笑んだ。

「フェイリット！」

黒のアバヤですっぽりと足先まで覆われていたが、唯一覗く水色の瞳ですぐにわかった。軽く礼をしてこちらに来る彼女を迎えながら、一週間も経つのか...とアンは思う。彼女が街中でアバヤを着るようになるなど、なんだか時間の経過を感じてしまう。たしか最後に会ったのは、ウズが彼女を欲しいと言った日だったか。

「お久しぶりです」

久し振りに見るフェイリットの瞳が、笑みの形に細くなる。

「久しぶり。どうしたんだ、こんな夜に。腕の痛みが辛くなったか？」

しばらくは診察もできないだろうと、発熱や菌を抑える薬と、湯に溶かして飲む痛み止めの薬を預けていた。見たところ顔色も良いし、痛みを訴えるような素振りも見られない。

「それが...」

僅かに躊躇って、フェイリットはアバヤの切れ目から巾で吊った腕をすっと差し出す。

「痛くないんです。動かしても、普通だし」

「え？」

とりあえず、診察用の丈の低い寝台の縁に座らせて、彼女の左腕を診る。

「なんだ...？ これは」

腕に触れながら、アンは驚きの表情を浮かべた。

複雑に折れていたはずの骨が、治癒している。それも、完全に。

設備の整わぬこの現状で、骨折の完治はそもそもありえない。少しだけ曲がって癒着するとか、患部だけ異様に太くなってしまうとか...そうなるのが普通だった。なのにこれは――フェイリットの腕は、骨折前とまったく同じ腕の形を保持したまま、治癒していたのだ。

「治った...んですか？」

骨折から一週間と少し、並の人間ならありえない。まさかこんなことがあるのだろうか。

「曲げたり伸ばしたりできるか？」

フェイリットの手首を掴み支えながら、ゆっくりと曲げ伸ばしをさせる。

「痛くはなさそうだな...痛み止めは？」

「ここ最近は何も飲んでないです」

これは本当に...。そう思いながら、もう一度上腕から関節、前腕まで骨のつながりを触れて確認する。――だがやはり、どこも折れてはいない。これはもう、首を傾げるしかなかった。

「珍しい子もいるものだね...傷の治癒がこんなに早いなんて。いつもそうなのか？」

腕を吊っていた巾を取り外して、軽く揉んでやる。質問の返事が無いことに気づいてフェイリットをふと見やると、なにやらぼんやりとどこかを見つめている。

心ここにあらずといった風のその様子を見つめて、やはりアンは首を傾げるしかできない。

「フェイリット」

「は、...あ、はい」

「どうしたんだ」

「な、治ったんですよね？」

「ああ、驚いたけど、完全にくっついてるね」

ありがとうございました。そう言って、フェイリットはいそいそと立ち上がる。何を隠しているのか――だがこの場合、何かを隠していたとしても、それがいったい何であるのかなんて検討もつかない。

「痛みが無くなったのはいつから？」

「昨日の...昼ごろです、たぶん...」

無意識なのだろう。もう痛くはないはずの左腕をわずかにさすりながら、フェイリットは言いづらそうに答えた。

「待って。もう遅いから、ウズの所まで送らせる。テギ！」

奥の小部屋で診療記録をつけているはずの小姓の名を呼ぶ。

「はい」

返事はすぐに返ってきて、それからしばらくしてテギが仕切り布を潜って出てくる。

ガタン！

「わっ、」

突如鳴った音と、驚いたようなフェイリットの声。背後で上がったそれらの音に何事かと振り返ると、寝台脇の椅子をひっくり返して慌てて戻している彼女の姿を見止める。

先程から、なんだか様子がおかしい。

「だっ大丈夫です、一人で帰れます」

より一層心配させるようなことをしておきながら、フェイリットはアバヤを深々と被り直して告げた。その瞳まで伏せられて、臉の向こうに隠れてしまう。

「あれ？」

テギがフェイリットを見やってふと首を傾げた。

「君は...」

「ア、アン、ありがとう！」

今度は何だと聞く前に、戸口に居たフェイリットがまるで逃げでもするかのように慌てて礼を残し、診療所から出て行ってしまった。

「...どうしたってんだ」

後ろ背を見送りながらつぶやいていると、隣にテギが歩み寄って来る。

「あの子...女の子ですか？」

「当たり前だろ。アバヤを着てるぐらいだ」

イクパルの城下の女たちは、アバヤという名のヴェールで身を隠す。一方の男たちは、カントーラという簡素な白布を纏う。半ば民草の慣習となりつつあるこれは、ずいぶん前の皇帝の治世から始まったものだ。女は家で絨毯を織り、男は外で遊牧に勤しむ。そんな長年の風習が、「女は人前に姿をさらさぬもの」という認識を強め、結果あのような衣装ができあがったのだった。

男がアバヤを着たり、女がカントーラを着たり、そういった逆のことはまずしない。とはいっても軍服はカントーラに近いものなので、それを常用しているアンにとって声高に言えることでもないのだが…。

「なんか、似てます」

「似てる？」

「この前話した小姓ですよ」

ふわふわと揺れる、彼女が出ていったあとの仕切り幕を見つめてテギが訝しむ。

「ああ、新しく入ったっていう。誰付きかぐらいわかるだろう？」

彼らが一番最初に気にするだろう、「主人」の名。新入りなら尚のこと誰かが聞いていておかしくはない。

「それが…未だに誰も話しかけられないんですよ、早食いで」

「なんだそれは」

話しかける隙もないほどの早食いだなどと。思わずアンは苦笑する。

「最初は驚きました。あんな綺麗な顔しておいて、まるで犬か狼かっていう」

「じゃあ尚更あの子じゃない」

アンは何度か夕食を供にしたことを思い出しながら、首を振る。

村出の娘にしては、きちんと整えられた作法だった。イクパルの作法は食べ物を指で掴んで食べるのだが、それにもちゃんと美しい作法というのがある。城下の民や村での食事法も、おそらくは指か杓のようなものだろうが、アンやエセルザのような宮廷の作法は誰かに教わりでもしないかぎり身につくことはない。

「誰かに…？」

ふとした疑問を口に乘せると、テギが脇で首を傾げた。

「取り敢えず追い掛けてもいいでしょうか？」

「ん？ ああ、」

やっぱり女の子ならこの夜道は危ないですよ、そう言いながらすでに戸口に立ってこちらを見るテギに頬を緩める。

この暗がりの中、アデプの迷路を正確に歩けるほどフェイリットも詳しくはないはずだ。それにここは軍轄の区域。どんな危険があるか、知れたものではない。

「頼んだよ、行っといで」

「はい」

仕切り幕をぱっと飛び出て、テギは軽い歩調で駆け去って行った。

その背中を見送りながら、アンははて、と考える。フェイリットは一体、ウズルダンのところで何をしていたのだったか。

「なんだありゃあ……」

息を切らして走りながら、テギは大きく顔をしかめた。

遙か前方を走る“アバヤを着た少女”——黒い小さな影はあっという間に親指ほどの大きになり、どんどん向こうへと離れていく。あの長くてぼてぼてしたものを着込んで、あそこまで早く走れるとは。さして間も置かず診療所を飛び出したというのに、もうどうにもならないほどの距離ができています。

このまま追うか、諦めて帰るべきか。走りつづけながらテギは考える。幸いの一本道も、じき蛇の道のように曲がりくねるだろう。地理ゆえの視界の悪さに加えて、宵の時刻にあの「黒」は余計見づらい。ここで足を止めたら、それこそ追いつける可能性など無くなってしまおう。

両わきに建つ黄土色の家壁は、すっかり日が暮れた紺碧の夜空に浮き立つように迫ってくる。

——追うか、諦めるか。

やはり、気になる。あの少女が本当にアンの言うただの「少女」であるのか、テギの推測どおりの「小姓」であるのか——今ここで突き止めねば、もう二度と知ることができない気もする。

目を凝らせば見えるほどの黒い小さな影を、意を決して追い走った。

右手に行けば、先回りして少女と鉢合わせられる道がいくつかある。背中を追い続けても隣に並び立てる可能性はかなり低い。テギは迷わずその道に折れ入って、“アバヤの少女”を目指した。

\* \* \* \* \*

迷路のような帝都アデプ。振り返れば、黄土色の城下の向こうに赤砂の宮殿が遙かに望める。文化の匠とはかけ離れた、けれど原始を思わせる壮大な美しさを湛えて。

だがこんな紺碧の夜空に、あの赤い城はどうにも気味が悪いものだ。

スリサファンは荒野へと続く帝都の切れ端で、静かに佇み夜空を見上げる。

下品だ、と言ったのはカランヌだったか。あの都会育ちが、この城を「美しい」と賞賛することは恐らく生涯をかけてないだろう。

かつてのタントルアスが、大陸を統治しゆく中で戦慄を覚えたというこの城。

「——たしかあの頃の皇帝の名も……」

ふと視界に映りこんだ影に気を取られて視線を下げると、見覚えのある青年の姿が。たった一人で、蛇の口のような帝都の入り口を抜け、こちらへ向けて歩いてくる。

「あ……の、根性無しが…」

怒りで震える声をどうにか抑え、スリサファンは大股で歩き出した。

案の定目の前に立ち、食えない笑顔で「すみません、失敗しました」と宣言するカランヌの

頬を、平手でぶって打ちのめす。

ばちん、と鈍い音のあとにくぐもったカラン又の声が吐き出された。力一杯叩いてやったのだから、砂上に無様な姿を転がすだろう。そう思ったのに、わずかによろめいただけで左の頬を支えながら腰を屈めて堪えている。

「痛いですよ...」

「二度までも！！」

たった一人で現れた――それは、またもサディアナ王女を連れ損ねたということ。一度目だって、すぐ手の届くところにいながら王女の逃避をぼんやりと眺めていたのだ。今回も同じような理由なのは間違いない。それなりの力を持っているだろうに、一体この男はなにを楽しんでいるのか。

「あんな力出されたんじゃ勝てないですよ」

「未熟だと仰っていたのがお懐かしゅうございますよ！」

皮肉を込めて言ってやると、左頬をさすりながらカラン又が息をついた。

除かれた手の向こう側に、赤く腫れ上がった頬が見える。あれで倒れなかったのは、もしかしたら賞賛ものかもしれない。

「はあ.....私に手を上げるなんて出来るのスリサだけなんですから、さっきの平手で許してくださいよ」

「呆れたものです、アロヴァイネンともあろうお方が！ 陛下へのご通達は貴方お一人でなさいませ。私は戻ってサディアナ殿下の元に」

「おや、貴女がお連れ下さるとは心強い」

カラン又は道化じみた仕草で、まるでメルトロウの紳士がするような礼を見せて優雅に目線を伏せる。それに一層はらわたを搔き混ぜられる思いで、スリサファンは大仰に首を降った。

「何を勘違いなさっているのです。私は断じて協力はせぬと申し上げたはず」

「じゃあ、なんだって言うんです」

「別に何も。ただ少し気になることができただけです」

「――恋じゃないことを祈りますよ」

「カラン又殿！」

我慢がならず振り上げた右手は、彼の頬に当たる前に宙に止まった。ぱっと掴まれた手を引かれて、端正な顔が目の前に迫る。濃い金色の髪が、額を流れて風に揺れた。滅多に見られぬ、真面目な表情.....半ば驚きつつも、スリサファンは右手に込めた力を解く。

「.....できるなら、王女にびったりくっついて監視していただけませんか」

「は...、何なのですかそれは」

「貴女が何を気にとめたのかは分りかねますが、これだけは言えることです」

掴んでいたスリサファンの右手を離し、カラン又は静かに息をついた。

「いるかもしれないですよ」

何が、という質問は、よもやスリサファンの口から出ることは無かった。引っ掛かった違和感が、こんな形で聞くことになろうとは.....。

「――この国に、サディアナの“想い人”が」

\* \* \* \* \*

あの透明な水色の瞳は、新入りの小姓と同じだった。

あんなに薄い色の瞳は、混色の進んだイクパルではもう見かけることがない。姿が見えだしたのは一週間より前。象牙の肌に、銀に近い金髪を持つ、明らかに北方の人間。

同じ北方色のせい、その淡とした出で立ちはどこかトスカルナ宰相を彷彿とさせるものがあった。宰相の銀の髪と灰の瞳、……イクパル人より遥かに薄い肌。いくら前宰相・トスカルナの血を引くと聞いても、生粋のイクパル人の息子があの白銀の容姿では、あまりにも説得力が無さ過ぎた。今でこそ宰相としての辣腕を振るっているが、就任したての二年前は決してそうではなかったのだ。あの“冷厳”というに相応しい美しさ。わずかに擦れて出されるその声でさえ、「色」を漂わせる。それは当時の宮廷で、ウズルダン・トスカルナが「皇帝に見初められた」のだと、思わないものはいなかったほど。

宰相を「冬」とするなら、あの小姓はまだ冷たさの残る「春」だろう。初めて姿を見せた時、どれだけの者が溜息をついたことか。……サプリズ大佐付きのトリノだけは平然としていたが、あれは宰相とも関わりがあるので目が慣れている。色の白さだけならトスカルナ宰相のようだったが、それともまた違う。ターバンの隙間からのぞく金色の巻き毛が、その淡とした冷たさを打ち消すのだ。どこか柔らかい印象を与える形のいい瞳の、かつて目にした事のない透明な色合いを、皆いつしかじっと眺めていた。

名前は、主人は、――テギたちは様々の質問を用意して、彼を待ち受けていたのだが、「……あれじゃあな、」

せっかくの容姿も、食事の仕方で台無しになった。小姓たちが集まり食事を摂る厨房の一角で、賄いとして出されるパンとスープ。それを、啞然とするほどのがっつきで平らげお代わりまでして、あっという間に消えていくのだ。休憩ならたっぷり半刻は与えられているだろうに、いったい毎回何をそんなに急いでいるのか、さっぱり分らない。聞こうにも、話しかけるのを思わず躊躇ってしまうほどの勢いなのだ。さすがに一週間もたてば慣れるものの、代わりに面白がって見物する者や、時間を計る者が出だす始末。もうすでに皆、話しかけようとしていたことすら忘れていた。

「っ！ 見つけた！」

やはり脇道を選んで正解だった。狭い道をひょいと抜けると、こちらに走り来る“アバヤの少女”の目前に出た。

「何ですか？」

進行を遮り立つテギに驚き、“少女”は足を止める。

「なになって……」

あんなに走っていたのに、息一つ切らせてはいない。だが身長も、今耳にした声色も、そして印象的な瞳も――すべてがあの小姓と似通っていた。

「君、厨房に来る小姓だろ」

「……へ？」

はっきりと言ってやったつもりだったのに、水色の瞳は怪訝そうにわずかに細められただけ。

テギは眉根を寄せて、少女のほうへと近づいていく。

「犬みたいに食べたり妙に作法がよかったり、誰の小姓なのかも明かさない。おまけに男か女かもわからない…君はいったいなんなんだ？」

じりじりと近づくと、少女が同じ分だけ離れていく。横目で必死に逃げ道を探っているように見えるが、無駄だ。

「言っておくけどその先は行き止まりだ」

ぐねぐねと走るアデプの迷路は、門を潜って城の囲いに入っても同じ。こんなに面倒な造りなのは、敵の突入をぎりぎりまで伸ばし、また間者の進入を阻むため。とは跡付けで、本当の理由は遙か昔に遊牧の民が集まり建国されて、次第に大きくなったから……という何とも偶発的なもの。意図無く拡張され続けたアデプは、人を「迷わぬように」造られてはいない。どんなに感覚に長けた人物でも此処に住むなら最低で一、二年経たないと路を覚えるなど不可能。

「行き止まり？」

声変わりも終えていない、透き通った声が返される。テギは頷いて、視線の先を“小姓”の向こうへと移した。

「この先は練兵場に続いている。馬の嘶きが聴こえる？ たぶんまだ、兵士達がやり合ってるだろうな」

ふっと、少女の目の色が変わったように見えた。今し方無駄だと言ったはずの方角に、いきなりまた走り出す。

「ちょっ…！ まって！」

小姓の特質はたいてい二つに分かれる。宮殿の中で文官の偉人について雑用をこなす者と、武人についてゆくゆくは軍属へと育てられる者。テギは軍人よりだが、どちらかという文官に近い。ともすればあの小姓は軍人づき――なのだろうか。見かけにはそぐわないが、「小姓」などというものは皆そういうものだ。こじ付けでしかなかったが、ならばあの身体能力にも頷ける。

細い路地はだんだんと広がって、ぱっと突然広くなった。方々に兵舎や軍轄の建物が散らばっていて、その最奥に造られた丘に練兵場が位置している。ここからでも目にできる土埃が、宵闇の空に黄色く舞う。

「待って、危ないってば！ 練兵場は小姓が入っちゃ…！」

ぱたりと、黒い影が足を止める。ようやくその背中に追いついて“小姓”の視線の先を辿ると、

「エトワルト中隊長…？」

今し方の帰りなのだろうか、軍服を着た中隊長が驚いたように二人を見ている。アンの繋がりから何度か見たことがあるが、こうして面と立ち会ったことは未だ無かった。濃茶の髪色に、一

瞬黒く見える深い茶色の瞳。切れ長の目なのに、何故だかきつさを与えない、優しげな顔立ち。

「コンツェ！」

アバヤの“小姓”は小さくそう叫ぶと、なんと中隊長の元へ飛びついてしまったではないか。

「お前はアンのところの？」

ほとんど飛びかかったに等しい小姓を、すんなりと受け止め後ろ背に隠して、中隊長は驚いたようにこちらを見やる。

「...はい、その子を送るように言われて」

視線だけでアバヤの裾を追いかけて、テギは頷いた。

「そうか、ありがとう。戻って俺が引き受けたって、アン少尉に伝えてくれないか？」

「承知しました」

テナンの王子で、帝国近衛軍の中隊長。変な職差だったが、こうしてみるとそれも頷けた。王族にはけっして見られることのない親しみのこもる微笑みが、脳裏に焼きつく。

「お前も気をつけて帰れよ」

敬礼するテギを残して、彼らは兵舎の方へと消えていった。

.....結局今日も、わからずじまいか。

あんなに息を切らせて追いかけてつづけた自分に疑問を残しながら、まあ明日確かめればいいのか、テギはそう一人ごちる。

どうせまた、昼あたりに顔を見せるのだから。



「シマニ公爵が俺にか？」

驚きに発せられた声は、しんと静まり返った室内に、ごんと低く響き渡った。

ワルターは項の辺りに節くれ立つ大きな手をやりながら、参ったな、と続ける。

「お前のことだ。おおよその検討はついてるのだろうよ」

「……ええ」

目前に胡座をかいて座る青年——ウズが、わずかにその灰色の瞳を細めて頷く。

「公<sup>おおやけ</sup>に受けた通達では、婚期を迎えた息子に婚約の話をと」

「俺もそう聞いたのは確かだ」

だが、そうではないことは目に見えてわかっている。

皇帝を中心に対立していた四公が、やっとひとつに纏まったのだ。それは、あの“役に立たぬ”皇帝が、よりにもよって竜狩りに赴き「狩った」から。もちろん「竜を狩った」というのも、実際に「狩りを行った」のも、見せかけでしかない。

だが元老たちの迷信への固執ぶりは院を凍結する前から凄まじいものだった。触れを流して頭から否定するほど、彼らの頭は堅くできてはいない。口を揃えて「狩れ」とは言えど、事実皇帝に狩られては困る。それが誰も口にせぬ本音であった。前帝に続くバスクス二世は、どうあっても愚鈍でなければならぬから。

竜は英知の生き物。かれが選ぶ王ならば、賢帝と呼んでおかしくは無い。四公たち含む元老の、たったひとつの恐れ——それは愚帝と信じて疑わなかった、バスクス二世よりの報復。

ワルターは重い息を吐き出して、目前に座るウズから目線を降ろす。

「五年のあいだに、すっかり変わってしまわれたからな。……例えあのままでも、生きては出て来られなかっただろうが」

元老の誰もが、喉から手の出るほど欲しがった帝位。その篡奪劇で、まだ歳若い一人の皇子は生きながらに殺された。真実を知る者が、いったいこの国に何人いようものか。

「感謝しています。あの牢獄でお亡くなりになられたのでは、今の私は在りませんでしたからね」

「妹の胎の子まで殺してか」

「——ともども死なせておけば良かったとは、申されますまい」

ふ、とわずかな間があいて、ウズは静かに言葉を返す。

「…だが、」

あれが一番よかったのだと、どうして頷くことができるだろうか。

すべてが巧くいき、このまま誰もが幸せに……そんな儚い夢を望んでいたあの頃が、未だこの胸に疼いている。

「昔話は止めに致しましょう」

ウズの仮面のような白頬に、ほんの一瞬、暗い影が差し込む。

「そうだな」

けて表情を変えることの無いこの男が、人前で一度だけ歯を食いしばり泣いたのを、ワルターは誰よりも近くで知っていた。

思えばきりが無い。もう誰もが皆「終わったことだ」と思っている以上、過去は過去でしかなくなってしまったのだ。失った者達がこんなにも前を見つめ生きているのに、失うものの無かった自分は過去に固執しいつまでも拘っている。

「……シマニ公爵に機会をお与え頂きたいのです」

「機会だと」

ウズの呟いたその一言が、さらに胸深く入り込む。

「俺は元から断る腹づもりだった。何のために八年前コンツェを引っこ抜いたと思ってる。こんな時よりにむざむざテナン王をあいつに会わせたら、」

「王太子に。そう公爵は仰るでしょう」

「それだけじゃないぞ」

——お前のその正統な血筋で、皇帝の座を奪い取れ。

テナン王は必ず、そう仕向ける。でなくば、あの利益しか目先に置かぬ公爵が自分の子でもない「公子」を、二十年も見過ごすはずがなかった。

「あの者もすでに子供ではない。我々が襟首を掴んで引き戻してやるのは、もう終いなのです」

「……ディアスカ」

灰色の瞳が、答えるように細められる。

掴んでいた襟首を離してしまったら、いったいコンツェはどちらの方角へ進むのだろう。テナンを捨て己の平穩を護るか、テナンを護る為に己の命を投げ打つか——強られる選択は、おそらく二つに一つしかない。

「…酷なことをなさる」

帝国の玉座は、血で守られている。

遊牧の民をひとつに纏め上げた始祖タル・ヒル、その息子アル・ケルバ、孫にあたるジャイ・ハーター——この三代の皇帝の血を、ひとつも漏らさず継いでおり、尚且つ先代に続く皇帝の子であること。それが皇統の継承への条件だった。

「あいつにそんなのは向いてない」

「向いている、向いていないではありません。御輿は、担ぎ手が多ければ持ち上がるものです」

皇統を継ぐのに、庶子や嫡子という観念はこの国にはなかった。古くからハレムに妾妃たちを囲ってきた中、正式な伴侶であるサグエ・ジャーリヤを置かぬ皇帝も数多く存在したからだ。

——先帝アエドゲヌの、血を持つ子がもうひとり。

玉座を狙いつづける四公たちが、担ぎ上げる御輿があるとしたなら、

……彼しかいない。

「…引き返すなら今だぞ。すべてが穩便に、進む手立てがお前ならいくらでも考えつくだろう」

「我々が今この国を支えていられるのは、本当にぎりぎりの線でのこと。貴方もお分かりのはずです、ワルダヤ殿、腹を据えて頂かねばなりません。もう穩便に進めるには、この国は腐りすぎている」

ワルターは大きな溜息のあと、胡座をかいた膝の上に拳を落とした。

「なにを考えている？」

自分とて軍人、平和より血を好む気質のほうが勝っている。だが、その血がごく間近に流れるかもしれぬとなれば、喜び勇んでもいられない。

成熟のあとには崩壊があるのみ。まさかディアスが、この国と心中しようなどとは思えないが...

「.....バツソスだけは引き剥がしてくれるだろうな。あの国の軍はさすがに痛いぞ」

「ええ、その辺りはお任せ願います。貴方が連れ帰った娘、使わせて頂くことに致しましたので」

「.....フェイリットをか？」

見せかけの偵察で、山中偶然見つける事になった瀕死の少女。アンの元ならと安心して任せてやったのが、間違いであった。彼女の身边にこの男が目を光らせぬはずがない。

「あの娘、存外大きな嵐になるやもしれません」

「ただの村娘だぞ、なんの価値すらない。だからこそコンツェの側室にでもと、連れ帰って来たんだ」

山で見つけた瀕死の少女。なぜあんな高山の山麓で、虫の息のまま倒れていたのか、本人が語る事はついぞなかった。だが、それでいいと思ったのだ。彼女を見つけたのは間違いなくコンツェ。男だてらに恥ずかしいものだが、もし天命というものが降りたとしたなら、それは他でもないコンツェの元であったはずだ。

思考の狭間にふらついていると、目のウズが唐突に立ち上がる。微かに鳴った衣擦れの音ではたと気づき、ワルターは視線だけを上に向けることになった。

「シマニ公爵は、恐らく明後日にはご到着なさるでしょう。トリノを隠して、会話の内容を盗ませて頂きたい」

「わかった」

渋るように、声を捻りだしてそう答えた。

「どうにもできん...か」

彼の群青の衣装が仕切り幕を潜り出でゆくのを眺めながら、ワルターはひとり呟く。誰もいなくなった自宮の応接間は、ウズが訪れる以前よりいっそう静かに感じられた。

皇帝宮を歩きながら、トリノは静まり返る回廊の空気を苦い思いで感じていた。

宰相の執務室が属する北区——俗に言う執務区が、その静けさの中心だった。二年前の元老院凍結以来、事実上の独裁となった宰相は今、たった独りでその空間に君臨しているのだ。その風あたりも、この帝国をたったひとり表立ってその肩に背負う重圧も、想像だにできない。それでも直轄領と四公国のつながりを保っていられるのは、彼の力量の賜物だった。鎖国のつづいて久しい帝国領土に潤滑に貿易品を流し、文官である宰相には難しいと言われる軍の掌握でさえも、皇族の血の濃いワルダヤ・ハサリ・サプリズをはじめナレクガ・コスハイ・ジャーフル、ラジ・ハ・ヌフリムなどの要人を筆頭にこの二年、そつなくこなしてしまっただけだから。出自ゆえ未だ謂われのない下賤な噂も聞かぬではないが、少なくとも先に挙げた三人の大佐たちは周囲の思う「下賤」な事柄を餌に仕えたりはしないものたちばかり。それを知る四公国、そして直轄領の閣たちはみな、ウズルダン・トスカルナという男の冷酷で安定のとれた頭脳を十分に理解した。

宰相のみが使うことを許された執務室の、触れるとわずかに硬さを感じる仕切り幕のそばに膝をつき、トリノは静かな声を立てる。

「参りました」

それだけでわかるはずだった。わざわざ名前やら来訪の理由やらを長々と述べて入室の許可を請うのを、宰相は嫌う。礼に欠ける云々よりも、実を先んじるから、なのだそう。ワルター大佐にそうするよう命ぜられて、なぜ、と問うたときの返答がそれだった。

入りなさい、と、抑揚に欠けわずかに掠れた声が室内から返る。トリノは音をたてずに立ち上がって、仕切りの幕をすらと除けた。

「報告を聞きましょう」

執務用の卓に書簡の山を築き上げて、その向こうに埋もれるように座る宰相が見えた。

「エトワルト中隊長は、お断りになりました。王太子という公爵のお言葉に、あくまで自分は第五公子であるからと」

書簡から目を離すことのなかった宰相の灰の瞳が一瞬、卓の前に膝をつきかしまるトリノの、喉下ほどまで上げられる。

「ですがよく考えるようにと、公爵は決断を引き延ばしになりました。竜を狩ったと流した話が中隊長を通じて偽物だったと知れたようです」

「……そうですか、コンツエの口から」

一中隊長という立場にしかないコンツ・エトワルトには、あれが見せかけの狩りでしかなかったなど、知り得もしないことだ。彼の口から語られた「竜狩りの失敗」は、より信憑性を伴って各公爵に届くはず。公爵たちにとってはほっと胸を撫で下ろすのもつかの間、今度はなにがくるかわからないということに気づく。そうなればおそらく、更なる動きを考えはじめることだろう。皇帝を玉座から、引きずり下ろすための。

宰相も大佐も……陛下も、きっとそうお考えに違いなかった。

「大佐から、暫くは宰相閣下のお命じに優先的に従うよう言い遣いました。役立つことがおありならなんなりとお申し付けください」

トリノは額を床に向けて、静かに傾けた。

小姓は、あくまでその雇い主の持ち物。たとえ雇い主より格上の者からの命であっても、一度は主に伺いをたてる必要がある。宰相は一人の従者も持たぬため、入り用の際には大佐や実家の侍女などから人を回してもらっているのだが、その最たるのがトリノだった。基をただせば、ワルターより以前に遣えていた人物がウズルダンであるから、当然ともいえる。宰相としてハレムを退する折に、無理を言って一緒に連れ出してもらったのだった。本来ならばとても許されるものではないのだが、そんなトリノを欲しいと言ったのがワルターで、今に至る。別に出世を望んでハレムを出たわけではない。だから大佐に会い、骨格を一目見て軍人にといわれ、はいと頷いたのだった。

「お前にとある者を迎えに行つて貰います」

「……どなたを、」

名前がわからぬのでは、連れようがない。そう思つての質問だった。そんなトリノの疑問に、視線を向けていた書簡を脇へ除けて、宰相はいつもの平坦な声をつなげる。

「ギョズデ・ジャーリヤー——よいですか、トリノ。これから話すことをよく聞きなさい」

\* \* \* \* \*

「タラシャ」

皇帝宮と宮殿をつなぐ境目の回廊で、トリノは一人の女性の前に膝を折る。

「まあ、トリノではありませんか。お久しぶりね」

柔らかな声を頭上に聞いて後、衣擦れの音だけを残して立ち上がった。

「例のお方をお連れいたしましたよ。なかなか可愛らしいお方ですわね」

微笑んで、タラシャはちょうどこちら側からは死角にあたる、回廊の奥を見やった。あの向こうに、トリノの迎えるべき人物が待っている。宰相から伝え聞いた事柄を頭で反芻して、いったいどんな娘なのだろうと思う。

「タラシャ。ハレムに戻ったら誰でもいい、何人かの小姓に“ギョズデ・ジャーリヤが決まった”と、流して欲しいのです」

「噂を？ なるべく広がるようにすればよろしいのね」

「はい。名をタブラ・ラサと。それだけで十分です」

「わかりました、早くお出迎えなさったほうがいいですわ。あの回廊は人目にも付きやすいところですから」

タラシャは蔦色をした木実形の瞳を、笑みのかたちにやんわりと細めた。

「ありがとうございます」

礼をするために膝を折ると、ふわりと頭の上に柔らかいものが乗せられる。それがタラシャの手だと気づいて、トリノは頬を赤くした。

「しばらくみないうちに、大きくなったわ。がんばってるのね」

「姉さんも。元気そうで良かった」

視線を上げると、懐かしい笑顔が見える。除かれた手の行方をふと追いつつ、額をふたたび傾けて立ち上がった。

――息を切らせて回廊を進むと、ようやく目的の人物の前へとたどり着く。

タラシャの連れてきた娘。じっと見やったその先にいたのは、愛らしい、北方の容姿をもつ少女だった。

「トリノです、この先までご案内します」

そう告げて微笑むと、なぜだか不思議な表情を浮かべ少女が宙を見つめる。

「どうかしましたか」

首を傾げてそう聞くと、少女はふと気づいて我に返った。ぼんやりと見えた瞳の行方は、何やら考え事をしていたかららしい。トリノの方へ目を戻して、

「いいえ。あの、フェイリットです」

しどろもどろに微笑んだ。象牙の肌に、肩まであるくせ毛がかかった金髪。北方特有の容姿を、宰相以外の人物で見るのは初めてだ。美女というより、まだ“愛らしい”。早春の澄んだ空気を思わせる綺麗な容姿は、おそらくこれから五年もしたなら、誰しものが賞賛するところとなるのだろう。

――この少女がタントルアスの。

敵国の王女だと告げられても、実感がわからない。どこかけろりとした爽やかな印象のせいで、「王女らしい」というしなやかな言葉が似合わないのだった。

少女の湖水のような綺麗な瞳に見惚れながら、トリノは宮殿を案内すべくフェイリットの隣へと並び立つ。

「――行きましょうか」

それがこの国を宿命へと巻き込んでいく、少女との出逢いだった。

トリノが宰相の執務室の仕切り幕をめくると、部屋の隅に立って帳面を顔のすぐ前に、まるで睨みでもするかのように当てている少女が目にとびこむ。

「……なに、してるんですか」

その奇妙な光景に驚きの声を上げると、フェイリットはぱっと帳面から顔を上げて、恥ずかしそうに苦笑して見せた。

小姓としてウズのもとに暮らすこと三日。彼女はもう、雑用ならばトリノと変わらぬぐらいまでこなせた。ここまで仕事の覚えが早いとは、ウズでさえも予想し得なかったはずだ。二日と少し、過ぎたあたりにトリノが見た光景は、せっせと帳面を片付けるフェイリットと、それを仕事の手を止めたまま啞然として眺めるウズの姿だった。ただの帳面ではない、政務にかかわる難解なものを。それはイクパル語で書いてあるだけでなく、政治に関わる専門の用語も多く混じる。言葉を話せるのはともかく、あの蛇ののたうち回るようなイクパル文字を正確に読みとれるとは驚きだった。イクパルの城下に住む娘でさえ、ひよっとしたら読めぬものを。

帳面を整理し順番に並べながら、必要なものをウズの卓の上に重ねていくその手際は、およそ昨日今日雑務を覚えた、付け焼き刃がするものではもはやなかった。――ギョズデ・ジャーリヤにしたいのではなかったのだろうか。トリノが彼から伝え聞いたのは、ほんのさわりの部分だけ。まさか小姓にだなどと、そこまで知ってはいなかった。

迎えに行ったフェイリットに宰相がまずしたのは、その肩ほどまであった金の髪をざっくり切ることだったのだ。もともと年頃の娘には不釣り合いなほど短い髪だったが、それよりさらには、なんと酷いことを……トリノは思わず声を上げそうになったのだが、それも身なりを整えられた彼女が目の前に立つまでだった。

髪を短く切り、少年のような姿になったフェイリットは、いっそう似ていたのだ。

――かの英雄タントルアス、その人に。

宰相がいったい何をしたいのか、その片鱗を垣間見た気がして、トリノは動きかけた制止の手を止めた。

「地図です。ここの国のことをあまり知らないから、まずは地図からと思って探して見てたんですけど…」

と、唸るような声を喉奥に発して、フェイリットはさらに帳面を見つめ続ける。

考えごとに夢中だったトリノも、彼女の隣に移動して、その視線の先を見つめた。言葉通り、ただの地図。なにがそんなに興味をそそるものなのだろう。水色の瞳はしきりにちらちらと動いて、帳面の上を這っていた。

「楽しそうですね」

「ぜんぜん楽しくない、こういうのって大嫌いです。でも気になっちゃって……」

「気になる？」

「いったいこの国はどこから水を引いてるんですか」

「……水」

それが十六の乙女の、興味の矛先であることにトリノは肩を落としてしまった。水がどこから来るのかなど、よもや今時の子供でさえ考えぬものではないだろうか。気になるというのは、すなわち嫌いではないということだ。トリノはそう思ったが、あえて口には出さなかった。

「水は井戸を掘って引いています。水源に乏しいイクパルにも、いくらかは細い水脈が通っていたようで、昔からあるものがそのまま。城下には二十ほどでしょうか。皆毎日、朝に水瓶を持って水をくみにいきます」

「……この広い帝都に、たった二十なんですか」

ふと何を思いついたのか、帳面を床に置いて座り込み、フェイリットはそれを指でたどり始める。イクパルの描かれた大陸を縦に一本、二本、三本……と、その指の動きが十を数える頃になって、小さく息を吐き出しこちらを見やった。

「トリノ、カンガイ、って知ってますか」

「カンガイ？」

初めて聞く言葉に、思わず首をひねってしまう。地図を眺めて指でたどり、いったい何がわかるというのだろう。

隣に腰を下ろしたトリノを見やって、フェイリットは言葉を続けた。

「地図をみただけで大きな水脈が十本はありますよ。乏しいっていうより、むしろ豊富なんじゃない……」

そこまで呟いて、彼女ははたと気づいたように顔を上げた。しまった、というような表情を浮かべるのを見て、トリノはようやく背後の気配に気づく。

「ウズ様」

「閣下」

その仮面のような無表情を見上げて、二人は声を揃えて立ち上がった。

「——水脈がわかるのですか」

表情が変わることはなかったが、宰相はあきらかに驚いている。仕切り幕にかけていた手を解くと、フェイリットの持つ地図をさっと取り上げた。

「は、ええと…わかりません」

ずいぶん無理な否定だった。

額に手を当ててうなだれるトリノをちらと見やり、フェイリットは首を振る。これで宰相が納得するとは思えなかったのだが、意外にも彼女に静かな目を向け、そうですか、とだけ呟いた。

「雑務も覚えたようだ。今日から他の小姓と同じく厨房での食事を許します。一日二回、五分で戻ってきなさい」

「——ええ！」

頓狂な声を上げて、フェイリットは宰相の白い顔を見上げた。

「休憩って、半刻はいただけるんですよね、どうして…」

「暇を持て余しているのなら働けと言っているのです。五分で戻らなければ、次の日の時間は与えません」

冷ややかに言い切る宰相に、よもや口答えなどできるはずがない。フェイリットは渋々ながら



膝を折り礼をすると、急ぐように仕切り幕を潜っていった。

竜の背のごとき連なる山脈——アルマ。その標高は、人間が生活できるぎりぎりの高さ。頂上に近づくほど空気は湿り、一年中、殆ど解けることのない氷雪に覆われている。

「水脈……か」

ウズは呟いて、フェイリットの飛び出していく様を呆然と見つめているトリノの方へ、視線を下ろした。視線を感じてか、小さく肩を震わせたかと思うと、トリノは片膝を床に着く。

「お前には嘘は許さない。トリノ、この地図、あの娘はどう見ていたのです」

ターバンから覗くトリノの額が、ほんの僅かに引き攣る。目線を下げているから見えぬが、きっと眉でも顰めたのに違いない。

「トリノ」

「……はい。地図を広げていくらか指を辿らせたあと、“カンガイ”を知っているかと聞かれました」

やはり。渋った顔でそう吐き出すと、トリノの目線がついとこちらに向けられる。

「灌漑とは地下水脈に沿って穴を掘り、水を汲み出して農作物に渡らせる人工の河川のようなもの——覚えておくといい、トリノ。この国は水源に乏しいわけではない。水源を利用するための資金と技術が無いだけなのです」

アルマに降り積もった雪は永い年月をかけて地下へと染み出し、水脈となって流れる。地盤を考えるなら、緩やかな勾配で上るメルトロ—国土より、海に接し、かつ下り気味の勾配を持つイクパルの方が圧倒的に「低い」。高き処から低き処へ——それが水だ。だからこそあの娘は、地図から判別のつく高低差や地理から、水脈と思しき線を指で描くことができたのであろう。だが、これは滅多な者が持つ知識ではない。まして一国の、末子に近い王女などには到底施されぬものだ。イクパル内ですら、両手の指で数えられるかという人間しか知り得ない。

帝王学——ふと脳裏に上った言葉に、ウズは眉根を寄せて息を吐いた。

メルトロ—

敵国 の第十三王女が、生まれてより幽閉されているというのは諸外国にも広く知れている。だがその本人が、まさか山深くの村民に隠れて育ったとは誰も信じまい。王女らしい淑やかな教養などまるで無く、落ち着きも無い。だがその異常な知識だけが、あの娘の素性を曇らせている。

「お前も昼食を摂りなさい、トリノ」

拝礼ののち下がっていくトリノに一筋の視線もくれることなく、ウズは眉間に皺を刻んだ。

「——片時も側に置いて、三日で厭きると思っていたんだが。存外気にいったか？」

トリノが退室してしばらく経った辺りだった。ひらりと捲れた仕切り幕から、長身の男が覗き出る。

珍しく乱れのない衣装を纏い、腰には湾刀まで履いている。まだ午(ひる)にもならぬこの時よりに、かれの姿を見ることは随分と稀だ。

「陛下、」

鋭利な褐色の頬には、どこか面白いような笑みが浮かんでいる。

「……何を仰るかと思えば」

溜め息ながらに吐き出して、ウズは入り口の脇に片膝をついた。

ウズの拝礼を受けて、バスクス帝は支えていた幕を粗雑に払い、室の中へと踏み込む。

「人を置かぬ癖がそれで治るといいが」

卓上の“山”を見やって、その顔をしかめる。帳面の山は全てが皇帝から流れた政務。本人もそれがわかっているから、表立って口には出さぬのだろう。言外に「休め」と、柄にもなく心配されていることに眉根を寄せて、ウズは堅い声で言った。

「私がやらねば、すべてが無意味。ご心配は有り難く頂戴しておきます」

「……ああ、その仮面づらでよく言う。せいぜい私より先に死なんことだな」

過労死など洒落にもならん——バスクス帝は軽い調子で肩を竦めると、室の奥にある小さな円卓までつつかと歩いていった。円卓には、今朝がた来客用にとフェイリットがあつらえた、檸檬水入りの水挿しが乗っている。

「可愛げのある<sup>やつ</sup>子供だ。お前が気に入ったのはこれか？」

手ずから水差しを取り上げて、バスクス帝は珍しそうに目を細めた。

「いえ、何ということは御座いませんが……しいて言うなら気配でしょうか」

立ち上がり、バスクス帝を追い歩きながらウズは続ける。

「うろちょろされるのは好かぬとはっきり申しましたら、まるで獣かという程にぱったりと気配が無くなりましたので」

無意識なのか、意識してのことなのかはわからない。だがここ何日にも渡りその状況が続いている。気に入る、入らないは別としても、無駄な神経を削ぐことなく政務に集中できたことは確かだった。

「獣……余程変な育ちをしてきたとしか思えんな」

あれで王女とは。言いながら眉間の皺を揉み解しているバスクス帝を見やり頷きながら、ふと手に持つ地図の存在を思い出す。

「——ですが陛下、あの娘……どう考えましても平民に育てられたようには思えぬのです」

地図上から、この国に走る水脈を見抜くなど。

地理を知り治める——帝王学。それは貴族が長子に施す家督を継ぐためのものではなく、国というより大きなものを継ぐための、王者のものだ。ひとつ間違えば、一国の王子や将に匹する教育を受けていることにさえなる。

地理を知ることは治める反面、それが敵国ならば「攻める」ことにも繋がっている。彼女が知ったこの帝都の井戸の数。それを潰したなら、ここは容易に落ちるだろう。貯水のあるアデプ城内でも、城下の民衆の生活を一月と保たせるほどの水の確保は不可能だ。

果たしてあの娘は、そこまで気づいているのか。

先程の水脈のことを語って聞かせると、バスクス帝はいかにも軽い調子で、しかし声だけは立てずに笑った。

「男ならば大隊の将にでも据えられたであろうに。だがすぐに<sup>ジャーリヤ</sup>愛妾に上げんでよかったな。面

白いものが見られた」

人を圧倒させるような鋭い笑みは、決して相手の微笑を誘うようなものではない。戦慄に似た恐怖さえ植え付ける、その整いすぎた顔を見やって、ウズは持っていた帳面を卓の上に置く。

「側人の仕事を、やらせてみようと思うのですが」

バスクス帝は暫く面食らったように沈黙した後、今度こそ声を立てて笑いだした。

「ほう、本気でジャーリヤにはしたくなくなったか？」

「.....そういうわけでは」

「ならばヤンエ越えも任せてやろう」

「まさか砂漠越えの人选.....ですか？ ですがあれはラジ・ハ・ヌフリム大佐に一任致そうとしていたもの。あんな小娘に.....」

「側人にと、たった今言ったのは誰だったかな。ザラナバルを落とせるか否か。要はそれだけだ」

「そうですが、」

渋るように顔を伏せると、バスクス帝が横を通り過ぎる。

「今夜はトスカルナの宮に戻れ」

「.....休養は要らぬと申し上げたはずですが」

冷たい声がウズから出されると、バスクス帝は口の端を歪めた。

「お前が居ぬ間にでも、あの娘を見ておこうと思ってな」

付け足したような口実だった。だがあながち嘘ではないこともわかる。口も手も、出るのが早いのがこの方の性分。

「お抱きになるのでしたらお申し付け下さい。娘に薬を」

苦々しい表情を浮かべて、バスクス帝は首を横に振った。

「――申し訳ございません」

「いい。子など邪魔になるだけだ。ハレムの女共にでも飲ませておけ」

「御意」

深々と立礼をとり、ウズは静かに瞼を落とした。

終着点はたったの一つ。そこに向かって進み続けるしかない背中は、恐れもなく伸ばされたまま。

室から出て行くその後ろ背を暗い面もちで見やっていると、入れ替わるようにして小柄な小姓が一人、慌ただしげに戻り来る。

「――ウズ様、今何分ですか！」

余りにも必死なその形相に、ウズは思わず苦笑した。

練兵場には、咽せるような熱さがとぐろを巻くように立ち昇っていた。

頭に巻いたターバンの切れ端が、強い風のせいで狂ったようにはためき、ばたばたと耳を鳴らす。手をかざしていなければ容易にまぶたを叩きつけてしまう砂粒に辟易しながら、フェイリットはあちらこちらで鳴らされる剣戟の音を、半刻あまりも目を細めて聞いていた。

「ヤンエの砂漠を越えるっていても……」

砂漠越えに耐えうる小隊を借りてくるように。それがウズから受けた命令であった。

砂漠のど真ん中を、それも騎馬で越えようなどとはなんと無謀な。直線の距離でいったら迂回するよりも遥かに短時間で渡行が可能だったが、言うなればその「直線」がまず不可能。方位磁石も働かず、方角を知るのに頼もしい星図でさえ、砂風の強い夜などは霧のような砂塵に視界を阻まれて、あてにできない。逃亡者か、狂乱者か。余程のことがない限り、普通の人間ならばまず足を踏み入れない。

だが、例外がないわけではなかった。命の保障を十分に持ち、自在にヤンエを渡ることのできる、“砂漠の民”。彼らは大昔から羊や山羊を飼い移動しながら輸送や貿易品の売買を行っている。イクパル建国の祖にもつながる、古い部族だ。砂漠という特殊な環境を永い時間渡ってきたせいか、彼らは鳥のように自分たちの居る位置を正確に掴むことができるようになったらしい。

「耐えうる小隊」はすなわち、<sup>ザラナバル</sup>砂漠の民を含む小隊。

「とは言っても、この中で捜すなんてなあ」

<sup>ザラナバル</sup>砂漠の民とは名ばかりで、彼らには一見してはっきりとわかる身体の特徴はない。どうやって捜すか――まさか「あなたはザラナバルですか？」などと聞いて歩くわけにも……。

練兵場には黄色い岩盤がいくつもむき出すような硬い砂地が広がり――その広大な土壌が、帝城の西側、軍轄の区域のほぼ半分をどっかりと占めているのだった。その盛り上がった岩盤のひとつに足場を置いていたフェイリットは、目的の人物を捜すために砂地へと降り立つ。ここで眺めていても、向こうからやって来るわけでもない。

久しぶりの「闘技」を目の当たりにして、ずいぶんとうっとり眺めてしまった。イクパル特有の湾曲した三日月のような形をした刀が、快い音を立ててぶつかり合い、ちり、と火花が散じる。その光景は壮絶でもあるはずなのに、身のうちに湧き上がるのは浮かれたような熱ばかりだ。あれほど嫌だったはずなのに、サミュンとの剣稽古がどうしようもなく懐かしい。

何度も何度も身体ごと飛ばされて、全身血で真っ赤になりながら、それでも戦いを止めることは許されなかった。剣を握り、数え切れぬほど剥いた両手のひらは老人のように硬くなり、農民より堅固なたこがいくつもできて。辛かった毎日のはずなのに、思い出すのはサミュンと戦った躍動ばかり。

あの大きな大きな人は、誰よりも強かった。

「宰相閣下の遣いで参りました。騎馬隊を一個小隊、お借りしたく」

フェイリットは片膝をついて、いかにも指揮官じみた男の前で頭を下げる。

「タイハーン少佐が向こうの丘にいらっしゃる。用事はそっちに伝えるんだな。……お前は宰相

の遣いか？ また貧弱なのを寄越したもんだ」

男は湾曲したこの国特有の刀を腰の鞆に収め、日に浅黒く焼けた顔を歪めた。しげしげと頭の端から爪先立ちまで眺めて、そのまませせら笑う。

フェイリットは再び深々と頭を下げて、目の前から男の革の長靴ちょうかが通り過ぎるのを見届けてから立ち上がった。

タイハーン少佐を見つけると、フェイリットは先ほどの男にしたのと同じく、頭を下げた。

「タイハーン少佐閣下。宰相より一個小隊をお借りする命を受け参りました」

本当に軍人かと疑うほど、でっぴりと張った腹が目の前にある。続く沈黙に耐えかねて視線をわずかに引き上げると、フェイリットはタイハーンのえらの目立つ顔を伺った。視線は鍛錬を続ける兵たちの方へ向いていて、一瞬、自分の存在に気づかぬのではと思ってしまう。だが、最初の一声をかける直前で一度目が合ったのだ。気づかぬはずがない。

「……ウズルダン・トスカルナか」

吐き出されるように降りかかった言葉に、フェイリットは背筋を固める。明らかに含まれた嫌悪。

「あの、」

「まあ、いい。シャルベージャでも連れていけ」

「シャル……」

「シャルベージャ！」

野太い声が怒号のごとく響き渡り、身を竦めていると、湾刀をぶつけ合う兵たちの間から一人の男が滑り出る。黒々と日に焼けた顔に、琥珀の瞳が爛々と光る——先程タイハーン少佐の居場所を、フェイリットに指し示した男だった。

「なんですかね」

不機嫌極まりない声で、しかし態度だけは上官に対する敬礼をしながら男は答える。意地の強そうなつり上がった黒眉が、眉間に向かって狭められた。

「お前、砂漠で死んでこい」

「は？」

「宰相殿のお命じだそうさ。よりもよってマムルーク奴隷軍人の我々に、ヤンエの護衛をとな」

タイハーン言葉に、シャルベージャは口元を歪める。

「はあ、なるほどな。マムルーク奴隷軍人は捨て駒ってわけ。あのヤンエを越える？ 冗談じゃねえぜ」

「……待って下さい。私が言い遣ったのは、屈強な兵士を選ぶことのみです。御覧の通り私はこの国の出ではありません。遠目に見て、屈強そうだと判断したのでここに参りました。……捨て駒だなどと」

マムルーク……奴隷出身の騎馬兵士たち。そうか、ここはマムルークの鍛錬場所なのかと、フェイリットは納得する。身分こそ低いものの、僅か十歳前後から軍役に付く彼等は、実戦に置けるならひよっとすると小姓上がりの貴族より、遥かに強いのもしれなかった。命の駆け引きは、実戦でしか磨けない。いくら技ばかり与えられようと、そのぎりぎりの一線を多くこなしているか否かで、力量はまったく変わってくる。

だが、欲しいのは「砂漠の民」の血を持つ者だ。強ければ良いというわけではない。だが、方々から買い集められる奴隷軍人の中に、「砂漠の民」が混じっている可能性は……高い。

「マムルークの貴方にこそお頼みします。砂漠は広大で、何があるか分かりません。地位や階級や身分などは邪魔なだけです。欲しいのは経験と実績……はっきり申しませんが、護衛はいりません。ヤンエ砂漠を踏破できる、事実と確実な道筋が必要なのです」

見上げたシャルベージャは、面食らったような顔をしていた。

「ヤンエを越えるつつうことは、バツソスに行くお偉いさんにくっ付いてくんだろ。俺らはそいつの護衛、しなくていいってのか」

「出来ればしていただけたら嬉しいのですが。……欲は言いません」

シャルベージャは琥珀の瞳を細く歪め、何かを考えるようにフェイリットの顔を見やる。

「随分欲張ってると思うんだがね。お前、扱えるんだろが、剣」

今度面食らったのは、フェイリットの方だった。顔を見ただけでまさか剣ができるかどうか、わかるのだろうか。表情を曇らせて、フェイリットは考える。

メルトロー式の剣術しか知らないため、使えるところを見せたならまず間違いなく素性が割れる。それも見る者が見たなら、その術式がメルトロー王族のものであることまで、見抜いてしまうかもしれない。

かといって嘘をつけば、きっとここでこの話は頓挫する。

第三の手段があるとすれば――、

「……条件があるなら呑みます」

フェイリットの返答を聞いて、シャルベージャは満足げに笑った。

「丁度退屈してたところだ。ここにいる兵士を十人倒してみろ。面白かったらお前の望むものをやるぜ」

無理です、とは言えるわけがなかった。

小姓がシャルベージャを“落とした”——瞬時に流れ来たその一報に、ウズは執務の卓に就きながら、静かに形のよい細い眉を片方、つり上げた。

予想はしていたことだったが、それでも驚かすにはいられない。帝都にいる「砂漠の民」の殆どは、<sup>マムルーク</sup> 奴隷軍人として兵役に就いている。城下で暮らす者も無いわけではなかったが、<sup>ザラナバル</sup> 砂漠の民は時折、貧しさのために幼子——それももっぱら男児を都に売っていた。女兒は育ち、いずれ子を産む。砂漠では男も女も変わらず仕事をせねばならぬ為、子を産み育て仕事も負える女のほうが、必要になる。だから一人の男には三、四人の妻が宛がわれるのが普通で、男の数は圧倒的に少ない。生まれた子供も男であれば、部族の中に残すより外に「売った」ほうが、よい収入になるのだった。こうして売られた子どもの多くが、<sup>ザラナバル</sup> 砂漠の民の特殊な血を重宝され、奴隷軍人として買われていく道を辿る。

「よりによってシャルベージャ＝ザラナバルとは……厄介な男を」

せいぜい格の低い、話し合いでかたのつく末端の小隊でも連れて来ればと考えていた。シャルベージャとくれば、上流貴族でさえ知る名だ。奴隷あがりのコディ・タイハーンがベシャハ男爵家に養子入りし、<sup>マムルーク</sup> 奴隷軍人ながら「少佐」の階級を与えられたのが17年前。そして時を同じくしてそのタイハーンに買われたのが、<sup>ザラナバル</sup> 「砂漠の民」の男児である。彼はタイハーンの率いるマムルーク本隊を代理とはいえ齢たったの十三で動かし、ドルキア・チャダ間で起こっていた内乱を制圧した過去を持つ。内乱というよりはドルキア公国軍が起こした暴動の鎮圧に近かったが、それでも七日とかかる行軍をものともしなかった十三歳というのは、誰しにも驚きを与えるものだ。そんな少年が鼻を低くしてられるわけではなく、歳を経るにつれて上官の言うことさえ蔑ろにし始め、近年では素行の悪さまでも目立ってきた始末。貴族相手に殴りかかるなどは、あの男にとっては茶飯事のことだ。<sup>ザラナバル</sup> 砂漠の民なら、誰でもよいと言ったのは事実。しかしあの男だけは、シャルベージャだけは、抜かせと言いやるべきであった。宰相の権限を以ってしても、あの男に皇帝を「護衛させる」など無謀に等しい。

——一体、どうやって……。

“小姓”は武器の一切を断り、素手だけで十人の兵士相手に立ち回ったのだ——何事が起きたのかと呼び出したワルターが語ったのは、およそ信じられぬ話だった。丸腰で打ち勝てるほど、マムルークが弱いはずがない。それも十六になったばかりの、少女に負けるなど。

相当な騒ぎを聞きつけて、鎮圧に向かったワルターが辿り着いた頃には、肉付きの良い大の男が十人、折り重なるようにして黄砂の上に突っ伏していた。報告の後、慌てたようにまた戻って行く近衛師団長の背中には、それ以上の質問を受け付ける余裕がまったく無かった。

……やはりラジ・ハ・ヌフリムに一任した方が良かったか。

バスクス帝は、間違いなくあの娘を試した。英雄タントルアスが、どれだけあの容姿を持つ娘の血に流れているのか——。ジャーリヤの仮面を被せるには、いささか早まりすぎたかも知れぬ。そんなことを苦々しく思いながらも、ウズは卓の前から立ち上がった。

「トリノ」



程なくして声が返り、隣室に控えさせていた小姓が目前に現れる。音も立てずに拝礼するその様を見据えて、ウズはため息ながらに言い放った。

「小姓たちに先の一件が広まる前に、フェイリットをハレムに移します。要事の際はお前も同行するように」

\* \* \* \* \*

かつかつと忙しく響く自らの足音を上の空で聴きながら、カランヌは久しぶりに戻るメルトロウ王国の煌びやかさに、陶醉しきっていた。

広大な廊下の床を埋め尽くす白と黒の大理石。菱形を描くようなその床は、歩く人の姿をすっきりと映し出すほど磨かれている。

天井には空を思わせる濃紺の硝子細工が詰められて、ほの暗い空間をより美しく際立たせていた。その天井からは乳色をした太い柱が這いながら、半円を描いて地に突き立つ。夕日の沈む黄昏の風景や、遠乗りをする人びと、宮殿の青々と葉の茂る庭などを描いた絵画が壁に飾られ、その隙間を縫うようにぽつぽつと並ぶランプが、透明な硝子筒からきらきらと温かな光を散じている。

芸術の一切を集めた、幻想の王宮。諸外国の王侯貴族が手放しに賞賛するこの宮殿こそ、メルトロウ王国の自慢であった。

「まったく、あの野蛮な赤い城を半月近くも眺めていたかと思うと、背筋が冷たくなってしまうな」

廊下の両脇に並ぶ、白い顔をした歴代の王たちの彫像を横目に、まるで話しかけでもするかのようにつつと吐き出す。

玉座の間に続く廊下には、人一人見当たらない。時刻は深夜をはるかに過ぎて、もうじき夜が明けるかという頃合なのだ。社交の為に集まり寄る貴族たちの姿は、とうに無くなっていておかしくはなかった。

王都に帰り来たのが深夜前。それから屋敷に戻って身支度を整え、その足で報告に参じたというわけだ。もっとも人に会うのを嫌って、故意にこの時間を選んだのではと問われたなら、否定もできない。朝の謁見を十分に待って来ることも、もちろん可能だった。

「……カランヌ・トルターダ・アロヴァイネン、只今戻りまして御座います」

カランヌは天井ほどまである重厚な扉の前で立ち止まり、流れるような口調で告げた。

声は、直接王には届かない。この重厚な漆黒の扉の向こうに、また三重の扉が連なって、ようやく国王陛下のおわす玉座の間に辿り着く。簡単に辿り着くことが出来ないのは、国王の身を守るため。表側からは特殊な器具を用いねば開くことができないせいで、入室の際は内側にいる者

に開けてもらわねばならない。ここで名乗りをあげるのは、その一枚目の扉の向こうに控える侍従に向けてのものだ。

時を待たずして扉が開かれる。大理の上を滑るように、音も無く開かれた扉の向こうから、立礼のまま従僕が二人現れた。

「お待ちしておりました」

それから三重の扉を一枚ずつ通り抜け、カラン又はようやく息をつく。

玉座の間は、床も天井も磨かれた白色の大理石でできていた。あまりに透き通ったそれは宮殿の廊下と同じに足音や声を轟かせ、姿まで克明に映し出す。玉座まで続く深紅の絨毯の両脇に、等間隔に並ぶ純白の円柱は、蛇のような体躯の動物が複雑な模様を描いて天井まで巻きついている。

「只今戻りまして御座います」

深紅の絨毯を歩いた先、玉座に座る国王の前に恭しく膝を置き、カラン又は額を床へと傾ける。

「――遅い」

通り抜けた扉のように重厚な、年輪を重ねた声が頭上に響いた。ここへの到着も、今まで逐ってきた行動も、確かに遅いと言われれば違いない。一瞬どちらのことをと首を捻るが、カラン又は小さく苦笑して押し止めた。

「手間取ってしまいました。久し振りに帰ってきたもので、なかなか侍女たちが離してくれなかったのですよ」

「何時だと思うておる」

「さあ……何時に御座いますか」

とぼけたようにカラン又は返すと、思いため息が聞こえてくる。

「三時半だ、もうじきに夜も明ける。余は、お前が時計も見れぬやつだとは思ってはおらぬ。そのように急ぎ来た理由を聞いて平静でいられる自信は持たぬぞ」

ふと見上げると、眉根を寄せてこちらを見つめる王と目が合う。濃金であった髪は歳のせいですっかりと銀色に変わっていたが、並ぶふたつの青い瞳は未だ爛々とした光を湛えたまま。額や眉間、目尻に刻まれた深い皺がなければ、御年五九歳という、この王の実年齢を思い出すことはないだろう。

「サディアナ殿下が護送の途中、逃亡なさいました」

玉座に座り、白髪だらけになった自らの髭を厳しい顔つきで撫でていた国王の手が一瞬、ぴたりと留まる。

「逃げたのか、自分から？ 何故すぐに知らせなんだ。お前がここを出てからよもや半月以上も経っているのだぞ」

厳しい声が降りかかる。カラン又はわずかに頭を下げた後、王を見つめた。

「申し訳御座いません」

「お前に命じた任務は、アルマ山よりサディアナを連行すること」

「……わかっております。ですが陛下、」

「何がわかっておる、だ？ あれ等が短命なのはお前も存じておろうが。もう時間がないのだぞ」

「ええ。しかしサディアナ王女は逃亡中、イクパルの帝国軍に捕獲されてしまいました」

「――なんだと？」

怒りのまま、玉座から立ち上がった国王に鋭い目で見下ろされる。

「ならばいっそ、お前は連絡を寄越さねばならなかった。我が国軍を派遣させてでも……」

カランヌは小さく肩を竦めて、首を横に振る。

「そんなことをしてはすぐに正体を感じかれてしまいました。ご安心ください。連中はサディアナ王女が竜であるとは未だ知らぬはずです。それを見越して内密に追っていたのです」

「馬鹿が。そもそも、あれがイクパルに渡ったなどということ自体、けしからん……！ お前にはそれなりの余裕を与えてやったはず。にも拘わらず何故連れ戻すことが出来なかった。そんなにあの未熟者が、恐ろしかったとでもいうか」

「――……いいえ」

恐れがなかったと言えは嘘だ。初めて見た黄金種の竜は、予想を超えて畏怖を感じさせるもの。あれが最強の血を引いている竜なのだと思うと、より一層。

だが……、

「アロヴァイネンの名を承りし私の言葉を、信じて戴けますならば陛下、どうか取り乱さずお聞きくださいませんか」

カランヌは言いながら、微笑を浮かべた。その顔に余裕を見たのか、王の表情が徐々に冷静さを取り戻していく。

「――よい、申してみよ。何を聞かせたいというのか。不甲斐ないお前のこと、ぼんやりし過ぎていたとは言うまいな」

玉座に再び腰を下ろしたかれを見届けて、カランヌはゆっくりと言葉を繋ぐ。

「……全力で否定出来ぬのは哀しいことですが、ならば殿下を連れ戻すまで帰還したりは致しませんでした。私が御命令の遂行も成さず、お目お目と帰還したのは火急のご判断を頂くため」

そこで一度区切って、王の顔を伺う。こんな時間、それも前触れもなく現れた僕の「火急」の言葉に、ある種の覚悟をして頂きたい。そう思ったからだ。覚悟がなければ“この国の王”にとって、これは失神しかねぬ事項。

「何だというのだ。いい加減、勿体つけず申せ」

「では極めて簡潔に申し上げます。――サディアナ王女の“主”が、イクパルに居るのです」

「な……！！」

「未だ推測に尽きますが、連れ戻そうとした折に気にかかる拒絶が」

「そんなはずは……ない」

あれの主は余だ。見る間に青ざめていく王の顔を見やっ、カランヌは首を横に振った。

確かに、そんなことは有り得なかった――今までは。

遙か昔、エレシンスが忠誠を誓ったのは、タントルアス王、そしてメルトロウという「国」そのものだ。血で施す契約は、それを流す子孫にまで継がれていく。メルトロウに仕え、メルトロ

一の為に死んでいく。それがエレシンスの血を残す者たちの宿命。血が濃ければ濃いほどに、国を愛し何よりも王を愛する竜になる。

なのにたった一人、何百年かぶりに出た忠誠を誓えるほどの血を持った竜は、それをしようとはしなかった。彼女――リエダは、王の愛妾として後宮に入ったにも関わらず、事実、王を愛していなかった。いや、正確には愛していたのであろうが、それはあくまで「竜」としての話。誰よりも「人」の部分の強かったリエダは、竜としての幸せを望むことはなかった。最期まで人として、一人の人間を愛し抜くことを願っていた。

『――愛している……、』

遺された紙切れを、サディアナは最後まで読みきることが出来たのだろうか。

「まだ覚醒していないところを見ますと、サディアナ殿下ご本人は自分の選ぶべき人間が間近にいることには気づいていないのでしょうか」

「気づけば……どうなる」

「サディアナ殿下は竜として覚醒、まず間違いなく忠誠を誓います。そして強大な力を得たイクパル帝国は、永きに渡り味わってきた肩身の狭さを一気に改善したがるはず。メルトローへの侵略戦争――というのが、想定しうる最悪の事態かと」

サディアナは母親には似ていない。顔はともかく、性格はまったくの間逆。どちらかといえば父親よりの、それもかの古き王の快活な気質に近い。一度覚醒してしまったら最後、身のうちに流れる竜と霸王の血によって、激しい気性を一層開花させることだろう。そうなれば母国に愛情を持たぬ彼女が、我が国への侵略を許さぬ筈がない。

「あれの寿命は、母よりも短かいのであろう」

「一概にそうとは申せませんが、……長くて二十、少なくて十七といったところですか。今日明日にどうなるかということは、ないように感じました」

問題は、その相手が誰なのか。地位も階級もない者ならばまだいい。しかし竜というものは、何故だか王族の血に強く惹かれてしまう生き物だった。相手が王族や、皇族――玉座に直結する地位の持ち主であった場合には、最悪の結果、メルトローの命運は尽きることになる。竜という金の冠を戴く王に、勝つことのできる国など無い。

期限は、サディアナが覚醒を迎えるまで。メルトローという王国が、これから先も大陸一を誇れるためには、今のうちしかない。

「――仕掛けるか」

ぼそり、吐き出した王の言葉に、カランヌは満足げに拝礼する。俯けた顔は、殊のほか愉しげな笑みが浮かんでいた。

「引き伸ばしにしていたテナン公国の申し出を、受けるべきかと」

カランヌの言葉に、王が頷く。

「姿が見えぬということは、スリサも役に立っておるようだな」

「それはもう。今頃は何食わぬ顔をして、サディアナ殿下の一番お側にいらっしゃるのでは。お命じ下されば、殿下を一息に殺すこともできましょう」

王の命令に、スリサファンは逆らえない。例えそれがサディアナの暗殺であったとしても、彼

女なら眉一つ動かさずに遂行できる。

「サディアナが誰かに心を預けたら、その時点で殺させろ。男もろともな。テナン公国に手をかけるより、余程楽な仕事だ」

「御意に」

カランヌは立ち上がって拝礼を終えると、羽織っていた黒のマントをひるがえして三重の扉へ歩き出す。

「お前の得意分野、高見させてもらうぞアロヴァイネン」

カランヌは背中に向けられたその言葉に薄く笑んで振り返り、紳士さながら、優雅に会釈して見せた。

王との謁見後まもなく、からりとした太陽が青空に昇った。冬を迎えたメルトロローが、こんなにも晴れ渡るのは久しい。ちらちらと映る小さな明り取りの窓からその青い色を眺めていると、冬だということすら忘れてしまいそうだ。

カランヌは自らの屋敷に戻ることもなく、城の端に佇む古い塔を上っていた。

どこを見ても若草色の、八角形の空間。幅の狭い階段を何段も上った末に辿り着いた一室で、周囲を見渡す。壁から天井まで隙間なく蔓のような絵柄がこまかに描き込まれ、散りばめられた百を超えるメルトロロー古代神たちが、その美しい体躯に竜を纏わせている。まさに部屋自身が、宗教画そのもの。王城に建つ寺院建築のなかで、最も古い塔の内部だ。床はビロードが直接貼り付けられており、靴音は完全に吸い込まれて静寂を残す。わざとそれらを響かせていた他と比べて、吐息すら聞こえそうなほど。

従僕が壁の一端を片手で押すと、がこん、という音とともに向こう側に外れた。ぽっかりと見えた入り口からビロードの階段が螺旋状に現れ、従僕とふたり、またそれを登り始める。

階段はめまいを覚えるほど長い。それでも頂上まで上りきらず、階段の途中でくぐらねば入れぬほどの小さな扉の前に立った。

「どうぞ」

つや消しの施された、黒に近い濃緑の木製の扉。従僕は一礼の後その扉の脇へと立ち、カランヌへと道を空けた。

「鍵は、」

「かかっておりません。宮殿側にあった一つのみですが、こちらの塔の外側はもともと有棘の薔薇垣で囲まれていますので」

そうか、と頷いて、カランヌは口元を歪める。

鍵があろうとなかろうと、要は中にいる「人物」が外に出ようとしなければいい。

扉は木製特有の軋みをたてて開かれ、その向こうにはやはり若草色の空間があった。中心に置かれた紺色の天蓋がかかる寝台、小さな書卓、衣装を掛けるためのこぢんまりとした木彫りの棚……けっして狭くはない空間が、生活のための品々で幅を占めてしまっている。それなのに全く感じぬ生活感が、この部屋の主を思わせた。

カランヌは家具から目を移して、枠のはめられた大きな窓を見つめた。座れるほどの幅を持つその窓べりで、ほっそりとした少年がひとりまどろんでいる。

「お昼寝ですか」

濃金の髪はゆるやかにうねり、抱いている膝の上ほどまでを覆っている。開かれた瞳の青さは、今日の空の色とよく似ていた。色合いと性別さえ除けば、眼差しも面影もサディアナに瓜二つ。

「珍しい男が来たものだな」

けっして低くはなかったが、静かで落ちついた声音が返ってくる。まるで自分と対しているような気分になって、カランヌは眉をひそめた。サディアナと三人で並ぶことがあったなら、間違

いなくかれは「姉君」よりカランヌのほうに似ているはずだ。年相応の容姿を持つかれに、子供らしさの抜けぬサディアナを比べても無駄なことだったが。

「.....お久しぶりです、ロティシュ・アシュケナシム殿下」

「そうか？ お前の目で視ていたから、僕はそうでもないんだけど」

窓枠にもたれかかり、気だるさの残る声で微笑する。表情は柔和で優しげな、それこそ教会に佇む聖人のようなのに、どうにも滲み出た皮肉が抜けきらない。他人から見た自分というのは、こんなものなのだろうか。カランヌは自分と対するスリサファンの忌々しげな表情をふと思い出し、口元を引き結ぶ。

「陛下にお会いしてきたんだろう」

「.....殿下」

振り返って、今し方通りきた扉を眺めやる。従僕は扉の向こう側に控えているのだろうが、こちらの話が聞こえぬはずはない。従僕が話を盗み聞きしていて、王の下に直接届ける可能性もあった。カランヌはできるだけ声の響きをやわらげて、目の前の王子へと語りかけた。

「まだ悪い癖がおぬけにならないようですね。他人の目を介して覗き見など」

「羨ましいか？ けれど“竜”を追うのは本当は僕の役目だろう。陛下はどうして僕に一任してくださらないのかな。お前ほど血の薄いやつが、アロヴァイネンなどと」

ロティシュは先ほどまで読んでいたのだろう本を膝元から窓枠に置いて、トントンと指の先で弾いた。

「血が濃くてらっしゃるから、殿下をご心配なさっているのでしょうか」

「感化されるとでもいうのか？」

「それは.....」

「確かに、」

吐き出すように笑って、かれは窓枠を滑り降りた。つつかと歩いて行って、書卓の引き出しを乱暴に開ける。

取り出したのは薄手のハンカチだった。丸めるようにしてこちらに投げられたそれを掴み取り、カランヌは顔をしかめる。

「確かに、感化されるとは思うよ。僕は姉上に依存しなければ生きてはいけないんだからね。...でも、自分が死ぬってというのは、父上よりもお前よりも、それこそ姉上よりもわかっているつもりだ。姉上はまさか死ぬ気じゃないだろう？ だったら一刻も早く契約させるべきだ」

カランヌは掴み取ったハンカチを広げてそのまま、時が止まったように固まっていた。

薄水色の、それこそサディアナの透き通った瞳を思わせるハンカチには、赤茶けた色がべっとりと染み込んでいたのだ。

「血を吐いたよ、昨日。しかも初めてじゃない。三日前と一週間前、それとひと月前も」

「陛下には」

「お知らせしてない。するべきだったか？」

「いいえ.....、」

カランヌは、目に見えて蒼白な顔をしていた。ひゅう、と漏れ出た空気が自らの吐息だと気づ

くのすら時間がかかるほど、困惑しきっていた。

「だろうね。姉上は鈍そうだな。あれはどうみてもイクパルに居るんだらうに。お前はそれを陛下にご報告してしまって、加えて僕の嗜血だらう？ 戻ってくるべきじゃなかったな」

ロティシュは苦笑とも見える笑みをうっすらと浮かべて、傍らの寝台に腰を下ろした。

「……どこまでご存知なのです」

サディアナがよもやこの国には戻らないだらうことを、かれは知っている。ロティシュは眠りに落ちたときだけ、同じ血を持つカランヌの目を借りて物を視ることができた。血の濃いかれだからこそ、<sup>“竜”</sup>と同等の能力。そしてその力を使って「外」を眺めることを、カランヌはこの拘束の場から逃れる息抜きとして十数年黙認してきた。

サディアナの「想い人」、すなわち選ぶべき「王」がかの帝国にいることを、カランヌの目を通して知っているのなら。

「……相手が誰だか、もうお分かりなのでは。よりサディアナ殿下に近い貴方ならば」

畳み掛けるように言ったカランヌの目を、遠くを眺めるようにしてロティシュが見返す。かれは寝台にかかる紺色の天蓋に細く長い指をからめて、ふわりとそのまま立ち上がった。

「――どうかな。こればかりは当人じゃないとね。僕らの決定的な違いは、竜かヒトかだらう。母親の胎でふたつに別れたときから、姉上は竜に、僕はヒトになる運命を背負った。僕はけっして竜にはなれない。けれど、元はひとつだった僕らには、繋がって血を分かち合っていた時も確かに存在している。その名残が、僕のお前を通して物を見る“目”だったり、お前の姉上の竜気を嗅ぐ“鼻”だったりするわけだけれど。

……お前は一度でも、その鼻で <sup>リエダ</sup>母の選んだ王の気を嗅いだか？」

目前まで歩み来たロティシュが、カランヌを見上げて微笑む。鏡に映したような姿を持っていても、年齢が成せる身長差というのがあった。わずかに低いその顔は、近づいてみると僅かながらに削げている。

迫り来る寿命の壁が確実に、じわじわとかれを蝕んでいるのだ。

「確かに。私は十六年前、リエダが誰を選びたかったのかを終ぞ知ることは叶いませんでしたが」

黄昏に揺れる麦穂のように美しい、金の髪を思い出す。

下級貴族の妾の子として生まれた身の上を、“売った”のは紛れも無く自分。王に気に入られるよう差し向け、愛妾の座まで押し付け――リエダは国王ノルティスと契約を交わすだらうと、自信さえ持っていた。

「<sup>リエダ</sup>母は、契約どころか竜であることも明かさずに死んだ」

そうして本来の姿に戻ったリエダの遺体を見、国の重鎮たちは驚愕した。黄昏に揺れる麦穂のように美しい、黄金の竜の骸が、今しがた死んだはずの愛妾の寝台の上に、横たわっていたのだった。名さえ知れ渡らぬ、末席の愛妾の寝台に。

「私も病床に臥していました。目が覚めた頃には、もうサディアナ殿下の姿はどこにも見当たらなかったのです。貴方の姿も同様に」

生まれて半年にも満たぬ赤子を、その王弟であるサミュエル・ハンスが攫っていったと知った



のは、間もなくのこと。目覚めてみれば、双子として生まれたもう片方の男児は塔のなかに幽閉されて、カラン又自身も、知らぬ間に爵され「アロヴァイネン」となっていた。史上に名を遺したエレシンスの兄、「竜を追う者」の名を継ぐ伯爵の名の籍に。

「そう。僕は生涯幽閉暮らし、お前は晴れて“アロヴァイネン伯”。いいものだね」

皮肉げに笑ったあと、ロティシュは疲労を浮かべた目を伏せた。即座に口元へとあてがわれた白い手を見やり、カラン又は眉をひそめる。

「殿下」

くるりと背を向けて激しく咳き込むその姿は、どう見ても健康な人間のそれではなかった。

サディアナが契約すべき主は、かの帝国の人間。それを無理やり連れ戻そうと……ともすれば殺そうとしている今、どちらにせよこの少年の生い先は短い。ここまで濃い血を分け与えられれば、人の身体で二十年を生きるのは過酷としかいいようがなかった。

背中を向けたまま手のひらを見つめるロティシュの足下に、ぽたぽたと垂れる赤い雫。カラン又は小さく息を吐いた。

「出たいですか、外へ」

生まれてから十六年。母は死に、父には顧みられず、血を分けた姉にさえ会うことが出来ない。幽閉された塔のなかで日々を過ごし、遣わされる教師の下で高水準の知識を学びながら、決して日の光を浴びることを許されなかった王子。かれにとって、この話は最期の選択になるはずだった。外へ出られる、最期の。

「条件をのむなら、出して差し上げましょう。元よりそのつもりで参りました」

カラン又は懐から白いハンカチをすっと抜き取ると、ロティシュを振り向かせるためにその肩に手をかけた。骨ばった感触を手のひらに感じて、暗い気持ちにならざるを得ない。服を着ていて誤魔化されていたのだろう。思っていたよりずっと、かれは痩せ細っていた。

「条件だと。そんな口約束、本当に僕が守るとでも思うのか？」

振り返ったロティシュの口元には、おそらくはかれの手の甲で拭い去ったのだろう。血の痕がべっとりと付いている。頬を手で支え、その血をハンカチで拭いてやりながら、カラン又は柔らかに笑んだ。

「テナン公国と盟約を結ぶのですよ。鉄鉱の独占貿易の代わりに、『独立させてやる』と」

「鉄鉱……？ かの国には、鉱山があったのか」

目を丸くしたロティシュに頷いて見せ、カラン又は続けた。

「イクパルの武器の需要は、ほぼテナンの元で賄われています。それも破格の値段で。我が国が高額を保障すると言いだしたら、飛びつかぬはずがありません。テナンが独立を果たせば他の公国たちも黙ってはいられないでしょう。我先にと、独立したテナンに続こうとする」

――イクパル帝国は、まちがいなく内戦に陥る。

「……内戦の混乱に乗じて、イクパル帝国をばらばらにしようというのか」

「メルトローの国土は一気に広がりますよ。“戦闘部族”であるイクパルの古民たちを吸収できたなら、竜の力などいりません。簡単に隣国リマをも治められましょう」

イクパルと、リマ。ぎりぎり拮抗していたこの二国さえ傘下に入れられたなら、アルケデア

の大地はほぼ統一したにも等しい。

「けれどそれじゃあ僕に利点はひとつもないな。姉上が死んだら、僕だって死ぬ」

予想通りの返答を得て、カランヌはふと微笑んだ。

「……では殿下。私はいま何故、生きていますか」

カランヌが静かな声でそう言うと、ロティシュははっとしたように口を開く。

「血が薄いから……ではないのか」

王族にする拝礼を、肩膝を傾げながらしたカランヌは、扉へと向けて歩き出す。金属でできた取っ手を握ると、ひんやりとした冷たさが手のひらにに染み渡った。

「――生きながらえる術<sup>すべ</sup>をお教えしましょう。貴方の協力次第で」

息を呑む気配を背後に感じながら、カランヌは扉を開けた。扉の側へと控えていたはずの従僕と、正面から目が合う。――やはり、聴いていたのだ。

まったく気配を発さずに目の前に現れたカランヌを見上げて、従僕は驚きそのまま固まっていた。

胸元から小瓶を出して口中に煽ると、カランヌは従僕の顎首を掴まえて壁へと押さえつけ、口づけた。ずるずると床へ落ちて意識を失った従僕を蹴り避けて、また長い階段を下っていく。強力な睡眠薬は、前後の記憶を曖昧にさせる。目覚めたときには何も覚えていないだろう。

「――明日、迎えに参りますよ殿下。共にテナンへと参りましょう」

カランヌが発した声は、塔の石壁に高く響いて木霊した。

謁見を終えたころには、すでに正午を一刻ほども過ぎていた。

詰めかけていた貴族たちの姿が途絶えた途端、急に静けさが遥か高い天井から降りてきたように感じられる。

ふう、と欠伸をかみ殺し、ノルティス王は玉座の背もたれに身を預けた。

この分では、午後の政務に移るまでの時間がないだろう。昼食を摂るとでもなれば、最低でも二刻は余裕を持たねばならない。今のノルティス王に、謁見に来た王侯貴族たちに会食の時間を割り、ゆったりと食事をしている猶予はなかった。

ノルティス王は右手を軽く上げて側に控えていた従僕を呼ぶと、水を持ってくるように命じた。侍従は拝礼だけで「御意」を示して、すぐにどこかへ消えていく。

昼食は摂るに至らずとも、半刻ほどここで喉を潤し休息する時間ぐらいはあるだろう。そうして、漸くやれやれと片足を組み玉座の肘掛に肘をついた、その時であった。

重々しい入り口の巨大な扉が突如、わずかに開いて、隙間からひとりの青年が転がり出るようにして入ってきたのだ。玉座へと続く深紅の長絨毯の端へ手をつけて、よろよろと立ち上がる。

通常ならば玉座の間に罷り来るとき、例えそれがいくら地位の高い王族であっても事前の通達がなされるのが慣例だった。しんと静まり返るこちら側には、人の訪れを告げる従僕の声はまだ響いていない。扉の外へ控えているはずの従僕は……そう思いつつ玉座から身を乗り出すようにして扉のほうを見つめると、開かれた隙間から雪崩れ込むようにして控えの従僕が出てきた。転がり出るように入り来た青年を連れ戻そうと、三人がかりで必死になっている。その尋常ではない動きを視界に収め、ノルティス王は眉間に皺を寄せた。

「――何ごとか」

大きな声ではなかったが、その年輪を刻み込んだ低く重圧な声は、びりびりと響きわたっていく。

「申し訳御座いません、陛下。我々の制止も聞かずこの者が……」

「至急なのです陛下！ 儀礼を欠いたこと、お許してください！」

「お前、無礼なことを言うな。陛下、この者を連れて退室することをお許し願えましょうか」

「警備が至らず申し訳御座いません。お叱りは如何様にもお受け致します。……ほら、さっさと立て、玉座の間に前触れもなく入っていい訳がなかろうが！」

それぞれが口早にまくし立てたせいで、ただでさえ声音の響き渡る空間は耳鳴りがするほどにぎんぎんと震えていた。

やれやれ、ようやくの休息の間が削げてしまった。ノルティス王が玉座の脇へ目配せすると、すぐさまにごん、と床を鳴らす厳しい音が響き渡る。玉座に近い壁際にずらりと配備させていた近衛士ファルのひとりが、持っていた槍の柄を床へと突き立てた音だった。

ノルティス王は静寂の戻った周囲を見渡しつつ、入り来た青年を眺め見やる。

「おまえは……」

はっと眉を引き寄せて、ノルティスは額に皺を刻んだ。――この顔を覚えている。日も明けや

らぬ時より、屋敷に戻る前に行きたい場所があると言ったカランヌに付けてやった、従僕だった。なんと自らの疲労に押しつぶされて、今まで青年の顔すらろくに見ていなかったとは。

「――よい。その者を通せ。お前たちは下がってよい」

カランヌの行きたい場所――それが“あれ”の元であったために、警戒の為にと付けたのだったが。やはり……、

「何事が起きたのだ」

扉の前で片膝を付き、王に対する拝礼の姿勢になった青年――従僕は、切らせた息を落ち着かせるように一度吐き出すと、震えた声で言い始めた。

「私は従僕となるために、それなりの指導を頂いてまいりました。薬剤への耐性も、付いていたはずなのでございますが――」

従僕は躊躇うように眉をひそめて、しばしの間言葉を止めた。この国での従僕といえば、名門貴族出の末子であることが多い。家督を継ぐに至らぬ末子に貴族たちは、王の僕となるための教育を施す。武器を持たずしても相手の動きを封じられる術や、気配を獣のように消し自分と空間とを同化させる術、そして薬を飲まされて操られることのないように、幼い頃から強い薬に身体を慣れさせる訓練すら受けている。

従僕の口調から、続く言葉が伺えた。ノルティス王はその先を促すように、肘掛に置いていた右手を顎元に寄せる。

「……何も覚えていないのです。陛下より命を受け、アロヴァイネン伯爵閣下をお連れしたところまでは鮮明なのですが……それ以降が全く思い出せぬのです。かの塔の階段にて倒れているところで目覚め、慌ててアシュケナシム殿下の無事を確認いたしました。子細を伺ってみましたら『お前が儀礼を欠いたから伯爵はお前のみぞおちを打ったのだ』と仰ったのです。それで私は今まで気を失っていたのだと……」

「だがみぞおちに痛みは、無いのだな」

「……ございません。先ほどは失礼いたしました。私たち従僕は寝ぼけていまして儀礼だけは怠りませぬよう、徹底した教育をうけてここへ参ったのです」

「それ故に、眠り薬を疑うのだな？」

「は……、目覚めたときの激しい眩暈は、薬を飲まされたとしか思えぬものでした」

従者の言葉にノルティス王は何も言わず、ただゆっくりと頷いた。

「下がるがよい。お前には仕方の無かったこととして処罰は与えぬ。代わりに、このことを口外することは禁じる」

従僕はかしこまって深々と礼をすると、身を小さくして背を向けた。去り行く背中を眺めつつノルティス王は再び眉を引き寄せる。

あの男のすることだからと警戒していたが、やはりやってくれたものだ。思惑通りにことが進むならば、永遠の体を持たずしてもこの大陸を制覇する夢が実現する。公国テナンを足掛けに、イクパル帝国を、そしてリマ王国を。メルトロー含む三国を纏めることができたなら、残りは東と北に散在する小さな国々ばかりだ。

「そこに居るか、イグルコ・ダイアヒン」

本来ならば、実弟であるサミュエル・ハンスにくれてやろうと目論んでいた地位――丞相位の現職に就く男が、柱の奥から身を現す。滑るように静かな足取りで玉座へと近づき、膝を追った男の白い額と漆黒の髪を見下ろして、ノルティス王は立ち上がった。

イグルコは今年三十を迎えたばかりだったが、早くから苦職につけてしまったことが災いしてか、一回りも老けて見える男だった。サミュエル・ハンスとは、母親を介して従兄弟の血縁にあたる。海軍の総督を務めるためと育てられてきたのを、サミュエルの逃亡により突然引っ張り出された若者であった。丞相という、これまでとは遠く離れた暮らしを当初は固く断ったのが、「お前しかおらぬのだ」と周囲に言われてしぶしぶ陸に上がってきたのだ。

「お前、たしか独身であったな」

「……はい。現職就任よりこれまで、ろくに女性の顔も見えておませぬ」

「そうか」

ノルティス王は深く頷いて、イグルコのわずかに灰色を帯びた青い瞳をじっと見つめた。

「お前をしばしの間、海へと戻してやろうではないか」

「……は。と、いいますと」

「カランヌはおそらく、我が国の王族の誰かに、あのテナン公女を娶わせるつもりであろう。同盟の確約を証明する、証としてな」

王族にとって、婚姻は所詮“契約”でしかない。国が国に物事の約束をとりつけたいとき、もっとも取られる手段のひとつだ。

イグルコは直系ではないが、王族の血も引き、王位の継承権も三十のうちには数えられる家柄を持っている。ファ・ファーデン伯爵家といったら、二、三代のうちにのし上ってきたような一介の爵つき共より、よほど名の知れた旧家。その家督をいずれ継ぐだろうイグルコは、他国に対し「王家」を名乗るテナン公国の“王女様”には、大きすぎず、かといって小さすぎもしない相手だ。

「心づもりをしておくがよい。おそらくは同様の内容を記した文が、三日のち以降にアロヴァイネン伯より届くであろうからな」

アシュケナシムは、所詮幽霊のような王子だ。存在はするのに、その名前が欠片も王籍に載ることがないのは、すべてかの“血”よりのもの。そんな不確かなものを連れて行っても、盟約の道具には使えない。カランヌが、ノルティス王と同じことを考えるならば、だが。

「御意」

「帝国に組するより、我が国と繋がりを持つ方が身が安全だと知らせてやれ。公女には、その身を以て誓約書となってもらおう。婚姻とは名ばかりの人質だがな」

――報告が無かったのは、余を試してのこと……と、思いおくことにしようぞ、アロヴァイネン。

それから半日が過ぎた翌日。幽閉されていた王子を連れたカランヌは、密やかに王国を発つ。

イグルコ・ダイアヒン・ファ・ファーデンが正式な要請を受けてテナンへと向かったのは、それより四日を数えた日の早朝であった。

日もとっぴりと暮れて、藍色の夜が帝都を包む。

夏の身を焼くような日照りより、幾分やわらかくなった生暖かい風が、夜の帳をゆっくりと運んできていた。暦ではもう冬の季節だが、砂漠に近い帝都はまだまだ暑い。アルマ山脈を越えてはるか北国に降る、ふわふわと白く舞う雪は、残念ながらこの地に降り積もることはないのだ。

コンツェは手に持っていた二枚の手紙を静かに握って、顔を曇らせていた。

手紙の送り元――テナンの街並みも、今ごろはやわらかな雪がうっすらと白く覆っていることだろう。テナンは陸続きのこちらとは違い、北のメルトロロー王国、やや離れて西のリマ王国、そしてイクパル帝国本土というように、三つの大陸に挟まれている小さな島国だ。距離でならイクパルよりもメルトロローに近く、気候もまたメルトロローの南部地域にととても似ている。夏はイクパル同様に熱い日射しを受けて乾燥し、冬はほんのわずかだけ雪を積もらせるのだ。そうして雪が降ってメジー(海鳥)が越冬に渡ってきたら、いつの間にか春が訪れている。

数えるにも足らぬ短い冬――それが五月も雪に閉ざされるメルトロローとの、ささやかな冬の違いであった。あとは豊かな緑が芽吹き、柑橘類の果物が夏へと向けて実っていく。テナン公国は砂漠と荒野ばかり広がるようなイクパルの中において、唯一緑のにおいを感じさせる国だ。

――メジー(海鳥)が渡ってきたとなると、もう春も近いわけか。

“手紙”に書かれた内容を頭の中でもう一度反芻すると、コンツェは曇った眼差しを西の方角へと向けた。

「還らないわけには、いかなくなったな……」

受け取った二枚の手紙を、コンツェは小さく折りたたんで懐にしまった。

虫が鳴くひりひりとした声が、いつの間にか辺りが完全に闇に包まれたことを告げている。

自分とは遠く離れたところから、確実にこの身に火の粉がふりかかろうとしている。それを生む篝火の火が、今ひっそりと点されたのだと思うと、鉛のようにずしりとした重みが胸の奥に広がっていく。

コンツェは六つまで過ごした祖国を想いながら、いずれは天秤にかけねばならぬこの帝国(くに)の大地を、ぼんやりと眺めていた。

\* \* \* \* \*

白塗りの窓枠をそっと上に持ち上げれば、つんと冷たい風が鼻をついて流れ込んだ。その冷たさが暖炉の火でぼうっとしていた頭を、ほどよく覚ましてくれる。窓向こうには真っ白な城下の町並みが広がり、そのまた向こうに、濃い色を湛えた海が続いている。もうじき日の入りの時刻だから、朱色の太陽で海は赤々と燃えることだろう。

「……メジーが飛んでるわ」

シアゼリタは窓をほんの少し開けたままにして、紺碧の色で染め抜いた厚手の窓掛けを引き寄せる。これなら、直接冷たい風が肌を刺すことはない。

ひらひらと、風を受けて揺らめく窓掛けを眺めて、彼女は微笑んだ。

「コンツ兄さまにもお見せしたいものだわ」

六つ離れた「兄」だったが、ほかの兄弟たちと比べたら随分と話しやすい人に数えられる。幼い頃、よく外に出たいと泣いていた自分をなだめ、こっそり王の部屋の露台まで連れて行ってくれたものだ。ここから見える景色は、テナンの中で最も美しい眺めなのだと。外に出るよりも、ここから地上を眺められることのほうが、遥かに貴重で責任の重いことなのだと諭しながら。

「わたくしにあんなことを言っておきながらコンツ兄さまは、侍従たちの目をかいくぐるのがお得意だったわね……」

抜け出さぬよう万全の体制で見守っていても、いつの間にやらその小さな隙をついて城下に降りて、また戻ってきているような人だった。おっとりしているのに、進み始めたら誰にも制御しきれぬような熱さを持っている。恐らくは本人でさえ把握し切れていないような何かが、あの頭には眠っているのかもしれない。なにせ、あの才知に富んだと云われる三人の始祖たちの血を、あまさず引いているのだから無理もない。それがとても羨ましく、そしていつも誇りだった。

「シアゼリタ」

無人だったはずの室内に、人の声が入り込む。

一瞬どきりとして、シアゼリタは窓枠から身を離した。

「どうなさいましたの」

半ば驚いた目を部屋の入り口へと向ける。

そこには踝までを長套(マント)で覆い、旅装束を整えた一番目の兄王子——デーテンの姿があった。濃茶の髪はうなじのあたりできっちりと束ねられ、背筋を辿って垂れている。先触れもなく妹の部屋を訪れることなどめったにしないお人なのに、一体どうしたものだろう。

シアゼリタはデーテンの前まで進んでいって、しとやかに頭を下げ膝を折った。北国式のその親しげな挨拶に、デーテンは苦笑を返し、ささやかな遊びにつき合ってくれる。年齢三十をゆうに越えていて、今年三人目の子供が産まれる予定らしい。あまり噂は流れてこないが、それなりに子煩悩に暮らしているのだと伝え聞いている。少し気難しいところがありはするものの、無口な次兄と比べれば随分と人当たりのいい性格をしているのを、シアゼリタは知っていた。

「急にメルトロウの使者をお迎えすることになった。王都のあるリィネス港ではなく北の沿岸のボン・ハリ港にご到着の予定だ」

「では、ルホンデ市領へこれから？」

旅装束のわけに納得して問うと、デーテンは頷いて、ふと周囲に目を配った。控えの侍従を気にしての行動なのだろう。

「ハネア・トルシ婦人もティリ・ヤローシテ婦人も私用で出かけています。一時ほどで戻りくるはずですから、しばらくは誰も」

「そうか……ならばよいのだ。私が急ぎ訪ね来たわけを話そう。シアゼリタ、実はお前に縁談の話があるのだ」

「縁談？ ……それは喜ばしいことですわ」

去年の秋で十四になったから、そろそろではないかと思っていた。母は十三になったその日に王妃となったというから、少し遅いくらいだ。

けれどデーテンの険しい色を湛えた瞳を見て、首を傾げる。人生が五十年という短さのなか、婚姻は早い方がよいとされている。格別変わったことでもなく、シアゼリタ自身覚悟はとうにできていること。未練がまったくないかというなら、嘘になるが……。それでも、喜ばれこそすれ、兄が浮かぬ顔をしなければならぬ理由を、シアゼリタは理解できなかった。

「昨年よりいくつか候補が拳がっていたのはお前も承知のことだろう。私がこれからお迎えしに行くのは、そのひとり——メルトロ王国の手の御方だ」

「メルトロ？」

今度は本当に驚いて、シアゼリタは唇を振るわせた。

イクパル本土へ嫁ぐことになるとはばかり思っていたのに……。出るはずの無いその名は、イクパルとは停戦中にある国のもの。婚姻を結ぶことは、ある種帝国本土への裏切りにもとれる行為。

「そのお相手というのが、かの国の丞相——我が国では宰相にあたる方だ」

国王ではないものの、国を動かす地位に就く者に嫁ぐことは大きな意味を持つ。立場的に下位となるだろうテナンからの迎えの使者が、“第一王子”であるのも、ようやく領けた。

「わたくしは、その方と結婚することになるのですね？」

「ああ、いいや……まだ確定事項ではないのだが。お前も心づもりをしておくがいい。敵国に嫁ぐとあらば、気苦労も多かろうからな」

「はい」

デーテンの顔を見上げて、シアゼリタは微笑んだ。こうして心配してくれている、それだけで嬉しいものだ。どこへ嫁ぐことになろうとも、それは王族に生まれた者の定め。優しい兄弟たちに囲まれて、さしたる苦労も味わわずに済んでこられたのだから、今度は自分が頑張らねばなるまい。

「ボン・ハリまでは片道で二日近くかかる。——妻も子供たちもお前に会いたがっていたから、一度宮に来てくれると有難い」

シアゼリタは小さく笑って、頷いた。四日間、残していく妻子を気遣う心根の優しさが、伝わってくる。寂しがっている彼女たちに、顔を見せてやってほしいと。

「それは喜んで伺いますわ」

デーテンは小さな頃にしてくれていたように、シアゼリタの前髪を掻き分けて額に唇を寄せた。

「もうひとつ……」

「はい？」

去りかけた足をふととめて、デーテンが口を開く。

「気になっていることがある」

振り返りざま、肩を掴まれ引き寄せられる。先ほどとはうって変わった厳しい顔が、シアゼリタを見下ろしていた。



「第二王子は東のハインデ市領に、第三王子は王都にいるが急な病で一昨日から臥せっている。第四王子は西端のヘズ市領、第五王子はお前も知っての通り帝都だ。……王子たちの誰もが皆、最低四日は王宮に詰め寄れない事態になった」

「……どういふ」

「王太子選定が、近々執り行われるらしいという話だ。我々が居ない期間を狙われたら――、もう防ぎようがない」

テナン国王はすでに高齢で、退位の準備も整えつつある。選定に近いことは、年が明ける前から囁かれていたことだった。そして、元老たちが誰を推すつもりでいるのかも。

「コンツは、お前に手紙を寄越していないのか。あいつは今、何をやってる」

「秋に誕生祝の手紙をいただいてからは、何も……。ですが、サテハージ兄さまのご病気はお風邪のようなものと伝え聞いていますわ。サテハージ兄さまだけでも、」

「サテハージが王太子に推挙されるならそれでいい。一度拒否したら再選定まで七日はかかるからな。だが、他の王子の推挙を否認するのに必要な王子たちの人数は総数の三分の一。つまり、最低でも一人以上は王子が出席していなくてはならない」

「では……、」

「謀られたのだ。こんなにも都合よく、王子が不在になるということはない。お前には言わずにおこうかと思ったが、この役目はお前が一番適している。コンツを呼び寄せろ、シアゼリタ。テナン公国はこのままでは、危ういところへ進んでいくことになる」

メルトロウ王国との婚姻、そして皇帝に仇する王太子の選定……。間に合うだろうか。翼の速い鷹を飛ばしても、帝都まではぎりぎり一日。手紙を受け取りすぐに経ったとしても、よほどいい潮風にでも乗らぬかぎり、三日とかからずテナンへ辿り着くのはほぼ不可能な話だ。

肩に乗せられたデーテンの手のひらが、汗でじっとり熱くなっている。シアゼリタは頷いて、急ぎ手紙を書くため、自らの卓へと駆け寄った。

すっかり日の落ちた闇の中、虫が鳴くかすかな声音が、やわらかく響いていた。

いつもどおり鍛練場を出て、コンツェは目を細める。

暗い路地のほうに建つ建物から、橙色の光がもれ出ていた。暗がりばかりを見つめていた目に、そのやわらかな眩しさがちりちりと痛む。

「もう晩飯どきなんだな」

薄くのしたイム(パン)を炉の火であぶる香ばしい匂いが、どこからか漂っていた。そのイムをひたして食べる、タナと呼ばれる香草と香辛料をふんだんに混ぜたスープの香りも。

鍛練場と軍轄の建物のある区域との隔たりは泥壁でできていて、子供の背丈ほどの高さしかない。東と西、ちょうど対になる方向で馬が三頭、首を並べて進めるほどの入り口が切りとられていて、その両方に軍轄の建物が連なっている。

西側が兵舎と中枢部、東側が上級兵士たちの家族や、彼らが営む兵士用の食事屋だ。コンツェが出たのは東側で、いわゆる食事屋の並ぶ方角だった。

イクパルの家々は、泥を塗って固めた壁の上部に、小さな四角い穴を開けている。それは食事をつくる炉がそばに配してあって、家のなかに煙がこもらぬようにするための仕組みだ。このあたりに連なる建物――家、食事屋、宿屋などさまざまあるが――も、その例外ではない。この小さな“まち”は、城の門を潜った場所にあっても、見かけはほとんど城下と変わりが無い。こちら側で帝宮と同じ、整然とした風体をもち、砂岩でつくられているのは、鍛練場の西側を出た軍中枢部の建物ぐらいだ。

「あ、」

目前に並んでいる食事屋のひとつから、もくもくと白い煙がたち昇っていた。イム(パン)とタナ(スープ)の香ばしい匂いは、あそこからくるものに違いない。

ふと、胸元に触れてみて、コンツェは顔を曇らせる。

しまってあったままの、手紙の固い感触が手のひらに伝わった。

「……飯でも食うか」

酒でも飲んで、少し頭を冷やすべきだ。

足どりもしっかりとしていたし、冷や汗だってかいてはいない。――ただ、頭の中だけが、霞がかかったようにはっきりとしなかった。

昼間に“手紙”を受け取ってからずっと、頭に浮かぶのは、祖国のことばかり。

運んできた“鷹”の顔は、確かに妹に忠するもの。……信用はできる。だが、情報が本当のことだとしたなら今自分には還るしか道がない。

ぎりぎりの刻限は夜明け前。今日の風向きは頬を撫でるほど穏やかで心もとないが、船で向かう前に“鷹”をつかって帰国を告げたなら、“こと”を遅らせることが叶うかもしれない。

「……？ あれは、」

そうしてぼんやりと立っていて歩こうとしたとき、目線を上げた先の光景に、コンツェは思わず目を見開いていた。

遙か向こうから人影が二人、こちらに向かって駆けてくる。微妙な勾配になっているから、こちらからなら迷路のような道筋も見通すことができた。

アバヤを纏った女と……小姓衣の少年。

「フェイリット？」

小姓衣のほうではない。前を走る、アバヤを着ている女のほうだ。後ろを追いかける少年はフェイリットの影になって顔まではわからないが、鬼ごっこでもしているのか。それにしても必死の形相を浮かべていることを不審に思いながらもそのまま視線を向けていると、彼女の湖水色の瞳が、しっかりとコンツェを捉えた。

「コンツェ！」

より一層近づいた彼女が寸でのところで立ち止まり、名を叫ぶ。その必死さに圧され、コンツェはとっさに両腕を広げてしまった。

――ぶつかる……！　すぐさま腕の中にどん、と衝撃がはしり、コンツェは小柄なその身体を抱き止めるために両足を踏ん張る。

「助けて……！！」

ばれそうだと、勢いのまま抱き上げる形になったコンツェの耳元に、フェイリットが小声でまくし立てる。視線を巡らせると彼女を追っていたのはアンの小姓の――たしかテギという名だったか。

コンツェは微かに頷いて、抱き上げていたフェイリットを静かに地に下ろし、背中の方へと導く。

「お前はアンのところの？」

小姓に向けてそう聞くと、戸惑ったように返事が返る。

「……はい、その子を送るように言われて」

テギの群青の瞳が、探るように背後のフェイリットへと向けられた。コンツェは苦笑して、彼のほうを見やる。

「そうか、ありがとう。戻って俺が引き受けたって、アン少尉に伝えてくれないか？」

「……承知しました」

およそ承知などしていないような曇った顔で、テギが軍隊式の敬礼を返してくる。

「お前も気をつけて帰れよ」

振り返ってフェイリットを促し、一度兵舎の方へと連れて行く。来た道に戻るのでは、諦めぬテギがこっそりついて来る可能性があったからだ。

しばらく歩いて周囲に気配がないことを確かめると、フェイリットがほっとしたように息をついた。

「死ぬかと思ったー……」

大げさだな、そう言おうと隣を見下ろすと、拳でとんとん心臓のあたりを叩いている。思わず苦笑して、コンツェは納得した。

「アンの所に行ってたんだな」

「うん、腕の具合を見てもらったの。まさか送っていくって言われるとは思わなかった」

もう小姓も帰ってるころだと思ったのに。そう付け足して、彼女はうんざりと息を吐いた。

「その格好じゃあな」

そういえば、とフェイリットは顔を顰める。

「小姓衣で行くって言ったのに、着て行くようになってうるさく言われちゃって。やっぱり重くて大変だったわ」

続いてぱっと黒いアバヤを脱ぎ去ると、ターバンを巻き小姓衣を着た、いつもの彼女が現れる

。

「ほら、アバヤも取ったし。もう女だってわかんないでしょう？ 夜道も平気だよ」

女だから夜道が危ないというわけでは、全然ないのだが。

あどけない顔で笑む愛らしい「小姓」を眺めて、コンツェは嘆息した。

ひと段落したところで、イムタナの匂いがまた、鼻腔をくすぐってくる。食事をしようとしていたことを思い出して、コンツェはわきにいるフェイリットの頭を、見下ろして言った。

「飯でも食わないか？ このあたりはちょうどいい店が並んでいるし、奢るよ」

「ティカティ……赤い？」

隙間なく並ぶ建物の一角で、土壁に埋め込まれた手のひらほどの小さな看板を読みながら、フェイリットが首を傾げる。

フェイリットは、食事の誘いに応じてくれた。「そういえば、おなかすいたね」と。走ったせいで噴き出したのだろう額の汗を拭いながら、彼女らしい、人懐っこい笑顔を見せて。

はじめは、沈んでいた気持ちを晴らすのに、一人で酒でも飲もうかと思っていた。だが、やはり連れがいるのはいい。それも会いたいと思っていた人物に、幸運にも会うことができた。テナンに旅立ったら、たとえ無事にここへ戻りくることができたとしても、一月はかかってしまう。そうになってしまう前に、せめて顔だけでも見られたらと考えていたのだった。

「ティカティク亭。赤い鳩って意味さ」

選んだ食事屋は小姓時代、ワルターに連れられて何度も通ったことのある馴染みの店。少し入り組んだ通りにある、あまり知られていない小さな場所だ。当時から“大佐”の役職にあったワルターは、部下に奢ってやる以外の、本当に酒だけを楽しみたい時だけにここを利用していただろう。彼の元から離れた今、まだここに訪れているのかはわからない。しかし、色々と面倒なことが多いコンツェとフェイリットにとっても、ここは絶好の店だといえる。

「へえ、いい匂い。胡椒スープの匂いだよね」

「ああ、典型的な家庭料理だからな」

ティカティク亭も例に漏れず、タナ(スープ)の香りが軒先まで流れ出していた。

「ほら、先にくぐれ」

ところどころが擦り切れて、穴の開いている麻の垂れ幕をめくると、よりいっそう独特な香草の匂いが鼻腔に流れ込む。

「わあ」

店の中に入ったフェイリットが、ため息のような声を上げた。

「イクパルの店、初めてに入った」

店の床は土で固められ、その両側に一段高くなった場所がある。絨毯が敷かれ、そこで客が食事をするつくりだ。きっとフェイリットが想像していたのは、卓と椅子がいくつも並び、長台の裏手に調理場があるような、メルトローやリマの形式なのだろう。イクパルの家々は、あくまで床上での生活を基礎とする。

別区画にある厨房にいるのか、店主の姿は見えなかった。

「座ってようか。店主もきつともうすぐ出てくるだろうから」

「そうだね、」

店主は、コンツェたちが座ると間もなく現れた。予想通り厨房へと続く垂れ幕の向こうから、大きな体がのっそりと出てくる。太っているわけではないのに、つきすぎた筋肉と骨格のせいで、どうにも“のっそり”という表現が似合ってしまう。

彼——イディンバは、コンツェの顔を一目見て、ぼかんと口を開けた。

「――……お前、まさかコンツェか？」

イディンバは大きな身体を揺らすようにして台の上に上ると、コンツェの頭を鷲掴んで大声で笑う。

「よおお、元気だったのか！」

こういう人だったな、と思い出して、コンツェは苦笑しながら頷いた。

「お久しぶりです」

もうかれこれ何年も顔を合わせていなかったが、それでも覚えていてくれたらしい。

わきに座ったイディンバに会釈して、コンツェは続けた。

「お元気そうでなによりです」

「なにを他人行儀に。毛も生えねえ頃からお前の顔は知ってた。だが、ここ三年は見てなかったんじゃないか」

「ええ、大佐に軍へ入れてもらったので」

もともと、文官になる気はまったくなかった。卓の前にじっと座っているということが、堪らなく苦痛だったのだ。今もたいして変わってはいないが、中隊長の職務に卓仕事がないかといえは嘘になる。考え始めればきりがないが、要は性分なのだと、コンツェは思っていた。外で馬を駆り湾刀をふるう。それが自分の気質に合うのだと。ワルターの小姓になって、そのまま軍人の道に進むことになったのは当然のように思える。

「はあ、もう一人立ちか。それにしちゃ背も伸びたもんだなあ、俺を越しちゃうなんてな。…  
…で、そいつがお前の小姓か？」

視線をフェイリットに下げて、イディンバが問う。

「いえ、俺はまだ小姓は取れませんよ。この子は別の方の小姓です」

イディンバは肩を竦めて口の端を引き上げると、フェイリットに笑いかける。

「“この子”、とな。坊主、名は？」

「……フ、フェイリットです」

戸惑ったように口ごもりながら、向かいに胡座をかいて座るフェイリットが答える。

「よし、さあフェイリット、何が食べてえのか言ってみろ。ちなみに昨日入ったマトウのタナは美味しいぞ」

「マトウの、スープ？」

北方の民はマトウを食べないのか、フェイリットは初めて聞くような顔をしていた。

イディンバは得心いったように頷き、説明をはじめめる。

「なんだ、そうかお前は北方の顔だからなあ。マトウは砂漠に生る、赤い実の野菜だ。水は一切入れねえで、マトウがもってる水分だけでつくるタナー―スープだな。マトウにたっぷりの香辛料と塩だけの味付けをして、炉で煮込むのさ。ひとことで表すなら、辛くて酸っぱい味だ」

説明を聞きながら、コンツェはそうか、と頷く。

「じゃあ、軒先に流れてたのはマトウ・タナの匂いだったんですね」

「そうだ。他のタナも作れるっちゃ作れるがな、どうする」

炉にかけてくつつつと一日中温めておくタナは、頼まれればすぐに目の前に出すことのできる

料理。マトウ・タナも他のタナも、きっとそう時間は変わらないだろう。

「俺はお前に任せるよ。何がいい」

初めてだというフェイリットに選ばせてやろうと、コンツェは厨房わきの壁を指し示した。壁には料理の品数を記した薄紙が貼られている。

「じゃあ……マトウ・タナに、イム(パン)ってつけられるんですか？」

「もちろんだとも。イムとタナは切り離せねえ関係だからな」

フェイリットは薄紙を穴のあくほどにじっと見つめたあと、小さく笑って「それにします」と頷いた。

「了解」

よっ、と声をたてて立ち上がり、イディンバは厨房へと戻っていく。料理が出るまでこれでも飲んで、と碗に並々ともった酒をふたつ、目の前に置くことを忘れなかった。

「楽しみだなあ。いつも賄いでイムタナは食べるけど、マトウは初めて聞いたよ」

「他にも食いたいものがあつたら頼めよ。ほら、あれはどうだ、チェクチェ口の甘焼き」

甘くてさくさく歯ごたえのする焼き菓子は、城下の若い女の子に人気だ。

「えっ、いいよ、そんな」

「嫌いか？ 菓子」

「す……好きだけど」

遠慮しているのだろう。申し訳なさそうに肩をすくめる彼女を微笑んで眺め、コンツェは厨房のイディンバに声を上げる。

「イディンバ、帰りにチェクチェ口包んでもらえますか」

すぐさまにはいよ、と返事だけが返ってくる。

その返事を聞きながら、コンツェは酒の入った碗を持ち上げて中身をあおった。

一人でこなくて、本当によかったと思う。フェイリットがいるなら、歯止めが利いて悪酔いもしなくて済む。

「……どうした？」

ふと視線を落とすと、じっとこちらを見つめるフェイリットと目が合った。光の下で微妙に色彩を変える湖水色の瞳は、見つめられるとなぜだか反らせない。

「いや、コンツェもお酒飲むんだ、と思って」

「……飲まないように見えたか？」

「うん」

フェイリットはいたずらめいた顔で笑って、自らもその碗に口をつける。

「晩酌なんて、久しぶりだわ」

嬉しそうにそう言うフェイリットを見やり、コンツェも目を細めて笑った。

「まったく、大丈夫なのか？ そんなに飲ませやがって」

向こう側の厨房から、イディンバが眉を顰めてこちらを覗き込む。

「そんなにして...二杯だけですよ」

絨毯に丸くなり、起きているのか寝ているのかわからないフェイリットを見やって、コンツェは顔を曇らせた。

“そんなに”とは言うものの、実際は酒瓶一本すら空けていない。小さな碗に並々と盛られた酒を二杯だけ、食事の合間にちまちま飲んでいくくらいだ。

そっと彼女の顔を覗くと、耳まで真っ赤になっている。これは本当に大丈夫なのだろうか。

「お前を基準にすんじゃねえ。ありゃ蒸留酒ワDEMだろ。夜風にでも当たって覚ましてやれ。そのまま帰すわけにはいかねえだろ」

イディンバは、投げやるように言った。ワDEM、といわれてそうかとコンツェは青ざめる。

「ワDEM？」

「お前らいつもそれだったろ。なんだ、気づかねえで飲んでたのか」

度が強いくせ、喉が焼けるような特有の癖もまったくなく、飲み続けたら死ぬまで飲めるほど強い酒。ワDEM.....別名を炎酒とも言う。

祝い酒として振る舞われるのが普通だったが、“いつもそれだったろ”というイディンバの言葉で、ようやくワルターが好んでいたのを思い出した。それによく付き合わされてコンツェも飲んでいたのは違いないが.....。

「.....なんで早く言ってくれなかったんですか」

「何でって、お前、ガキの頃から平気そうに飲んでたじゃねえか。そのお前が連れて来るくらいだから、そいつも強いんだと思っちゃったんだ」

平気そうに、というイディンバの言葉に、思わず渋い顔をする。

平気なわけがない。普通の酒として飲めるようになったのなど、十八かそこらからだ。それまでは必死に気を張り詰めて、ワルターの酌に付き合っていたのを覚えている。

ワDEMに二杯だけ、というのは通用しない。ふつうの酒なら一瓶や二瓶、軽く空いてしまう分量となる。飲めぬ者が飲んだなら、中毒で死んでしまうほどの。

「すみません、とりあえず上、借ります。あとで水を」

「おう、襲うんじゃねえぞ」

あんなとこでする度胸はお前にゃないだろうが。そう付け足した店主に肩を竦めて見せ、コンツェは立ち上がる。

周囲から丸見えの“屋上”でなどと、そんな度胸は欲しくはない。

「フェイリット、歩けるか？」

背中をぽんと叩いて起こしてやるが、どこの言葉だかわからぬ返答が返ってきただけだった。国境に近い出身とはいえ、一体どれだけの言語が操れるのだろう。コンツェは言語には疎かったが、今の響きはメルトロ一語のように聞こえた。出会ったときはリマ語を話していたし――、



つくづく不思議な少女だ。

「フェイリット」

そっと体を起こしてやると、かくりと仰け反って、そのまま身を預けられる。水色の瞳は瞼のむこうに完全に閉ざされ、安らかな顔がこちらを向いていた。

「度胸の見せどころ、か？」

背後からの声に振り返ると、イディンバが大仰に節目をつけて言いながら、にやりと笑った。

「こっちの階段はお望み通りの屋上で、あっちを登りゃあ客室だ」

ひゅっと目前を横切る銀色のものを空中で掴み取ると、手のなかに小さな鍵が収まっている。

しばらく鍵を見下ろして、コンツェは苦笑した。

「嫌がる子を丸め込むのは得意じゃないんで」

イディンバにさっと投げ返して、そのまま絨毯の敷かれた台に腰をかけた。

「……ほらフェイリット、おぶされ」

軽く揺すってやると、ぼんやりと目を開けてのろのろ背中に上り来る。それぐらいの意識は残っていることにコンツェは安堵しつつ、彼女が落ちてしまわぬように支えた。

「掴まれ、」

後ろから、やわらかな腕が伸びて首元に絡まる。コンツェは眉をひそめて、立ち上がった。ささやかで、やわらかい重み。両腕で抱えたほうがよかったかもしれない。これは結構、つらいものが――……、

「サミュン」

背中から呼びかけられたその言葉に、コンツェは我に帰る。

「俺はコンツェなんだけどな、フェイリット」

階段をのぼりながら少しだけがっかりして、コンツェは首にある彼女の腕をぽんぽんと叩いた。眠っているような吐息が返ってきて、思わず笑ってしまう。

階段のつきあたり、小さな出口に掛かる垂れ幕を押し開き、腰をかがめて仕切りをまたいだ。

「ほら、ついたぞ」

相変わらず風は生暖かいが、すっとした外気は酒で火照った体に心地がいい。

フェイリットをゆっくりと地面に下ろし、壁際に寄りかからせる。

自らもその隣に座って、コンツェは一面の星空をゆっくりと見上げた。

《 お兄様、お元気でいらっしゃいますか。

きっとお兄様のことだから、平和そうなお顔をして、相変わらず城下をぶらぶらお歩きなさっているのかもしれませんがね。そう考えると、不思議と心が穏やかになります。わたくしは自由に外には出られない身だから、少しだけ羨ましく思うけれど。

皆がお兄様のお顔をご存じないと、あまり過信してはだめよ。公子なのに中隊長、という変わった肩書きはけっして地味ではなく、逆に人目を惹くもの。

テナンにはひと足早く冬が訪れました。越冬するために北の海から海鳥たちも港に帰ってきて、鳴き声がとても騒がしいの。秋にお会いできなかったこと、とても残念に思っています。わたくしの誕生会、ぜひおいでいただきたかった。もう、十四歳になりましたのよ。お兄様のあとをついて、庭森を駆け回っていたのがつい昨日のこのように思い出されますのに。月日とは、無情なほど早く過ぎ去ってしまうものですね。この分だとあっという間に婚姻が決まって、お兄様に会わないうちに嫁いでいかねばならないかも。

シアゼリタは元気です。少しだけ、やはり婚姻のことが気になっているけれど。実は候補に挙がっているのが何件かあって……。まだ、決まったわけではないのですが。なんだか心苦しい毎日です。できるなら、このまま王城に留まりたかった。なんて、我がままですわね。これ以上我がままを考えてしまわぬうちに、お兄様がお顔を見せてくださるのを待ち望んでいますわ。婚姻のお話は、進んできましたらまたお伝えしたいと思っています。》

\* \* \* \* \*

頭上に迫るほどの、満天の星空。方々から散る流星のひかりが、絶え間なく視界を横切っていく。

「満月じゃないのが残念だな」

コンツェは呟きながら、自分の声が少し震えているのに気がつく。

——明日の今ごろは、きっと海の上。テナンへの海流を、上っていることだろう。

久しぶりの故郷だというのに、すこしも気分が浮き上がらない。

屋上に連れてきてから、すでに二刻ほども経っていた。本当なら客室の、柔らかい寝台に寝かせてやるべきなのかもしれない。しかし自分も男。コンツェには程よい酒の入った頭で、自分の理性を抑えきれぬ自信が持てなかった。依然目覚めないフェイリットはというと、屋上を区切る壁に背をもたげ、コンツェの肩に頭を預けて、安らかな寝息を立てている。こうして頭を預けられているだけでも、抱え起こして唇に触れたい衝動に堪えるのに必死だというのに。

「なあフェイリット」

眠っている彼女に、尋ねる。

「俺と逃げよう——って言ったら、お前ならどうする」

問いの返事を得たとして、現実はその簡単にはいかない。ならばどちらの返事も、聞かないほ

うがましかったが、

「……俺は、逃げようとしてるのか」

気づいてしまえば、なんのことはない。怖いのだ。権力も王位も帝位も、本当はすべて捨て去るつもりで本土へ渡ってきた。だから軍に所属しても、さしたる昇進も受けずのらくらと過ごしてきたのだ。なのにここまで来て、どうして捨てることができぬのか。

足が、気持ち、テナンへと向きかかっている。国など知るものかと、公子の位を返上し、ただの軍人として生きる道もあろうに。

それを選ぶことができぬ「公子(じぶん)」が、どこかで歯止めをかけている。

「……コンツェ」

微かな声が上がって、コンツェは隣を見下ろした。

わずかに顔を上げたフェイリットが、床の辺りに視線をさまよわせている。しばらくそうして寝ぼけたようにぼんやりとしていたが、ふとコンツェに戻ってきたその瞳は、しっかりと焦点が合わせられていた。

「大丈夫か」

肩越しの温もりが離れて行って、なんだか少し物寂しい。そんな気持ちを味わいながらも、コンツェはフェイリットの額の辺りを軽く撫でてやった。

「うん……あんなに強い酒だったんだね、びっくりした。まだ頭がクラクラしてる」

「すまない、気づかなくて」

「ううん」

ふらふらと立ち上がって、フェイリットは頭上を見上げた。

「わああ」

雲ひとつない、遥かに広がる星の大海。

砂のつぶに似たまたたきが、億千ほどもあろうかという宝石さながら、きらきらと空に輝いていた。十を数える前からここに長く住んでいるのに、コンツェでさえ、こんなにも冴え渡った夜空を見上げたのは初めてだった。

「流れ星……！」

フェイリットは感嘆の声をあげるままに、駆けだして仕切りの塀に両手をかける。危なっかしいその動作をはらはらしながら眺めて、コンツェは自らも壁から背中を離れた。

「さっきまで寝てたやつが元気だな……、落ちるなよ」

歩いて行って隣に並ぶと、空ばかり眺めていたその水色の瞳が、コンツェへと下ろされる。

「だって、こんなにすごいアルマでも見たことないよ。——それに、ここから落ちたって死なないから平気」

あどけなく笑ったあと覗きこんで、塀から通りを見おろすフェイリットの仕草に従うが、コンツェは慌てて身を引き戻すことになる。

平気では決してない。酒場から階段を上れば、屋上は四階建てに近い高さにもなる。受け身のとれる屈強な兵士ならともかく、華奢な少女の体が叩きつけられればむしろ死ぬ確率の方がうんと高いはずだ。

「試してみる？」

わずかに細めて、こちらを見つめる水色の瞳。からかうような、真面目なような、判断の付かぬ顔つきだった。

「まだ酔ってるんじゃないのか」

「そうかもね」

冗談めかして苦笑するフェイリットの横顔を、コンツェはそれともなく眺めていた。あまりに澄んだその瞳は、横から見ていても向こう側が透けて見えそうなほど透明だ。ずっとこらえていたものが、じわじわと溶け出してくる。

思わずその頬に手を伸ばしかけたところで、思い出したように彼女が振り返ってしまった。

「わたしは、もう逃げてきちゃったのよ」

「え？」

「国も両親も、育ての親の願いも、自分の置かれてる立場も——そういうの全部捨てて、逃げてきちゃったんだ。わたしのせいで、死んじゃった人まで。今もきっと、いろんな人に迷惑かけてる」

ひどい奴って、思うでしょう。そう残して、フェイリットは横顔のまま、苦笑した。痛みを覆い隠すような笑顔。

コンツェは眉をひそめて、自嘲した。きっと先ほどの“独り言”が、聞かれていたのだろう。……それでこんな話を。

「大切な人だった。もっとわたしがしっかりしてたら、あんなことには……。でも、どっちの道が正しかったかなんて、今になってもわからない」

「フェイリット、」

「逃げるなんて、言わないでコンツェ。何があったのかはわからないけど、どっちを選んでも辛いことに変わりはない。逃げることにはならないわ」

——気づいたときにはもう、彼女の腰を掴み唇を重ねていた。

腕の中で、小柄な体がかすかに身じろぐ。拒絶されるかもしれない……そんな怯えは、頭の隅に吹っ飛んでいた。今はただこの少女が、たまらなく愛しい。

「……テナンに戻るかどうかで、悩んでたんだ」

「テナン、って」

唇を手で押さえて、真っ赤になっているフェイリットに頷く。

「故郷だ。けど、おかげで決められた」

フェイリットの金の髪は、月夜に照らされた砂漠の色に似ている。思わず触れたいくなるような、くるくると巻かれたやわらかい髪。指に絡め後ろに梳いてやって、コンツェは笑みを浮かべた。

「行くよ、テナン」

そして必ず、戻ってくる。……必ず。この少女に想いを伝えるために。

「だからどうか、忘れないでいてほしい」

このかがやく星の海と、俺のことを。

君が覚えていてくれるなら、またここへ戻って来ることが、きっとできる。

――かくて星空の下、赤々と燃える宮殿で、かれは問う。

\* \* \* \* \*

《 ところでこんな手紙を急に――それも人目に渡らぬように計らってまでお兄様にお送りしているのは、少しだけ気になることがあったからです。長々と前置きをしてしまっただごめんなさい。火急の知らせなのに、あまりにも大きなことに、いったいどう記したらいいか……いいえ、こんなことを書いていてもだめですね。

はっきり申し上げますわ、コンツ・エトワルト兄上。

テナンはじぎ、王太子の選定をいたします。それに皆が、誰を推そうとなさっているか。もうおわかりですわね。

お隠しになられていたお兄様の素性が、王宮の中枢部に知れ渡りつつあるのです。

――お兄様が、皇帝陛下の弟君だというお噂が。

これは皇帝陛下に取って代わろうと目論む人たちには、格好の神輿に見えるに違いありません。わたくしたち兄妹も、どうにか大事に至らぬように計らうつもりです。けれど、渦中のお兄様がいらっしやらないことには……。

選定は本人の出席の有無とは関係無く執り行われます。拒否権が、その場に出席しないかぎり得られぬのは、お兄様もご存知のことでしょう。コンツお兄様、一刻も早くお帰りになって。このままでは、お兄様の一番望まぬことが起きてしまいます。

この手紙が変なところで二つに途切れているのは、運び手を二人に分けたから。後半の手紙の運び手には、万が一他人に渡ることがあったなら、事前に燃してしまうよう言いつけました。誰かの目に触れるとしたら、前半の手紙だけになるはずですが。だからもしこれを読んだなら、必ずテナンにお越しくください。お兄様のご決断は、もうお決まりのこととシアゼリタは信じています。

運良く運び手が二人とも、お兄様のところへ届きますように。》

\* \* \* \* \*

「いかが致しますか」

読み終えた二枚の手紙を、スリサファンは元通り、鷹の足に結べるほど細かく折りたたんで、両端に蜜蝋で封を施した。

――まさかこの国に、そんな裏があったとは。

あの純粹で人の良さそうな青年が、テナンの公子というのは公のこと。しかし本当は、テナンの血筋でも何でも無い。先帝の隠し種だとは、一体誰が思うだろう。

ジ・ゲーマ

「二鷹、カランヌ殿とノルティス国王陛下、両方に伝令を。せっかくですから公女のささやかな知恵と思いやりは、このまま届けて差し上げましょう」

“鷹”と呼ばれた女が二名、スリサファンに向けてかしずいた。

“鷹”——グータはいわゆる“鷹を使う使者”。必要な国々に潜んで、鷹を飛ばす始発点と終着点となるのが役目の者たちだ。

隠密と諜報に長けた彼らは、普段はまったくそれとは知られず生活している。この帝都には、メルトローをはじめ各国々の“鷹”が数え切れぬほど潜んでいるはずだった。

絶対の信用を持ち、かつ民草に混じわり生きることのできる者でなければ、その役目は果たすことができない。

「それにしてもよく機転の利く公女なこと」

手紙を何通かに分けることは鷹を遣う上では定石のこと。しかし、そのうちの一通を餌にして、万一の場合を考えると、あれ一通だけでは、確かに手紙の本すじはわからない。二鷹とも、こちら側の手の者でなかったなら、今頃はこの事態も知らぬところとなっていたはず。

「では、私はこのままエトワルト公子の元へ」

「私は少し時間を置いて公子へお届け致します」

二鷹は立ち上がってメルトロー式の礼をしたのち、ひらりと路地裏へ消えていった。

スリサファンは脱いでいた黒のヴェールをまた目深に被り直し、城のほうへと身体を向ける。

「あの純粋なお坊っちゃんが、果たして<sup>きょうだい</sup>皇帝を殺すことができるか」

その気概があ若者にあるのならば、メルトローがイクパルを手に入れる日は、ずっと間近に迫っている。

「……この国を破壊する王として、名を遺すにふさわしい」

——スリサファンはもう一度帝宮を見上げると、そこへむけて歩き出した。

ひりひりひり……大きく開けられた窓の向こうから、虫の鳴く声が静かに響く。

ウズに命じられハレムに来て一日目。大浴場で骨折の完治に気づき、アンの元へ行きたいと言った願いは、あっさり承諾されることになった。話を聞いたタラシャが「今日中には行けるでしょう。話を通しておきます」と。

そうして部屋まで同行したタラシャは、すっかりとのぼせてふらふらになっているフェイリットを長椅子に座らせて、あとで顔を見せるからしばらく休んでいるようにと残し出て行った。

……あれから数刻は経つ。けれどもまだ、彼女の姿はどこにも見あたらない。

「ああ、」

フェイリットは窓際にあつらえた長椅子に身をもたげながら、ぼんやりと虫の鳴く声ばかりを聴いていた。

「暇だわ……」

こんなところに押し込められて、いきなり一人になるとは思わなかった。ハレムの中に一緒に忍び込んだはずのトリノも、彼自身にあてられた仕事があるのかフェイリットを大浴場に残すと一人忙しくどこかへ行ってしまった。

最近ではウズも随分と相手をしてくれていたので、話す相手のいない状況は久しぶりなのだ。こんなにも寂しく、静かなものだっただろうか。

日が傾きはじめて、うす赤い太陽のひかりが差し込んでいる。内庭に面して大きな窓が開いているため、まだまだ部屋の中は明るいのだ。そんな明るさを見つめて、フェイリットは考えるように眉をひそめた。

「もしかして私、ここでも小姓まがいのことを……」

てっきりジャーリヤとして入れられるものだとばかり思っていたが、その「まさか」を考えると、なぜだか納得できた。第一、自分が本当に <sup>ジャーリヤ</sup> 妾妃 なら、ここには多くの侍女たちが控えているはず。けれど現実にフェイリットは、独りだ。この状況からはどう見ても、“ジャーリヤ”という言葉は浮かんでこない。この国ではハレムにいる女性のすべてを <sup>ジャーリヤ</sup> 愛妾 と呼んでいるようだから、誤謬があってもおかしくはなかった。

「……“侍女”なら、こんなところに寝そべってちゃ駄目か」

どうせ暇だし、ついでに部屋の飾りを見て回ろう——そう思い立ち、壁際に歩き出す。

瑠璃色の小さな花を咲かせるピヒクス、夜空に駆け上る瑠璃色の木馬、朝日に照らされる瑠璃色の森——そういった細かな模様が壁を彩り、天井にまでぽつぽつと広がっていた。

廊下を見たときも思ったが、本当に精巧にできている。

瑠璃色で描かれるそれらの模様は、陶磁でできた象嵌細工だ。よくよく覗き込むと小さな欠片がただ集まっているようなのに、離れてみるとひとつの模様が浮かび上がる。

「不思議」

けっして広くはない部屋だったが、それでもその装飾にはぬかりがない。何百年もの月日、何人も女たちが過ごした、小さな部屋……。

「……綺麗な部屋だわ、」

ハレムの姿を見る前は、イクパル帝宮の畏怖を感じさせる赤さから、きつとここもそうなのだろうと思っていた。だが、一步踏み込んで、フェイリットはその内装に驚いた。

まるで真珠をちりばめたかのような純白――そこに、瑠璃色の陶磁の埋め込みがいくつもいくつも施されている。荒々しくもある帝宮の外観からは、とうてい想像のつかない中身だった。白と瑠璃の壁とは対照的に、それを区切る柱や梁は輝く金で塗られており、壁だけでなく、床から天井から、見渡すかぎり装飾に溢れかえっているのだ。

そんな装飾がハレムじゅう、施されている。もちろんそれは、この部屋でも例外にはあたらなかった。目を見張るほどの豪華さ――けれどけっして“豪勢”ではない。瑠璃色の彩色がそうするのか、フェイリットはどことなく儂さのようなものを感じていた。

「ジャーリヤ・タブラ・ラサ」

唐突にかけられた声に驚いてフェイリットが身をあげると、窓際に置いた長椅子の横に、いつの間にやら女性がひとり立っている。

内庭の回廊から渡ってきたのだろうか。この宮の人たちは裸足が多いために、足音はほとんど鳴らない。

「ジャーリヤ・タブラ・ラサ、もう少しおくつろぎ頂いているかと」

「ええと、」

黒蜜のような肌に、闇色の瞳――歳は五十は過ぎている。先ほどの大浴場（ハمام）では若い女たちしか見られなかった為、ハレムには年配の女はいないものと考えてしまっていた。体型は大柄だが、肉がついているというよりは、骨ばって見える。かけられた声は渋味のある、柔らかい質であったが、その顔を見上げればどことなく恐さが先にくる。“無骨”という表現がぴったりと当てはまる、女性であった。

「わたくしめはジルヤンタータ。あなた様のお世話をつかまつりました、侍女でございます」

「侍女?!」

ゆっくりと、ジルヤンタータは礼をした。まるで重石を垂らした額をつるり、と下げるような、不思議な型の礼。両手は胸の前に軽く組んで、足はメルトロ一式の礼のように曲げたりしない。同じ礼をウズヤトリノもしていたのだろうが、男性がやるのと女性がやるのと、こうも違うもののだとは。それともこれが“ハレム式”なのだろうか。ふと思って、フェイリットは首を捻る。引っかかることがいくつもあった。

「あの、お間違いかもしれませんが、わたしの名前はフェイリットです。それと、ジャーリヤというのも間違いでは？」

タブラ・ラサ。ハمامでもそのような名で呼ばれた。聞き覚えがあるとずっと考えていて、先ほどようやく思いついたのだ。

――タブラ・ラサ、お前はギョズデジャーリヤになる。

ウズが呟いた最後の言葉が、再び耳奥で蘇る。あれは、まさか自分を指したものだたとでも言うのだろうか。それにしても、このジルヤンタータの口ぶりから見ると――

ジルヤンタータが無骨なその頬に一瞬、柔らかな笑みを浮かべる。



「間違いはございません。あなた様のお名は、確かにタブラ・ラサ。ジャーリヤというのも、間違いはございませんよ」

静かな礼とともに再び傾けられるジルヤンタータの額を、フェイリットは言葉もなく眺めていた。

「ジャーリヤ……あの、小姓とか侍女とか、そういうの…ですよ？ ジャーリヤっていても」

「いいえ。あなた様はイクパル帝国皇帝陛下、バスクス二世帝のギョズデ・ジャーリヤであらせられます」

「は……」

二の句が告げないというのなら、こういう時を言うのだろう。フェイリットは勝手に膨らませていた自らの想像を一気に崩されて、ただただぼかんと口を開けていた。

皇帝のギョズデ・ジャーリヤ。それはメルトロー王国でいったなら、“側室”と同意義。離れてしまって久しく、メルトロー王国の事情はわからないが、もしフェイリットが逃亡したことに腹を立てた国王が、それにもかかわらず、未だに「サディアナ王女」の王籍を剥奪していないとしたなら——……大変だ。

何しろイクパル帝国の皇帝が、“初めての妃”をメルトロー王国から得たということになる。そんな大事、国家的にみても……、

「ジャーリヤ・タブラ・ラサ……大丈夫ですか、お顔の色が」

「あっ……ええとすみません、……なんでしたっけ」

ジルヤンタータは、フェイリットがぼかんと口を開けて真っ白になっている間にも、何やら話を続けていたようだった。顔色を気取られて、考えていたことがふっと向こうへ飛んでいく。

「ジャーリヤ・タラシャから伺っております。お怪我の具合を診せるなら、ハレムにいる医師を連れてまいります。わざわざ宮を出て軍医の元になどお出向きにならずとも」

「……あ、いいんです。しばらく忙しくなりそうだから、ついでに会っておこうと思って。色々お世話になっている方だし」

本当に骨がつながってしまったのか、アンに確かめにいくつもりだった。

あのたった一度の“変化”で骨までくっつけてしまったとは、どうにも信じられない。それも完全にはなく、身体の皮膚が割れて血が噴き出る程度の軽いものだったのに。もしそれが本当だとしたなら、竜へと身体が変化して、それがまた人間へと戻るとき、骨の一本一本まで再構築されているとしか考えられなかった。

天高くから地面に叩きつけられて、それでも死なずに生きていられた——自分が不死身となりえる身体を持っていることを、フェイリットは改めて思い出す。

あの時、あの忌々しい男にぶつかっていなかったなら、自分はまた空を飛んでいたのだろうか……。

——痛みの無くなった腕は、まだ包帯で胸の前に吊るしてある。心配だからと言ってタラシャが巻きなおしてくれたのだった。

ハレムに入ったとか、三日後にはバツソスへ行く予定だなどということは、アンに話すつもり

はない。話して、余計な心配をかけるのも忍びないし、何よりもウズに口止めされている。

「では、アバヤをお召しください。顔をお隠しになりますように」

「えっ、小姓衣じゃ……駄目なんですか、」

「まさか——小姓衣でお出でになるおつもりだったとでも？」

驚いたように言いながら、ジルヤンタータの厳しい眼差しがいつそう薄く細められる。もともと優しい印象ではなかった彼女の表情に、フェイリットは思わずあとじさった。だが一歩後ろへと下がったものの、壁に背を当てて眉をひそめることになる。——壁の装飾など、見て回らなければよかった。

「……わかりました。小姓衣を着た、その上にアバヤを被っていただけるなら、ご用意いたしましょう」

フェイリットの怯えた態度に気がついたのか、幾分口調を和らげながら、ジルヤンタータは頷いた。

イクパルの女性は人前に——とくに異性に顔を見せることを嫌う。まがりなりにも女であるフェイリットが、小姓の格好をして堂々と顔をひけらかして歩くのを、ジルヤンタータはあまりよく思わなかったのかもしれない。

「それと、わたくしもお供いたしますからね。——ああ、しっかりと距離を置いて気配も探られぬようにいたしますので、お気になさる必要はございません」

「は……はい」

すっと踵を返して歩き出したジルヤンタータは、部屋の端のほうにあった大きな箱の蓋をごとん、と音を立てて開けた。

何が入っているのか、気になったフェイリットが側に行くと、真っ黒な布を手元に渡される。

「さあ、アンジャハティ・トスカルナ軍医のもとへ」

ジルヤンタータは黒蜜色のその頬を、笑みの形に引き結ぶ。

深夜近くにティカティク亭を出たフェイリットは、コンツェの見送りを断って一人、皇帝宮への道のりを歩いていた。

両側に高くならぶ建物に切りとられて、晴れわたる夜空は長四角。けれどやはり美しく、あ然とするほどにきらきら光り輝いている。

こちらから見上げてみると、その形はまるでちょうど天空に流れる川のように。

その道の先、夜空にせり建つ赤い皇帝宮の向こうからは、ぼんやりと青く朝の光が立ち上りはじめていた。

「うわ、もう朝なんだ」

コンツェと二人ゆっくりと食事をして、酒を飲んで、潰れた。……最初のふたつはさして時間はかからなかったのだろうが、一体自分はどれだけの時間を寝て過ごしたのだろう。

フェイリットは視線を空と皇帝宮に向けたままで、ぼんやりと思う。

「あ……コンツェにお礼言っていない」

同じ小姓仲間のテギに、女であることを悟られそうになって、そんなところを救ってもらい、食事をごちそうになって、あげく酔って眠り込んだのに、何も言わず目覚めるまで付き添ってくれた。そしてお土産まで。

手の中の包み紙を見下ろして、まだほんのりと残る温かさにフェイリットは頬をゆるめる。

チェックェロという、焼き菓子。皇帝宮の賄いではけして出ることのない城下の食べ物だ。棗の身を細かくくだいて、小麦の挽き粉と練り合わせ、炉火で直接焼き上げる、らしい。帰り際、初めて見る菓手に説明を加えてくれたイディンバの、言葉を思い出す。

「タラシャにもあげよう」

結局会えずじまいだった彼女を、自分から訪ねてみよう。フェイリットは空に向けていた視線を、地上へと戻した。

そうしてようやく気づく。狭い路地の前方に、ジルヤンタータのかしづく姿があることを。

「も……もしかしてずっと居たんですか」

ジルヤンタータが目前まで歩いてきて、軽く頭を下げるのを見つめながら、フェイリットは口を開ける。

「そのように申し上げたはずですが」

立ち上がり、当然のように首を縦にしてジルヤンタータは頷く。

「随分と長くお眠りのようでしたね」

眠っていたのは屋上だ。この辺りの建物はみな等しく背がたかく、地上から見上げても屋上は覗けない。それを見知っているということは、どこか別の建物にわざわざ上って“全部”観ていたということだ。

――瞬間がよみがえる。あの口付けは……いったいどういう意味だったのだろう。決して強引にはなく、そっと引き寄せられた優しい腕。けれど驚くほど鮮明に、その唇の冷たさを覚えている。

「忘れないでいてほしい」

そう言ったコンツェの顔は、悲しいほどに痛みをこらえた色をしていた。その言葉とともにまた固く抱きしめられて、返事をし損ねてしまった。

忘れるわけがない。優しくて明るい彼の笑顔。たった少し故郷へ帰るといっただけなのに、どうしてそこまで苦しむのだろう。

“帰る”というその真意に、“王太子になって戻ってこられないかもしれない”という裏が込められていることを、フェイリットは当然知らない。

「そろそろ戻ろうか」

彼の口が告げるまでそのまま、フェイリットはコンツェの腕の中で考えめぐねていた。

「コンツェ、」

「ん？」

「わたしがコンツェを忘れてしまうくらい、長くテナンに帰るの？」

「そんなに長くはない……けど、」

「けど……？」

「もう一度会ったとき、俺は俺でなくなってるかもしれない」

「え？」

聞き返してコンツェの顔を見上げると、困ったような笑みが浮かぶ。

「なんてな。そんなわけ、あるはずないか」

やんわりとはぐらかされて、横に並んだ彼に背中を優しく押される。先に降りると、いう意味なのだろう。そう悟って、フェイリットは酒場へとつながる階段をゆっくりと降りはじめた。

「……大丈夫だよ。こんな綺麗な星の夜、忘れたりするわけないから」

その道すがらふと小さく、フェイリットは零す。

コンツェを安心させたい。何を苦しんでいるのか、その深い場所まではわからないけれど。

それでも、自分が“忘れない”とはっきり言うことで、どれだけ彼が救われることになるか、フェイリットは察していた。

「……ジャーリヤ・タブラ・ラサ」

「はっ、」

道端に立ち竦んで、ぼんやりと宙を見つめていたフェイリットは、ジルヤンタータの声に意識を戻す。

「あの」

フェイリットはなんと言ったらいいものか分からずに、振り返るジルヤンタータを、ただじっと見つめる。どっしりと大地に根を張る、大樹のようなジルヤンタータ。その存在感は、立っているだけで圧倒されるほど。

暖かな風に流されて、彼女のアバヤの裾が、ひらひらと浮かぶように舞う。

見つめ続けるフェイリットから視線を避けるように、ジルヤンタータは足元の黄土を見下ろした。人が通り続け、砂埃もたたぬほどに踏み固められた土の路。

「……愛しては、なりませんよ。ジャーリヤ・タブラ・ラサ。あの青年も、皇帝陛下とて同じ。

あなた様に……ジャーリヤに、愛は禁物でございます。愛したなら最期——必ずや御身を、滅ぼすことに」

ふと零したジルヤンタータの、その言葉の“深さ”に、フェイリットが気づくことはなかった。ただその真意が掴めず、首をわずかに傾げる。

言葉は間違いなく警告。なのにそれを言うジルヤンタータの表情は、どこか哀しげに見えた。咎めるといふよりも、まるで苦痛をこらえているような。

サミュンが死んでからというもの、フェイリットの涙はすっかり止まってしまった。彼のことを思い出してさえ泣くことができないのだ。

愛は禁物だという以前に、フェイリットにはその気持ちがどういうものだったか、よくわからなくなっていた。

「……ジルヤンタータ、」

「さて、——帰りましょうか。やることがたくさん残っておりますよ」

どうして。フェイリットが次に言うであろうその問いを遮るように、ジルヤンタータは歩き始める。

まだ夜明けまでは二刻ほどもあろうか。帰ってきたハレムを見上げて、フェイリットは眉根を寄せる。

赤い砂岩でできた皇帝宮の壁の下方に、ぽっかりとあけられた小さな扉。ハレムに通じるこの入口を使うのも、もう三度目だ。

がしゃん、がしゃん、と一つずつ外されていく鍵を眺めながら、その複雑な顔のままフェイリットは苦笑した。

“死の扉”——愛妾が、死してのみ出ることを許される門——であるというのに、こんなにも容易く行き来できているなんて。苦々しく思わずにはいられない。

いったいどれくらいの女たちが、ここを生きて出たいと望み、その願いを死してのち叶えられたことだろうか。

本来ならば生きて出ることはけしてできない、華やかな檻。そのなかに今、自分たちは帰ろうとしている。

「お入りください」

ジルヤンタータに道を譲られて、フェイリットは素直に従う。小さな入口の手前に膝をついて、このような姿勢で向こう側へとすり抜けた。

「眩し……」

夜が明け切らぬため、廊下には未だ、橙色の蠟燭が<sup>さんぜん</sup>燦然と輝いていた。金に塗られた柱や梁に反射して、その光はなんとも幻想的な光景を生み出す。

やはり、綺麗だ。しみじみとそう実感しながらジルヤンタータを顧みると、

「このままハمامへ参りますよ」

思いもよらない言葉が返る。

「えっ...あの」

光るほど艶やかになる肌も、絹糸のようになめらかになる髪も、蒸すように熱い中で食べる氷菓子の甘さも一一実のところ嫌いではない。

けれどまた三時間もかけて、体を磨かねばならないのだろうか。のぼせてふらふらになったあの具合の悪さは、できるなら思い出したくはなかった。

「夜明けには陛下のもとへ行くようにとの仰せが」

「は.....」

驚きに目を丸くして、フェイリットはジルヤンタータを見やる。けれど彼女の固く強張った表情からは、もはやなにも読み取れなかった。

「陛下の.....」

フェイリットの視線など意に介した様子もなく、ジルヤンタータは恭しく礼をとり、その額と目を伏せたまま続ける。

「ですからフェイリットさま、ハمامへ行き身を清め.....ジャーリヤ“タブラ・ラサ”へとお召し替え戴きますよ」

皇帝の眼鏡にかなうため、ジャーリヤ(愛妾)たちが一日中と言っていいほど入りびたる、大浴場<sup>ハمام</sup>。

多くは半球状のかたちをしており、奥へと進むほどに空間は広がっている。

ハمام全体をつつむ真っ白な蒸気は、その最奥、円形の浴場から発せられるものだ。熱いお湯が天高くから、泉のように溜められた冷たい水の中に、ごうごうと流れ込んでいる。その温度差で発せられた熱い蒸気が、身体の毛穴という毛穴から汗を噴き出させる仕組みだ。

蒸されて暑くなった体に、その溜められた冷たい泉は心地がいい。

フェイリットは備え付けの片手で持てるくらいの壺に、冷たすぎない辺りをねらって水を汲む。何度か体にかけて、すっかりのぼせている状態をいくらかでもましにしようと懸命だった。

泉の深さはフェイリットの肩ほど。本来ならばそこにとっぴりと身体全部をつけてしまうため、そのくらいの深さにされている。けれどフェイリットは今泉に体を沈めるわけにはいかない。そのために壺で汲んだ水で我慢しているのだ。

ただでさえ不定期だった“月のもの”が、まさか今になってくるなんて。ウズに薬をもらっていなかったら、今ごろは腹痛でのた打ち回っていたかもしれない。

思えば山を降りるまでの半年、サミュンのつける稽古が吐くほどにきつくなかった。当日までなにも言わなかったが、彼はきっと半年――もしくはもっと昔から――あの最期の日があることを、知っていたのだ。だからその日に備えて、フェイリット自身の身体が“女”であることも忘れてしまうぐらい、過酷な稽古をつけたのだろう。

「……降りてきてから、なんにもやってなかったものね…」

剣術の稽古も、体術の稽古さえも。

イクパルに来て日にちも経っている。アルマ山でうっかり半年もの間忘れていたものが、ここでどときたのは仕方のない話かもしれない。

「あの兄妹、二人で病院つくれそう」

素直にそう思って、フェイリットは再び何杯目かの水を身体に浴びた。

ハمامで視界にうつるのは、みな美しい曲線と豊かなふくらみを持つ女ばかり。絨毯を敷き寝そべっていたり、相手を品定めしようと集まって談笑していたり、真剣に体を磨いている者もいる。とにかくそこらじゅう、目を移せば人がいる――という状態なのだが、

「みんな、どこ行ったのかな」

奥へ奥へ、今日は行けども人――ジャーリヤ――がいない。

水をひとしきり浴び終わると、フェイリットは何度そうしたかわからぬほどに、辺りをくると見回していた。

「どうかなさいましたか」

「わっ、」

今までどこにいたのだろう。体を磨く専門の侍女(磨き師)がひとり、湯気のむこうから現れ出でて、不思議そうに問うた。

「人が……。わたしだけなんですか？」

まったくの無人ではなかったことに少し安堵しながら、それでもやはり気になってしまう。時刻はまだ夜がぎりぎり明けぬ程度の頃合いだったが、ちらほら、何人かのジャーリヤがすでにいたとして不思議ではないはずだ。

「こちらは皇帝陛下専用の大浴場<sup>ハمام</sup> ですので」

「……」

「なるべく人目に触れぬようにと。だ、大丈夫でございますか」

「……大丈夫です」

暑いハمامにいるというのに、フェイリットは蒼白い顔を硬直させて、ふらふらと壁際にへたり込んでいた。磨き師が慌てたように駆け寄ってくる。

「ジャーリヤ、よろしければお水でもお持ちいたしますが。おのぼせになられたのでしょうか」

「はい、……すみません」

昼間のようにそんなに時間をかける必要はないとジルヤンタータに言われて、フェイリットは一部屋に半刻ほどの蒸し時間をとってここまできていた。

のぼせた自覚はなかったが、この突然の衝撃で急に血が降りたのかもしれない。

——皇帝陛下専用？ どうりで、人がいないわけだ。

うなだれるように壁に頭をもたげて、フェイリットは天井から降り注ぐ大量の熱湯を見上げる。

ジルヤンタータに連れられてハレムのなかをぐるぐると歩いたため、自分が今どの位置にいるものなのか、わからない。今いる大浴場<sup>ハمام</sup>が、当然のように昨日のに訪れたものと同一であると、疑いもなく思いこんでいたのだ。言われてみればこのハمامの装飾は、白磁に瑠璃色というより、白磁に金や深紅をはじめ、黒に近いような紫の彩色が目立っている。よくよく考えれば、華美さや色合いからいって気づこうものであった。

金、深紅、そして紫——それらは高貴な身分である皇族、とりわけ皇帝が好んで使う色。

「陛下のハمامなのに、わたしが入ってもいいんですか」

床に座っていると、立っているよりも暑くはない。幾分覚めて落ち着いてから、フェイリットはゆっくり立ち上がって言う。

「ええ。そうするようにと。しっかりと磨かせていただきますので」

飲むための水を差し出しながら、磨き師は続けた。

「それと、御髪はこちらを。三日で落ちる染料ですので、毎日お使い下さい」

「染料？」

「そうです、お染め頂きます。あなた様の御髪は、お目立ちになりますので」

硝子細工の小さな壺に、真っ黒な液体が満たされている。お湯に溶かして濯ぐようにするのだと、説明を入れながら磨き師はフェイリットの髪を洗い始めた。

「目立つ……」

金髪が目立ってはいけないのだろうか。ハレムの君主ともすれば、さまざまな国からジャーリヤを集めていてもおかしくはない。今さら金髪の、“北方生まれらしいギョズデ・ジャーリヤ”が増



えたとして、あまり問題はないはず。バツスー—他公国に行ってまでフェイリットが隠さねばならぬ素性といったら、「メルトロ—王国第十三王女」くらいなものだ。

「ま……………まさかね、」

髪の手入れも終わり、台の上に寝そべって身体に香油を擦り込まれる。ほんのりと花の香りのする香油に心地よくなって、フェイリットは目を閉じた。

「あら、様変わりなさいましたね」

脱衣のための一室で出迎えたジルヤンタータが、ハナムから出てきたフェイリットを見つめ、微笑む。

「御髪もお肌の色も—……」

「肌？」

「ええ、綺麗な黒蜜色でございますよ」

そう言うと、壁に掛かる手触りの良さそうな布を、ジルヤンタータはわずかに引いた。現れたのは天井にも届こうかという、大きな大きな鏡。その前に立つように導かれて、とうとう、フェイリットは口を開けた。

「タブラ・ラサというのはそもそも、“真っ白な紙”という意味を持つのです。この名前のつくあなた様の正体でございますよ、ジャーリヤ・タブラ・ラサ」

フェイリットが見たもの。それは裸で鏡の前に立つ、黒蜜の肌に同色の髪の一—瞳だけが薄い、自分の姿をした少女だった。

「何ものにも美しく染まる娘。これが、あなた様の正体でございますよ」

\* \* \* \* \*

朝日が昇りはじめていた。帝都を出て、何時間経ったであろうか。

コンツェは愛馬から身を降ろして、その先に広がる光景をじっと見つめた。

空よりも美しい澄んだ瑠璃色の海。背中から太陽を受けて、まだぼんやりと薄暗い。イクパル本土の最西端、どこか愛しい人の瞳を思わせるその海の色に、コンツェは苦笑した。この向こうに、ふるさとのテナン公国はある。

“さようなら”は言わなかった。甘菓子チェクチェロを受け取り微笑む彼女に、「気をつけて帰れよ」と手を振って。

テナンに帰ったら、その足で王城に向かわねばならない。「王太子の選定」は、テナン公国内の貴族たちが集まる席で執り行われる。けっして大それたものではなく、円卓を囲み書類に血判を押すような会議。帝国から脱したい貴族たちの中で異論を唱えるものはもちろん現れるはずもなく、きっと選定は“会議”にすらならない。

テナン王はもうじき退位を表明する手はずになっているため、王太子はそのまま「公王」とな

りうる。初代皇帝の血をひくコンツェが、テナン公国の王に一万が一、そういう事態が現実のものとなれば、他の「三公国」の承認でイクパル皇帝の玉座にさえ座ることができる。貧困の増すイクパルで、けれどそれは本格的な解決にはならない。もちろん比較的資源の豊富なテナン公国や、海賊文化の栄えるイリアス公国はメルトローとのつながりの中で私服を肥やし、生き残ることができるだろう。しかしその他の国々は、さらなる貧困に苦しむだけだ。特に傭兵の育成が盛んなバツソス公国に至っては、戦争がなければ国土が持たない。帝国に藩属し、軍事力を提供することで国土の維持に必要な恩恵を預かる。そうして続いてきたバツソス公国に、「独立」の二文字など恐怖にしかならない。

こうした事情があるのはバツソスだけに収まらない。一度“こと”がおこったら、もうその先にあるのは、帝国全土の戦乱のみだ。

“父”——テナン公王が狙うのは、「独立」なのか「篡奪」なのか。それだけでも分かったなら。

島国であるテナンの王城は、海沿いに建つメルトロー様式の城だ。その昔、大陸を統治したメルトローのタントルアス王がテナンにも手を伸ばしたという名残。物質的な交流が持ちにくい「島国」だからこそ、イクパル帝国へと併合されたのちもメルトローの文化が多く残る。

「……俺は帝城が好きだ」

フェイリットを帝都へ連れてくる折に、言った言葉を思い出す。

“俺はこの城が一番好きだな。故郷は違うけど、なんだか『還ってきた』って感じがするんだよな”。

——それが嘘にならないような、決断をしなければ。

イクパルを、ばらばらにしてはいけない。

「……さすが、耳が早いですね、」

船を出すために選んだ場所は、直轄領<サグエ>の中でもチャダ小国寄りの寂れた漁村だった。その立ち並ぶ、泥壁でできた民家の向こうから現れ出でた人物に、コンツェは笑みを浮かべた。

「ワルター大佐」

「見送りに来てやったんだ。寛大な上司を持ったことに感謝するんだな」

慌てて出てきたのだろう。こんな漁村に軍の衣装を着て、目立つことこの上ない。その上から薄めの外套を羽織ってはいるものの、見るものが見たなら軍衣だとひと目でわかってしまうだろうに。

「……見送ってもらえるんですか」

「なんだ、止めて欲しいのか？ まあ……止めたいがな。無理やりにも公子身分を返上させて、どっぴり軍人に漬ける手も、無くはない」

「そうするべきでした、もっと早くに。けれどももう引き返せません。俺の出生が歪んでいるのは、生まれつきですしね」

腕を組んで、しかめっ面をするワルターを苦笑して眺めて、コンツェは深く頭を下げた。

「……すみませんでした」

必ず戻ります。約束はできないその言葉を、心のなかでしっかりと告げながら。

引き抜いて育ててくれた、何よりも権力という魔物から守ってくれた人物。この人がいなかったなら、きっと自分は何よりも欲におぼれた、玉座を欲する人間になっていたに違いない。

「いってこい。“かた”をつけにな……それと、」

ひゅっと空を切る、ワルターが投げた丸いものを掴み取る。そのまま手のひらを見下ろして、コンツェは肩眉をあげた。

「指輪ですか？」

「餞別だ。困ったときはそいつの持ち主をさがしてみろ」

手のひらの銀色の指輪を見つめて、コンツェは唇を噛み締める。

埠頭に隠しておいた漁船の中に、乗り込むまで見送ってくれる暖かな視線に感謝しながら、上司に向けて心から頭を下げた。

「――出航の準備は整っております、エトワルト公子」

船の中でかしく二人の「鷹」を見て、コンツ・エトワルトは静かに頷いた。

「……待たせてすまない」

鏡の前に立ったまま、フェイリットはくるくると着せ替えられていた。

いつの間に運び込んだのか、部屋で見たことのある衣装箱が鏡の横にどっしりと備えつけてある。ジルヤンタータはそこから衣装をはじめ、胸や腕につける貴石の飾り、首もとと項につける香油、髪飾りからヴェールにいたるまでのすべてを、取り出してはフェイリットの体に飾り付けていった。

「……お呼びしにいくまで、さきほどのお部屋でお待ち下さい」

ジルヤンタータの手がぱったりと止んで、彼女の漆黒の瞳が鏡越しに細められる。どうやら着付けは終わったらしい。

フェイリットは改めて鏡に映る自分を眺め、なんとも言えぬ気持ちになった。

衣装は目の覚めるような紺碧。黒い肌、黒い髪に薄い水色の瞳——紺碧の衣装はそれらにうまく馴染んでいる。色合いまで計算して選んだのだろうと、一目でわかるほど。衣装は控えめに胸を覆い、間をあけた腰元にはゆったりと襷をつけ、足首までふわりと垂れている。光の具合で肌が透けてしまうほどに薄い生地は、ハمامで裸になるよりも羞恥心を沸き上がらせた。なにしろ腹部は丸見えで、歩けば大きく入った切れ込みが太腿を露わにする。正直、小姓衣でさえ初めは露出の多さに驚いたというのに、それに比べたらこれはまるきり裸としか思えない。

しゃらしゃらと小気味よい音をたてる金輪を腕にはめ、臍のちょうど下あたりには琥珀色の透明な貴石を連ねた飾りが、ぐるりと三周にも巡っている。

「王女」に生まれていながら悲しいことだが、こんなにも貴重なものをつけたのはフェイリットにとって生まれて初めてだった。高価なもの……といったら、始終暖炉の火に炙られていた菓鍋——あれが“うち”で、一番値が張ったはず。そんなことを思い出せるくらい、平民としては当たり前前の、けれど王侯貴族にしたら貧しすぎる生活を送ってきた。

「ヴェールを被せるので、御髪はそのままに致しますよ」

ジルヤンタータは自らの腕にかるく掛けていた、てらてらと艶やかな黒のヴェールを取り出す。頭に被せられるのをよくよく見ると、ただの黒い布ではなかった。金糸で細かく縁取りまでされている布だ。見えていた顔は黒のヴェールでぼんやりと隠され、鏡ごしでは余計に誰だかわからなくなる。

「このまま、向かうんですか？」

皇帝陛下のところ。時間帯は紛れもなく朝だが、一応は“覚悟”もしなくてはならないのだろう。……着飾り、欲情的な衣装をまとわせて皇帝に会う——その先のことを考えたら、まるで自分が客前に出る娼婦のように思えた。ウズを信じるわけではないが……、自分はそのような扱いを受けることがないと、思っていたい。

「いいえ、お呼びがかかるまでお待ちいただきますよ」

部屋に戻って、フェイリットは「あっ」と声をあげた。——コンツェから貰った菓子を、置いてきてしまった。

ハمام  
大浴場へ行く間はずっと持っていたのだが、衣装を脱いで湯気をまとわせて出てきたときには

、その存在をすっかり忘れていた。脱衣をした部屋の卓あたりに、すっかり冷めてしんなりしたチェック口の包み紙が乗っているに違いない。

「取ってこよう」

呼びに来るまではじっとしているようにと、ジルヤンタータに言われていた。けれどせっかくもらったものを、一口も口にせず置き去るのは胸が痛む。

「タラシャにもあげようって決めたし……大丈夫」

部屋の仕切り幕から顔を覗かせると、ジルヤンタータの姿も、他に控えているような侍女の気配も感じられない。脱け出して探し物を見つけるのには、恰好の時だろう。

フェイリットは考えついた勢いのまま、ぱっと部屋を飛び出し、うろ覚えのハمامへと廊下を小走りに向かった。

この辺りだっただろうか。そんなことをあやふやながらも思いつつ、フェイリットが複雑に入り組む廊下を大浴場<sup>ハمام</sup>へ向けひたひた歩いていると、ふと覚えのある笑い声が聞こえてくる。

「タラシャ？」

声は、間違いなくタラシャだった。優しくて静かな、綺麗なそれが続けざまに耳に届いて、フェイリットは目前の部屋に注視した。薄茶の垂れ幕が引かれていて、中までは見えない。タラシャの声が聞こえたということは、ここが彼女の部屋なのだろう。

フェイリットは大浴場<sup>ハمام</sup>へとたどりつくと、チェック口の包みを脱衣に使った籠の中から捜し当てた。

「よし、これで会える」

会えるというよりただの口実にすぎないが、初めてできるかもしれない女友達に、わくわくしていた。

「タラシャ、いるの？」

彼女の部屋の前――楽しげな笑い声は、もう聞こえない。まさか、自分がハمامへ駆けているあいだに、すれ違ったのだろうか。

その時――しん、とした廊下の静寂のなかに、ふとタラシャの悲鳴が混じったような気がして、フェイリットは眉をひそめる。

「タラシャ……？」

悪いとは思いますが、侍女がいないのだから仕方ない。悲鳴という尋常でないものに黙っていられず、フェイリットは自らその薄茶の垂れ幕をわずかに引き寄せた。

「……！」

――目にした光景に、垂れ幕を掴んでいた指の力が抜けていく。ふわり、と元に戻った薄茶の端整な織り布の向こうから「……誰だ」と“男”の声がとどろく。

薄く透明な天蓋のかかる寝台で、“折り重なる二つの影”――いっぽうは、間違いなくタラシャだった。では、もうひとりは……？ 思わぬものを見てしまい、フェイリットは自分の頬が燃えるように熱くなるのを感じた。落ち着け、落ち着け……今のは見なかったことに。早くこの場から立ち去って、なにごとくも無かったように振る舞わなければ、と。

……けれど時も置かぬまま、目の前の垂れ幕がぱっと乱雑に開かれる。

「誰だ」

現れたその顔を見たとき、もうどうしたらいいのかわからなくなった。

フェイリットはよたよたと後ずさり、腰が抜けたように床に尻もちをつく。

「だ、あ……あの」

無言で見開かれる、褐色の肌に縁取られた黒い瞳。何度も忌々しいと罵ってきた“男”が、“男子禁制”のハレムで、驚きも隠さずこちらを見下ろし立っていた。

「ひっ！」

起き上がれずにいるのを、助け起こそうとでもしたのだろうか。伸ばされた手を反射的に拒んで、フェイリットは危なげに立ち上がる。

「ごっ……ごめんなさい」

「――お前、」

制止の声も振り切って、廊下を全力で走った。そのまま垂れ幕に飛び込むようにして自室に戻り、大きな息をひとつ吐く。

「びっくりした……」

――裸だった。もちろん何も纏っていないわけではなかったが、腰あたりに薄い布を巻いただけの姿は、直前まで何も着ていなかったことを、単純に連想させる。

「……まさかあの人が」

タラシャの笑い声、悲鳴のような声、裸で出てきた男、男子禁制のハレム――。状況を交互に並び立てて、フェイリットは見る間もなく真っ赤になった。

ジャーヒハラヤ  
「なんてこと！」

部屋に入ると、頭を抱えて寝台に身を投げ出す。

アロイツサグーエ  
「あいつがイクパル皇帝！？」

口から出た叫びは、自分でも驚くほど怒気を孕んで苛立っていた。

こんな咄嗟な時にさえイクパル語が口を突いて出るなんて素直に驚きたかったが、とにかく腹立たしい。腹立たしいのと恥ずかしいので、顔がぼうぼう燃えている。

これでは自分はただの間抜けではないか。友人を訪ねた先でその情事に出くわし、警戒もなく垂れ幕を引き寄せてしまうなんて。しっかりと目に焼きついた光景を、振り払うように頭を振ってため息をつく。

山を降りるまで異性と手すら合わせたことのなかったフェイリットでも、子供ほどに無知ではない。かといってそれを受け入れられるほど、大人にもなりきれていなかった。

わけのわからない汗と熱く燃える頬を持てあまして、寝台に突っ伏し唸りはじめる。

「知恵熱でそう。せっかくお菓子……そうだよ、チェックェロ！」

またも廊下に落としてきてしまった。とことん口に入るまでの運命がないらしい。菓子の存在を頭の隅から引っ張り出して、うんざりする。

「はあ、」

もう寝てしまおう。

あの分だと、“皇帝陛下”からお呼びがかかるのはもっとずっと後だ。あんな行為を目撃した後で、どういう顔をして向かえばいいのかわからないが……きっとあんなのの直後に、自分には同じことを要求しないはず。

先日ウズに命じられて奴隷軍からシャルベージャを引き入れたから、考えられるならそのあたりの仕事の話だ。

結論づけて、フェイリットは寝台の上掛けの中に潜り込んだ。

とっくに時刻は朝を迎えていたが、構いはしない。寝てしまえば、この混乱もすっかり忘れて清々しい気分になれるだろう。

ジルヤンタータがせっかく着付けてくれた衣装がよれてしまうのも厭わずに、フェイリットは何度も寝返りをうって眠りについた。

ジャーリヤ・タブラ・ラサ。どこかで自分を呼ぶ声が聞こえる。

違う。わたしは、ジャーリヤでもタブラ・ラサでもサディアナでもない。フェイリットなのだ、声を荒げて叫ぼうとする。けれどどの奥からは情けない風がひゅうひゅう漏れ出るばかりで、試みは失敗に終わった。

「ジャーリヤ・タブラ・ラサ」

「ん……」

ようやく瞼の裏に明るい光を感じて、フェイリットは自分が夢うつつを彷徨っていたことを知った。

「ジルヤンタータ？」

「左様でございます」

眩しいと感じた光は、ジルヤンタータの持つ燭台の灯だった。目の前にかざされて、思わず目を細めてしまう。

「お迎えにあがったのですよ。まさか、あのお姿のままお眠りに？」

渋味のある深い声色は、いつもよりどこか優しくだ。

頷きながら寝台からすべり降りると、フェイリットは苦笑した。もう外は真っ暗。随分眠ってしまったに違いない。今さら呼び出されたとして、身支度を整え直す時間が馬鹿らしくさえ思える。

「仕方のないお方ですね……」

そう言いながら立ち上がったフェイリットの衣装のしわを、ぽんぽんと叩きはじめる。そのふとした仕草がまるで母が子にする労いのように思えて、フェイリットは小さく笑った。

「ジルヤンタータ、お子さんいるでしょう」

「……ええ、おりますが。なぜ、」

「なんか、いそいだもの。じゃないとそんな優しくできない」

子供を持つ女性の“子供”に対する姿勢。それは説明の付かぬ独特なもので、一言でいうなら優しさというより母性といったほうが、しっくりくるのかもしれない。

「確かにおりますが、産んだ子も育てるはずだった子も、この手から離れました。ですから育てたことはございません」

“産んだ子”と“育てるはずだった子”——それが同一だと感じなかったのはなぜだろう。

「じゃあ……お子さん達は今……」

「最近顔を見ましたが、ぴんぴんしておりますよ。産んだ方の子など、まあよくもあのようによろしくなれたものだと思いますね」

苦笑混じりに告げるその顔に、陰りが無いのを読み取って、フェイリットは微笑む。

「見てみたいわ、ジルヤンタータのお子さん」

頭の中で、がっしりとした巨木のような青年——女性かもしれないが——の姿が思い浮かんで、なんだか笑ってしまった。彼女が母親なら、たしかに相当に凶太い人物になれるはずだ。

「着替えましょうか、しわが取れませんので」

ジルヤンタータははぐらかすように笑ってから、衣装のすそをつまみ、眉をわずかにひそめた。

。

「このままでいいです」

「……それは。皇帝陛下の御前でございますよ」

「ええ。別に好かれないとも思わないし、着飾っていても無駄な気がして」

顔をしかめて苦々しく吐き出すフェイリットをじっと見て、何がおかしかったのか、急にジルヤンタータは声をあげて笑い始める。

「やはり——……」

「え？」

何かを言いかけて、はたと口を噤んだジルヤンタータの顔を、まじまじと見る。

「いいえ、なんでも。参りましょうか、陛下は私室にいらっしゃいますので」

どことなく嬉しそうなジルヤンタータを見て不思議に思いながらも、フェイリットはゆっくりと頷いた。



鬱金色をした細い糸が、天井から幾千と垂れさがっていた。廊下の両脇を囲むように、煌びやかな貴石を先端に垂らして飾られるそれは、身体の間かが触れればしゃらん——……と優しい金属の音をたてる。

「伽の扉……」

皇帝の寝室へ。一本につながるその廊下の別名を、フェイリットは思わず呟く。

連なる装飾は、きっとただの飾りではない。しゃらしゃらと音を鳴らさせることで人の来訪を知り、事前に“誰か”が近づくことを察知する道具だ。

ゆっくりと歩きながら両側を流れる風景を見つめていると、なんだかジルヤンタータの気配が遠い。

「ジャーリヤ・タブラ・ラサ」

後ろを歩くジルヤンタータに呼び止められ、そこでようやくフェイリットは振り返る。

ハレムから皇帝宮へ——通じている「伽の扉」は、まだまだ遙か向こうだ。振り返るまに見渡すと、ほんの入り口付近のところで、ジルヤンタータは頭をすりと下げていた。

「私はこれにて下がらせていただきます」

「えっ?!」

「“扉”の前で呼び鈴を鳴らせば、あとは向こう側に控えている宦官が鍵を開けてくれます」

てっきり、ジルヤンタータも一緒に来てくれるものだと思い込んでいたフェイリットは、急に顔色を曇らせる。

「幾度かお会いしたことがおありなのでしょう」

面識があるなら気を張ることもあるまいと、けろりとした顔を向けられては肩を落とすしかない。こんなことなら、顔の知らぬ男の元へ目通りしなくてはならないほうが、ずっとましだったのに。

どうにも“あの人”は苦手だ。肉を喰らう猛禽のようにきつい眼差しと、浅黒く日に焼けた肌、見上げるばかりの背丈——隻眼で長身の、人相の悪さでは誰にも負けないサミュエルより、なぜだかずっと怖い。面と向かっているだけで、胃のあたりがぐっと縮こまるような、ともすれば背筋を得体の知れぬ何かが這うような感覚に襲われる。

最近では強引さで押されてしまい、恐怖よりも、からかわれることに対しての憤りのほうが上回っていた気がするが……、それでもじっと黙って目の前にいたなら、ひとりで立ち向かえる自信などかけらもなかった。

「ジルヤンタータ」

助けを求めるように彼女の衣装の袖を掴む。けれどジルヤンタータは骨ばったその頬を苦笑の形に緩めただけで、結局首まで横に振り不可を示されてしまった。

「私は事情があってお目通りできないのでございます。どうか、おひとりで」

またひとつ礼を残すと、さっと踵を返して足音も立てずに去っていく。女性にしては遅しい、脂肪だけではなさそうなその背中を見つめて、フェイリットは溜め息をついた。しゃらしゃらと

肩に触れる糸が鳴らす音すら、なんだか遠くに感じられる。

「――どうしよう」

何が怖いかわからない。容姿がそうなのだと託けても、もっと怖い人ならごろごろいる。片目の無いサミュエルはもちろんのこと、ジルヤンタータもワルター大佐もベシャハ少佐も強面では片手の指に入るはずだ。怖がることは何も無いのに、まるで“行きたくない”と駄々をこねるように、足がずっしりと重く感じられる。

「……すっぽかしたら……駄目かな」

やっとのことで辿り着いた扉を目の前に、真面目にそう考えてしまう。扉は、イクパルにしては珍しい光沢のある木彫り細工でできていた。吊るされている鈴のようなものに手をつけると、り――ん……透明な響きが長くのびる。

お願い、開かないで。

目を閉じ、まるで祈るように両手のひらを腰前で組みながら、じっと固まる。ほんの数秒のはずなのに、背を伝う汗に時の流れが重く感じられた。

きしり、木製特有の音がたち……濃い香煙の香りが、急に体を包み込む。

――乳香だわ……。イクパルに初めて降り立った夜、嗅いだ匂いを思い出す。恐怖でしかなかった記憶に、自然とまた身体が震えだして、フェイリットは組んだ手を固く握りしめた。

「フェイリット、」

開いた扉の向こうから名を囁かれ、驚きながらもうっすらと目を開ける。

「……トリノ！」

安堵に思わず抱きついてから、フェイリットははたと気付く。苦しそうな声が耳元で鳴って、慌てて離しながら眉根を寄せた。

「うわあ、ごめんなさい」

思わず力を入れすぎてしまった。咳き込むトリノの背を叩きながら、必死に謝る。

「……だ、大丈夫です、とにかく、静かに」

口元に指を押し当てて、トリノは目をわずかに細めた。

「突然いなくなってすみません……一緒に行くって言うておきながら、こんなところで独りに」

「いいえ、大丈夫です。ジルヤンタータがいてくれたし」

「ジル……？」

「ジルヤンタータ。五十くらいの女の……知らない？」

あのくらいの年齢なら、きっとハレムに暮らして長いはずだ。皇帝宮に居場所を移して二年ほど経つトリノでも、面識ぐらいあるに違いなかった。

「ジルヤンタータ……。タラシャに、あなたのことを頼んでおいたんですが」

聞いたことがない、そう言いながら首を傾げて、トリノは視線を宙に漂わせる。

「じゃあ、きっとそのタラシャが頼んだんですね」

そう自分で言いながら、フェイリットは納得する。考えてみればそうなのだ。「夜伽」をしていたタラシャに、フェイリットの身支度を整えられるわけがない。ジルヤンタータ自身だって、「タラシャから頼まれた」と始めに言うてはいなかったか。

「そう……ですか？」

なにか腑に落ちないものでもあるのか、トリノの口ぶりは歯切れの悪いままだ。

「とにかく、ついて来て下さい」

扉を閉めて、トリノが歩き始める。薄暗い、何重にも紗布がかけられたそこは、人ふたりがやっと通れるぐらいの幅の通路に見える。直接寝室につながっているものと考えていたフェイリットは、なんとなく安堵に息を吐いた。

「謁見は玉座の間です。こちらに」

指し示された垂れ幕を潜り抜けて、フェイリットは息をのんだ。

膝下ほどの段差の上には、メルトロ王国ほどの豪華な椅子が置かれているわけではなく、禁色で織られた絨毯に肘置きが配されている。天井からは幾重にも折り重なりながら、滅紫の幕が垂れ下がり、壇上に座る者を囲んでいた。

「ようこそ」

斜に構えたような声を出し、その玉座の上の男は笑った。

漆黒の目に浅黒い肌、艶の無い闇色の髪は張り出した額の上から後ろに流されている。はだけている印象しかなかった長い皇帝衣は崩れなく、玉座から見下ろす視線には隙というものが全く見られない。口元に浮かべた笑みこそお世辞にも柔らかいものではなかったが、

「……ディルージャ・アス・ルフアイドウル・バスクス二世陛下……」

「噂の無能帝」を目前にして、フェイリットはその正式名を口にせざるを得なかった。合わされた目線に見え隠れする知性の片鱗。とても、今まで顔を合わせていた男だとは思えぬ別人ぶりに、フェイリットは瞬く。

「そうだ」

——これが“無能”と言うのなら、言った者の目はおかしい。けれど、それは間違いなく自分とて同じだ。今までの放蕩ぶりを聞いて“無能でないはずがない”と、思っていたのだから。なにせ伝え聞く噂はだらしなく、女とハレムにばかり偏っていて、政治はしないし軍の総指揮というのも名ばかり。「皇帝」としての仕事のすべては、現在も宰相であるウズが執り行っている。皇帝だとはわからず実際に会っていても、身分が高そうだと感じただけ。

“怖い”という感覚を、フェイリットはいつの間にか忘れていた。滲み出る才知をこうも巧みに隠しおおせて、何が無能だというのだろうか。何を考えているかわからない——正式にはそう表現したほうがしっくりくる含み顔をわずかに歪めて、バスクス帝は肘置きにかけた腕を自らの顎元に寄せた。

「不貞寝でもしていたのか」

ふ、と小さく笑って、低い声で問われる。

「……は、あの……」

やはり身支度ぐらい、してくるべきだった。皺のついた衣装を見下ろして、フェイリットは眉根を寄せる。

「ち、ちがいます」

「——ほう、では何故だろうな」

「それは」

考えてみれば、理由はどうあれ不貞寝に違いは無いのだった。タラシャと友達になれなかったし、チェックチェロも食べ損ねた。挙句見てはいけないものを見、何となく罪悪感を感じて。食い意地ばかり張っていた罰かもしれない。

意地を張ってしまってから、どう言ったらいいものかわからなくなる。

「あ、貴方に嫌われようと思いました。こんな格好をして現れたジャーリヤを、寝所に呼びたいとは思わないでしょう。……タラシャみたいに」

わずかに震える声を押し殺して、フェイリットは答える。面食らったような顔をした後、それを聞いたバスクス帝は低い声をたてて笑い始めた。

「気にしないと言ったら？ 脱いでしまえばいい」

「つ……月のものもまだ…」

「むしろ興奮するが」

「……っ」

――からかわれている。バスクス帝の口元に面白がるような笑みを見つけて、ようやく気づく。唇を引き結んで小さく息を吐き出しながら、フェイリットは首を振った。

「……夜伽ならば舌を噛みます。他に御用があって、呼ばれたのだと思っていましたが」

立ったままだったフェイリットは、そこでようやく膝を折り、床につけて額を落とした。皇帝にする最高位の敬礼をしながら、じっとその答えを待つ。初めに感じた印象が間違っていないなら、「夜伽」では絶対でない。自分をわざわざハレムにまで入れて、どうしようというのか。その理由が知りたかった。

「――顔を上げろ、ギョズデジャーリヤ・タブラ・ラサ」

低い声が頭上に降りかかり、はっとして顔を上げる。そこにバスクス帝の足先を見つけて、驚きのままにその遥か上に視線を移した。

「タブラ・ラサ。お前をしばらく私の妃として連れ歩くが、正直小姓としてのお前の方が欲しい。だからそうして容姿を変えさせたのだ。聞いているぞ、あの無法者のシャルベージャを落としたとな」

どうやった？ そう問われて、フェイリットは口を紡ぐ。

十人の兵士から、一本取れば従ってやると言われたのは覚えていた。けれど気づいてみれば、目の前に気を失った男たちが点々と連なっていたのだ。剣は持っていなかったから、メルトロ王国のつながりは知れることはなかつたろうと思えるが――。考えようとすればするほど、記憶が遠ざかる気がする。

「一本取ったら従うと、言われただけです」

鼻をつくように晒って、バスクス帝は視線をフェイリットの後ろへと移しやった。

「一本取るのが条件のようだな、マムルーク・シャルベージャ」

明らかに自分へ向けられたものでないその言葉に振り返れば、思わぬ人の姿が目に入る。玉座の間の入り口にかかる垂れ幕が開かれ、シャルベージャその人が立っていたのだ。

「お前を従えるには、私も一本取らなくては駄目か」

シャルベージャのきつい表情は、何故だか驚きに染まっているように見える。じっと固まったまま、バスクス帝の方を睨むようにして見つめていた彼は、しばらくしてふいに肩を竦め苦笑した。

「そのお言葉では、もう一本取られたも同じ。踏破しさえすりゃいいんでしょう、ヤンエを。俺らの仕事はそれだけだと、そこのお嬢さんとも約束したんでね」

そうだったろ？ そう片眉を上げられては、フェイリットは曖昧ながらも頷くしかない。ヤンエ砂漠を越えて、バツソス公国へ入る。その無謀ともとれる行為を成すため、シャルベージャに「案内」だけを頼んだのは、確かに自分だったのだ。

「お望みは一個小隊だそうですが、その四分の一にさせて頂きました。我々マムルークも暇じゃないんで。五十余名も連れてヤンエ砂漠ときちゃあ、遊牧の民(ザラナバル)の血が無い奴らには死刑台と同じですからね」

面倒くさい、といかにも最後に付け加えそうな口調でシャルベージャは言った。玉座の間の下座に軍隊式の拝礼をとって、眉間の中心に皺を寄せている。浅黒い肌に並ぶ黒い目は猫のように小さく、縁取る白い眼球が、濃い肌の色と対比してまるで光るようだ。その隙のない目をじっとバスクス帝に向けて、大きな息を一つつく。

ふてぶてしい態度に加え小隊を縮小するとまで言われれば、普通の王ならその不敬に激怒する。少なくとも、自分の父ならばそうだ。

フェイリットは恐る恐る、バスクス帝の反応を待つ。

「構わん」

驚きの眼差しで、脇に立つバスクス帝をちらりと見やった。床に座したままのため、横を見ても彼の長衣に隠れた膝下しか見ることはできない。けれど吐息とともに、鼻で笑っているのはわかる。

「随分と痛そうだが、お前も勿論来るのだろうな」

低い声で言った後、しばらくの間をおいて本格的に笑い始めたバスクス帝を睨むように見て、下座のシャルベージャが舌打ちした。

痛そう？ .....痛そうとは一体、何のことを言っているのだろう。フェイリットは首を傾げて、今度こそ遥か頭上のバスクス帝の顔を見上げた。けれどその先にあったのは、楽しげとは到底思えない鋭い視線。それが、ふっとこちらに降りてくる。

「――たかが肋骨の一本くらい、痒くありません」

「そうか、ならばよい。ヤンエは一日で踏破する。可能だな」

シャルベージャは深々と礼をした。

「.....善処します」

可も不可も口にしないまま、室から下がっていく。その背中は堂々としていて、とても「痛そう」には見えない。肋骨がどうたらと話していたが、怪我をしているとしたら、ヤンエ砂漠は絶対に無理だ。

「タブラ・ラサ」

ぼんやりとシャルベージャの背中を目で追っていると、バスクス帝の声が唐突に名を呼ぶ。

.....衣擦れの音とともに、甘い香りが降りおりてきた。

隣に立つその足元をたどり、フェイリットは遥か上――彼の顔を見上げた。

「奴の肋骨を折るとは、大したものだ」

「折る？」

「自分でやっておきながら忘れたのか」

喉の奥で低い笑い声を立てながら、バスクス帝はすっと腰を屈める。間近で目が合っ、フェ

イリットは顔を歪めて後じさった。

「あの、何がなんだかさっぱりなんですけど……」

「ああ、さっぱりだ。お前の体格ではどうみても、奴には力負けする。だが状況からして、お前が折ったとしか考えられんわけだ」

「わたしが……って、え?! まさか、わたしがシャルベージャさんの骨を折ったとでも、」

「マムルークを十人倒せと言われたのだろう。奴と戦ったな？」

「うっ嘘ですよ! そんなのあるわけが」

質問の突飛さに、フェイリットは激しく両手を振る。一本取った、というのは言葉のあやで、実際に一本とったのは兵士たちを相手にしてだ。結果賭けに勝つ形になり、“一本取った”ことになったわけだが――彼と実際に手合わせしたわけではない。

「サプライズ大佐の話では、お前を“止めた”のはシャルベージャだというが」

「ええと、あの……それはたぶん、」

曖昧な返事に、バスクス帝の片眉がわずかに上がる。

「多分？」

「お……覚えてないので、なんとも」

言い繕うこともできなさそうだ。本当のことを、フェイリットは眉根を寄せて答えた。

自分がサミュエルから習ったのは、メルトロー式の剣術ばかり。国王陛下に献上する剣技である宮廷式も、実戦に用いられる型式もすべてがそうだった。普通に立ち合ったなら、確実に素性が割れる。だから剣はいらないと、丸腰で向かったのがいけなかった。胸骨の上あたりに剣柄の先を叩き込まれて、最初に吹っ飛ばされたところまでははっきり覚えている。剣の柄というあたり、随分と手加減してくれたものだと思ったが――ふと気づいてみれば、目の前に累々と兵士たちが転がっているではないか。竜に変わってしまったのかと慌てたが、変化するときには必ず伴う、あの凄まじい痛みはどこにもない。

「あの、すみませんでした。護衛は要らないって、たかを括ってしまったこと、ご報告するの忘れてました。……そのせいで小隊の数まで減らされてしまって」

磁石のまったく利かぬ砂漠を前に、まるで鳥のように縦横無尽に行き来できるとされる“ザラナバル”。あの時は砂漠を無事踏破するため、そのためだけの案内役ばかり気をとられていたが――、考えてみれば、それなら現地の遊牧の民を連れ立ったほうが容易かったのだ。ウズがわざわざ兵たちの中から見つけて来いと言ったのは、よもや道案内役だけを期待したのではないだろう。

砂漠は人の手が加わらぬ未開の地。それゆえに獣や盗賊が縦横無尽に行き交っている。時には盾となることさえ必要なのだ。

「シャルベージャは、お前が護衛役をすと言っていたな」

「――はあ、あの」

自分の口の軽さに頭を抱えたくなくて、フェイリットは気取られぬような長いため息を密かに吐き出す。なんということを約束してしまったのだろう。

「悲惨な顔をするな。奴のあばらを折るぐらいだ。任せる」

「は……、はい」

戸惑いながら返事をする、褐色の頬がふっと歪んで遠くなった。それがかれなりの笑みであることが、なんとなくわかってくる。

「立て。夜明け前に出発する。それまで休むといい」

ヤンエ砂漠へ。フェイリットは頷いて、座したまま額を床に落とし礼をする。

「それでは失礼し、うわ！」

退室の挨拶をし終わる前に、身体が上に浮いていく。抱き上げられたのだと気づいて、フェイリットは目を丸くした。横抱きにされて、視線がかれの顎すじにあたる。

「ちょっ！ 陛下！ わたしは他のところじゃないんですか？！」

フェイリットを抱きかかえたまま玉座への段差を上り、バスクス帝は滅紫の紗布をめくった。その先には皇帝の寝室しか行き場はない。

紗布が鼻先をかすめていって、焚き染められた乳香の香りに、いっそう強く包まれる。いくつもの半円に囲われた壁には金細工が網のように散りばめられ、紅く細密な模様が描かれている。目を刺激しないためにか、この室の紅は黒に近い。黄金と黒紅の彩色が、うるさくなく溶け合っている。

皇帝の寝室というぐらいだから、どれほど豪勢なものだろうと思っていたが、華美さを楽しむよりくつろぎを重んじるような造りに見えた。

「その恰好で、うろつかれたら困るんでな」

「わぶっ！」

薄布のかかった寝台に転がされ、柔らかい駱駝の毛布の中に思い切り顔を突っ込んで、フェイリットは呻く。

「この恰好って、陛下が変装するように言い渡したんじゃないんですか」

肌はイクパル民族のように濃い褐色で塗られ、髪さえも真っ黒だ。ヴェールで薄い色の瞳を隠せば、北方種族だとは到底わからない。

「ああ、ものは試しだからな。なかなか似合う。だが“タブラ＝ラサ”は謎のままでいてもらわねばならん」

「ギョズデ・ジャーリヤだからですか」

「そうだ。“タブラ＝ラサ”の意味を知っているな？」

「ええと...真っ白な紙、です」

「タブラ・ラサは本来、ギョズデ・ジャーリヤの名前として用いたわけではない。何物にも染まり、何者にも変ずることのできる存在としてお前に与えた名だ」

どっと寝台がたわんで、そのふちにバスクス帝が腰を下ろす。フェイリットはぽかんと口を開けて、かれの黒い瞳を見やった。

「要するに、いろいろ化けるってということですか？ 小姓になったりジャーリヤになったり人種が変わったり」

もともと色素に欠けた容姿をしているから、色さえ変えればイクパル民族にも成りかわれる。確かに扱うのに便利そうな特徴だ。

「そういうことになる。バツスは私の母の故郷でもあるが、平民出身で後見は何もなかった。



だが、あそこは大軍を掌握する傭兵団の集まり。四公国とはなんとしても切り離したい国だ。表面上は手を組んでいるように見せかけてな」

「でも……それわたしの変装と関係ないですよ」

首をひねったフェイリットを見やり、バスクス帝はわずかに頬を引き上げて見せる。

「バツソス公王ホスフォネトは懐古主義者だ」

「は、あ。昔を懐かしんでおられるんですか？」

広げた膝の上で組んでいた手を、眉間まで持ってきてかれは続けた。

「やつらの傭兵団の歴史は長いからな。もともとの親玉は違うわけだ」

「親玉？ イクパルの付属じゃなかったってことですか」

「そういうところだ。まあ楽しみにしているがいい。お前はイクパル帝国皇帝バスクス二世のスフィル・ギョズデジャーリヤとして、堂々としていけばよいのだからな」

“スフィル”は数字の発音で、ゼロ。直訳するなら皇帝の零番目の妾妃——となるわけだが。

「お芝居ですよ？ スフィルに山村出の娘を据えるなんて公式に発表したら笑いぐさじゃないですか」

スフィルはワーヒド(一番目)よりも随分と格上だ。本来ならば、後見のしっかりとした大国の王女あたりに推さねばならない地位。他の妾妃とは一線を引き、無碍な扱いもするわけにはいかない場所にある。それゆえにわざとスフィルを設けず、ワーヒド、イスナーン、サラサ、アルバアと、平等に四公国から妃を引き抜く皇帝が多かった。スフィルで有名といえば、前帝の御代に寵愛を得られずサグエ・ジャーリヤ(皇后)地位を逃したファラマファタ。彼女との婚姻が、テナン公国と皇家を強く結んだとされている。

「芝居か」

くつくつと笑って、バスクス帝は立ち上がった。

「村娘が出世をしたな」

フェイリットの前に身をかがめ、かれは口の端を歪めた。大きな手が黒のヴェールを引いていく。

「あ、あの、ちょ」

その唇が額の、瞼に近い場所にそっと触れて、フェイリットは身をすくめた。

「夜明け前に起こす。ここで寝ている」

入り口の紗布を払い、バスクス帝は玉座のある室の方へと消えていく。

「あれ、」

てっきりまた、全力で抵抗しなければならないような“こと”をされると思っていた。意外にあっさりと離れていくその背中を見ながら、フェイリットは首をひねる。

「た、助かったー…？」

喜びに、小さく両手を挙げてみる。けれど急にその行動が恥ずかしくなって、フェイリットは一人顔を赤くした。

ヤンエ砂漠に向かった隊は、わずか十人にも満たなかった。  
かれらは夜明けを待たず出発し、バツソスをめざす。

「整ったか」

待っていると、玉座の向こう、滅紫の幕を払い退けバックス帝が姿を見せる。そこへ座ることなく階段を折り始めるかれの姿を見上げながら、ウズは床に膝をついた。

イクパルの玉座は北方の文化とは異なり、椅子ではない。爪先から踵まで、ようやく入るほどの幅の薄い階段が八段、遠目に眺めると台形の形をして並んでおり、その最上に金糸と銀糸を織り込んだ紅の絨毯が敷かれ、皇帝はそこに直接座る。傍らに黒く光沢のある肘掛がひとつあるだけで、背を預けるようなものは置かれていない。

「抜かりなく」

——四公王を結託させ“帝位の篡奪を謀らせる”。

企みが成功するとはかぎらない。ただそれへの準備なら、もうずっと前から行ってきたことだ。彼らに正面から「皇帝を殺す」と宣言させてこそ、糾弾し罪に問うことができる。だがそれは、同時に死を余儀なくさせる。「かれ」が死ぬことで、ようやく遺された者たちが「動くことができる」のだから。八年前の皇族殺し、無実の罪での投獄、そして延々と続く篡奪の策謀を暴くことが。そうして初めて、鎖国を解き、イクパルの水準を他国と並ぶまで高められる。鎖国はこの国の形を保つ上での、ぎりぎりの措置だった。

——だが、死んで帝国を建て直すなどとは、俺には向かん役だな。美德すぎる。

……汚臭の混じるあの暗い地下、鉄格子の向こうで暗い嘲笑を浮かべた男の顔を、ウズは未だに覚えている。

「ですが、あれでバックス公は抜かりのない男。おそらくは何も無いということは有得ませんので、どうぞご配慮を」

皇帝は、自国を侵す戦争でもなければ、直轄領を離れることを決してしない。しかしその皇帝が、例外として行う公国訪問が二つある。一つは後継者となる皇子の立太子の儀式を、各公国にて披露するため。形式上、「皇帝」は四公王の承認がなければ帝国の中心に座することは叶わない。要するにその先触れとして、“次の皇帝となる息子を宜しく”と各公国に触れ回るのが目的だ。

そしてもう一つが、その皇太子を生む可能性のあるギョズデジャーリヤの披露目。理由は前者と加えて、サグエ・ジャーリヤとして起つ可能性のある者が多いことにある。共同統治者ともいわれるサグエ・ジャーリヤは帝国にとってもっとも栄華ある女の頂点であり、別称通り、有事の際は皇帝と代わって政治を執ることさえある。けれどこの後者は、過去何年と渡って執り行われていない。遠い過去に一度だけ、ファルザイル・フィンメという女がサグエ・ジャーリヤとして皇帝の横に起ったことがあったが、タントルアス王の大陸支配下に置かれる動乱の中、その消息はいつのまにか消えている。

そのため、皇帝がギョズデ・ジャーリヤを“お披露目”したいともなれば、公国の王たちにとっては滅多にない光栄だった。それを内密に、しかも比較的国力の弱いバックスにだけ行くと申し渡せば、当然裏があるものと子供でも判別がつくだろうが。

「わかっている。バツスが他の三公国に義理立てするなら、皇帝は道中人知れず死んでいた、というのが良策。お前の言う配慮とは、首の繋がったままここへ戻れというだけだろう」

「ええ」

「言われずとも、いざという時の為この首は大事にとっておく」

鼻で哂って背を向け、再び玉座へ上っていく姿を静かに見上げる。

――この帝国の存亡に命を賭すなら、貴殿をここから逃がして差し上げます。

――ならば俺を出して殺すがいい……どんなことでも、ここで死ぬよりはマシだ。

皆が皆、罪を負っている。この自分も例外ではないと心中に噛み締めながら、ウズは皇帝の鬚りのある背に心から頭を下げ退室する。

……誰でも振りかざすことのできた正義は、とうの昔に失われたのだと。

鼻先をくすぐるいつもとは違う香りに、フェイリットは目を覚ました。

「乳香……」

自分が今いる場所を思い出して、納得する。乳香を使う人物は、知っている限りバスクス帝しかいない。背中を受けとめる柔らかな寝台から身を起こして、ぼんやりと辺りをみやる。けれど寝台は勿論、光沢のある飴色の寝椅子にもかれの姿は見当たらなかった。

「もう夜明けなのかな」

気配に敏感はずの自分なら、寝台に別の温もりがあれば目を覚ますはずだった。けれど目覚めた記憶は、今をおいて他にない。

寝台から降りると、足音を立てぬように歩いて、仕切りの幕を潜り出た。眠い目をこすりながら眺めると、玉座に座る皇帝の背中が見える。捲り上げた滅紫色の垂れ幕が、後ろのほうでばさりと戻る音がした。

ウズもそうだが、このバスクス帝の近辺にも小姓の姿を見ない。もちろん皇帝宮には多数の小姓たちが働いているのは身を以て知っているが、直接関わって彼の世話をするような、そういった近習の姿が見当たらないのだ。普通なら垂れ幕の側に小姓が二人ほど跪いて、主の移動を助けるのに。

「もう起きたか。まだ夜明けには二刻ほどあるぞ」

「二刻……陛下はお休みにならないんですか」

「休んでいた。お前に起こされたがな」

厚手の絨毯が敷かれた玉座に胡坐をかき、肘掛にもたれている姿は、ぐっすり寝ていたようにはあまり見えない。まさか座ったままで、寝ていたというのだろうか。

「いえ、寝台でお休みにならないんですか、って意味だったんですけど」

「抱かれないのか」

鋭い黒眼が細められて“笑み”をつくる。フェイリットは頭に入りこんだかれの言葉を吟味してから、慌てたようにあとじさった。

「は？！！」

「知らんのか。私は女を抱く以外に寝台を使わん」

そういえば……とフェイリットは眉根を寄せる。ウズの執務室で彼を見かけたときも、椅子に凭れて寝ていたような気がする。

「夢見が悪くてな」

「こ、怖い夢でもみるんですか」

面食らったような顔をしたあと、喉奥でくつくつと笑い始める。

「ああ。お前も見たいか」

「え、って何を」

「着替える。手伝ってくれるか」

ぱっと立ち上がり、滅紫の垂れ幕を上げながら、その途中でバスクス帝が振り返る。

「……え、わたしですか？」

「お前以外に誰がいる」

「そうなんですけど……」

皇帝は身边に小姓を置かない。着替えなど、さして手伝わずとも自分でできるはずなのだが。言われたとおり衣装箱から旅支度用の衣装からローブまでを取り出して、持っていく。

「し、失礼します」

バスクス帝の背側に回り込み、前に結び目のある腰帯を後ろからほどく。帯を引く自らの手が震えているのに気づいて、フェイリットは眉をひそめた。焚きしめられた乳香の香りが、するすると下ろした衣装から鼻に流れ込んでくる。手が震えるのは、きっとこの香りのせいなのだ。腰帯を解いて、背伸びをして衣装を引き下ろす。この衣装の向こうには、大きな、引き締まった褐色の背中が現れる……のだと、フェイリットは思っていた。

黒に近い滅紫色の衣装が、まるで時をとめたかのようにゆっくりと手の中に落ちてくる。

「あ……」

ふっと皮肉な笑いを口の端に乗せ、バスクス帝は横顔を向けて言葉を失ったフェイリットを見下ろす。

そこにあったのは、予想だにできなかった、赤黒い傷痕だった。

「名誉の負傷、とでも言えば満足か」

名誉の、すなわち戦争による闘いの“傷痕”。そう聞いて、フェイリットは思わず表情を固める。確かにイクパルは軍事国家で、鎖国こそしてはいるものの公国どうしの小競り合いは絶えない。けれど……、

……——これは、「違う」。

背中に走るまがまがしい傷痕は、刀剣によるものとは考えにくい。自分も剣を握っていたから、よくわかる。鋭利な刃物で斬られた跡は、こんなふうに醜く赤く腫れあがり、背をのたうったりはしない。

何十もの蚯蚓腫れが交差し、瞳目してしまうほど凄惨な光景に、フェイリットは脱がせた着衣を持ったまま押し黙る。

「鞭……」

思い当たるものといえば、それしかなかった。罪人に対し行われる懲罰。けれど鞭叩きともなれば、最下層の階級の罪人だけのはずだ。メルトロウの古い寺院で、見習いの教育に鞭を使うと聞いたことがあったが、それも今となっては珍しい。どこの国を探しても、もう罪人以外に鞭を使う国は、残されていないはずだった。

「監獄に居た。一国の皇族が五年にも渡り投獄され、腐った飯を啜っていたという馬鹿げた話を、お前は聞いたことがなかろう」

傷だらけの背中を見上げたまま瞳目を続けていると、ふいに思い至る。闇色の鋭い瞳……そうか——この人の闇は、これなのか。そしてそれを「見たいか」と問うたのだ。

フェイリットは膿んで盛上がったまま治ったような傷跡に、恐る恐る指を伸ばす。思っていたよりも固い感触に、静かに目を閉じた。

「……痛みますか、まだ」

傷痕は、死ぬまで心を苛む。忘れたと、癒えたと一度は思いはしても、再びその痕を目にするたび、それを負った時のことを少なからず思い出してしまうものだ。顔に大きな傷を負い片目を失ったサミュンでさえも、滅多に鏡を覗くことは無かった。

バスクス帝の身体を這う蚯蚓腫れは、着衣を着るとちょうど隠れるところばかりに限られている。誰に打たれたのかは定かではないが、きっと、皇族であることを知っていて尚、露見せぬようにととられた手口に違いない。そしてここまでの痕ならば、完治しても疼くような痛みからは、ずっと逃れられない。フェイリットは背に合わせていた手の平をどけると、瞑っていた目を開いた。

「陛下、じっとしててくださいね」

かれの背に向き合ったまま、ばれぬように、フェイリットは自らの手の平を噛んだ。程なくして、その手の上にじわじわと血が溜まっていく。血を見ると、どうしてもあの変化の苦痛を思い出す。けれど、今はそうも言ってはられない。手の平に浮いた血を、ゆっくりとバスクス帝の背中に撫で付けていく。寝ている間に疼くだろう痛みは、これで和らぐはずだった。自分の血に隠されている効果をすべて熟知しているわけではなかったが、こういう小さなことに使えることは、サミュンに昔から教わっている。

「お前——何をした」

驚いたような表情で、バスクス帝が振り返る。慌てて掌につけた傷口をもう片方の手で止血して、フェイリットは首を振った。

「よく眠れるおまじないです。試しに寝てみてください陛下。うなされているようでしたら、側についてすぐに起こしますから」

「……血か」

ふっと視線をフェイリットの手元に寄越して、訝しげな顔をする。はっとして見やると、押さえていた手からぽたりと血が滴り落ちた。

「あの、何でもありません、これは...、」

後ろ手に隠そうとしたところを掴まれて、引き上げられる。

「血でするまじないとは」

複雑な顔をした後に、バスクス帝は血の浮かぶフェイリットの手の平に唇をつけた。

「うわわわ、あの、やめ」

「止めて下さいだと？ 余計なことを」

はっと気づくと、薄い布が手にきつく巻かれてあった。止血してくれたのだと察して、フェイリットはバスクス帝の顔を恐る恐る見やる。

「私はもう十分に休んだ。心配しなくともいい」

手の平が熱い。まさか血を舐められて、自分のほうが手当てされるとは思わなかった。

「.....あ、れ？」

——自分は今、何と.....。まさか血を“舐められて”.....そう考えは、しなかっただろうか。

「う、わあ！ 陛下！ 大丈夫ですか？！ 平気ですか？ 苦しいとか痛いとか寒いとか辛いとか...！！」

一度だけサミュンから聞いたことがあったのだ。「竜は血で契約をする」と。では、今のこれは、今のは.....もしかしたら契約になってしまうのかもしれない。けれど竜の血は「毒」。本来ならば、一滴で人間を死に至らしめる作用さえ持っている。どちらにせよ、大変なことになる。

「.....フェイリット」

名前を呼ばれて、はっとする。いつの間にか寝台の上で、バスクス帝に馬乗りになってかれの襟首を揺さぶっていた。

「な、.....なんとも、ないですか？」

「ああ」

「どこも？ 息が苦しいとか、ないですか？」

「ああ」

「ち、力がみなぎってくる！ とかは...」

「ない。何を言ってる」

——では、どちらもなかったということだ。ほっと息を吐き出しながら、フェイリットは肩を下ろす。危うく大変なことをしでかすところだった.....。これからは、自分の怪我にはいっそう注意していかなければならない。間違っ​​て血を含ませて、死に至らしめるようなことがあったら....、

「降りるか、そのまま衣装を脱ぐか、どちらがいい」

ぱっと腕を掴まれて、驚くほど近くで見つめられる。自分の考えで今まで手一杯だったために、フェイリットは暫く目を瞬かせた。

「脱.....？ ああああ、すみません！」

寝台の上に大の男の人を押し倒して馬乗りになり、よもや首をがくがく揺さぶっていたとは。必死だったとはいえ、穴があったら入りたい。いや、どうせなら今すぐにでも掘りたかった。そ

れほどの恥ずかしさに、フェイリットは慌てて寝台から飛び降り、バスクス帝の目前に伏礼をする。

「あの、向こうに控えていますので、お休みください！ 絶対、うなされたら起こさせていただきますから...！」

彼の顔は見ることなく、礼ののち仕切りの幕を捲って、フェイリットは逃げるように室を後にした。



海をはるかに眺める、真っ白な白磁の城——それがテナン王城だった。

おとぎの国の王城のようだ、人々は口にする。城は船を直接搬入できるよう、海上に大きくせり出した形に建てられている。そのため満ち潮がくれば、まるで本当に、海上にぽっかり浮かぶような風情になるのだった。

「エトワルト王子、あとのことは我々にお任せになって、どうぞ先をお急ぎ下さいませ」

船を搬入することができる城だが、その船というのも王の許可紋がなければ直接横付けにすることは叶わない。漁船に乗り急ぎ来たコンツェたちは、いくら急用とはいえ城下の港に一度降りる必要があった。乗っている人物が王城の間でも、船に紋がなくては通れない。それが決まりなのだ。

「ありがとう」

伴ってきた“鷹”たちに礼を言い、コンツェは船を跳び下りた。

まだ間に合う。本土からここまで、追い風と潮の流れが幸いした。報せをもらってからまだ、二日も経っていないのだ。急ぎ港で馬を借りて、コンツェは久しぶりの故郷に感慨を抱く間もなく王城へと駆け出した。

真鍮の扉を押し出すように開け放ち、円卓に座する老中たちを見回す。

それぞれが驚いたように、目を大きく見開いている。無理もない。彼らのとった通信手段での報せを待っていたなら、到底間に合うはずがなかった。妹の、シアゼリタの手紙がなければ今頃、すでに自分が王太子として承認されていた頃だ。

「おや……エトワルト王子……。これは、随分とお早いご帰還でしたな」

最長老でもある宰相が、傍らの王の顔をちらと見て、立ち上がる。それにならって円卓についていた十人の元老たちがぞろぞろと立ち、コンツェに向けて拝礼をとった。

「いえ。報せをお聞きしたのが存外遅かったのですが、他の王子たちはどうしたのですか」

「皆、それぞれに手の離せぬ用がおありだったようですのでな。そういう場合、我々の承認だけで事は足ります」

眉根を寄せて、コンツェは小さく息を吐く。

では、謀られたというわけだ。“王太子になどなりたくはない”自分に協力的な、四人いる兄王子達を退けてしまえば、よもや「エトワルト王子」の王太子推薦に反対する声はもう無い。

黄土色を元にした、黒糸で緻密な模様の施されたタペストリが四方の壁に吊るされる、詮議の間。しん、とした空気の中に、コンツェは自らの声を出した。

「ご挨拶が遅れ申し訳ございません陛下、只今戻りました。……それと、始めに申し上げておきますが、自分は王太子になるつもりはございませんので」

足早に歩くと、五つの空席の中から、一番出口に近い椅子に腰をつける。席に着いた息子を眺

めて、王は喉奥で咳払う。何かを思案しているときの、かれの癖に違いない。

「その議題なら」

予想通り王は重々しく口を開き、鋭い目をわずかだけ細めた。近く退位を決めているくせ、この狡猾な脳はいっこうに廃れる気配を見せない。

「――とうに終わった」

コンツェは眉根を歪ませて、立ち上がった。

「嘘です」

「……嘘でも証明するものは何もない。そして僕は、この国の王だ」

“王の発言には、元老たちも同意を示す”と。それはこの国の元老院が、まったく形式でしか働いていない証拠でもあった。

「自分には、拒否する権利も無いのですか」

ふっと晒って、王はその瞳を周囲へ向ける。

「権利はあったが、その刻限にお前はいなかった。理由があるならば、それだけだ。だが、僕もそこまで横暴ではない。少し時間をくれてやろうではないか？ ……お前に紹介したい者もおるのでな、」

円卓の端を、父王はこつこつと中指の間接を曲げ打ち鳴らした。それが合図でもあったのか、コンツェが入り来たのと同じ扉から、一人の男が侍従に導かれてすっと入り来る。

「お初にお目にかかります、コンツ・エトワルト王子殿下」

――メルトロー人。目の前に立ったその男をひと目見、コンツェは思った。頭にターバンを巻き、顔には目を除いて覆面がかけられていたが、わずかに見える肌の色は抜けるように白く、こちらを見据える瞳は宝石に似た透明な蔦色をしていて、どこか油断なら無いような雰囲気醸し出す。

「メルトロー王より使節として参りました。カランヌ・トルターダ・アロヴァイネンと、申します」

含んだような笑みを、覗いている瞳にだけ浮かべてカランヌは礼をした。

「……ではやはり、テナンはメルトローと」

独立の算段をつけていることは、父が本土に現れたときから察していたことであったが……まさか、その延長に敵国メルトローと手を結ぶなどと。

驚愕に口を開いたコンツェを見やり、斜に構えたような動作でカランヌは頷く。

「ええ。懇意にさせて頂くつもりでおります。我々としましても、殿下が王太子位につかれたほうが割合得だということも、お話しておいたほうがいいでしょうね。貴国は、いつまでもイクパルなどに付随している器ではございませんよ、ということはこの度は直接弁論しに参ったわけですが」

つらつらと言葉を繋げるカランヌに、コンツェは顔を顰めるしかない。人を喰ったような話し方をしているのに、世事や回りくどさが全く無い。真実だけを、分かりやすく――皮肉って話している。

「なぜ覆面を？ 疚しい事でもおありなのですか」

苦し紛れにコンツェの口を出た欠点を問う声に、カラン又は声を立てて朗らかに笑った。

「疚しい事ならございますよ。私の顔は美しく、まして女のようなので、この国で曝し歩くには少々の勇気がいりましてね。宮廷のお遊び剣術なら得意なのですが、実戦ともなれば貴国の筋骨隆々とした男たちには敵いませんでしょう。護身のつもりでしたが、ご不快でしたら今すぐにも、」

「いえ、結構です。失礼しました」

これ以上、この男の話聞いていたくなかった。胸焼けがしはじめたのを感じて、コンツェは振り切るように彼の言葉を遮る。

やりとりを見守っていた父王が、ふっと吐息で笑うのが聞こえる。一体、何が可笑しいというのか。

「しばらく滞在戴く。この男は、必ずやお前の気を変えてみせるだろう」

コンツェは放心したようにずるずると椅子を鳴らして立ち上がり、その自らの行儀悪さに眉をひそめた。

「気は変わりません。退室を許可願います」

許可しよう、という王の言葉を背中に聞いて、コンツェはそそくさと部屋を出た。カツカツと鳴る大理の廊下を歩きながら、はて、と首を傾げる。メルトロー人……あの容姿をひと目見て、思い至ったのはなぜだろう。確かに、言葉の節々にメルトロー特有の流れるような抑揚があったが、第一印象はそれよりも前だ。白い肌に薄い色の瞳、薄い色の髪——そこまで考えて、コンツェはいよいよ眉根を寄せる。特徴だけ並べたなら、フェイリットは、“まぎれも無く”メルトロー人だ。なのになぜ、あんなにも彼女と接していて、メルトローのことを思い出さなかったのだろうか。彼女の言った「リマから来た」という言葉を、自分は今まで、鵜呑みにしていた。

「……メルトロー人」

けれど、素性を偽ったところで、彼女がメルトロー人だとしても何ら変わりはない。敵国だと位置づけてはいるが、流れてきた人間を非難するほど、イクパル民族たちの心は狭くない。混血の国であるからこそ身に着けたおおらかさを、知らないほうが少ないというのに。

「なぜ…リマ人だと偽った？」

「偽りなどございませんよ、私はしっかり、メルトローから参ったと、申し上げたではありませんか」

耳元で聞こえた囁くような声に、コンツェは飛び上がった。

「ア、アロヴァイネン殿」

「伯爵、と」

にっこりと笑って、カラン又は頷く。

いつの間に、付いて来ていたのだろう。いや、考えれば供にあの部屋を出たのだとするのが、一番理屈にかなっているが……。それにしても、気配がまったく感じられなかった。まるで空気のように、今まで自分の脇に寄り添って来たのだと考えると、空恐ろしさに身が縮む。

「アロヴァイネン伯……その、聞いていましたか」

「何を、です？」

屈託の無い顔を向けられて、コンツェは首を横に振るしかなかった。この男はどうにも苦手だ。そう思って、また歩き始める。せっかく戻ってきたのだから、妹の顔でも見ようと。しかし、隣を歩く歩調が、まったく離れていく気配を見せないことに、だんだんと苛立ちを覚え始める。

「アロヴァイネン伯」

「何か？」

「俺……いえ、自分はこれから用があるのですが、」

「はい、私も、貴方に用が」

「……何ですか。ご用なら、今ここで伺いますので」

「用といいましてもねえ。貴方にテナンをご案内頂ければとても嬉しいのですが、お忙しそうなところを、お頼みするのもどうかと考えていたのですよ」

まったくその通りだと、喉元まで出かかった言葉を思い切り飲み込んで、コンツェは愛想笑いを頬に貼り付けた。

「忙しくなどありません。が、出来ればこちらの用が済んでからではいけませんか。お待ち頂くのも難儀でしょうから、こちらからお呼びたて致します」

“こちらから”という言葉に何度も力が入ってしまったが、この際仕方が無い。どうするかと、はらはらしながら覆面から覗いている鳶色の瞳をみやるが、意外とあっさりカランヌは頷いた。

「それでは、」と踵を返して去り行く背中を見ながら、お呼びたてなんぞしてやるものかと、ふと思う。

「失礼致します陛下」

干上がり、地割れの目立つ大地を眺めていたバツソス公王は、背後からの声に振り返った。「皇帝バスクス二世陛下が予定通り、我が国を目指し今朝方発ったとの報せがございました」「そうか」

こうして露台から自国の姿を眺めていると、目に映る風景にはなんとも報われぬ心地にさせられる。一面の砂の大地は、水を通すこともなければ作物の根を支えることも無い。王宮の建てられる副都ジュプネには、遊牧民や砂漠を渡行する隊商が立ち寄りささやかな露店を開いてはいるが、それも他公国の比では無い。けっして富むことの無い土地を治める王として、代々の名をつぐホスフォネトたちは君臨してきた。……遥かに遠い昔、かの王から賜ったこの地を。

「オフデ、街道沿いに刺客は」

「放ちました。……まさか魔の砂漠をお渡りになるとは思えませぬが、念をおしてヤンエ砂漠にも。しかしこちらは偵察だけで、いないとわかればすぐにでも街道の部隊に紛れるように言い渡してございます」

「それでよい。無事に渡らせては、我が国の立場が危ういからな」

テナン公国が、とうとう独立へ動き出した。周辺諸国は焦るだろうな……ホスフォネトは苦い表情で宮殿の、私室の露台から身をひそめる。

砂漠に国土の大半を占めるバツソスは、そのために目ぼしい産業も無く、よもや自らの手で自らを支えられるような国力は無い。自国を潤そうと他国を侵略しようにも、唯一の誇りである軍は、装備を整えるのに莫大な金が要るのだ。そう考えるならば、他国に付属し軍事力を提供することでしか、もはやこの国は成り立たぬ。古来よりそうしてきたように、傭兵はしょせん傭兵。他に生きるすべの無い自分達は、国としての体面を保つため、常に風を見切る風見鶏で居続けなくてはならないのだった。

テナン公国には「鉄」がある。加えて、メルトロウ王国の加護も近い。テナンとメルトロウが手を結んでしまったら、まず先立つ財力によって、必ずやイクパルは潰されてしまうだろう。そんな廃れ行く運命のイクパルと、むざむざ心中なんぞしてやる気は毛頭ない。

「イリアス公国とドルキア公国は、二の足を踏んでいる様子。何せテナンが独立すれば、これまで通りの鉄の輸入が適わなくなります。しかし周辺国に囲まれている以上、下手にテナンにつくことは出来ない」

陸続きのイクパル本土に対して、テナンは距離を置いた島国。テナンの味方をしたとして、取り囲む周辺国に裏切られれば、そこで袋叩きに合う。

「皆同じというわけか……まあ、そうだな。風見鶏にならねば、ここらの国は到底生き残れぬ」「ええ。我が国にバスクス二世帝が行幸なさるといのは、どう考えてもこちらの不利を逆手に、」

「――落としておこうというわけだな」

バツソス公国がテナンに傾いてしまわぬように、奴らはたずなを引きにやってくる。しかし、

それはあまりにも奇妙な話。無能と言われ続ける皇帝がここへ現れたとして、どう自分を説得できようか。皇帝と、そのかれが治める公国の王としてこれまで築いた土台といえば、元老院凍結という、苦いものだけだ。あの切れ者の宰相ならまだしも、皇帝が？

「とにかく、この機を逃す訳にはいかぬ。必ずやバスクス帝をしとめろ」

\* \* \* \* \*

「ちっ、」

群青だった空の色が、だんだんと赤みを増していく。夜明けを待たずに出発した隊の最後尾で、軍用の馬を全速力で操りながらシャルベージャは苛立っていた。

「腹の虫が収まんねえ」

苛立ちの原因は紛れもなく胸部の――骨折した肋骨の痛み。馬を駆りたて体が鞍の上で飛び跳ねる度、痺れるような激痛が走っていく。自分の油断が引き起こした怪我だとわかっているのに、シャルベージャはその苛立ちの矛先を別の所に向けずにはいられなかった。

――何で、怪我がばれた？

“あの時”怪我を負ったことなど絶対に分からぬよう振る舞ったつもりだった。かけつけたワルターが気づこう筈もなし、ましてしでかした本人などは、まるで記憶にも無い様子だった。

「まさか見ただけでわかった……なんて、んなのあるかよ」

あるわけがない。皇子時代はそれなりに軍務にも関わっていたと聞くと、今の有り様を見れば、到底良い腕をしているとは思えない。皇帝宮勤めの誰もが、軍務を始め政務や外務にまで、手をつけている皇帝の姿を目にしたことが無いのだ。

「なにをぶつくさと仰っておられるのです。腹の調子がお悪いなら丸薬がございますが」

ずっと隣に並んできた馬の鞍上を見れば、図体のでかい女が強面をより一層しかめてこちらを覗き込んでいる。腹の虫が何たらと、呟いていたのを聞かれていたらしい。

「お前あの小僧の侍女だろ」

顔を大きくしかめて、女は首を振った。

「フェイリット。女の子にございます」

「ああ名前なんてどうだっていい。ついてなくていいのかよ。さっきからお前、ずっと後ろばっか走ってるぜ」

フェイリットとかいう小僧、いや小娘は、ジャーリヤの衣装を脱ぎ小姓の姿をして、今は皇帝の後ろ脇に馬を走らせている。というよりは「引かれている」というほうが近い。馬のたずなはしっかりとバスクス帝が握っているからだ。小姓ならば誰しものが扱えるはずの馬を、あの娘はまだ乗りこなせていないらしい。まさか小姓というのも偽りの姿なのか。

「あなたこそ、道案内のくせ最後尾ではありませんか。陛下があんなに遠くに見えますよ」

目の先には五人の部下たち、そして皇帝の乗る馬が一行に連なっている。纏っている着衣もみな、砂漠の民が着るような頭から踝までを巻きつける青い外套だ。

遙か向こうに行く先頭のローブが、砂の混じる黄土色の風に乗って揺らめく様を見やり、シャルベージャは鼻で笑った。

「薄いが、まだ星が残ってる。俺の出る幕じゃねえよ」

砂漠に住む者たちは、渴いた大地に足をつけ、星を見上げて生きていく。幼い頃から季節と気候と星との交わりを親を介して耳に聞き、そうしてどこへ立っても自分の位置がわかるように育つのだ。遊牧の民を始祖とするイクパル民族なら、星を見上げて爪先の向く方角が西か東かぐらい、わかっていて当然。

「しかし、陛下は」

「ああ」

そのような民草の教育は受けていないのではないか。皇族どもは、遙かな昔に遊牧の生業を捨て、人を束ねることにのみ熱を燃やした者たちの末裔だ。女の言い分は、よくわかる。

「そう思って試してみたが、見てる限り、方向を間違えてるようには見えねえ」

“無能”、“木偶の坊”、“色狂い”――様々な噂を耳にしてきた。それらを頭の端に並べ立てて、シャルベージャはふと疑問が湧いてくるの感じていた。その疑問が何なのか、線を結ばぬうち隣の女がふと呟く。

「ならばザラナバルとは何なのです。今の星を見ていれば、わたくしにも方角はわかります。日が昇れば、その方向で位置も特定できる。これでは、あなたたちの任務はなくなりましょう」

「たしかに」

軽い声で応えて、シャルベージャは北の方角をさっと見やった。はるかな向こうに、竜の背に似たアルマの山脈が聳えている。あの山脈がヤンエ砂漠を見下ろしていなかったなら、ザラナバルは生まれなかった。

ぱっと視線を外したシャルベージャの動作を、女は怪訝に思ったのか瞬時に真似た。目線をアルマに移してしばらく、二人は無言で馬を走らせる。

「……来るぜ」

山脈の麓に近い辺りが、まるで瞬時に掛け布を引いたように黄土色に染まっていく。

驚いたような女の声の脇に聞いて、目線を前方に戻したその時、皇帝が馬を御して立ち止まったのが見えた。

はためくローブが頬に貼り付いて視界を防ぐのを、鬱陶しく払いのけながらフェイリットは考えていた。

十人にも満たぬ人数で馬に乗り、砂漠を横断していたら、どこからどう見ても隊商としか思われぬ。なるほど、もしかしたらシャルベージャは……。

――偽装のために人数を減らした…？

四分の一とは聞いていたが、実際はその人数さえも満たしていないのだ。兵士として同行してきたマムルークは、シャルベージャを含めてたったの六人。本当の隊商はこんなにも速く馬を駆ったりはしないだろうが、それでもここまで兵を減らした甲斐はあったはずだ。いい目くらましになっている。

視界の開けたただ広い砂漠の中では、身の隠せる場所がどこにもない。けれどそれは、追いかける者や迎え討とうとする者にも同じことが言える。遠目から見て隊商のようなならば、近づいて確かめようにも自分たちの素性まで割れてしまう。

出発の直前、野生の獣だけではない、バツソス公やその配下に命を狙われる危険もあるのだと、ウズに言い聞かされていた。皇帝がこんなにも少人数で訪問してくるとはバツソス公も思わないだろうが、考えてみれば砂漠に居を構えて狙うより、迂回する街道沿いにいくらかの刺客を配置するほうがずっと効率が良い。休息の為オアシス街に寄らざるを得ないところを、待ち伏せるだけでいいのだから。魔のヤンエ砂漠、などと呼ばれているこの地に、入り来る危険は相当に大きい。

でも一一と、すぐ前を走るバスクス帝の背中を見やって、フェイリットは顔を曇らせた。ろくに稽古もしていないような今の状態で、護衛だなどと、やり遂げられるだろうか。もやもやした不安が胸に降りてきて、どうにも拭い切れない。

ふわりと漂い来た乳香の甘いにおいを嗅いで、フェイリットは目を閉じる。バスクス帝の寢室を走り出してから、言葉を交わしていなかった。一言二言は話したが、たずなを持っていてやるから自分で馬に乗るようにとか、そういったような内容だった気がする。

一一眠れたのかな……。

玉座の間で控えながら意識を研ぎ澄ませていたけれど、寝ているかどうか覗いて見ようなどという気は起きなかった。そのまま夜明け近くになり、ウズが姿を見せるまで、バスクス帝が玉座の間に出でることはなかった。

そろそろ完全に夜も明ける。朝日が砂の大地を焼くように昇るのを前方に眺めながら、フェイリットはふと、首を傾げた。

……風のおいがおかしい。乳香の香りとはまったく違う。自然に流れる風の特有のおいがお、不意に変化したのだった。

「なんだろう、」

疑問が口をついて出て、ふと何の気もなくアルマ山の方へ視線を滑らせた矢先。

「……っ陛下！」

驚きに声を張ったフェイリットに気づき、バスクス帝はたずなを引いた。

倏うように、ばらばらと馬が背後で止まっていく音を聞きながら、フェイリットはじっとただ一点を見つめていた。

「幕？」

幕のように見えた“それ”は、しかし違った。

巨大な一一その向こうにあるはずのアルマ山脈すら覆うほどの、砂嵐。間違いなくこちらに向かってくるその黄土色の塊を見て、フェイリットは慌ててバスクス帝を見上げる。



「ヤンエの魔物だ」

バスクス帝の横顔が、視線を受けて静かに応える。どうしたらいいのかと顔を青くしていると、追いついてきたシャルベージャが目の前に馬を寄せてきた。

「陛下、馬同士を縄で繋ぎます。はぐれたら二度と戻れないので、せいぜいしっかりしがみ付いてることをお勧めしますよ」

「――馬に乗れ！」

シャルベージャが叫ぶのが聞こえる。

砂のせいで黄色くなった視界に目を細めて、フェイリットは馬のたてがみに身をうずめた。うねるような砂まじりの突風が頬をしたたかに打ちつけ、視界は一瞬のうちに無くなっていく。

伏せた顔をわずかに上げると、空を覆う雲が黄色く見えた。

「砂嚙んだ」

小さく唸って、フェイリットは顔をしかめる。口の中がじゃりじゃりする。しきりに頬を叩く砂つぶてが、巻きつけたターバンの裾に跳ね返りぱちぱち音を立てていた。うっかりターバンを外そうものなら、砂で目が瞑れてしまいそうだ。

馬同士のたずなを縦一列につなぎ鞍に跨った時には、すでに風の唸りがすぐ傍で聞こえていた。シャルベージャの号令があと一呼吸遅かったなら、馬上に乗れず砂つぶてを浴びるところだっただろう。馬を先頭から引くのはシャルベージャに代わり、その後ろにバスクス帝、フェイリット、ジルヤンタータ、そして挟むように残りのマムルークたちの馬が連なっている。

方角を知るためのものは、もう何もない。すでに星は出ておらず、太陽は厚く垂れこむ雲の向こうに姿を潜めてしまった。あの風に巻かれてから、磁気もおかしくなっているのだ。

懐から方位磁石を取り出して、フェイリットは目を細めた。薄いガラスで覆われた細い針は、今や方角を示すことなくぐるぐると回っていた。これでは、右も左もわからない。なのにあの号令から、シャルベージャの進路は少しもずれることがなかった。青いターバンを目隠しのように顔にぐるぐると巻きつけて、一体どこで物を見ているのだろうかと思えてしまうほど、真っ直ぐに砂の上を行く。目を守ってやるためにと、馬にも厚くて柔らかい布で目隠しを施してあった。たずなを引く人物を信頼しなければ、馬自身も駆けることはできないだろうに。

「……ザラナバルって、何なんだろ」

ため息混じりに、フェイリットは吐き出す。アルマ山脈のふもと、黄砂の砂漠に暮らす古の民族――……特殊な才をもつその様は、なんだか“竜の血”<sup>じぶんたち</sup>に似ている気がする。

「分かるわけねえだろ、もしかしたら俺らもヤンエの魔物だったり、な――と、シャルベージャ殿が仰っておりましたよ」

「ジルヤンタータ？」

「同じ質問を、先程私も」

斜め後ろからジルヤンタータの声がする。はっと見やると、繋いだたずなのあそびを使って、交差するように彼女の馬の背が近づいていた。

「大丈夫でございますか、フェイリットさま。私の馬に乗り移ってもよろしいのですよ」

大声を出しているわけでもないのに、彼女の低めの声はこの風の中でもよく聞こえる。ろくにたずなも引けないフェイリットが、単騎で伏せたまましがみついている姿は、彼女の目にさぞかし危なげに映るだろう。

「たぶん大丈夫です。たずなは繋いであるし」

フェイリットが答えると、

「左様でございますか」

なんとなく残念そうに、ジルヤンタータは頷いた。

「くれぐれも振り落とされないようになさいます。ここまで視界が悪くては、落ちたら最後、馬の脚に蹴られてしまいます。万一なにかございましたら、すぐに私をお呼びになることですよ」

思わず笑ってしまってから、フェイリットは「ありがとう」と微笑んだ。ハレムでの夜からだろうか。彼女がまるで母のように接してくれるので、なんだかすぐたい気持ちになる。男手で育てられたために、こういう風に心配されることは今までなかったのだ。

――サミュンも心配性だったのは同じだけだ。

フェイリットは再び馬に身を寄せて、振り落とされぬようしがみつく。

馬の匂いなんてずっと嗅いだことはなかった。けれど、不思議と落ち着く匂いがするものだ。お日さまに長い間照らされた干し藁のような。サミュンは、どうして馬術を教えてくれなかったのだろうか。メルトローの貴族は確かに、騎馬より馬車に乗る。必要が無いからと言われればそれまでだ。けれど自分に求められているものなど、そういった雅やかなものではなかったはず。王の隣に立ち、かれを支え戦場をも無尽に駆ける――それが彼の育てたものだ。ヒトのように育てられた、ヒトにはなれないもの。

「……そうだ、わたしも」

巻いていた薄布の青いターバンを二、三度ほぐし、顔の周りに巻きつける。薄いから、少しだけ鼻に隙間をつくれれば呼吸はできる。そうして目を閉じ、しがみついていた馬の背から身を起こして、フェイリットは静かに意識を張り巡らせた。

――……やっぱり、感じる。

うなじや肩や額、つながる背骨のひとつひとつ……意識の断片が、まるで触角のようにのびていく。

砂を踏みしめる蹄の音、馬の吐息と人の吐息。はためくローブの音も、みんな違う。シャルベーシャのように、進む方角がどちらへ向いているのかはわからない。けれどそこに誰が居て、何があるのか、しっかりと感じられる。

「あれ」

一、二、三、四……と試しに馬の数と人の数を数えて、フェイリットは首を傾げた。人と、馬の数が合わない。

「ジルヤンタータ、」

振り返って目を開いても、遮る砂のせいで彼女の姿は見えない。けれど、微かに感じる血の匂い。これはあきらかに、事態の異常さを示している。

――気が付かなかった。

「ジルヤンタータ！ ……どうしよう。砂で血の匂いも声も消えてるんだ」

“空”<sup>から</sup>の馬が五頭。自分の感覚が正しいならば、ジルヤンタータが乗る馬から後ろにいるマムルークたちは、“馬上にいない”。追っ手か。けれど、殺気も心配も全くない。砂風の凄まじさで声が聞こえないから、シャルベーシャに「止まって」と伝えることができない。

フェイリットは思い切って馬の背から身を乗り出すと、ジルヤンタータの乗っている馬に繋がるたずなを掴んだ。手繰りながら引き寄せていくと、馬の頭に手が触れる。

「……いい子だから、じっとしててね」

馬の首筋に手をあてて二、三度さすると、たずなに手をかけ、鞍があるだろう場所めがけて飛び移った。後ろ向きに鞍へ腰を下ろし、落ちないように態勢を整えて、フェイリットは手探りでジルヤンタータの体を探す。

「ジルヤンタータ！」

ジルヤンタータは、ぶら下がるような形で鞍の向こうへ仰け反っていた。足が鐙にしっかりとかかっていなかったら、今頃振り落とされて馬上にはいなかったはず。幸運に感謝しながら、ジルヤンタータの体をずるずると引き起こし、その頬に手をあてる。

「ジルヤンタータ！」

「サ……フェイリットさま」

彼女の顔を覗き込んで、限られた視界のなか、顔色を確認する。顔色は悪くない。怪我を負っているのは間違いないが、それが命に関わることはないだろう。

「何があったの?!」

「……申し訳ございません、気を失っておりました」

ぐっと自ら体を起こして、ジルヤンタータは支えていたフェイリットの腕を握る。起き上がったその顔は、案外厳しく歪んでいた。

「分かりますか、」

険しい顔で囁いたジルヤンタータに、フェイリットは目を開く。

「え、」

「足音です」

「足音……」

「一瞬でした。今も、併走しています」

告げられた存在に一瞬だけ眉をひそめて、フェイリットは頷いた。

――追っ手だ。

「殺気は無い、けどこの足音……とりあえずシャルベージャに伝えて馬を」

フェイリットの言葉を聞きながらも、心なしか視線を横に向けてジルヤンタータは首を振る。

「馬は止めるべきではございません」

「でも、そしたらマムルークたちは?!」

負傷し落馬したマムルークたちは、恐らくここより遥か後方に置き去りにされているはず。この砂漠の中では、生身の人間が放り出されて生きていられる保証はない。

「彼らは言わば鳥。生きていれば自分たちだけでもヤンエを脱することができますでしょう。今は、ご自分の安全のみを第一にお考え下さいませ」

フェイリットは曖昧に頷きながら、脇腹のあたりに下げた短剣の柄に指先を乗せた。“ご自分の安全のみ”を“第一に”と言われたことが、腑に落ちない。本来なら「第一に陛下の安全を」という言葉がくるであろうに。きっと考えすぎなのだろう。彼女は純粹に、心配してくれているのだ。

「ジルヤンタータ。この馬のたずなを切るから、前の馬に移れる？」

「……たずなを？ わかりました」

ジルヤンタータを前に移してから、フェイリットは腰の後ろに吊っていた短剣をさっと抜きさる。前の馬のたずなとを繋ぐ縄に刃先を向けて、振り下ろした。

縄が切れる——そのほんのわずかな一瞬だった。視界の隅に、白いものが写り込む。

「なに——?!」

フェイリットが身構えた頃にはすでに、後ろの馬たちの悲鳴のような嘶きが耳に届いていた。嘶きのすぐあと、なし崩しに倒れていく馬の影。真っ白な虎が、馬の脚に食らいついて引きずっている。

——タイム！！

砂漠に棲まうという白い<sup>タイム</sup>虎。だが人を襲うことは滅多に無く、それどころか「幻」とも言われるほど、その姿を見かけた者は少ないと聞く。そのタイムが、まさか襲ってきているなどというのか。

自分の身体が宙に放られたことに気づくまで、フェイリットは啞然とするしかなかった。

熱い砂地に身体を叩きつけられ、フェイリットは歯を食いしばる。転がりながら衝撃を和らげ身を起こすと、見る間もなくその目を大きく開く。

視界は、まるで嘘のようにくっきりと開けていた。あれほど凄まじかった砂風も、一瞬のうちに消えて無くなっている。彼らがかかり離れたところに倒れているということは、随分と弾き飛ばされたようだ。累々と転がる馬がかかり遠くに見えている。ジルヤンタータがその一頭のそばで気を失っているのを確認して、フェイリットはほっとしていた。シャルベージャもジルヤンタータとあまり変わらぬあたりに倒れていて、ちょうど半身を起こしたところだ。だがやはり、他の五人のマムルークたちの姿は見えない。あの時いないと感じたのは、気のせいではなかったのだ。生きていてくれればいいが。そのまま前方まで馬を目で追って行って、ふと気づく。

「陛下——！」

“それ”を見た時、身体の底から血が沸き上がった。

白いタイムに組み敷かれ、今にも喉笛を噛み切られようとしている、バスクス帝の姿を。

ジルヤンタータは慌てて受け身を取りながら、砂の上を転がった。肌を焼くような砂の温度と、ヴェールがずれて降りかかる太陽の強い日差しに、意識がぐっと遠のいていく。

「……ぐっ、」

うつ伏せになった身体をじりじりと起こして、砂を握る。伝わる掌の熱さに、霞んでいた意識が戻り来る。

「一体なにが、」

ジルヤンタータの視線の先に映ったのは、あまりにも唐突に開けた青の空。そして空をすっぱりと区切る、黄色い砂の大地だった。

「あれは……なに」

逆光を浴びているため、並ぶ影をしっかりと見るができない。目を強く細めて見晴らして、ジルヤンタータは更に顔を顰める。そこに対峙していたのは、一頭の白い虎と、イクパル帝国皇帝だ。あれほど濃密に漂っていた黄砂の嵐が、幻が消えたように無くなっている。まさか、嵐はあの獣が連れてきたとでもいうのだろうか。

虎の白い体躯は、人間の大人の倍はある。威嚇するように喉を鳴らし、じりじりと皇帝に近づいていくたび、足元に黄色い埃が湧いていた。

砂漠に棲む魔物——タァインは、皇帝を見下ろし牙を剥いて、ひとつ吼えた。

ジルヤンタータは微かに顔を歪め、小さく晒った。ここで彼が死んでくれれば、「敵」が一つ減ることになる。イクパルという名の国の、現統治者。代わりはすぐに起つのだろうが、主を失って混乱が起きぬ国などない。“我がメルトロー”に、介入の余地が広がるわけだ。

小さく息を吐いて、皇帝から目を離す。他人の肉が切り裂かれて散り散りになる様など、好んで見る趣味はない。それよりも、

「——様、」

視線を巡らせながら、自らが本来守らねばならぬ人の姿を捜す。砂混じりの嵐がさったと思えば、今度は灼熱の太陽だ。頭を射すようなその暑さには顔を歪めて、乱れていたヴェールを被りなおした。

「……？」

すっと、砂の混じらぬ透明な風が走ったのを頬に感じて、ジルヤンタータは瞠目した。

「サ、」

駆け抜けたのは風ではなく、命を案じた「その人」。皇帝に喰いかかろうとするタァインに、走り寄る少女の背中だった。

「陛下！！」

呼び声とともに彼女の身体が翻り、その手に握られていた短刀がタァインの口中からはみ出た牙を制する。風が通り抜けたとを感じるような、ほんの一瞬の出来事だった。ジルヤンタータはその光景を惚けた様に見つめて、口を開ける。

タァインの体躯は、どう見ても立ち向かう少女の三倍以上。白くしなやかな毛皮がわらわらと

総毛立ち、自分の牙を止めた少女の手元に怒りを向けている。

ぱきん、と音を立て、その短刀が役目を果たさず地に落ちるまで、さしたる時間はかからなかった。短刀を噛み砕いたままタインは二、三顔を激しく振ると、少女より半身ほど後ろに下がる。

短刀しか持っていないというのに、あの娘はなんと大きく動くのだろう。下がった虎を追いかけて、ぱっと身を竦めたかと思うと、次には虎の真横にいて折れたそれを振りかざしている。虎が身をひねり、彼女の腕に喰らい付こうと口を開けるが、それを僅かな動きで避けて横面を蹴りつけた。よろけた虎がふらふらと横にずれていくのを静かに見つめながら、右手の短刀を逆手に持ち代える。

虎が吼えるのと、彼女が吼えるのと、それはほぼ同時だった。同じような唸りをあげて、両者が一度に跳びかかる――

「サディアナ様！！」

しまった、と思う。

叫んでしまってから、ジルヤンタータは口元を押さえた。

自分の名が“スリサファン”だということも、その女が彼女の祖国メルトロローに属しているということも、乳母となるはずだったことも、彼女――サディアナは、まったく知らないはずだった。

何ということ。呼び声に一瞬だけ動きを止めたサディアナの瞳は、驚きのままに見開かれ、  
「危ない――！」

その一瞬が、彼女に隙を与えた。

タインの牙が、サディアナのわき腹にざくりと深く突き刺さる。

「――！」

悲痛な呻きを上げて、彼女は噛み付く虎の額を押さえた。鮮血が腹からどっと溢れ出し、半身をあっという間に黒く染める。

「サディアナ……様！！」

喉の奥がひきつれて、ジルヤンタータは口元を押さえたまま砂の上に膝をついた。

ゆっくりと振り返る――少女の瞳は美しく光る湖水色。

ジルヤンタータは押さえた口元の奥で、驚きに息を呑む。

サディアナの頭を覆っていたターバンは、いつの間にか解けていた。ハレムの浴場で染めたはずの黒髪が、一瞬のうちに黄色く発光する。

「……陛下、」

身を挺してまで「敵<sup>イクバル</sup>の皇帝」を救った我が国の王女は、口の端からこぼれた血を吐き出して、堪えるように歯を食いしばった。

水気をあっという間に乾かす黄色の砂に、大量の血が吸われていく。相当な出血は、彼女の意識をいつ奪ってもおかしくなかった。なのに、

「護衛は果たしました。お逃げください」

苦悶の表情とは真逆ともとれる冷静な声が、血に染まった唇から発せられる。

彼女の背に守られているくせ、バスクス二世はふっと晒った……ように見えた。ジルヤンタータの背筋を、戦慄に似たざわめきが走っていく。

「あの男……！！」

バスクス帝は湾刀を持っているではないか……！ 腰に履いた湾刀に手すらかけず、ただ静かな目で少女をじっと見ているなど。湧き上がった怒りに奥歯を噛み締めると、くぐもった音がごきりと鳴る。

あの男は何を見たいというのだ——！！

「サディ……タブラ・ラサ！！ お逃げください、それ以上は！」

それ以上は「身体」がもたない。もし、バスクス二世が何らかの意図を持って動かないのなら尚のこと。無茶をして変化などしてしまえば、それこそ大変なことになる。最早自分が飛び込んで、身を挺してでも阻止せねば。

「ほっとけ」

立ち上がろうとしたジルヤンタータの肩に、がしりと誰かの手が乗せられる。

「シャルベージャ殿！ 今まで何を！」

腹の辺りを押さえた若者が、きつい眼差しをずっと細める。

「何って、見りゃわかんだろ」

気絶してたんだよ、と吐き出すように顔を歪めて、シャルベージャは尚も立ち上がろうとするジルヤンタータの身体を押さえつける。

「わかりません——！ 貴方こそがイクパル皇帝を護るべきではないのですか！！ あんな小さな娘に舞台をとられて！」

「捨て身の献身なんぞ、泣けるじゃねえか。俺はそこまで忠誠は誓っちゃいないんでね」

「それでも軍人ですか！！！」

ジルヤンタータの叫びに、シャルベージャは短く鼻で笑った。

「まったく、ぎゃあぎゃあうるせえな、」

「なんですって！」

黙れ、と短く言われて口を硬い手が塞ぐのを、避け損ねてジルヤンタータは身をよじった。しかしそれも、背後に回った彼のもう片腕に抑えられてしまう。

「……ぐ！」

「あいつがどんな魔物なのかは知らねえが。やる気になったのはいいことだ。——……見ている、あれは勝つぞ」

がしりと拘束されて、ジルヤンタータは再びサディアナ王女へと視線を向けた。シャルベージャの言葉に半ば驚きを感じながら、その目をさらに見開いていく。

さきほど見えた黄色の光は無くなっていたが、染料のとれた真っ白なサディアナの姿が鮮血に濡れて半身を赤く染めている。喰らいついた虎はそのまま、まるで見えない力に抑えられるように微動だにせず、ただ唸りをあげていた。喰らいついたその大きな顎を、少しだけ横に捻るだけで、少女の腹を千切り切ることができるというのに。



サディアナは握っていた短刀の柄を振り下ろし、腹に刺さる牙の根元を力づくで折り割った。

——グオオオオオ……、

悲痛な咆哮を上げて虎がよろけるのを見下ろして、折れた牙が刺さったままの、自らの腹を押しやる。牙を抜いてしまえば、おびただしい出血が命を奪っていた。いい判断に違いはないが、あの状況でそれをしてしまうなど……、

「どうしてそこまで……」

戦いの本能だろうか。竜は血を見ると、身体が湧いて仕方が無いのだと——聞いたことがある。しかしそこまでの献身を、忠誠を、彼女が簡単に選ぶとはどうしても思えない。

——サディアナが誰かに心を預けたら、その時点で殺せ。男もろともな。

「へ……陛下、」

陛下、ノルティス陛下、わたくしは気づいてしまったのでしょうか……！

脳裏によぎった自分の使命が、ふっと唐突に思い出される。そんな、そんなはずがない。

「なぜ……助けにいかないのですか！ シャルベージャ殿！ いくら本気になったとて、あの血では死んでしまう！」

口を塞いでいた手がいつの間にかはずされていたことに気づき、噛み付くようにシャルベージャに怒鳴る。だがシャルベージャは、こちらを見もせず静かに呟いた。

「——あれが大の男、それも生まれ付いての軍人のマムルークどもを、二十も潰した魔物だぜ」

「な……！！」

軽やかに笑った後、シャルベージャは鋭い眼差しをサディアナの方へすっと向けた。

「タインは同種で戦わない。てっきり俺はそうだと思ったんだが、」

小さな悲鳴が聞こえて目を移すと、サディアナが砂に膝をつくところだった。さすがにもう、限界だ。砂に伏せて自らの腕の皮を引き千切ろうとする姿を見つけて、ジルヤンタータは立ち上がった。

自らの皮を引き千切る——それはまぎれも無い、変化の徴候。

横のシャルベージャを睨みつけて制し、その腰の湾刀を奪い抜く。

「わたくしとて、ただ見ているわけには参りません」

走り出そうとした瞬間。

——ギャアオオオオウウ……！！！！

潰れたような虎の悲鳴が木霊して、オオオオン——大きな体躯が砂に転げた。その毛皮に埋もれる額に長い湾刀が刺さっているのを見つけて、ジルヤンタータははっと息をのむ。

視線を横に動かすと、気を失った少女を抱き上げるバスクス二世の姿が、目に映った。

サディアナを抱えた皇帝が、こちらを振り返り目を細める。

「全部やられたか」

かれも他の者と同じ様に紺碧のローブを纏っていたが、腕に抱くサディアナの血のために、それもどす黒く変色してしまっていた。目前に横たわるタインの亡骸から湾刀を抜き去ると、鉄臭い、独特の血のにおいが鼻をつく。

「は、」

“全部”が一体何を指しているのかを図りかねて、ジルヤンタータは口を開ける。

「馬だ。歩かねばならなくなったな」

今し方起こったことが、まるで全て夢だったとでもいうような、平然とした声色だった。

「陛下、」

罵ってやろうとため込んでいた怒りの言葉も、そんな冷静な態度に行き場をなくしてしまう。……なぜこんなにも、酷薄な顔ができるようになったのだろう。ふと脳裏をよぎったものに、ジルヤンタータは歯をきりと鳴らす。

「わたくしが」

代わります、と差し伸べた手には目をやらず、バスクスはサディアナを砂上に降ろした。小脇に挟んでいた湾刀を砂上に刺し込み、そのまま彼女の傍に膝をついて屈む。何をするのか目を剥いていると、血に濡れたサディアナの上衣を手で割きはじめるではないか。

「そのようなことは、わたくしが、」

制止の声も聞き入れることなく、バスクスは顔色一つ変えずに牙の刺さる脇腹を見つめた。少女の白い腹に刺さる黄色味を帯びた牙は、赤子の腕ほどの太さがある。思わず顔を背けたくなるほど、それは深く彼女の腹を抉っていた。

「お前はやはりメルトローの者か」

自らのローブの端を割き、バスクスはサディアナの腹にきつく巻きつけながら、こちらに視線を向けた。サディアナに対する独白かと思ったが、自分に向けてのものだったらしい。

ジルヤンタータは顔を隠すヴェールの端を僅かに握り締めて、「いえ」とだけ答えた。過剰な弁解はかえって肯定ととられやすい。けれど“サディアナ様”と叫んだことで、気づかれていることは確かだ。サディアナ・シフィーシュ・ファロモ＝フィディティスーメルトロー王国第十三王女。その名は法で規制され、同名の人物は決して存在しない。イクパルがいくら閉鎖的であろうと、皇帝ならば他国の直系王族の名くらい、覚えていて不思議はなかった。

「そうか」

およそ納得したとは思えない。吐息だけで嘲って、バスクスはサディアナの処置を終えた。応急としかいえぬ荒っぽいものだが、この場で出来ることはこれが最良で限界だ。全く、何を考えているのか。見殺しにするかと思えば、寸でのところで手を伸べる。今し方していた手当てでさえ、“皇帝陛下”自らやる必要はないはずなのに。

バスクスは立ち上がると、砂に刺したままだった湾刀をざくりと抜いた。タインの血で濡れ

た上に、砂の塊がこびり付いている。逆手で抜いた湾刀をぐるりと翻すと、ぶんと力強く振り払った。成る程、そうすれば砂で血が飛んで、湾刀を拭う必要がなくなるわけか――。思わず納得してしまう。その動きはとても、お飾りの剣技には見えなかった。実戦で泥に塗れなければ、とても出来ない仕事。

ばらばらと散っていく血交じりの砂を見つめながら、ジルヤンタータは息を吐く。

「陛下、恐れ入りますが」

「なんだ」

湾刀を鞘に収めたバスクスが、一瞬だけ足元の少女に目をやってから、こちらを見下ろす。気遣いのように見えなくもないが、その目は特に感情のこもらぬ、静かな眼差しだった。“ここに荷物を置いているから、踏まずにおこう”とでもいうのに、とても近い。ジルヤンタータは、どうしたものかと眉を寄せながら、バスクスの顔を真っ直ぐに見上げた。

「その湾刀が斬る刃ではなく、投げナイフだとは存じ上げませんでした」

最後の最後、タイムに「投げつけて」息を止めたその湾刀はお飾りか。なぜ戦おうとなさなかったのか？ ジルヤンタータが精一杯の皮肉を込めて問うた声に、バスクスは顔色を変えず、口元だけをふっと歪めて見せた。

「見てみたくてな。……マムルークを屠ったその業を」

ジルヤンタータは再び怒りの火が燦りはじめるのを感じていた。そんな好奇心で、少女一人の命を軽んじてよいものか。ぱっと顔を塞いでいたヴェールを解き放つと、ジルヤンタータはバスクスをきつく睨んで口を歪めた。

「酷いことをなさる」

予想通り、バスクスはジルヤンタータの顔を見て、驚いたように目を開いた。

「これはこれは、」

驚いた目をすっと戻し、声を立てて短く笑う。低く柔らかい声音は、まるで今まで冗談でも話していたかのよう。だがその目だけは、決して笑ってはいなかった。

「――賭けとはいえ、この娘は兵を減らした。これはよい罰にもなったろう」

太刀も抜かず、傍観していたその闇色の瞳は、ゆっくりと細められていった。獲物を捕らえようと構える、捕食者の目。サディアナがマムルークを倒したという話は人づてに聞いていたが、その息の根まで止めたとは……初耳だった。まさか彼女自身、力を制御しきれていないのだろうか。そう考えると、確かに頷けるものがある。彼女が王弟サミュエルの元で学んだ剣術は、しっかりと定まった型を示すメルトローの宮廷式と、彼が剣豪とまで謳われる所以になった両刃の剣技が基本。先程のサディアナの動きは、優雅と湛えられるメルトロー式には、とてもではないが見えなかった。

「メルトローの間者として首を刎ねられたくなければ、大人しくしていることだ。……シャル、」

バスクスの呼びかけに、面倒そうに顔を顰めたシャルベージャが目を向ける。

「“お前の一族”ではないな？」

「俺らは同種殺しはしない、んでしたかね」

——まさかこの男は。顔色を変えてシャルベージャを見やったジルヤンタータを尻目に、バスクスは再びサディアナの脇に屈みこんだ。蒼白な顔で意識を戻さぬサディアナを、このまま炎天下に晒すのはよくない。ジルヤンタータはバスクスの後ろからさっと周り、サディアナの側に膝をついた。

「わたくしが運びます」

強い口調で言い放ち、サディアナの身体をそっと起こす。

同種殺し——その言葉を考えながら、ジルヤンタータはサディアナの身体を背に背負った。イクパルに住む、いにしへの戦闘部族。まさか彼が……いや、“ザラナバルが”と言った方が正しいのかもしれない。

遙か昔。英雄タントルアスを慄かせたのは、イクパル皇帝の佇む赤い城だけではなかった。徒党を組んで襲い掛かる、戦民族の群れ——獣の血を身の内に宿す「人ではない」者たち。彼らもまた“竜”と同じ、血の捻れ曲がった民族だった。とっくに絶滅したと伝えられていたのに、生き残りがいたとは……。

サディアナの獣じみた行動に、もしかしたらその血が流れているものと踏まれたのかもしれない。およそ、“竜”だとは知らずに。はっとして、ジルヤンタータは眉をひそめた。——では、ばれてはいないのだ。メルトローの王女であるというのは別としても。

「……バツソスはあっちだぜ。この距離じゃ、一日もかからねえだろ」

顎元に下げていたヴェールを持ち上げて顔を隠すと、ジルヤンタータは浅く頷きシャルベージャの背に続いた。

「本当に変わったこと」

その向こう、一足先に歩き出した男の背中を、苦い顔で見つめながら。

\* \* \* \* \*

艶消した濃茶の扉の前で、女性が朗らかに笑った。

テナン公国の衣装はメルトローにとっても近く、女性は肌を露出しない。きっちりと踝までを覆う裾の広がったドレスが、彼女の礼とともにふわりと浮いた。やわらかな黄色は、鳥の雛の産毛を思わせる。

「エトワルト王子」

「ティリ・ヤローシテ夫人」

呼びかけるコンツェに微笑んで見せて、その女性は扉の取っ手に手をかけた。

「お久しぶり。ほんと、男前になりましたわ。しばらくぶりですものね」

「お変わりないようで安心しました」

胸に手をあて頭を下げると、夫人は声をたてて笑った。すかさずその右手が差し伸べられて、コンツェは苦笑する。

「ぎくしゃくしてますわよ。すっかり帝国に染まってしまって」

夫人の右手を軽く受け取り、その甲に唇を落とす。忘れていたテナン宮廷の作法に、つい辟易してしまった。

「いえ。お久しぶりです、フィティエンティ」

女性が表に出ぬ風習を長く保ってきたイクパルと違い、テナンはこうして宮殿の公の場にも女性がたくさん存在する。コンツェはヴェールを被らぬ夫人の明け透けな微笑みを見つめて、予想していたよりも、自分はイクパルに馴染んでいたのだと思った。

「シアゼリタはいますか」

「ええ。先ほど図書の間よりお帰りになられたところですよ」

「相変わらずだな、」

扉の取っ手を引き開けながら、コンツェの返す声に夫人は振り返って笑う。

「でも、おひとりじゃありませんのよ」

「……？」

夫人が扉を開けた途端、目の前に真っ黒な影が見えて、コンツェは慌てて身を引くことになった。

「……失礼、」

その影が人だったことに、再び驚きに目を開く。目の前に灰色の瞳がふたつ並び、それが怪訝そうに細められていた。抜けるような白い肌に、精悍というのか、すっきりした顔の青年だった。結わえぬままの漆黒の髪が肩をすぎた辺りまで垂れている——メルトロ人……？ だろうか。漆黒の髪を見つめていぶかしむコンツェに、その人物は咳払って存在を示す。

「ああ、こちらこそ、失礼しました」

コンツェの方が扉より離れていたために、脇へ寄る形になった。ずっと過ぎ去っていくその口元を見つめて、見覚えの無い背中の紋章を見送る。蛇のような動物が、三本の剣に巻きつく紋様。

「……愛想の無いお方ですこと」

ぼそりと呟いたティリ・ヤローシテ夫人を横目に見やっ、て、「誰ですか」と問うてみる。

「あの方は……、」

「コンツ兄さま！」

夫人の声を打ち消すように、部屋の奥から名前を呼ばれた。その方向を見やると、捜していた少女が窓べりに置いた椅子から立ち上がる場所だった。

「じゃあ、間に合いましたのね！」

駆け寄ってくるその両肩に手を置いて、コンツェは笑んだ。彼女が手紙を書いてくれなければ、今頃は「猶予」もなく王太子だった。

「有難う。助かったよ」

「よかったわ。もうどうなることかと……、」

長いため息をつきながら、シアゼリタは手の平を自らの額にあてた。大人びたものだ。最後に見た時よりも、目線の高さが違う気がする。昔は伸ばしたままだった栗色の髪を、綺麗に編んで結い上げている。耳の辺りにひとつだけ下げられたドレスと同色の裾の長い緑のリボンが、彼女

の仕草にするりと揺れた。

「さっきの方は、」

お茶を用意致します、と言い残して部屋の奥に行ったティリ・ヤローシテ夫人を見送って、コンツェは問うた。椅子を勧められて座りつつも、妹の頬がわずかに赤らむのを見つけてしまう。

「お客さまよ。今、色々とメルトローの方がお越しでしょう。わたくしにも挨拶をと、いらっしやっただの」

「そう……なのか？」

色々とメルトローの方が、と言ったシアゼリタの言葉に、いけ好かぬ青年の顔が思い出されて眉をひそめる。せっかく忘れていたのに「こちらから伺う」などと、嘘でも言わねばよかった。

「どうかなさいましたの？」

小さな円卓の向こう側から、シアゼリタの紺碧の瞳がじっと見ている。コンツェは顰めていた顔を元に戻して、息を吐いた。

「メルトローからの使者は、そんなにたくさん来てるのか」

「ええ。お会いしただけでも五人ほどは。これからどんどん増えるかもしれませんわね……困ったわ」

首を傾げて項垂れる割には、あまり困っていそうに見えないのは気のせいだと思いたい。シアゼリタも彼ーアロヴァイネン伯爵に会ったのだろうか。

「その中に覆面をしている男で、アロヴァイネン伯爵とかいう、」

「カランヌさまのこと？ 覆面なんてしていたかしら」

間を置かずに返ってきた返答に、コンツェは思わず瞠目してしまう。しっかりと“挨拶”を受けていたというわけだ。

「会ったのか？」

「ええ。すごく綺麗な方でしたわ。あれは、そう、御伽噺から抜け出てきた王子様みたい。緩い巻き毛の金髪と、綺麗な瞳に、メルトローにある天使の彫刻みたいな顔でしょう。ハネア・トルシ夫人なんか、もう気絶しそうなほど真っ赤になっていましたのよ」

「顔、見たのか？」

「ええ。確かに、覆面なんてしていませんでしたわ」

楽しそうに笑って、シアゼリタはすっと視線を横に流した。それを追って振り返ると、盆の上に茶器を載せたティリ・ヤローシテ夫人が戻ってくる。

「ね、ティリ・ヤローシテ夫人。貴女も見たでしょう」

円卓に茶器を並べながら、ティリ・ヤローシテ夫人が頷く。

「でも少し、女性には優しすぎる方でしたわ」

お気をつけ下さいませね、とティリ・ヤローシテ夫人がシアゼリタに応える。「女性に優しすぎる」というのは、要するに、……そういうことなのだろう。

それにしても何故、覆面などつけていたのか。彼女たちの今の話し方を聞いていれば、宮廷内では勿論、つけ歩いている姿を見かけたことは無いようだ。「顔が美しいから隠している」と自身満々に言い放っていたことを思い出すと、齒が浮いてくる。

「カランヌさまがどうかなさいましたの？」

シアゼリタにそう問われて、コンツェは首を横に振るしかなかった。ここで鬱々としているより、用事があるならば早く終わらせてしまおう。そう思って席を立つと、シアゼリタが顔を曇らせる。

「もう行ってしまわれるの？ せっかく色々なお菓子を用意しましたのに。夫人のお手製なのよ」

「ああ、すまない。明日ゆっくり会いにくるよ。夫人も、ありがとう」

追いかけて席を立ったシアゼリタの頬を撫でて、コンツェは扉に向かった。

まさかその出会いが、自分の選択を大きく変えるものだとは知らずに。

シアゼリタの部屋を出て、コンツェは螺旋に続く白磁の階段を下っていた。

白磁といっても塔の階段は暗く、明かり取りの色窓も天井高くにひとつあるきり。点々と備え付けられた燭台の上の炎だけが、足元を照らす役割をする。顔が映るほど滑らかなその床に、ほんのりとやわらかな光が反射していた。辺りに溢れた橙色のきらめきは、まるで身を包むようにずっと続いている。

「久しぶりに見ると、目が眩みそうだな」

メルトロー式のテナン王城には、至る所に背の高い塔が位置している。まるで柱のように王宮を取り囲み、空中でつながる回廊が幾本にも伸ばされているのだ。けれど唯一、西の棟にあるシアゼリタの王女宮からは、客人をもてなすための瑪瑙宮まで辿り着くことができない。それはまさしく、父王の溺愛ぶりが窺える創りだった。昔はすべての塔が回廊でつながられていたと聞く。だがシアゼリタが生まれた辺りに、そのひとつが壊されたのだ。年頃の娘を、外部にあまりさらさぬようにと。そのせいで、別塔に行くには階段を一度下まで下り、庭園を突っ切って移動する必要があった。コンツェ自身、幼かった故にあまり記憶に残っていないが、あの頃にシアゼリタを連れた義母親が王女宮に移ったことは覚えている。

白磁の階段を下りきると、視界が急に白くなった。眩しさに腕を持ち上げて、コンツェは目を細める。

「……瑪瑙宮は、」

客人がもてなされる宮の名を呟いて、手をかざしたまま辺りを見渡す。王女宮は西側に建てられているから、東に建つ瑪瑙宮は間逆の方向だ。

庭園は、さわやかな甘い香りと、美しい花に溢れていた。膝丈ほどにのびた深緑の茎の先端に、小さな黄色い花がぽつぽつと咲く、春の花だ。花の群れを縫うように敷かれた石畳の白さに、また目が眩みそうになる。

「まったく、誰がこんなに面倒な創りにしたんだ」

それは他でもない父王だったが、それでも回廊をひとつ潰しただけでこんなにも不便になるうとは思えない。もとの創りが凝りすぎているのだ。

苦笑を浮かべながら、コンツェは懐に手を差し入れた。かさりと音をたてたのは、去り際にどうしても渡された焼き菓子の袋。ティリ・ヤローシテ夫人が焼いたと言っていたが、やりたがりの妹が黙って見ていたとは思えない。きっと彼女の手も、少なからず加わっているのだろう。行儀が悪いと分かっているながら、コンツェは袋の包みをあけて中を見る。なにしろ庭園を縫う石畳は、まわりくどくも中央の噴水へと一度つながり、そこから方々へ分かれる仕組になっている。この道のりの退屈さを凌ぐには、食い歩きでもしていたほうが気が紛れるはずだった。

「……チェックェロ、」

そうして見おろした袋の中身にはっとして、コンツェは足をわずかに止める。

チェックェロの甘焼きは、帝都を出る前夜、フェイリットのためにと買った菓子だ。思わぬところでまた彼女のことが甦り、コンツェは焦りに似た感覚が腹の辺りを押していくのを感じた。



.....あれでよかった。あそこで自分の気持ちを――彼女を好きだということを吐露していたら。そしてその返答が否ならば、自分はきつとここに戻っても「還ろう」などとは思えなかったはずだ。王太子の選定を無事に自分ではない方向へ向けるまで、よもや本土に還ることは叶わない。

彼女に会いたい気持ちがふつつつと湧き上がるのを、コンツェは溜め息で沈めるしかなかった。少しだけ齧った甘菓子の味はほんのりと甘く、舌の上に溶けていく。

「フェイリットも、気に入ってくれたらうな」

女性と子供に好まれるその味は、本土だけでなく、テナンにも渡って売り出されるようになったようだ。そうでなければ、彼女たちがこの菓子を知るはずがない。菓子を齧りながら俯き加減に歩いていると、不意にぽっと石畳が広がりをみせる。

ようやく噴水まで来たか。心中で呟いて、さらさらと鳴る水音のほうへ目を上げた。石畳を掘り込んだ中に水を貯めて、その中央に円形の台がある。水が噴き上げるのは円形の台ではなく、それを取り囲む堀の部分。台は何のためにあるかといえば、演劇やら武闘やらを催すためだ。

ちょうどよく噴き上げた水に、中央の舞台が隠される。

サアアア.....風に乗れ、頬をかすめた水のしぶきが心地良い。目を細めて虹のかかるそれをじっと見やってから、コンツェは驚きに口を開けた。

再び現れた舞台の上に、寝そべる人の姿――。

「.....フェイリット.....?!」

うつ伏せに、顔だけを横にしたその顔には覚えがあった。陽の光を浴びた白い頬に、くせのある金の髪が影をつくっている。わずかに上を向いた愛嬌のある鼻筋も、やわらかそうな桃色の唇も、閉じた瞳の安らかさも、間違いなく覚えている。そう、あの閉じた瞳をひらけば、湖水色の.....

舞台の上の人物は、不意にその目をふわりと開く。人がいる気配に気づいたのだろう。けれど覗かれた瞳は、彼女の瞳の色よりも、わずかに濃い。ちょうど今日の空の色に似た、蒼い蒼い空色だった。

「おや」

とその唇からやわらかな声が呟かれるのを聞いて、コンツェは目を見開いた。

フェイリットの姿をしたその人物は、うつ伏せていた身体の下に手をつき、ゆっくりとした動作で身を起こした。頬に垂れていた髪が、するすると肩すじまで落ちていく。

――違う、フェイリットは、少年かと思紛うほどに髪が短かったはずだ。その相違に気づいてから、さきほどかれから発せられたわずかな声が、男声だったことを思い出す。

「誰だ.....?」

コンツェは擦れた声でその人物に問うた。

フェイリットの姿をした、フェイリットではないその男。握っていたはずの甘菓子が、いつの間にか足元に転がっていることに気が付いて、眉をひそめる。

「誰? それを聞くのか」

すっと立ち上がり、その人は自らの足が濡れることも厭わず噴水の堀を渡ってきた。撥ね返る

水の音を聴きながら、足が知らずと後ろへ下がっていく。歩み寄る謎の人物が、いいや、その人物の正体を知るのが、堪らなく恐ろしいことのような気がした。

「お目にかかれて光栄だよ——コンツ・エトワルト第五公子」

目前に立つその人は、フェイリットよりも上背があった。並ぶ空色の瞳を見てから、ふと視線を下げる。その口元に、血のかたまりのような痕があるのを見つけてしまった。相手が自分の名を知っていることよりも、それはコンツエの心中に驚きを呼ぶ。

「……失礼。具合が悪かったもので、あそこで休んでいたんだけど」

コンツエの視線に気づいてか、ふっと苦笑してかれはその口元を拭った。あどけなく笑う「彼女」の笑顔とは少しだけ違う、大人びた表情。

「あんな所で？ 部屋なら瑪瑙宮に……」

そこまで自分で口にしてから、コンツエははっとして言葉を切る。どうして気が付かなかったのか。瑪瑙宮にいるのは——メルトロー人しかいない。

繋がりにゆく疑問の糸の切れ端。コンツエはこめかみに鋭い痛みを感じていた。彼は、彼女は、メルトローの……。

「僕の名前はロティシュ・アシュケナシム。メルトロー王の庶子だと言えればいいかな」

頭の血が、一気に足元まで下がりゆく。

「姉がいつも、お世話になっているね」

——……同じ顔のメルトロー王族。

コンツエは青ざめた顔で、ただ何も言えずに少年を見つめた。

\* \* \* \* \*

「申し訳ございません、街道に待たせていた者たちが還って参りました」

バツソス公王ホスフォネトは回廊を歩いてきた足を止め、背後の声にゆっくりと振り返る。

「クラファトか」

回廊は頭上高くまで砂岩を積んだ壁に隔てられ、城の一番外側をぐるりと囲っている。バツソス王城は滑らかな砂岩を複雑に組んで建てられた古い城塞。同じ砂岩でも帝城のように赤くはなく、砂漠に広がる黄土の砂をやや暗くしたような色をもっていた。

ホスフォネトが振り返ると、クラファトと呼ばれた男が床に膝をつき、顔を上げるどころだった。彼はバツソス公国軍近衛師団副団長——秘密裏に皇帝暗殺を命じた刺客の頭にあたる。

「皇帝がバツソスへ向かっているというのは誤報だったのか？ トスカルナ宰相からの鷹に、砂漠を迂回してオアシス沿いに我が国に入国すると——」

ホスフォネトの困惑した声に、クラファトは顔に巻いたターバンの隙間から、細い目を固く瞑った。

「いいえ。我々にはそう伝えておいて、別の経路をとったようです」

「ばかな、では街道沿いは囷だったと？」

「大きな籠を持った集団で、その中にバスクス帝とそのジャーリヤが乗っているものと襲撃いたしましたが」

「別人だったのだな」

ホスフォネトのやや前方を歩いていたオフデ侯が、背後から歩み寄りクラファトに問う。

「はい。それも、サグエの有力貴族の令嬢が、物見に訪れている籠でした」

静かな溜め息が横に居るオフデ侯の口から漏れ出た。

「なんということか……殺めてしまったのか？」

「無論に。ご丁寧に豪勢な衣装を纏い、どう見繕っても皇帝と見紛う一行でした。よもや、扮していたとしか思えませぬ」

「トスカルナめ……」

これでは逆に、サグエに借りを作ってしまったことになる。バツソスの軍人が、他領地の貴族を殺したなどとあっては大問題。早急にその貴族の元へ謝罪の伺いを立てねばならない。

「それと、ヤンエの砂漠にてジラ＝ザラナバルが遺体で見つかりました。偵察のため向かわせたのですが、どうやらあちらが本筋だったようです」

ホスフォネトは苦虫を噛み潰したような顔をして、右手を壁に叩きつけた。

「どうやら、我々はしてやられたと考えたほうが宜しいようですな」

オフデ侯が肩を竦めてそう言った。

向こうが一枚うわ手だった。まさか行軍ですら踏破がためられるあのヤンエを、僅か一日そこらで渡りきるとは。クラファトラが街道沿いの囷に気づき、ヤンエに転がった仲間を見つけるまで、少なくとも丸一日はかかっている。その間、バツソス副都に極めて近いところにバスクス帝の足が向かっていたなら、すでに到着している可能性すらあるわけだ。

「陛下、バスクス帝をお迎えする準備をなさったほうがよろしいかと」

横で口を開いたオフデ侯を見やっ、ホスフォネトは軽く頷く。

「接待は参謀おまえに一任する。儂に会いたいと申すようなら、仕方ない……玉座の間ではなく、儂の客間に通し酒でも飲ませるがいい。お前は機嫌取りが上手いからな」

オフデ侯は苦笑した後、「分かりました」と頭を垂れた。

再び歩き出したその背後で、オフデ侯が近衛の勤務に戻るようにとクラファトに命じるのを聞く。“ご苦労だったな”と、部下への労いを忘れぬオフデ侯の物腰の軟らかさ。それは女連れで訪れる皇帝の周囲にも、悪い印象は与えぬはずだ――。

夕闇が夜の帳を落としつつある頃、オフデ侯爵ルクゾールは城の回廊を走っていた。

薄い灰色の砂岩で組まれた城は、雲間にかくれた微妙な頃合いの夕陽で、美しいすみれ色に塗られている。

バツスは、砂漠にぽつんと建つ城から丘のように盛上がった台地を駆け下りると、民草の生活する城下の街がとつぜん群れで現れる。城の東側につくられたその街並みは、砂漠の風を台地に阻むことができるため、幾分人が住める環境になっていた。そしてそこから見上げる夕闇のバツス城は、とても優しい色をして彼らを見下ろしているのだ。砦とさえ謂われているバツス城だが、四角い土台の一二階の上に半球状の三階部分が乗る、イクパル古来の宗教建築に則って建てられている。長い歴史をもつイクパル帝城よりも、古い形だ。

「オフデ侯爵閣下、こちらです」

回廊を走り抜けた後ろ背に呼び止められ、ルクゾールは足を止めて振り返った。

「案内しろ」

小姓について早足になりながら、ちらちらと回廊に続く壁越しに外を眺める。切り取られるように並ぶ小さな窓は、歩きながら覗くには視界が狭すぎた。覗き見たい人物の姿はついで確認することなく、小姓の足取りがとまる。

無理もない、本来この小さな窓は、敵を矢で射抜くためのもの。焦点をあわせるのに長けていても、物見矢倉のような視界は望めぬのだ。

「ありがとう」

振り返り膝を屈めて礼をとる小姓に呼びかけ、ルクゾールは頷いた。外へと通じる大きな門は、自らの手で開け放つ。

さっと顔を俯けて砂地に膝をつく、最高儀礼である伏礼をとった。

「――寛大な出迎えに感謝するが、妃が負傷したので先に運ばせたい。医師を頼む」

頭上にかかった声に、ルクゾールはゆっくりと顔を上げる。見上げた先には、遊牧民族の青い衣をローブ代わりに肩にかけ、こちらを見下ろす男が立っていた。ホスフォネトの参謀として帝城に過ごしたことが幾度かあったが、面と向かって顔を見るのは初めてだ。政治を嫌い、ハレムに通いつめる優男。そんな印象がいつしか植え付けられていたのだと思う。目の前にしたのは、噂とは全く違う、目つきの鋭い男だった。

これが、バスクス二世帝。

しかしその容姿など、今はどうでもよいこと。重要なのは、“寛大な出迎え”と“妃の負傷”の間に少なからず因果が在ることを、かれが気づいているところだ。なぜならこの状況で「寛大な出迎え」というのはおかしい。帝国の長たる皇帝陛下を出迎えているのに、それが例え御忍びであろうと、公王の参謀である侯爵がたった一人なのだ。寛大な出迎えが、よもや刺客を送ったことを指しているのに、疑いはない。その口ぶりの裏側に、妃が負傷したのはお前たちの出迎えのせいであろう、という意が込められていることも。

「すぐに、公王の御殿医を用意致しましょう」

さっと目線移すと、後ろに控えた大柄な女が、ジャーリヤらしき人物を背負うのが見えた。背負う人物の体格のせいか、随分と小柄なジャーリヤだ。女の背に伏せられたその顔はヴェールに隠され、どんな容姿をしているのかまったく判断できない。あげく身体の上をすっぽりと覆うようにローブが被せられているために、指先の色さえ窺えない状態。……まるで布の繭につつまれる蚕だ。

意識を向けた途端ふわりと漂った血の臭いに、ルクゾールは気づく。

「ヒラ」

帰りかけていた小姓の名を呼び戻して、ルクゾールは目線を女の方へ向ける。

「この者に案内させますので、どうぞ医師の処へ」

女は歩きかけて、皇帝の顔を見やった。意見を求めているのかしれないが、その顔も黒いヴェールに隠されていて見えない。

「行け」

短い返答を聞いて、女は顔を傾け礼を返した。ルクゾールは小姓に医師への言伝てを預け、女の前に立って案内するよう命じる。

「ホスフォネトは何処だ？」

去りゆく自らのジャーリヤに目もくれることなく、バスクス二世は言葉が続けた。在位二年目でようやく上げたギョズデ・ジャーリヤだ。さぞ気に入りのだろうと踏んでいたが、これではあまりに執着がない。

「ご所望あれば、直ぐにお会いになられます」

ルクゾールの声に、バスクス二世は口元を歪めて笑った。

「弁明したくば私も聴こう。――鷹を貸してくれ、兵も随分欠いてしまった」

バスクス二世は静かな声音で告げたのち、すっと歩き出した。その後ろから従者であろう男が一人、ついて行く。――シャルベーシャ……ザラナバル？

古民族の血を引く彼がいて、なぜジラが殺せたのだ。ジラ――刺客として送ったタインは、まだ若く血に飢えてはいたが、彼と“同じ”ザラナバルの民。戦闘の能力だけは、他人を遥かに上回っていたはず。そして彼らは同種の争いを、本能的に避けるくせを持っている。

白い虎というよりも、黒い豹を思わせるその姿を見送って、ルクゾールは首を捻った。

いったい、かれの息の根を止めたのは誰だというのか。

\* \* \* \* \*

室の中の騒ぎがようやく静まって、スリサファンは肩の力を落とした。

医師の元に運んだサディアナは一命をとりとめ、長い時間をかけて腹の牙も抜かれたようだ。最初はスリサファンも室内に留まっていたが、見るに耐えずに逃げてきてしまった。

何せ赤子の腕ほどもあるその牙は、彼女の内臓まで引き裂き、背のぎりぎりまで到達していた。あれで助かったなど、普通の人間なら考えられないこと。きっと医師さえも「奇跡だ」とのたまうだろう。

室の前で仕切りの幕を潜ろうかと逡巡していると、ばさりと上がって小柄で太った医師がすべり出てくる。控えていたスリサファンの顔を見ると、彼は「ああ」と声を上げた。

「強いお方だ。相当に暴れはしたが、麻酔の回らぬ中、あれだけの痛みで涙ひとつこぼされなかった……普通なら、屈強な兵士でさえ泣いて死を請うほどの苦痛ですぞ」

驚きも顕わに、医師はそう呟いた。奇跡だ、と聞かなかったことに、少しだけスリサファンは気持ちを静める。

「そうですか」

「三日は熱が下がらないとみてください。水分を絶やさぬように」

頷いて応え、歩き出した医師の背中を見送った。

また、彼女の寿命を縮めてしまった。今ごろあの身体の中では、常人では考えられぬほどの速さで治癒が進められていることだろう。けれどそれは、命を削ることに間違いなく直結する。己の身体が他人の倍、生きること生命の力を注いでいることを、そしてそれこそが短命の原因であることを、彼女は今まで知らずに育った。他でもない、サミュエル・ハンスの育て方を聞けば頷ける。嵐のごとく稽古をし、毎日傷だらけになる日々。それを十年以上、絶やさず続けてきたというのだから。

「――ところで、」

随分先に足を進めてから、医師は再び思い出したように振り返った。室の中に入りかけていたスリサファンは、半身だけを外に出して眉をひそめる。

「“サミュン”というのはどちらの方ですか？」

その言葉にスリサファンは、苦笑せずにはいられなかった。

「どうかなさったのですか」

「いえ、夢現の最中、必死に呼ばれていたもので」

思ったとおりの返答に、静かに首を横に振る。

「はて――わたくしには、存知あげませんが」

厳しく育てられたのだと聞いた。けれど、それでもなお彼を呼ぶのは、慕っていたという証拠だ。

素直で、快活で、あどけない。サディアナは、想像していたのとはまったく別に育っていた。母親の、他を包むようなあの優しさは、竜としての素質を磨かなかったからに他ならない。

けれど物心ついてのち、山中でその教育を施されても、サディアナは曲がることはなかった。その強さと能力の故、高慢になりかねぬという竜の気質を、ことごとく彼は破ってくれたのだ。

――サミュエル・ハンス。王の実弟で、次期の丞相とまで謂われていた男。カランヌの訪問を受けても、決してサディアナには会わせず、生活費さえ受け取ることはなかったという。山で狩りをし生計を立て、男手で立派に少女を育て上げた。

愛した女性の子を、愛することができるのは、どんなに幸せなことだったろう。

「……良い父親だったのですね」

ひっそりと呟いた言葉を虚空に向けて、スリサファンは微笑んだ。

「また喧嘩してきたな」

擦り傷だらけのフェイリットを呆れたように一瞥して、サミュンは言った。“また”とは心外だったが、確かに無傷で村から戻ってきたことはなかったような気がして、何も言えない。

「でも、ちゃんとおつかいしてきたよ」

はい、といって背に背負っていた麻袋をサミュンの目の前で下ろして見せる。中にはこがね色の蜂蜜がたっぷり染み込んだ、蜂の巣を切り分けたものが三枚ほど入っていた。

「偉かったな。さあ風呂だ、消毒はそれから」

「ええー」

頭の後ろをぼんと叩かれて、フェイリットは僅かによろめいた。何度もしていることだが、傷を負ったまま風呂に入るのは一向に慣れない。

フェイリットの抗議の声を無視したまま下ろした麻袋を拾うと、サミュンは家の中で一番気温の低い、窓際の梁にそれを結わえて吊した。そうするとひと冬、腐らせることなく蜂蜜が保存できるのだ。

「温めた山羊の乳に蜂蜜を入れてやろう。早く入ってこい」

「本当？ やった、忘れないでねサミュン！」

風呂は、まるで喧嘩をして帰るのを予期していたかのように、ほかほか焚かれていた。熱すぎるのを嫌うフェイリットが、じっと首まで浸かって我慢できる温度で。

風呂は古くなった木材をサミュンが組んで造ったものだ。家のように四方を囲んであるため、外の吹きさらしの冷たい風を直接浴びなくて済む。小屋の裏手で焚き場所は土間とつながっていて、おこした火もそのまま料理に使えた。今頃この火を使って、サミュンが山羊乳を温めているだろう。そうしていると、本当に甘く芳ばしい乳の香りが流れてきて、フェイリットは微笑んだ。

「晩飯だぞ、さっさと出てこい」

湯船に浸かってぼうっと乳と蜂蜜の匂いを嗅いでいると、土間のほうからサミュンの太い声が響いてきた。はい、と返事を返しながら、フェイリットは慌てて湯船から立ち上がった。

体を拭いて服を着代え小屋に戻ると、薬の入った深緑色の壺を持ったサミュンに迎えられた。彼がメルトロウから持ってきた数少ないものの一つで、擦り傷や刀剣での切り傷にとってもよく効く薬だ。とはいっても、中身はとうの昔に使いきってしまって、サミュンが自ら山麓を歩き集めた薬草で作ったものが入っているのだが、効能は全く衰えていない。

「沁みたか」

フェイリットの前に膝をついて身長を合わせると、サミュンは顔から足の先まで薬を塗り始めた。薬は壺の色に似て、少し気味の悪い緑色をしている。

「平気」

「痩せ我慢ができるようになったな」

サミュンが小さく笑って、壺に蓋を差し込む。調味料を並べてある棚にそれを戻すと、今度は炉にかけていた鍋から木椀に乳をすくって入れてくれた。自分のもすくうと、彼はそれに胡椒を潰して入れている。

「で、誰とやりあったんだ？」

丸太を組んで造った食卓につくと、サミュンは自らの椀に口をつけながらフェイリットを見やった。

「コレジさんとこのルチャだよ。あいつ、いっつもケチつけてくるから」

「それで取っ組み合いか」

「……うん」

ルチャに、サミュンの悪口を言われて殴りかかったとは、言わないでおくことにした。片目が無いのは罪を犯したからだなんて、ばかばかしい。何より庇ったとばれるのは恥ずかしいし、喧嘩をしてくるのはいつものことなので、きっとサミュンにもわからないはずだ。

「我ながら、男の子を育てるのがうまいものだ。麦パンを焼いたが、乳を潰けて食うか？」

苦笑しながら立ち上がったサミュンを睨んで、フェイリットは「食べる」と答える。

「あたしだって、取っ組み合いなんかしたくないよ。村の女の子たちと遊びたいのに」

新しい織物を織ったのだと、フィフィンとは見せてもらう約束までしたのに。サミュンのため、繕い物だとかちょっとした料理などは出来るようにはしているが、それで収入を得られるほどのもの——村の人たちがしているような織物や刺し子など——は、やはり教えて貰わねば出きるものではない。ここでずっと暮らすというわけではないが、それでも家計の足しにするようなことが出来れば、サミュンを随分と助けられるのに。

「お前はそれでいい」

サミュンの声を聞きながら、目の前に出されたパンをじっと見つめた。表面がかりかりに焼けているが、腹持ちのするように重く練られているパンのため、スープか何かに潰けて食べないと噛み砕くのに難儀するものだ。ふわふわのパンなど食べたことがなかったが、フェイリットはサミュンが焼くこの重いパンが、世界一おいしいと思っていた。

「女の子らしく育てた覚えはないが、お前は十分女の子だ。そのせいで、苦しむことも必ずある。なぜならその手に持つのは機織の器具や針糸ではなく、剣や執政や外交だからだ。——わかるな？」

どの国でも、男の生業とされているそれらを、ずっと教え込まれて育ってきた。言葉だけならもう、この大陸に暮らすほとんどの民族の言語を凌駕できている。そうして各国の歴史から、自分の国の政治体制から、すべてを覚えさせられた。

「……うん」

「お前はよくやっている。それ以上のことを俺は望まない。俺の役に立とうとしてくれているのは嬉しいが、俺はお前が強く、賢くなってくれるほうが、何よりも誇りなのだぞ」

いつの間にか、サミュンの膝の上で、彼の首にしがみ付いていた。彼の役に立ちたい。そう思うのに、自分の幼さがそれを阻む。もう少し大人になれば、力が強くなったら、もっと沢山のことが手伝えるのに。



「……甘え癖は、治さねばな」

フェイリットを抱えながら、ぽんぽんと背中を叩く優しい手の平に安堵する。

けれど彼が甘えることを許してくれるのは、そうそう無いことだ。この機会にいっぱい甘えてしまおうと、回した腕に力を込めた。

：  
：  
：

「ぐ……があああ！！」

激痛とともに目を開けると、自分の身体が何者かの手に押さえつけられているのに気づいた。

「もう少し我慢なさい……！ いかん、麻酔が効いていないのだ。口を開けさせてズイヤの葉を噛ませるんだ。――聞こえるな？！ 大丈夫だ、痛みはすぐに消える。だから動いてはだめた。腹の牙が、よけい傷を広げるぞー！！」

まるで焼けるようだった。腹の辺りが、ごうごうと燃えている。

鼻をつく自分の血の臭いに、吐き気とともに意識が冴える。

今までサミュンの側にいたのに、どうして自分はこんなところで寝台に寝転がっているのだろう。サミュンがここにおいて、傷の手当てをしてくれていたのではなかったか――。

「動くのをやめるんだ！」

誰かに両腕を掴まれて、頭の上に引き上げられる。

「がああー！！！」

サミュン、助けて、サミュン。

血に混じった、きつい消毒薬の臭い。ああ、自分はその頃の、あの幼い“フェイリット”ではなかった。気づいてみれば、一気に現実が押し寄せてくる。サミュエル・ハンスは死に、自分はメルトローから逃げて“ここ”にいる。

あまりの痛みに叫んでいると、不意に口の中に何かが詰め込まれる。噛みなさい、と言われて思い切り顎を閉じさせられた。歯ですり潰されたそれは、何かの薬草なのだろうか……舌がしびれて、意識が朦朧としてくる。

このまま死ぬのだろうか。沈んでゆく意識の中で、ずっと考えないようにしていた疑問が頭をよぎった。

――自分に残された寿命は、あとどれくらいなのだろう。

\* \* \* \* \*

医師の背を見送って、スリサファンは仕切りの幕を捲った。

大量の麻酔で強制的に眠らされた、サディアナの寝顔を見て安堵する。よほど辛い顔で寝ているかと思ったが、思いの外安らかだ。

治癒の力が高すぎるのか、それとも身体が順応してしまったのか。彼女は麻酔をまったく受け付けなくなった。毒薬に近いそれを投与して初めて、眠りについいたらしい。

「サディアナ様.....お守りできず、」

寝台のわきに膝をつき、彼女の額を優しく撫でる。汗ばんで張り付く髪を除けてやって、スリサファンは溜め息をついた。

「メルトローに流れたわたくしには、貴女と、貴女のお母様しかいなかったのですよ」

独り言のように呟いて、サディアナを見つめる。こうして力なく目を閉じる姿を見ていると、晩年のリエダを思い出してしまう。

――あの人がついているなら大丈夫よ、スリサ。きっと生きていけるわ。.....それよりも、アシュのことを頼んだわね。カランヌにも言ったけど.....彼、奔放すぎるでしょう？

だが奔放は奔放なりに、構ってやっているのは目に見えていた。アシュケナシムが懐いているのは、傍目にも彼だけだったから。

「ジル.....ヤンター.....タ」

「サディアナ様、お目覚めですか！」

驚いて、スリサファンは眼を開いた。あれだけの麻酔でもなお、こんなにも目覚めが早いというのか。

「ジル、わたしの、知って.....？」

サディアナは痛みにもせて、ちからの無い咳をこぼした。鎖骨のあたりに手をおいてさすりながら、スリサファンは柔らかく笑む。

「わたくしはお味方いたします。いざという時は、貴女の盾にもなりましょう」

ぼんやりした目でこちらを見つめた後、サディアナは苦笑するように口元を綻ばせ、ゆっくりと瞼を閉じた。

黙っていたことへの詫びや、その他に言わねばならぬこともあっただろうが、口から出たのはその言葉だけだった。全てを省略したにも関わらず、彼女は納得したように一つ、かすかに頷いた。

「でも、」

「サディアナ様？」

「誰かが死ぬなら、わたしが.....一番最初がいい。.....死の扉の、前にいて.....大切な人たちを、追い返.....すの」

スリサファンは、瞳を閉じたままのサディアナの額に、そっと手をおいた。

「語ったことがございましたね、わたくしにも子供がいたと」

柔らかな声で囁くと、サディアナはゆっくりと水色の瞳を現した。こちらを見つめるその瞳に微笑んで、スリサファンは続ける。

「その我が子を三つで失い、わたくしはそれから何年も国を流れたのです――物乞いに近いことも、娼婦のようなことも致しました。果てにメルトローに辿り着き、あなたのお母様に出会うまで.....何度死のうと思ったかしれません」

サディアナは、何を言おうとしたのか、唇をわずかに振る寄せた。けれど擦れた吐息と力の無い咳が、彼女の言葉を奪ってしまう。

「.....流れ者のわたくしに、あなたのお母様はあろうことか乳母役をお命じになった。こんな、

どこの者とも知れぬ女にですよ」

あれは、運命としかいいようのない出会いだった。目頭を赤く晴らした少女が宮殿から逃げたところに、そうとは知らぬスリサファンが近づいたのだ。――金を持っていそうな少女の、身包みを剥がしてしまおうと企んだがゆえに。

――この子を、どうしても産みたいの。

脳裏によみがえる我が子の笑顔……。独り言のように呟くまま、しゃがみ込んで泣きはじめた少女の身包みを、結局剥がすことは出来なかった。

そうして彼女はそのまま、スリサファンを盗賊のような日々から引き上げてしまう。

「色々な事態が重なってしまい、結果あなたをお育てすることは叶いませんでしたが――こうしてお側にいられるなどと、当時は思いもしなかったことです。サミュエル殿下とて、あなたに門番役を押し付けることなどなさらぬはず。今はまだ、精一杯、自らの選択に生きることをお考えください……。フェイリット。それが逝った者への手向けです」

サディアナー――いいやフェイリットは、はっとしたように口を開くと、ゆっくりと微笑んだ。

「ご安心ください。あのバカ……。カランヌが現れたら、わたくしが張り飛ばしてやります」

疲れたのか、安心したのか、フェイリットはようやくまどろみはじめたようだ。

「さて。もう一人の馬鹿が何を企んでいるのか、つきとめて参りましょうか」

眠り始めた安らかな寝顔を確認して、スリサファンは立ち上がる。

リエダ様――願わくば門番役は、貴女がしてくださることを。いいえ、わたくしでも構いません。どうかこの子の痛みが、少しでも軽くなるように。

ずきずきと痛む傷の疼きに気づいて、フェイリットは目を覚ました。

仰向けに見上げた先に、赤茶けた天蓋のひだが垂れている。顔の周りや肩の辺りにあてられた、いくつものやわらかな枕に沈み込んで、フェイリットは息をついた。

朦朧としたなかで腹に刺さった牙を抜かれたが、こことは違う部屋だったはずだ。しばらくして移されたのだろう。記憶に無い天蓋の色を、じっと見つめてそう思う。

バスクス帝が虎に噛みつかれそうなところを必死に走りながら、頬をたたいていく砂粒の中、フェイリットは思い出していた。自分があのとき――ウズルダンに命じられ“ザラナバル”を得ようとした時――二十もの兵士たちを一体どうしたのか。

「わたし、」

頭と身体を戦いへ支配する、濃厚な血の匂い。今でははっきりと思い出せる。

タインの生臭い血の匂いを吸い込んだときの、最初の兵士の首から噴きだす血の香りを嗅いだときの、あの堪えきれぬ衝動。身体が殺戮へと動くさまを、恐怖する自分と歓喜する自分――シャルベージャが止めに割り入って来なければ、自分はきっとマムルークを根絶やしにしていた。

「倒せば従ってやる」と言われた人数を遥かに超えて、自分はマムルークを……、

「殺した」

殺したのだ。マムルークを、二十人近くも。

我を忘れて襲いかかるフェイリットの一撃を受け、止めに割ったシャルベージャは撥ね飛んだ。彼の獣に似た咆哮を耳にしようやく気づいたのだ。これ以上我を忘れては、あっという間に変化してしまうと。

離れた所にうづくまるシャルベージャの背中から顔を上げると、累々と重なる人間の塊が目に入った。約束どおり、倒したのだ。……よかった――あの時はそう思った。これでウズルダンから受けた仕事を、終えることができたと思ったために。

けれどあれは、“倒れていた人たち”ではなかったのだ。

「あれは……」

累々と重なる人間の塊は、“積み上げた死体”だった。他でもない、この手で。

――ジルヤンタータに「生きなさい」と言われた。母とサミュン、そして死者のため……それが手向けであるからと。けれど罪も無い人たちの命を、あんな賭け事ひとつで奪ってしまった自分に、手向けができるほどの価値があろうか。ただでさえ世界に戦乱を招く赤子だと言われ、隠されてきた存在なのに。

メルトロローへ行かなくてよかった。利用されて千年も生きるのは嫌だと、利己的な理由だけで逃げてきたけれど、実際は自分だけの犠牲にとどまらなかったのだ。メルトロローが他国を征服しようとするれば、それだけ多くの人の命が、家が、居場所が失くなってしまう。

自分は今まで、いったい何を教えられてきたのだろう。人殺しの術を、他を屈服させる術を、知識を、力を。そんな哀しい力ばかりが、この身体に宿っているのか。居場所のない辛さを、よ

く知っているはずなのに。

「サミュン……」

今すぐわたしを、そっちに連れて行って。

自分の立っている場所の重さに、押し潰されそうだ。人を殺さねば生きられないなんて。それが竜の本質ならば、契約などできるものか。

「サミュン……！」

どうしてこの瞳は、涸れてしまったのだろう。こんなにも胸が痛むのに、涙が流れていくことはなくなってしまった。自分はまだまだ、彼の死から立ち直れない。

フェイリットはゆっくりと手を伸ばし、天蓋に垂れ下がる目隠しの布を掴んだ。けれど力が入らずに、ずるずると床に落ちていく。上半身だけ寝台の下に這いつくばり、なんとも無様な格好だ。

「いて、」

寝台からへばり落ちた体勢で、とりあえず痛みをじっと堪える。動いたせいで、頭がぐらぐら揺れていた。口の中も粘ついたように乾いていて、具合が悪い。

「さっきから何をしている」

「げっ」

突然にかかった声に、フェイリットは潰れたような声を上げた。恐る恐る顔だけで見上げると、思わぬ人が目に映る。

「へ……陛下」

天蓋のすそに指をかけたバスクス帝が、こちらをじっと見下ろしていた。

「平気か」

ちかちか浮いていた白い光がいつの間にか引いていく。“さっきから”とバスクス帝は言った。もともとの部屋に居たのか、たった今入り来たものなのか……まるでわからない。唐突な訪問者を出迎えて、フェイリットは呆然としたまま口を開けた。

「平気ではないようだな、その様子では」

それはこの格好を指すのか、今にも泣いてしまいそうな渴いた顔を指すのか。見上げた姿は差し込んだ逆光に照らされて、もともと浅黒い風貌をいっそう黒く染めている。こちらからは、彼がどんな表情を浮かべているのかわからない。口調だけ聴いていれば、飽きれているか晒っているか、そのどちらかだろうが。

「……えっ」

屈み込んだと思ったバスクス帝から両手が伸びてきて、フェイリットは身をすくめた。脇下を掴んだと思ったら、あっという間に身体が浮いていく。

「へ……！ 平気です！ 元気です！ うわあああいててて」

目前まで迫った漆黒の瞳から身を反らして、フェイリットは顔をしかめる。叫んだそばから血が引いていくのがわかった。もしかすると、顔色さえ青白くなってきたかもしれない。

「お、おろしてくだ……」

「やせ我慢が、」

降ろされて寝台へついた背中に心から息をして、はっと気づく。腹に巻いた包帯以外、下履きを残して何も身体に着いていない。慌てて掛け布を引き寄せて頭から潜り込むと、バスクス帝が鼻で笑うのが耳に入った。

「お……お帰りください」

帝都を出るとき、ジルヤンタータに念入りに染められた身体は、蜜の色を保ったままだ。裸を見られたのは初めてではない気がするが、それでも以前は暗かった。この朝の日ざしが差し込む中で、恥ずかしくないわけがない。

「見舞いに来た者に言うには、優しい言葉ではないか」

「そん、……見舞い？」

そっと掛け布から顔を出すと、寝台の縁がどっと沈んだ。バスクス帝が腰をかけたのだと気づいて、じっとその背中を見つめる。砂漠で纏っていた青ではなく、少し黒味を帯びた赤茶のローブ。そういえばこの背中にも、傷があるのだった。

「見せてもらった。お前のような小娘が、どうやったら屈強なマムルークと闘えたのか、ずっと疑問だったのだが」

背中を向けたまま、バスクス帝は言った。低い声だが、なぜだか怒っているようには聞こえなかった。

マムルークは前線に出る大切な兵士。直属ではないが、彼の軍であることに変わりはない。四公国に緊張が走るさなかで、貴重な兵を欠くことはどうあっても痛手になるはず。怒られても仕方がないというのに。

「……やっぱり、死んじゃったんですか……」

そろそろと、消え入るような声でフェイリットは返した。否定してほしい、そんな気持ちが勝っていたけれど、どちらかと言えばこれは確認だ。

「ああ」

深い息を吐いて、フェイリットは自らの額を押さえた。弱弱しく泣いてしまえたら、どんなにか楽になるだろうに。いいや、それではいけない。楽になってはいけないのだ。

「一人を殺したのは初めてか。……まさかそれでタイムに止めを刺さなかったのか」

返された質問に、はっとして顔を上げる。

確かに、とどめを刺そうとは動かなかった。変化を抑えようと自分の身体と闘っていたのが理由だとこじつければ、簡単だ。けれど実際は、いくらでも機会があった。

「も……申し訳……ありませんでした」

油断さえしていなければ、自分の身だって守ることができた。他の命を奪うことに、そしてその末に素性が知られてしまう危険をぎりぎりまで恐れて、さっぱり頭が回らなかった結果が、これだ。一步間違えば、二人もろとも虎に喰われて殺されていた。

ザラナバルであるシャルベージャに、「護衛なんかいらぬ」と言い張ってしまった以上、その役目を果たさなければならなかったのは、他でもない自分だけだというのに。フェイリットは頭を伏せたまま、何を言われるのかと、びくびくしながら待っていた。

けれどふとした沈黙のあと――下げた頭の上に、ぽんと何かが乗せられる。しっかりとした重

みと、確かな体温の温かさ。

「いや、感謝している」

頭の上に乗せられたその温かさが、彼の「手」だと悟った瞬間――。

フェイリットは恐ろしいほどの懐かしさに、身体を奮わせた。処罰を受けても仕方が無いことをしたのに、返った応えが礼だとは、思いもしなかった。

「あ、の」

頭の上の手は動くこともなく乗せられたまま。そっと伸ばされた手の元を見上げて、フェイリットは困惑した。バスクス帝が笑っている。……皮肉さとはかけ離れた、顔の鋭さを緩和するような表情。

どこか郷愁に似た、不思議な感覚が胸をつく。よくやったと、遠い昔に撫でられたかすかな記憶が、音を立てて湧き出すような。

「私は九つで初陣を迎えた」

「え、」

九つ、と口の中で繰り返す、フェイリットは瞬いた。九つといえば、自分はまだまだ村の男子たちと、取っ組み合いの喧嘩をして怒られていたあたりだ。国とか自分の正体などは、頭の隅にも上らなかった頃。サミュンに褒められたくて、それだけを理由に勉強と剣術に暮れていた。

「初めて身体を濡らした返り血を、私は未だに覚えている。忘れる必要は無いし、忘れてはならないと思っている」

静かなその言葉を聴いていて、フェイリットは目を閉じた。覚えている、思い出せる――<彼ら>の顔を。

「上に立つ者は常として戦わねばならない。命を預け、賭してくれる者の為に。そして奪った命は身に焼き付ける――それが義務だ。お前は勇敢だった。しんがりでか弱く震えているよりか、余程な」

頭の上に置かれていたバスクス帝の手が、すっと背中へ回された。力に従うように身を任せると、いつの間にか顎がバスクス帝の肩の上にのっかっている。

「よくやった」

抱きしめられることに、飢えていたのかもしれない。抵抗しようという気持ちには、少しもならなかった。包まれた腕の中で手を伸ばし、首元にすがりつくと、フェイリットはその肩にそっと顔をうずめた。なんて心地がいいのだろう。かつてはすぐ側にあった人の温もりが、今では随分遠くに思える。

「陛下、わたし……、――？ ……ぎゃっ！」

背中に回されていたはずのバスクス帝の手が、下履きを越えて尻に置かれているのに気づいてしまった。フェイリットが悲鳴を上げると、もう一方の腕にすかさず力が込められる。

「何してるんですか！」

「もう少し、愛らしい悲鳴を上げられんのか」

「……そ、そんなこと！ って違う、そういうことじゃないです！ 離し、いたっ！ いたたたたた、ほら離してください、痛い、痛い！」

「平気だと言っていたらうに」

ちくちくと走る痛みはずっと続いていた。今さら猛烈に痛がることはないのだが、この状況でバスクス帝に解放されるには、腹の傷に触ると訴えるのが一番だ。けれどその大きな手は、下履きの中から一向に出ていく気配がない。

「ほう、尻にまで染料を塗ったのだな」

「どっ、どこ見て……一！一！！」

逃れようと身を振るのに、しっかりと抱き込められて、彼の肩から顎を離すことさえ叶わない。

「いっ！ やだっ！」

「ぐっ」

突如、くぐもったバスクス帝の呻きが耳元で聞こえて、はっと気づく。どんどん下がっていく手を抑えようと、フェイリットは必死になっていた。

「一！お前、」

ぱっと弛んだ腕中において、フェイリットは呆然とした。目の前の首に、くっきりとついた牙の跡。そこからどくどくと、血が溢れ出している。一！まさか、噛み付いたのは自分なのか。

慌てて血を止めようと口をつけるが、思わず味わったその血の甘さに、驚いて喉を鳴らすと、バスクス帝の身体がどんどん向こうへ傾いでいく。味わったその血が、喉元をゆっくりと流れていったとき、ようやくごくごく飲み込んでいたのだと気づいて、フェイリットは慌てた。

「う、わあああ、陛下！！」

一！どさり。伸ばした手も役には立たず、バスクス帝の姿は寝台の向こうに消えてしまった。

「い、医者……？ ジルヤンタータ！」

慌てて寝台から飛び降りて、身体に巻きつけるため掛け布を手に掴む。

けれど目線を傷のある腹へと落として、フェイリットは「あっ」と声を上げた。見下ろした包帯は暴れたせいで擦れ、巻かれたところからゆらゆらと外れかかっていた。けれど問題はそこではない。揺れる包帯の隙間からのぞく、幾分染料がとれて白みがかかった地肌の色……、

傷跡のような、うっすらと残る桃色のすじが目に入った。少し動くだけであんなにも痛かったはずなのに、もうちくりとも痛まない。それどころか、なんだか身体が軽い。

「一！な、……治ってる」

呆気にとられて立ち尽くし、助けを呼ぶのも忘れて、フェイリットは呟いた。



「ジル、陛下は……」

仕切りの幕をかきあげ現れた、大柄なジルヤンタータの姿を見上げ、フェイリットは小さな声を出した。

「大丈夫です。急に血を失って、気が遠くなっただけでございましょう。医者を呼ぶまでには至りません」

銅金をうすく伸して立ち上げた大きな<sup>たらい</sup>盥のなかで、フェイリットは身体をこすっていた。

両手を広げたほどの布は軟らかい感触をしていて、ごしごし力を入れても痛くならない。左腕の内側に盥のなかの水を浸した布を当てると、独特の、すんと鼻に抜けるような香りがした。水は顔を曇めたくなるほど真っ黒で、腕からぽたぽたと滴が落ちている。

「よかった……」

バスクス帝が倒れ込んでからしばらく呆然としていたフェイリットだったが、ふいに気がついてジルヤンタータを呼びに走った。直接医者を呼んでもよかったけれど、首筋についた歯型の痕を、気が動転したなかで上手く説明できる気がしなかった。まさか噛み付いて飲んでしまいました、などと言えるはずもない。

慌てて状況を説明したフェイリットを一瞥して、ジルヤンタータはまず身体の染料を塗りなおすように言った。示されて自分の身体を見下ろすと、傷の場所だけでなく、ところどころが薄っすら白くなっている。汗をかいたせいだろうか、ハمامであればほど念入りに塗られた染料が落ちていた。どんな状況になるかわからないから、誰の目に触れてもおかしくないよう、そのまだら模様の身体をなんとかするようにと。バスクス帝のことは彼女に任せることにして、フェイリットはジルヤンタータの用意してくれた盥に水を張って染料を流し込んだのだった。

「フェイリット、」

そっと近寄るジルヤンタータの影に気づいて、フェイリットは自分の太腿から視線を上げた。彼女の表情はいつもと変わらぬ堅固なものだったが、次の瞬間に口にするだろう言葉が、なんとなくわかってしまった。

「何があったのですか」

「何が……ていうと、」

わかっていたけれど、フェイリットは首を傾げた。ジルヤンタータには、ちょっかいを出されて抵抗するうちに、噛み付いてしまった——そのせいで彼が倒れてしまったと説明していた。嘘は言っていない。血をごくごく口にして、“あ、美味しい”などと思った主観を、単に伏せただけだ。

「気絶するほど血を失ったにしては、周囲に痕跡がございませんでしたので」

床に血が染みていないのは、それがほとんどフェイリットの胃の中にあるせいだ。取り繕いようがないことを悟って、フェイリットは顔を俯けた。

「ええと、それは……。気づいたら、飲んじゃってて」

「やはりそうでしたか」

ジルヤンタータの視線が横腹に向けられるのを感じて、フェイリットは不安になる。盥いで座りなおして、ジルヤンタータの目を恐る恐る見上げた。

「血を飲んだから、治ったのかな……」

「わたくしには、わかりません。貴女の身体については、知らされていないことばかりです。…  
…ただ、」

言葉を区切って思案げに目をただよわせ、ジルヤンタータは沈黙した。フェイリットはその先を促すこともなく、じっとして彼女の宙へ向いた厳しい眼差しが戻るのを待つ。言うべきか言わぬべきか、それは迷っているようなそぶりだった。

「ただ、死の縁に立ったリエダ様が一度だけ、サミュエル・ハンス殿の血を口にし回復なされたことがありました。ほんの数刻の、短いあいだでしたが。確証はございませんが——他人の血を含むことで、少しでも治癒を助ける働きをしたのかもしれない。……足が赤くなってしまうすよ、フェイリット」

ジルヤンタータの低く耳に通る声を聞きながら、いつの間にか足の脛ばかりを布で擦っていた。彼女の声を聞きはっと気づいて、フェイリットは顔を上げる。

何かを考えついた気がするのに、空のただ中で雲を握ったような心地がする。開いてみれば、そこには何も入っていない。

「前にもあったの、骨折してた時。ジルが来る前で……でも、あれは変化したから治ったみたいだった」

カランヌに「還りましょう」と言われて、嫌だと暴れた結果だった。変化しそうになって、逃げるように駆け出して——。折れていた骨が、再びヒトへと戻る過程で構築されたのだろうと。

「カランヌは、今どこに？」

盥から立ち上がると、ジルヤンタータに水瓶を手渡される。染料を塗った身体から、よけいな分を洗い流すためだ。身体を水で流しながら、フェイリットはふと返答がないジルヤンタータを見やった。

「ノルティス王の元に」

「え？」

「……フェイリット、貴女がイクパルに居らっしゃることは、もう陛下——ノルティス王はご存知のはずです。申し訳ございません」

頭を下げたジルヤンタータを、フェイリットは青ざめた顔で見つめた。

「そんな——、」

「けれどご安心下さい。貴女を庇護しているのが一介の城下の民ではなく、国の中心に座する皇帝陛下であることも伝わっているはず。もう今までのように、安易に追っ手は送れないでしょう」

帝城を選択したのは、探索の目が届きにくい為。だがそれは、ノルティス王が知らぬからこそのものであった。疲弊した国だと認識のあるイクパルに対し、メルトローは機嫌を伺う必要がない。知ってしまった以上、“王女を返せ”と言うだけで、メルトローはイクパルに戦争をしかけることができる。現在のこの国の状況では、イクパルに勝ち目はない。あっという間に国土を占領さ

れて、「植民地に早変わり」ということに、必ずなる。

「……ジル、」

身体を拭きながら、盥を片付けるために歩き出したジルヤンタータの背中を追った。その気配にすぐに気づいて、ジルヤンタータは振り返る。

「わたし、この国が好き」

「フェイリット……」

「わたしのせいでもし、戦争が起きるとしたら」

そこまで言って、フェイリットは唇を噛んだ。またここを、逃げ出ていかねばならないだろう。それを言うのが辛かった。助けてもらい、たくさんの人と出会って親しくなって、ここでずっと暮らしたいと思ってさえいた。ずっと……この短い寿命が尽きる、最後の瞬間まで。けれど大きな犠牲をはらってまで、たくさんの命を燃やしてまで、ここに居たいと言えるほど我が侷ではないつもりだ。自分ひとりが行方を眩まして、それでことが済むのであれば。これほど簡単なことは無いだろう。

「わたし、」

「――バツソス公国は、傭兵を集めて造られた国なのです」

唐突に呟いたジルヤンタータの言葉の脈絡に、フェイリットは思わず首を傾げた。

「それは、」

どういう繋がりがあるのか、そう問おうとして、ジルヤンタータの厳しい表情に気がつく。大切なことを、話そうとしている様子だった。

「傭兵というのをご存知ですね」

「うん、一応は……」

雇われて戦う、軍隊。簡単に言えばそういうことだ。帝都で、バスクス帝が言っていたのを思い出す。ホスフォネトは傭兵の王で、懐古主義なのだ。それを利用して味方に引き入れようとしていたらしいが、その計画の全貌は、未だに聞いていない。

「では、初代バツソス公国の頭であったホスフォネト・イネセンが、“誰の”傭兵だったのかは、ご存知ですか」

「誰の……」

――やつらの傭兵団の歴史は長いからな。もともとの親玉は違うわけだ。

――親玉？ イクパルの付属じゃなかったってことですか。

ふと思い出す、バスクス帝と交わした言葉の一片。フェイリットは目を丸くした。

「初代ホスフォネトは、誰の……」

当時、イクパル帝国は疲弊してはいなかった。メルトローと共に、肩を並べられるほどの国勢は持っていたはずだ。サミュンから得た知識を必死に振り返りながら、フェイリットは考える。

イクパルは大きな艦隊を誇っていて、南の国にまで領土があった。けれどメルトローに負けてから、それらは一気に失われた。戦艦の知恵はメルトローに奪われ、領土だった南の国々からは

隔絶された。持てる富を一気に亡くしてから、イクパルは下降を辿ってきたのだったか。

最盛期のイクパル帝国は、四つの主だった国々からできていた。それは今とあまり変わりが無い。テナン、イリアス、ドルキア、チャダ、バツソス。けれど思い浮かべてから、ひとつだけ国が多いことに気づく。

「バツソスはイクパル帝国が下降を辿る中、まるで監視役のように建国された国でした。そしてそれを命じたのは、」

フェイリットはジルヤンタータを見つめた。いいや、正確にはジルヤンタータの手元を見つめていた。

彼女の手に持たれる、銅の盥.....そのわずかに滑らかな表面に、映る顔。

「メルトロー国王タントルアス.....」

今は黒く染色され見た目も幾分変わっている。だがフェイリットの目に映っていたのは、紛れもなく「素顔」の自分だった。愛妾の子として生まれながら、「十三番目」の号を与えられたこの容姿。

「初代ホスフォネトは、タントルアスの忠臣でした」

ジルヤンタータの声を聞き終えるや否や、フェイリットは額に手を当てていた。——なんということだろう。

今で言う「四公国」は、テナン、イリアス、ドルキア、そしてバツソス——チャダを抜かした四国のことを指している。どういう経緯でチャダがその序列から外されたのかわからないが、バツソスが数えられていなかったのは、そういうことだったのだ。ホスフォネトの君主は、イクパル帝国の君主ではなかった。

「だったら.....ジルヤンタータ。バスクス陛下は、わたしが“タントルアスと似ている”ことを、知ってるかもしれない」

それは即ち、フェイリットの素性がメルトロー王国・第十三王女である事実を、知っているということ。

「そんなまさか、」

「ううん、言われたのを覚えてる。ホスフォネトは懐古主義だから、わたしを見て気を変える... ..みたいなことを。何を言っているのかさっぱり理解できなくて、問い返したらはぐらかされたんだった」

ジルヤンタータは考えるように眉根を寄せたあと、わずかに目線を下へと下げた。

「ならば」

さっと上げられた彼女の厳しい目に見つめられて、フェイリットは唇を噛み締めた。王女というのはばれている。そう考えれば、彼があっさりと自分をギョズデ・ジャーリヤに上げ、滅多に与えることのない<sup>スフィル</sup>零番目の位置にまで据えた理由が頷ける。使えるからだ。

——では、竜だというのは？

そこまで考えて、フェイリットは首を傾げざるを得なかった。竜だとわかれば、ノルティス王のように強引にでも契約を結ぼうと考えるはず。普通ならば、誰だってそうだ。そんなそぶりが見られないのは、まだ気づかれていないからか、それとも.....。

「イクパルを戦火から守りたいのならば、彼らの策に乗るしかございません」

「でも、」

「貴女がたとえ行方を眩ませて、事なきを得ようとしても、“どこへ隠した”と言及してしまえば、立派に戦争への大義名分が揃います。そしてノルティス王は、そういうことをする王です」

ジルヤンタータの言葉に、フェイリットは息をつく。

そうだった。もうここに居ると知られた以上、巻き込んだと言って語弊はない。では自分は、責任をもってこの国をメルトローの手から守らなくてはならない。余計な災厄を招かぬように、いや、招いてしまった者の責務として。

「わかった。陛下が目を覚ましたら、……どうすればいいのか訊いてみる」

「よお、暇か」

診療所の灯りを消して火の始末をしていると、背中に声が降りかかった。

アンは手に持った燭台にそそぐ油の瓶を、棚に戻して息をつく。

「……はい、というのが嫌な質問ですね——ワルター大佐」

振り返った先に大きな体軀を見上げて、アンは苦笑した。軍衣のまま酒瓶なんか掲げて、誘いに来るような人はこの人しかいない。

「何言ってんだ。終わったんだろ、ちょっとくらい付き合え」

「いいですけど、ここで宜しいんですか。着ぐらいなら出せますが」

一度棚に戻した油を再び手にとって、アンは燭台に細く拗った油紙を乗せた。もう閉めようとしていたが、それほど片付けるものもないため、準備ならすぐにできる。

「いや、医者のお宿を酒臭くしたりはせんさ。久しぶりに城下へ降りないか、露天で着でも買って」

大口で笑顔を作るワルターの顔を見上げて、アンは頷く。

「感心しませんよ、軍衣で外に出たりして」

「いいんだ、どうせ顔は知れてるしな。お前もそのままでいいぞ」

外套を羽織りながら、アンは小さく笑った。“軍衣のままでいい”だなんて、気を遣ってくれたのだろう。何だかんだ言いながらも横柄なわけではなく、考えているのだと思う。こちらの解釈次第なのかもしれないが。

診療所の片づけを終え二人で外に出ると、空にはすっかり星が浮かんでいた。伸びをするように腕をかるく振ってから、ワルターが上を見て「おう」と歓心したような声を出す。

アンもその視線を辿って、綺麗に丸まった月が頭上に昇るのに気がつく。

「ああ、もうすっかり丸くなりましたね」

「不思議なもんだ。浮かんでるもんは同じなのに、空の調子で、あんなにも色が変わるんだからな」

ワルターの言葉を耳にしながら、じっと満月を見上げていた。けれどアンには、いつの満月も「丸かったな」としか思い出せない。

「……そうなんですか」

しばらく考えた後に応えると、おかしようにワルターが笑う。

「お前もテリゼアシダに似てきたな。まあ元から気性は似てたが」

美しいものは美しいな、とは思うけれど、色合いがどうだとか形が繊細だとか、そういう考えを持つことはあまりなかった。成る程、ずっと側にいて見て来た師が、そういうものに無頓着だったことが大きいのだろう。

「ずっと、綺麗なものを綺麗だとは思わない生活をしていましたからね。あの人の放浪癖に付き合っていたら、虹さえ灰色に見えるほどになりますよ」

城下の門をくぐりながら、その下に連なる露天の明かりを見渡した。きつとこういう光景も、

「綺麗だ」と言うものかもしれない。

露天の一つで鳥の包み焼きを買い渡され、その軒先に腰を下ろす。客用に敷かれた絨毯には、他に何人か、手酌をしている客がいる。

包み焼きは細切れの鳥肉を、薄く伸ばしたイムで包み、網の上で炙ったもの。両手で持てるほどの大きさがある。噛り付くと塩味のきいた鶏肉の甘さが、肉汁とともに口に広がった。美味しい、と呟いて、ようやくこれまで無言だったことに気がつく。包み焼きから目を上げると、酒瓶をゆっくりと口元から離すワルターが目に入った。

「あいつ、行っちゃったよ」

ふと漏らした彼の呟きに、最初、何を言っているのか理解することができなかった。けれどしばらく沈黙を置いて、ワルターが「行っちゃった」と言う人が、一人しか思い当たらないことに気がつく。

アンははっとして口を開き、ワルターの横顔に苦いものを見つけて押し黙った。

「なに、けりつけてすぐにでも帰ってくるだろう。心配することはない」

どう見ても、自分の責任だと思い込んでいる顔。

「……いつ頃ですか、コンツェが向こうに渡ったのは」

「この月が、まだ半分も欠けてた辺りだ。“鷹”がいやに多く海を飛ぶもんでな、胸騒ぎがして海に行ったら、案の定だ。随分前から奴はテナン王太子への打診をされていた。竜狩りの頃、テナン公が息子に会いたいと言ってきたのは覚えてるだろう。おそらくはその頃からだ。きっともう、俺たちが考えていた以上にあいつは、色んなもんに雁字搦めだった」

「優しい子ですからね……。けれど、今まで貴方に守られてきて、自由だったのは確かです。帝国と祖国、どちらにも寄ることがなく、真っ直ぐに成長して」

この頃嫌な噂ばかり耳にする。メルトロウからの船が、ちらほらテナンへ向かうのを見かける人が増えたり、沿岸に居ては危険だからとイリアスの南部に移住する者が出始めたり。

まるで災厄を予見する小鳥のように、民たちは落ち着きがなくなっている。

「ですが、コンツェももう子供ではありません。もう行き先を決めてやって、進めという時期ではないでしょう。彼が何を選んで、どこへ行くのかは……見守ってあげてよいのではないですか」

「そうだな」

しみじみと呟いて、ワルターは息を吐いて笑った。

「また俺は、何も出来ない。あいつを信じてやるしかないわけだ」

冗談のように軽く言って、酒を一口に含む。けれどその言葉の端々に、“昔”を思い出しているのは痛いほどによくわかった。八年前――何も知らず、恋だけに泣いていたあの夏の日々を。

「大佐は私の知る限り、何も出来なくはなかったじゃありませんか」

ワルターは、コンツェをテナン公王から引き剥がし、彼に“篡奪のための教育”を施させなかった。それはこの国に猶予をもたらし、イクパル帝国というひとつのまとまりを守ったことにもなる。表沙汰にはされないが、大きな功績にはちがいない。

「……お前はあの頃、何を考えていたか思い出せるか？」

「あの頃……」

「そうだ。中身も外側も、たいして変わっちゃいねえつもりなんだから。よくよく頭を捻ってみると、何を考えていたかなんぞ、さっぱり思い出せんもんだ」

ほんの八年前のこと。けれど八年というのは、口に出すほどあっという間ではなかった。十八だった自分が、何を想い何を感じていたのか……もうおぼろげにしか、思い出すことができない。

「そんな頃のことを、俺はずっと引きずってる」

そっと呟いた彼の言葉が、重みを増して胸の底に沈んでいく。抜け出そう、抜け出そうともがいているのに、そのせいで深く絡まる水底の鳶のように。

「……私だってそうです。先帝が亡くなって、もういいと言われても、未だに髪を伸ばして皇籍に戻ることができない。引きずっているのは、あなただけじゃありません。私も……おそらくは、兄も陛下も」

そうしてウズは薔薇を育て続け、ディアスは死の影に追われ続ける。コンツェが追われているのは、国か血か……いや、恋かもしれないな。そこまで考えて、ようやく笑みが浮かんでくる。

「いっそ、」

自嘲のような笑みを口元に浮かべて包み焼きをほおぼりながら、ワルターの声を耳にしていた。

「いっそ俺が貰ってやろうか——お前を」

「は?!」

息を吸い込んだら、その拍子に気管へ鶏肉が下ってきた。激しく咳き込んでから、アンは背を叩く人の顔をじっと睨み付けた。

「真面目な話をしていたと思ったら……、」

またいつもの冗談だったのか。けれどいい加減にしてくださいと、言おうとして見上げた顔には、困ったような笑顔があった。

「八年だぞ。ずいぶん長く待ったんだがな。お前はトスカルナを継げる、俺はサプリズを継げる。考えてみる、悪いことなんぞ何も無いだろう」

慌てて酒を飲み込んで、アンはさらに喉をつまらせる。

「そんな、」

「ああ、お前の気持ちか？ それはまあ、これから努力する」

「な、何言ってるんです、私は」

「お前、ファラマ様を覚えてるか」

ファラマ・ファターー八年前、“アンジャハティ姫”が皇帝のハレムにいた頃、妾妃の頂点に君臨していたギョズデ・ジャーリヤ。

「……ええ」

「あの方はサプリズの血筋の本家の方だ。あの方が生んだ姫君がバツソスに嫁いで、最近孫姫が生まれたらしくてな。養子にどうかと話が来てる。まあ、また婿捜しになっちまうだろうが……」

」



養子にすれば、確かにトスカルナを継がせることができるだろう。少し時間を置いてしまうが、その子供に継がせることが可能だった。けれどまさか自分が、その役目を負おうとは考えたこともなかった。ウズルダンがそのうち、養子をつれて来るのだろうと思い込んでいたのだ。

「忘れないでください、私には兄がいるんですよ。あの人をトスカルナを離すわけがないでしょう」

あれほどトスカルナを継ぎたいと固執していた権力の亡者に、まさかはいない。

「どうだろうな。……最近の奴らは、何を考えているかさっぱりわからなくなっちゃった」

何故だろう。まるで置き去りにされたような寂しい声で、彼は笑った。

「……で、俺は結局バスクス二世の護衛かよ？」

バツソスの城は帝都のように、回廊伝いにつながってはいない。部屋の一つ一つが小さな入り口でつながっており、金や銀の刺繍のされた見目うつくしい目隠しの布が下がっている。

「わたくしたちは、たったの四人、わかりますか、たった、四人なのです」

追うように歩いてくるシャルベージャを横目で見やりながら、ジルヤンタータは押し殺した低い声で応える。

バツソスに到着して二日目、寝返った以上なにも動かないわけにはいかない。最小限の人数を伴って来たために、バスクス帝は単独での行動が多くなった。結果、大事なことは“随伴してきただけ”の自分たちには何も知らされていない。それが例え言い渡されているとおりの、バツソス公王へのギョズデ・ジャーリヤの披露目であったとしても。いろいろと嗅ぎまわったのが知れてしまったのか、フェイリットの治療後に彼を捜しても、姿を見つけることはできなかった。挙句ようやく見つかったと思えば、血を失って倒れているではないか。

「策謀はすべて陛下の頭の中だった。わたくしたちは、何も告げられずここへ従って来ただけなのです」

「公爵との謁見は？ やる予定だっただろ、そもそもの目的がギョズデ・ジャーリヤの披露目だ」

「……それは分かりません。到着するなりわたくしはフェイリットを御殿医の元まで運んでいたのですよ。その後もそこから離れなかった。あなたは何をやっていたのですか。てっきり陛下にお付きしているものと、」

「俺は命ぜられて兵の補充に走ってた。帝都に鷹を送ったり砂漠に馬を出して残存兵の確認に向かったりな。その間にヤツは、公王にでも何にでも挨拶ぐれえ済ませてたんじゃねえのか」

「その可能性が高いでしょう。自分のジャーリヤは負傷して眠っているから、披露目を延期したい、などと告げている可能性があります」

部屋を次々と通り抜ける二人を、小姓たちが驚いたような顔で見送っていく。部屋同士がつながって廊下のない造りは、侵入者の足を止めるのに役立つ。だが今は鬱陶しいとしか言いようがない。

「だったら……いや、その前にどこに向かってる」

早足のまま、一向に足を止めようとしないジルヤンタータを訝しげに見ながらシャルベージャが問う。幾分歩幅が勝っているため、ジルヤンタータの隣にすっかり並んでいるが、彼女はちらりともそちらを見ようとしていなかった。

「オフデ侯爵のところへ」

「……は……なんか早まってねえか？ いきなりオフデかよ、そんなに焦る必要が……」

オフデ侯爵といえばバツソス公の側近中の側近で、公王のかわりにバスクス帝を出迎えたほど、地位も権力も上位にある。宰相位を置かないバツソス公国において、その役割にもっとも近いとも噂されている参謀だ。一介の侍女如きが会おうとして会える人物ではない。シャルベージャ

が驚くのも無理はなかった。

「焦る必要があるのですよ。あなたさっき、陛下の護衛がなんと仰っていたようですね。それなら陛下が今どこでどんな状態におありか、わかっているのですか」

「だから、言っただろ。ずっと砂漠に居たんだぜ？ この格好見ろよ、外套用のローブびらびら靡かせて、ずっとヤツに付き添ってたように見えんのか」

ようやくちらりと目をやって、ジルヤンタータは深い息を口から出した。確かに、よくよく眺めればターバンもローブも土に汚れて、そのあまりの具合に、ばさばさと歩く度、埃が舞ってくるようにさえ感じる。

「兵士は生きていましたか」

タイムに襲われて、置き去りにする形になった奴隷兵士たち。上官ならば、彼らの生存に時間を費やしたくなるのも頷ける。

「二人な。他は、もうタイムに殺られてた」

「そうですか……」

「連れてきて軍属の医者に診せてる。軽症だし、まあすぐ使えるっちゃ使える。俺と育ってきたヤツらだからな。けど、皇帝の護衛だけはごめんだぜ」

「護る必要はございませんでしょう。側に待機しておいでなさい」

ジルヤンタータの狙いは、フェイリットの侍女としてオフデ侯爵に会い、礼の機会を取り付けることだった。御殿医を回してくれたのは他ならぬ彼であるし、会えばさり気なく向こうの動きも掴むことができる。皇帝の姿が見えない言い訳さえ、取り繕うことができるのだ。だがどんなに切迫した事態でも、シャルベージャを同行するのは憚られる。埃まみれの彼では、まがりなりにも身分違いの侯爵と会するのにそぐわない。

「シャルベージャ殿」

初めて足を止めたジルヤンタータを、通り過ぎてからシャルベージャは振り向く。両肩を上げて何だ、と不機嫌に唸った彼をじっと見つめてから、その耳元まで近づいた。

「……陛下は今意識がないのです。正確には寝台で、眠っている」

噛み付いてしまった、とフェイリットが飛び込んでから、ゆうに二時間。二時間というのは、短いようで実は長い。それは帝都からお忍びで皇帝を迎え、その姿が二時間見えないということ。バツソス側としては、ほんの数十分見失うだけで大事になる問題だった。

「先ほどフェイリットが様子を見に伺ったはずですが、未だお目覚めでないこともありうる。姿が見えないと感づかれる前に、わたくしはオフデ侯爵にお会いし、“陛下は今ギョズデ・ジャーリヤと寝台にいる”と思わせてこなければなりません」

「別に、感づかれたって居眠りこいてるだけなんだろう？」

だったらいいじゃねえか、と肩を竦めるシャルベージャを見て、ジルヤンタータは顔を曇らせる。ギョズデ・ジャーリヤに血を吸われたなどと、気づかれるわけにはいかない。それはフェイリットの正体を、疑わせる誘引になる。

「とにかく、陛下がお倒れになった事実をバツソス側に知らせることはできません。あなたは戻って、陛下のところへ訪室者が訪れないよう、見張っていてほしいのです。護衛をしろとは言い

ません」

「嫌だぜ俺は。ヤツのこと嫌ってんの、知らねえ訳じゃねえだろ」

「シャルベージャ。あなたしか居ないのですよ、他に、」

「とっかえりゃいい。俺がオフデ侯爵の部屋に行く、あんたは陛下の様子を見張る」

「シャルベージャ。確かに彼ら皇族が、あなた方を奴隷と呼び、家畜のように値段をつけて親から取り上げ、命の保障も無い前線へ、道具か何かのように送っているのは理解しています」

帝国軍に付属してるはずなのに、事実属していないマムルークたち。仲間であるはずの兵士たちから、蔑みさえかっている。彼らが軍内で重宝され、出世できる道は、とても狭い。実力は専ら、認められるべき集団であるというのに。

「そしてバスクス帝は、即位後なにもしていない。奴隷制度の撤廃も、未だに狂気と言われる鎖国政策の撤廃さえも」

「あのなあ……俺は護衛が嫌だって、ガキみたいにだだこねてるわけじゃねえよ」

「わたくしにはガキも同然です。」

ひとつ、呆れたような溜め息を吐いたのち、シャルベージャは首を横に振った。

「――タインを、なんでお偉方が恐れてるかわかるか？」

「……は、」

急に話題が変わったことに、ジルヤンタータは目を瞬かせる。シャルベージャは琥珀色の瞳をずっと細めて、言葉をつなげた。

「“王喰い”って呼ばれてたからだ。タインは滅多に人を襲わないし、滅多に人前に姿を現さない。だがヤンエ砂漠でだけは、昔からタインが出ると言われてきた――王が通ると、そいつを喰らいにな」

「シャルベージャ……」

「だが、それももう砂漠の民にしか伝わらなくなった。今残ってるのは、わけの分からない畏怖だけだ。畏怖で人はヤンエ砂漠を越えようとしない。魔物が出るからってな。すべては王の弱点を隠し、それを遠ざけるためだった」

首元まで覆っている外出用のローブを脱ぎながら、シャルベージャは尚も続ける。

「けど、馬鹿なやつらがマムルークなんぞ奴隷軍隊を結成し、そこに砂漠で買ってきたガキどもをごろごろ入れやがった」

ずっと腕を上げ、シャルベージャはジルヤンタータを睨むように見つめる。

「見ろよ」

捲り上げられたその腕を見て、ジルヤンタータは口を押さえた。悲鳴を上げそうになるのを必死にこらえて、シャルベージャの琥珀の目を見上げる。

――白銀の毛皮。衣服に隠されたその向こうにあったのは、びっしりと毛の生える、獣のような腕だった。まごうことなく、人間ではありえない。

「タイン……、」

そう呟いて、ジルヤンタータは息をつく。

「なんだよ、気付いてただろ？」

——“お前の一族”ではないな？

——俺らは同種殺しはしない、んでしたかね。

「同じ建物にいただけでこうだ。近くに寄れば、俺がどんなに疲れるか想像つくだろ」

喰らいたい衝動と、変化を抑える精神力。たしかに、変化すら自分ではどうしようもないフェイリットを見ていれば、その難しさは理解できる。……だが、ふとした疑問を見つけてジルヤンタータは首を傾げる。近寄れば変化してしまうなら、いくら強靱な精神を持っていてもここへの道中は無理だったはず。砂漠であんなに近く馬を走らせていながら、彼の苛立ちはほとんど肋骨だけに向けられていたのではなかったか。

「ですが、ここまでは平気だった。違いますか？」

「それは……あの小娘がいると気にならねえんだよ。最初は娘もタインかと思った。俺らは同族で殺し合うなんざしねえし、衝動も牽制し合えるからな。玉座でバスクス二世に目通りしたときは、てっきり皇帝がタインを飼い慣らしたのかと驚いたんだが……タインじゃなかった。砂漠で、見ただろ」

ジルヤンタータは無言で眉をひそめて、頷いた。フェイリットはともかく、襲い来たタインは少なくとも彼女を殺そうとかかっていた。

「砂漠で見たやつは恐らく野生に近い。俺はずいぶん人慣れしたが、そのぐれえの見分けはつく。だが娘が何者なのかは、さっぱり見当がつかなかった。しかも最悪なことにバスクス二世はそれを知っていて、試した」

「貴方がタインであることを、ですか」

「そうだ。それとお前の小娘が、俺と“同じ”かもしれない、ってところまでな」

ジルヤンタータは額に手の甲を当てて黙った。じんわりと、油のような汗を手に感じる。

フェイリットがタインでないことをシャルベージャに確かめさせたなら、彼がぎりぎりまで何もしなかったのは頷ける話だ。手助けしてしまっただけは、あの襲い来たタインがフェイリットを殺すか否かがわからなくなる。殺せば人間、殺さなければ同族、というわけか。そのあと喰らっていたなら、王だと思われていたかもしれない。だがジルヤンタータ自身、彼女にそれは考えられないことを知っている。庶子から上がった王女で、その上に兄が10人もいる。女王制度を認めないメルトロ王国で、彼女が王になる確立は無だと言ってもいい。

「……わたくしと役割を交換するとして、貴方にはオフデ侯爵を言い包める自信がありますか」

彼より倍も生きている、国の上位にいる男だ。剣や体術でならともかく、話し合っただけで上手い相手ではない。

「ああ。まあ何とかする。お前はバスクス二世の寝室に行って、踏み潰すなり何なりで起こしてくるんだな」

シャルベージャはそう言って、止めていた足を動かした。本当に、任せて大丈夫なのだろうか。

「……わたくしも、陛下を起こしに参りましょうか」

ジルヤンタータは、複雑な面持ちで去り行く姿を眺める。

バスクス帝がいるはずの室の前に立ち、フェイリットは深呼吸する。身の回りを世話するような小姓の姿は、どこにも見当たらなかった。

蒼を加えたような草色の仕切り幕が、風にゆっくりと揺れる。帝都では薄い布地を幾重にも重ねて仕切りを作るが、ここの布地は厚い。一枚きりで向こう側は見え、触れると麻に近い手触りがした。

紗布と呼ばれる布は高級で、権力者でさえなかなか手に入らない。それを城内の端々まで使える帝城と、皇帝を迎える部屋にさえ使えないバツソス城……これだけ見ても、財政の開きはかなりある。普通なら、他の目に晒される区域には多少なり見栄を張るもの。一目で“苦しいんだな”とわかってしまう城を、恥と思わない城主はけっこう多くないだろう。

——見せつけて無言の訴えしてるとか……。

鎖国で物が動かない。それはそのまま、貧困へつながる。帝国の領土で循環させてはいるが、偏りが生まれてしまうのは避けられない。なにせ資源が乏しく、バツソスに至っては砂が財産とさえ言える。皮肉にもならない事実だ。もしこれが、隠しきれない貧困のせいではなく、わざと“苦しいのだ”と見せつけて、鎖国に対し何の動きも見せない皇帝に財源の富強を訴えているなら、バツソス公王は相当に切れる人物だ。

「そうだ、」

こんなことを考えている余裕はなかった。そっと仕切り幕の端へ手をかけ、フェイリットはまた息を吸う。

——なんて言おう。普通の人間が、血を吸ってごめんなさい、なんて言わないし……。

「陛下、」

そっと声をかけて幕を捲る。室はぽっかりと広く、毛の短い絨毯が隅まで敷かれていた。

寝台は壁ぎわに置かれており、そこだけ窪んですっぽり収まる仕様になっている。調度は少ないが、壁に掛けられたタペストリが室内を充足させていた。

倒れてから、半日近い時間が経つ。遅くとも目が覚めていておかしくない頃合いだ。

「陛下？」

返事が無いので居ないのかと思いつつ、フェイリットは歩き出す。仕切り幕を捲るとき、寝台の天蓋が閉まったままなのを見つけていた。

見上げた天蓋は銀色のような、鼠色のような色をしている。光沢のあるその生地には、白糸で草花の刺繍が隅々まで施されている。帝城の風も透かすような紗布に比べると、やはり厚みがあって向こうが見えなかった。

「失礼しま！！」

開けた途端、真っ黒な影に見下ろされる。フェイリットは驚いて声を上げてから、その人物がバスクス帝以外ありえないことを思い出す。

「どけ」

汗の浮いた土気色の顔で、目前に立ったバスクス帝が言い放つ。

「陛下……？」

フェイリットを、押しやるようにして過ぎていく。するすると鳴る長衣の衣擦れの音を肩ごしに聞きながら、フェイリットはそのあまりの形相に固まっていた。

「す、すみません」

バスクス帝は背を曲げて近くの長椅子に腰掛けた。肘を自らの膝に置いて、眉間の皺をほぐすよう摘んでいるが、その手が動いている様子はない。

「何か用か」

溜め息が混じったような低くて深い声は、怒っているようにも、疲れているようにも聞きとれる。フェイリットはしばらく沈黙してから、口を開いた。

「あの……覚えてますか？」

「――何を」

質問に、声色が一層低くなる。フェイリットは半ばうなだれるようにして頭を下げた。もうこれは、怒っているとみて間違いはない。

「ごっ、ごめんなさい。噛みついたりして……その、」

「……ああ、」

思いついたように声を出して、バスクス帝は顔を上げた。違ったのだろうか。まるでたった今気づいたような言い方だ。

「大したことはない」

しかし言葉の割に、汗が浮いて色の悪い顔をしている。“大したことはない”顔には、明らかに見えない。

「でも、」

尚も言いたげに口を開いたフェイリットから視線を外し、バスクス帝は皮肉げに顔を歪めて息を吐いた。

「それ以上そこに突っ立っているなら、壁に押しつけられても文句は言うな。次は手加減してやらんぞ」

手加減……と口の中で呟いて、フェイリットは顔を赤くする。けれどいつものように「何言ってるんですか！」と叫ぼうにも、かれは冗談を返せる顔色でなかった。無理をしているのが、ひと目でわかってしまう。

「吐かんだけまだいい。前はもっと、酷かった」

窺うような空気を察したのか、バスクス帝は鼻で息を吐いてそう呟いた。

「“前”って……？」

幾分よくなってきたのか、こちらに向いたバスクス帝の顔からは、汗がきれいに引いていた。けれど、問いに関する応えはない。このまま待っていても納得のいく言葉は聴けないだろう。フェイリットは合わせられた視線から目を反らさず、小さく微笑んだ。話したくない話題なら、自分にもある。

「喉、渇きませんか？」

見渡すと、窓際の卓に水挿しがのっていた。銀製で、網目のような模様が這っている。フェ



イリットはそこまで歩いて行って水挿しを取ると、椀に水を注ぎながらバスクス帝を見やった。

「ああ、渴いたかな」

帝都では、水を用意するのは小姓の役割だ。ウズルダンの元で働いたとき、水に檸檬を浮かべるのが好きだったが、ここにもそういう人がいるらしい。無造作に傾けた水挿しから、黄色の果実がとび出して水に浮いた。

「はい」

椀を差し出して、バスクス帝が受け取るのを待つ。少しの沈黙のあと、指先が軽くなった。

「何をしに来た？」

フェイリットが見上げると、含んだような顔のバスクス帝が口元を引き上げる。手に持った椀を口元に寄せて、黒い眼だけがこちらに動いた。

「質問をしに……来たんです、けれど」

バスクス帝はフェイリットが“サディアナ王女”であることを知っているのか。その自分をどう使うつもりなのか。——それが、これから起こるかもしれないメルトロ王国からの「災厄」を、回避できるものならばいい。喜んで手を貸すと、そう言うつもりだった。だがこれは、調子の良くないところに尋ねる話題ではない。フェイリットが王女であることを“知っている”のと、フェイリット自身の口から“正体を明かす”のでは、格段に差がある。遠まわしでも「味方します」と、はっきり告げるようなものだ。そんな重要な話題を、顔色の悪いバスクス帝にしていいものかどうか。

「“けれど”？」

「けれど、あとでまた出直しますね。陛下のお加減がよくなってから」

フェイリットが愛想笑いで応えると、バスクス帝は喉の奥で短く笑った。

「ならば互いにひとつずつ、というのはどうだ。私もお前に訊かねばならんことがある。それを訊きにお前の室へ向かったんだが。まあ、この有様だ」

「そ、その」

「断れなくなったな」

満足そうに口の端を引き上げて、バスクス帝は頷く。お前のせいで今まで寝ていて、今も気分が良くなる——そんなことを言われてしまっは、かれの提案を断る理由がみつからなくなる。

「聞くことですか」

「そうだ。どうする、お前の選択に委ねてやるぞ」

選択肢などないことを知っているだろうに。フェイリットは俯いたあとで小さく首を振り、視線を戻す。

バスクス帝は飲み終えた椀を持ちながら、肘かけに置いた手の甲に、自らの顎を乗せていた。口元は皮肉げに歪んでいるが、その眼は静かに据えられている。……気づいたのはいつ頃だったか。かれはいつも、皮肉を言いながら、その裏側に理性を隠している。

「じゃあ、えっと……陛下から聞いてもらえますか？ わたしのは、そのあとでいいです」

ひとつずつ質問を言い合い、それにお互いが答える。

簡単なようだが、フェイリットには隠していることが多すぎた。王女であること、生い立ち――そして人間ではない、ということ。こちらの質問はもちろん、“メルトロ王国が戦争をしかけてきたとしたら、自分に何ができるか？”だ。ここに自分が“居る”だけで、メルトロは恐れる。世界を手に入れられる化け物が、自分たちの管理下にならないから。

戦争をしかけられたらどうするか――それに対する指示は、一帝国に座する男にとって、それほど困難ではないはず。けれどそれに対して、バスクス帝の質問に何でも答えるというのは、フェイリットにとって危険な賭けにしかならない。

竜であることは……その真実だけは話すことができない。

「疑問は山ほどある。お前の強さ、知識、アルマ山脈で何をしていたか。ウズルダンから聞いたが、イクパルの文字も難なく読めるそうだな。礼儀作法も、村民にしては出来すぎているし訛りも無い」

フェイリットは眉根を寄せて、黙っていた。質問はひとつだけ。かれが口にする疑問は、その核心にまだ近づいていない。

「バスクス二世は、女狂いの木偶の坊。政治や軍事は見ようともせず。ハレムから引き上げた宦官宰相にすべてを取り仕切らせ、自分は女に溺れている」

低い声でそう言いながら、バスクス帝は長椅子から立ち上がる。

「……そう思われている。他王国の重鎮たちにも、もちろん、直轄領であるサグエの者たちにも」

こちらに来るかと思っていたが、違ったようだった。バスクス帝は身を翻して、窓際の卓まで歩いていき、その上から何かを取る。背中に隠されて見えないが、卓の上を思い出してフェイリットは目を瞬かせる。そこで水を汲んだ覚えはあるのに、卓の上に他に乘っていたものが思い出せない。

「実際、なにもしていないのだから嘘は無いわけだが」

振り返ったその手には、古びて茶色くなった紙が丸めたまま握られている。フェイリットは巻物の内容が気になり、その紙ばかりに目を向けていた。そんなに古い書物を、見たことがない。

「そんな木偶の坊でも、他国の情勢ぐらいはわかっているつもりだ」

「他国……」

フェイリットは思わず目を丸くした。かれの口にする“他国”は、深く考えずともわかる。メルトロか、リマか。イクパル帝国に関わる他国は、今のところその二カ国が根深い。そして自分と他国を結びつける事柄は、ひとつ。

フェイリットの顔色が変わったことに気づいたのか、バスクス帝は小さく笑んだ。いつも通りの、皮肉にしか見えない笑顔で。そうして手の巻物へと目を下げてから、結わえてある革のような紐を解く。

「見てみる」

巻物が目の前に出されたことに、フェイリットは驚いた。ぼんやりしているうちに、バスクス帝の顔が見上げるほどに近くなっている。ゆっくりと手をのばし受け取ると、古めかしい、少し湿ったような手触りがした。

「どうした」

「ええと……」

なぜだか、躊躇する自分がいる。これを開いたとき、平静でいられる自信が持てなかった。

しばらく丸められた茶色の紙面を見つめて、フェイリットは目を瞑った。小さく息を吸って、紙をまっすぐに開けていく。両手がそれ以上動かないことを確認してから、目を開けた。

「……あ、」

「さあ、私の質問はそれだ」

口を開けたまま、フェイリットは紙を凝視していた。

そこに描かれていたのは、薄金の短い髪と水色の目を持つ人物。血の気の失せた白い肌は、けれど病弱そうには見えない。大きな椅子に埋もれるように座り、強い視線でこちらを睨みつけている。

紙面を見ているはずなのに、まるで鏡を見ているような気分になって、フェイリットは顔を歪めた。もちろん、描かれた人物の顔は変わらない。

——タントルアス。

自分に似ているとさんざん言われているらしいが、その肖像画をフェイリットはかつて自らの目で見たことが無かった。何しろ千年近くも前に生きた古人。その後の歴史に貴重な書物や真実は、ほとんど隠蔽されてしまった。遺されたものが各国に散らばっているのは確かだろうが、それがこのように表の光を浴びることなど、今までなかったはずだ。

「メルトロー第13代国王、タントルアス一世。そして今の世に、容姿を写し取ったと言われるほどの王女が生まれた。庶子であるにも関わらず、皮肉にも王女は13の号を得さえした——第13王女サディアナ・シフィーシュ」

似ているが、五歳ほども年かさがある。このままフェイリットが五年、生きることがあったなら、まるで姿は生き写しのようになるだろう。

くせのある緩やかに巻いた髪の上には金の王冠が乗り、身体には、半分だけ隠すように椅子の下まで伸ばされた深緑のローブが見える。そしてその手に、メルトローだけの両刃の長剣。刀身には王家をあらわす、獅子の下肢が鱗で覆われた紋様まで細やかに彫り込まれている。

——では、同じだったというわけだ……質問の内容が、お互いに。

茶色の紙面から目を上げ、静かな声でフェイリットは言った。

「何ができますか？ わたしには」

バスクス帝はほんの一瞬、いぶかしむように片眉を吊り上げて、フェイリットを見やる。

「わたしの質問です。イクパルをメルトローに燃やさせないために——サディアナ・シフィーシュには、何ができますか」

バスクス帝が満足げに腕を組むのを見つけて、フェイリットは自らも小さく微笑んで見せた。

「教えてください、わたしに何ができるかを。……わたしはメルトロ一人です。それは紛れもない事実だし、変えられない。メルトロで生まれて、メルトロ一人に育てられて、メルトロを愛するように仕組まれた。けれど、メルトロの考えだけは、賛同することができないんです」  
「考え？」

バスクス帝の目を見上げて、フェイリットは頷く。

「彼らの目指すのは大陸全土の再統治です。それも、あまり平和的とは言えない。メルトロ一国王ノルティスの性格からすると、再統治は共存ではなく支配でしょう。近隣諸国に対してはなおさら、侵略の手が早いはずです。イクパルにもその手は及ぶ」

溜め息のような息を口から出して、バスクス帝は肩を竦めた。

「イクパルは手も足も出せん。今の財政ではな」

イクパル帝国とメルトロ王国が戦争をしたなら、敗北する方は目に見えている。

「この国が好きです。お世話になったし……少しの間だったけど居場所がもらえました。だから、これは恩返してことにさせて下さい。手をお貸しします。あくまでも侵略でなく、防衛に」

言われるがままメルトロに還っていたら、敵国だからと知ろうともしなかつただろう。ここにどんな人たちが住み、どんな人たちが生きているのか。イクパルもメルトロも、肌の色こそ違えどみな同じだ。泣きもすれば笑いもする。どこの者とも分からぬ娘を拾い、手厚くもてなすような温かさも。メルトロ一民が口にする、野蛮民族などではけしてない。

「防衛……か」

ふと笑って、バスクス帝はフェイリットの手からタントルアス王の肖像を受け取る。巻物は元どおりに丸められて、皮紐でぐるぐると封されていった。

大陸を統治したと言われるタントルアス。彼が英雄と言われているのは、その統一が平和的で、かつ全土に富をもたらしたから。恩恵を授かった者たちはみな、口を揃えて英雄と呼ぶ。しかし、平和というのは後期でのこと。統一していく過程には、けっして少なくはない血が流されている。そして、恩恵を受けることができなかつた国さえ存在するのだ。——たとえばイクパルのように。

「イクパルは遙か昔に他への侵攻を断念した。帝国主義とは名ばかりだ。お前が嫌う“侵略”とやらを、見せてやることはできん。残念だが」

「だから、見たくないんですってば」

慌てて口を挟んだフェイリットをまじまじと見やっけて、バスクス帝が笑う。ずっと皮肉げだと思っていた歪んだ笑顔が、なんだか柔らかく見えてくる。錯覚だと思い直して、フェイリットは首を振った。

サグーエ  
「皇帝陛下、ギョズデ・ジャーリヤ」

突如した声を背中に聞いて、フェイリットは目を瞬かせる。振り返ると仕切りの幕のこちら側に、ジルヤンタータが膝を折って控えていた。

バスクス帝が「どうした」と返すのを聞きながら、フェイリットはジルヤンタータを見つめる

。彼女はオフデ侯爵に会ってくると、執務区域に向かったはずだ。が……、この早さでは望みは薄い。

「ご安心ください、オフデ侯爵の元へはシャルベージャが向かいました。数刻後にはバツソス側の状況が知れるでしょう」

フェイリットの目線の意図に気づき、ジルヤンタータは隣に来て微笑んだ。

「出来る範囲での協力をさせていただきます。わたくしにもお聞かせ願いますよ、陛下のお考えを。ただの手駒で命をおびやかされるのは、砂漠でのことで最後に」

ジルヤンタータの低い声に、バスクス帝は口の端を引き上げた。

「負い目は受けるつもりだ。これまで何もしなかったことも含めて」

バスクス帝が暗い顔で笑うのを見て、フェイリットははっとする。こうしてみても、初めてわかるなんて。さっきのは錯覚ではなかった。……かれは本気で、心から笑っていたのだ。

「負い目？ 負い目だなどと、そう簡単に掃えるものではございませんよ。民があなたをなんと呼ぶか、ご存知なのですか？」

「ジル、」

食い下がるように言葉をつなげるジルヤンタータを宥めようと、フェイリットはその手を両手でそっと握る。だがそんな気遣いも虚しく、バスクス帝はジルヤンタータを逆なでするように、声を立てて笑い出した。

「無能も、暗愚も、狂帝も、喜んで呼ばれよう。私が……いや、私とウズルダンがこの二年間、築き上げた結果だ」

握っていたジルヤンタータの手が、わずかに震える。

「どういう意味です、それは」

少しだけ目を細めて顔を歪めた後、バスクス帝は続けて笑った。

「死ぬ準備をしている。即位からずっとな」

\* \* \* \* \*

「逢えたようだな」

海に面した露台<sup>テラス</sup>から、かの国があるだろう方角を眺めて、テナン公王は満足げに言った。

「お前の話を信じるならばだ。……我が息子は、お前の顔とお前の連れてきた“王子”とやらの顔を気に入るはずだな」

「そう願っております」

カランヌはテナン公王の、長身を覆うように羽織られた深緑のローブの背中を、じっと眺めた。蠍<sup>さそり</sup>を模したその図案に、思わず嗤いが込み上げる。――他を刺し毒する蠍<sup>さそり</sup>……何故このような紋様にしたのか知れない。だがまるで、この国の先を予見するような紋様だった。イクパルという国に牙を剥き、その玉座に毒の針を刺す未来。

「何か可笑しいか」

「……いえ、」

背中がいつの間にかひっくり返り、こちらに怪訝な視線が刺さっていることに、カランヌはようやく気づく。

「いえ、ここに着いてからずっとぶらぶらと歩き回っていたようでして、どうしたものかと困っていたんですよ。部屋に居なくては、公子殿と引き合わせようがございませぬので」

「確か……ロティシュ・アシュケナシムとかいったな、その王子」

「ええ。私がずっと教育係のようなものをしていたのですがね、少々ひねくれてしまいました」

テナン公王は驚いたような顔で目を開けると、ついで肩を震わせ笑い始めた。カランヌは首を傾けたまま、笑い続ける公王を見る。

「閣に躡られたら、アシュケナシム殿下もひねくれよう」

再び豪快に笑っておいて、テナン王は露台を背に歩き出す。

「……そうでしょうか？」

まったくわからない。確かに自分は忙しいし、サディアナの16の誕生日が近づいた頃には殆ど顔を合わさなくなった。それでもロティシュはカランヌの視界をいつでも覗けたし、それをカランヌ自身許してもきたのだ。教師も惜しみなく最高の者たちを送ってきたし、カランヌ自身語学を教えたこともある。

思い返してみても、よほど捻くれるようなことはしていない。むしろ、寛大で優しくたとさえ言えるはずだ。

「いいかね、子は親を見て育つものだ。殿下は閣を見て育った。閣は己を、ひねくれていないと胸を張って言えるかね？ まあ、エトワルトと儂は早々に離れた故、あまり似なかったようだが。あいつの素直な性格は母親ゆずりだと思っている。素直な者はひねくれた者をほうってはおけぬものだ。じき仲良くなろうよ」

目の前まで来て後ろに手を組み、テナン王は言い放った。

「そしてその口から、“王太子になれ”と言わせる」

「理想的な結果です」

カランヌは僅かに笑んで、テナン公王に椅子を勧めた。立場は違えど、他国の参謀ごときと私室で談話をしようとする。この飾らない気質を、公子は間違い無く引き継いでいるのではないだろうか。エトワルト公子がテナン城に着いた初日、挨拶程度の対面しか持たなかったが、カランヌは確かにそう感じていた。

「庭の噴水で、エトワルト王子に会ったと、アシュケナシム殿下が申しておりました。ですが話によると、エトワルト王子はそれから、部屋にひとり籠もってしまったようではないですか」

よほどの衝撃を受けたのだろう。もともとサディアナとは仲が良かったと踏んでいたが、よもや彼が抱いていたのはただの友情ではなかったに違いない。少なくとも、サディアナに対し異性としての好感を持っていた。

「好きな女が敵国の王女だった、か。なんとお伽噺のようではないか」

「ですが、逆手にも取れますよ。王太子となり、次いで公王となった暁には、メルトローとは友好国です。サディアナ王女を正妃として迎え入れることさえ、夢ではなくなります」

カランヌの言葉を聞いて、テナン公王はゆっくりと頷いた。

公王には、“メルトロ王国の第13王女は生きている”という情報は渡してある。その王女が宮殿で育たず、イクパルに居て身を隠して生活していることも。

メルトロ側がサディアナを欲する理由は勿論、彼女が持つ永久の覇権を得るためだ。だがテナン側にとっては、メルトロの王女は格好の姻戚相手。サディアナ王女を公子に娶せることが出来れば、より強い関係がメルトロとの間に築けると考えている。それは公子が王になり、帝冠を奪うのを助けることにも代わるのだ。妻の生家が大陸一の勢力を誇るメルトロならば、それだけ大きな後ろ盾と援助が望めるからと。

しかし、例えサディアナと婚姻を結んでも、その役割を考えれば通い婚は避けられない。だがそれでもいいと言うならば、メルトロは必ずや彼女を差し出すだろう。

「アシュケナシム王子を向かわせてはどうかね。エトワルトも、長く籠もってはられんやつだ。放っておいても出てくるだろうが、この機会を使わぬ手はなからう」

「ええ、ではそう致しましょう」

椅子から立ち上がりメルトロ式の拝礼をとるカランヌを見、テナン公王はただ頷いた。

「美味しいお茶でしたよ」

扉の前に控える侍女に柔らかく微笑んで、カランヌは自らその扉を押し開き立ち去っていく。

\* \* \* \* \*

――死ぬ準備をしている。そう告げて苦笑った男を見上げて、フェイリットは言葉を無くした。

「帝都に戻ったらハレムを縮小する。ジャーリヤは全て家臣に下賜、縮小したハレムには、各公国から一名ずつギョズデ・ジャーリヤを置く。今回のことはそのためのバツス滞在でもあった。ハレムのジャーリヤたちの懐妊を否定せねばならんのでな。それには一月程度の日数がある。本来ならば別の区画に下賜する女を一月隔離してのち、ジャーリヤの下賜が行われるんだが。今回は人数も多く他には漏らせん。……それらを一気に解決するために、種馬の私が離れた。ずっと子は出来ぬようにしてきたから、万が一も無い」

隣に居るジルヤンタータが、小さく息を吐くのを聞いた。

「そのギョズデ・ジャーリヤたちは、私の代のジャーリヤにはならぬだろう。次の皇帝が、円滑に帝国を治められるよう、各公国から姫を召す」

静かに言葉をつなげるバスクス帝を見て、フェイリットは口を開ける。

「じゃあ、わたしも……その次の皇帝のジャーリヤなんですか……」

バスクス帝はふと目線を下ろし、フェイリットを眺め見た。

「なんだ、私と死にたいのか」

感情が含まれているだろうに、その眼差しが何を覆い隠しているのか、フェイリットにはよくわからない。答えも出せずに困っていると、バスクス帝がふっと息をついて笑ったのが聞こえた。

「お前が考えて決めるといい。……尤も、考えるべくもないだろうが」

すっと上げられたバスクス帝の手のひらが、頭を通りゆっくりと頬を撫でた。その仕草が、まるで「手離すのが惜しい」と言われているように感じてしまう。ざわざわと騒ぐ胸を抑えつけるために、フェイリットはきつく目を瞑った。

「きっと次代では、平和な生活が送れるはずだ。お前が居ればかの大国とも、友好的に関われるかもしれん」

――かの大国、メルトロー王国との梯に。はっとして、フェイリットは目を開いた。まさか、彼が自分をわざわざスフィル・ギョズデ・ジャーリヤ（零番目の妾妃）に据えたのは、それを展望してのことだったのか。新しい皇帝が、全ての権力に潰されることなく公平に立ち回れる礎を、彼は作ろうとしたのだ。

「メルトロー王国第13王女サディアナ・シフィーシュ。予は其方<sup>そなた</sup>に――次代イクパル帝国の“母”となってもらいたい」

夜の空にも似た低く広がりのある声が、すっと腰元まで下がってゆく。片膝をつき、手の甲に降りてくる唇の温かさに、フェイリットは震えた。

「……――受けてくれるか」

まるで、求婚されているようだった。

跪いて口づけを手の甲に落とすのは、メルトローでは王族男性が王族女性に対する敬意を持った親しい挨拶。けれど同時に、求婚の際にも行われる仕草だ。かれがした今の動作は、紛れもなく前者で、後者であるはずがない。だが、

「……陛下」

――唇が触れた手の甲から、熱が身体に広がっていく。

ふ、と笑ってバスクス帝は立ち上がった。一気に高くなった目線の差を、フェイリットは追いかけて見上げる。

「そうだな、今決めることは無い。考えろ、サディアナ」

サディアナ、と呼ばれてフェイリットは顔を伏せた。それは自分であって、実感のない遠い名だ。言い知れぬ、澱のような重みが胸に沈み落ちてくる。

「誰なんですか、次の――皇帝は」

「お前がよく知る男だ。……年齢も、程良からう」

なんと、返したらいいのか――。フェイリットは呆然としたまま、バスクス帝の闇色の瞳を見上げた。



連なる民家から、朝餉を煮炊きする煙がゆらゆらのぼっていく。灰色の煙が薄まっていて、空の紫と混じりあう様を見ながら、オフデ侯爵ルクゾールは目を細めた。

「客人？」

背後に立つ小姓は、無言のまま頷いたようだった。返事は返さず、ただ深い溜め息をこぼす。

「お通しなさい」

バツス城の窓はサグエ(帝都)のそれより厚く小さい。しかし民家を見下ろすよう建てられた高台の城の上層からは、民家の先々に広がる砂漠すら遥かに眺めることができた。

人が二人、ちょうど顔を並べて外の風景を見晴らせるくらいの窓からは、美しい色合いの空が広がっている。うす紫の空と、それに染まった土壁の民家、黄砂の大地がひく一直線の地平線。切り取られた空にはだんだんと夜の色が戻りつつある。朱い太陽が融けていく。

「オフデ侯爵閣下」

ゆっくりと息を吐いて、ルクゾールは振り返る。若々しい声には、聞き覚えがあった。棘がいくつも刺さっているような、誰ぞ切りたくてそわそわしているような声だ。振り返ったその先に、思ったとおりの人物を見つけてルクゾールは片眉を引き上げた。

「どうも」

焦茶の織り糸で編み込まれた絨毯の上に膝をつく、一人の青年が礼をとる。軍人でも許される、片手を膝に、もう一方の手を床について頭を下げる座礼だ。ごく一般的な軍衣とターバンを纏う、下級兵士。だがその纏っている軍衣の色が、ただの兵士ではないことを窺わせていた。

「黒と紫……マムルーク。やはりな」

マムルーク・シャルベージャ＝ザラナバル……バスクス帝が引き連れてきた少数の供の中に、この顔を見たのは気のせいではなかった。

マムルーク、と呼ばれて顔を上げた青年は、三角形に区切られた白目の中の、琥珀色の瞳をゆっくりと細める。彼ではない者がやったなら、笑顔にも見える目の動きであっただろう。しかしその鋭すぎる目では、睨まれているような印象しか相手に与えない。

「俺は有名人ですか？」

あざ笑うような口元で、シャルベージャは言った。

「マムルーク騎馬隊小隊長・シャルベージャ殿です。どうしても侯爵閣下にお会いしたいと……お止めしたのですが」

シャルベージャが言い切る言葉につなげて、ヒラが弁明するように続けた。

改めてシャルベージャを見やり、ルクゾールはただ頷いた。ターバンに隠れて見えないが、その中には白髪に近い銀髪が押し込められているのだろう。――かれが砂漠の魔物と呼ばれる、タインであるならばだ。

この男が、近衛軍の頂点に立つサプリズ大佐をも凌駕するといわれる青年。奴隷ゆえマムルークという枠から抜け出せず、その実力さえ帝国内には認識されていない。しかし五年前の地方衝突を、少数部隊を指揮し、たった半日で鎮圧したマムルークがいることは、誰しもの脳裏に残っ

ている。それがシャルベージャ＝ザラナバルという名を持つ男だという詳細が、語られることがないのがマムルークという団体の性なのだ。常にひとつの固体として見られる。それが奴隷というもの。マムルークも、ハレムに囲われるジャーリヤも然り。

「私は君を、皇帝陛下の遣いと考えればいいかね。それとも、」

「いえ、ギョズデジャーリヤ・タブラ＝ラサよりの礼を伝えに」

「そうか」

皇帝の暗殺に使おうとした野性のタインは、失敗に終わった。砂漠で捕らえるのは難儀したというのに、あっさり死んだと聞いたときには心臓が跳ねた。だがまさか、皇帝側にもタインが居るとは誰が予想できただろうか。

本来ならば砂漠の街道沿いに配してあったはずのタインは、拘束を解いて逃げ出したらしい。それが彼らを襲った。よもや、王がいることを察し、自ら向かっていったのだろう。ただ「逃げた」と思い込み、その先に本物の皇帝がいることを疑わなかった暗殺部隊の怠慢だ。

「……閣下、俺は何も言いませんよ。バツソスがまさかタインを飼って、皇帝を狙ってるなんて陛下も思っていないでしょうしねえ」

飄々と言いのけるが、言葉どおりでないことはわかっている。要するに、彼が今言ったことは、すべてバスクス帝が承知なのだ。そしてギョズデジャーリヤの遣いで来たと言ったなら、その彼女も承知ということになる。

「何が望みなのだ」

自分を喰うかもしれぬ化け物を、側に置くバスクス帝の気がしれない。ルクゾールは洗面をつくりそうになるのを寸で堪え、深い溜め息をつく。

「そうそう、ギョズデジャーリヤからの感謝をお伝えに来たんです。わざわざ御殿医を派遣して頂いたそうで。有難うございました」

立ち上がり、今度は正式な軍礼をとる。いかにもやる気がなさそうに見えるのは、仕方が無いこととした。

「……当然の配慮をしたまでとっております、とお伝え願おうか」

「はい。そのように」

「謁見の準備が整い次第、玉座の間にお越し頂けるようホスフォネット公より言伝てされている。私から報せようと思っていたが」

「陛下は今ギョズデジャーリヤとご寝所に。俺がお伝えしときましょう」

ルクゾールはしばらく沈黙した後、「お願いする」と首を縦に振った。……次から次へと女を変えると聞いていたが、バスクス帝はそのタブラ＝ラサとかいうジャーリヤに、案外熱を上げているのだろうか。城へついたとき、負傷したままのジャーリヤを、見向きもしなかった姿が思い出される。

「では要件が済みましたので」

再びやる気のなさそうな、しかし確りと規則に則った礼を残して、シャルベージャは去っていった。それをじっと見つめながら、ルクゾールは髭の生えはじめた顎に手元をやる。

「……ヒラ、陛下にお聞きしろ」

「はい」

「美酒を用意する必要はあるかと」

ヒラはふと命令を考えるように首を傾げるが、わかったのだろう。ゆっくりと頷いて室を出て行った。

――毒を盛る必要はあるか。即効性のない、じわじわと彼の命を蝕む毒の用意を。

帝城に戻りその玉座に身を戻したときが、彼の死に時になるだろう。

\* \* \* \* \*

目前に座した皇帝を見て、ホスフォネトは息を呑んだ。

木偶の坊、女狂い、無能……人々は彼に対し、様々の噂をかき立てる。事実女の噂は少年時代より絶えることがなかったし、その当時まみえた彼は、どちらかといえば女が好みそうな優しげな面立ちをしていた記憶もあった。第一皇子と婚約が決まっていた宰相家の姫君を奪い取ったと言われるほど、情熱的な一面もあったのだ。

しかし牢獄ギスエルダンより釈放され出てきた彼を、以来ホスフォネトは見えていなかった。元老院は事実上、バスクス二世の即位より以前にすでに凍結されていたのだ。盛大とは言えなかった即位式にも、それ以後一度だけ行われた生誕祭にも、ホスフォネトが出席することはなかった。だが、この目の前にいる男は一体どうしてしまったのか。八年ほども前の面影が、全くといって見られない。厳しげな眉の間には浅くはない皺が、吊り上るように鋭い黒の目は、こちらをじっと観察して隙がなかった。対峙した者を、まるで狙われた獲物のような気分させる目だ。そこには“優しげ”という言葉はあてはまらない。なんと鋭く、暗く変わってしまったことだろう。

「八年ぶり……ですか」

玉座にはバスクス帝、そしてその隣に黒のヴェールですっぽりと覆われたジャーリヤが控えている。両者の顔を見上げるように、ホスフォネトは目を動かした。

「変わったか」

ふっと皮肉げに口元を緩めて、皇帝は笑った。ホスフォネトは息をついて首を振り、目線を床へともってくる。

「世辞はいい、わかっているつもりだ」

肘掛から手を伸ばして、顎を乗せる。その仕草を見やりながら、ホスフォネトは口を開いた。「まずはこちらの不備でお出迎えに失礼がありましたこと、お詫び申し上げます。陛下、宵の宴がわりに、用意致したものがございます。どうぞお召しあがりくださいますよう」

厳かに頭を下げて、ホスフォネトは言った。ふと上げた顔を、ゆっくりとルクゾールのほうへ向ける。合図を受けて、ルクゾールは酒と料理を運ばせるよう動いていった。

「宴か……久しぶりだな」

目を細めて、目前に並べられていく料理に皇帝は口を返す。料理だけではない。彼の気をいくらでも反らせるようにと、踊り子の女たちも手配している。ゆっくりと流れ始めた音楽に合わせて、踊り子たちの足輪につけた鈴の音が、響きはじめた。

「どうぞお楽しみ下さい。ギョズデ・ジャーリヤ披露目の誉を我がバツソスに頂けたこと、感謝致しております」

踊り子のひとりが進み出て、皇帝とジャーリヤの酒椀に酌をしていく。確実に、そしてゆっくりと死へいざなう、毒入りの酒だった。蒸留酒（ワDEM）に花の香りをつけたもので、味が濃い。毒の味など、その濃さに打ち消されて感じることはないだろう。

「薔薇の蒸留酒（ワDEM）でございます」

踊り子が酌を終えて立ち上がったとき、ジャーリヤがその酒をひと口、口に含んだ。わかるはずがない――そう思いながら見ていると、ジャーリヤはもう一度杯に口をつけ、それをすっと膝元に置いた。透明な硝子でできている杯は、中身の減りがひと目でわかる。ジャーリヤの膝元に置かれた彼女の杯から、酒の量は変わらなかった。すなわち、口に含んだ酒を、戻したということになる。

気づかれたか。……なんと敏感な舌を持っていることだろう。

額を汗が流れていくが、平静を装うために拭うことはしなかった。ホスフォネトはじっと、自らの酒に口をつけて待つ。……杯を置いたジャーリヤの手が、そっと皇帝の膝に触れた。

「ほう、なかなか美味なようだな」

膝に触れたジャーリヤの手の警告に、気づかなかったのか。皇帝は一気に杯の中の酒を飲み干すと、踊り子を手招きで呼び寄せる。再び酌をさせて杯を満たし、今度は味わうようにゆっくりと飲み始めた。

「美味しゅうございますか」

「ああ、身体の隅まで行き渡るようだ」

願っても無い感想ではないか。ホスフォネトは満足げに微笑みながら、頷いた。じきに本当に身体の隅まで毒がまわり、徐々にその命を蝕んでいくだろう。踊り子の一人や二人、寝所に送り込むことができれば、酒の量をもっと多く含ませることができる。

踊り子に目を向ける皇帝を、横のジャーリヤがちらりと見やる。毒を飲み続ける彼を心配しているのか、はたまた踊り子だけに向けられたその目に嫉妬しているのか。そのどちらでも、ホスフォネトには関係のないことだった。あられもない衣装を纏う奴隷女たちは、皇帝の寵を願う者ばかりだ。一夜かぎりとして、喜んで相手をしようというもの。この男に抱かれれば、女たちは奴隷の人生から抜け出せるばかりか、下賜で爵つきの夫人にさえ納まることできる。

適当に酌をさせながら談笑する皇帝の姿を見やってから、ホスフォネトはルクゾールに視線を向けた。ルクゾールが目だけで頷く。――うまくいったのだ。あとは滞りなく、皇帝をサグエに送り返すのみ。これで、テナンにも周辺諸国にも睨まれることなく、この謁見を終わらせることができる。

そう思った矢先だった。

ドン、と踊り子から取り上げた酒瓶を床に置き、

「下がれ」

――皇帝がひと言口にする。その厳しい形相に、女たちは潮が引けるようにそろそろと去っていった。何事が起こったのか理解できぬまま、ホスフォネトは啞然と皇帝を見上げる。

「さて、そろそろ本題に入るが。いいか」

「……は、はあ……本題？」

わけのわからぬまま答えると、皇帝は嘲笑で頬を歪ませる。

「もう毒酒も、飲み飽きたのだが。まだ飲ませたくば酌をせよ」

ゆっくりと聴かせるような静かな声で、皇帝は告げた。

……まさか……わかっていて、飲んだというのか——毒だと。

ホスフォネトは壁際に控えているはずのルクゾールへと目を配らせる。彼もまた、自分と同じように呆けた顔をしていた。ルクゾールと視線が合わさったそのとき、皇帝が声を立てて笑うのが聞こえる。

「予に忠誠を誓うならば、今をおいて他に無いぞ」

「……そ、それはどういう」

「ウズルダン・トスカルナは、冷たくなった予の身体から血を抜き、その死因が毒であろうことに必ず気づくはずだ。なればお前たちの失うものは、今よりも大きかろう」

自分の腕が細かく震え始めたことに、ホスフォネトは気づいていた。毒だとわかった上で、バスクス帝は酒を飲み干した。忠誠を誓うなら、解毒剤を、今すぐに飲ませなくてはならない。即効性のない毒ではあるが、確実に死をもたらす強い薬だ。解毒できる時間も、限られている。

「陛下……」

言葉を口から出そうともがくが、一体自分が、なんと言うはずだったのかを思い出すことができなかった。開けた口を一度閉めて、床に目を落としたところで、隣のジャーリヤがほっと肩で息をするのが目に入った。

これ以上のあがきは、きっと自らの首を絞めるだけになるだろう。ホスフォネトはゆっくりと床に両手をつけると、

「——わかりました」

伏礼をとりながら、皇帝に向けて言った。

「バツソス公国ホスフォネト、バスクス二世帝に今生の忠誠を誓います。……ルクゾール、皇帝陛下に解毒薬を」

生かすか殺すか。自らの命を国という天秤の器に乗せて、臣下に量らせるとは……なんということをするのだろう。命を軽んじているようなのに、そこに絶対の自信が見える気がするのは、錯覚か否か。

「感謝する」

バスクス帝は謝辞の言葉を、自らの口ではっきりと告げた。

「感謝ついでにひとつ提案なのだが。現時点でのジャーリヤはすべて下賜。ハレムを縮小し、変わりにギョズデ・ジャーリヤを新たに幾人か設ける予定だ。空いた国費で貴国の兵力・水脈の確保に助力してもいいと思うが。いかがか？ もちろん、バツソスからもギョズデを召そう」

「ギョズデ・ジャーリヤを……わが国から？」

啞然として、ホスフォネトは肩の力を落とした。今まで、あれほど願っても叶わなかった皇帝のギョズデジャーリヤ位が、ぽんと預けられたことに驚いてしまう。

「そうだ。ただ、ギョズデジャーリヤとして送り込んでも、腹が膨らむことはないだろう。保障するのは貴国との繋がりのみだ」

ルクゾールの手から解毒の薬を受け取りながら、バスクス帝は肘掛に手をついた。

「ああ、まずは“これ”を披露目せねばならんな。タブラ＝ラサ、ヴェールを脱いでバツソス公の前へ」

かすかに頷いたかのような仕草をすると、タブラ＝ラサと呼ばれたジャーリヤは、すらりと立ち上がる。玉座からの階段を、ひとつひとつ確かめるように降りてくる、その足の色に息が止まった。……抜けるような白。それはイクパル民族の血が、ひとつも混じってはいないことを悟らせる色だった。すらりと伸びた足が黒のローブから覗くのを見やり、それからその顔へと目を移し、ホスフォネトはゆっくりと口を開ける。

「……あ、貴方は、まさか……」

白い手がヴェールを撥ね退け、夢にまで見たかつての主の姿が現れる。

薄い金の髪は、記憶にあるまま癖のある巻き毛。湖水の色をした瞳は、透明な静けさを湛えている。

「タントルアス王……」

口を開けたまま、ホスフォネトはぼんやりと呟いた。

「ハレムを縮小する……か」

がらりとした玉座を見上げて、ホスフォネトは呟いた。

解毒薬の入った瓶を手中に転がしながら、ルクゾールが返す。

「――皇帝の手つきのジャーリヤともなれば、それだけで血筋に勝る荣誉。金を支払ってでも、ジャーリヤを貰い受けたいと名乗り出る貴族が山のように現れるでしょうな」

バスクス帝はギョズデ・ジャーリヤを、“新たに”幾人が設けると言った。それは要するに、今までハレムに居たジャーリヤからは選ばないということだ。

「まさかこの為に、陛下は二年ものあいだ子を成そうとしなかったのか」

子を産めば、ジャーリヤは国の母となる。下賜できるのは子を持たぬギョズデ・ジャーリヤまで。そう定められている以上、子を成せばハレムの縮小を果たすことができなくなってしまう。おそらくは、バスクス帝の考えの中に、ジャーリヤが大勢いては“厄介だ”とする何かがあるのだ。

「死ぬ気なのでしょうか」

「古い皇帝は国と心中し、新しい皇帝を立て、新しい帝国の基盤を――か？」

ホスフォネトは小さく笑いながら、しばらく後、深い溜め息を吐き出した。

「そんなことを本当に、考えているとしたなら……」

六百年生きたタントルアス王にさえできなかったことを、たかが二十数年しか生きぬ若造に、できるはずが無かるうに。

――ホスフォネト、この癖毛がおまえのように真っ直ぐだったら、どんなにか良かったらうな。可愛らしいと言ってくれるのは、幼い頃からおまえだけだったよ。

「貴方に忠誠を誓い、気が触れるほどの永い時を……この国の玉座で過ごした。貴方の傭兵として、貴方の愛したあの方の国の行く末を、もう四百年も眺めていることになるのだな」

玉座からのみ見上げることのできる天井は、他からは死角になり知れることは無い。その天井に描かれた、竜を誘う人物のレリーフは、まばゆいほどの金で塗られている。静かな目でそれを見上げ、ホスフォネトは語りかけた。

「貴方には二度と、会うことができないと知っていながら……私は未だ、貴方を待ち続けていたようだ」

貴方を喰らった黄金の竜エレシンスの、心臓を口にしたときから。

「ホスフォネト王」

絨毯を踏みしめる足音が、背後に止まる。ルクゾールが小さく息をつくのを聞きながら、ホスフォネトは振り返った。

「私は水脈の話を進めてきましょう」

「……そうしてくれ」

バスソスを観続けて数百年。それでも自分は王であり、民を潤す責任がある。水に枯渴したこの国にとって、水脈の話は喉から手が出るほど、魅力のある話だった。

\* \* \* \* \*

身体にどっと疲れが積もる。

山にいた頃なら疲れ知らずだと思い込んでいたこの身体でも、やはりああいう場は不慣れなのだろう。

フェイリットは音を立てずに息を吐き出し、前に行くバスクス帝の背中を見つめた。

――ハレムを縮小した財源の一部を、バスソスの兵力補充に。彼の告げた決断は、フェイリットを啞然とさせた。ハレムを縮小するのだと聞いていたが、それはあくまで次代の皇帝のためだけだと思っていた。

帝都サグエは、単独ではとても脆い。だから隣国の傭兵団を皇帝直属の軍に組み入れる。そうしてはじめてまともな軍隊が成るのだった。確かに、百人以上いる彼のジャーリヤを賄う費用は、並大抵ではないだろう。だからこそそれを削れば、明らかな“浮き”が生まれる。兵力さえ補充できるほどの。

するすると部屋が過ぎていく。何となく目の前の背中を追ってはいるが、自分の部屋はもうそろそろ通り過ぎることに、フェイリットは気づいていた。

「毒だって、わかってたんですか」

足を止めて、バスクス帝の背中から目を離して呟いた。きつい香りで騙したつもりだろうが、酒に毒が入っていることなどひと口でわかった。慌てて吐き出して彼に飲まぬよう合図したつもりだったというのに。

「ああいう賭けをしないために、わたしを使うんじゃないんですか？」

バスソス公王がひと言「断る」と言っていたなら、今ごろ彼は、こうして自らの足で歩いていなかったかもしれない。フェイリットは自分の手の平に浮かぶひと筋の赤い線が消えていくのを、じっと眺める。いざとなったら、自分の血を解毒に使うつもりだった。爪に裂かれて滲んだ血は、ゆっくりと身体の中に戻っていく。確信はないが、何もないよりはましだと思っていた。

「タブラ＝ラサ」

深みのある低い声が、ゆっくりと近づいてくる。フェイリットは振り返らずに、肩で息を吐き出した。どんな毒かは知らないが、血まみれになって死んでいく人の姿を、もう見たくは無い。

肩にかけられた手が、無理やりフェイリットを振り向かせる。

「なん……?! わわわわ!!」

肩を掴まれたまま壁際に追い立てられ、背中がタペストリにどん、と付く。

「痛い! ……っ?」

覆いかぶさる影に身体を仰け反らせて、フェイリットは目を見開いた。顔を隠していたヴェールを剥がされ、バスクス帝の唇が、無理やり口をこじ開けていく。



「んぐ、」

くちづけとともに何かの液体が喉を落ちていった。驚きのまま、フェイリット暴れようと手を振り上げる。バスクス帝の胸板に叩きつけたところで、覆いかぶさっていた彼の身体がすっと離れていく。

「いきなりなにすんですか……げほっぐはっ」

壁に手をつき激しくむせ込んでいると、横でバスクス帝が笑っているではないか。良心で毒入りの酒を教えたことに、後悔すら感じてくる。あれだけ気前よく飲まれたのでは、誰だって心配しようというもの。フェイリットは呼吸を正すように、ゆっくりと息をついて顔を上げた。

「解毒薬だ。お前もあの毒を口に入れていただろう」

腕を前で組んで、バスクス帝は口元を歪めて笑う。フェイリットは口元を手の甲でごしごし拭いながら、バスクス帝を睨み上げた。

「入れましたが、吐き出しましたよ！ 陛下みたいにかぶがぶ飲んでないです！！ それに解毒薬なら、なんで手で渡してくれないんですか！？」

解毒薬だからお前も飲め、とひと言つけて、手渡してくれれば事は簡単だ。バスクス帝は面白がるように目を細めた。

「なぜだろうな」

……まただ。また、柔らかい笑みが浮かんでいる。

フェイリットははっと目を開いて、バスクス帝から視線を外した。思わず見つめそうになってしまう。

「そっ！ そんなので納得できないですからね！」

「タブラ＝ラサ」

「なんですか！」

バスクス帝が近づいてくる。悲鳴を上げそうになって、フェイリットは息をつまらせた。――瞬間、ゆっくりと抱きしめられる。逃れようと思えば逃れられるほどの、動作で。

「私は“皇帝”という肩書きを被せた、道具でしかない」

「どういう……」

抱きしめられたまま頭のうしろをぽん、と押さえられる。

「私を心配する必要は無い、ということだ。あそこで死ぬつもりはなかった。お前が毒入りであることを、教えてくれねばな」

「え、」

離れていく温かさに、ほんの少しだけ寂しさを感じてしまう。フェイリットはバスクス帝を見上げて、目を瞬いた。

「わたしが？」

だとすれば、気づいていたということだ。彼の膝に触れ、「毒だ」と警告した合図に。

見上げたバスクス帝は、ただ口元を歪めて笑っただけだった。

「ああ、そうだ」

突然思い出したように口を開いたバスクス帝に、フェイリットは首を傾げる。闇色の瞳をすっ

と向けてよこしながら、彼は続けた。

「暇か」

フェイリットは言葉の意味を理解しようと、しばらくぼんやり考えてみる。

「――……え!？」

「……暇かと聞いたんだが」

「暇って、暇、暇ですけど……暇だったような気はしますが……どうしたんですか？」

特別に、何もすることはない。部屋に戻ったら、取りあえずジルヤンタータに事の顛末を説明して、あとは成り行きだと考えていた。変装して城下町にまで出られたら、そこで夕食を食べるのもいい。そのあとゆっくりと眠って……だがそんなことは、忙しさには数えられないだろう。暇であるような気はする。

「砂漠へ出るが。ついて来ないか」

「は……」

「ウズから聞いていた。お前は地図上の水脈がわかるそうだな？ それを実際の地理に当て示すことができるか」

フェイリットは小さく息をのんだ。

「水……アルマ山脈からの地下水ですか？」

「そうだ。オフデ侯爵ルクゾールが、水脈の確保を急ぎたいようだな」

「や、やります！」

意気込んで答えたフェイリットの顔をじっと見つめて、バスクス帝は目を細めた。

「なぜ嬉しそうな顔をする」

「えっ、それは……嬉しそうですか？ わたし。ええと、ここは水脈が豊富だし、……そうですね、ハレムの縮小で回せる財源があるなら、水の確保ができますね」

苦笑するように笑って、バスクス帝は再び背中を見せた。

立ち止まったまま彼が歩き去るのをしばらく眺めていると、「どうした、来い」と歩きながら呼ばれる。――来いとは、そのまま外に行くという意味でいいのだろうか。どうにも足の方向が、彼の寝室に向いているような気がしてならないのだが。

小走りにその背を追いかけていくと、ほんの一瞬、バスクス帝がこちらを向いて止まる。フェイリットは何事かとその顔を見上げてから、いつの間にか自分たちが横並びに歩いていることに気がついた。見上げたバスクス帝の横顔は、いつも通りの鋭さで代わり映えがなかったが、

「ありがとうございます」

そう言うと、闇色の瞳がほんのわずかだけ、柔らかく細まったような気がした。

窓掛けの隙間から差し込む光を見つめながら、コンツェは欠伸をもらす。青い空にかかる薄い灰色の雲が、ちらちらと雪を飛ばしていた。

「……楽しいのですか？ 雪、さっきからずっと見ているわ。そのわりに欠伸ばかり」

椅子に座ったままぼんやりと窓の外を見ていると、隣に人影が並ぶ。ふわりと流れる花のような香りに、コンツェは小さく笑む。

「香なんか、つけるようになったのか」

横を向いて妹の顔を見やると、シアゼリタは思ったとおり、むくれたような表情をする。今日は薄い桃色のドレスを着けていた。

「わたくしだって、女ですわ。香くらいつけます」

「そうか、例の男だな」

以前シアゼリタの部屋を訪れたときに、入れ違いになった男——たしかメルトロローの丞相で、イグルコ・ダイアヒンとかいうやつだ。テナンの公女欲しさに、丞相自ら求婚しに出向くとは、たいそうなお国柄だった。もっとも向こうはイクパルと違い、国王がしっかりと政務を執っているはずだ。少々の穴は埋められるのだろう。

「えっ！？ コンツ兄さま、知って……」

一気に顔を赤くするシアゼリタを見やって、コンツェは微笑んだ。この様子なら、単なる政略結婚にはならないだろうと。妹の幸せを願う兄としては、やはり婚姻相手には愛されてほしいと思う。どうりで、最近見る間に女らしくなっていくわけだ。

「なんか複雑だな……もう結婚も決まったのか？」

「婚約、の段階だそうですわ。結婚は、メルトロローに渡ってからなのですって」

シアゼリタはそう言うと、窓掛けに頬を寄せてじっと外に目を向けた。横顔に寂しそうな影を見つけて、コンツェは息をつく。いくら女らしくなったとはいえ、まだまだ十四の少女なのだ。メルトロローに行くともなれば、母のように慕っていた婦人たちとも別れねばならないだろう。独身ならばともかく、家庭も子どももいる既婚者なのだから。

「あの……、コンツ兄さま」

「ん？」

「わたくしね、あの……言おうと思ってたの。ずっと。でも、なかなか言えなくて」

「……結婚のことか？」

「そう、コンツ兄さまごめんなさい。直接言えなくて……人から聞いて、ご不快だったでしょ？」

不安げにこちらを見るシアゼリタを、コンツェは驚いたような表情でまじまじと見つめる。

「それは、まあ……寂しいな、とは思ったよ」

「お手紙であんなことを書いたのに、結局人づてになってしまいましたわ。色々な方が候補に挙がっていたのですが、やっぱりメルトロローの方になって。こんなの、本土に知れたら裏切り者扱いされてしまうでしょう。兄さまのお立場も悪くなってしまうかも……それに、」

さっと言葉を区切って、シアゼリタは泣きそうな顔を俯ける。

「それに？」

優しく聞き返すと、ゆっくりと顔を上げ、その茶色の瞳からぼろぼろと涙をこぼし始めた。

「それに、わたくしのせいでコンツ兄さま、王太子にさせてしまうかも」

頬を流れる透明な雫を指先でぬぐってやりながら、コンツエは首を横に振った。

「俺は王太子にはならないよ。もし……もしなるとしても、それはシアゼリタのせいじゃない。俺自身の決断だから、一一気に病むな」

「でも兄さま、本土に好きな方がいらっしゃるのでしょ？」

「え？」

「だから本土に固執なさるのじゃなくて？」

今度驚くのはコンツエのほうだった。そんな話、一度も口に出したことはなかったはずなのに。

「それは……」

「ねえ、教えてくれてもいいはずですよ。わたくしだって、言ったのですから」

泣いていたはずの顔が、一気に楽しそうに赤らんでいく。女の子はこういう話が好きなのだった、と思い返してから、コンツエは困ったように頭に手をやった。

「ええと、元気なやつだよ」

「……元気？」

「元気だ」

「元気なのね」

「ああ、」

「……そんな。ほら、他にになにかあるでしょ、どんな顔してるとか。それだけじゃないはずだよ」

急かすようにトントンと小さく跳ねるシアゼリタの顔を、困って見つめる。男ばかりの中にいて、こういう話には慣れていない。意中の女の子の話を、突き詰めて話し込むことがない。町ですれ違ったとか、そういう話は別として。

「髪は……薄い金で、目は湖みたいに薄い水色だ。初めて会ったときは雪みたいに白かったけど、最近ちょっと焼けてきたかな。顔は……」

そこまで言ったところで、部屋の扉が三度鳴る。二人で扉のほうに目を向けて、入り来た人物の顔を見つめた。

「そう、ちょうどあんな……」

「アシュケナシムさま！！」

嬉しそうな声を上げるシアゼリタを、ぎょっとして見やる。はたと気づいて扉に目を戻すと、噴水で会った男が立っているではないか。

フェイリットに瓜二つの顔を指して、“あんな感じの”と言ってしまいそうになったことにコンツエは眉をひそめた。

「ああ、こんにちは。シアゼリタ姫」

ゆっくりと首を傾げてから胸に手をあて、アシュケナシムはメルトローク式の礼をした。何だかフェイリットに比べて、おっとりとした印象だ。所作がゆっくりとして、優雅といえば優雅だが。言い表すなら、フェイリットは澁刺としている。

こんにちは、とドレスを広げて膝を折っている妹を、まじまじと見つめてコンツェは口を開いた。

「知り合い？」

「ええ、仲良くしてくださってるわ。メルトロークの王子さまよ、知らないの？」

「王子ってほどでも、ないんだけどね。改めてご挨拶に伺ったよ、エトワルト公子。そうそう、姫のお焼きになった菓子、とても美味しかった」

「お口に合いましたか？　うれしい！」

カツカツと足音を立てて、部屋の中に入り来る。ふわりとした真っ白な上衣に、身体に張り付くような黒のズボンは、革のブーツに膝まで隠されている。たしか向こうの国で乗馬をするとき、こういう服を着るのだったか。そんなことを思いながら、コンツェは歩いてくる男の顔を見やっ

った。「噴水では失礼したね。名乗った途端、さっさと行かれてしまったものだから、気分を損ねてしまったかと」

「いや、……こっちこそ」

フェイリットの“弟”だと名乗った――それも双子だという。アルマ山脈の中腹で、瀕死の状態であぐらをかいて倒れていた少女が、メルトローク王国の王女であるはずがない。それに彼女は、王女らしさとは全く無縁の性格をしているし、ひょっとすると女らしささえ欠けているのだ。他人の空似と片付けたほうが、よほど現実味のある話だった。姉が世話になっている、と笑った彼女そっくりの顔を、コンツェはそのまま見ていることができなかつたのだ。伝えずにこちらに持ち帰った言葉を、後悔しはじめている。いっそのこと、伝えていればよかった。そうすれば、敵かもしれないなどと、思わなかつたらうに。

「コンツェ兄さま、せっかくだからわたくしのお菓子をだしますわ。三人でお茶しましょうよ。ね、アシュケナシムさまも、いいでしょう？」

笑顔で聞くシアゼリタに、アシュケナシムは微笑んで頷く。

「もちろん、喜んで。貴女がいるだけで華やぐ」

「そんな、華やくだなんて、アシュケナシムさまの方がずっとずっとお綺麗なのに……って、ごめんなさい、男の方に綺麗だなんて」

「いいや、いいんだよ。勇ましいとか猛々しいとか、僕も言われたことはないからね。男らしい、とか言われたほうが、お世辞だと思ってしまう。貴女は優しいな、イグルコがうらやましいよ」

「そんな」

顔を赤らめてくすくす笑うシアゼリタを、複雑な顔で眺める。彼女は奥の部屋に置いていた菓子を、すぐさま飛ぶようにして持ち帰ってきた。その手に乗せられた大きな白い皿には、メルトロークのものと思われる柔らかそうな菓子が飾られている。チェックチェロよりも甘そうな匂いが

した。

「コンツ兄さま、このお菓子、チョコレートケーキですわ。兄さまも食べられるように、ちょっとだけ苦く焼いたの。ティリ・ヤローシテ婦人にお茶を用意していただきますね」

「ああ、フィティエンティは……」

円卓の上に手際よく四つ並べて、シアゼリタは去っていく。この様子だと、婦人も数に入っているのだろう。楽しそうな妹の背中を見つめて、コンツェは苦笑した。

「まったく……」

「可愛い妹さんだね」

いつの間にか横に並ぶ形になったアシュケナシシムを、ちらりと見やる。彼の顔は彼女が消えた扉のほうを向いて、苦笑の表情を浮かべていた。まるで自分の妹を見て、仕様がないうつだな、と微笑むような。

「側にいて、いつも他愛もない話をして、たまに喧嘩するって、……素敵なことじゃないかな」

一瞬だけ眉をひそめて、寂しそうな顔をつくる。

何を考えているのか、わかってしまった自分にコンツェは少しだけ驚きを感じた。まだ、本当に彼が“彼女”の双子の兄だとわかったわけではないのに。

「“彼女”の本当の名前、サディアナ・シフィーシュっていうんだ。知ってた？」

「……え？」

「メルトローの十三番目の王女。生まれたときは、すごく騒がれたのさ。今となっては、王室になかなか表れない懐かしい色を持っていたから」

「色？」

「薄い金と、湖のように透明な水色。君がさっき言っていた、好きな人と同じだね」

コンツェは呆然として、口を開ける。

「立ち聞きしてたわけじゃないよ、聞こえてしまったんだ。……英雄の再来と言われたけど、長く続かなかった。ある人が、彼女を攫ってしまったんだ。王は怒ってその人を捜し出し、その人の目を抉りとった。裏切りを許すまいと、殺そうともしたらしいね。……けれどその人の必死さに、とうとう折れて赦したんだ。彼女が16歳になったら、メルトローに戻って約束をさせてさ。そうして攫われた王女は、空っぽの王城の塔に、病気で籠もり続けることになった」

「……サディアナ・シフィーシュ」

「そう。君が知ってる僕に似た人は、王城では育たなかった。山奥で、普通の人と同じように育てられたんだ。わかるだろう？」

扉のほうを向いていた顔が、すつとこちらを向く。思っていたよりも真剣なまなざしをしていることに、困惑してしまった。

「なぜ、」

「理由はさっき言った通りだよ。16歳になって、いよいよメルトローに還るというときに、サディアナは逃げ出した。家出したんだ。……それから先は、君のほう詳しいと思うけれど」

コンツェは、ゆっくりと息を吐いた。

では……そうか、彼女がたまに話す言葉は、……メルトロー語。考えてみれば、すぐにでも

わかったはずだ。その機会が、自分にはいくらでもあった。容姿、言語、テナンについてからアロヴァイネン伯爵に会って、言葉に感じた違和感。今までずっと、ただ自分が認めたくなくて否定していただけだ。

「こっちにおいでよ。こっちにすれば、サディアナは君のものだ」

わずかに低いところから、はにかむようにアシュケナシムが笑う。こんな笑い方は反則だ。この笑い方は――フェイリットの笑顔そのものだった。

「……俺は、」

「お待ちいたしましたわ！」

扉を叩きもせずに関放ったシアゼリタが、背後に侍女である婦人を伴い入室してくる。

「シアゼリタ……」

「お話の花が咲いているところ、申し訳ありません。ハネア・トルシ婦人の美味しいお茶ですわ」

にっこりと笑って、シアゼリタはハネア・トルシ婦人と茶器を並べ始める。ぼんやりと眺めていると、アシュケナシムが不思議そうに首を傾げた。

「ティリ・ヤローシテ婦人は？」

「あら、わたくしのお茶も美味しいんですよ、アシュケナシム王子。フィティエンティは“私用”ですわ」

ハネア・トルシ婦人が緑の目をずっと細めて、コンツェに寄こす。

「ご一緒だったなら言うてくださればもっと早くにお茶をご用意致しましたのよ」

「いや、俺は……」

茶器を並べ終え、シアゼリタがばつの悪そうな顔をする。

「お兄さまのばか！」

コンツェは溜め息を吐きながら、手近な椅子を引いて座った。隣に座ったアシュケナシムが、ふっと笑う。

「やるねえ。ああ、考えてみるといいよ。君は馬鹿ではなさそうだから、きっといい決断をすると願ってる」

シアゼリタと婦人が背中を向けている隙をついて、耳元で囁く。そのまま微笑んで、「美味しそうだね、いただいていいかな？」と聞くアシュケナシムを横目で睨むようにして、コンツェはわずかに頷いて応えた。

\* \* \* \* \*

――この夕陽は朱すぎて、まるで泣いてるみたいだな。

なあフェイリット、聞こえるか？

お前が目を覚まさないで、俺は“ここ”に来た意味がないよ。

眠ったまま弱っていくお前を、見たくなんかなかった。

起きているお前に言うことも出来ないくらい、たくさんの人を殺したけれど。



砂漠の夕陽は、大地をも朱く染め上げた。連なるアルマの山脈が、ゆっくりと太陽を飲み込んでいく。太陽を奪われると、大地はとたんに暗くなってしまう。朱く照らされていたはずの砂の地面がほんの一瞬で黒く変わっていくのを、フェイリットはほんやりと佇んで眺めていた。

「ジルヤンタータ……」

後ろで駱駝に葎をつけているだろうジルヤンタータに、振り返ることなく言葉をかける。返事はないが、彼女のことからこちらを見てくれたはずだった。

フェイリットは夕陽を見ながら、

「あれ、怖いと思う？」

ふと、そんなことを口にする。

「綺麗だと思いますが」

「うん、綺麗。そうだよねえ……」

逆光のせいで、暗闇に染まった砂の大地。そして、赤い赤い空。じきにそれが桃色になり、紫になり、夜の色になっていく。

あれを恐ろしいと感じた日々が、なんだか不思議でならなかった。山で見る夕陽とこの地上で見る夕陽に、違いなどあるのだろうか。いつかはあそこへ還る——そう思い見続けてきたメルトロ王国は、今や広大に横へ伸びるアルマ山脈の彼方だ。

「ずっと恐かったんだ、夕陽。なぜかわからないけど、焼かれそうで。まだ空も飛んだことがなくて、お前は竜だって言われても実感わかなかったせいもあるけど……それでもね、夕陽の中を飛んだら熱くて熱くてたまらないだろうなって、考えてた」

まるで業火のような。緑の葉が生い茂る、梢のすき間から見上げるはじまりと終わりの空は、いつでも恐ろしい色をしていた。雲も、山も、緑も鳥も、自分たちも、すべてが業火に飲み込まれ焼き尽くされてしまう……そう感じていたのだ。

「空を飛ぶ貴女を、わたくしは見ましたよ」

フェイリットは夕陽に向けていた顔を、ゆっくりと地面に落とした。そしてそのまま振り返り、ジルヤンタータの漆黒の瞳を見つめなおす。

「あれは貴女が最初に竜へと変化した日だったのでしょ。あの時は朝でしたが、空は朝焼けで綺麗な橙色あなたをしていたのを覚えております。アルマ山脈の一手からまるで空へ吸い込まれるように飛び出した竜は、その朝焼けの日差しを浴びて、黄金の色に輝いていたのでございますよ。本当に……見たことがないほど、竜とはうつくしいものだと感じました」

微笑むようにして、彼女の目はゆっくりと細まった。アバヤとヴェールをしっかりと着けていて目元だけしか見えないが、今ならジルヤンタータの表情が柔らかいものだとわかる。

フェイリットはつられるようにして微笑みながら、肩を竦めた。

「でも体中に毛が生えるって、あんまり嬉しくないよ」

「そうでございますか？ 無いよりはいいかと思いますが」

「つるつるの竜……それはそれで日の光も反射しそうだね」

山の小川に棲む山椒魚が頭に浮かんで、フェイリットは顔をしかめる。つるつるだが、いくらなんでもあんなのが空を飛んでいたら恐ろしいはずだ。見る間に顔を嚙めていくフェイリットを見かねてか、ジルヤンタータは声を立てて笑いはじめた。

「同じようなことを、リエダ様が仰っていたのを思い出しました」

「え、お母さんが？」

「ええ。彼女は結局、一度も竜に変化することなく生涯を閉じましたが。いつだったか竜の話をしていて、“蜥蜴みたいだったら気が沈むなあ”と」

フェイリットは眉を潜めて、ジルヤンタータを見つめた。

「あながち嘘じゃないかも。毛が生えた蜥蜴……ってというか蛇ってというか。足はついてるけど」

自分で言っていて、これはどう考えてもジルヤンタータの言う通りの、「うつくしい」ものではないような気がしてくる。畏怖や尊敬や、恐怖の目で見られることはあるにせよ、竜が美しいだなんて、そう言えば聞いたことがなかった。

「わたし、どうなるのかな」

ぼんやりとフェイリットが言うと、ジルヤンタータはゆっくりと首を傾げた。そして口元を覆っていた布を外して、にっこりと笑う。

「どう選択しようと、貴女の人生なのですから。わたくしはそれに、最後までついて参りますよ」

母のように人間として死ぬことを選ぶか、竜として伝説のエレシンスのように、だれかの側で生きつづけるのか。けれどジルヤンタータの言葉を一瞬だけ考えてから、フェイリットは驚いたような顔で笑って彼女を見つめた。

「なんか、プロポーズされたみたい」

リエダ……母に、恩があるとジルヤンタータは言っていた。彼女と出会って救われたから、その子どもであるフェイリットに、こうして娘のように接してくれているのだ。けれどそれに、甘えてはいけないのだと思う。

「プロポーズ、でございますか」

「うん。ありがとう、ジル」

微笑んで、フェイリットは手に持っていた地図をさっと広げた。みんなに幸せになって欲しいだなんて、偉そうなことは言えない。けれど、自分のせいで戦争が起きて、それでみんなが不幸になるのだけは絶対に駄目だ。

地図は片腕の長さほどもある動物の皮に、このイクパル全土を描き記したものだ。水脈を見つけるために砂漠へ出て、そろそろ半日近くにもなる。フェイリットは目線をアルマ山脈から下方のヤンエ砂漠へ何度も走らせたあとで、遙かむこうでオフデ侯爵と話しているバスクス帝を眺めた。

「それにしても……あんなに自分で動く人だったんだ、陛下って」

地下水をくみ上げて、城下の町へどのようにして巡らせるか。そんな話を延々と話しているようだ。バスクス帝といえば、宰相の下で小姓をしても滅多に姿を見かけず、小姓仲間からも無能だと罵られ、事実皇帝らしいことは何もしていなかった人のはずなのに。

砂漠に取り囲まれたバツスが自力で水を確保できるようにと、自ら地質を調べに砂漠に出る皇帝の背中を、フェイリットは複雑な目で見つめていた。

……本当は、ああいう人なのだろう。イクパル皇族の帝位争いには、フェイリットは詳しくは無い。けれどいつだったか聞いたことがあった。バスクス二世は、末の第四皇子だったのだと。帝位にはほど遠いはずの彼が皇帝となり、ウズルダンとともに悪帝を演じ切り、解きようも無く複雑に絡み合った過去の何かを自分ごと葬ろうとしているならば、……それはなんだか哀しい。「あの方も、色々と背負い込んでいる様子。いいように丸めこまれないよう、存分にお気をつけくださいませ」

彼を見ていることに気づいたジルヤンタータが、釘を刺すように強い口調で言った。フェイリットは困ったように笑いながら、地図へと視線を戻す。自分の役目はどこに水脈が走り、どこから汲み出すべきなのかを示すだけだから、もうほとんどすることが無いといい。けれどなぜだか、フェイリットにはそのままバスクス帝の背中を見つめていることができなかった。

「大丈夫だよ。わたしだって“その他大勢”のジャーリヤなもの」

それも寝屋に侍るジャーリヤではなく、政治的に利用するための形式的なジャーリヤなのだ。フェイリットはほんの少し、地図から顔を上げてジルヤンタータに笑顔を向けた。利用されたくないからとアルマ山を飛び出し、メルトロウから逃げたけれど、今は違う。自分を利用することで誰かが救われるなら、それでいいと思える。

いつの間にかすっかり夜の色になった山あいを眺めながら、囁くようにフェイリットは続けた。

「夕陽は恐くなくなった。けど、ときどき思い出すの。サミュンの真っ赤な部屋」

ともに過ごし、笑いあったり、ときどき怒られて泣きながら囲んだ食卓の下に、力なく横たわる血まみれのサミュエルが。腹を裂き、腕を切り、それでも死ねずに喉を掻いた彼の無残な死が、ずっとずっと離れない。彼を想って泣きたいのに、ぽっかり空いた穴からは、涙も何もこぼれなかった。寂しいのに、泣くことができない。彼の死を認めることができないのだ。

もう決して逢うことはできないと、わかっているのに。

「フェイリット」

「でもね、陛下はきっと、わたしよりも辛いものを見てる気がするよ」

椅子でばかり眠る彼を思い出し、フェイリットは表情を曇らせて言った。

夢見が悪いのだと言って、苦い顔で晒っていた。真っ青な顔をして天蓋から出てきたのは、血を吸われ倒れたバスクス帝を、寝台に寝かせていたからではなかったか。深い眠りのあとに見る悪夢を、彼はずっと恐れていたのだ。目覚めた後、胃の中のものをすべて吐き出してしまうほどの。

「――ギスエルダン牢獄」

「え……？」

「バスクス二世陛下はそこで、五年を生きたと聞いております。強靱な意志を持った兵でさえ、狂い、自ら死を選んでしまうような地獄の檻です」

ジルヤンタータの静かな言葉に、フェイリットはその目をバスクス帝へと戻した。話し合いが

終わったのか、歩いてこちらへ向かってくる二つの影が見える。

「おや、まさかとは思いましたが、ギョズデジャーリヤでしたか？」

「あ、はいっ！」

近づいたオフデ侯爵が、驚いたように口を開く。無理も無かった。フェイリットの姿は、バスクス公王に謁見したときと全く違うものだ。肌は黒く塗り、髪も黒く、おまけに衣装は小姓衣を着ている。さきほどまでは太陽の眩しさを避けるために、すっぽりとローブを頭まで被っていたのだから、気づかずとも不思議ではなかった。この格好で気づかれたほうが、驚きだ。

「今日は驚かせていただいた。まさか貴女のような少女に、このような知識があるとは」

地図を受け取り眺めながら、オフデ侯爵はしみじみと言った。フェイリットは照れるように笑って「ありがとうございます」と応える。

「……しかし、なぜ小姓の格好など？」

「それは面ど……ぶげほ！」

面倒くさいから、と答えようとしたフェイリットを遮るように、バスクス帝の手がローブを被せてくる。いつの間にか中に入り込んでいた砂埃を一気にかぶって、フェイリットは大きくむせた。

「正体を隠すためだ。帝都の連中に、メルトロウの王女をギョズデに据えたと流していないのでな。本人は気に入ってやっているようだが」

言い終わるやバスクス帝は、自らのターバンを顔に巻きはじめ。日が暮れたとはいえ、未だ時おり吹く砂まじりの風は止んでいない。フェイリットは頭にかぶせられたローブの端を掴みながら、彼を見上げていた。

「……どうした。駱駝に乗れ」

「あ、はい。えっとその前に、灌漑なんです。話しておきたいことがあって」

「なんでしょうな」

すでに駱駝の上に乗っていたオフデ侯爵は、首を傾げてフェイリットに目を移す。フェイリットはその視線を受けて、ゆっくりと話し始めた。

「問題が一つ。干ばつ地では地下水を汲み上げて地表に流せば、そこに僅かな塩が混じりやすいんです。雨量が豊富な土地では、その塩は雨で薄められるんですが、ここは雨が降らない。水を汲み上げて町に流すまでは容易……いえ、長い時間がかかるので容易だとは言えませんが、可能なことではあると思います。ただそれが、先を見越せるものなのかが心配です。百年、二百年を考えて、イクパルが塩だらけの不毛の土地になってしまっは、元も子もないですから」

オフデ侯爵がはあ、と関心したような声をもらした。

「では、水に含まれる塩の量を調べますかな。そこから塩を濾過し、地表の土壌や作物に刺激の少ない水になる方法を探し出すことに」

「はい、そうしてからのほうがいいと思います。ですが濾過の方法を見つけても、それを都市に流すとなると大きな設備が必要になる。そういう財源は今、この国には首の締まる思いがするはず……」

そっと、バスクス帝を見上げると、彼も彼で眉間に皺を寄せ何かを考えるように砂地を見やっ

ている。

「――ハレムを縮小しても、すぐに金の回りが良くなることはないだろう。使える財源は兵力の備蓄や、当面の民の生活へ回してもらう方が得策だ。貴殿らの傭兵の力を借りたいこちらとしてはな」

バスクス帝が低い声で言い、オフデ侯爵がそれに渋々といったふうに頷く。

「……確かにそうでしょうな。今この国に上水道を築こうと声を上げて、狂気とみなされる方が強い。“今よりもっといい暮らしを”と考える民は、“今のまま平穏な暮らしを”と考える民より少ないものです。バスクス二世陛下に忠誠を誓いはしたが、傭兵の助力について、我々はまだ渋るところがあるのは言い逃れできません。兵を出したいのは山々だが、後ろのイリアス公国がどう出るかわからぬ以上、むやみに動けば……」

確かに、もしイリアス公国が賛同してくれなければ、バツソスは後ろ背を無防備に敵に晒すことにもなりかねない。フェイリットは小さな息を吐いて、アルマ山脈へ目を向けた。

「オフデ侯爵閣下。今日歩いてみて、アルマ山の地下を流れる水脈のありかは、ほとんど掴むことができました。時間と試行錯誤を加えればこれは、必ずやバツソスの……いえ、イクパル全土の利水に繋がるはずです。手前勝手だとはわかってますし、わたしがこんなことを言っただけで、ご不快に感じられるかもしれませんが……」

そこで一度言葉を区切り、フェイリットはバスクス帝を見やる。この先を言うことは、バスクス帝にも不快を与えるかもしれないと。けれどまるで促すように、ふっと彼は小さな笑みを浮かべて見せた。

「――然るべき時が来たら必ずや、わたしが全力でお力添えします。ですからどうか、今は兵力を潤すことを第一に考えてはいかがですか」

――私と死にたいのか。

冗談のように問うバスクス帝の表情が、脳裏に浮かんだ。然るべき時とは、……きっと彼が死んだあとになる。なぜだかそんな考えが、頭に張り付いてはなれなかった。返事をしたわけではないのに。それに彼が死のうとしていることに、納得したわけでもない。……なのにまるで、“さようなら”と告げてしまったような気持ちになって、フェイリットはそっと俯いた。バスクス帝は今、どんな顔をしているのだろう。

「頼んだぞ」

けれど次の瞬間、頭上に降りた囁くような言葉を聞いて、とうとうフェイリットは顔を上げることが出来なくなった。

彼が操る駱駝の背に乗ってからも、何だか言葉が出てこない。フェイリットは広い背中に掴まりながら、そっと額を、その彼の背中につけて目を閉じる。

「陛下……あの、」

「何だ」

「おまじない、いりませんか？ もしよかったらなんですけど、……あ、でもあれ、わたしの血をつかうものだし、気持ち悪かったらその……」

彼の背中が、小さく上下する。おかしげに笑う声を聞いて、フェイリットはようやく顔を顰

めた。

「わたしは真剣です！」

「わかっている。ならば寝所に来い、寝ずに待っていてやろう」

「あ……はいっ、行きます！」

夢見が悪いと言ったとき、彼の背中に施したおまじない。おまじないというよりも、血を塗ってその背に残る傷跡が痛むのを、和らげる薬のようなものだ。それで彼がゆっくりと休めるならば、毎日でも血を流そう。

フェイリットは額を離してその背を見上げながら、はにかむようにして笑った。

駱駝から眺める夜空には、いつのまにか真っ白な月が浮かんでいる。

遊びだと思っていた。

何度も駒を動かして、こういう陣形ではこう、こう来たらこう考える、深追いはしない。そういった一々の戦略を教えてもらいながら。

楽しくて、どうでもいい話をして笑った。久しぶりに遊んでもらっているのだと、感じていたのに。

これが、まさか彼の戦い方だとは――彼が軍を動かす特性や癖やその対処法を、彼自身が遊戯の盤に解説しているのだと、どうして気づけただろう。

この頃は考えることもできなかった。彼が“選べ”と言った、その幅の広さを。

彼を討ち負かす為の伏線を、この頭に叩き込まれたことを。

\* \* \* \* \*

「せっかくですのでご一緒のお部屋をお使いになってはいかがですか」

オフデ侯爵のひと言に、フェイリットは目を丸くして口を開けた。

「……は」

砂漠での水脈探査から帰り、ひとまずジルヤンタータの元へと歩き始めたその背中を、彼に呼び止められたのだった。バスクス帝は他に用事があるようで、バツソス城に着いてすぐにどこかへ行ってしまっている。

「あの、」

「こういう水入らずの機会は、今後なかなか無いかと思いたがな」

オフデ侯爵が微笑んで言うのを、啞然とした顔のままフェイリットは見上げていた。部屋までは遠いし、当分この話題を続けることになりそうだ。<sup>ギョズデ・ジャーリヤ</sup> 妾妃として披露目されたとはいえず、フェイリットにとってこれはただの「偽装」にしかすぎない。

「……わたしは」

「ご遠慮なさいますな。後宮という概念は、メルトロ一人である貴女には理解しがたいものでございましょう」

歩きながら、問いかけるようにオフデ侯爵が呟いた。

「よく、わかりません。……その、わたしのこと、ご存知かと」

「知っているつもりであります。メルトロ王の十三番目の嫡出子であり、タントルアス王の生き写しと讃えられたサディアナ・シフィーシュ様。我々は過去、タントルアス王の指揮下におっ

たのです。もう随分と昔の……御伽噺よりも遠い過去になりますが。本当に、そっくりだ。あと五年も経てば、最盛期のタントルアス王に瓜二つとなることでしょう」

静かな声で言ってから、オフデ侯爵は優しげに微笑んだ。その口ぶりは、まるでタントルアス本人を見知っているかのようだ。千年も前に王に就き、六百年を生きた彼の時代が終わって、もう何百年も経つ。そんな昔の人のことを、その目を見たように「瓜二つだ」と言うなんて。

「性別が違います。あと五年もすればわたしは……。今はその、ちょっと女っぽくないかもしれないですけど」

タントルアスは男。そしてメルトロー国王は、男性君主と定められている。五年経てば、フェイリットは二十一歳になる。寿命を迎えずにそこまで生きていられたとすれば、もう少し、出るところは出て引っ込むところは引っ込んで、女らしくなれているはず。確かにタントルアスはどちらにももてそうな中性的な顔をしていて、綺麗だけれど、自分とはまったく違う。そもそも自分は、単にこの瞳や肌や髪の色合いが認められて十三番目の号をもらったのだ。

「そうですね」

頷いて、オフデ侯爵は苦笑した。どうしてそんなに残念そうな顔で微笑むのか。フェイリットは首を傾げて彼を見やる。

「似てるって、よく言われます。けれどわたしは、その人を実際見たわけではないですし、見たとしても、そこまで双子のようには……」

そこまで言ってから、ふとバスクス帝の部屋でタントルアスの肖像画を見たことを思い出す。鏡を見ているようだと感じた気がするの、目をつむることにした。なにより性別が違うのだから。

「ええ、承知しております。貴女は貴女だ。まったく混同して、貴女という存在を否定しているわけではないので、どうか気を悪くしないでいただきたいのですが」

「いえあの、怒っているとか、そういうのでは……。ごめんなさい」

さっと頭を下げて、フェイリットは自らの足元を見つめた。裸足ではないが、足先が見える簡素な靴を履いている。メルトローのような、足を包み込む靴ではない。

イクパルに来て着るものから食べるものまで、今までの生活ががらりと変わった。なにより、イクパル語が中心になった。この文化に戸惑わなかったといえは嘘になるが、けれどオフデ侯爵が問うほどの、反発はなかったように感じる。

「ここで言う <sup>ジャーリヤ</sup> 愛妾 って、公的なものなんですよ。こそこそと愛人をつくっているメルトローの貴族たちより、よほどいいと思います」

笑って、フェイリットは付け加えた。オフデ侯爵は困ったように、肩を竦めて見せる。

「貴女には嫉妬は無縁なのですか」

「嫉妬……？」

「バスクス二世陛下が、他のジャーリヤと過ごしていても、気にはならないのですかな？」

「はあ……」

驚いたように、フェイリットは目を瞬かせる。

「はっはっは。答えに窮するようでは、貴女の気持ちはまだまだなのではないかな。……ひとつ、



教えてあげましょう。タントルアス王は、幼い頃よりおてんばで、馬をあちこち乗り回し、怪我をしては御殿医に叱られているような方でしたよ。ジャーリヤに納まろうとせず、小姓衣を着て外に飛び出すどなたかと、そっくりではございませんかな？」

にっこりと笑ってオフデ侯爵は足を止めた。横を歩いていたフェイリットもつられて止まるが、彼が笑顔のまま目線で示した先を見て、固まってしまった。

「どうぞ。バスクス陛下のお部屋ですぞ」

バスクス帝の室を目の前にして、フェイリットはオフデ侯爵を見上げる。まさか本当にここまで連れてこられるとは、思っていなかったのだ。

「似ているということは、一見して悪いことではありません。自分と同じような考え方をする人を知ることで、その人を参考にもできるし、またその人の踏んだ誤りを、わが身の枷にできる。少なくとも、私はそう思っております。貴女はとても複雑な事情をお持ちのようですからな。よければいつでも、お話しください」

確かに、似ていると言われ続けて、そこに本当の自分が置き去りにになっている錯覚が、ずっと嫌だったのだ。フェイリットという中身があることを、人はわかってはくれない。サディアナ王女という分厚い殻を被って、その外側だけを、タントルアスの化身という誉れだけを、人々が見ている寂しさ。けれどそれはオフデ侯爵の言うとおりに、受け止め方ひとつで違うのかもしれない。何より過去の人なのだから、その人を学ぶことは少しも悪いことには感じられない。

微笑むオフデ侯爵に向けて、フェイリットはようやく笑顔を見せることができた。

「バスクス陛下にはお伝えしてありますのでな。それと貴女の侍女には、この近くの部屋に移ってもらうよう言うておきました」

「ありがとうございます。お手間をかけてしまいました」

何がなんだかわからなかったが、結局はこの場で断ることはできないのだろう。

フェイリットは思い直して、素直に頭を下げた。もともと、まじないをするという約束はしてあるのだから、それが済んだら彼に直接伝えればいいだけの話だ。自分は他の部屋で寝る、と。

微笑んだままのオフデ侯爵にもう一度礼をして、フェイリットはバスクス帝の部屋の仕切り幕を静かにくぐった。

.....どうしよう。

室内に入ったはいものの、入り口の仕切り幕を背中に、フェイリットは一步も動くことができなかった。その目でちらりとバスクス帝を見やっ、どうしようかと口を曲げる。彼は寝台の背に身を預けて、何かの書類を読んでいるところだ。挨拶とともに入ったフェイリットに、ほんの一瞬視線をあげたきり、書類に思考が傾いている。

「あの、おまじないを」

ようやく言葉を振り絞るが、バスクス帝は首を左右に振って応える。

「すまないが、まだ寝るつもりはない」

「はい.....」

フェイリットは入り口に立ったまま頷く。

「お前も少し休んだらどうだ。砂漠に出て疲れただろう」

休もうにも一体どこで休めばいいものか、フェイリットは目を瞬かせた。せめて長椅子ぐらいあるだろうと思っていたのに、さすがはイクパル。床の上に直接座る生活様式に、よもや椅子など不毛なようだ。椅子と卓を当然のように使っていたウズが、極めて珍しい人物だったのだとわかる。

綺麗な深紅の柄の絨毯と、寝台。石壁にかけられた何本かの芸術的なタペストリ。この部屋には、実はそれだけしかない。

しばらく考えてから、入り口の脇に腰を降ろして、絨毯の上に座る。膝の上に顎を乗せて、フェイリットは静かに息を吐いた。

こうして身体を落ち着けて、はじめて自分の疲れに気づく。どっしりとした疲労感が、肩の上からローブのように纏わりついているのが感じられた。寝る間際に呼んでもらうことにして、ジルヤンタータの部屋で寝台を貸してもらおうか。そのほうが邪魔にならないだろうし、この疲れもとれるかもしれない。そんなことを考え始めた矢先、

「タブラ＝ラサ」

間の悪いことにバスクス帝の声がとんでくる。

「楽しいことをしよう」

「へ？」

「おいで」

書類を脇に置いて、バスクス帝がこちらを向いた。部屋の隅で丸まっていたことに、気を遣わせてしまったのだろうか。フェイリットは啞然として、“楽しいこと”——それがいったい何なのか、考えた。本当に楽しいことなのか、わかったものではない。普段なら手放しに喜んでいるだろうその言葉も、この男の口から発せられただけでこんなにも胡散臭く思える。

そっと立ち上がり「陛下」の命に従うものの、フェイリットは寝台のそばで足をとめて、バスクス帝の顔を戸惑いつつ見やった。

「これだ、知っているか」

そう言って彼は長方形の盤を差し出す。

この部屋に置いてあったらしいその盤の上には、いくつかの升目があって、升の中に収めるように馬の形や円柱の形の模型が乗せられていた。

一見して、遊具の一種だろうことがわかる。山村の生活を送っていたから、こういう上層の子供がやるような遊具には全く縁がなかったけれど、確かに“楽しそう”だ。

「座れ。そこで突っ立っていても教えてやらんぞ。絨毯の上で、遠慮している必要はない」

遊具ということは……とりあえず子供扱いされているらしい。

フェイリットは安堵して、バスクス帝のいる寝台の縁へそっと腰掛けた。

「セルトだ。駒を進めて自分の領地を獲っていく。教えてやるからやってみるといい」

「セルト……？」

「お前は一国の将軍。駒を上手く動かしながら、自分の陣地を守り、相手を攻めてその陣地を

奪う。まあ、子供でも出来る戦の模擬盤というところか」

そうして升の説明や進め方を逐一聞きながら、バスクス帝とのセルトがはじまった。教えられながら実際に駒を動かしていくと、案外奥が深い。フェイリットは必死になって説明を聞きながら、セルトの盤を見つめていた。

「国にいるのは兵士だけではない。民や商人や盗賊もいる。それらの駒を上手く使って勝つことだ。この小さな方の盤の太陽の駒が、半周すれば夜。もう半周すれば朝がくる」

まるで本当に戦を盤の上で繰り広げるように、さまざまな戦法があった。たとえば、兵を動かさず商人と盗賊だけを動かし、戦をせずに相手の国に勝ってしまうものや、夜の奇襲で一気に攻め取るものまである。

単に子供の遊びというより、大人でも好みそうな遊びかもしれない。

「巧いぞ、お前の勝ちだ」

「ほんとですか!？」

勝ちだ、と言われてフェイリットは素直に喜ぶ。盤にならんだ自らの駒が、バスクス帝の駒を取り囲んでいた。駒は囲むか、取るかで減らしていくのだが、囲めば自分の兵も使えなくなるので、あまり使いすぎるのも良くないようだ。だが、勝ったことに喜びながら、フェイリットはふと気づく。よく考えれば、随分と手加減してくれたに違いない。享受を受けながらの初心者が、いきなり勝てるわけがないだろうに。

――もしかして、勝たせてくれた……？

「嬉しそうだな。気にいったか」

バスクス帝は小さく笑って、盤の上の駒を並び変えている。フェイリットはぼんやりとしていたことに気づいて、バスクス帝を見上げた。

「はい！ おもしろいです、これ」

「じゃあもう一度。今度勝ったら、何でも言うことを聞こう」

「何でも？」

「ああ、今日の働きの褒美だ。欲しいものはあるか」

何でも……褒美……。頭を捻って考えてみるものの、フェイリットにはなかなか欲しいものを思い出すことができなかった。

「ええと、特に思いつかないんですけど……」

額に手をあてて宙を見つめるフェイリットを、呆れたように見やっけてバスクス帝が笑った。

「ならば馬はどうだ」

「馬……？」

「先程オフデ侯爵から、お前の髪と同じ色の駿馬がいるのだと聞いてな。お前にどうかと言われたんだが」

「ええ……！ いいんですか」

「宝石云々より、そのほうが好みだろう」

「はい！」

確かにバスクス帝の言うとおりに、宝石をやると言われても、いまいち嬉しいとは感じられなか

っただろう。寝台の上で一気に目を輝かせるフェイリットを見て、バスクス帝は苦笑する。

「いいだろう。だが私も本気でいくぞ」

二戦目。時間の制限などはないので、じっくり悩んで駒を動かした。そうしてフェイリットは褒美のために、心臓をばくばくさせながら盤に意識を向けていたのだが、

「――私の勝ちだ」

静かに最後の駒を置いて、バスクス帝が言い放つ。

「ええっ」

褒美だと言うから最初の時までとは言わずとも、少しぐらい勝たせてくれる気があると思ったのに。フェイリットはセルトの盤を穴があくほど眺めた後で、バスクス帝の顔をじっと見つめた。

「も、もう一回……」

「よく見ていたか？」

静かな声で言って、バスクス帝が駒を戻し始める。

「気の向くままに駒を動かしては、私には勝てない。今負けた原因はなんだと思う」

「原因……？ ええと、陛下の城を攻めるとき、わたしが全部の兵を移動させたから……ですか？ 陛下の兵は一見少ないように見えたけれど、実はもともと分散させてあったんですよね。で、わたしが兵を動かして空っぽになった陣地を、陛下はその分散させていた兵を使って攻め落としました」

フェイリットが盤を見ながらセルトの局面を思い起こしていくのを、バスクス帝は満足げに頷いて聞いていた。

盤上には、バスクス帝側の陣地を取り囲むフェイリットの全兵の駒と、フェイリット側の陣地に完全に“入り込んだ”バスクス帝の一部の兵の駒が並んでいる。囲んだから勝ちだと思っていたが、よくよく見れば自分の陣地が侵されていたとは。自分の行っていることばかりに集中してしまい、全体を把握することができなかったのだ。フェイリットは顔をしかめて、兵の駒を摘み上げる。

「陛下……あの、わたし今さっき教えてもらったばかりなんですけど」

素人相手にここまで本気でやられたのでは、彼の言うとおりに夜が明けたって無理だ。それでも駒の並べ方は覚えたので、次のためにフェイリットは黙々と並べはじめる。

「そうか？ お前ならできると思ったんだが。確かに、要領はよくないな」

からかうように言うその顔を見やっ、フェイリットは複雑な顔をする。

率直に褒められたわけではないのに、なんだか気恥ずかしい。きっと昼間の水脈探しが後を引いているのに違いなかった。砂漠を歩いて水脈を見るのは、地図上で思い描くよりも実は簡単なのだ。乾燥した地では、水の匂いをとても敏感に感じられる。その上に足を乗せるだけで、“ああ、この下に匂うな”とわかってしまう。それを説明すると、人間ではないことがばれるから黙っているのであって。

地形や地図の見方ならひととおりにサミュンから聞いているが、実際に地図と地形を符号させて見られるほど、熟練してはいない。

—お前ならできる。

まったくの買いかぶりだったけれど、それがまるで信頼されているような言葉に思えて、フェイリットは笑ってしまった。

なんだか楽しい。こういう風に遊ぶのは、いったいいつぶりだろうか。

サミュンが遊んでくれたのは五歳に満たぬ頃合までだったし、稽古に身を入れるようになってからは、おつかいくらいでしか村の友人に会うことがなかった。

考えてみれば、まともに遊んだことなんて、もう何年もなかったといえる。

フェイリットは寝台の上にぽんと乗上げると、盤を覗き込むようにしてバスクス帝の前に座った。彼はというと、いたって楽そうな体勢で寝そべり、片手に頭を乗せて、もう片方の手だけをこちらに伸べて駒を持っている。その余裕が、いっそうフェイリットを勝負の中へと駆り立てていく。先ほどまで感じていた疲れも、一気にふっとんでしまったようだ。

「なんか悔しいんで、夜明けまでにはぜったい勝ちます！」

「……寝られるよう手を抜いてやろうか」

「それはだめですからね！ もう本気でびしっと、やっちゃってください」

かん、と音を立ててフェイリットが最初の駒を動かすと、バスクス帝は愉しげにこちらを見やっった後、喉奥で声をたてて笑った。

「ならばお前も褒美を賭けろ」

「え！ なんですですか！」

「セルトは本来、何かを賭け合うものだ。なにせ国を取り合うのだからな。夜明けまで勝てなければ、賭けは私の勝ち。一勝でもしたならお前の勝ちを認めよう」

「ええと……」

「そもそも私は、人には滅多に教えないんだぞ。それだけでも褒美を貰って然る」

褒美、と言われてフェイリットは眉根を寄せた。財産のようなものは何もないから、何かを賭けろと言われてたら無形のものになるのは避けられない。だが、ここでしっかりとフェイリットが考えなければ、彼のことだ、“褒美にお前の身体をよこせ”などと言い出しかねない。というより確実に言う。

フェイリットは考える間もなく、

「じゃあ肩揉みします」

即座にそう言い放った。

「それは……公平な褒美だな。私が馬で、お前が肩揉みか」

明らかに皮肉ととれる言い方で、バスクス帝は片方の眉を上げる。確かに、ものの大きさは違いすぎる。賭けの褒美が肩揉みだなんて、今どきの子供より考えが足りない。フェイリットは小さく息をついて、バスクス帝を見上げた。

「……だめですか」

じっと見ていると、バスクス帝は肩をさっと竦めて笑った。

はっと気づくと、身体が寝台の上に寝ていた。フェイリットは目だけを開けて、ぼんやりとそこに映るものを眺める。

寝転んだ身体の前にセルトの盤が置かれ、その向こうに、バスクス帝の身体があった。うつ伏せに寝ていて、顔があちらを向いている。どんな顔をしているかはわからなかったが、ぐっすり眠っているのか身じろぎ一つしていない。

うなされている様子もみられなかった。

仕切りのように置かれた盤には、駒が途中まで並べてある。たぶんフェイリットの番で、駒を持ったまま、考えるうちに寝入ってしまったのだろう。起こされたような記憶がないということは、バスクス帝は盤の向こう側で、眠りこけたフェイリットをずっと眺めていたのか。

彼の右手だけが、盤の位置を通り過ぎ、フェイリットの顔の前に置かれていた。ちょうど、鼻に触れるか触れないかという位置で、その指先はフェイリットの巻き毛を一房だけ絡め取っている。

フェイリットはそこまでしてようやく、目の前の大きな手を見つめた。

「……わあ」

大きい。片手だけでは、彼の手をすっぽりと覆うことはできないだろうな。そんなことを考えながら、フェイリットはそっと身体を起こした。無理をするように伸ばされた右手を、彼の身体の横に戻そう。

そうしてなるべく静かにやったつもりだったのに、次の瞬間には、持ち上げたバスクス帝の手がフェイリットの手のひらを掴んでいた。

「ひ！」

フェイリットは突然のことに驚いて、悲鳴ともつかぬ声を上げる。

「……もう少し愛らしい声をたてられんのか」

呆れたような、面白がるような、どっちつかずな声だった。どちらにせよ驚かされたのには違いないが、掴んだ手を離して、のそりと彼が起き上がる。

「あの、すみません……寝てしまいました。おまじないもできなくて」

そもそもは、まじないのためにこの室を訪れたはずだ。フェイリットは寝覚めでぼんやりする頭を支えるように、片手を額に押し当てた。

「いや」

はっと気づいたように眉を寄せると、バスクス帝は短く答えた。何かを考えるようにセルトの盤に目を落としている。けれど何故だか、その考えの内容がセルトでないことだけはわかった。

しばらくして盤から目を上げると、

「賭けは私の勝ちだな」

そう言って皮肉げな顔で笑みを作り、バスクス帝は寝台から足を降ろして立ち上がった。

「あ、どこへ……」

「浴場だ<sup>ハクハ</sup>が。一緒に入りたいか」

「い、いえ、遠慮します」

「そうか？」

喉奥でくつくつと笑った後、彼はそのまま室を出ていった。

「め……珍しい」

フェイリットは寝台の上でしばらく考えて首を傾げる。何もされなかったなんて。これを珍しいと言わずにいられるだろうか。

まったくの無防備な状態だったというのに、彼の体はセルトの向こうにあって、手は髪だけに触れていたのだ。寝ている自分をじっと見つめて、髪を撫でているバスクス帝なんて——なんだかうす気味悪いではないか。考えてしまってから、それを吐き出すようにフェイリットは深い息をつく。

頬が熱い気がするの、気のせいにしておいた。

「大丈夫でございますか」

フェイリットが埋もれるようにして寝台にうつ伏せると、ジルヤンタータが心配そうに声をあげる。

「だいじょうぶ……」

フェイリットにとって、奇妙な毎日が五日ほども続いていた。

セルトの教示を每晚バスクス帝から受けて、日が昇る頃に彼の隣に眠り、すぐに起きて砂漠に出る。砂漠ではオフデ侯爵と水脈についての話や調査をして、昼すぎに城へ戻り、そのあとには書庫で地質についての過去の記載を夕方までさがすのだ。

部屋、それもジルヤンタータの部屋に戻ってくるのは、夕方に近くなってからだった。一日に、三時間も寝ない日は何日も続くのは、つらい。

「さぞお疲れでしょうに」

「うん、眠い……」

「今日はセルトをお休みになってはいかがですか。最近ずっとではございませんか。これでは身体を悪く致します」

ジルヤンタータは寝台のわきを通り過ぎて、部屋の端にある衣装箱をなにやら漁りはじめたところだ。顔をそちらへ向けてじっと見つめていると、彼女と目が合った。

「ジル、なにしてるの？」

「……聞いてらっしゃらないのですか？」

フェイリットが首を傾げると、不思議そうな顔でジルヤンタータも首を傾げた。何を聞いたというのだろう。彼女が衣装箱を漁る何かがあったということは。

「失礼致します」

考えようと寝台に顔を埋もらせたところに、入り口の幕が開く音が鳴る。ジルヤンタータの部屋の幕には、捲り上げたときに可愛らしい音のする、小さな鈴がいくつか縫い付けられている。ちゃりちゃり、という音に顔を上げて、ジルヤンタータが対応する背中を見つける。

「バスクス二世陛下よりの言伝てをお預かりしてきました」

入り口に立っていたのは、年若い女性だった。だいたい、アンと同じくらいか少し下の。侍女というには少し不自然だ。侍女はハレムにしか仕えないものだし、バツソス城のハレムは南側一王宮から少し離れている。水脈を調査しに砂漠に出ると、ちょうど見上げられる位置にあるのがバツソス城のハレムだった。

ジルヤンタータも不思議に思っているのか、「何か問題が？」などと聞いている。入り口の女性は柔らかく笑ったあとで、首を横に振った。

「陛下より“今晚は用事があるので、セルトはできない”と、言い付かってまいりました。ギョズデジャーリヤ・タブラ＝ラサにお伝え致します」

名乗ることもしないまま、彼女は礼ののち去っていく。名乗らないのは、名乗る身分にないということ。では、やはり侍女なのだ。フェイリットは彼女の緑色のヴェールが、ひらひらしなが



ら遠ざかるのをずっと見ていた。

「ハレムの……？」

ハレムの侍女なのだろうか。

眩きが聞こえたのか、フェイリットの声にジルヤンタータが振り返る。彼女の手には持たれた幕が、ぱさりと元に戻された。

「たぶんそうでしょうね。お陰でゆっくり休むことができそうですよ、フェイリット。あの皇帝は、そろそろ大人しくしていられなくなったのでしょうか。バツス公は老齢ですから、ハレムには娘や孫が暮らしているはず。気に入りを見つけたのかもしれませんがね」

呆れたように肩を竦めて、ジルヤンタータは衣装箱に向き直る。けっきょく、どうして衣装箱なんか開けているのか、聞きそびれてしまった。今さら聞こうにも、しつこいようで気がひける

。

フェイリットは起こしていた身体を、ぽんと寝台に押し付けた。押し付けたのは背中だったけれど、弾みをつけすぎて、なんだか胸や腹のほうを押されているみたいだ。

「<sup>ハمام</sup>浴場にでも行ってみましょうか。お供しますよ」

……要するに、“女を抱くので来るな”ということ。

「ああ、そっか」

セルトで遊んでいたフェイリットは、その“女”という範疇に入らないのだ。思えば、以前に比べて触れられなくなった気がする。起きればいつも彼の手が顔の近くに転がっているけれど、それだけだ。

セルトをして、そのまま寝て、起きる。「そろそろ寝ようか」というのではなく、いつの間にか眠っている。

——楽しみになってたのにな……セルト。

ぼんやりと天蓋の裾を目で辿りながら、ふと横を見ると、ジルヤンタータがこちらを見つめたまま、何かを言いたそうにしているのに気づく。

「え？」

フェイリットは慌てたようにして、目を瞬かせた。そういえば、何か言っていたような気もする。……聞き流してしまった。

「<sup>ハمام</sup>浴場にでも参りましょうか？ と聞いたのです。こちらのハمامは変わっていますよ。お湯を沸かすのではなく、石を熱して水をかけ、蒸気をつくっているのです」

「へえ、おもしろい。そうすれば水が少なくてすむものね」

バツスに入って、フェイリットはまだ<sup>ハمام</sup>浴場を使ったことがなかった。ジルヤンタータがいつも盥にお湯を入れてくれるので、それに浸かって身を清めていたのだ。それに、身体を黒く染めなければならないことも理由にあがる。

「蒸気が行き渡るように小さな造りにはなっていますが、同じくらい汗をかきます。香油を塗ってさしあげましょう。砂漠で乾燥したお肌が、つるつるになりますよ。それに血行もよくなって、ぐっすり眠れますから」

「行こうかな」

そう言って微笑むと、フェイリットは起き上がって寝台を降りる。

「あー……最近体中が痛い。ずっと稽古もさぼりまくってたからかな。鈍ってきてるみたい。ちょっと砂漠を歩き回っただけで、こうだし」

潰れたような声を出して呻きながら、身体を伸ばして腕を振っていると、ジルヤンタータが顰め面で見ってくる。彼女の言いたいことは、なんとなく予想がついた。

「フェイリット、なんならわたくしがお相手しますよ」

「相手？」

「そうです、剣のお相手です」

衣装箱をようやく閉めて、ジルヤンタータは深々と頷いた。一日に三時間しか寝られないのに、剣稽古の時間など入れてしまったら、それこそ身体が持たないのではないだろうか。フェイリットは困ったように笑って、首を振った。

「やりたいけど、無……い、ててて」

「フェイリット?!」

床に膝をついて、口に手をあてた。……なんだろう、これは。

気持ち悪い。ぐっとこみ上げたものを手のひらに吐いて、フェイリットはうめいた。

嗚咽が、……とまらない。胸が焼ける。息ができない。

「あれ、おか、しいな」

血だ。

そう呟いて、フェイリットは黙り込む。真っ赤な染みが、うす茶に近い色の絨毯を染めていく。

「フェイリット……！」

かかる声にそっと目を上げて、ジルヤンタータを確認する。思ったとおり、彼女は唾然としていた。信じられない、という顔で。

気が遠くなりそうなのをこらえて、フェイリットはジルヤンタータに向けて微笑む。安心して、と言おうとして口を開けるが、出てきたのは言葉ではなかった。

こらえきれずもう一度吐き出すと、手から漏れ出た赤いものが、ぼたぼた床に落ちていく。

「ごふっ……、」

「だめです！」

ひくつくような声が聞こえて、気づけばジルヤンタータが泣いていた。

彼女のような強い人でも、泣くんだ――ぼんやりと思いながら、フェイリットは息をつく。吐いたのは多くないが、頭がくらくらと回っていた。取り乱しそうなジルヤンタータを安心させたいけれど、すぐに立ち上がることは、ちょっとできそうもない。

「だめです、まだ、早すぎる、まだ……」

ジルヤンタータの声は、擦れてしまって、息がうまくできていない。こういう状態の者を見るのは、きっと二度目だろう。だからきっと、最悪のことを予想してしまうのだ。……そんなことを冷静に考えてしまうなんて、自分は薄情者だな。フェイリットは小さく、痛みを堪えるように言った。

「わたしのほうが、食い潰してるんだもの。仕方ない」

食い潰している――命を。その言葉を言わなかったのは、ジルヤンタータをこれ以上泣かせないためだった。母親に比べて、フェイリットは徹底的に訓練を受けている。竜になるために育てられ、知識を植え込まれた。毎日傷だらけになって、サミュンに戦い方を教わったのだ。そして、それはその分だけ、使っているものも大きいということ。

暖炉の火を思い浮かべればいい。くべられる薪の量は決まっている。ただ、強く激しく燃えているだけ。だからあつという間に煤けて、灰になってしまう。

覚悟していたけれど、まさか今それが来るなどとは思ってもしなかった。ここ最近、体調が悪いと感じていたのは、ただの疲れではなかったのか。

フェイリットはようやく立ち上がり、汚れた手を後ろ手に隠して、笑った。

「ほら、もう平気だよ。さ、ハナム行こう！」

崩れ落ちる直前までしていたように、腕を振って見せてみる。ジルヤンタータは顔をしかめて、こちらに歩み寄ってきた。

「平気なはず、ないではありませんか」

「だいじょうぶ。痛いのも、むかむかするのも、もう無いから」

ジルヤンタータの肩に額を乗せて、そっと抱きしめる。手についた血は、もう色を失って乾きはじめていた。彼女の衣装につけてしまわないように、フェイリットは慎重になる。

「ね、行こう。ほら、さっぱりしたいな。この絨毯も、その間にこっそり取り替えてもらわなくちゃ」

床に染み付く血の匂い。やはり思い出すのは、サミュンが横たわる姿だ。ジルヤンタータにとっては、きっと彼女を救ったリエダを思い起こさせる。こういう暗い考えを呼ぶものを、ずっと敷いておくわけにはいかない。

「そうでございますね」

息を吐き出したジルヤンタータの背中を、血がつかないようにそっと撫でた。心配されるのは嬉しいけれど、少し哀しい。――そうか、もしかしたら、自分を抱きしめたときのバスクス帝は、こういう気持ちだったのかもしれない。

――私は“皇帝”という肩書きを被せた、道具でしかない。

だから心配する必要は無い。そう、言っていたのではなかったか。

フェイリットは吐き出すように密かに息をついて、ジルヤンタータから離れた。

「まだ大丈夫。ジルヤンタータ、わたしは何かを終えるまでは、ぜったい死なないよ。――ほら、“主”もまだわかんないのに。やっぱり、メルトロー王なのかなあ。まあ、メルトロー王だったら、それはそれでイクパルを守れるかもしれないね」

うおおおし！ と、わけのわからない声で気合を入れていると、ジルヤンタータが呆れたように笑うのが聞こえる。

「なんて、楽天的な」

「ねえ、行こうよ。ここのハナム見てみたい」

まだもっと、先のことだと思っていた。残りの時間は、あとどれくらいあるのだろうか。あと

どれくらい、足掻くことができるのだろう。持ち堪えてほしい。ちゃんと全てが解決するまでで、構わない。

頷くジルヤンタータを急かすようにして、フェイリットは入り口の幕をくぐった。胸を押し付けるような痛みが、また少しでてきたけれど。

もう血を吐くまでには至らなかった。

\*

女性用の浴場は、<sup>ハمام</sup>バツソス城の南側にあるハレムの一角に据えられていた。

フェイリットはジャーリヤの着るようなひらひらの衣装を脱ぎながら、目だけをきょろきょろと動かす。蛸壺のような天井は帝城と一緒にだが、やはり少し小さい。一番奥の部屋には浴槽がなく、身体を冷まし汗を洗うための水瓶が、いくつも用意されているらしい。

壁は土色の石を組んだもので、さして装飾があるわけではなかった。けれどむっとする熱気が押し寄せて、あっというまに視界を曇らせていくのは、どこも同じだ。

「あつい……基本は変わらないんだね」

敷かれた絨毯に寝そべて、ジルヤンタータを見やる。彼女は小さく頷いて、微笑んだ。

「焼いた石は、水をかけているうちに蒸気を出さなくなってしまうので、火鉢が外に用意されています。奥にいけば、ところどころ四角い窓が開いているのが見えるはずですが」

「その窓から石を入れているの？」

「そうです。このような密室で火を焚くのは、危険ですから。あまり長居はしないことに致しましょう。また気持ちが悪くなるといけません」

そうだね、と呟いて、フェイリットは自分の両腕の上に顎をのせた。ハمامはひさしぶりだが、初めての頃より耐えられる気がする。ジルヤンタータが“あがろう”というまで、少し汗を流してみようと、フェイリットは考えていた。

「――いま、なんとおっしゃって？」

「え、」

ひたひたと足音が聞こえて、驚いて見上げると裸の女が立っていた。<sup>ハمام</sup>浴場だから裸なのは当たり前だったが、フェイリットは思わず慌てる。石を足す侍女以外、誰も居ないと思っていたが、違ったらしい。

「うわっ！」

「うわ、じゃありません。わたくしはヒーハヴァティ・ウィエンラと申します。あなたはギョズデジャーリヤ・タブラ＝ラサですね？」

ごく薄い茶の肌と、腰をすぎる辺りまである赤味を帯びた茶色の髪。はっきりとした目鼻立ちが気の強さを見せているが、それにも増して美人だった。

線が細いのに、体つきは豊満。同じ女として、情けなくなってしまうほどに。じっと見ていると、木の実に似た緑の瞳が、すっと怪訝に細められる。

「何とか言ったらどうですか」

「あ、ごめんなさい。……見惚れてました」

はっと気づいたフェイリットが慌てて言うと、ヒーハヴァティの瞳がさらに細くなっていく。「そういうのは、殿方に言われなくては嬉しいものではありません。あなたは？ タブラ＝ラサなのですよ？」

頷いて、フェイリットは愛想笑う。仁王立ちのままヒーハヴァティは、かくりと横に首を傾けた。疑問とか、不思議を思ったのではないだろう。どこか、癩に触ったような目つきだ。

「気持ち悪いのは、どうしてか教えていただけますか？」

「どうしてか、」

「そうです。わたくしは、その理由を聞く権利があります。妊娠したのではなくて？」

高圧的といってもいいくらい、彼女は声を荒げる。フェイリットは驚いたように口を開けて、首を横に振った。

「にっ、妊娠?!」

それはまさか、自分に対する質問なのだろうか。誰と、何をして、妊……。そこまで考えて、フェイリットは顔を真っ赤にして起き上がる。バスクス帝と“そういうこと”をしていると、思われているのか。やっと理解して、フェイリットはさらに首を振る。

「ちがっ違います。あの、誤解してしまうのも、わからないわけではないんですが。そういうことは何も」

ここ五日、毎晩彼の室で寝ているのだ。こういう話が広まりやすいのは、どの国の城でも同じこと。それが例えただのセルト遊びだとしても、室に入ってしまうえば、何をしているのか外から伺うことはできないのだから。

けれど何故、彼女がそれを聞くのだろう。ふと思いついてフェイリットが見上げると、ヒーハヴァティは挑発するような声をたてて笑った。

「ずっと、朝までご一緒して、何も？ 帝城でもご一緒だったのでしょ？」

フェイリットはつられるようにして、引きつった顔で微笑む。ここに来てからの五日以外、一緒に眠った記憶はない。帝城では、彼はもちろんハレムで眠っていたはずだ。誰か他の、ジャーリヤの寝室で。

「何も。……あの、貴女は」

どうしてそれを聞くんですか。そう尋ねようとするが、どう聞こうにも喧嘩を売っているように感じてしまうだろう。困って小さな息を吐くと、隣のジルヤンタータが咳払いするのが聞こえてきた。

「貴女はどういう方なのですか。ここは、ギョズデジャーリヤのため、特別にお貸しいただいたハママム浴場です。許可は頂いたのですか」

「父に頂いてきました。わたくしは、バツソス公国の二十番目の公女で、バスクス二世陛下のワーヒド・ギョズデジャーリヤ」

「ワーヒド？」

「一番目です。零番目<sup>スフィル</sup>が居るといふから、どんな方かとはらはらしていましたけれど。まだまだ子供ではないの。心配はいりませんでしたね」

そう言って、ヒーハヴァティは見惚れるほど綺麗な顔で微笑む。そうですね、とついつい頷いてしまいそうになって、フェイリットは口元を引き結んだ。

「あの」

「子は儲けぬと聞いていながら陛下のハレムに入るのです。あなたが身籠っていたら、お話になりませんか？ 気になったのはそれだけです。突然おしかけてしまって、失礼しましたわね」

今までのつんつんした言い方はどこへいったのか。やわらかく優しげな声でそう言うと、ヒーハヴァティは踵を返す。

フェイリットはそっと横のジルヤンタータを見やって、その顔に浮かぶ複雑な色に困って息をついた。

「ジル」

彼女の姿がハمامから去っていくのを待って、ジルヤンタータが押し殺した低い声で囁く。

「なぜ言い返さないのですか。あれほどの侮辱を、」

静かに目を細める彼女は、きっと先程の公女よりも恐い顔をしている。フェイリットは仕方なく笑って、立ち上がった。

「え、だって本当のことしか言ってなかったよ」

考えてみれば、確かに頷ける。新しく設けるギョズデ・ジャーリヤは、バスクス帝の御世のためにいるわけではない。次の皇帝が、後ろ盾を得るための布石なのだ。そこまで彼らが知っているのかは定かでないが、彼女の言葉は間違いではなかった。

“子は出来ない、国母にはなれない”と言い聞かされて嫁いでくるのに、ジャーリヤの誰かに子ができたとあっては、確かにいい気分にはならないだろう。

「ですが……」

「あがろう。こんなので怒ってたら、きりが無いよ。ギョズデ・ジャーリヤなんて、これからあと三人も増えるんだし、それに」

それに、自分はバスクス帝の寵を争う舞台にはあがれない。好きな人はと聞かれたら、今だって胸を張って言えるのだ。「サミュンだ」と。

「それに……？」

「彼女たちがバスクス帝に好意を持つのは、悪くないよ。次代皇帝のためだってわかれば、それは悲しむだろうけど……バスクス帝なら、彼女たちが使命感をもてるような言い方、できるんじゃないかな」

フェイリットの言葉を聴いて、ジルヤンタータは驚いたように目を開いた。

「……それは、なんだか陛下を信頼しているように聞こえますが」

フェイリットは衣装を着せてもらいながら、小さく笑った。

「うん。怠惰な人じゃないって、わかっただけかもしれないけど」

ハمامを出ると、外の空気がひんやりと感じられた。

砂漠の夜は冷え込む。今夜は隣に人がいないんだな……ふとそんなことを考えて、フェイリットは息をついた。

なんだか少しだけ、寂しい気がした。

真っ青な高い空は、日照りのきつさで顔を上げるのが辛いほどだった。窓が小さく、やんわりとした光しか入らないバツソス城にずっといる身では、外の日差しはただでさえ眩しい。

ジルヤンタータは頭を覆うアバヤを、額を深く隠すようにして引き寄せ、強面と呼ばれるその顔を少しだけ緩める。

視線の先のフェイリットは、オフデ侯爵と二人、いつものように地図と睨み合っていた。さんさんと降るきつい日差しをものともせず、よく半日近くも砂漠を歩いていられるものだ。

——元気そうに見えるけれど、……あの娘は泣かない子だから。

昨夜に血を吐いたというのに、彼女ときたらまったくの普段通りだった。今朝はジルヤンタータよりも早く起きて、日の出を窓から眺めていたほど。食欲もあったし、苦しげな顔ひとつ見えない。

「あ、ジルヤンタータ」

彼女らの近くに駱駝をとめたのは、もう随分と前のことだ。よほど集中していたのか、フェイリットはさっと振り返ると、まるで今気づいたといわんばかりの驚きを笑顔にのせる。

「おや、もう昼時ですか。まったく、あなたと居ると時間を忘れてしまいますな」

オフデ侯爵が太陽の位置を確認するように空に目を向けて、しみじみと呟いている。フェイリットは照れたように小さく笑って、その手に持っていた地図を丸め始めたところだ。

「お忙しいのに、こんなにたくさん時間を頂いてしまって。いつもありがとうございます」

さっと綺麗に頭を下げるフェイリットの姿は、颯爽としていて、どちらかと言えばどこかの貴族の子息のようにさえ見えた。

「いやいや。城に居るよりも楽しめますからな。羽延ばしにつき合っていると思って下され。——と、ジルヤンタータ殿。タブラ＝ラサをお返ししますよ」

オフデ侯爵の言葉を受けて、ジルヤンタータはイクパル式の礼を返す。

駱駝をまだ操れないフェイリットのために、昼時になるとジルヤンタータが迎えに出ていた。オフデ侯爵の駱駝に乗せてもらうからとフェイリットは言い張るが、曲がりなりにも皇帝の“妾妃”が、他の公国で他の男と近しいと思われては厄介だ。本来ならイクパルは、こうした女性の一人歩きさえ歓迎されない国柄なのに。

「ではタブラ＝ラサ、また明日に」

「はい」

ジルヤンタータの礼を見届けてからフェイリットに挨拶すると、オフデ侯爵は自らの駱駝に跨った。あっという間に、走り去っていく背中を見つめながら、ジルヤンタータはフェイリットにそつと言う。

「お加減はいかがですか」

「……え？ ああ、そうか。大丈夫だよ、心配性だねジルも」

「“も”？」

その言葉尻に気づいて首を傾げる。見上げればもう、彼女は駱駝に飛び乗っているところだ。



「行こう」

少しだけ痛そうに笑った彼女を見て、聞き返さなければよかったかと思う。彼女が想う「心配性な人」――考えずとも、それがサミュエル・ハンスであることはわかる。

ジルヤンタータは頷いて、フェイリットの後ろの鞍へと飛び乗った。

「ね、わたしがたずな引いてもいい？」

「宜しいですが、危ないと思ったらすぐに、」

「だいじょうぶ」

楽しそうに笑いながら、フェイリットは駱駝を進めた。特に教えてもないのに、感覚が鋭いのだろうか。意外と苦もなく駱駝の脚が動いている。

城はここより北にあるから、ちょうどこちら側へ南に位置する建物が顔を向けていることになる。ここから目に映る城は、ハレムだ。小さなオアシスのような人口の泉と、棗の木が囲いのようになっているのが見える。その向こうに円柱の柱が並んでいて、ハレムはその奥だ。バツソス城の本宮と同じく三階建てで、そのそれぞれの面に半円の床のバルコニーが突き出しているのだった。隔絶された生活を送る女たちが、息をつけるために人工のオアシスを造っているのだろう。

ふと気づくと、フェイリットも同じ方角を見ていた。遠くを見据えるような位置に、頭が傾いている。

「……笑った」

小さな声が聞こえてくる。何を観ているのだろうか……。確かめようと伺って、ジルヤンタータはようやく小さな人影を二つ見つけた。ハレムに突き出すバルコニーだ。小指の先ほどしかなく、顔を見分けることはできそうもない。しかしフェイリットの目は、間違いなく何かを捉えている。

駱駝はどんどん城へと近づいた。とうとう人影が見えた三階のバルコニーの真下へ来て、ジルヤンタータはやっと気づく。

「あれは……バスクス二世陛下とヒーハヴァティ・ウィエンラ公女ですか？」

こちらには気づいていない。バルコニーを歩きながら、二人は何かを話しているようだった。ヒーハヴァティは合間なく楽しげに笑い、バスクス帝にぴったりと寄り添っている。バスクス帝はというと、いつもの彼とは想像もつかないほど大らかな雰囲気、公女の話に耳を傾けていた。ギョズデ・ジャーリヤになるというヒーハヴァティの話は、着々と進んでいるように見える。

“笑った”と言ったフェイリットの眩きを、そこで思い出す。

彼女は今、バスクス帝を見ていたのではないのか。

バルコニーの二人をしばらく見ていると、奥に戻るのか、階段のような段差を上りはじめた。一階よりも低い場所のこちら側では、それが本当に階段なのか確かめることは出来ない。だがバスクス帝はその手を公女に差し出し、転ばないように支えているように見えた。

あんな紳士的なことも出来るのか。そう関心しながらフェイリットの背に目線を戻すと、彼女の目はすでに前を見ている。手はたずなをさっと引いて、駱駝を横に向けたところだった。

――分からない。フェイリットは、バスクス帝を好いているのか否か。

ジルヤンタータは苦い表情で、フェイリットの背中あたりを見つめていた。

砂漠でバスクス帝を助けるため、飛び出した彼女を見たときは「まさか」と思った。竜の忠誠心は、恋愛感情にとても近い。そして一概に、雌の竜は男の王を、雄の竜は女の王を選ぶのだと云われている。“サディアナが恋をしたら、相手諸とも殺せ”という命令を、ジルヤンタータがノルティス王から受けていたことも裏付けとなる。

フェイリットが恋をしたら、それはそのまま「主に気づいた」ということになる。ジルヤンタータは少なからずそう思っていた。どういう過程で竜が覚醒し、主を選ぶのか。そういった詳細は、一切伝え聞いていない。それはメルトロローを裏切ってしまった自分には、もはや手に入ることの無い情報だった。

「フェイリット」

静かな声で呼んだつもりが、ついいつもの堅い声になってしまう。自分の声にうんざりしながら、そっと振り返り視線をくれるフェイリットに、ジルヤンタータは微笑んで見せた。

「バスクス帝は、お優しい方ですか？」

「え？」

あからさまに驚いた顔をして、フェイリットは口を開ける。もちろん探りを入れるための質問だったが、唐突過ぎたのだろう。彼女は前を向いてしばらく黙り、不意に駱駝を止めてしまった。

「どうかな……。どうしたの？」

「選べと、言われていたでしょう。彼がもし本当に死ぬ気だとしたなら……。あなたはどうするおつもりなのかと」

死ぬ準備をしている。そう言ったバスクス帝の言葉を、彼女も忘れてはいないはず。彼と、古き無能の皇帝の妃として共に滅びるか、次の皇帝の助けとなるか。

こうして水脈を調査し、灌漑をつくるための計画に加担しているところを見れば、バスクス帝の言う“次の皇帝”を選んだように思えてしまう。地下水を汲み上げて地上に流す工事は、どんなに技術があっても一年や二年では不可能。バスクス帝が玉座にいる間に、日の目をみることはないはずだ。

「目の前で死なれるのは、あまり良い気分じゃないよ」

ゆっくりと、呼吸するようにフェイリットは答えた。

「それは、」

と呟いて、一人の男を思い出す。彼女を育て、そして死んでいったサミュエル・ハンス。さきほどといい、今といい……。彼女は明らかに引きずっている。彼の、死の結末を。

それは凄惨なものだったと聞く。普通なら吐いてしまっても可笑しくはないほど、酷い自害だったと。腕を切り、腹わたを裂き、それでも死ねずに首を切り――部屋の中は、まさに血の海だっただろう。他人が見ても逃げ出したくなるような場面を、肉親として見る心境は、計り知れない。

そんな光景を目にしていながら、同じことをしようとする人間を見過ごせるほど、彼女の心は強くない。

「けどイクパルに水が流れたら、きっとすごく豊かになれるね」

ジルヤンタータが言葉を探している間に、駱駝はまた歩きはじめる。

南側から城沿いに周り、西に面した方に城下の街と大門が現れた。フェイリットはそのまま駱駝を進めて、石造りのアーチをくぐっていった。

「イクパルとメルトローは、生活の質に百年の差があるんでしょ？　ずっと山暮らしだったし、メルトローの都をこの目で見たことはないけど。そんなに違うものなのかな」

思わず頷いてから、ジルヤンタータはやんわりと息を吐き出した。

「それは、……そうですね。確かに、メルトローは豊かです。メルトローの視点から見れば、イクパルが文化的に遅れをとっていると思えても、仕方の無いことかもしれませんが」

決して豊かではないが、餓死者が出るほど飢えてもいない。イクパルに滞在してわかったのは、そのあたりの調節がうまくされているということ。メルトローに居た頃は、イクパルは酷く貧困に苦しんでおり、その日を暮らすにも精一杯だという認識が強かった。餓死者は道端に溢れるほどだ、という噂まで聴いたことがある。しかし、実はそうではなかった。他の国に遅れをみているのは確か。それでもこの国は本当にぎりぎりのところで、民を餓死にまで追いやってはいないのだ。これは間違いなく、上に立ち、政務を執っている者の手腕。

「イクパルの執政は、ウズルダン・トスカルナ宰相によるものなのですか？」

「え、どうして？」

「いえ、単なる好奇心でしかないのですが」

ジルヤンタータの質問に、フェイリットは何故か困ったように首を傾げる。

「ううん、どうなんだろう……」

今度首を傾げたのは、ジルヤンタータの方だった。

話に乗れば、彼女はずっとウズルダン・トスカルナの執務室で寝起きし働いていたはずだ。そうして宰相の執務を補佐して過ごしていたのだから、どちらが本当に政治を取り仕切っていたのかなど、分かっている不思議はないだろうに。

フェイリットはゆっくりと俯くと、

「……一度だけなんだけどね、夜中に目を覚ましたことがあって。いつもはウズさまが座ってるはずの執務机に、陛下が座ってたんだ。座ってたっていうより、眠ってたんだけど」

そう零してジルヤンタータに視線をうつす。

「それは本当に“眠ってた”だけなのでは？」

「そう思うよね。それから徐々に気づいたんだけど、ウズさまは陛下の筆跡を真似るのがすごく巧いの。そういうの気になっちゃって、すごいなあっていつも眺めてたんだけど……気のせいなのかな、陛下の筆跡もウズさまの筆跡も、だんだん半々くらいに思えてきて」

“困った”というのがいかにも分かる声色で、フェイリットは小さく唸った。

まさかそんな話があるのだろうか。政治も軍事も省みず、ハレムにばかり通っていた“暗愚”と呼ばれる皇帝が、実は有能だなどと。

メルトローにいた頃から、バスクス帝の噂は良いものを聞いたことがなかった。皇子時代は女と見ては誑かし、遊んでいるという噂。そして即位してからは、ハレム以外に興味がないような

愚鈍な男として話されている。そんなことでは他国の頭が揃いも揃って、侵略を考えそうなもの。しかしこれまでこの国が無事だったのは、さしたる物流や魅力的な資源が、ほとんど無かったからだ。他国の目が決して向かわないこと。それを分かっている無能な皇帝を演じ続けていたとしたなら、……あの男は本物だ。

「どっちを選ぶのかって、ジルは訊いたけど……わたしが今できることは、こうやって砂漠を歩き回って、どこに水脈があって、どれを引けば安全に灌漑ができるのか。それを調べて残しておくことだと思ってるの。陛下にもね、選べとは言われたけど。あの言い方は“新しい皇帝に付け”って言ってるようなものだった」

彼女とバスクス帝が過ごした5日間を、知らないわけではない。セルトをしながら二人、信じられないくらい楽しそうにしていたのを覚えている。その時間の中で、彼女がバスクス帝に持っていた印象を変えたのであろうことも、わかっていた。

「イクパルには、平和な暮らしが必要。わたしのせいで、攻められるようなことがあったら駄目だよ」

「……フェイリット」

「それに、バツスから地下水脈を引くのは、やってみたいんだ。帝都の井戸の数、知ってる？ すごく少ないの。暮らしている人口に対して、ぜんぜん足りない。バツスののを成功させたら、帝都の井戸だって改善できるかも。そしたら、イクパルはメルトローに負けにくいくらい、水に満ちた国になる」

「それは、素敵ですね」

「でしょう？」

気のせいだと思って、いいのだろうか。嬉しそうに見えるのは外見だけで、小さく震える肩筋が、真実かと感じてしまう。「次の皇帝」とは、おそらくバスクス帝の死後の皇帝のことを指している。彼女が側にいたいと思う人が、バスクス帝でないならいいが――。

ジルヤンタータは小さく首を振って、息をつく。

彼女の頭の中を占めるのは、もしかすると「国を想うこと」ばかりなのかもしれない。いつだって、その興味が向かう先は“国”だ。

「ヒーハヴァティー・ウィエンラ公女は、とても教養に恵まれた方だそうですね。賢く、周囲を見定めることに長けていると。あの方も、よい国を夢見てくださるといいですね」

いつの間にか、城の厩舎に着いていた。駱駝から身を降ろして、地面を見ながらフェイリットが肩を竦めるのを見つける。

「うん。そうだといいよね。でも……本当言うと、ちょっと羨ましかったよ」

フェイリットはぽつりと言ったあとで、仕方ないような顔でふと笑った。

羨ましかった……？ それはヒーハヴァティ公女が、……なのだろうか。その他に彼女が省いた「主語」を、見つけられない。バスクス帝と仲むつまじく、手を取り合う公女の姿が目についた。

「フェイリット」

彼女は吐き出すように息をついて、顔を上に引きあげた。

「うん。わすれていいよ、今の」

その顔は空を見上げたようで、実は違う場所を見上げている。ジルヤンタータはフェイリットを見つめて、開きかけた口を噤んだ。

「ね、わたしがたずな引いてもいい？」

駱駝に取り付けた燈に足をかけるジルヤンタータを見て、フェイリットは尋ねる。彼女は一瞬だけ顔をしかめて、鞍に腰を落ち着けてから、小さな息を吐き出した。

「宜しいですが、危ないと思ったらすぐに……」

「大丈夫」

フェイリットは欠伸を噛み殺しながら、駱駝のたずなを引っ張った。

――昨夜はずっと眠れずに、寝返りばかりうっていた気がする。ジルヤンタータを心配させないよう、早起きのふりをして朝焼けに昇る太陽なんか見ていたけれど、フェイリットにとって朝夕の太陽ほど苦手なものはない。溜まっていた眠気が、今さら出てきたのだろう。

フェイリットは駱駝を進めながらぼんやりと空へ目を移し、ゆっくりと進む雲を眺めた。砂漠には珍しく湿ったような風が流れ、いつもより雲が多くなっている。相変わらず空の青さは突き抜けるようなのに、雲と風だけは雨でも降りそうな色をしていた。

「あれ」

そうして見上げた目線の先にバツソス城を見つけて、フェイリットは呟く。人影を二つ、剥き出しの廊下に確認して、ゆっくりと目を瞬かせた。

こちらから見えるバツソス城は、南側――ハレムがあるはずの区域だ。遠目にも緑が溢れた場所で、棗や椰子の葉が風にそよいで揺れているのがわかる。砂漠から区切るように石壁で囲われているが、こちらのほうが勾配が上のため、よく見通すことができた。緑を眺めるためなのか、ハレムの窓はみな大きくとられ、バルコニーのような形で突き出ている。剥き出しという表現が、ふさわしい造りだった。

円柱が等間隔に並ぶその廊下に見た人影は、バスクス帝と、おそらくヒーハヴァティ・ウィエンラ公女。バスクス帝は上背もあり肌が浅黒いので、遠目からでもよくわかる。珍しくターバンを巻いておらず、黒っぽい長衣の上に濃紫のローブを羽織っていた。

バスクス帝は普通、正装以外でターバンを巻かない。それがバツソス公国に訪問してからというもの、巻くことの方が多くなっていた。お忍びといえど、公式な訪問だからだろう。正装に近い衣装にターバンを併せる彼の姿を、フェイリットはすっかり見慣れていた。しかし今のバスクス帝の、額から梳いて後ろに流した黒髪は短く、項あたりまでしかない。あんな髪型をしていたのだと思ってしまうほど、しばらく見ていなかった。

――くつろいでる……のかな。

イクパル民族がターバンを外すのは、眠るときやハمامに入るときで、他にはよほど親しい者同士でもなければ、人前で髪をさらすことがない。バスクス帝がハレムに通い詰めていることを、実感する。

ずっと見ていると、しきりに何かを話す公女に大らかな顔を向けて、バスクス帝が頷いた。一瞬だけ、その頬が笑みの形になって公女へと向けられる。

「……笑った」

なんだか、見ているのが忍びない。幸せそうなら、それでいいではないか。彼女は名目ともに整った、妾妃（ギョズデジャーリヤ）なのだ。自分が捉われている秘密も制約も、彼女には無い。

喜ばしいことと思うのに、どうしてこんなに、悲しいような寂しいような気分になるのか。段差をのぼる前に手を差し出されて、公女が嬉しそうに首を傾げている。さっと視線を外して、フェイリットは駱駝の首筋をじっと見つめた。こうしていれば、余計なものは目に入らない。見えないように、考えないように。そうしてたずなをしっかりと握り、前に進むことだけに集中する。

ジルヤンタータと幾らか会話したけれど――、頭ではまったく別のことばかり、考えていた。

バツソス城は広い。

帝都のサグエ城ほどではないが、東西南北の区域にしっかりと分かれていて、簡単には乗り越えることができない覗き窓つきの塀を四方に張り巡らせてある。

薄い砂色で統一されたこの城は、砂漠の太陽の極彩色をそのまま、うつくしく照らし出すのだった。朝焼けで橙色、昼は青空に映える白砂の色、そして夕焼けで、なんとも優しいうす紫に染まる。誰がこんな風につくったのかわかるはずもないが、きっとこの城を造った者は、根っから戦争なんて好んではいなかったのだろう。イクパル全土の中で、最古にして堅固な砂漠の要塞。それがバツソス城の真の姿だ。もとは戦うためだった城の、それも外側に、こんなにも美しさを求める必要はないはず。サグエ城のように、他を威圧し畏怖させる、赤い彩色だというならまだしも。

そしてもう一つ違うのは、廊下がほとんど無いということ。部屋は部屋どうしでつながっており、どの部屋も、人ひとりが通れる幅しか取られていない。サグエの城下町と同じで、侵入者を阻み迷わせ、また武器を持った者を痞えさせる。

「でも、こんな場所もあったんだ」

部屋続きで廊下がなく、外を見張らせる回廊もない。そう思っていたが、フェイリットが今いる場所は、腰丈の塀が回してあるだけで、そこから遙か向こうまで、連なる砂漠と青い空を展望できた。昼に見上げたハレムのバルコニーのような場所と、少しだけ似ている。

昼食も食わずにぶらぶらしていたら迷ってしまったというのが本当のところだが、この見晴らせる砂漠のつらなりからいって、こちら側は南の区域に近いことがわかる。見上げて帰ってきた、あのハレムがあるあたりだろう。塀には均一な間隔で支柱が並んでいるが、弓を引くのには狭くない。ハレムのある南側を守るための、見張り処として造られたのだ。

「ぬう、」

伸びをして、支柱に手をつく。

きれいだった。真っ青な空が、地平線でふたつに砂漠を区切っている。雲が多くて、風が湿っている気がするのが難点だけれど。きっと、雲ひとつ無いからりとした天候にここにくれば、一

時間だってぼんやりできる。

「弓か……」

ふと呟くと、フェイリットは左手で空を掴んだ。そうして幻の弓を思い描いて、右手でさっと引いていく。そのままじっと、頬に当たる風を感じてから、雲のひとつを狙って定め――、

「いけ、」

右手で掴む矢の端を、弾いて離してやる。

小さな雲に突き刺さり、幻の矢はぽっと静かに消えた。

弓を習ったのは、誰だったか。確かにサミュンは弓を使えたけれど、直接習った覚えは無い。彼はそれを食料を得るためだけに、つまり、狩りでのみ使っていた。だからフェイリットにも、教える必要がなかったのだ。

戦いのためではない弓。それがとても好きだった。サミュンの放つ矢はいつも、呼び寄せるように獲物たちの身体に吸い込まれる。感心しながら眺めていた記憶はあるのに、習った記憶がどこにもないなんて。

「降りそうだな」

そのまま空を眺めていたところで突然、自分ではない声が耳に届いた。

「え、」

低く深く、背筋を通り抜ける静かな声。そっと横を見やると、廊下の向こうに、バスクス帝の姿があった。フェイリットと同じようにして、見張り廊下から空を眺めている。

彼の姿は、さきほど見たときと変わらなかった。黒っぽいと思っていた長衣は、茶が混じっているように見える。その上に薄いローブを羽織っていて、ターバンは巻いていないままだ。ここが南側に近いという予想はあたっていた。きっと、ハレムから帰ってきたのだろう。

「地を潤すものにはならんが、砂漠にも雨は降る」

ほんの少しだけ目線を脇へずらしてこちらに寄せ、バスクス帝は囁くような声で言った。

「雨……砂漠にいたときから、湿っぽいなどは思ってました。……これから降るんですか？」

そう返した瞬間に、サアアア……と聴こえる優しい雨の音が、耳に迫ってくる。フェイリットは驚いて、窓の向こうへと視線を移した。青かった空は一面、灰白い雲に覆われていて、むっとするような独特の雨のにおいが、ここまで昇ってくる。

「あの、」

バスクス帝はとっくに歩き出していて、背中はずいぶんと向こうに進んでいた。

“付いて来い”とは言われていない。けれど何となく、その背を追わずにはいられなくて、フェイリットは小走りに駆ける。

追いかけた背中が不意に止まり、バスクス帝が前を見たまま小さく笑った。

「来るか？」

彼が立ち止まったその前には、見上げるほどの階段が続いていた。ぽっかりと空く出口が外へとつながっている。真っ白で、少しだけ光が漏れ出していた。両脇はすべて石壁で、道幅は片腕ほどしかない。

階段を上りながら、フェイリットは上を見上げる。――バスクス帝の背中。薄いローブを羽織



っていて、それが揺れるたび彼の纏う香煙のかおりが流れてくる。甘くて、少しだけ辛いような。ついさっきまでハレムに居たのだろうに、少しも女の匂いがしなかった。乳香をつけているのは、バスクス帝ただ一人。ハمامでヒーハヴァティ・ウィエンラ公女と会ったとき、柑橘類の香油をつかっていたから、彼女の香りではないとわかる。

甘い匂いにつられてそっと手を伸ばし、そのローブの裾を掴む。そうしてしまってから、フェイリットははっと唇を震わせた。自分の咄嗟の行動に、頬が熱くなっていく。慌てて手を離して、足元の階段をじっと見やった。

ヒーハヴァティに差し出された彼の手は、……自分には無い。

「子供の頃、雨の日ここに來るのが好きでな」

辿り着いたのは、城の屋上と思われる場所であった。一番上に立って、バスクス帝がふと息をつく。

けふるような霧が垂れ込める真っ白な空が、低い位置に広がっていた。まるで手をのばせば、その綿のような感触を味わえそうなほど近く、雲が見えている。その雲が、霧のように細かな雨を、さらさらと吐き出し続けているのだ。

「わっ」

雨を遮ろうと手をかざしたところで、頭の上に何かが被さる。一気に押し寄せた乳香の香りが、ふわりと身体を包んでいく。驚きつつも頭に手をやると、バスクス帝が羽織っていたはずのローブが触れた。

「あ、ありがとうございます」

礼を言い少しだけ視線を上げると、彼は空を見上げたままじっとしていた。自らは濡れるのも厭わずに、その黒髪の流れる項から、ぽたぽたと水滴が落ちていく。

「……何も、見えないですね」

雨の日に来るのが好きだと、バスクス帝は言った。けれど、どこもみな真っ白で、せっかくの景色が台無しだ。さきほどまで抜けるようだった青空も、今はどこにも見当たらない。わざわざ一番高いところに上っているのに、遠くの風景は霞にも見えなかった。

まるで何もない空間に、ぽっかり自分だけが浮かんでいるような心地になる。

「見ているといい。この辺りの雨は、すぐに止む」

こんなのが好きだなんて、不思議な感性だなあ……そう思いかけて、次の瞬間。

フェイリットは息を呑んだ。

「――わあ」

――雲のすきまから眩しいほどに降りそそぐ、たくさんの“光の帯”。

驚きのせいで、言葉は思いつかなかった。ただただ空だけを見上げ、フェイリットは啞然とする。

光は、何本も何本も、地を目指して降りそそぎ――暖かな陽射しの色は金とも橙とも言いがたい。灰色の分厚い雲間から噴きだして、どれもまっすぐに地上を指した。

「きれい」

バスクス帝が、満足げにこちらを見るのがわかった。しっかりと頷いて、フェイリットは空を

見上げたまま微笑む。

「本当に、すごくきれい……」

息をついて言ったその声が、小さく震えていた。

あの光のあいだを、ぬって飛んだら……、

心地よい血の沸騰が、四肢をめぐって流れ出す。

「明後日の朝にここを発つ。帝都に帰るぞ」

バスクス帝は息をつくと、空から目を外して言った。

「え？ あ、」

フェイリットははっと気づいて、自らの腕を見下ろした。

――よかった、変化はしていない。覚えのある血のざわめきが、全身をめぐって身体が熱い。なのに、不思議と痛くはなかった。皮膚が裂けて血が噴き出せば、その兆候の前からもう、叫びだしたくなるほど苦しいのに。

「確かにひと月にはまだ早い。だが、テナンの情勢に怪しい動きがあつてな」

話し続けるバスクス帝へ、意識を戻す。フェイリットはその言葉を考えて、ふと首を傾げた。

「テナンですか」

テナン公国には今、コンツェがいるはず。それとももう帰ってきているのだろうか。……帝都の知り合いには、何も言わずにバツソス公国に来てしまった。彼らが今どうしているのか、フェイリットにはまったくわからない。

――自分の不在に気づいていたら、心配するかもしれない。アンもコンツェも。

「前以てジルヤンタータには伝えていた。荷物の整理はついているはずだ。お前の方はどうだ？」

「どうって、」

「水脈だ。まだかかると言うなら、ここにお前だけしばらく残ってもいい。シャルベージャを置いてやる」

「……いいえ、水脈は、あとは地図に清書してまとめるだけです。明日からは城の書庫で。一日で終わらせてみせます」

そうか、と頷いてバスクス帝はこちらを向いた。大きな手が近づいて、そっと髪を撫でていく。梳くよりも、絡めて弄ぶような仕草だった。

「ではな、」

そうして去っていくバスクス帝を見やって、フェイリットは慌ててローブを握りしめる。

「あの、このローブ」

彼の姿は、もうとっくに階段の中にあつた。また追いかければいいものか迷って、小さく息をつく。畳んでいたローブをふわりと開いて、試しに身に纏ってみるが、裾が長すぎてずるずる引きずってしまった。

「くれるってわけでも、なさそうだよな」

何しろ丈が合わないのだから。もらったって、使えなければ仕方ない。どうにも貧乏性なのは、育ちのせいだと思うことにした。

ローブを元どおりに折り畳んで抱えてから、フェイリットは気づく。

「……部屋、戻れるかな」

自分が迷子だということを、彼に伝えればよかった。

そっと寝台から身を起こすと、フェイリットは片手の甲を額にあてた。

――眠れない。

体調を気遣うジルヤンタータに従い、早めに寝台に入ってみたものの、夜更かしが習慣づいたのか、それとも短い睡眠に慣れてしまったせい、浅い眠りを繰り返してすぐに目が覚めてしまう。

「ジル、寝たかな」

彼女が寝ているのは、仕切りを挟んだ隣の寝台。使用人のための部屋にこっそり泊めてもらっているのは、オフデ侯爵には内緒にしていた。なにしろ“皇帝陛下とご一緒にお休みになっては？”という提案が実行されたまま、フェイリットには帰る室がなくなっているのだ。「やっぱり部屋を下さい」などと、滞在している身では言い出しにくい。

身を起こしたまま水でも飲みに行こうか考えていると、ふわりと吹いたつめたい風に乗って、乳香の香りが流れた。棒のような衝立てに、ぴんと幕を張った仕切りはフェイリットの背丈もない。その仕切りに昼間、バスクス帝から借りたままになっていたローブを掛けていたのだった。置き場所に困ったあげく皺にならないようにとその場所を選んだが、もしかすると眠れない原因はこれなのだろうか。香をつける習慣がなく、まして嗅覚の鋭いフェイリットにとって有り得ないことではない。けれどその香の焚かれた室で彼とともに寝起きしていたことを考えれば、それはおかしな話だった。

「……返しにいこう」

そっと呟いて、フェイリットは身体にかかる掛け布を剥ぐ。夜の砂漠は、とても寒い。掛け布をどけたとたん空気の冷たさが押し寄せてきて、フェイリットは身を縮める。

立ち上がって仕切りに掛けたローブを掴むと、フェイリットはジルヤンタータを起こさぬように、そっと室を抜け出した。

薄暗い照明は続いてしたが、深夜もすぎたせいか城の中は人気がない。室を次々に通りながら、フェイリットは気配を抑えて歩くことにした。廊下がないために、どこに誰がいるものか把握できないからだ。起きているならともかく、寝ている者にはこれで気づかれないはずだった。

バスクス帝の部屋はジルヤンタータの部屋から六室ほど移動した先にある。もうそろそろという場所になってようやく一人、人影が立つのを室の先に確認して、フェイリットは立ち止まった。

華奢な背中から、バスクス帝でないことはわかる。小姓か、それとも誰かの侍女だろうか。すっぽりとローブを着ていて、細かな体型まで観察することができない。フェイリットがじっと伺っていると、人影はくるりとこちらに向きを変えて、歩きだした。

「……誰？」

距離にして十歩ほど。人影がこちらに気づいて、声をあげる。――女の声。振り返った顔を見て、フェイリットは息をのんだ。

暗闇にもはっきりとわかる顔は、ヒーハヴァティ・ウィエンラ公女のものだった。夜目がきく

側としてはわかるが、きっと彼女に自分は見えていないだろう。そう思って、フェイリットは口を開いた。

「すみません。……驚かせてしまって」

フェイリットの声に、目前で立ち止まったウィエンラが首を傾げる。

「タブラ＝ラサ？」

赤味がかかった茶色の髪が、緩やかに波打って腰下まで流れていた。昼間は結い上げているその髪が、ヴェールにも隠されず目に触れている。

「はい」

「こんな夜中に、明かりも持たず何？」

「明かり……ああ、」

そこではっとして、フェイリットは目を瞬かせる。彼女の左手に持たれた燭台に、ほんのりと明かりが灯っていたのだ。こちらを照らすように明かりを向けて、ウィエンラは不審げに顔を歪めている。暗くても辺りを見渡すのに不自由しないため、うっかりしていた。“普通”なら、まず蠟燭をさがして火を灯していたはず。

「ぼんやりしていて」

こんなのでは、言い繕いにもならないだろう。咄嗟に応えて、フェイリットは後悔した。

「変な子ね。――……そう、あなた、村娘なのですか？」

「え？」

「陛下が仰っていましたわ。山麓に近い村の出だって」

――バスクス帝が。彼女の言葉を頭に届けて、フェイリットはのろのろと首を縦に動かした。自分がメルトロウの王女だという事実は、あまり公言してはならないものだ。彼が言うのなら、きっとウィエンラ公女にも“そういう”ことにしているのだろう。

「……どうしてそんな子が一番目スフィルなのかしら。テナン公国とか、他の公国の公女が一番目スフィルだというなら、まだ理解できるのに」

苛立たしげに呟くと、ウィエンラは小さく唇を寄せて息をついた。その息が白く曇って、ほんのりと空気に溶けていく。

フェイリットは何を言ったらいいものか、考えながらじっとしていた。意味がわからない、というように首を傾げて。

「侍女と一緒にの室を使っているのですって？ そんな男の子みたいな格好して、ハレムにも入れてもらえないなんて可哀想ですわね」

「それも、陛下から聞いたんですか？」

「いいえ。こっちは噂。けれど根も葉もない噂ではないでしょう？ 現にあなた、まるでお小姓ですわよ。そうですわ、だから使用人の室を使っていますのね？」

くすくすと笑いはじめるウィエンラを見て、フェイリットは諦めたように静かに微笑む。確かに、最近の自分はターバンをしっかりと巻き、肌と髪は黒く染めて、小姓の衣装を纏っている。砂漠に自由に出るための変装だったが、考えればウィエンラの前で女らしい姿でいたことがない。それはバスクス帝の前でも同じだ。

「そうかもしれません」

「……否定なさらないのね？」

「ええ。自分に必要だと思うので、こういう衣装を纏っているだけです」

——今の自分に必要なのは、水脈を記して残すこと。

呆れたように息をついて、彼女は笑うのをやめた。しばらく沈黙したあとにふっと視線を落として、フェイリットの手元に向ける。その先には、バスクス帝のローブがあった。彼にローブを返すために歩いていたことを思い出し、フェイリットもふとそれを見下ろす。

「それ、陛下の……、どうしてあなたが？」

いぶかしむように片方の眉をすっと上げて、ウィエンラが問うた。彼女と一緒に居たころから纏っていたであろうローブが、あの屋上でのほんの少しの時間でフェイリットの手元に移ったことを、彼女は知らないのだろう。敵意をむきだしているウィエンラに、これ以上どう話せばいいものか、フェイリットは眉をひそめて考える。

「ええと、雨が降っていて、借りたんです。ちょうど良く居合わせたので」

「それでこんな夜中に返しにいらしたの？」

「ええ、」

曖昧なフェイリットの返事のあとで、ウィエンラは口を閉じて黙った。しばらくしてふっと息を洩らすと、彼女が微笑む。

「——陛下、今もわたくしの寝台に、いらっしゃるの」

ゆっくりと区切りながら、囁くようにウィエンラが言った。彼女が浮かべる笑みは、いつも美しい。勝ち誇ったように引き上げられた口元から、小さな吐息が吐き出される。

「だから今、陛下のお部屋にいてもいらっしゃらないわよ。なかなか離して下さらないものだから、お休みになった際に出てきたのですわ」

「……そう、なんですか」

フェイリットはウィエンラ言葉に、曖昧に頷くしかなかった。他に何を言えというのか。バスクス帝が彼女と寝台に居たと聞いても、あり得ないことではないと感じる。ふと脳裏に、タラシャとバスクス帝の姿がよぎった。帝都にいたころに見てしまった、彼らの情事の瞬間——そうしてタラシャの顔がウィエンラとすり替わって行って、フェイリットは唇を引き結ぶ。

なんて想像をしてしまったのだろう。

「ええと、じゃあ、失礼します」

「そうね。ゆっくりお休みになって」

ウィエンラの頬が、笑顔の形につくられる。きっと遠目から見たなら、自分たちはとても楽しい話をしているようにとれるはずだった。

フェイリットはイクパル式の略礼をして、彼女のわきを通り抜ける。

「愛していると、言ってくださいましたのよ。あなたに勝ち目はありませんわ」

背中にかかる声に、突き刺される思いがした。フェイリットは足早に歩いて、早く彼女から遠ざかろうと懸命になる。

——今もわたくしの寝台にいらっしゃるの。

彼女の言葉が、今になって胸を締め上げる。

「……気にしちゃだめ。わたしは関係ないんだから」

バスクス帝がハレムに居るのなら、それはそれで都合がいい。つまり今、彼の部屋には誰も人がいないことになる。ローブを返すには、絶好の機会だった。彼が室に帰ったとき気づくよう、長椅子の上にでも置いておけばいい。顔を会わせなくて済むし、ウィエンラの言葉をこれ以上思い出さずに立ち去れる。

そうしてバスクス帝の室まで辿り着くと、フェイリットはひとつだけ大きな息を吐き出した。誰もいない部屋に、儀礼としての挨拶は不要。

けれども仕切りを掴んでぱっと引き上げた途端に、フェイリットは小さな悲鳴をあげたのだった。

悲鳴を上げたあとで、長椅子に座るバスクス帝と目が合う。

ヒーハヴァティーがハレムにいたと言った彼が、何故こんなところにいるのか。フェイリットは仕切りの幕に手をかけたまま、立ちすくむ。

「陛下、」

フェイリットは呟くようにして、言葉を唇からこぼした。目を開き口を開けて、端から見ればどうとっても驚いているとわかる顔で。

「どうして……」

思わず絞り出した声に、自分自身が驚く。どちらかと言えば、最も会いたくない人物が目の前にいるというのに。なぜだか今、もの凄く嬉しそうな声を出してしまった気がする。

フェイリットは眉根を寄せて、バスクス帝の顔をじっと見やった。

「そう思うようなことが何かあったか？」

ハレムに行くからセルトはできない——そういった内容の伝令を毎日送っていたくせに、その本人が明け方も近い今、ここにいることは可笑しいはず。それに加えて、ウィエンラの言葉はなんだったのか。

フェイリットは息をついて、首を左右に振った。

「お、お久しぶりです」

「ああ、昼間会った気がするが。幻だったかな」

面白そうに目を細めて、バスクス帝は返した。

「いえ、あの……これを。ありがとうございました」

持っていたローブを、フェイリットは少しだけ上に上げて見せる。バスクス帝はわずかだけ首を傾げて、片眉を動かした。

「ああ」

それで？ と問うような目で見られて、フェイリットはたじろぐ。無人だと思っていた室に、その持ち主がいるなんて覚悟してはいなかった。

慌てて取り繕うように考えると、フェイリットは口を開いた。

「ええと……それと、セルトを貸していただけませんか。練習したいんですが、盤を持ってなくて」

バスクス帝はわずかに頷いたあと、寝台の横の卓に乗る、四角い箱を指差した。四角い箱は、セルトの盤だ。

フェイリットは歩いて行って、セルトを見下ろす。盤の上には何もなく、駒はすべて小さな別の箱に片付けられていた。しばらく触れていなかった箱の蓋を、そっと持ち上げる。

「相手は」

じっとセルトを見ていたら、静かな声が聞こえてくる。フェイリットはわずかに首を振って応えた。

沈黙が降りる。



相手がいないのは本当のこと。ジルヤンタータを誘ったら、「吐きそうです」と断られた。どうも彼女は、イクパルのものを毛嫌いしているらしい。ここでの知り合いでセルトの相手を頼めるとしたら、バスクス帝以外ではジルヤンタータしかいない。まさかシャルベージャに頼んでも、快く引き受けてはくれないだろう。

「てっきり、お前が飽きたのだと思っていた。しばらく来なかったろう」

「え……」

セルトを持ち上げようとした手を止め、フェイリットは目を瞬かせる。“しばらく来なかった”原因を作ったのは彼だ。ハレムに行くから来るなど、伝言までしたくせに、「飽きたと思っていた」だなんて。

「直接聞こうにも、このところ見かけなかったのにな」

「……屋上で会いました」

直接聞こうというなら、昼間にできたはずだ。この室に入ったとき、彼の口から出た言葉を真似てみる。バスクス帝が小さく笑ったのがわかった。

「では、幻ではなかったのだな」

フェイリットはようやく振り返って、長椅子に座るバスクス帝を見やった。

彼は笑うでも冗談めかすでもなく、落ち着いた顔をしている。嘘をついているようにも、見えなかった。

どう受け取ればいいのか。フェイリットが考えていると、「ああ」と思い出したように繋げる。

「砂漠に毎日出ていたのは見ていた。よく頑張っているな」

「……あ、はい」

気づいていたのだ……。フェイリットは、啞然としてバスクス帝を見つめた。

バルコニーの三階で、楽しげに笑いあう二人の影が脳裏をよぎる。

手に手を取り合い歩く、バスクス帝とヒーハヴァティ・ウィエンラ公女。長身であるバスクス帝が、わずかに顔を傾げるだけで、彼女の話の聴いていたのを覚えている。ああいうのを普通は、「お似合いだ」と言うのだろう。身長差が少なく、並んでも見劣りしない。何よりもウィエンラは、女であるフェイリットが見惚れてしまったほど、美しい姿をしている。彼女がバスクス帝に好意を持っていることも、すぐにわかった。彼が彼女をどう考えているかは分からなかったが、ハレムに通っているくらいだ。“そういう”関係にあることは、まず間違いない。……けれど。

——“今夜は用事があるので、セルトはできない”と、言い遣って参りました。

——陛下は今もわたくしの寝台にいらっしゃるの。

フェイリットはぼんやりと考えて、気づく。

まさか。あの言伝は、“彼女”が送ったものなのだろうか。

「あの……ハレムにいらしたんですよね。もうお休みだと思ってました」

バスクス帝はフェイリットを見やり、何故かふと笑った。

「泊まったことは一度もない。すぐに戻る」

“公女を抱いたら”すぐに。省略されたはずの言葉を思っ、フェイリットは口を嚙む。ずっと

細まったバスクス帝の目から、ゆるゆると視線をはずした。砂の色に似た絨毯に乗る、彼の足あたりに目先を変えて、彷徨わせる。

なんだか、変な気分だった。ここから逃げ出したいのに、それができない。

「うそです、泊まったことないなんてうそ……」

黙ってしまったフェイリットを見たせいか、バスクス帝が息をついて笑うのが聴こえる。

「何だ、寂しかったのか？」

冗談のようだった。

フェイリットが顔を上げると、バスクス帝はその腕をさっと広げて見せる。まるで“おいで”とも言うように。

その広げられた腕の中を見ながら、フェイリットは時が止まったように固まる。

——……これは、いつもの冗談だ。

いやです、とフェイリットが応えて、バスクス帝は肩を竦めて笑う。それで終わりの冗談なのだ。そうやってセルトを借りて、おやすみなさいを言って……、その後はジルヤンタータの部屋に戻り練習する。……ひとりで。それが一番、いい行動だった。考えればこんなに簡単なことはない。

……なのに。なぜだろう、そうすることができない。身体が真逆に引っ張られて——、気づいた時にはもう、飛び出していた。

バスクス帝は驚いた顔で、けれどしっかりとフェイリットを抱き止めた。飛びかかるような勢いで彼の首元にしがみついて、フェイリットは自らの片腕に鼻の先を押し付ける。

自分の匂いではない、甘い香りがした。

「ひとつ教えようか」

抱きあったまま、バスクス帝が低い声で言う。

「私は他の者のいる隣で、眠ることができない」

——彼の話す振動が、肩すじを伝わり背骨に落ちていった。

「それ、は」

人の隣で眠れないなんて。それは明らかな嘘だ。

なにより何度も、フェイリット自身が彼の寝顔をとなりで見ているのだから。けれどそこまで考えて、フェイリットは気づく。“おまえの隣では眠ることができる”という、その言葉の本当の意味に。

「陛下……」

抱きついたのは、はっきり言って衝動だった。深い理由など考えずに、体が動いたのに従っただけだ。

フェイリットは身じろぎするようにして、バスクス帝から身体を離す。

見つめ合うような姿勢でほんの一瞬、沈黙が降りた。身体が動いたそのわけを、考えるのは億劫だ。

フェイリットはゆっくりと微笑んで、バスクス帝の頬に両手をやさしく添えた。

「にぶい奴だと思っていたのだが」

笑いを噛み殺したような顔で、バスクス帝は息をついた。

鋭い顔。眉間に皺の跡が乗り、目は深淵のように底が見えない。まるで夜の空を飛ぶ鷹のような目だ。

怖い、と思ったのはいつのことだったか。怖くないと感じたのは、いつからだったろう。フェイリットはその暗い色の瞳から目を反らさずじっと見つめ――瞼を閉じてくちづけた。

身体が持ち上げられて、いつもより高い視界から、彼の手が深紺の垂れ幕を掻き分けるのを見つめる。背中に柔らかい寝台の感触を感じてそっと目を上げると、もう、バスクス帝の顔は笑っていなかった。

目がまわる。窒息する。破裂しそうだ。

――後から思い出せたのは、そんなことばかりだった。

合わせられる手が、唇が、身体が……こんなにも熱く鋭利だなんて、誰が教えてくれただろう。深く切りつけ痕を残し――乳香の匂いが、身体に満たされてゆく。

「フェイリット」

耳元で聴こえる柔らかな呼び声が、夜の底へと沈んでいった。

\* \* \* \* \*

「……いっちゃったねえ」

出港した船の、白くはためく帆を眺めながら、アシュケナシムが言った。

シアゼリタが発ったのだ。婚姻は本格的に決まり、彼女はとうとうメルトロローへ渡ることになった。横にいる人の長い金髪が、ふわりと舞いあがるのを見ながら、コンツェは息をついた。

「ああ」

薄曇りの朝だったが、風は良く吹いている。この風に追い立てられて、きっと夜にもならずメルトロローの土が踏めることだろう。

帆船はこぢんまりとして、灰色を少し混ぜたような海を滑っていた。彼女と、その夫となるイグルコ・ダイアヒン宰相が甲板に立っているはずだが、もうその姿も確認できない。

「じき逢えるよ」

のんびりとした声で、アシュケナシムが呟く。コンツェは船の影が見えなくなるまで目で追ってから、隣に立つ彼を見やった。

「どういう意味だ？」

「どうって」

その空色の目はもう海から離れていて、どこからか取り出した薄い色のスカーフを手に見下ろしている。彼の瞳より、ほんの少しだけ緑がかった不思議な色のスカーフだった。そうして軽く咳き込み始めて、アシュケナシムは口元を押さえ付ける。

「そのままさ」

くぐもった声で言って、アシュケナシムは笑った。口元がスカーフで隠れていても、その空色の目でわかる。

テナン城は海に面して建てられており、その城の一階部分に、ぽっかりと海路がつけられている。直接船が搬入できるそのつくりは、満ち潮がくればまるで海に浮かぶような風情を、テナン城にあたえるのだ。

船を見送るために設けられた二階部分のテラスの手すりから、アシュケナシムは身を離して振り返った。

「君もメルトローに来ることがある、という意味でだけれど。そうしたら、シアゼリタにだって逢えるだろう？」

答え終わってから、アシュケナシムはまたひとつ小さな咳をした。風邪でもひいているのか。気づいて見れば、あまり具合がいいとは言えない顔色をしている。

「例えば俺が王太子になったとして」

コンツェの言葉に、アシュケナシムは悪戯げに首を傾げて見せた。コンツェはますます不機嫌な顔になって、息を吐く。

「黙って聞け」

「もちろん。黙っているじゃないか」

「……それで黙ってるって言えるのか。あのなあ、俺が王太子になったとしても、メルトローに行く用事は無い」

コンツェの言葉を聞き終えると、アシュケナシムはスカーフを口元から離した。おっとりとしたその笑顔は、彼の性格には似合わない。どこか斜に構えた気質に、コンツェは気づきはじめていた。

「妹の結婚式、同盟国への挨拶、あとは君の婚姻かな」

「こ……婚姻？」

慌てたようにコンツェが返すと、アシュケナシムは右手に持っていたものだろうスカーフを、ぱっと広げる。

「これ、何かわかるだろう」

軽い口調で言いながら、ひらひらとスカーフを揺らしている。薄い水色に染み込んだ、赤黒い色。

「……血」

少量ではあったがその汚れを見て、コンツェは血以外を思いつけなかった。

「そう。僕は病気だ。――そして、サディアナも」

「なん……だと、」

コンツェが指先が冷えていくのを感じて、言葉を最後までつなげることができなかった。アシュケナシムが告げる言葉を、理解することができない。

「サディアナは死ぬよ。僕よりは遅いはずだけれど、多分ね。発症すればあつという間だ」

珍しく真剣な顔をして、これは冗談のつもりだろうか。

ずいぶんと慣れてきたと思っていたのに、未だにアシュケナシムがわからない。コンツェは口を開けたまま、彼の顔をじっと見つめた。冗談ならば冗談と、早く言ってくれればいい。

「どうしたの。泣き崩れたりしないわけ？」

「泣き崩れる……？ 本当……なのか？」

呂律が回らない。コンツェは驚きに目を大きくして、アシュケナシムがゆっくりと頷くのを見つめていた。

「発症を抑える方法は、メルトローにしかない。だからサディアナを生き延びさせるためには、一刻も早く連れ戻さなくちゃ。……メルトローに連れ帰って、君がサディアナを妃にしてよ。そうすれば、姉さんも僕も、死なないかも」

アシュケナシムは、静かな声で言葉を切った。

シアゼリタの乗る帆船が、進んでいったあたりへと目を向け、コンツェは押し黙る。“王太子”——その位の意味合いが、急に重みを増していった。

\* \* \* \* \*

「んん……あれ、」

フェイリットは目を覚まして、自分が裸でいることに驚いた。バスクス帝の肩から胸のあたりに、なぜだか頭が乗っかっている。

「……？」

そこでようやく、昨夜何が起こったのかを、……思い出す。

フェイリットは咄嗟に顔を押しさえると、驚きに目を開いて呻いた。眠気なんて、あっという間に吹き飛んでいく。

「う、わ、うわ、わ、わた」

身体を包むように腰の横に置かれていた“手”を、ぱっと外して寝台から降りる。

「うわ、……だっ！」

唐突に呻くような声を上げて、フェイリットは床に縮こまった。下腹に感じる鈍い痛みと、全身にのしかかるようなけだるさ。痛みを瞑った目をぼんやりと開けて、フェイリットはようやく顔を上げる。

「……なにをしてる」

笑い声が聞こえて振り返ると、バスクス帝が寝台から身を起こしたところだった。

「い……いえ、なんでもありません」

「——ああ、そうだった」

思いついたように言うと、バスクス帝は寝台から脚を下ろして、脇に落ちていた衣装を拾う。簡単にそれを身に纏いつけ、立ち上がった。

「わ、わたし、戻らなきゃ！ オフデ侯爵のところ行ってきます。地図が、」

慌てて立ち上がり、フェイリットは後じさる。言っていることの文脈も、歩き方さえも不自然だった。けれど這っていくほどの痛みではない。侯爵には不審に思われるだろうが、背に腹は

代えられなかった。

水脈を正確に記した地図は、完成まで残り丸一日はかかってしまう。帝都サグエに帰るのは明日の朝。それまでに地図を出来上がらせるためには、夜を明かす覚悟さえ必要だ。

「裸で行こうというなら止めないが」

近づいてくるバスクス帝を目を開いて見つめてから、フェイリットは自分の姿を見下ろした。

「うわ！」

隠そうとしてしゃがむ前に、薄地の掛布で包まれる。はっと気づけばバスクス帝に抱き上げられて、その腕に尻が乗っていた。

「侯爵のところへ行くなら、ハナムに行ってからの方がいい」

「あの、い、いいです！ 自分で……」

見上げたところで、バスクス帝の黒い眼と打ち合う。フェイリットは最後まで言うことができずに、ぽかんと口を開けて黙った。自分の顔が熱いのは、気のせいだと思ったかった。

「昨夜の素直なおまえは、どこへいったのだろうか」

「……え、ええと、」

しどろもどろになって目を反らしたフェイリットを見ながら、バスクス帝は小さく笑って歩き始める。

「痛いだらう。加減できなかった。……すまない」

「は……」

どこをどう加減するのだろうか。疑問に思いながら上を見やって、彼の顔が歩く方角を向いていることに安堵する。何を言ったらいいものかわからずに、フェイリットは顔を真っ赤にしたまま逆を向いた。

「陛下、」

「なんだ」

「そばに……いてもいいですよ。ずっとだなんて言いません、せめて、時間が」

言い終わりもしないうち、唇に何かが重なった。バスクス帝の唇だ、と気づいたころには、その舌に緩やかに絡めとられている。

時間が許す、いまだけでも、せめて。

「では寝台に戻るか」

唇がふっと離れていく。ゆっくりと目を開けると、フェイリットはしばらく考えて、怒ったように眉根を寄せた。

「そういうことじゃなくって！」

睨みながら叫んだところで、バスクス帝が含み顔で笑うのを見つけてしまった。その意図をなんとなく察して、フェイリットは息をつく。

「もう、いいです」

「だろうな」

バスクス帝は楽しげに言うと、フェイリットの頭にぽんと手をつく。導くように引き寄せられて、額の横が、彼の胸板に触れた。

優しいのか、単に面白がっているだけなのか、ただの冗談なのか――まったくわからない。ただそっと触れた耳に、彼の鼓動が聴こえはじめて、フェイリットは目を閉じた。

心地よい、音がした。

長い長い階段を下り終えて、フェイリットはほっと息をついた。

城の書庫は古く、どことなく湿っている。ひんやりした空気に本特有の匂いが混じって、フェイリットは自分の気がいつの間にか落ち着かなくなっているのを感じた。重厚な雰囲気があるのか、妙な緊張がわきだっている。

薄暗い地下の空間には、大きな円卓がひとつあり、それを囲むように巨大な書棚が並べられていた。床も壁も剥き出しの岩石でできており、城の中のような気の利いた装飾は何ひとつ見当たらない。ただ橙色の、背の高い燭台がいくつか壁際に並んで、室をほんのりと照らしているだけだ。

「なんと、灯りも持たずにいらしたのですか——おや、」

フェイリットがそれを見ながらぼんやり立ったままでいると、にわかに声がかかり、書棚の奥からオフデ侯爵の瘦身がするりと現れる。その手には胸に届くほど書物が積み重なっており、彼の足取りをおぼつかなくさせていた。

「おはようございます、オフデ侯爵閣下」

笑顔になって、フェイリットは頭を下げた。いつもは砂漠であるあいさつが、今日は岩石に囲われた室に硬くこだまする。

オフデ侯爵はすぐには応えず、じっと目を丸くしてフェイリットを見つめた。

「あ。灯り、どこにあるか気づかなくて——、」

灯りを持たずに来たことが、それほど彼の虚をついたのだろうか。フェイリットは幾分顔をくもらせ、首をひねった。たしかに、暗がりでもはっきりとものが見えるせいで、灯りを忘れてしまうのは悪い癖だ。自分には見えても、周りからしてみれば不自然この上ない。いい加減、人間として「普通」に振る舞うことを意識しなくてはならないのに、こういうちょっとしたところで失敗を繰り返してしまう。

もっと何か言おうかとフェイリットが口を開いたところで、オフデ侯爵はそっと笑った。

「いや、それもそれで驚きはしましたが。可愛らしい衣装ですな、と言いたかったのですよ。いつものお小姓姿より、あなたにお似合いだ」

オフデ侯爵が頬を緩ませて頷く。

臙脂に黒を混ぜたような深い色の衣装は、いつも着ている小姓衣ではない。胸のあたりでいくつものひだが作られており、いくぶん丈も長めだ。ハレムの女たちがまとうような色気は無いが、それを差し引いても随分と女らしい形の衣装だった。

「着方を覚えられたのですな。以前は、小姓衣しかご自分で着られないと仰っていたものですが」

どこか遠くを見るような、温かいなまなざしをつくると、オフデ侯爵は微笑んだ。その顔はどこか、「本当に懐かしい」とでもいいような郷愁に満ちている。

「ええと、」

イクパルの衣装は一枚の布を結びつけて纏うもので、特に女物は複雑な手法が必要だった。単



純に着るならともかく、ひだを作る可愛らしいものは未だフェイリットにはできない。だからこそ、毎日小姓衣を身に着けていたのだが、その難しいものをバスクス帝はするすると作り上げたのだ。彼らのような身分では、自分の衣装さえ自分で着る必要はないのに。

まさか“陛下に着せてもらった”などと言うわけにもいかず、フェイリットは曖昧に微笑む。

「謙遜なさいませぬ。可愛らしいですぞ」

フェイリットは赤くなって自らの衣装を見やった。その動作に、首元と手首につけた金の環がしゃらしゃら音をならす。環は臙脂の色ととてもよく馴染んで、動くたびにきれいな音色を奏でた。

「たしかにその色は、懐かしい方を思い起こさせる」

渋い声が鳴り響いて、驚きのまま見上げると、片手に灯りを持ち階段を降りてくる男の姿が目映る。

「ホスフォネト王」

面と向かい近場で目にするのは初めてのこと。宴の席で離れて見た彼の印象は、今となっておぼろげだ。近くで見ると、オフデ侯爵ほどではないが、彼もまた研ぎ澄まされたような瘦身をもっているのがわかる。老齢に近いオフデ侯爵が遣えているのだから、ホスフォネト王もまた更に年嵩が上なのだろうとフェイリットは考えていた。なのに、どうみても彼は三十代も半ばにしか見えない。話し方や落ち着いた所作が、なおさらにそれを混乱させる。

「だが言うものではないぞ、ルクゾール。それではまるで、その歳で口説いているようにしか聞こえぬ」

フェイリットは驚きのせいで、儀礼のあいさつもおろか、口を開くことさえ忘れてしまっていた。棒立ちになるフェイリットを前に、ホスフォネト王は苦い顔で笑う。

「驚かせてしまったようだ。この書庫のある北の区域は、儂の執務の間に近いのでな。一度しっかり詫びねばならぬと思ひ来たのだが」

階段の最後のひとつを折り終えて、ホスフォネトはふっと手に持つ蠟燭の火を消して言った。「あなたの口に毒を含ませてしまった。敵対していたとはいえ、失礼をしたことを心から恥いている」

そう言って膝を折り目の前につく王の行動を、フェイリットはただ啞然として見やるしかなかった。

「な、な……何をなさってるんですか」

「詫びを」

仮にも一公国の王が、膝をついていい相手にフェイリットの立ち位置はないはずだ。ギョズデ・ジャーリヤは、皇帝の公の愛妾。公的な位にはあるが、それは地位の高さを示してはいない。おおげさに言うなら、王と奴隷ほども分が違う。それほどに差が開くのだ。

「いえ、そういうことではなく……どうかお立ちになってください、お願いです」

懇願するように言うと、ホスフォネト王はゆっくりと顔を上げた。

「皇帝陛下よりもまず先に、われわれバツソスは貴方に忠誠を誓いたいと思っている。ギョズデジャーリヤ・タブラ＝ラサ、またの名をサディアナ・シフィーシュ殿下。かつての主君、タン

トルアス王を継ぐ、貴方ご自身に」

フェイリットは驚きすぎて、目と口を開けたまま、気づけば唸るような声をもらしていた。「わ……たしはタントルアスではありません。祖先であることに代わりはありませんが、それでも王である貴方にそのように膝をつかせる立場には無いんです。わたしは彼とは別人です」

ホスフォネト王はようやく立ち上がると、丁寧な礼をして微笑む。もう記憶にもおぼろげな、メルトロウ王朝の宮廷儀礼だった。

「わかっておる。だが儂には、あの方の姿を宿す遠い子どもが、愛おしくてならぬ」

向かい合った沈黙の中に、不意に笑い声が混じった。

なんとはいいいものなのか、困惑に顔をしかめていたフェイリットは、ほっとして横のオフデ侯爵を見やった。

「お困りですな。ホスフォネト王は、私よりも下手な口説きをなさるのです」

朗らかなオフデ侯爵の声は、その場の空気を一気に打ち崩すものがあつた。まるで冗談には感じられなかったホスフォネト王の宣言を、やんわりと制しながら、なお冗談とまで言い切ってしまうなどと。オフデ侯爵の手腕に面食らいつつも、フェイリットは悪戯げに目を閉じた。

「じゃあわたしは、王陛下の口説きに負けぬよう、世界中の美姫たちを娶って歩かなくては」

タントルアス王は、大陸中から姫を娶り民を集めた。それゆえにメルトロウでは北部の混血が急速にすすんで、濃い金髪と青々とした瞳が民族の祖となったのだ。

似ていることは、悪いことではない——そう、いつだったかオフデ侯爵は言っていた。似ているからこそ、同じ轍を踏まぬよう努力ができる。けれど彼が大陸を統治し英雄と呼ばれてのち、どうしてこの世を去ることとなったのか、フェイリットは知らなかった。

「タブラ＝ラサ、我々は地図でも描きましょうぞ。王はあらかた、貴女のご滞在を延ばそうとでもお考えなのです」

オフデ侯爵はそう続けて、大きな卓の上に獣の白革をつないだ地図の台紙を、ばさりと音を立てて開いた。

ホスフォネト王はそのあとも書庫にいて、作業を続けるフェイリットたちを見るときも見ていたが、彼にはまったく手伝う気はないようだった。そばで眺め、たまに質問する以外は、どこからか探してきた蔵書の紙面をめくっている。

フェイリットは手に持った羽根の筆を一度止めて、白いものさえ混じらぬその黒髪をじっと眺め見た。“懐古主義”だと言ったバスクス帝の言葉が、今ならばはっきりとわかる。まるで本当に遣っていたことがあるような口ぶりで、タントルアス王を懐かしむそのさまを、懐古と言っても偽りではない。

「そういえば、まだ秋も終わりの頃、<sup>サグーエ</sup>皇帝陛下が竜を下したという噂が巡ったものでしたな」

フェイリットの動きが止まっていることに気づいてか、地図に文字を書き込みながら、ふと顔を上げたオフデ侯爵が言う。

「“デマ”だったがな。あれには正直驚いたわ」

相づちをうつように首を縦に、ホスフォネト王は眉をひそめた。

「竜……ですか？」

「そうだ。信じるか？ 金の流れる毛をもつ美しい竜の存在を」

フェイリットは今度こそ筆を止めて、まじまじとホスフォネト王の顔を見やった。

「竜なんて、お伽話です」

いかにも居るはずがない、というような顔をして、フェイリットは首を振る。まさか「わたしがそれです」だなどと、言うわけにはいかないし、まして信じているというのも気がひけた。

「伽話にも古いものになりましたからな。タントルアスの英雄話は」

「タントルアスの？」

「そう。子供用に訳したものは、たいへんな意識と脚色がされていて、とうてい真実には遠い。だが儂らは語り継がれるその伽話を、好ましくさえ思っている——これを」

見せられたのは、その本にのる挿し絵だった。

真っ黒な鎧を着た人物が剣を握り、空へと振りかざすそのさまを、包み守るように——一匹の竜が、とぐろを巻いてかきかざしている。

黄金の竜……これが。そう感じて、食い入るようにフェイリットは身を傾けた。

描かれているのは白黒なのに、まるで鮮やかな色が目に焼き付くように想像することができた。鮮烈で艶やかな黄金色——。

「英雄タントルアス王は、その手に大陸の覇権を握りとった。最強の竜を得てな」

「……エレシンス」

史実の中に、唯一の存在を残す竜。

タントルアス以上に謎の多い人物で、フェイリットの記憶にも名前程度しか残ってはいない。サミュンについて学んだメルトロ一史に、その実エレシンスの名前はほとんど挙がることなかったのだ。

「神々しいほど、美しい女だった。海原のように波打つ黄金の髪と、朝日にも似た輝きを放つ黄金の眼……血を舐めたように紅い唇は、いつも楽しげに笑っていた。歩いているだけで、その存在は周りの目を一点に集める。激しいその性格さえも、人々を魅了したのだ。大陸全土をものもの数十年で統一できたのも、エレシンスの激しさあってのことだろう。彼女は率先して尖兵となりかわり、さまざまの国を内側から制圧していった」

話し終わると、ホスフォネト王はふと思立ったように懐を探った。その手に握られて出てきたのは、首にさげられた小さな袋だ。紐を解いて首からはずすと、そっと中身を取り出して、フェイリットの手に落とした。

「……これ」

片手でちょうど包めるほどのものが、手のひらにころがる。綺麗な色をした玉だった。琥珀色で、室に灯される明かりに透かせば、まるで黄金のような輝きを見せる。

「これって、」

「エレシンスの眼だ」

……彼女の遺品か何かですか。そう口にしようとして、フェイリットは最後まで言うことがで

きなかった。

持っていた珠が卓の上にコツン、と音をたてて転がっていく。

「タブラ＝ラサ？」

慌てたように口元を抑え、身体を折り曲げたフェイリットの頭に、心配げな声が降りかかった。

「な……なんで」

――胸が焼ける。

そう思った時には、脈打つような熱さが、口からどっと溢れだしていた。

ホスフォネト王とオフデ侯爵が、驚いたように声を上げるのを聞きながら、フェイリットは苦しさに身をよじる。嘔吐の中で、自分が吐き出しているものが、またもや真っ赤な血であることに気落ちした。まるで死がすぐそこで、手招いているみたいだ。

「なんと。いつから……、いつからその“症状”が？」

自分を支えていることができずに、がくりと卓からすべり落ちると、その先で誰かに受け止められる。顔を上げて上を見れば、それは他でもない驚愕した顔のホスフォネトであった。

「ぐ……うう」

返答にもならないまま苦しみにあえぐと、フェイリットは上に向けていた顔を咄嗟に戻し、再び灼けるような血を吐き出す。

「気をしっかり――！」

吐き続けるフェイリットの背を慌てたように抱えて、ホスフォネトが言った。

意識が遠のくのを、つなぎとめるように頬を叩かれる。

「駄目だぞ！！ “いま”眠ってしまえば、もう終わりだ！」

頬を叩く刺激が、いつのまにか意識をこの場につないでいた。ぼんやりと目を開けると、星が散って見える。立ち上がれそうにないほど、めまいがしていた。

「<sup>サグーエ</sup>皇帝陛下には、言っているのですか！？」

オフデ侯爵が切迫した声で尋ねるのに、フェイリットは辛うじて口を開いた。

「なにを……」

「あなたが、そういう身体であることを、です」

血を吐いて寿命を縮めていることは、ジルヤンタータしか知らない。フェイリットは返事の代わりに、首を振って応える。

「なんとということだ、あなたは――」

その震えた唇が紡ぎ出したのは、

「あなたは竜なのか」

……フェイリットが何よりも一番に、恐れていた言葉だった。

どういふことだ、と呟いて、バツソス公王ホスフォネトは、腕の中に力尽きた少女を眺め見た。

薄い色の金の髪は、癖がつよくくるくると踊り、まるで少年かと思まごうほど短い。まぶたに隠された薄青の目は、どんな光をも透き通し、人をじっと見つめさせる不思議さをもっていた。出自を聞かずとも、これがタントルアスの――メルトロウ王国の血を引き、遠い祖先の色を忠実にあらわしたもののなのだと、ホスフォネトにはすぐにわかった。噂にも漏れ聞き、ひと目でも目通りしたいと願ってきた、メルトロウ王国の第十三王女その方だと。

「王、タブラ＝ラサを」

オフデ侯爵ルクゾールが、氣遣うように声を上げる。

ぐったりと気をなくす少女が未だ腕の中に居ることに、ホスフォネトははっとした。規則正しい呼吸が、彼女の口元から聞こえる。大丈夫……まだ、生きている。安堵に大きく肩を落として、ホスフォネトは目を閉じた。

「ルクゾール。このことは、内々に置くぞ」

そっと言った言葉に、ルクゾールが頷くのを確かめる。“陛下はご存知か”――そう問うた声に、はっきりと彼女は首を振った。まったくどういふわけなのか、メルトロウの王女はイクパル皇帝のもとに降り、あげく本物の素性を隠して生活していたらしい。バスクス帝は率直に、大国の王女を手に入れたと信じているのだろうが。まさかそれが世界をも揺るがす火種とは、夢にも思わぬはずだった。

「しかし、タブラ＝ラサはバスクス帝を……」

「言うな、ルクゾール。メルトロウに誓われたはずの忠誠が、なくなったとは思えぬ。この娘は、いずれメルトロウの血の者を“主君”として選ぶだろう」

エレシンスの誓った忠誠は強大。それは彼女の産み落とした子どもにさえ受け継がれる。すなわち、この娘もまたメルトロウへの忠誠から逃れられぬということ。たとえバスクス帝を好いても、この腕の中の可憐な娘が、かのエレシンスを打ち破るほどの運命をもって生まれ出でたとは、ホスフォネトにはどうしても思うことができなかった。

「儂は、再びこの世に竜が現れ王に誓いを立てたとき、その手足となるよう生かされてきた兵。さきほどはタントルアスの子孫と思ひ忠義を誓ったが、……これは本当に、この方に尽くさねばならぬ事態になるやもしれぬ」

\*

「バツソスに来て、寝込むことが多くなった」

目覚めるや否や、げんなりと言ったフェイリットを、ジルヤンタータの笑い声がなだめる。

「同じくらい駆け回っているのですから、ちょうどよいくらいかと存じますよ」

側に来ると彼女は、フェイリットが身を横たえる寝台の端に、そっと音も立てず座った。

「特に最近、ろくにお眠りでなかったのでは」

いくぶん顔をしかめて言うジルヤンタータから、フェイリットはそっと目線はずした。見上げた先の天蓋は、この公国ではじめて見たものと同じだ。砂漠でタインに噛まれ、重体に陥った“皇帝の愛妾”のため、宛がわれた最初の部屋。

「あなたが地図を描いている最中に眠り込んでしまったと、侯爵閣下自らお運びくださったのですよ」

そう結んだジルヤンタータを、フェイリットはまじまじと見やった。

どうりで、彼女の態度が柔らかいはずだ。彼らはフェイリットが吐血して気を失った事実を、おそらく隠したのだろう。以前は卒倒するほどに騒ぎ立てていたジルのこと、フェイリットがまたも血を吐いたとなれば、今のように穏やかでいられるはずがなかった。

身じろぐと、首元でころりと何かが動く。

フェイリットは目線を落として、小さく声を上げた。

「これ、」

琥珀――いや、透き通る黄金色の珠が、皮ひもで巻かれて首にかかっていた。珠の根元の皮ひもをつまみ、そっと目前までそれを掲げれば、室内の灯りを吸い込むように輝きを放つ。

「侯爵閣下が、“あなたが持つのに相応しい”と仰っておいででしたが。なんの宝石です？ 琥珀でも、瑪瑙でもございませんね」

じっと見つめていると、首筋のあたりがちりちりと熱くなるような気がして、フェイリットは落とすようにして珠を手放した。血を吐いたのは、この珠のせいではないか――そんな考えさえおこしてしまう。

「公王が、エレシンスの眼だって言ってた」

「エレシンスの……な、なんですって」

驚いて立ち上がるジルヤンタータを見やって、フェイリットは小さく頷く。

「バツソス公王の祖先が、タントルアス王の臣下だったって」

同意か否定か、そのどちらかを欲していたフェイリットの気持ちを、ジルヤンタータはわかってしまったようだった。強面の彼女がしおれたように肩を落として、身じろぐのように首を振る。その姿を申し訳ない気持ちで眺めて、フェイリットは目を反らした。

「わたくしの知ることにいったら、リエダ様を近くで見っていたことくらいなのです。リエダ様の身に起こったことならば、主観的にお話できますが、それ以前ともなると……。お役に立てず、面目もございません」

深々と頭を下げて、ジルヤンタータは言った。彼女は竜に関するのことを、何も知らされていないと言っていたのだ。わかっていながら、追い立てるようなことを聞いてしまった。フェイリットはそっと、立ち上がったままのジルヤンタータを見上げる。

「何も知らされていないのはわたしだよ。実の母親のことさえ、よくわからない」

サミュンは母リエダのことを、ほとんど語ろうとはしなかった。メルトロウの話をするときは、いつもその口には祖国のすばらしさを、豊かさを乗せたものだった。誰かの名を聞くのもまた、国王をおいて他に無い。

「母さんは、どうして忠誠を誓おうとしなかったんだろう」

自分が竜だということをよく知っていたはずのリエダが、ノルティス王を愛してはなお、忠誠を誓わずに死んだなどとは腑に落ちない。

ジルヤンタータは暫くの間、考え込むように目を伏せていた。フェイリットは寝台から起き上がった格好のまま、静かになった彼女の目を見続ける。

「それならば、わたくしにも答えは出せましょう。ですがその答えは……わたくしには判断も及ばぬことを、お話ししなければなりません」

そう前置きしたのち、まるで諭すようにジルヤンタータは言った。

「今のあなたに、この真実を受け止める覚悟はおありですか」

真実——なぜ母は、ノルティス王に忠誠を誓わず、産み落としたその血を継ぐ自分までも、隠そうとしたのか。単純に考えたなら、わが子をいらぬ争いから守るためだったのだと頷ける。けれどそれならば、彼女自身が生きる決意をし、自ら子を守るべきだったのではないのか。フェイリットはそう考えて、小さく眉をひそめた。

覚悟はあるかと問われたなら、当然「ある」と答える。それはずっと考えてきた疑問であったし、母が誓わなかったことで、その役目がそのまま自分に負わされることになったのだ。その理由を知る資格が、自分にはあると思いたかった。

「教えて、ジルヤンタータ。母は、どうして人間であることを願ったのか。どうしてノルティス王を、選ばなかったのか……」

フェイリットの返答に、ジルヤンタータはゆっくりと頷いた。思案気に伏せていた瞳をすっと上げると、その低さのある声色で話し始める。

「リエダ様が国王陛下の愛妾であったのは、ご存知のことですね？　ですが真実、彼女は国王陛下にご寵愛をうけていたわけではございませんでした」

フェイリットが驚きに口を開いたのに、ジルヤンタータは目をくれようとはしなかった。まるでこちらの反応を、どうあっても見まいとしている様子だ。話そうとするその決意が、見えない刃物でもあるかのように。その刃の切っ先を、目を瞑ってこちらに向けている——彼女の態度は、そういう風に感じられた。

「身の美しさで一度は目通りしたものの、他の高貴な姫君たちを押し退いてまで、ご寵愛を獲得するような激しさを、リエダ様はお持ちではございませんでした。ですから……国王の目が届かなくなったのは、あっという間のことだったのです。リエダ様の肩身は、そのことでうんと狭くなり、またお味方もいらっしゃらぬ辛い日々が続いたそうにございます。ついには城の塔から、身を投げてしまおうとすら、お考えになりました。

ある日ほんとうに、その塔の高みから下の景色を眺めていたとき……そこにおいでになったのが、国王陛下の王弟——サミュエル・ハンス殿下だったのでございます」

「サミュン……？」

「鳥は羨ましいものだな」と、殿下は仰ったそうです。この地に降りたと思ったら、あっという間に飛び立ってゆく。地上につながるしがらみが、何も無いからだ。それを聞いたリエダ様は、初めて怒ったそうにございます。殿下は鳥の話をしているようで実は違う。飛び降りようとなさ

っていたリエダ様は、非難されたことに気づいたのでございます。“誰にでも、しがらみはある。鳥にも自分にも、貴方にもあるでしょう”と。顔を真っ赤にして言い切ったリエダ様を、殿下は声をたててお笑いになった。あまりに楽しげに笑うその姿に、リエダ様は自分のしようとしていた行いが、急にちっぽけで馬鹿げたことだったのだと感じたのです」

サミュンが大声をたてて笑う光景を、いつの間にか思い出していた。いつだって優しく、いつだって大きな人だった。その強さに、きっと母も励まされたのだ。

「お二人の間は、それから徐々に近づいて参りました。許されぬ仲だということには、お互いに目も向けなかったのでございます」

「許されぬ……？」

フェイリットは、はたと目を瞬かせて、ジルヤンタータを見つめた。ずっと顔を伏せていた彼女が、ふいにこちらに視線をくれる。

「そうです。母上は、あなたを一番よい形でお守りになりたかった。自分で人生を決める自由を、お与えになりたかったのでございますよ。フェイリット。リエダ様の愛した方の……あなたの“お父上”、その人のもとで――」

見開いた目からは、涙さえもこぼれなかった。

――愛している、リエダ……そして貴女の遺した、愛するわが娘よ。

最期まで、祖国への忠義に抗えぬ俺を、どうか赦して欲しい。

噴き出した記憶の奔流。

あの日、血にまみれて死んでいったサミュエルの手にあったもの。それは愛した女性とわが子への、謝罪の言葉だったのだ。

フェイリットは飛び上がるように寝台を抜けて、仕切りの幕を跳ね除けた。



「生きた心地がしませんわ……」

鼻筋に力を入れるようにして、シアゼリタは顔をしかめた。いかにも苦しそうな息はか細く長く、彼女の口からゆっくりと漏れ出た。

「でも、綺麗だよ」

心からそう感じて、アシュケナシムは微笑む。

シアゼリタは真っ青な空と海を背中に、日傘をさして立っていた。白のドレスはふわりと足下に広がり、時おり吹く潮のまじった風にゆれている。

うす青の糸で複雑な刺繍を施され、見方によっては水色にも見えるそのドレスは、イグルコ・ダイアヒンが彼女に贈ったというメルトロー式のつくり。ぎゅうぎゅうに腰と胸を引き締めて、体型を補正するつくりだ。着たことはないけれど、その締め付けは女性にとっては拷問らしい。“骨が折れそうだ”と言ったのは、前にいた教師だったか。いや、侍女が言ったのかもしれない。

「また、アシュさまったらそんなこと」

あどけない顔で微笑んで、シアゼリタは“とんでもない”というように首を左右に振っている。アシュケナシムは目を開いて、顔を斜めに傾けた。

「心外だね。僕が嘘を？」

シアゼリタは間違いなく綺麗だ。

柔らかな色の蜜の肌はそばかすひとつなく、サテンの生地のように滑らか。栗色の瞳はエトワルトには似ず大きな木の実の形をしていて、笑うと印象的に細められる。イグルコと知り合ってから女らしくもなって、動作一つとっても繊細で優しく動く。口から出た褒め言葉に、偽りはなかった。

「誉められるのは嬉しく思いますわ。けれど……、」

「わかるよ。コルセットの締め付けには、メルトローのご婦人でも気絶するくらいだからね」

苦笑しながら肩をすくめ、アシュケナシムは続ける。

「気絶しそうになったらイグルコの側に行くといいよ。よろこんで抱きかかえてくれると思う」

「まあ、アシュ」

一瞬にして顔をしかめて、シアゼリタは片方の眉をわざとらしく引き上げた。

彼女の後ろには、小柄な帆船が停泊している。甲板を歩きかう乗員達の顔はみな、メルトローの者たちだ。これに乗ってシアゼリタはメルトローに嫁ぎ、イグルコは故郷へと帰っていく。

極秘のために船は小さく、また護衛も最小限。この婚姻は、本土に対しての反逆になりかねないためだった。見送りにはせめて国王もと話が出ていたが、終にはそれもなくなってしまった。彼女を港まで見送るのは、数人の侍女たちと、アシュケナシム、そして兄であるエトワルトだけだ。

「……どうしたんだろうね。君の兄上、姿が見えないけれど」

ただでさえ少ない見送りだというのに、一緒に来るはずのエトワルトの姿が先ほどから見当たらない。あれほど可愛がっていた妹が旅立つというのに、どこで油を売っているのか。

アシュケナシシムは目を細めて遠くを見るように、城の方角を顧みる。

「コンツ兄さまは、ちょっと抜けたところがあるお方だから。あ、本人に言っては駄目よ。きっと何でもないお顔をして、ひょっこり現れますわ」

シアゼリタが冗談めかして言うその先から、エトワルトが駆け足にアーチのようになった城の水路を抜けてくる。妹の予測どおり、いつもと変わらない顔をしてにっこりと笑った。

「遅いよ。シアゼリタ姫が行っちゃったら、どうするつもりだったんだい？」

低い声で言いながらエトワルトの顔を見やると、彼は困ったように肩をすくめた。

「すまない。探し物してたんだ」

懐に入れていた布のようなものを手に持ち直すと、エトワルトは「これ」と微笑んだ。シアゼリタは差し出された布を両手で受け取って、兄の顔をそっと見上げている。

「開けて」

どうやら布を渡したのではなく、その中のものを見て欲しいらしい。メルトロウの男なら、女性への贈り物はその手で目の前で開けてあげるものだけれど、彼は根っからのイクパル民族だ。シアゼリタもイグルコと接していて忘れていたのか、彼の言葉にようやく気づいて、その指を布にかけはじめた。

「これ……パスケルタリの……」

驚いたように口を開ける彼女のわきで、アシュケナシシムは身を乗り出した。

光沢のある藍色の布に包まれていたのは、真っ赤で小さな珠だった。小指の先ほどの粒で、絹のような艶がある。

「なんだい？ これ」

たまらなくなっって質問すると、シアゼリタが微笑んでこちらを向いた。

「パスケルタリのたまご。真珠の一種だけど、テナンでしか採れない種なのですわ。とても稀少で……というのも、この赤い真珠は雄しか産むことができないからなの。その条件も、とても稀なのです」

なるほど、真珠のような大きさと色だけが真っ赤だ。光沢も艶も真珠そのまま。桃色や黒は見たことがあったが、この赤い珠は初めて見るものだ。パスケルタリというのが貝の名前なのだろうが、どういう姿をしているものなのか、まったく想像がつかなかった。雄が卵を産むなんて、考えもおよばない。

「お前にやろうと思って。もし向こうの慣習に許されるなら、何かの装飾にでも変えて結婚式で使って欲しい」

黙ったまま俯いて、シアゼリタは小さく首を縦に動かした。ぽたりと落ちた雫が、彼女の両手に開かれた布に染みる。

泣いているのだ……。アシュケナシシムは半ば驚いたように目を開けて、シアゼリタの横顔をじっと眺める。

「兄さま、」

ぱっと上げたその顔に、苦痛のような色が乗る。

望んではいなかった婚姻だったはずだ。けれど、彼女とイグルコの気持ちは傍目に観ても近づ

いた。喜ばしいことではあっても、涙を流す理由がアシュケナシムにはわからない。それほどこの故郷が、家族が、名残惜しいとでもいうのだろうか。

「うん」

優しい顔で笑ったエトワルトに、しがみつくようにしてシアゼリタが抱きついた。

「ありがとう、コンツ兄さま。大切にします」

震える声でそう言って、ゆっくりと彼から身体を離す。真っ白な手袋でエトワルトの手を握って、しっかりと見定めるように、シアゼリタは兄の顔を見上げていた。

「わたくし、わかりましたの。――兄さま。本当に大切な方が見つかったとき、人は誰でも、わが身を惜しまぬものですわ」

ゆっくりと語るように、透明な声で彼女は言った。

「シアゼリタ」

エトワルトは掴みかねたような顔で、離れていくシアゼリタの手を放した。

「アシュ」

兄から離れたシアゼリタが、そっと近づいてくる。柔らかく抱きしめられて、アシュケナシムは驚きそのまま、その手を宙に浮かせた。

「あなたを親友と置いていいかしら？」

「おっと。そう思っていたのは、僕だけだったのかな」

冗談めかすように返すと、シアゼリタが嬉しそうに笑う。その瞳が潤んでいることに、少しだけ違和感を覚えたけれど――挨拶のキスを受け入れて、アシュケナシムはメルトロー式の礼をとった。

「僕もじきに帰るよ。そしたら向こうで会おう。お菓子の焼き方を習おうかな」

「親友」――その言葉が、くすぐったい。自分に友達がいるのだと感じただけなのに、目頭が熱くなった。

「もちろんですわ」

笑いながら涙を流す彼女を、アシュケナシムはなんとか泣かず見送った。船が遠ざかるのを見つめながら、たまっている雫が落ちてこないように、こっそりと空を眺める。

「いっちゃったねえ……」

しみじみと呟くと、溜めていた涙がひとすじ流れていった。また逢えるはずなのに、なんだか寂しい。

「ああ」

そっとエトワルトを見やると、彼は城から現れたときと変わらず、なんでもないような顔をしている。黙っていれば鋭いその横顔をじっと観ながら、アシュケナシムは抜けたような息をひっそりと吐き出した。

君も友達だよ、そう口に出せたらいいのに。

「じき逢えるよ」

喉まで出かかった言葉を飲み込み、アシュケナシムは微笑んだ。

シアゼリタにはじきに逢える。彼が王太子になって、メルトローに行くと言ってくれたなら。

自分たちは、ずっと一緒にいられるのだ。

\* \* \* \* \*

Cher Contz.

——兄さま。わたくし、わかりましたの。

本当に大切な方が見つかったとき、人は誰でも、わが身を惜しまぬものなのだ。

どうしてそんなことをと、お怒りになるのは承知のうち。

けれどわたくしは、

この幸福のためならば、すべてを捨て去ることだって、怖くはなくなってしまったのです。

De Sheatheritta.

\* \* \* \* \*

渡り鳥のメジーが、越冬を終えて空へと昇っていく。真っ白な幾羽もの翼があがる光景は、何度見ても美しい。紺碧の海に点々と浮かんでいた白い影は、春の訪れを待たずして、これからますます減っていくことだろう。

「メジーって大変だねえ。これからまた、北へのぼっていくんだらう？」

片手に茶器を持ったまま、アシュケナシムが歩いてくる。その足音を後ろ背に聴きながら、コンツェは小さく微笑んだ。

「たぶんな」

冬は短い。これからまたささやかな春が過ぎて、長くて暑い夏が来る。本土よりも緑に恵まれたテナンでは、オリーブや柑橘類を収穫し、ほんの少しだけ潤う季節だ。メジーは冬の渡り鳥。彼らの訪れを待って、テナンの鉄の生産は最盛期となる。鉄を溶かし形づくるには、冬の冷たく強い風が必要なのだ。鉄はテナンの唯一の財源。しかし、イクパル相手では、それらのもたらす利益も微々たるものでしかない。国の民が不自由なく食べていくには、春と夏にも何かをしなくてはならない。本土と比べて、雨が降るといふ土地柄が幸いしての生業だった。

「北ねえ……、なんかこっちの気温に慣れたら向こうには居たくないものだね」

「そんなに寒いのか」

「極寒だよ。雪は積もるし吹雪も起きる。どうして山をひとつ隔てただけで、こんなにも気候が変わるんだらうな。シアゼリタ姫は、寒いのは平気だった？」

「さあ……あいつも城に居れば本ばかりだからな」

年頃になる以前なら、よく外に出たがって後をついてきたものだが、最近はそういうことも全くなくなってしまった。未だに外をぶらつきたがるコンツェに、「あんまり危険な出歩きはしないようにね」と言うまでになっている。

「案外平気だったりね」

海辺に出るのをまだ許されていた幼いとき、はしゃいで走り回るシアゼリタの真っ白なドレスと、結い上げぬままの濃茶の髪が、潮風にやさしく振り回される光景が、未だに頭に残っている。

あまりに出たがりやで、恐れを知らない女の子だった。

だんだん歳を重ねて、侍女たちに外に出ることを止められ始めるようになって――大泣きしているシアゼリタを、こっそりと王の部屋へ連れて行った。バルコニーから眺める風景を見せ“これがぼくたちの領土だ。”そう自分達が負っている責任を説いたのだった。それ以来か、シアゼリタは大人しく城の中で勉学に励むようになった。

今になって考えれば、もう少し、子供らしい幼少を過ごさせてやってもよかったのかもしれない。気づけば彼女の周りには、学者やご夫人ばかりが集まり、楽しげに会話しているようになった。同年代の子供と、仲良くしている姿をついぞ見たことはない。

「よかったよ」

ふと思って、口を開く。え？ と隣のアシュケナシムが聞き返したので、コンツェは困った

ように笑って、彼の顔を見やった。

「シアゼリタに歳の近い友達ができる。あいつ、側近といたら婚姻済みのご婦人方ばかりだったろう。お前といると、楽しいって話していたよ」

アシュケナシシムは驚いたように目を瞬かせて、こくりと頷いた。その動作が、いつもの彼らしくはないのでつつい笑ってしまう。まるで褒められた五歳かそこらの子供のようなのだ。

おそらくは彼も、シアゼリタと同じような環境にいて育ったのだろう。それは、そう思えるような反応だった。

「忘れそうになるよ。僕は君を王太子につけるためにメルトローから来たっていうのに。……もう気づいているんだよね？」

「あ？」

抜けたような顔で返すコンツェに、アシュケナシシムの呆れたような目線が向かう。

「気づいてないなんて、鈍すぎる。僕は君と仲良くなって、君を懐柔しろと言われて来たんだよ。でも、今になって君とシアゼリタ姫と……ふたりも友達ができる、ちょっとどうでもよくなってたところだったのに」

辛らつな口調を続けるアシュケナシシムの顔が、少しだけ赤い。おそらくは恥ずかしさを隠すために、口を荒げているのだ。

「もう、好きにすれば。君が王太子になってくれれば、僕としては助かるけど、君が無理をしてまで不本意な道に進むのは、あまり見ていたくないしね。シアゼリタも、きっともっと幸福な道があったのだろうけど」

少しだけ寂しそうに言うと、アシュケナシシムは目の前の窓に額を押し付けた。

海がひろがり、空が開けて、白い羽を持つメジーたちがふわふわと舞っている。その光景を見るときも、宙を見るときもつかぬ目で、ぼんやりと窓の向こうを見渡して、アシュケナシシムは息をついた。

「驚くほどの鈍感だね、君も」

息をつきはしたが、そこに残念そうな気配はなかった。まるで近しい人を呆れるような、親しみが込められていた。

「あのメジーは、テナンで子育てをするんだそうだ」

窓のむこうへ向くアシュケナシシムの空色の瞳を見やっ、コンツェは呟く。

「子育て？」

へえ、と感心したように声をもらすと、アシュケナシシムは窓枠に両肘をついて、じっと海を眺めた。

「ただ、寒さを逃れるために下るわけではないんだね。……あの厳しさから、子を守るためだったのか」

メジーは子育てを終えて、再び北の大地へと上ってゆく。生まれたての灰色の雛鳥たちも、そろそろと空へ飛び立つことだろう。

「もう着いた頃かな。メルトローの雪に驚いているよ、きっと」

今日は、海も空も、彼の瞳よりずっと濃い色をしている。

「もう着いた頃かな」というのが、はたして話のつながりのままメジーを指したもののなのか、それとも同じく北へ渡ったシアゼリタのことを言っているのか、コンツェには図りかねた。

確かにシアゼリタが出航して一日と少し。北への海流は、東へ行くほど早くはないが、それでもテナンとメルトローの近さを思えばそろそろだ。雪に埋もれた真っ白なアルマ山脈が、目についているころ。

「……あれ」

ふと何かに気づいたように声を上げて、突然にアシュケナシシムが身じろぐ。意識を他に向けていたコンツェは、その声にようやく視線を窓へと戻して、目を開けた。

真っ白な鳩だった。

――がん、と窓にぶつかって一羽、その窓ベリの向こう側に降り立つ。

「なんだ、こいつ」

足場を求めるようなカサカサと搔く音がすんで、コンツェは漸く口を開いた。

しかし、不審げに眉をひそめるコンツェを脇目に、アシュケナシシムは慌てたように窓を開いた。吹き入れた空気は思いのほか冷たく、潮風の独特な匂いが含まれている。

アシュケナシシムは寒さに顔さえ歪めなかった。その手に鳩を掴んで、脚から紙のようなものを引きとると、それを開いて読みはじめる。

「どうかしたのか？」

ちらりと見えた小さな紙にはメルトロー語と思われる小さな文字が、短い文面でつながっていた。アシュケナシシムの顔が、見る間に青く冷めていく。

手紙に目を走らせながら、かたかたと震え出す彼の手を見つめ、コンツェはわずかに眉をひそめた。

「一体――、」

何があったんだ？ そう問おうとした刹那。

ばん！ ――これもまた突然に、部屋の扉が開かれる。

伺いもなく現れた訪室者に、コンツェは思わず眉をひそめた。その姿は鎧に覆われ兜こそかぶってはいないが、あきらかに近衛の兵だとわかる者だった。

「何かあったのか」

姿を見るなり口を開いたコンツェの顔を見やり、兵は王族に対する礼をとった。しかしそれは、緊急時に行うような、簡略されたもの。いよいよ事態が尋常ではないことを、その兜に覆われぬ顔が物語っている。

「伝令として参りました」

さっと頭を下げて視線を下ろす兵に頷いて、コンツェは「話せ」と返す。

胸騒ぎがとめられない。訪ねてきた兵はひとりだけであるのに、今にも何十という兵が雪崩れ込むような気さえ錯覚する。

「申し上げます。昨日出航した、メルトロー王国への帆船が、何者かの襲撃を受け撃沈いたしました」

にわかには信じられぬ言葉が、男の口から滑り出る。

嘘だろう、と言おうとして、コンツェは自らを押し留めた。

「……状況は」

「船はイクパル海域で炎上。現在は、シアゼリタ公女の遺体のみがあがっております。他は行方不明ですが……おそらく生存者はいないものと」

そう結んだ男の後ろから、遅れるようにしてアロヴァイネン伯爵の姿が現れる。

「カランヌ……—どうして！！」

彼の姿が見えるや否や、取り乱したように叫ぶと、アシュケナシムはアロヴァイネンの胸倉に掴みかかっていった。

「どうしてこんなこと！ 姫が死んだなんて……！」

—シアゼリタが、死んだ……？

コンツェは額の辺りが、冷たく凍っていくのを感じていた。アシュケナシムのはっきりとした言葉が、うわすべりしていた現実を、急に形づくってゆく。

……シアゼリタが死んだ。

緊張とも、恐怖ともつかぬ震えが、指先を支配していく。

「シアゼリタは……、シアゼリタはどこだ？」

「ご遺体は、メルトローへ。しかる検分を終えたら、火葬ののち遺骨はお返し致します」

静かな声で答えたのは、さきほどの近衛の兵ではなかった。アシュケナシムと似通う面差しを持つ、メルトロー国王の参謀の声だ。

「エトワルト」

アロヴァイネンの胸倉から手を離して、アシュケナシムが振り返る。その顔が涙に濡れてくしゃくしゃに歪められているのを見つけた瞬間、コンツェは自分の膝から力が抜けていくのを感じた。

「……誰の……仕業だったんだ」

声が、震える。静かに問うたコンツェに、カランヌはいかにも物悲しい目を向ける。

護衛は最小限だった。一国の王女が嫁ぐというのに、援護の船は一隻もなく。ただ何十かの鎧兵を乗船させて、北へと向かわせたのがそもそもの間違いだったのだ。

その“襲撃”した者たちが、どこの手のものであるのか——……。考えたくは無いのに、何故だかはっきりと見当がついてしまう。悲壮な顔をした彼が、ついでその名を告げるのを待って、コンツェはゆっくりと瞳を閉じる。

「イクパルです」

予想とまったく同じ返答を口にしたカランヌに向けて、コンツェはそれ以上の問いかけをすることができなくなった。

「ですが未だ、確認はとれておりません。詳細は我々の——……エトワルト公子、どちらへ、」

「エトワルト！？」

背後で呼ぶ声が聞こえるのを、振り切ってコンツェは走っていた。



父は、重鎮達は、一体何をしているのか。遺体をメルトロローにやってまで、彼らは何をのんびりしているのだ。

「父上！！」

父の部屋を開け放ち、悲痛な声で叫んだ息子を、テナン王は静かな目で振り返った。

「コンツカ」

たたらを踏んで飛び込んだ部屋に、国の重鎮たちが一斉に介しているのを確認して、コンツェは足を押しとどめた。あがっていた息を、落ち着けるように吐き出すが、抑えようもない鼓動の速さはどうにもならない。

「エトワルト王子、落ち着きなされ。ここで喚き散らしても、シアゼリタ王女が戻られるわけでもない」

一番の老齢である元老の長が言うと、その曲がった腰のままこちらに歩み寄ってくる。コンツェは肩で息をしながら、皺に埋もれた元老の長を見つめた。

「死んだのですか……本当に、死んだのですか？」

「わかりませぬ。確認はとっているところです」

しわがれた声は、コンツェの耳にはぼんやりとしか届かなかった。聞きたくない事実が、もやもやと宙を漂っていく。

「護衛の帆船を、もっとつけるべきであった。それは間違いなく、本土を恐れた我々の落ち度だ」

テナン王の声が、加えるように続けられた。

何故、そんなにも平気な顔をしていられるのだろう。

たったひとりの娘を失くしたというのに、その顔には、涙の流れたすじさえ見つけることはできなかった。

「俺が、……俺が行きます」

「エトワルト」

「本土に戻ります。鷹を送ってください。本当にシアゼリタを殺したのが、本土——……イクパル皇帝なら、確認次第かならず戻って来ます」

コンツェの言葉は音のない部屋に静かにこだまし、テナン王はほんの一瞬、顔を歪めて見せた。その顔にようやく哀しみの色を見つけて、コンツェは目を伏せる。

「王太子にして下さい、俺を。ここへ戻って来たら、……もう我俣は言わない」

深い深い息のあと、テナン王がゆっくりと頷く。

それを澄んだ目で見届け、コンツェは一同のそろそろ玉座の間を離れた。

どこをどう走ったものだろう。

気がつけば、フェイリットは空を見上げていた。バスクス帝とともに雨空を見たあの屋上で、たったひとり。

「……寒い」

冷え冷えとした空気を固めたような、真っ白な月が浮かんでいる。しん、とした音のない世界は、妙に現実味がなかった。

一日は暮れてしまった。それどころか、きっと時刻は夜明けにも近い頃合いだった。たとえこれから向かって、水脈の地図を完成させることは明け方までには叶わないだろう。

両の手を身体の前に、こすり合わせる。少しは寒さが紛れるだろうと思ったのに、すり合わせる微かな音が、よけいに気持ちを沈めるだけだった。フェイリットは小さく肩を震わせて、自らの身体を支えるようにかき抱く。

「見栄っ張り」

自分を小声でののしって、フェイリットは顔をしかめた。覚悟なんて、できていないではないか。あげく“一日のうちに完成させる”と言い張った水脈の地図でさえ、約束を果たすことはできなかった。

バスクス帝は、夜が明けたら出発する。新しいギョズデジャーリヤー—ヒーハヴァティ・ウィエンラを伴って、帝都サグエに帰るのだ。地図を完成しなければ帰らないと言った手前、それについて帰れないのは、なんだか寂しいことだった。フェイリットは深い吐息をはきだして、目の前に浮かぶ白いかすみをぼんやりと見つめた。

このままここで日の出を見るのも、悪くはないかもしれない。そんなことさえ考えはじめた矢先—、

「こんな所に居たのか」

突然、砂を踏む音が背中に響いて、心臓がびくりと跳ね上がる。

「え、」

驚きのままに、フェイリットはゆっくりと振り返った。その先で、目に飛び込んだ人の顔をじっと見上げて、力なく微笑む。

「陛下……」

夜空にも似た群青のローブを首元まで着込み、腰に湾刀をはいて、しっかりとターバンまで巻いている。今にも砂漠に出てゆけそうな彼の姿に、フェイリットは思わず笑ってしまった。

なんだかこんな光景を、ずいぶん昔に見たような気がする。ひとりぼっちで空を眺めて、ふと背中にかかる静かな声に—……振り返る。あれは、いつのことだったのだろうか。振り返ったその先で、今と同じく、心から安堵したのを覚えている。フェイリットはいぶかしむように首を傾げて、いったい自分は何を思い出そうとしているのか考えようとした。けれど、

「そんな薄着で突っ立っていたら、風邪をひくぞ」

彼の次の言葉を聞いたとき、それが何であったのか……誰であったのか、わかってしまった。

フェイリットはその瞳を大きく開いて、溜め息のような息をもらした。――言い知れぬ既視感。サミュン、と小さく呟いたけれど、彼に聞こえることはなかっただろう。

「見る、もう夜明けだ」

月を見上げ、バスクス帝は静かに言った。

空の色はやわらかな紫色をたたえていて、今にも顔をだしそうな太陽と、すこしだけ逃げ遅れてしまった霞んだ細い月とが、並びたとうとしている。つられて上を眺めてから、フェイリットは溜め息の混じる声で「きれいですね」と返した。

「こんな風な伽話があったな。神が太陽と月を愛でる……大陸創世譚だったか」

フェイリットは目を丸くして、バスクス帝を見つめた。

「ご存知なんですか」

バスクス帝はフェイリットに目を移し、苦笑する。

「母親がな」

「あ、あの。私……知らないんです。よろしかったらお話してくださいませんか」

知らないはずはなかった。あれほど好み、せがんで聞いたお伽噺なのだ。それがよもや彼の口から聞こえ出ることになろうとは、思ってもみななかっただけで。

「そんなものを語る柄ではないんだが」

フェイリットの願いに、バスクス帝は苦い顔を返す。すがるような目でバスクス帝を見つめて、フェイリットはお願いします、と目を伏せた。

「……昔、空には沈まない太陽があった」

ひと息の呼吸ののちに、バスクス帝は話しはじめる。彼の声を子どもに聴かせたなら、きっとその眠りを妨げることはないはず。それほどに深く静かな、夜のやわらかな闇さえ思わせる音だった。

「太陽は片時も休むことを知らず、まばゆく気高い光を地上へと降らせていた。神はそんな太陽を愛し、側から離さず、明るく美しい彼女を慈しんでいた。

だが、ほどなくして月が生まれた。弱く儂い、その白肌は触れることも躊躇うほどに淡く輝く娘。

神は、一目で月を愛してしまう。

……太陽は嘆き悲しんだ。だがいくら太陽が嘆き、叫んでも、神の目はすでに彼女の元には向かなかつた。月に嫉妬し、羨んだ太陽は、ならば月を燃やしてしまおうと考える。……自らを炎に包ませたそのさまは、もはや美しい彼女の姿さえ紅く燃やして隠してしまった。そうして月へと向かっていくが、寸でのところで月は、太陽から遠く逃げ去ってゆく。

神は平等な愛を与えてやれなかったことに後悔した。万物を照らす昼と、生き物にやすらぎを与える夜をつくり、太陽と月を交互に愛でると彼女たちに約束した。

しかし元々ひとりだけ愛を得ていた太陽にとって、納得がいかぬ話だ。それでもこの嫉妬を打ち明ければ、そのときに本当に神に嫌われてしまうかもしれないと考えた。彼女はくやしきのあまり、月が昇るたびに涙を流した。紅く地上に降り注いだ炎の涙。それはやがて大地を乾かし、われわれの砂の世界を、作りたらしめた」

深く深く響く、包み込むような声音と、幼い頃から毎日のようにせがみ聴いたお伽噺。

彼の声を聞きながら、フェイリットはそっとしゃがんで地面を見つめていた。

「どうした」

彼の声がかかり、そっと瞼を開けると、目のふちから何かがこぼれた。

「……あれ。わたし、」

こぼれたものが何だったかを、考えてみる。

けれど立て続けにぼろぼろと落ちるそれを、もはや考えるべくもなかった。

思えば随分、泣いていない。サミュンの死を目にしてからというもの、まるで渴いた砂漠のように一滴も雫を落とすことがなかったのに。

「どうしたんだろう」

押しつけていた両膝に、涙を拭って顔を上げると、紫にきらめく空が見えた。いまだ残る星のまたたきの狭間から、するりと一筋の光がこぼれ落ちる。

今までどこか、本当は生きているのではないかと都合よく思っていた。心臓の鼓動が聞こえなくなってもなお、何かの奇跡が起きて、彼が突然姿を現すと。不死の血を持つ自分の、血縁である彼もまた、不死であるかもしれないと、どこかで思っていたのだ。

けれどそんなことが、起きるはずがない。彼はもう、戻らないのだ。

彼は人間なのだから。

「泣いているのか……、タブラ＝ラサ」

流れる星の軌跡を見つめて、なんだかようやく、サミュンが死んだのだという実感が胸に染みだ。バスクス帝の語る、夜の空にも似た深く静かな声が、まるで彼への弔いであるかのように耳に残る。

「珍しいものが見られたな。死ぬほどの怪我でさえ泣かないやつが」

皮肉げに言いながらもそばに来た足音に、フェイリットは立ち上がって振り返る。ありがとうと礼を言っても、彼にはわからないだろう。自分はイクパルのみんなに、……こんなにも近くにいるみんなに、何一つ本当のことを話せていないのだから。

「……フェイリット、」

名前を呼ばれて、噛みしめるように目を瞑る。母から唯一貰った――……父から呼ばれて育った名前。涙がぼたぼたとこぼれて、頬を滑って落ちていく。

頬を伝う涙を、まるごと覆い隠すように彼の手が添えられて、フェイリットはその手の甲に、自分の両手をそっと重ねた。

今ならばわかる。自分はこの人が、心から好きなのだと。

サミュンへ向けていた愛情とは、別のものであるのだと。

「わたし、その名前と呼ばれるの、好きです」

照れたように笑って、フェイリットはバスクス帝に目を戻す。

「……抜けた顔で笑う」

呆れたように言いながら、バスクス帝は息を吐き出した。

笑っているとさらに涙がこぼれたけれど、それもすぐにわからなくなった。乳香の香りが鼻先

をくすぐり、視界が闇に押し包まれる。

「私のことも呼ぶか、」

抱き寄せられたと気づくまで、しばらくの時間がかかった。包まれる安心感が、とても心地よい。しがみついて目を閉じて、じっと耳を澄ませた。胸の半ばにしか届かないが、ゆっくりとした彼の鼓動が聞こえてくる。

「……え？」

「ああ、そうだった。水脈の地図を見たぞ。よい出来だった」

抱かれたまま、ぽん、と頭の後ろを撫でられて、フェイリットはしがみついた腕を離す。

「うそだ、わたし途中で……」

「ホスフォネト公とオフデ侯が、仕上げたようだ。お前に会ったら伝えて欲しいと頼まれた。安心するように、と」

よくやったな、そう言って微笑んだ目前の人を、フェイリットは泣き顔のまま笑って見つめた。

「戻るぞ。出発までまだ時間がある。私の室がいいか、それともまたハمامにするかは、お前に任せよう。どちらがいい」

「え！」

悪戯げに笑う彼の顔を見やっ、なんとなく言われていることの意味を察したフェイリットは、誤魔化すように別の方向に目をやった。

「――そ、そんなことより。戻ったらもう一回……聴かせてくれませんか」

「大陸創世譚？　なんだ、気に入ったのか」

バスクス帝が意外そうに目を細めて言う。

「はい、すごく」

「こういうのは普通、逆だと思うが」

夜半の褥で女が男に語り聞かせる――もしくは母親が、ねむりにつく子どもに語って聞かせるのが、確かに彼の言う「普通」だ。渋るような顔で首を傾げるバスクス帝を見て、フェイリットは笑む。

「わたし男親に育てられたんですよ。だから、男の人のお伽噺は大好きなんです」

にっこり笑いながら言うと、不意にバスクス帝が無表情になる。何を言おうとしたのか口を少しだけ開けて、仕方ないような顔で溜め息をついた。

「自覚のないお前に、あれこれ言っても無駄だとわかった。さあ、帰ろうフェイリット――帝城に」

「はい！　戻ったら、アンに一番に会いにいかなくちゃ。何も言わずに来てしまったんです」

鼻歌もかろやかに走りだしたフェイリットを眺めると、バスクス帝は複雑な面持ちで肩をすくめる。

けれどしまいには、そっと柔らかく微笑んでいた。

\*

お前が好きだと言った伽話を、何百と集めたことだろう。

もうその耳に届けることができなくなって、私はたまらなく 寂しい——……。

\*

空は、海との境がわからないほどに青々としていた。

シアゼリタを送り出した灰色の空は、もうどこにも見当たらない。雲さえも淡く染まり、それをじっと見上げるようなエトワルトの背中が、ぽつんと寂しく港に佇む。

“彼女”が再びこのテナンに戻る可能性があるなら、それはもう人の形ではないだろう。炎に焼かれ灰色の砂になり、ほんの小さな箱になる。つい何日か前まで、楽しげに笑い菓子を焼いてくれた少女なのに。蜜色のきれいな肌も、栗色のやわらかな髪も、笑顔にゆっくりと細まる大きな瞳も……もう見ることはできないのだ。

「……エトワ」

アシュケナシムは声をかけようとして、口をつぐむ。握り締めた右手に、小さな紙が入っていた。鳩が運んだ——イグルコが真実を書き記した手紙。

エトワルトの……優しい復讐の矛先が、この紙切れひとつで大きく変わる。見せるべきか、見せぬべきか。けれど真実を知って尚、彼が彼でいてくれる理由を、アシュケナシムは探し出すことができなかった。

「ああ、アシュカ」

ことのほか温和な顔で振り返った彼を見ながら、アシュケナシムは微笑んだ。「手紙」をそっと風にのせ、海のむこうへ捨てやって。

「僕も行くよ。イクパルなんだろ、行き先」

見せることはできない。

自分たちが“ただの敵”となる現実など……見せたくはなかった。

\* \* \* \* \*

「ハレムが……縮小されるとは……」

そわそわと椅子から立ち上がり、男はその背もたれの縁をたたいた。

「し……しかし、証拠はあるのかね」

落ち着かないそぶりが、なんとも噂通りの男だ。そんなことを思いながらも、カラン又は朗らかな顔で微笑んで見せる。

「証拠など、必要ないものと思いましたがよ。イクパル皇帝がハレム縮小を提言するまで、もう猶予は無いですよ。はっきり申し上げますが……トゥールンガ“元”元老院議長どの。いいえ、元帥閣下とお呼び致したほうが宜しいでしょうか？ あなたのその“地位”は、いったい何に裏づけされているものなのか。まさかお気づきでないわけでは」

椅子の横で、わずかに男——イクパル帝国元帥の位にある男は顔をしかめた。これといって特技は無く、議席をあたためるだけの人生に半分をそそいだ男には、小さくは無い自尊心が、しっ

かりと植えつけられている。それは自らの保身のために、自分の所属である皇帝直轄領（サグエ）から、テナン公国まで海を渡ってしまうほどの大きさ。

テナン公国の瑠璃宮とよばれる、客をもてなすための離塔の一室で、カランヌは自らは椅子に腰を落ち着けたまま目の前の男を見やっていた。

「……皆、儂を世襲の七光りだなんだと言いつけている。たしかに、戦争などこの目で見たことはないが、それでも儂は元帥だ……生まれながらの元帥なのだ。ハレムの縮小ごときで、……この地位は変わらん」

ただ元老院という囲いの中において、出る議題に反論ばかり述べていけばよかった——この男の「元帥」という階級は、禄を増やすための胸に下げた飾りでしかない。今や帝国に暮らす貴族達のほとんどが、ハレムにジャーリヤー—すなわち血縁の娘を置くことで、禄を受けて生活している。ハレムが縮小されたなら、恩情として受けているその禄が減らされることは目に見える事実なのだ。

都市を少しも離れたなら、下級の貴族達はもはや市民と変わらぬような暮らしぶりをしている。そのなかでも未だ帝都に邸宅を構え、優雅に暮らしてられる現在の状況を支えるのは、ハレムに居る五人の娘（ジャーリヤ）たちであることは、わかりきったことだった。

「ハレムが縮小されれば、最下級の貴族に下賜されることにもなりかねません。そうなれば、逆に貴方がその嫁ぎ先の援助をしなければならなくなる。五人のジャーリヤを皇帝の閨に上げていたという切り札もなくなり、元帥位……果ては公爵位さえ危ういものになるでしょう」

話を全部聞いたあとで、トゥールンガは焦りの見える眼差しをこちらに向ける。カランヌはそれを静かに受け止めて、ほんの少し、首を斜めに傾けて見せた。

「では、ここからが本題です。貴方を唯一助けることができるご相談を致しましょうか」

「それで本当に、……わが一族は守られるのだな？」

不安げに問うトゥールンガの口元では、まだ立派に黒々とした口髭が怖ろしげに震えていた。威厳をあらわすはずのそれが、どう譲っても滑稽にしか見えない。カランヌはゆっくりと頷いて見せて、そっと囁くような声で告げた。

「シアゼリタ公女をご存知ですね」

「シアゼリタ……テナン公の一人娘ではなかったか」

カランヌは肘掛に肘をついて、その指先で顎元を掴んだ。視線を下に落として、考え込む風をつくると、ゆっくりとまた瞳をトゥールンガへと戻していく。

「そう。そのご存知のシアゼリタ公女の嫁ぎ先は、メルトロロー王国なのですよ」

「な……！ う、裏切りではないか！！」

椅子の背もたれを驚掴むように両手で握り締めたトゥールンガは、悲鳴に近い震えた声を上げた。メルトロローとイクパルは、積極的な交戦さえしていないものの互いを敵国と定めている。そんな両国にとってみれば、婚姻など考えにも及ばぬ法に触れる行為。トゥールンガの驚きと恐れは、正常な反応といえた。

「いや、だが、それではおかしい。貴殿はメルトロローの侯爵だと名乗ったな？ アロ、アロ……」



「アロヴァイネン」

「ああ、すまぬな……アロヴァイネン侯。メルトロー民族のはずの貴殿が、なぜテナン公国に……」

カランヌは小さく笑うと、肘掛にあった腕を下ろし立ち上がった。

「できればその質問を、この室に通されたときに聞いていたかったものです」

「あ……ああ、そう、だが、テナンがメルトローと“組む”だろうというのは、前々から噂されていたことであつたし……」

「ええ。それが現実のものとなりました。ですが我々にも事情というものがある。友好国と認めるのは容易いことですが、さすがに異国の血を王家に連なる家柄に入れるわけにはいかないのですよ」

トゥールンガは話を聞きながら、呆けたような顔になる。何を言っているのか理解できない、そんな顔だ。

「ですから、貴方に大義名分をさしあげます。シアゼリタ公女を殺害し、首をイクパル皇帝の御許に持ち帰っておあげなさい。貴方はその栄誉をとりたてられ、おそらくは皇帝に……いいえ、ここではトスカルナ宰相と言うべきでしょうね。あの氷の頭脳を持つ男に、きっと一目置かれることになる。――一族を一気に盛り返すことができますよ」

「あ……それは本当かね？」

嬉しそうに顔を歪めた男を見やっ、カランヌは深々と頷き、自信に満ちた面差しを見せた。

「ええ。必ずや」

嘘ではなかった。必ずや彼は、“一目置かれる”ことになる。

……シアゼリタを暗殺し、両国に「戦争」という名の裂け目を作った者として。そしてそれはそのまま、イクパル皇帝の大きな罪へと変わるのだ。

トゥールンガが去ったあと、その方向とは逆の扉が叩かれ、返事を待たずに男が出でる。氷の頭脳と仇名される、イクパルの宰相に負けず劣らずの無愛想な顔をさらに歪めて、彼――イグルコは息を吐いた。

「俺はやはり反対だ」

カランヌは彼が歩いてくる床の硬い音に耳を澄ませ、ふっと笑う。

「おやおや、情が移りましたか。しかしまだ、聞さえ共にお過ごしでないのでしょうか」

若くして取り立てられ、海軍の総督になるはずの道を陸に揚げた男は、それ以来浮いた話を流していない。かれこれ十年、女にさえ興味がないのだと囁かれていたほど。そんな男だからこそ、メルトロー国王もテナン公女との婚姻を許諾したのだろうに。

「抱く気になればいつだって抱ける」

こともあろうに、不機嫌そうな表情をつくりイグルコは口先を曲げた。あくまで“ふり”の予定だった婚姻。だが今の彼の顔を見るなら、それさえ疑わしく感じてしまう。

テナン公国に訪れ最初にシアゼリタ公女を見たとき、確かに彼女はまだほんの子供であった。

栗色の髪は結い上げることなく、やわらかそうなドレスの腰元に垂らして、首を傾げてあどけなく笑う少女。御歳十四の、婚姻には早からぬ年齢ではあったが、それでも三十を越えた男の隣に並ぶのは不自然だった。それが、ほんの数ヶ月、一気に大人の空気をまとい始めたのを、気づかぬふりはできない。触れ合うほどの近さはなくとも、両者の間には明らかな気持ちが存在したのは確かだった。

「でも、本気ではないのでしょうか？」

牽制をこめて、カランヌは厳しい声色を出す。ちらりと見やったイグルコの顔は、もはやいつも通りの無表情だ。

「ああ。――イクパル帝国を我が領土とするには、テナンが大きな瘤になる。どうあってもテナンをイクパルから切り離し、互いを潰し合わせねば」

母方の血筋にかのサミュエル・ハンスの流れを汲むイグルコは、治世においても頭の回る男だ。けれども海を愛し、海に身を沈めようと青空の下に過ごしてきた彼は、その実の才能が陸の王宮にあったことを、いまだ自ら認めてはいない。

「そう、貴方も一枚咬んだ策です。共倒れになってくれれば、我々メルトロ―は何もする必要はない。均衡のとれるよう、裏から物資を援助するだけでいいのですからね」

「……わかっている」

苛立たしげに呟くと、イグルコは先ほどまでトゥールンガの横にあった椅子に腰を落とした。聞こえないほどの溜め息を口から洩らして、足を組み椅子の背に身体を押し付ける。

メルトロ―がイクパルを制圧するために、一番の壁となるアルマ山脈。その未踏の高山に無駄な人員は裂かず、自国の被害は最低に抑えてすべてを手中に収める。

大陸を制覇していくはずだった「道具」はこの手にはなく、加えて寿命が近づいている。

アシュケナシシムの体調は、見かけほど芳しくないのをカランヌは悟っていた。辛い顔ひとつ見せないが、彼の従者によれば嗜血しない日は最早なくなったという。その彼と“双子”である「彼女」にも、死の兆候は顕われているはず。

「メルトロ―国王は、未だ不老長寿をあきらめてはいない。機を見てサディアナ王女を奪還するよう言い遣っている。次は失敗は許されないとのこと命じだ」

また自分にその役目が回ってくるのか。内心で息をつきながらも、カランヌは柔らかく微笑んだ。

「まあ……テナンが独立を宣言した状況下、それに手を貸すと張り張るメルトロ―王国が“サディアナ王女を返したら中立に立とう”と提言したなら、乗らぬ船ではないでしょうね。なにせメルトロ―とイクパルでは、軍事の力にさえ百年の差が開くのですから」

イグルコはカランヌの自信げな言葉を無言のまま聞いて、首を落として頷いた。

「護衛の船は一隻もつけない。出航し、イクパル帝国本土の海域に差し掛かったら、シアゼリタを殺しトゥールンガに首を持ち帰らせる。……それで、いいのだな」

「ええ、もちろんです」

カランヌは笑みを残したまま、椅子からそっと立ち上がる。

それでいいのだな――まるで自分に言い聞かせ、問いただすかのような言葉。けれどカラン

又は、その震えた彼の最後の言葉を、聞かなかったことにした。

帝都への出発を控えた朝。ジルヤンタータが脛あての麻布を巻きつけていると、砂地を見下ろす視界に、小さな足がふたつ並んだ。

「おはよう、ジル」

足をたどって上を見上げ、ジルヤンタータはその声の主を見つめる。

「フェイリット……」

どちらへ行かれていたのですか、心配したのですよ——そう言おうと口を開けて、ジルヤンタータは息をひそめた。

本当にあれでよかったのか。

母・リエダは国王の愛妾でありながらその実弟と結ばれ、挙句生まれた“彼女”は今、メルトロー王国の正式な王女として、王籍に名を並べているのだ。ねじ曲げられた現実の中で、知らなければよかったと、彼女は思っているのかもしれない。

師と仰ぎ、兄と慕い、父のように守られて……恋心さえ抱いた育ての親が、本当に血でつながった「父親」だなどと。サミュエル・ハンスの血塗られた最期は、きっと更に辛い思い出になったはず。

不安な気持ちを隠そうともせず、ジルヤンタータは何も言わぬままフェイリットの顔を見つめていた。一晩中泣いていたのか、その瞼は赤くむくみ、水色の瞳を半分近くまでも覆ってしまっている。

「久しぶりに泣いたせいで、こんなになっちゃった」

けれどその泣き腫らした顔が清々しいまでの笑顔を浮かべたとき、ジルヤンタータは「ああ、」と息をつかずにいられなかった。

「もう平気だよ」

——フェイリットが、泣いた。

それはまるで、呪縛から解き放たれたように感じられる言葉だ。サミュエル・ハンスを喪ってから一度も泣けなかった彼女は——きっと、彼の死を乗り越えた。

「何も言わずに飛び出しちゃって、ごめんなさい」

彼女の笑顔が戻ってきた。そう思えるほど、けろりと笑って見せて、フェイリットは抱えていた黒のローブを身体に巻きつけ始める。

「またそのような格好を」

偽る必要がなくなったので顔を黒く塗るのは止めたようだが、身なりは依然として小姓のまままだ。ターバンから色の薄い金色の巻き毛が、少しだけ溢れてくるくと踊っている。刈るほどに短かった髪も、今では耳にかかるほどの長さだ。出会ったころよりも、随分と伸びていた。

「ヴェールとアバヤをお召しになった方が、日差しも防げますでしょうに」

いつも通りの低い声で言いながらも、ジルヤンタータは微笑んで彼女の脛あてを結んでやる。

太陽が砂上にきらめき、砂漠は相変わらず灼くような朝を迎えていた。

マムルーク

奴隷軍人はシャルベーシャを含めて三人、少し離れて待機している。バツソスに来た時には、

遊牧の民が着る紺碧の民族衣装を纏っていた彼らだが、今は完全に軍装で身を固めていた。

帰路はヤンエ砂漠を通らず、新たにギョズデ・ジャーリヤへと召し上げられたウィエンラ公女の安全も兼ねて、街道沿いに行く予定なのだ。つまり、もう堂々としてもよい、ということになる。

「わたしたちも隊列に加わろう」

脛あてを付け、顔をターバンの裾で巻き込んで隠すと、フェイリットは布でくぐもった声でジルヤンタータを呼んだ。

ギョズデジャーリヤ・ヒーハヴァティの乗るはずの“輿”は、一番後方に位置づけられている。まだ誰にも持ち上げられていないが、腰丈ほどの台座に乗せられて、艶やかな若草色の天蓋が風にふわふわと揺れていた。

中までは見ることができないため、本当に中に彼女が乗っているかは確認することができない。零番目のフェイリットが騎馬で、一番目のヒーハヴァティが輿だなどと、なんだか釈然としない扱いだ。――もっとも、輿に乗ることを当然のように断り、「人手がかかるから馬に乗りたい」と言っただけなのは、フェイリット自身なのだから、不公平だと喚きたてるわけにはいかない。

「大成功だったね。バツソス公国との友好は保てたし、いざという時には傭兵団もお貸しくださいるって。ウィエンラ公女も、陛下に協力的だよ」

ジルヤンタータが眺めている方角に気づいてか、フェイリットは公女の名前を口に出した。未だに、彼女がバスクス帝をどう思っているのかが不思議でならない。好いているのかと思えば、こんなにも澄んだ目で、自分と別の“側室”を見つめている。

そうしてふたり、言葉もないままに輿を眺めていると、風に揺れていた若草色の天蓋が不意に真ん中で分かれた。

「誰か……出てきますね」

布が左右に分かれ、何者かの頭が突き出る。ヒーハヴァティが出てくると思っていた輿から突き出た頭が纏うのは、どう見ても女の被るヴェールではなかった。

「陛下」

横でフェイリットが呟くのと同じくらいに、バスクス帝が砂地へと降り立つ。ジルヤンタータは目を細めて、輿の方を注視した。

彼の降り立った地面の砂が空気に浮き上がって、黄色い霧ができています。上に上がったそれを見上げるような動作のあと、その目線の先にある天蓋が再び開いた。誰かと考えるまでもなく、ウィエンラ公女その人。

少しだけ高いところに位置する輿から出ると、ウィエンラ公女はゆっくりとした動作で先に降りたバスクス帝の肩を掴んで、地面にそっと足を落とした。ありがとうございます、とでも言ったのか、耳元で何かを囁き、その艶やかな笑みを披露していた。

「まあ、仲がおよろしいこと」

“協力的”なのではない。“恋わずらっている”のだと、彼女に説明してあげたいものだ。ジルヤンタータは、微笑んだのちにしな垂れかかった妖艶とも言えるヒーハヴァティから、まるで嫌な

ものでも見たように目を反らして、肩を竦めた。

「ううん、そうだね、」

まるで何かを考えるように首を傾げると、フェイリットは気のない返事を口に出す。どこに興味を奪われているのか、その瞳は違う場所を彷徨っている。こういう態度が、バスクス帝への気持ちを疑わせるのだ。“陛下”と呼んだその口ぶりは、好いているような響きがあった。なのにそう見えて、水色の瞳は次の瞬間には、別のものを捉えている。

「フェイリット？」

「ああ、どうしたの？」

「……どうしたのって、」

こちらの台詞ですよ、と言い切る前に、ジルヤンタータは城門の方向から馬を引いた男が歩いてくるのに気づいていた。オフデ侯爵らしき身なりをしているが、たった一人馬を引いて“歩いて”くるなどと、首を傾げてしまう光景だ。彼ほどの身分なら、自分の小姓に馬を引かせるか、その馬に乗るかしてもいいものなのに。

「オフデ侯爵閣下。わあ、きれいな馬ですね」

両手を胸の前で重ね、すっと頭を下げて礼をすると、フェイリットは感心したような声をあげた。

「月毛の馬は、珍しいですよ」

笑って言うオフデ侯爵に、フェイリットは深々と頷いている。

それはまるで、本当に淡く輝く月明かりのような、素晴らしい牡馬だった。

「月毛の馬は、月とは名前がつくものの大抵が白やうす茶です。毛色も斑があったり模様が出たりすることが多いもの。このように単一色で、しかも淡い金色を帯びているのは、わたくしも初めて拝見いたしました」

からだは淡い黄色だが、たてがみは少し色を抜いたような白さを持っている。しなやかな筋肉が背中から尻に浮き上がり、まるで「走りたくてたまらない」とでもいうように足踏みばかりを繰り返していた。

ここまで均整のとれた体躯は、滅多に見られるものではない。メルトローは気候が冷たく、馬の育つ環境にはあまり向かない。そのために温暖な遠方から貿易で賄われているのだが、これを見ればはっきりとわかる。今まで自分が目にしてきた馬は、しょせん「貿易品」であったのだと。いい馬は、どこの国でも自国に隠しているのではないか。そう思えるほど、ジルヤンタータは驚いていた。

「お気に召しましたかな」

牡馬を落ち着かせるよう、たてがみの生える首筋の辺りを叩いてやりながら、オフデ侯爵はフェイリットに笑顔を向ける。

「この馬は、私どものしでかした無礼の詫びに、バスクス二世陛下に献上する予定だった馬です。しかし、ジャーリヤ・タブラ＝ラサがお気に召せば、差し上げるようにと」

「えっ、わ……わたしにですか？」

それこそ空を仰ぐほどに驚いて、フェイリットはオフデ公爵を見やった。

「ええ。褒美だと仰っていましたが」

オフデ侯爵と牡馬を目の前に、フェイリットは口を開けて啞然とする。

「誰が、」

「もちろん、バスクス二世陛下ですとも」

“褒美”というのは、おそらくは水脈に関与する彼女の働きぶりに対するものなのだろう。彼女は寝る間も削って、よくやっていた。それをしっかり見ていたとは、バスクス帝も捨てたものではない。

「え、でも、わたし賭けには……」

「賭け？」

ジルヤンタータが問うと、フェイリットは誤魔化すように声をたてて笑った。水脈を当てたことへの褒美ではないなら、一体なんだというのか。

「なっ、なまえは。侯爵閣下、名前はあるんでしょうか、この子」

「アルスヴィズ。あらゆる要求に応える賢い者、という意味です」

「……アルスヴィズ」

「母馬に似て賢い馬ですが、いささか融通がきかない荒い気性をしております。しっかりとたずなをお持ちください」

たずなをオフデ侯爵から受け取って、フェイリットは馬のたてがみをそっと撫でた。指を絡めるとぶるる、と大きく息を吐く。琥珀のような瞳が、観察するような輝きを持って、じっと彼女を見つめていた。

「よろしくアルスヴィズ」

フェイリットは馬の首筋を軽くたたくと、鐙に足を掛けて乗り上げる。体重がかかり、アルスヴィズは身じろぐのように首を振ったが、怒ってフェイリットを振り落とすようなことはなかった。

「あの、陛下は」

「……それが」

鞍の上に身体を落ち着けると、オフデ侯爵はどことなく歯切れの悪い返事を返した。バスクス帝の姿を捜せば、先ほどに居た輿のところから少し離れて、ヒーハヴァティと二人、真っ黒な青毛の馬に乗っている。

「実は、輿にお乗りになるよう説得したのだが、嫌だと仰られてしまいましたな」

しばらく黙っていたオフデ侯爵が、言い辛そうにしながら口を開いた。

「輿を？」

フェイリットは意外そうな声で返すと、ウィエンラ公女のいる方向をふたたび見つめる。

後宮で“公女然”と暮らしていた彼女にとって、馬での長距離の移動は、さぞや辛いもののはず。ジルヤンタータはフェイリットの反応を見やりながら、そう一人ごちた。もしかしたら彼女も、同じ思いを抱いたのではないか。目に映ったフェイリットは、そう思える表情をしている。

「気骨のあるお方なんですね」

呟きながら、彼女は感心するように息をもらした。

輿に乗らないとなると、使われる人の疲労もずいぶんと抑えられる。まして街道沿いに行く長距離の移動では、日にちも三日程度は見込まねばならないのだ。その間、限られた人数が輿を扱うことを考えれば、ヒーハヴァティの選択は、確かに臣下想いの「すばらしい行動」だ。

「ああ、そうですね」

僅かに頷いて、オフデ侯爵は苦笑した。その先に何かの言葉をつなげるはずだったのか、開けていた口をそっと閉じる。

フェイリットはじっと、馬に乗せられるヒーハヴァティを眺めている。彼女はバスクス帝の前に居て、やはりしな垂れるように彼の胸元へ身を寄せていた。その彼女の目が、一瞬だけこちらに……フェイリットのいる辺りに向けられたのを、ジルヤンタータは見してしまう。そっと馬上のフェイリットを仰ぐと、彼女はそれを見てはいなかったのか、朗らかな顔で笑っていた。

「困ったなあ。乗ったはいいんだけど、わたし馬術ぜんぜん無——……うわわ、なんで？  
ぎゃっ！」

嘶きとともに、彼女の言葉を待たずしてアルスヴィズは後ろ脚で勇ましく立ち上がった。その背から簡単に転げ落ちて、フェイリットは潰れたような悲鳴を上げる。

「不安な気持ちを持ってはなりませんよ」

笑いながらも、ジルヤンタータは素早く行動した。即座にフェイリットを馬の下から引き出して、その蹄の下敷きにならぬ場所で助け起こす。

「ありがとう……」

「しばらくは相乗り致しましょうか。その方が尻の上げ方や調子の取り方を、ご教授しやすいかと」

立ち上がり砂に埋もれた彼女の身体をたたくと、驚くほどの砂埃がもくもく出てくる。

フェイリットは悠々としているアルスヴィズを見やってから、首を横に振った。

「嬉しい。でも、これはジルヤンタータに甘えてちゃだめだ」

「フェイリット……」

アルスヴィズの佇む場所へ歩いて行って、彼女は何も言わずその首筋に手をあてた。何かを話しているようにも見えるが、後ろからでは彼女の背中と、馬の横面が見えるだけだ。時折アルスヴィズの尾が揺れて、彼らがまったく固まってしまったわけではないことを思い出させる。

「何をしているのでしょうか」

後ろ背を見つめながら、待ちきれずにジルヤンタータは呟いた。

「話されているのだろう」

まるで「普通だ」とでも言うように、オフデ侯爵は応えた。

そうして見ているうち、ようやくフェイリットはアルスヴィズの背中に乗り上げる。心なしか、馬の反応が先ほどよりも落ち着いているように見えた。

「さて。ジルヤンタータ殿も、騎馬で行かれるのでしたな？ 隊列の中に用意致したので、自由にお使い頂きたい」

「まあ、ご面倒をおかけしました、——……？！」

有難うございます、と頭を下げてジルヤンタータは礼を言う。が、その耳の横を突如、吹き抜



けた砂まじりの風に驚いて身体を起こす。

「なにごとですか……！」

慌てて見やった“砂風”の正体を見やっ、ジルヤンタータは厭きれた。

「うあ痛った！！」

すぐさま、叫ぶような声をフェイリットが上げる。その彼女の脇をシャルベージャが笑いたてながら駆け抜けていった。

「おら、なーにやってんだよ！ 馬にも乗れねえのか？」

どうやら頭の後ろを思い切り小突かれたらしく、馬上で身体を傾けて頭をさすっていたフェイリットは、シャルベージャの笑い続ける馬鹿にした声を聞いて、さっと顔を上げた。

「ぬあああああ待てえええ！！」

流れるように素晴らしい手つきでアルスヴィズのたずなを引くと、わき腹をとん、と蹴ってフェイリットは飛び出して行った。

「……確かに、一からお教えするより、ああして身体に覚えさせる方が向いているのかもしれませんが」

シャルベージャの笑う声と、フェイリットの馬にも負けない嘶きが遠ざかり、ジルヤンタータは呆れたように肩を落とした。見ていると、あっという間に隊列の先頭へと追いついて、二頭で競り合いまで始めている。

「ジルヤンタータ殿」

オフデ侯爵は、ほのぼのとした顔でその光景を見つめていた。なんでもございましょう、と返事をしてジルヤンタータが彼を見やると、その顔からふと笑顔が消えていく。

「どうか、彼女を支えてやって欲しい」

視線は前を向いたまま。その言葉が何を含んでいるのか、ジルヤンタータには分かりようもなかった。

びゅうびゅうと耳に鳴る風の音の他に、さわやかな葉のさざめきが聴こえる。ようやく辿り着いたオアシスは、皇帝直轄領への国境にはまだ距離のある、小さな泉だ。

久しぶりに聴いたような葉ずれの囁きは、たとえ体を熱砂にさらされていても涼しく思える。フェイリットは確かめるようにゆっくりとした動作で、馬の背からすべり降りた。丸一日走りづめで、尻と脚がどうにかなりそうだった。

帝都への帰途は、バツソスから借り受けた護衛の傭兵も含めて、三十名にも及ぶ。彼らは言わば、見送り隊。バツソスと皇帝直轄領ぎりぎりの国境までを同行したのちは、そのまま蜻蛉返りしてゆく。

「へっ、情けねえ」

鼻で笑ったシャルベージャが、すぐそばの棗の木に自らの馬のたずなを結わえている。

ようやく辿り着いた休息場所のオアシスで、フェイリットは返す気力もなく深い息を吐き出す。

「情けなくていいや、もう」

水を飲むアルスヴィズから少しだけ離れた場所に座り込んで、フェイリットは泉の方角を見つめていた。ささやかに湧き出る泉には、隊の馬たちがずらりと並んで喉を潤している。

その対岸にバスクス帝の姿を探して、小さく肩を竦めた。和やかに話す二人の姿は、フェイリットの気持ちをしおれさせるには充分だった。

見ないように、考えないように、俯かないように――そうして張っていた心も、身体の疲れとともにとっくに破れている。捜しては落ち込み、視界を外れるとまた見渡してしまう。そうして見つけたバスクス帝は、いつもヒーハヴァティと一緒にだ。

「取って代わりてえって顔、してるぜ」

膝を抱えるその横に、シャルベージャが並び立つ。

「……！」

言い当てられた心情に、フェイリットは途端に顔を赤らめ俯いた。上からけらけらと笑いたてる声が降る。

「よくわかんねえヤツだなァ。けろっとしてたのは芝居かよ」

返事を返さずにいると、頭のとっぺんを軽く拳でつつかれる。

「ひみつ、」

平気だと思い込んでいた。バスクス帝がヒーハヴァティと笑っているのが、馬の背に二人で乗っているのが。誤魔化すようにつくった笑顔は、長続きせずにひきつって、苦笑に変わる。

「いいなあ、って思っても……いいのかな」

どうして気づいてしまったのか。好きだと感じる以前なら、あれは自分とは切り離された遠い光景だったはずなのに。

何度一緒に眠っても、ともに笑っても、こうして少しでも距離を置いたなら、どうしようもなく彼が遠く見えた。考えてみれば、“好きだ”も“愛している”も、バスクス帝の口から聞いたことが

未だない。

「泣き出すんじゃないぞ。慰めんのは嫌いだ」

そう言って、あーあ、と彼はため息をつく。側から去って行かないあたり、充分に“慰め”ととれる行為だったが、フェイリットは何も言わなかった。

ジルヤンタータと居たときも、気づいていた。バスクス帝とともにいるヒーハヴァティの視線が、勝ち誇ったようにこちらにしばしば向けられるのを。

バツソス公国からの帰路、“嫁いで”くるヒーハヴァティこそが接待されるべき、優遇されるべき対象なのだ。それをわかっていながら、示される“視線”に、辟易していた。

「……ありがとう」

シャルベージャがおこなった背後からの不意打ちが、どれだけ自分を窮地から救ったことか。そういう心の機微をすべて承知のうえで、シャルベージャはフェイリットをからかってまで、速駆けへと引っ張り出したのかもしれない。

案の定、シャルベージャは何も言い返さない。じっとした沈黙が流れて、フェイリットは立ち上がった。

「うああ、痛い。と、——あの……シャルベージャ、さん……」

「ああ？ いきなり気持ち悪いな、なんだよ改まって」

シャルベージャの顔を見上げて、フェイリットは目線を下にずらす。

「その……——ごめんなさい」

頭を下げ、震える声でフェイリットは言った。

からかわれるからと、甘んじてそれに乗っかっていたが、本当ならこの言葉が何よりも先のはずだった。

「あなたの部下を、殺めてしまって……なのにずっと知らん顔してきて、謝ろうとさえ……しませんでした」

下げた頭の上で、息をつくような音が聞こえる。

「ごめんなさいで済まないのはわかってます、でも……」

「——元を正せば、挑発したのは俺たちなんだぜ。……確かに、無鉄砲だったが。必死だっただろ、お前。遊び半分だった俺らに、正面きってお前を非難は出来ねえよ。命を賭けるのが俺らの仕事だ」

そっと顔を上げると、シャルベージャは仏頂面で「なんだよ」と不機嫌な声を出す。

彼の意外な返答に驚く気持ちが、顔に出ていたかもしれない。フェイリットは間の抜けた顔を引き締めると、そっと申し訳なく微笑んだ。

「まあ、皇帝に聞いたしな。お前、あれが初めてだったんだろ。それでタインにとどめ刺すの怖がって嘔みつかれてちゃ、ざまあねえ。言わばあれが、罰ってところか」

「……罰」

見上げると、拳が軽く額に当たる。

「マムルークはな、強えのだけが生き残んだ」

苦い顔で言いながら、彼はふと後ろの方を振り返る。その先には件の虎(タイン)との遭遇で、

辛くも生き残ったマムルークたちが馬の世話をしながら談笑している光景が見えた。

「俺たちは、捨て駒なのさ。常に前線で命を晒す。だからお前如き小娘に負けてるような男は、マムルークとは呼べねえよ」

シャルベージャはそう言うと、もっと考えて連れてくるべきだった、と最後に呟いて口を閉じた。――タインとの遭遇で喪われた命を、嘆くような言葉。軽々しい男だとは思っていたが、彼は歴とした“隊長”なのだと、実感する。

フェイリットは少しだけ間を置いて、息をつく。

「……それって、シャルベージャも含まれるよ」

真面目な話はおしまいだ。お互い丸一日かけて体力を消耗した状態で、これ以上沈んだ話は身体にもよくない。国境までは少しだが、ここにテントを張って一夜を休んでも、帝都への道のりはまだ二日以上も残るのだ。

「なんだ、空耳が聞こえたぜ」

「痛！」

再び額を襲う拳をそのまま額で受け止めてから、手のひらで彼の脇腹をはたき返す。何ともないような顔をしているが、彼の弱みならまだ健在だ。

「ぐっ……、でえ！ なにしやがんだ！」

「あっはっは、」

シャルベージャは肋骨の痛みで体を曲げて呻いている。わざとらしく笑って、フェイリットははたとシャルベージャを見やった。悪化させるほど強くは叩いていないため、大丈夫だとは思っているのだが、それでも心と不安になって彼の方を覗き込む。

「お前が男だったらなあ。マムルークに突っ込んでやりてえよ」

体を折り曲げた姿勢のまま、シャルベージャは抑えた声で言った。

「まあ女でも変わらねえか。どこもかしこも真っ平らみてえだしな」

「な……！？ でっ、出てるもん！ それは、まあ……それなりに……だけど」

豊かさにはほど遠いが、真っ平らなわけではない。

けれどそれに抗議をしてから、余計に首をしめた気持ちでフェイリットは顔をしかめた。

「へえ」

疑うような目で見つめられると、心が痛い。フェイリットは唇を曲げて踵を返し、アルスヴィズを連れに歩いた。

「おい、馬つないだらこっち来い。暇なんだったらテントつくんの手伝え」

足早にアルスヴィズの元まで辿り着いていたフェイリットは、目を開いて振り返った。

「ええ？」

「小姓の格好しといて、仕事免れるとは思ってねえだろ」

気の抜けた声で言い置いて、シャルベージャは仲間の輪に戻っていく。

泉の周りには、申しわけ程度の短い草花が生え、とつとつとまばらに藁が立っている。オアシスはオアシスだが、ここにテントをつくるとなれば、きっと誰かは寝ず番だろうな……そんなことを考えながらも、フェイリットはシャルベージャの背中に向けて頷いた。

何もしないより、何かを負わされていたほうがいい。そのほうが、考えずに済む。

じっとしていると、アルスヴィズが「行こう」とでもいうように、鼻先を項に突っ込んで来た。フェイリットは声を立ててそのくすぐったさに笑うと、アルスヴィズを木につなぐため動き出した。

\* \* \* \* \*

そうしてとっぴりと日も沈み、外は闇に包まれた。

水辺のどこかにいるのだろう。虫の鳴く、ひりひりという微かな音が聴こえる。

簡易に建てられた軍用の天幕は、人が二人寝るのが限度。フェイリットはジルヤンタータと供の天幕で、寝具に包まり、少しだけ隙き間の開く天井から、切り取られた夜空を仰いでいた。

「……寝た？ ジル、」

そっと小さな声で囁きかけるが、返答はない。朝から馬で走りづめだったし、彼女は夕食の給仕でも忙しそうに立ち働いていた。疲れも限界だったのだろう。身体を横にして間もなかったが、しばらくじっと聞いていると、深い音の寝息が聴こえる。

「ねむれない……」

なぜだろう。身体はこれでもかというほどに動かし、働いて疲れているはずなのに、ジルヤンタータのように、眠りの世界はフェイリットを迎えてはくれないようだ。

――陛下は、……ヒーハヴァティと一緒にかな。

まただ。再びわき起こる抑えられない感情に、フェイリットは息をつく。

会いたいけれど、会いに行っては迷惑だろう。そう思いながらも、身体は起き上がり、天幕を抜け出そうとしている。

入り口に下げられた黒い幕をそっと開けると、いくらか並んで建てられた天幕の向こう側に、見張りの薪が燃えるのが見える。

せめてあそこに行って、マムルークの誰かと話でもしよう。そう一人で頷いて、フェイリットは天幕から抜け出した。

けれど見張りのほうへ歩こうとした途端、横から小さく笑う声が聞こえる。

「……え、だ、」

誰？ と聞こうとして、フェイリットは驚きのままに口を開けた。

「こんな夜更けに、散歩か」

悲鳴を上げなくてよかったと、咄嗟に思う。叫んでいたら、慌てたジルヤンタータが顔を出していたことだろう。

「なんで」

振り返って見上げた人は――、誰よりもいま、会いたい顔をしていた。

本能的に駆け寄り、がっしりと抱きついてしまったから、フェイリットは慌てて身体を離す。まるで“会いたかった”と全身で表現してしまったようで、恥ずかしさが急にこみ上げた。

「どうした、おいで」

そそくさと後じさりして距離をとったフェイリットを、バスクス帝は楽しげに笑った。

「どうしたんですか、こんな夜更けに」

「お前の顔を見に来たんだが」

こともなげにそう言って、フェイリットを抱き上げる。

「……ああ、何だか前にもあったか。こういう、」

歩きながら、遠くを眺めるようにしてバスクス帝が言った。

きっと……、アルマ山を降りてここの人たちに拾われて、そこから逃げようとした、あの最初の夜のことだ。いきなり腕を掴まれて、なんと闇のように恐ろしい人だろうと感じた。誰とも触れ合わせたことのなかった唇を、あっさりと奪われて。

怒りさえ覚えていた頃が、ずっと昔のこのように思える。

「ひどい人だって思いましたよ。いきなり服脱がせられそうになって、」

歩きながら、バスクス帝は笑う。

「思えば随分飼い馴らしたな。爪やら牙やらたてていたものだが、今では尻尾を振って飛びついて来る」

「しっ、失礼ですね。人を野獣かなんかみたいに……」

顔をしかめてバスクス帝を見やると、そっと足が砂地についた。

あたりを見渡すと、月に染まった砂漠の緩やかな波が、ずっと一面に広がっていた。闇夜だと思っていたのに、綺麗な月が浮かんで、まったくの暗がりではないことにふと気づく。

息をつくると白い霧がのぼって、それを追いかけるようにして上を仰ぐと、バスクス帝がそっと屈んで距離がちぢまる。

「夜空を見ながらというのも粋だろう」

低く、柔らかな声で、バスクス帝は以前とまったく同じ言葉を口にした。

ふと唇が重なって、誘うように舌が絡まり、一一優しい余韻を残して彼が離れていく。

「……大陸創世譚か、砂漠の民の伽話か。どっちがいい」

砂地の上に胡坐を組んで、バスクス帝は自分から向かって前の方の地面をぽん、と叩いて見せた。

「ええと、」

そろそろと歩いてフェイリットが座ると、彼の腕に背中から包まれる。回された腕に自分の腕を重ねて、フェイリットは答えた。

「どっちも聴きたいです」

一一その胸に頭を預けて見上げると、バスクス帝が嬉しそうに微笑むのが見えた。

帝都アデプの道は狭い。三人も歩いていたなら、人の行き交いがすぐにでもつまってしまう。壁の高い民家がひしめき合うせいで、道は蛇の背のように複雑につながっていた。太陽の低い夕暮れがとても早く、特に陽射しの遠い東側にいたっては、朱っぽい光は階層の高い民家にたやすく遮られる。ここから上を見上げたなら、かすかに切り抜かれた空をうす朱く染めるだけ。

土を踏む足どりから目をそらし、アンはその影の目立つ空に近い民家の壁を見やった。「ああまったく。これで清々しい青空でも広がってくれてたら、気分も少しは晴れただろうにな」

いつだって気鬱の原因は同じだ。あの赤子が目の前で泣いていても眉ひとつ動かさぬ、冷淡な兄――ウズルダン・トスカルナ宰相。

その兄から今朝がたに届けられた書面は、怖ろしくも短い文面が一行だけの内容だった。

“久しぶりに夕食を”

決して断ることのできない公式な文書の形式で送りつけるあたり、あの男の頭の捻れ具合が見え透いている。小姓や母親を伝言係にでも使っていたなら、こんなところを歩いてはいなかったのだ。いつも通り仕事を終えて、診療所の片づけをしながら今ごろは小姓のテギと雑談でもしていたはず。もちろん、呼び出しなどなかったことにして。

足取りはあっという間に民家を抜けて、少しだけ広い道に出る。城へ続く直進の道でうつむけていた顔を上げると、大きな門が視界に入った。

番兵のいる三つの門のうち、二つ目の門“ジャイ・ハータ門”だ。ここを抜ければ貴族たちの邸がならぶ、静かな区域に入っていく。

「アン少尉？ 珍しいですね、ご実家ですか」

見知った顔の門番に言われ、アンは声をたてて短く笑った。

「ああ。取り潰されていないか心配でね」

物騒な皮肉を、門番は笑って流してくれた。

事実、トスカルナの家系には家名をつぐ人物がいない。正妻から生まれた唯一の姫はその籍を剥奪されているし、八年前に流産してからは子供を望めない身体になった。宰相という、実質上最も位の高い位置にいる非嫡出子の兄も、結婚はできても子孫を残す機能がない。どちらが家を継いでも、血筋をつなぐことは不可能なのだった。

「久しぶりにここに立ちますが、いいものですね。滅多に会えない方に出くわします」

嬉しそうに言う青年に頷き返して、アンも笑った。

「お前が門番に立っているなんて本当に珍しいね。配置換えでもしたのか？」

この門番の青年は、いつもなら宮殿内の警護をしている。近衛師団のなかでも、わりと腕が立つので覚えていた。

「今日は陛下がお帰りになるそうなので、こっちのほうに。ご到着を待って交代したら、そのま

ま宮殿内の仕事に戻ります」

「陛下が？ ……知らないな、どこかへ出掛けていたのか」

アンの返答を聞いて青年は驚いた、という表情をする。首を捻って言葉を探るように続けた。「半月ほどにもなるでしょうか。お忍びでバックス公国へ。……と言っても、自分が知っているという時点で、実質お忍びではないと思っていたのですが」

違ったようですね。その顔は、“言っではまずかったか”とでもいうように、さっと曇っていく。

アンは思案げに眉を寄せると、首を振った。

「いや、聞かなかったことにしよう。だからお前も忘れるといい」

「……は」

うなずきあってから、しばらくの沈黙が降りる。こういう時、いやでも感じてしまう時間の間――相手の頭の中では今ごろ、アンに降りかかった八年前の“悲劇”が映し出されているはずだった。まだ皇子の身分だったバックス帝と、宮廷中が騒ぎ立てるほどの深い仲にあったトスカルナの令嬢……。引き裂かれた形で終わった二人だが、帝都へ戻っても関係が修復されることはなかった。

笑ってしまうほど、自分たちは変わっていたから。

「すまないね」

何に対する謝罪なのか。自分でもわからないまま、正式な敬礼をもって、アンはその青年の横を過ぎた。

少尉の階級をもらい近衛軍医の階級を得て二年と少し。バックス帝や宰相である兄、近衛師団の長を務めるワルターなどのつながりから、アンは自分がわりと側近に近い位置にいると自負していた。だが、実際は知らないことのほうが多い。今回のお忍びにいたっても、噂にさえ聞くことはなかった。

ため息をひとつだけ溢すと、アンは歩きながら、見えてくる実家の門を眺めた。

控えの侍女に「ウズは自室にいる」と言い渡され、アンは案内を断って室に入った。足の長い卓についた彼が、捲っていた書類から目を離してこちらを向く。

「何の用だ？」

不躰に言ったアンを無言のまま眺めて、ウズはその顔をゆっくりとゆがめた。橙色の灯が室内を照らしていたが、なぜなのかこの男の顔はいつも青白い。

「……挨拶も無しですか」

「そういう格式張った面倒な所作は嫌いでしょう。夕食も済ませて来たので、遠慮せず用件があるなら言ってください」

いきなり始まろうとする口論を抑えるように、ウズは深い息をついた。

「宰相命令です。ハレムのジャーリヤたちが懐妊していないことを診断し、公式の証明書を作成、帝国軍近衛師団軍医の名で提出するように」

“宰相命令”の部分に力を置いて言い放ったウズを見やり、アンは驚いたように目を開く。



「……私は本来、傷を縫ったり骨を嵌めたりするのが仕事だ」

「あの五年、テリゼアシダについていたのなら、妊婦は幾百も診ているはずですよ」

「それは、」

困ったように眉をひそめて、アンは口ごもる。

「まったくの無知ではありえない。そうですね？ アンジャハティ・トスカルナ近衛軍医。これは、他の軍医には頼めない用件なのです」

他の軍医には頼めない。それは自分が軍内唯一の女医だからか、軍医としての信頼を以ってのものなのか、アンには判断することができなかった。

「……承知、しました。しかし、その為にはジャーリヤ達に最低一月はお籠もり頂かなくてはなりません」

懐妊を診断するには、最低でもひと月は必要。その間、バスクス帝との交わりを完全に絶たなければ確実性はなくなってしまう。本来ならばどこかの神殿に隔離されるのが慣わしだが、“ハレムのジャーリヤが神殿に隔離されている”というような噂は、昨今まったく耳にしたことがなかった。

「それならば気にすることはありません。陛下はすでに約一月、このアデプにいらっしゃらなかった。陛下自身がいらっしゃらないのであれば、お籠もり頂く必要もなくなる」

「……バツソスですか」

門番とした会話が浮かび、思わず口に出してしまう。ウズはいぶかしむような顔をした後、首だけで頷いた。

「知っていましたか」

「……軽くは。期日はいつですか？」

「明後日の夜、陛下と私の前で報告すること。書面は後日で構いません」

ウズの返答を聞いて、アンはあからさまに顔をしかめた。

「ジャーリヤの数をご存知ですか」

「128、いや、131でしたか」

その口ぶりからは、数などどうでもいい、というような響きが聞いてとれる。アンは首を横に振って、ふっと息を吐き出した。

「給仕の数を入れればもっとだ。推な話をすれば、この時期では指を入れて着床を判断するしかありませんよ」

「方法は任せる。ただ正確さは欠かぬように。……それと、母上が泊まっていくようにと仰っておいででした。顔を出してきなさい」

言い終わると立ち上がり、書類をまとめて抱え持つ。

去ろうとするウズを眺めながら、「わかりました」とだけ返答し、アンは頭を下げた。

船へと伸びるもやい綱をするすると木柱に括りつけながら、漁師は近づいた人の影に視線を上げた。

久しぶりの“しけ”のせいで、仲間の船は一艘もない。漁師はとあるつてから頼まれて、テナン公国の北端ティク港からグロムダ海峡を通り、メルトロウの南端にあるキューザ港に人を一人、明け方に渡してきたばかりだ。荒波のなか、そうして請け負った用事を済ませて、ようやく仲間の漁師たちがたむろしているだろう西の酒場で、一息つこうとしていたところだった。

「……何だね」

昼間に近い時間だが、吹きすさぶ雨のせいであたりは夕暮れのように暗い。漁師が見上げた先にいたのは、やはり仲間うちの顔ではなかった。

「こんな“しけ”に、このあたりを歩くのは危ねえ。早くどこか屋根のあるところへ、入った方がいいぞ」

漁師は括りつけたばかりの綱を引っ張って、外れないことを念入りに確かめながら、そばに立った人物に真正面から向き合う。

相手はまだ年若い青年で、雨除けの外套を羽織ってはいたが頭は丸出しの姿だった。激しい雨が頬を打つのも、さほど気にしたようすがない。怪しいものではないと、顔を明かすことで示しているのだろうか。青年は挨拶程度に頭を軽く下げると、黒い瞳をわずかに細めて言った。

「ギザサさんですね」

「……そうだがね。儂はあんたを知らない」

漁師は明らかに顔をしかめて、青年を見上げる。見たところ、どうも町の間人ではない。着ているものや先ほどの品のいい礼を見るとどこかの貴族にも思えるが、今時うろついているなら、あらかた物騒な人間には違いなかった。

「名前は名乗れないのですが……あなたの噂を聞いてここに来ました」

「儂の噂か。そんなに名の知れた老いぼれに見えるか」

「老いぼれだなどと」

そこで一呼吸おいて、青年は何かを考えたようだった。その態度の断片に小さな焦りを見つけて、漁師は口元を引き結ぶ。へたな駆け引きは時間の無駄だと気づいたのか、

「――元テナン海軍総督、ギッシュ・サルビトル・ラザ殿と伝え聞いております。現在は漁師がてら、密輸や海賊の稼業までなさっているそうですね」

続いた言葉のあまりの簡潔さに、漁師は驚いて目を開いた。

青年の言うとおりに、確かに彼は裏では名の通る人物だ。だがそれは、“海賊船”や“密輸船”としての、頭領の話である。まさか何十年も前に、鎖国により滅びた海軍の名を聞くことになるとは思ってもみなかった。

元テナン海軍総督は、その折に処刑されてすでにこの世にはいないことになっている。妻も子も、親族縁者すべてを失って別人として生きる今、ギザサと過去を繋ぐものはなにもないのだ。

「あんたは……何故それを知ってる」

場合によっては、ただでは済まされない。ようやく掴んだ平穩を、この期に及んでまた突き崩される気はなかった。情報の流れ先を辿って、必要ならばその全てを消し去らねばならない。

ギザサの思いを汲んだのか、青年はわずかに眉を引き上げて暫くの間沈黙すると、わかりました、と頷いた。

「私はコンツ・エトワルト、テナン公国の第五公子です。貴殿の堅い口と経験を見込んで、お願いに上がりました」

「公子……だと？」

ギザサは日に焼けて真っ黒になった顔を、大きく歪めた。王族が今更、目の前に現れるなど……。憎しみとも、敬意ともつかぬ光った目を青年――第五公子へ向けて、ギザサは鼻息を噴く。

「信じられん。証明でもあるならまだしも」

「あなたを知っていることが、証拠になりませんか。あなたほどの方なら、聞き及んでいるはず。俺が帝都で、ワルダヤ大佐の下にいたこと」

「……やつが、お前に教えたのか」

静かに頷いて、第五公子は懐から何かを取り出した。小刀かと思いき身構えるが、差し出された手のひらに乗る銀色の指輪を見つめて、するすると力が抜けていった。……装飾も何もない、幅の太い指輪。それは紛れもなく、昔ギザサが付けていて、人生を捨てた時ワルダヤに託したもの。ワルダヤが未だ持っていたとは驚きだったが、少なくとも繋がりがあるということか。

ギザサは指輪をつまみ上げると、目前にかざすようにして眺めてから、また公子の手へと戻した。

「あなたを頼るのはぎりぎりになってから……そう考えていました。これを譲り受けた時も、大佐はあなたについては詳しく語りませんでした。ただ“持ち主を捜して頼れ”と言われたのみで。大佐もこれを、どうしようもなくなった時に使うようにと、渡したのだと思います。ですが、そうもいかなくなってしまうて」

やはり、噂は本当になるだろう。ギザサは確信して、思った。テナン公国は、およそ三月もたたぬうちに宣戦を布告するはず。着実に集まりつつある情報と、近々入り来る予定のメルトローの大艦隊。それが何よりの決め手となって、ギザサの頭を痺れさせた。

だが、どうにも腑におちない。独立を願うのは、王族すべての心ではないのだろうか。なぜなら明らかに、この目前にいる公子は、それとは逆の――テナン公国の不利益になるようなことを、しでかそうとしているようにしか見えないからだ。

「なんでまた、公子が動こうとしてる。本当なら、あんたはとっくに王城で、幾数万の拳兵の算段に捲かれているはずだろうに」

冷や冷やと、訳の分からぬ冷たい感覚が背を伝っていくのを感じながら、ギザサは小さく息をついた。この公子が、早くからテナン公国を離れて、まるで人質のように帝国の軍に吸い込まれていったのを、知らないわけではない。だからこそ、祖国にあまり心を置かぬのだということも。しかしそうであるなら、わざわざこの地へ姿を現す必要はないのだ。もし本当にテナンを見捨

てる気でいたのなら、帝都にとどまりながら、皇帝に向けて早々に祖国を捨て去る忠誠を誓ってしまえばよかったこと。そして皇帝軍で適当に昇進して、核となり戦うだけでいい。

「……確かめなくてはならないんです。今までずっと避け続けてきたものを」

ふとして見せた公子の顔は、随分と疲れてみえた。よほど長い間、帝国と祖国の狭間で苛まれたのではなかろうか。そう思えるほどの深い疲労が、この若い青年の肩に降り積もっている。

「場所を、移すか。いい加減寒かろうに。ずぶ濡れだぞ」

どこかで温かいものでも飲ませてやりたい——そんな気まぐれが、ギザサの口をついて出た。しかし公子は、それまで見せていた柔らかな表情をすっと消し去り、首を横に振る。

「ここでお許しただけませんか。何より、誰に見られているのか、聞かれているのか、分かりませんので。ここでなら、雨風が私たちの会話を打ち消してくれる。見たところ声の届く範囲に潜んでいる密偵はありませんし、もし姿を見られていたとしても何を話しているかは分かりませんでしょう。目測では読唇も利かぬ距離です。酒場へ移って体を温めるよりいい」

ギザサは公子の言葉に、納得して頷いた。港は市場バザールが並ばぬ限り、帯状に広がる広場でしかない。この開けた視界から身を隠すには、船底にいるか、随分離れた酒場や船工場(ふなこうば)の建物の影に潜んでいるしか方法がなかった。声高に話しているわけではないから、すぐそばの船に隠れていたとしても、風に煽られギイギイ軋んでいる船と荒い波のせいで声など聞こえたものではないだろう。

——そんなことを考えて、この状況を選んだとしたなら、この公子の頭も隅にはおけない。帝都で、それも根っからの軍人であるワルダヤに育てられたにも関わらず、よくもまあこれだけの機敏を身につけたものだ。

「わかった。面白い、要件を聞こうじゃねえか。儂もテナンなんざ、どうだっていい人間の一人だ」

どうだっていいわけではないのですが……、そう言って困ったように肩を竦めると、公子は続けた。

「俺を帝都に送り届けて下さい。——できれば、今日中に出港したいのですが」

最近、メルトローならまだしも、帝都へいく海路の監視は殊の外厳しくなっていた。密輸を請け負う仲間の何人かが、訝しんで酒の話題に乗せていたのも、今ならばわかる。戦線を切り開く準備をしている最中、余計な情報や人が行き来することのないよう目を光らせているのだ。通れるのは厳しい捜査を受けた漁船のみ。

「帝都へ行くのに漁船に扮するなんざ、容易くねえぞ。しかもよりによってこの“しけ”だ。その品のいい服やら仕草やらをどうにかせんと」

「大丈夫です。……それと、あいつもいいですか」

ギザサはやれやれと肩を竦める。いつの間にやらもう一人、女のような顔立ちをした青年が筋向いの建物に立っているではないか。

「実を言うとあなたを探し当てたのは、俺ではないんですよ」

そうして振り返る彼の背中越しに、連れの青年を見やる。視力にはまだまだ自信があるが、ここから見えるその姿は、どう見ても肌色が雪のように白かった。

「ああ、もう好きにしろ。まずは船室に入れ。そのずぶ濡れの体を拭いて着替えるんだ。儂は酒場に行って、飯の調達をしてくるからな」

メルトローとテナンが、手を組んだ。象徴的な二人連れは、ギザサの心中を“しけ”に似たざわめきで埋め尽くした。

「ジル！ 見て！」

呼びかける声に、ジルヤンタータは覆面にしていたヴェールに指をかける。弛めたそこから、逆光で黒く影のついたフェイリットが馬をとめて振り返る姿が見える。

「帝城だよ！」

地平は一面をうつくしい橙色に染めて、沈む太陽を迎えていた。彼女の指差すその先には、夕陽に照らされて燃えるような城と街が聳えている。

「……はあ、着きましたね」

フェイリットの隣に馬を並べ、ジルヤンタータは頷く。自然と出るため息は、自分でもどこかほっとして感じられた。再び目にしたら、虫唾が走ると思っていた赤く猛々しい城。けれどなぜだか、不思議な安堵ばかりが胸を占めていた。

「よう、フェイリット。先に着いた方がメシ奢ることにしようぜ」

土煙りを豪快にたててシャルベージャが追いついてくる。ここ何日かの道のりで、二人はすっかり意気投合して見える。持ちかけられた勝負に、フェイリットはあからさまに顔をしかめて声をあげた。

「そんな、行かなきゃならないところがあるのに」

「じゃあお前が負けたら金だけ出せ。お前ら！ こいつに勝ったら奢りだ！」

シャルベージャは振り返り、他のマムルークたちに大声をあげると、あっという間に馬の腹を蹴って行ってしまう。

「奢りって、わたしが出すのかな」

諦めたように息を吐き出すそのさまは、どう見ても焦っているようには見えない。ジルヤンタータの驚いた視線を受け止めて、フェイリットは肩をすくめた。

「大丈夫」

歯を見せて笑ったかと思うと、そこにはもう風だけが残っている。ヴェールとローブをばたばたと泳がせて疾走する小柄な背中を見やり、ジルヤンタータは口を開けた。

「ああ見えてシャルベージャは、マムルークで一番速い」

落ち着いた声が背後から聞こえ、ジルヤンタータはたずなを引こうとして上げた腕を、そっと止めた。

「マムルークは身分こそ低い奴隷軍隊だが、実力猛者の集まりだ。あいつは闘わせても速いが、馬に乗ったら並べる者はまるで居ない」

振り返ると、顔の半分を包帯で覆ったマムルークの男と目が合う。

「バルバドル」

タイムに襲われた折に、馬の鎧に足をかけたままの姿勢で顔を引き摺られたのだという。骨折や脱臼はしていないから軽症といえるが、その包帯を取ったさまを見ては、きっと眉をひそめずにはいられない。

生き残ったマムルークは、たったの二人。タイムの爪をかりうじて免れたシャルベージャを

含めても、戻ってきたのは三人にしかならない。出発時の人数を考えたなら、その数は半分以下だ。

「そんな化け物と並んでいるなどと、あの娘はかなり貴重だぞ。せいぜい、シャルベージャに引っこ抜かれんよう見張ってることだな」

「引っこ抜かれるなどと！ タブラ＝ラサは女ですよ」

「そんなもん、関係あるか。さあさあ、久々に酒が飲めるぞ」

よく日に焼けた顔で、彼は皮肉げに笑う。馬の首を撫でてやってから、その場で軽く足踏みさせ、

「まだ飲んどらんからな、“奴ら”への弔い酒だ。自肅にうるさかった隊長さんも、そろそろ許す気になったのだろうよ」

そう残して小さく笑うと、バルバドルは馬を駆けさせていく。

あのままでは彼の奢りになってしまうのではないか――そんな考えが頭に浮かぶが、ジルヤンタータは苦笑して馬の腹を軽く蹴った。

あの嬉しそうな顔。きっと奢るのさえ考慮のうちなのだろう。

ふと見やると、しばし遅れてバスクス帝の馬が迫っていた。ウィエンラ公女を相乗りさせて、この荒地をずいぶん押さえながら走っていたようだ。

帝都を見つけて声を上げる公女の嬉しげな会話が、風にのって耳に届いた。

\* \* \* \* \*

「……へえ、ここが」

溜め息をもらすような声を背中に聞いて、コンツェは栈橋にかけた片方の足を引っ込めた。

横を見た途端、眉をしかめるアシュケナシムを見つける。

「お前だけ帰ってもいいんだぞ」

テナンへ発つ前には人気がちらほらと見えたはずの漁村も、今では干されていた魚や生活をにおわせる炉端の煙さえ、見当たらなくなってしまった。まるで災害を見極める鳥のように、人々はこの国の情勢を嗅ぎ取っている。テナン沖の町々では、このような光景が延々とつながっていることだろう。

イクパル本土へ足をつけてしまった以上、身の振り方によっては命を狙われることもあり得る。いくらぼろを纏い髪をターバンで覆っても、アシュケナシムの容姿では、すぐにイクパル民族ではないとわかってしまう。本当にこの国の情勢が傾いたなら、彼はコンツェよりも危険な立ち位置にいるのだ。

「いいんだ、来てみたかったから。あつついなーって思っただけだよ。ほら、降りて」

漁船を横づけにした栈橋に足を置くと、コンツェとアシュケナシムは揃って船を見上げた。船の舳先には、荒波の中を導いてくれたギザサがしかめ面で立っている。

「……で。おれあ待ってればいいのかね」

航路の途中、幾隻かのイクパル側の監視船に指し当たった。漁船といつわりここまで辿りつけたが、何日も停泊していれば尚さら監視の目が届きやすい。これ以上の関わりは、それこそ彼の長年をかけて培った“平穩”を、脅かすことだろう。

コンツェは静かに首を横に振り、深々と頭を下げて答えた。

「いえ、突然の願いを聞いていただき、ありがとうございます。帰りはまたなんとかします。俺たちは大丈夫なので、どうかご無事にお帰り下さい」

下げた頭の上で、野太い声が「殊勝なもんだな」と吐き出される。

「お前がワルターの秘蔵っ子じゃなかったら、話さえ聞かなかつたらうよ」

「秘蔵っ子ですか」

テナンを離れたのが十三歳に近い頃。それから五年の歳月を彼にくっついて過ごした。“文”に関してはからきしのワルターだが、“武”に関しては多くを学んだものだ。目をかけてもらっている自覚もあるが、近衛軍に入ってから、彼の直属を遠慮していた。理由を語ったことは無いが、それはきっとワルターも察しがついている。

近衛師団は、バスクス帝に、とても近い。

ワルターの手の上から外れたことで、“秘蔵っ子”と一々まるで自分の息子のようになり自慢されることは、もう長く聞かなくなってしまった話題だ。

「……まあ、どっちに転びたいのか分からんが、案じてくれてる奴がいることを忘れんじゃねえぞ」

下げた頭をふと上げて、コンツェは困ったように微笑んだ。

「一々はい」

テナンを出てから、三日の日にちが経っていた。

大荒れだった天候は徐々に回復を見せて、今では心地よい潮風が波をやさしく撫でつけている。少々弱い風向きだが、帰路のほうが安全なことには変わりはない。遠洋の豊かな海流をとらえれば、魚を十分に採って帰れるはずだ。

「いつかまた乗せてね、おじさん」

アシュケナシムが走り出し、船に向かって手を挙げる。

広がる瑠璃色の海をすべりながら、楫から手を離れたギザサが応えるように手を払って見せた。

「珍しいこと言うんだな」

飛沫をあげて小さくなっていく漁船を見ながら、コンツェはアシュケナシムに言いやる。からかったつもりだったが、小さく笑っただけで彼は何も返さなかった。

「さてと、ここから帝都までは半日か。馬をどこかで調達しないと」

遠くの雲に薄茶けた白帆が溶け込んで、船の影が見えなくなるまで見送るとコンツェは海に背を向けた。

「……そうだね」



応えると、ぱっとコンツェから視線をはずして、アシュケナシシムは空を見上げる。その瞳はしっかりと閉じられて、じっと何かを感じているようだ。

「どうかしたか」

「……ここにいる」

――サディアナが。

ターバンからこぼれた金色の長い髪がひと房、風に流されて宙に舞う。横顔を見つめてようやく、コンツェは彼らのつながりを思い出していた。

上向いた小さな鼻や、桃色に色づく頬の丸みや、時おり見せるはにかんだ表情――やはり彼らは、双子なのだと思うを得ない。性別に違いはあるが、もともとが中性的な雰囲気を持つフェイリットと、病がちのせいで年頃の男子より痩せたアシュケナシシムを並べたなら、それらの体格の差は身長くらいのものだ。

「さすがにこの格好はきついな……」

そう呟いて、コンツェは片方の腕を目前に掲げる。乾いた風と肌の灼けるじりじりとした熱が、イクパルに戻ってきたのだと感じさせる。

「漁民てのも面白いなって思ったけど、見てよ。日焼けでもう真っ赤だ」

思いきり顔をしかめたあとで両腕を差し出され、コンツェは思わず笑っていた。フェイリットがこの場にも、おそらくは彼と同じことをして見せただろうと思ってしまう。

「なに、失礼だね。早くいこうよ。……ここは人気がないけど、もう少し内陸に入ったら宿もあるんだろ？」

顔を赤くして腕を引っ込めると、アシュケナシシムは風を切って歩きはじめた。

可笑しさを引きずって動かないままでいると、

「早く来ないと、変なあだ名で呼ぶぞ！ エトワルトって長いんだからな！」

気づいたように足を止めて、アシュケナシシムがこちらを顧みる。コンツェは笑って肩を竦めた。

「“コンツェ”でいいだろ、お前も」

大理の床を踏み鳴らす、がつがつという長靴の音が耳につく。

橙の灯火がきらびやかに灯り、天には夜空を模した紺碧の絵画、両脇には歴代の王たちの白い顔が並んでいる。磨かれた床は靴先を鮮明にうつし出し、均等に並ぶ燭台の光を受けてきらきりと輝いていた。

その久しい光景を横目に流しながら、なおも肩を揺らし歩く隣人を、カランヌは盗み見る。

腰元まであった黒髪は刈り込むほどに短く切られ、横顔は青白く死人のよう。両脇に建ち並ぶ王たちの彫像に、そっくりだった。

「……ご無事で何よりでした」

カランヌの呟くような声に、彼は返事を返さなかった。ただ硬い足音ばかりが鳴り響く廊下の突き当たりで、侍従の一人に目配せをする。

「国王陛下がお待ちです」

彼——イグルコ・ダイアヒンの合図を受けて、侍従は深い礼とともに、大きな扉の向こうへ来訪者の伝達を行う。

音を立てて開かれるその巨大な“穴”に、彼が先立って入っていく。飛び込むかのような勢いは、この城に入った瞬間から抑えられることはなかった。

「イグルコ、カランヌ。……よくぞ戻ったな」

朱色の絨毯は、足音が鳴らぬようつくられている。だがそれすら彼には効かぬようで、メルトロー王の声がかかり彼の面前に膝をつくことになるまで、彼は肩を揺らし続けた。

「陛下、ただ今戻りました」

膝をつき、無言のまま床を見ているイグルコに代わって、カランヌが口を開く。長たらしい挨拶を述べるべきかと奥歯を鳴らすが、それよりも少しだけ早い瞬間、メルトロー王が右手を上げた。

「イグルコ」

老王の声が、玉座の間に響き渡った。年輪を重ねた重みのある声に、ようやくイグルコが目線を上げる。

「さすが“海神の愛児”<sup>いとご</sup>と呼ばれた男。海の女神は、やはり閻の命を奪うことができなかった」

労いの言葉に、イグルコは深々と頭を下げた。

公女シアゼリタとともに、“暗殺者”によって帰路を襲撃された彼は、ひとり難を逃れ、燃え残った帆船の木屑にしがみついて命を存えた。……それが彼の、存命の筋書き。

その下げた顔には、果たして命令を達したがゆえの喜びの色は浮かんでいまい。覗き見やる必要も感ぜず、カランヌはつられるようにして額の位置をわずかに下げる。

「……いえ、陛下。その逆です。私が本当に海神に愛されているのなら、とうの昔に海の底へ沈んでいたことでしょう」

けれど低く、しっかりとした声でイグルコは言った。自分の悪運を皮肉るようにも、陛下の労いに対する抗いにも聞こえる言葉を。

「ならばそれで結構。陸に上がり、愛も薄れたか。陸の王である儂にとっては、喜ばしいことでしかない。イグルコよ、違うか」

言葉の深い意味を、おそらく王も察している。だがかれは一言でそれを一蹴し、皮肉へと置き換えてしまった。

「……御意に」

イグルコ・ダイアヒン・ファ・ファーデン——階級は伯爵。遠くはあるが、その家名は王家にも連なる確固たる血筋を持つ。海軍副総督から王国の丞相にまでのし上がり、その若い頭脳を必死にひた働かせてきた男は、けれど最後の一足を踏めなかった。

王の意のまま「御意」と応え、彼はその死人のように真っ白な顔を再び床へ落とす。

「状況は？」

「はい、公女の首は計画通りイクパル本土へ運び込みました。他はこちらに持ち帰りましたが——……確認なさいますか」

カランヌの言葉に、王は指のはらで肘掛を叩く。

公女の入った棺は、実際にはまだ港に格納させてある。どこへ運びどう処分するかは、国王の下す判断だ。

「いや、首から下に用は無い。入念に焼却しろ」

——この一言で、“彼女”は骨も残されないことが決まった。よもや隣人の顔色を伺うことさえ、カランヌはしなかった。

「御意。サディアナ王女の収用は、テナンの第五公子とアシュケナシム殿下に引き継がせました」

「テナンの第五公子、コンツ・エトワルト・シマニか」

「ええ、なかなか自我の強い男です。が、一度こちらに引き込めば、裏切ることはまずありません。大きな餌にも、じきに気づくことでしょう。追ってご命令がおりでしたら鷹を飛ばしますが」

カランヌの言葉に、王はひとつだけ頷く。

「まずは“<sup>えさ</sup>首”に気づいてからだ」

ふと視線を横にずらし、王はその先を眺め見た。壁に並ぶ太い円柱のそばから、控えていたのだろう男たちが進み出る。

けれどその思わぬ顔ぶれに、カランヌは目を開いて王を見た。

「……まさか、彼らを？」

「そうだ。ディファストン、ギルウォール、ハサリオード、ファンサロッサー——儂の息子を四人、テナンへ送ろう。内、海軍艦隊の総指揮をギルウォールに任せる」

並ぶ顔のすべてを順番に見つめ、カランヌは唾で喉奥を鳴らした。

揃いも揃って、嫡子ばかり。三十九歳の第一王子ディファストン、三十七歳の第二王子ギルウォール、三十三歳の第五王子ハサリオード、同じく三十三歳の第六王子ファンサロッサー……彼らはこのメルトロ王国において、“四将君子”とも言われる国軍の要だ。彼らが「出た」ということは、戦争の封が切られる刻限も近づいているのは確か。

「今後はこの四人に、テナン公国独立への援助をさせる。陸の総指揮をディファストーンに一任。カランヌ、お前はこれまで通り諜報に努め農に流しつつ、ディファストーンの下につけ」

カランヌは王に向けて敬礼する四人の王子からようやく目を外し、礼の形に頭を下げた。

「イグルコ、」

「……はい」

「お前には暫くの休養を与える。しっかり体をやすめ、また農の隣に戻って来い」

「……御意」

イグルコの青白い顔は国王を見上げず、床に向けられたまま。そうして立ち上がり、二人で退去の礼を王に向ける。

――海の女神に、魂だけ抜かれたな。

王子のうちの一人在、嘲笑じみた囁きをもらす。それを後ろ背に聞きながら、カランヌはイグルコが歩き出すのを待って、彼の背に続いた。

その日から幾日も経たず、彼の失踪が露見する。

メルトロウ王国丞相イグルコ・ダイアヒン・ファ・ファーデンは、休暇を終えて玉座のそばに戻ることに無く、歴史の上から名を消した。

「……ねえ、エトワルト」

帝都アデプを歩きながら、アシュケナシシムが立ち止まる。振り返って彼を見ると、コンツェは驚いて顔をしかめた。

「お前、」

「ごめん……」

崩れ落ちるようにしゃがみ込むと、アシュケナシシムは口元を押さえて咳をはじめ。顔は血の色を失い、口元を抑える指先さえも蒼白に変わっている。コンツェは慌てたように彼の元に膝をつき、その背に手をあてて覗きやった。

「ごめん、て……大丈夫なのか」

「うん、休めば、なんとか」

ひゅうひゅうと鳴る苦しそうな息をしながら、アシュケナシシムはまた激しい咳を繰り返す。様子を見て背中をさするが、しゃがみ込んでしばらくしても、彼が顔を上げる気配は見られなかった。休んでなんとかなるとは、どうにも思えない。

「医者にみてもらおう、アシュ。お前、前から思ってたけど、医者にかかってないだろ」

喀血するほどの発作をおこすくせ、未だに彼の“主治医”を称する者の影をコンツェは見たことがなかった。ここになら、信頼できる人がいる。アンに診せさえすれば、多少の義理は通してもらえるはずだ。たとえばアシュケナシシムの素性が、彼女にとって「敵」であろうとも。

「知り合いがいるんだ。診療所は城内だけど、お前はすぐそこの宿で寝てろ。俺が行って連れて来る」

帝都には入ったばかり。城に行くには、この迷路のような路地をまだまだ歩いていかななくてはならない。しかもイクパルの路地は舗装されておらず、土の盛りあがる粗雑な箇所が無数にみえる。おぼつかない足取りでは、一気に転んでしまうほど勾配もまちまちだった。そんな道のりを、アシュケナシシムが自分の足で歩けるとは思えない。まして背にかついても、今度は暑さにやられてしまう。太陽もすでに傾き、じきに涼しい風が吹いてくるだろうが、それはまだ先の話だ。

「やめて」

立ち上がりかけたところを、アシュケナシシムの腕が制する。コンツェは思いとどまり、地面に再び膝をついた。

「まだ真っ青だろうが」

「やめてよ、医者なんて嫌いだよ。僕は医者より自分の身体をよくわかってるから、必要ない。まだ死なないから大丈夫」

腕を掴む彼の指が、力強く食い込んでくる。その痛みを目を細めて、コンツェはアシュケナシシムを見つめた。

「大丈夫に見えないから言ってるんだ」

「いやだよ。呼んだりしたら、ただじゃおかないよ。そこ、宿屋なんだろ。僕はそこで休んでる

から、君はさっさとサディアナを見つけてきなよ。逢いたいんじゃないの？」

アシュケナシムが指差す先に、コンツェが先ほど休んでいるといった民営の宿屋がある。土壁の、ごく普通の宿屋だ。帝都への入り口に位置するため多少は割高のはずだが、彼を泊ませるには足りないくらいの設備だ。しばらく休ませて彼の回復を待ったら、別の場所に移したほうがいだろう。

「俺の用事は後回しでいい。水をもらってきてやるから、行こう」

肩を貸して立ち上がらせ、宿屋に向けて歩こうとする。けれどアシュケナシムの足は、頑として動かなかった。

「何も食べたくないし、何も飲まなくても平気。欲しくなったら宿に言うよ。……ほら見て、息も落ち着いてきただろ。放っておいてくれたほうが、僕は助かる」

貸していた肩から身体を離し、アシュケナシムが真っ直ぐにこちらを見つめる。たしかに息はまともになったが、顔色は相変わらずだ。けれどここで反論しても、彼にとって立っている時間を延ばすだけになる。一刻も早く横にならせるには、頷くしかなかった。

「わかった。辛くなったら、無理しないで宿の主人に助けを求めろ、いいな？」

宿泊に必要なだけの銅貨を余分に握らせて、コンツェは彼を見送る。アシュケナシムの姿がしっかりと宿の中に入るのを見届けて、ほっと息を吐き出した。

目的は二つ。皇帝にシアゼリタ殺しの真実を問い、フェイリットを連れ戻す。いきなり宮殿を訪れて、バスクス帝が謁見に応じるとは思えないため、おそらくこっちは明日のほうがいい。...となる。

「あれコンツェ!？」

歩きながら険しい顔で考えていると、そばの建物の中からひょっこりと赤毛が見えた。通りに面した土壁の窓は、砂埃を防ぐため小さく高く作られている。覗き用のそこから見知った人物を確認して、コンツェもまた口を開いた。

「――アン？」

小さな覗き窓から赤毛が消えて、次いで入り口の垂れ幕が捲れ上がった。三段ある段差を駆け下りると、アンは着ていた軍衣の首元と一緒に、そばかすののる頬を緩める。

「やっぱり。よかった、戻ったんだな」

同僚を含め、アンにも直属の上司にも、テナン公国に帰ることは告げずにいた。身勝手にイクパル本土を後にした手前、どうしたものかと考えてもいたが、この様子ではワルターが手を回してくれたのだろう。ならばアンが知っているのも頷ける。

“戻ってきた”のではなく、“けじめをつけにきた”だなんて、言えるはずがなかった。シアゼリタを殺させた犯人が本当に皇帝ならば、近衛から足も抜くつもりだ。けじめをつけにテナンに帰ったはずが、同じ理由でまた本土に舞い戻ることになるとは、あの頃は考えもしなかった。

「どうしたんですか、珍しいところから」

問いかけを濁すように微笑んで、コンツェはアンの出た建物を見上げる。邸宅のようだが、下級の貴族街すれすれに建っており、城の最終門からもかなり外れたところにある。つまりここは城下だ。アンが城下へ出て行く姿はあまり見かけないため、どうしても珍しく感じてしまう

。このままアシュのところへ連れて行こうか。そう考えてみるものの、やはり彼の嫌がるしかめ面が目に浮かぶ。コンツェは溜め息とともに肩を落とした。

「ああ、ちょっと師匠のところにね」

「師匠って……テリゼアシダ様の？」

テナン王家の血筋を引くくせ、放浪ののちに民家に腰を落ち着けてしまった“変わった”婦人。そんな印象が頭に浮かぶ。アンに医術を教え、逃亡に手を貸した張本人だが、コンツェはまだ顔を合わせたことがなかった。

「そう、たまに顔見せとかないとうるさくてな」

アンは声を立てて笑っているが、その顔はひきつり疲労さえ見える。久しぶりに師を訪ねたという格好には、どうも見えないのだ。この人も嘘をつくのが苦手だな、そう思いながらコンツェは苦笑した。

「帰ってきたならうちに来るか。どうせ飯もこの辺で済まそうと思ってたんだろう」

「ええ、この辺で済まそうと思っていたのは確かですが、連れがいるんですよ」

「へえ、まさか女か？」

困ったように笑って、コンツェは違いますよ、と首を横に振った。顔を見たなら女だと確信しそうだが、アシュケナシムは立派に男だ。便所の無い船に長く揺られていれば、確認する機会はいくらでもあった。いや、顔を見たなら性別がどうこう以前に、フェイリットとの類似点に驚くか。

「人数が増えても構わないよ。どうせ場所だけはたくさんあるんだ」

ワルターも呼んでやるぞ、という言葉に思わず首を振って、コンツェは口元を緩める。

「いえ、そんなに大袈裟に喜んで頂かなくても」

「遠慮するな。気が向いたら連れも一緒に引っ張っておいで」

悪気のない大らかな笑顔に、すこしだけ胸が痛む。自分はこのなにも簡単に、嘘がつける男だったのだろうか。

「はい」

頷いて見せて、コンツェは微笑んだ。じゃあな、と笑ってアンはもとの建物に戻っていく。

暗くなり始めた空を見上げてから、フェイリットを探すためコンツェはまた歩き始めた。

「報告を聞きましょう」

薄暗い玉座の間に身をくぐらせた途端、ウズの声が空間を響きわたる。アンは僅かに息を吸い、幅の広い階段が幾重にもかさなる、段上の玉座を見上げた。

灯火もともらぬ室内は、明かり取りの高窓から指す月明かりでほんのりと青白い。玉座の肘掛に身を任せていた影が、不意に身体を起こしてこちらを見下ろした。

「……はい。懐妊しているジャーリヤは、一人もおりませんでした」

アンが静かな声で答えると、玉座の下にいるウズがゆっくりと頷くのが見える。見上げた先のバスクス帝は何も言わず、起こしていた身体をまた肘掛へと戻したようだった。

「間違いないな」

「はい」

専門とは異なるため、わざわざ師匠の顔まで拝みに行ったのだ。資料を借り、再度確認したから間違いはない。

「妊娠初期は普通、着床によって子宮の形が不均一になります。それを確かめるため、外側と内側から指を当てて見定めますが、現時点ではどのジャーリヤにもそのような膨隆は認められませんでした」

言いながら、冷えた指先が震えていく。たくさんのジャーリヤを診察したものの、誰にも懐妊の兆しはみられなかった。即位から二年もかけてハレムに溺れた皇帝を演じ、かつ子どもは人為的につくらず、拳句はそこまで手をかけたはずのハレムの縮小。いったいどうして、彼らはそこまで徹底した欺き方をしなければならなかったのか。

その心を動かすなにかが例え復讐だとしても、そもそもの根源である先帝アエドゲヌも、ウズを認めようとしなかった前宰相セルジンガも、今は亡き人。摘み取ることでできなかったテナン公国の企みさえ、コンツェを“こちら側”に手に入れたことで抑制できている。彼らを苛むものは、もはや何もないのに。

——ディアスですわね？ そうなのでしょう、父親は。きっと彼です。ならば私は……私は——！

「アン」

ウズの声が間近に聴こえ、ふと意識を戻したアンは、目の瞳に身をすくませた。

「何も我々は、私怨にとらわれて動いているわけではないのですよ」

いつになく優しい声が、あとじさる身を追いかけてくる。

私怨ではない。では、なぜ？ それを尋ねても、あなたは教えてくれないのではないですか。

「アン、まさかまだ……」

はっと気づいて目を開くウズから、無理やり顔を背けて俯く。そんな尋ねかたは卑怯だ。封じ込めたはずの記憶の箱が、抉られるように開いていく。



「違います……！」

視界の端で、玉座のかれが立ち上がる。ひとすじの視線も漂わせず、まっすぐ玉座の裏――私室へと下がっていく姿。アンはそれを目で追うと、うなだれるようにしてウズと玉座に背を向けた。

「あの頃は生きるのに精いっぱい、振り返ることもできなかった。……兄上、私が……もし振り返っていたなら、何かが変わっていたのでしょうか」

「アン」

震えた声で言い捨て、アンは仕切りの幕を突っ切った。

時おり思い出すのは、自分に宿るぬくもりと、“逃げよう”という守りの言葉。胎内を引き裂く熱い痛みと、燃えさかる背中の斬り傷、とり囲む鎧の男達、月夜の暴力……。八年もたったはずなのに、思い出しては身を縮め、夜明けも忘れて枕を濡らす。こんなにも弱い自分に、誰が目をかけてくれるものか。

「あら、アン、早かったのね」

走り帰った邸宅の回廊で、母の姿を見つけてしまう。薔薇の咲く庭を眺めていたのか、エセルザは廊柱につたう手すりに手をつき、顔だけをこちらに寄せた。

「母上、すみません……しばらく室（へや）にいますので」

頭を下げて、彼女のそばを通ろうとする。視線は足元へ向けていたけれど、見なくてもわかってしまった。エセルザはきっと、優しい顔で自分を見ている。

「アン。母はいつでも、あなたの味方ですからね」

同じ言葉――八年前とまったく同じ言葉を口にして、エセルザは庭に戻っていった。ぼろぼろと溢れる涙を、見ないでいてくれる。きっとそれは、意地っばりの娘をよくわかっているからだ。

自室に戻ったアンは、剥ぎ取るように軍衣を脱ぎ去り、寝巻きを羽織って庭に出た。月明かりはちょうど真上に出て、咲きはじめの薔薇をよく照らしている。

「綺麗……」

素足で芝生を踏みしめて、ようやく心が落ち着いた。どこまで気をつかわせてしまったのか、同じ庭にあったはずのエセルザの姿ももう無い。落ち込んでいるのも、そろそろおしまいだ。

「さて、証書をまとめないと」

伸びをして、ふと目についた薔薇に鼻先をつける。芳しい香り。人工で水を引き、無理強いに近い環境なのに、この子たちはよく咲いている。

アンは小さく息を吐くと、回廊の石畳にそっと素足をのせた。その先で、視界の隅に何かが動いたのを感じる。母上？ と声をかけようとして、アンは息をのみこんだ。

「陛下……どうなさったんです」

目を開いて、アンは回廊の先を見つめる。何がどうなって、この私的な空間であるトスカルナ邸にこの人が現われるのか。

「……ここへ来るのも久しいな」

どこか懐かしむような声で、彼は低く静かに言った。

前触れもなく訪れたその人に、アンは目を見開いた。

「陛下...どうなさったんです、」

普段は改まることのないこの口調も、驚きのままに変えられる。何がどうなって、この私的な空間であるトスカルナ邸にこの人が現われるのか。

「.....ここへ来るのも久しいな」

しみじみと呟いて、ディアスは周囲をぐるりと見回す。薔薇の植えてある庭、ここから見える王宮の景色、部屋へと通じる細い回廊――八年前と何一つ変わってはいない。

彼の、少し低くなった声と、幼さの完全に抜け切った鋭利な眼差し、何よりも皇帝として貫禄を増した風体を見つめアンは思う。ただ変わったのは自分達だけだと。

もはやこの長い年月、二人の間に男女の関係があったらうことは誰しも覚えてはいないはずだった。

「何か御用が？ このような夜更けに、ウズも屋敷には戻っていませんよ」

ようやく「現在の」自分を思い出し、言葉を繋げる。ディアスは珍しく皇帝の正装のまま、薄めの外套を羽織っている。一方の自分は、寝ぎわのために女物の寝衣を纏っている始末。――女を捨てた自分が、こうして再び軍服を纏わずに誰かと接するなど。着替えるのじゃなかったと後悔しつつ、ディアスの黒の瞳を見上げた。

「やはり、軍医を辞める気にはならないのか」

「.....ありませんね、今の職が天職だと感じてます」

ふ、と吐き出すように笑って、ディアスは肩の力を抜いた。

「八年前、いきなり姿を消したアンジャハティ嬢が、五年ののち現れ医者になった聞いたときには、驚いたものだ」

「.....ええ」

わずかに笑って、アンは庭を見つめた。深紅の薔薇が咲き誇る、美しい庭園。八年前とは代わりはないが、この薔薇が咲いた様子をディアスが見ることはなかった。

五年のあいだ、医学を学ぶために隣国のリマへ密航し、それから帰って軍へと入った。トスカルナという皇籍は失ってしまったが、それはかえって幸運でしかなかった。皇家トスカルナの姫ともなれば、婚姻は避けられない。なによりも女であることから逃げたかったあの頃の自分に、

「家」は重すぎたのだ。

「.....ウズルダンが植えたのだったか」

薔薇の咲く庭に降りて、ディアスはその低い声を発する。

暑い気候の中で、この薔薇はほとんど一年中咲くように改良されている。けれど盛りというものがもちろんあって、今の時期はまだ蕾が大部分を占めていた。

ディアスは美しい花卉を垂らすものではなく、深紅の色がわずかだけのぞいている蕾のほうをじっと見つめている。

「腹の立つ兄でしょう。これで償いのつもりなら、あの涼しい顔を殴ってやりたくになります」

ディアスの目線の先、一際大きく咲く薔薇の蕾に手をかけて、手折る。

「差し上げますよ。この蕾がお好きなら」

「蕾か……耳が痛いな」

「痛くなるようなことでも、なさったんですか」

「――いや。いいかげん、皇籍に身を戻したらどうだと言いに来たのだが。あの老いぼれが死んで、もう二年にもなる」

名前までアンだなどと、とても皇族の姫君らしからぬものを名乗って。

「アンジャハティ姫は死にましたよ。八年前に、背中への傷が元でね。今あるのはただのアン、男でも女でもない一人の人間です」

背の傷も、……腹の傷も癒えた。ただうっすらと残る桃色の癒痕を残して。

「ならばその一人の人間として皇族に戻れ。婚姻せずともトスカルナを継げるよう計らってやろう」

「……陛下？ トスカルナはウズが、」

言いかけて見やると、ディアスの褐色の頬には苦笑めいたものが浮かんでいる。

「勅命は下さん、アンジャハティ・トスカルナ。早く皇族に戻る決心をしろ」

薔薇の蕾を手の中できると回しながら、ディアスはこちらに背を向けた。

「何をなさるおつもりですか」

「……何も」

広くて大きな背中を見上げて、アンは顔を曇らせる。後ろ背では、何を考えているのかさっぱりわからない。

「では陛下こそ、早くお戻りになられたほうがよろしいかと。昔日のディアス皇子は、それはそれは出来た御方でしたから」

背負いすぎた闇に、いつか潰されてしまうのではないか。先帝の死後、“解放された”彼を見て、そう思ったものだった。薄暗い地下の鉄格子は、この男から人らしさというものを覆い隠してしまったのだろう。昔はもっと優しげに笑っていたその笑顔は、ひっそりとどこかへ消えてしまった。

「持ち上げてくれるものだな。……子すら守れぬ男が、出来たものか」

吐き出すように呟いて、ディアスは押し黙った。

きっと晒っているのだろう、自分を。そう思えるほどの沈黙を残して。

\* \* \* \* \*

――遠くのほうで音楽の音がきこえていた。

カヌーンとレク、ウッドが奏でる軽快な調べに混じって、踊り子が踏み鳴らすアングルベルの鈴音が、しゃらん、しゃらんと響きわたる。

「お出でにならないのですか」

回廊に出て、花のない庭を眺めていたアンの背中に、侍女の声が降りかかる。

宮殿で催されている宴は、第一皇子の生誕日を祝うものだ。皇族の女性ならば出席が許されていたけれど、あまり気が進まない。

ラジル皇子は二十五歳で、ギョズデ・ジャーリヤを十人、ジャーリヤを三七人持っている。その中にいずれ自分も含まれることになるのだと思うと、尚更に気が滅入る。

「せっかく着付けてもらったのに悪いけれど、このままここに居るわ」

父は花が嫌いらしい。何も植えず、ただ小鳥の休む小さな香木だけが二三。庭園にあるのはそれだけだった。

「……？」

その香木の向こう——……城の道へと続く門の方に人影を見た気がして、アンは静かに覗き込む。

「アンジャハティ姫？」

「は……はい、そうですが」

高い塀の向こうから、聞き覚えの無い男の声に名を呼ばれる。

「迎えに来たのだが、男は通してもらえないようだ。そこの番兵に言ってやってくれないか」

「……どなたさまですか」

「ディアス。……ディルージャ・アス・ルフアイドウル・バスクス」

現れた少年は、もう大人ほどにも背が高く、身体つきも華奢ではない。鍛えられた筋肉がしっかりとしていて、たくましい印象だった。

「第四皇子殿下？」

帝位の継承権を持つ男子の中で、最も年少の皇子。たしか年のころは十五くらいであったはずだ。自分より三つも歳が下だというのに、なんと早熟な御方なのだろう。同じ皇族であっても、異性の前に顔を出さぬアンにとっては所見にも等しい顔であった。

「アンジャハティ・トスカルナ、ラジル皇子殿下があなたに会いたいと仰せでな。お陰で俺は使いっぱしりだ」

おどけたように肩を竦ませて、微笑む。きつい印象を受ける顔なのに、素直に笑うその顔はどこか優しげにすら見えた。

「……やはり、行かなくては駄目でしょうか」

闇に溶け込む漆黒の瞳を見上げて、アンは問うた。

相手は第一皇子。そしてその使いに寄越されたのが第四皇子であるならば、もう誘いを断ることはできない。けれどこの笑顔を見て、アンは小さな希望を抱いた。自分を見逃してはくれないかと。

アンの紺碧の瞳を見下ろして、ディアス皇子は困ったように眉をひそめた。やはり、見逃してもらうことはできないらしい。

小さくため息をついて、侍女に外出することを告げようとアンが振り返ったその時、

「わかった。このまま俺が戻らなかったら、兄も諦めがつこう」

悪戯を思いついた少年のような顔をして、ディアスは笑った。

「ちょうど退屈してたところだ。匿ってくれないか」

忘れもしない、十八歳の暑い夏の夜――……、

これが悲劇へとつづく、最初の出会いだった

その日はとても暑く、もう夕方だというのに、昼に鳴く虫の声がいつにも増して大きく聞こえていた。

日暮れの藍色に変わり始めた空が、ちょうど大窓の向こうに見える。ああ……今日も一日が終わるのだと、思わずにはいられない夕陽だった。

「父が……私に婚姻をと申してまいりましたわ、ディアス」

アンジャハティは小さくため息をつきながら、寝台にひとり、裸のまま寛いでいる第四皇子ディルージャ・アスを振り返る。

頭の下に腕を組み、彼はどこか遠くを見つめていた。名を呼ぶ声にその黒い瞳は、わずかに細まりこちらに向けられる。

「その様子だと、俺が相手ではないらしいな」

あの出会いの夜から早ひと月。二人の関係が熟するのに、さほど時間はかからなかった。

ずっと宮にこもり、退屈な毎日を暮らしていた“良家の令嬢”にとって、彼の存在は新鮮すぎた。まるで風のようにさっと吹き、あっという間に心も身体も攫ってってしまったのだ。けれど突然に言い渡された婚約の知らせは、“やはり”と肩を、落とさずにいられない相手だった。

もう十八を迎えた娘にしては、婚姻が遅れているのはわかっていた。宰相である父の政治上の理由から、こんなにも先延ばしにされてきたのだ。ずっと知らぬふりを続けてきたけれど、十四を過ぎた辺りからは、自分が嫁ぐだろう人の名前ぐらい悟ってしまったのも事実。アンジャハティはため息ながら言葉をつないだ。

「ラジル皇子殿下は、私たちのことは？」

「知らない、と信じたいものだが……まあ無理な話だろうな。この手の噂は、侍女や小姓には恰好の餌になる」

すなわち、広まりやすいということ。城中を頻繁に行き来する「彼ら」は、いわば歩く看板に等しい。ひとたび情報を書き込めば、次の日には多くの者が知るところとなる。

「ならあなたは、お兄様の婚約者に手をお出しになっているということになりますわね」

侍女たちの看板効果は、今回のことも同じ。ディアスと関係を持ったことなど、あっという間に城中に知れ渡る。

「そうだな……だが知ったなら、あの独占欲の塊は黙ってないはずだ」

渋々といった様子で呟くディアスに、アンジャハティは頷いた。

「ラジル皇子殿下はなんというか……」

「気が短い？」

ふ、と笑ってディアスが付け足す。

「…え、ええ、けれど、……そう軽々しく言うものでは」

心中の感想を言い当てられ、口ごもる。いくら本人がいないからと、皇子の欠点などそう口にしているものではない。

アンジャハティの焦りようを見て、ディアスは楽しげに笑った。

「兄上の取り柄といえばその“決断力”ぐらいだ。貴女を奪った俺がどうなるか、お楽しみというところか」

冗談を言うように軽い口調で、ディアスは寝台から立ち上がった。寝台のそばの卓に掛けられていた上衣を簡単に羽織り、窓際に立つアンジャハティの隣へと移り来る。

「どうなるかだなんて、」

並んだ視界にしなやかな褐色の胸元が写り込み、アンジャハティは自らの顔が熱くなるのを感じた。さきほどまでこの広くたくましい胸板の上に、頬を寄せていたのだと考えるとなおのこと。

「わかっていたことではないですか、あの夜だって」

ラジル皇子の祝いの宴に出席しなかったことが、結果裏目に出てしまった。

空いた席の主を尋ねたラジル皇子は、『私の前に出たがらぬとは、大胆な女だ』と笑った。そばに居た第四皇子を呼び寄せて、直々に連れくるよう命じたところまでは、ほんの遊びのつもりだったらしい。だが、その第四皇子は“深紅の美”と噂されるアンジャハティ姫の元から宴の席へと戻ることはなかった。翌日には広まっていた第四皇子と美姫の恋歌に、気の短さで知れ渡るラジル皇子が憤慨したのは言うまでもないこと。

「俺は後悔していない」

言いながら抱き寄せられて、額に彼の唇を感じる。女のくせに、すくすくと育ちおってと父に嘆かれたこの長身も、彼の前では背伸びしても並べない。その鋭利な顎筋に指を添わせて、アンジャハティは微笑んだ。

宰相である父の命令は、すなわち皇帝の命令にも代わる。ラジル皇子と婚姻しろと言われれば、逆らいようがないのが現実。それに父にしても、第四皇子に娘が貰われていくより、第一皇子であるラジルの申し出を受けた方が得と見越したのだろう。第四皇子ディルージャ・アスは、剣技にも秀で軍師の舌すら巻かせるほどの戦才の持ち主だった。けれど、“所詮は”第四皇子。兄三人が突然死でもしないかぎり、彼の未来に玉座は無い。

「アンジャハティ」

ディアスの濡れた唇が、ゆっくりと額から首元へ降りくる。心地よさに目を閉じて、彼の頭に腕を絡めた。

一緒に居させてください——……そのたった一言の言葉が、許されない。

言えば彼は頷くだろう。けれどそれは、場合によってはディアスに“陛下を裏切ってくれ”と頼むことにも代わる。

平民の母親から生まれた第四皇子は、いつの間にか他の皇子たちを凌ぐほどの戦才を見せ始めている。ただでさえ足元は危ういというのに、この期に及んで宰相の娘であり、皇帝を輩出したこともあるトスカルナの姫をジャーリヤに迎えるなどと。

余計に命を危険にさらしてしまうことになるだろうに、そんなことを言い出せるはずがない。

「ディアス、」

この名を呼ぶのは、あと何回あるのだろうか。そんなことを頭の隅で考えながら、それでもア

ンジャハティは淀みなく囁いた。

「――陛下と、父の御命令に従います」

父から言い渡された婚姻の日取りまで、もうふた月も無かった。



「よいなアンジャハティ。ラジル皇子の後宮に入り、早く殿下の御子を授かるのだ。もうじき殿下の立太子も決まっている。お前の血筋なら必ずや、ラジル皇子が皇帝に即位した折にはサグエ・ジャーリヤの称号が頂けるであろう」

“婚姻”とは名ばかり。そもそもは彼の言うようなサグエ・ジャーリヤになることこそが、本当の意味での婚姻だ。ジャーリヤもギョズデ・ジャーリヤも、所詮は奴隷と同じ、“所有物”に他ならない。愛妾がハレムでの地位をのしあげて、皇帝と対等の地位を得る――それがこの国で最も自由を約束された、女の栄華の道。

アンジャハティは大きな鏡の前に写る自分を、ぼんやりと眺める。

白い絹の衣装に、藍色の上套――ラピスラズリの首飾りが侍女の手から頭を通り、しゃらりと小さな音をたてた。赤く長い髪は項を中心にして左右に分かれ、頭の上までゆるく編み上げられている。

“深紅の美”と――言い始めたのは誰だったか。人前に顔を出さぬイクパルの女性の美しさの評判は、もっぱら噂のみで広がる。こんな容姿、いいと思ったことなど一度もなかった。やおら見かけがいいせいで、好きでもない、逆らえぬ身分を持つ男の元に嫁がねばならないなどと。

「やはり、我が子ながら美しいな。誇らしく思うぞアンジャハティ。お前は背が高いが、ラジル皇子殿下はお前より頭二つは高い。並んでも、見劣りはすまいて」

「そうなのですか」

頭二つ――ディアスとも確か、そのくらい離れていた気がする。会わなくなって、早ふた月。噂でしか耳にすることのなくなった彼は今、方々の娼館を潰し歩き、貴族の宮に忍び込んで見境なく令嬢を抱いているのだという。

――恋歌など流れはしたものの、“深紅の美も、遊ばれたのだ”という新たな噂が加わっていた。「あの第四皇子には困ったものだ。婚前のお前を軽々しく奪うとは。まあ、あれで本気でなくて助かった。いらぬ画策をせずすむというもの。集めた大元老たちにはお帰り頂ける」

――女を盗られた第四皇子は、兄を殺すのではないか。そんな不安を抱いたのは父だけではないようだった。元老に加えて、滅多に収集されることのない大元老――公王たちまで、帝城に来ていたとは。

「あのように頭の良い方が、私などに本気になるはずはございませんわ、父上」

皮肉をこめたつもりで、アンジャハティは父親の顔を見つめた。彼の見せ始めた“振る舞い”の本当の思惑。流れた噂のお陰で、「婚前のくせ、男に懸想するとはふしだらな女だ」などとアンジャハティを非難する者は誰一人いなかった。ただただ可哀想なお方だと、ラジル皇子なら真に愛してくださるといふ祝いと慰めの言葉ばかり。

ディアスはアンジャハティとの関係を“遊びだった”と他に思わせ、ものの見事に「何の罪もない被害者」に仕立て上げてくれたのだ。自分の名声が地まで落ちてしまうのも厭わず。

「ディアス皇子殿下は御年十六になったばかり。まだ、愛を誓うには早すぎる若さですわ」

そう、若すぎる。早熟で切れ者の第四皇子が頭角を現すには、まだまだ早い。女好きでふしだ

らな男だと、思わせていけばいいのだ。そうすれば侮った者も見破った者も、等しく彼に本性を曝す。

「さあ、行こうぞ。ハレムの門まで、父が先導しよう」

純白と瑠璃の宮殿に、感慨を抱かなかつたと言えは嘘になる。人並みに美しいと感嘆し、歩き回っては壁の模様を指で辿った。

けれどあとは、通された部屋の窓縁で、月光が射し込んでくるのをじっと見ていただけ。

ハレムというところは、こんなものか。自分の宮に籠もっているのと、さして代わり映えがない。唯一変わるとしたなら、これから毎日、ラジル皇子のほかのジャーリヤたちと、皇子の寵愛を争わねばならないことぐらいだ。

「……アンジャハティ姫」

ふぁさり、幕が開く衣擦れの音がして、継いで男の声が響いた。その低い声に、アンジャハティは慌てて振り返る。

ディアス……？ そう呼びかけようとするが、目線の先には月の逆光で真っ黒に染まった人影しかみえない。

ディアスの深みある声色に似ていた気がして、アンジャハティは立ち上がる。

「ほう……噂に聞くとおり美姫ではないか」

続けざまに発せられた、彼より一層低い渋みの増した声色。アンジャハティは進みかけた足をひたりと止める。

明らかに、ディアスではない声。

ディアスも低い声音を持つが、年に合う若々しさが漂っていた。今聞いた声が彼のものだとしたなら、随分と年をとり過ぎている。

「誰……」

「息子にやるには勿体無い美しさだ」

するすると音も立てずに近寄り来る真っ黒な影に、アンジャハティは悲鳴を上げそこなった。窓から射す月明かりに人物の顔が浮かび上がる。

「陛……！！」

薄青い月光に照らされた顔を見て、アンジャハティは驚きに目を開けた。こんなところ——ラジル皇子のハレムに居るはずのない人物。

なぜ……そう問いかける以前に、伸びてきた大きな手が肩元を掴み、強い力で押していく。

「ど、どうなされたのです？ ラジル皇子はこちらには……」

体勢を崩して絨毯の上に尻を落としたアンジャハティは、まだ事態が飲み込めていなかった。

「大人しくしているがよい。死にたくなければな」

のし掛かった重い体重に、アンジャハティはようやく気づく。けれど、振り上げた両手をたっ

た一本の腕で抑えつけられては、ただただ悲鳴を上げるしかなかった。

「きゃああああ！！ 誰か！ 誰か！」

「無駄ぞ。余がここにいることは、みな承知なのだからな」

「お……やめくださ…陛…ぐ！」

口を塞ぐように男の唇が襲いきて、アンジャハティの悲鳴がくぐもる。

「ラジルはチャダ小国に向かわせた。当分は戻らぬ。前から余はお前を欲しいと思っておったのだ」

「ああ………！」

——無理やり、押し開かれた唐突な痛み。

……気絶してしまえたなら、どんなに楽だっただろう。

か細い神経を持ちあわせてはいなかったことを、あんなにも呪わしく思ったことはなかった。

押し付けられた毛の硬い絨毯の上で、背中がずりずりと擦れて捲れていく。

アンジャハティは悲鳴すら忘れて、長い間、人形のように揺さぶられ続けた。

葬式に出席しているような顔だった。

寝台を取り囲んで立ちすくむように、父と医師、そしてラジル皇子が並んでいる。

「ご懐妊にございます」

おめでとうございます、という言葉は医師は口に出さなかった。その暗い口調は、まるで死期の迫る患者に死を諭すもののように聞こえた。

冷水を浴びせられたようなびりびりとした感覚が、頭に襲い来る。アンジャハティは死期の宣告を受けたような気分で、寝台に横たわる自分を見下ろす暗い顔から視線を反らした。

「アンジャハティ……そんな顔をするな、名誉なことだ」

長い間押し黙っていたせいで、突然発せられた父の声はどんよりと重苦しい。けれどそんな顔をするなどは、よく言ったものだ。一番“そんな顔”をしているのは、他にもない自分たちであろうに。

言葉とはおよそ噛み合わぬ態度で、父はアンジャハティの冷たくなった左手を握った。

「やめてください」

書籍ばかりをめくっている、軍人では決してないその細く長い指を乱雑に振り解いて、アンジャハティは起き上がった。

「ディアスですわね？ そうなのでしょう、父親は。きっと彼です。ならば私は……私は」

自分の声が、遠くに響くような感覚。ぼやぼやと耳鳴りがして、すべての音を身体が拒絶している。

彼の子ならば、なにも怖くはない。たとえこの身分を失っても、命が危うくならうとも、産んでみせる――アンジャハティは狂ったように、泣きながらそう叫び訴えた。

「アンジャハティ……」

宥めるように名を呼ぶ父の向こうで、深く細いため息を残したラジル皇子が、部屋を出て行くのが見えた。ハレムに入宮して三月――彼とは一度も肌を合わせてはいない。夫となったラジルはこの三月のあいだずっと、直轄領の北の方、ちょうどバツソスとチャダ小国の国境の付近で両国の睨み合いを牽制していた。

「ジャーリヤ・アンジャハティ、最後に第四皇子殿下と、お会いしたのは、」

「五ヶ月ほど……前ですわ」

落ち着きはじめた頃を見計らい、医師は質問した。しばしの時間を空けて答えたアンジャハティの、頬に涙が伝う。

――腹はまったく膨れてはいなかった。月のものが来ないと気づいたのはここ最近のこと……。もしやと不安に思っていたら、案の定、食事をもどしてしまうようになった。

どう計算しても、五ヶ月というのは無理がある。

「ジャーリヤ・アンジャハティ、よくお聞きください。お宿りになった御子は、」

葬式のような顔をやめてほしい。やめて。

アンジャハティは医師の言葉を遮るように、寝台から這い出し、転げ落ちた。

「アンジャハティ！」

「ジャーリヤ！」

医師と父、二人が慌てたように駆け寄ってくる。

深紅に織られた絨毯の上に爪を立てて、アンジャハティはむせび泣いた。

「産みたくありません……！」

「わかっておろう、アンジャハティ。それは出来ぬことだ。その御子は、」

“現帝アエドゲヌ陛下の嫡出となるのだから”

聞きたくなどなかった最後の宣告を受けて、アンジャハティは目を固く瞑る。

葬式だと――思った。

自分という存在が、ゆっくりと死んでいく。

「彼に逢わせて……」

かすれた声で呟いて、下唇を固く噛んだ。警備の強化は目に見えている。逢えるはずもないというのに。それでも逢いたい。彼に逢いたい。

「――ご懐妊の報告を陛下に致しましたところ、明日にでも陛下のハレムへと御身をお移し頂くことになりました。アンジャハティさま、皇帝宮にお入りになれるのでございますよ。それまでご自宅で、しばしお休み下さいませね……」

そっと寄り添った侍女が囁くのが、遠くのほうで聞こえていた。

――季節は暑いあの夏の夜を、あっという間に奪い去った。

もうじき灼熱の国イクパルにも、乾いた空気と高い夜空に散り輝く星々が、冬の訪れを告げる

。

漆黒の闇。……覚えている色彩といえば、それだけだ。

皇帝のハレムへ移る前の晩、アンジャハティは戻されたトスカルナの邸宅で一人、寝台にうずくまり泣いていた。自分はどうなってしまうのだろう……そんな独りよがりな悲しみだけが、頬を濡らし続ける。

会いたいと願っても、会えるはずがない。

第四皇子と恋仲を噂された女が、第一皇子のハレムに入宮し、あろうことか皇帝の子を身籠ってしまった。こんな醜聞を、皇家が甘んじて見逃すだろうか。第四皇子も第一皇子も、厳重な監視下に置かれたと聞いた。警備をすり抜けたとして、ディアスがここまで辿り着ける可能性は無いに等しい。

「ディアス……」

本人を前に呼ぶことの許されなくなったその名を、擦れた声で呟く。

ごめんなさい、ごめんなさい。こんなことになるならば、いっそあの時に懇願していればよかった。——自分を連れて逃げてくれと。けれど結局は、同じような結末に転んでいたのだろうか。自分たちに終着はないのだと、運命はあざ笑う。

「綺麗な声が、擦れてしまいますよ」

囁くように柔らかな声が、振り降りてくる。うずくまる背をゆっくりと撫でる暖かい手のひらを感じて、アンジャハティは顔を上げた。

「……お母様」

「おかえりなさい、アン」

久しぶりに見上げる母の顔は、慈悲を願いたくなるほどに優しく、美しかった。室内をヴェールも被らず歩く少女のような人。隠すことなくさらされたその懐かしい顔を見つめていると、いっそう涙が溢れてくる。

「私……おかあさま、」

「ここで殺されようとも、アン。母はいつでも、あなたの味方ですからね」

母はゆっくりと微笑んで、その顔をすっと引き締める。移した視線の先に、何があるのか——その方向に目を向けてから、アンジャハティは震えた声を上げた。

「ディア……！！」

窓の向こう。暑い夏の日々と何ら変わらぬ場所に立つ彼の姿を見つけて、驚嘆した。どうして……、ここへ来られるはずがないのに。厳重に張られた警戒の中を、いくら彼とて単独では……、

「まさか、お母様、」

「ああ、母君にご案内頂いた」

母の代わりに、低い声が答える。五月ぶりに見る彼は、どこも変わることなく、静かにそこに佇んでいた。

「アンジャハティ」

もう二度と、呼ばれることがないと思っていた。

アンジャハティは近寄り来る彼の顔を見上げて、その胸に飛び込もうとした足を留めた。……湧き上がる罪悪感が、彼にすぎることを寸でのところで制する。

「ディアス……」

俯いて、唇を噛んだ。何と言え、いいのだろう。“会いたかった”、“愛している”、“怖かった”——色々な言葉が脳裏に浮かんで消えていって、結局、何も言うことはできなかった。彼の名を呟いたまま、彼に抱きしめられるまで、糸の切れた人形のように立って。

「すまない、アンジャハティ」

包みこむような腕の中で、耳元で囁かれた贖罪の言葉に、アンジャハティは目を固く閉じた。胸が痛い。閉じた目の縁から涙が幾筋も流れたけれど、痛みのせいで、心臓が泣いているようにすら感じられる。

「どうして貴方が、…謝るのですか」

「俺が謝らなくて、他に誰が謝るんだ。皇帝も第一皇子も……俺も、貴女を苦しめすぎた。すまなかった、アンジャハティ」

「そ…んな、ディアス……謝らなくてはならないのは、私の方ですのに」

彼の広い胸板に、うずめていた顔を上げる。柔らかな感触が唇を覆って、大きな手が頬を掴んだ。

似ているけれど、まったく違う。親と子では、まったく。その証拠に、彼はこんなにも優しい。

「まだ間に合う、アンジャハティ。その腹の子は、俺の子だと皆に言うんだ。少なくとも、どちらの子か分からなくなるぐらいにはできる」

「でも、そんなことをしたら……」

子の父親など、口先だけでどうとでもなる。五月の間一度も会わなかった事実を、捻じ曲げればいだけ。陛下と変わらぬぐらい毎日、ディアスとも会っていたと訴えればいだけだ。——けれど、それをしたら彼の立場は。

「危なくなったら逃げればいい。俺はその子を我が子と思う」

「ディアス…」

嬉しさに、涙がまた零れだす。くしゃくしゃになったアンジャハティの顔を困ったように眺めて、ディアスは笑った。頬を掴んでいた指先が、睫毛に光る涙のしずくを受け止める。幼少から剣を扱っているせいで、彼の手は太く節くれていた。けれど誰よりも熱く、頼もしい。この手に守られることが幸せだと、思える。

彼の肩に両手をついて、背伸びする。顎元までしか届かないけれど、心を込めて唇を寄せた。

「ありがとう、ディア…」

——だが、その時だった。聞き覚えのある悲鳴が、宮の中から聞こえたのは。

「……お母様の…声ですわ…」

「何が、」

はっとして、ディアスが振り返る。

その視線の先を追って、アンジャハティは目を見開いた。

武装した十人もの兵士たちが、宮の内側から、仕切りの幕を突き抜けるようにして雪崩れ込む

。

「第四皇子ディルージャ・アス殿下。第一皇子ラファエ・ジルダン殿下が先ほど、何者かの手により逝去なされました。ディアス殿下の逃亡に、ラジル殿下弑逆の嫌疑がかかっておいです」

「ご同行願えますでしょうか」

口調だけは礼儀を重んじながらも、手に抜き身の湾刀を握り、胸当てをしている兵たちの姿は、およそ皇族に対するものではなかった。

「ラジルが殺されただと……？ お前達、ここをどこだと思っている」

トスカルナも、皇族に名を連ねている家柄。帯刀のまま宮に踏み込むことは、例え軍人として許されることではない。ディアスはきつい口調で、取り囲む兵たちの顔を睨みつけた。

「トスカルナのご令嬢を前に、ご無礼をお許し下さい。しかし皇族殺しは重罪。例外をお認め下さるよう願います」

「ディアス殿下を疑うというの…?!」

「……弑された時刻に、軟禁されているはずのご自分の宮にいらっしゃらなかったのですから、疑いの目は避けられぬことかと存じます。――さあ、ディアス殿下、元老院が収集されるまでギスエルダンに」

「ギスエルダン…?! 牢獄ではないの!」

ギスエルダン……重罪を課せられた罪人を、生涯に渡り監置する地下牢。曲がりなりにも皇族であるディアスが、元老院が収集されるまでの“一時”を過ごさねばならぬ場所に、相応しいものではない。

人はギスエルダンを、死ぬよりも酷な場所だと言う。未だかつて<sup>ギスエルダン</sup>地獄と字されるそこを、生きて出たものは無い。

「陛下のご命令なのです、アンジャハティ姫。どうか背かれませぬよう」

すっと一礼をした後に、先導らしい兵の一人がディアスを見やる。

険しい顔を浮かべて、ディアスはアンジャハティを振り返った。

「ディアス……」

伸ばされた手を掴むと、彼は僅かながらに微笑んだ。

「疑いはすぐに晴れる」

大丈夫だ、そう頷いた後、兵たちに目を向ける。

「陛下のお達しならば、従おう」

――ディアスが<sup>ギスエルダン</sup>地獄に送られて間もなくのことだった。第一皇子に続いて第二皇子、第三皇子までもが不可解な死を遂げ……、



アンジャハティの腹部は、皇帝のハレムで膨らみ始める。

けれど時間が経っても、収集された元老たちが、一時監置された第四皇子の釈放を認めることはなかった。

寒い夜がつづいていた。砂漠から少しだけ離れた帝都は、それを囲むバツソス公国ほど昼夜の気温差はない。しかし冬が近づくとつれ、昼は渴いた暑さがじりじりと身を焼き、夜は冷たい寒さが頬を突くような、砂漠に特有の気候が目立ち始める。

陶磁の床を裸足で歩きながら、アンジャハティはその冷たさに肩を竦めた。駱駝の毛でできた薄手の外套を羽織っていても、鼻から入り込む冷えた空気が体中を凍らせるようだ。

「……早く行かなくては、」

目的地は皇帝陛下の寝室。

第四皇子がギスエルダン牢獄に拘束されて以来、二月ほども時が経つ。第一皇子殺害の容疑はとっくに晴れているはずのディアスの釈放を、幾度となく収集された元老院はなぜか拒み続けている。それどころか、不可解な死を遂げた第二皇子、第三皇子さえも彼の糸引きだと言い始める始末。……このままでは、ディアスは死んでしまう。

ギスエルダン牢獄は主に重罪の政治犯を監置する牢城。帝都から遠く離れた場所にあるため食物の運搬が潤滑でなく、あげくに管理すら行き届いてない状態だという。地下洞にもぐりこんだ構造を持つ陰湿な<城>では、食事もろくに与えられず体罰さえ茶飯事だった。噂は色々あれど、実際、生きて出た者がいないのだからどうにもならない。ディアスをギスエルダンから解放する手段は、皇帝陛下が「出せ」と命じることのみ。なのにディアスを除く皇子の殆どを失って、実質“帝位”を継ぐ者がひとりもない現状で、皇帝がディアスを案じているそぶりは全く耳にすることがない。“皇太子”の位は、死後のラジル皇子に授けられたままだ。本来ならば、一刻も早くディアスをギスエルダンから引き戻して、皇太子の位を授けるべきだというのに。

愛妾が政治に口を出すなど懲罰ものだが、皇帝陛下と直接口が利ける立場にある現況に、アンジャハティは賭けるつもりだった。

今日、元老院が解散される。冬の季節は自らの領地で過ごすのが大元老をはじめとした議員たちの風習。今日を逃せばディアスの解放は年を越してしまうことになる。一刻も早く皇帝の元に走り、「解放して皇太子に」と奏上することぐらいしか、アンジャハティにできることはなかった。

元老院の収集は早朝。陛下が起き出してくるまで、まだ余裕はある。けれどアンジャハティに宛がわれた私室はハレムの中でも末端の区画。急ぎ足で進んでも、間に合うか否かというところだ。そんな長々と続く回廊を、右へ曲がり左へ曲がり、時には庭を突っ切って、必死に向かう。

どれぐらい走ったことか、皇帝陛下の私室のある庭の前にようやく出ることができた。アンジャハティは息を切らしながら、さらさらと湧き上がり水音をたてる庭の泉を、目を細めて見やった。

「陛下……」

回廊を回っていくより、この庭を横切ったほうが早い。アンジャハティは逸る気持ちを抑えられず、庭に足を下ろした。

「おやめ」

強い力が右腕を掴んで、上方へと引き上げられる。

「ひっ！」

小さな悲鳴を喉奥で発して、アンジャハティは右腕を掴む何者かの指先を、辿っていった。

「あ……あなたは」

「その紅い髪はジャーリヤ・アンジャハティだな。まさかお前、陛下のご寝室に押し入るつもりじゃなからう？」

緩やかに編まれた漆黒の髪と、黒檀のような艶やかな肌。闇そのもののような顔にふたつ、柔らかい栗色の瞳が並んでいる。そこだけ異質とも思える瞳が険しげに細まって、「聞いておるのか」と棘のある声が鳴る。

「ギョズデジャーリヤ・ファラマファタ？」

別名を、ファラマ公女―テナン公国が唯一、自国から送り出した皇帝の側室。一番家柄がよく、一番先にハレムへと上げられた女性だが、皇女を三人儲けて以来、寵愛を失ったと囁かれている人だった。自分の母と同じくらいの年齢であったか。整った顔からは全く年齢を感じさせないが、それでもアンジャハティより二周り異常も年上に違いはない。

「厄介ごとを連れてきたものよ。陛下のジャーリヤが、“情夫を助けてくれ”とご寝室になだれ込むなど、前代未聞」

「そんなことは……」

「違うというのか？ この時機からみて、わたくしがそう感じたのは無理もないことと思うぞ」

そんなことはない、言えたものか。けれど例えそう解釈されてしまっても、ここで引き返すことなどできない。人ひとりの、命すら関わることだというのに。

反論を口に出そうとアンジャハティの唇が震えたのを横目で見やっ、ファラマファタは静かに言った。

「見えるか、あの明かりを。今陛下のご寝室には、小国のあばずれが居る」

驚いて見つめたものの、栗色の瞳は嫉妬に燃え上がるどころか、静かな色を浮かべている。じっと室のほうを見つめて、ファラマファタは小さな息を吐いた。

「わたくしはな、こうして夜毎、ここで夜を更かすのじゃ。自分の夫になるはずだった男が、新しい女を次々と捨て行くざまをな」

佻しい女であろう、そう笑ってアンジャハティを見たファラマファタの瞳は、もう笑みを浮かべてはいない。ただ探るような眼差しが、じっとこちらを見上げている。

「あの、ギョズデジャーリヤ・ファラマファタ、」

「――第四皇子は狂ったそうじゃぞ」

はっと、アンジャハティは目を開く。ファラマファタは栗色の目をわずかに逸らし、月の光をあびて白い輝きをみせる泉を見やった。

「という話を、元老のやつらがしておるそう。皇太子として再びこの地へ戻しても、もはや手遅れだと。狂っておらぬと言うやつもいるが、それで出てきたとして、果たして皇帝に恨みを持たぬものか？ ――なんということはない、アエドゲヌ帝は、報復の暗殺を恐れておるのよ」

「四公ですの……そのようなことを、」

「であろうな、如何にもわたくしの兄が考えそうなこと。それで自分の息子を皇太子に、などと申しておる。これほど馬鹿な話があるか」

「息子……？」

「末の公子じゃ。テナン公は妃を、アエドゲヌ帝に差し出したことがある。その時の子が、第五公子コンツ・エトワルト……もう十二にもなろうか」

皇帝の血をひく息子が、もうひとり。

――では、跡を継ぐ者が“全く無い”わけではなかったのだ。自分の血を持つ健全な公子、いや皇子が、テナン公国ですくすくと育っているというのなら、ディアスをギスエルダン牢獄から早急に出す必要もなくなる。

頭の中を、冷たいしびれが満たしていく。では、いくら自分が頼み込んだとて、皇帝は首を縦には振らなかったということだ。

「そう。アエドゲヌ帝の目前で頭を床に擦り付けても、無駄じゃったな」

「でも、どうして……」

あそこで引き止めていなかったら、アンジャハティは間違いなく懲罰を受けていた。“ジャーリヤ”であるファラマファタにとって、敵となる愛妾が減っていくのは好都合だったはず。なのに、なぜ止めてくれたのか。

アンジャハティは力なくファラマファタをじっと見つめる。

「何を考えておるのか、わたくしにもわからぬ。じゃが、あまり気の快いものではないとは思わぬか。皇帝の室に押し入ったジャーリヤの首が、目の前の庭に転がる様というのは」

「それは……」

アンジャハティは目を細めて、息を吐く。想像することはやめておこうと、意識の端で思い直した。

「けれど……わたくしも、ディアス殿下を助けなければならないのです。首が転がるのを防いでいただいたことには、感謝いたします。真実を教えていただいたことにも」

「感謝している顔ではないがな」

くつつつと軽やかな声で笑って、ファラマファタは歩き出した。

「じゃが、このまま放ったら、お前は首を転がすであろう。ついて来るがよい。面白いものを紹介しよう」

ファラマファタが纏う黄はだ色の衣装が、ふわふわと揺れて去っていく。アンジャハティは自らの真っ黒な喪衣装の胸元を掴み、そのすそを慌てて追った。

ファラマファタの私室は、以外にもアンジャハティの室の近くにあった。皇帝の室とは間逆の、ハレムでも末端に位置する北東の区画。けれどファラマの足は、私室では止まらなかった。室

を過ぎ、回廊をぐるぐると歩き、北端に出て、ようやく振り返る。

「ここが何と言われておるか、わかるな？」

暗がりのせいで灰色に見える、分厚い壁。突き当たりの廊下の壁には、小さな扉がついている

。

「……はい」

死ぬまで出られないと言われるハレムの、唯一の「出口」——死の扉。

頷くアンジャハティを見やり、ファラマは長い衣装の袖を傾けた。するりと小さな音がして、銀色の棒のようなものが出てくる。細い金属のそれは、先のほうをところどころ複雑な形に折り曲げられている。鍵のようで、鍵ではない棒。

「いずれここから逃げねばならぬ時もこよう。その時にはお前にこれをやるから、覚えておくのじゃぞ」

そう言って、その棒を扉の錠前に開いた穴へと差し込む。ちきちきとしばらく手首を動かしたかと思うと、ふいにかちやり、と鍵の開く音が鳴る。

「開いた」

錠前は、全部で十にもおよんだ。それらのひとつひとつを、ファラマは一つの鍵で開けていく。覚えておけ、といわれても、並大抵の所業ではない。

最後の鍵が開き、ファラマが小さな扉を押すと、ぎしぎしと金具がうなる音をたてて、暗闇がぽっかりとあいた。

「入るぞ。わたくしの後について、潜ったら一言も喋らぬようにいたすのじゃ。いいな？」

アンジャハティは頷いて、言いつけどおりに低い姿勢をとったファラマの背中を追った。

久しぶりのハレムの外の空気……乾いた土を擦る足裏の感覚を感じながら、アンジャハティは腰を上げた。

「どうじゃ、巧くいきそうか」

ファラマがひそめた声でつぶやく。はっとして彼女を見やるが、その視線は自分には無い。辿ってみてようやく、暗がりに誰かが立っているのに気づいた。影のようだった人物は、音も無く近寄ってきて、足元に膝を折る。

「なかなか巧いようにはいかんものです」

返ってきた声色は、男のものだ。低く、どこか軍人を思わせるような雰囲気。

「……ふん、お前しかおらのじゃぞ。早く公子を口説き落とさんか」

捨てるように吐き出した言葉だったが、そのあとにファラマは小さく笑った。

「やはり、育て親あにに似て腹の立つやつなのか？」

「いいえ。どちらかといえば、王妃に似ているのでしょう。純朴で、穢れを知らんような坊主です。ところでその方は……お一人ではなかったのです？」

男が、ふとアンジャハティに視線を上げる。暗闇に並ぶ茶みがかった濃い色の瞳を見て、アンジャハティは戸惑う。喋るなといわれていては、自分を紹介することはできない。隣に立つファラマを見やると、彼女は囁くように答えた。

「同志ぞ。トスカルナ家の才女、いずれ家名を継ぐことにもなろう娘じゃ」

「……ファラマ殿、あなたさまは一体どこまでお考えなのですか。ートスカルナの姫、俺はワルダヤ・ハサリ。今はそれしか言えませんが、いずれまた顔を合わせることもありましょう。お見知りおきを」

アンジャハティは戸惑いながらも、また頷く。

「喋るなと申し渡しておる。いらぬことを口走りそうなのでな。とにかく、お前は一刻も早くテナンの末公子を引き抜くのじゃ」

「わかっております。このまま帝位をテナン公国へくれてやるような真似は致さぬと、これだけは約束を」

男は一礼ののち、すっと闇に解けて去っていった。こんなに濁いた道が続いているのに、微かな足音さえ聞こえない。

「……では、アンジャハティ。謎解きをしようぞ。わたくしたちは、何をしようとしているように見える？」

「――あ、」

ファラマファタは、口の端をわずかに引き上げて、笑った。

ワルダヤ・ハサリ・サプリズーのちに帝国近衛師団、団長にして大佐の任につく男であった。

テナンの縁の者に皇太子位を、そしていずれは帝位を――篡奪を企む四公たちの策謀の中、彼は見事にテナン公国の第五公子コンツ・エトワルト・シマニを、小姓として帝都に下らせる。

「忌々しい……元老どもめ、」

室の仕切り幕を男のようにぱっと引き上げて、ファラマファタ現れる。吐き出すように呟いた言葉に、アンジャハティは顔を曇らせる。長椅子に身を預ける彼女の前に立ったファラマの顔には、血の気がまったく感じられなかった。

「いかが致しましたのですか、ファラマさま。お顔の色が……」

すっと身を起こしたアンジャハティは、ファラマのために長椅子の端へ寄りながら尋ねる。声が震えたのは、彼女の表わす態度に悪い知らせを感じ取ったからだった。

ファラマファタは深い溜め息のような吐息を口から搾り出すと、唸るように言った。

「釈放の見込みが無くなったぞ——第四皇子ディルージャ・アス・ルフアイドウル」

「な……！？ 何故、ですの…」

目の前にちかちかと星が跳び、アンジャハティは自分の身体感覚が無くなっていくを感じた。

「しっかりするのじゃ」

すっと差し出されたファラマの腕に抱えられ、震える手で椅子の縁に掴まる。

ワルダヤ・ハサリの働きで、テナン公国の第五公子——アエドゲヌ現帝の隠し種である少年は、小姓身分に身を置くことになった。軍での昇進に小姓の制度を奨励する帝国内では、たとえ親であろうとも「所有物」である小姓を動かすには主の許可が必要だ。ワルダヤはテナン公国の血筋だが、属するサプリズの家名は直轄領<サグエ>における最旧家のひとつ。皇帝を産んだジャーリヤを何名も輩出している家柄には、現帝でさえも迂闊には口を開けない。小姓になった第五公子を、たとえ親でも王であっても、篡奪の糧にすることはできなくなるというわけだ。

第五公子をディアスの“代わり”にできないとわかれば、皇帝もギスエルダン牢獄からのディアス釈放を許可するはず、……だったのだが。

「四公国を黙らせたと思えば、今度は<サグエ>の元老どもだ。やつらの言うには、“要は新しい皇子が生まれればよい”のじゃと。狂った皇子を放すには、それなりの準備もいるという。新しい子が日の目を見て、皇子だとわかれば、わざわざ危険を冒すことは無いとな。……どういうことかわかるか？ アンジャハティ」

まくし立てるように言ったファラマファタは、じっとアンジャハティを見上げる。アンジャハティと比べてずいぶん小柄な女性だが、黒檀のような肌に浮かぶ二つの栗色の瞳は、威圧に溢れて輝いていた。

「わたくしの……この、腹の子ですのね」

アンジャハティはトスカルナ家の一——いわゆる直轄領<サグエ>の血筋だ。四公たちと常に対立関係にある<サグエ>の貴族たちは、<サグエ>出身者であるアンジャハティの懐妊を、心から歓んでいる。この期につけこむには、恰好の時機。テナン公子の名を次期皇帝の座から降ろし、<サグエ>の元に権力を集める——それも出来得ることなら、“狂った”と噂されるディアスを呼び戻すことなく——ためには、アンジャハティはまたとない時間稼ぎになる。……全員一致

で反対されているディアスの解放を、拒む理由がまた一つ増えた。

「……わたくしたちは、あくまで＜サグエ＞派。こちらの血筋を守ると言われて、言い返す権利は無いのじゃ。おまえの腹の子が女兒（おなご）であったなら、少しは希望もあろうが…、子の性別を黙って待っておるほど、四公たちも人が善いわけではない。そうなれば、果たして無事に産めるか否か」

「そんな、」

希望にしてきた我が子が、その希望を奪うかも知れぬ存在になるなどと。

アンジャハティはしっかりと膨らんだ腹部に手を当てて、目を閉じた。憎しみでしか——嫌悪でしかなかったはずなのに、こうして胎動を感じているうち、どんどん強くなるのは愛しさばかりだ。はっきりと示された暗殺の可能性に、ひやひやと肝を縮めているしかないのか。

「アンジャハティ、おまえには二つの選択肢がある」

腹に手を当てたまま、黙り込んだアンジャハティを覗き込むように、ファラマファタは身を傾げた。

「ここに居て“皇帝の子”を失うか、逃げて“我が子”を無事産むか——」

静かな口調には、まるで子供を諭すような柔らかさがあった。

「ファラマさま……」

「暗殺はよもや逃れられん。ここで子を失う時は、おまえの命も無いことじゃろう。考えるのだ。死んでまで、ジャーリヤとして歴史に名を連ねることはないぞ」

ディアスを助け出す——そのことばかりを考えて、あの日から生きてきた。けれど、ここで自分が選択せねばならぬは、彼の命などではなかった。

半年以上もともに、彼の無事を祈ってきた半身……。

「逃げます、ギョズデジャーリヤ・ファラマファタ」

よく考えたわけではなかった。弾けるように口を出た言葉が本心だったのかも、未だによくわからない。

けれど決して後悔はしない——それだけを我が身に誓って、アンジャハティは深々と頭を下げた。

陽の光も射すことはなく、ささやかな風すら吹き抜けることがない。

ただひたすらに続く闇と、嘔吐をさそう腐敗臭……

血のようにも、肉が腐ったようにも感じられるその只中、そしてひとりの男は変わっていった





逃げます——いざ口に出して言うと、一気に体から力が抜けていった。

“後悔はしない。”

けれどそれは、あまりに重い言葉だった。

「用意はさせてある。リマに住んでおるわたくしの遠縁の者じゃ。放浪癖のあるやつだが、医師としては立派な女でな」

アンジャハティはファラマの言葉を、一度頭の中で反芻させて、首を傾げた。

「医師？」

“逃げる”のだから、てっきり預けられるのは屈強な兵士が何かだと思っていたのだ。権力、武力、血脈——それらすべてを腹に宿す自分を殺そうと追うのは、やはり武人であるはずと。それをかいくぐって逃げるのに、女性と二人で旅と

は、いささか危険にも思える。

「安心せよ、身重の体で旅など無理であろう？　じゃがあの女なら可能。ちょうど今イクパルに渡っていると聞いたからな。男よりも男らしい奴じゃ。多少の手の者からは防げる腕も持っておるし。あとはページスフに身の回りの物を整理す

るよう言いつけたからな。連れて行くといい」

ファラマの言葉を待つように、背後から肌色の薄い女が現れる。何度か見たことのある、ファラマに従う侍女だった。

「ページスフはリマ人の父とメルトロ一人の母を持つ。どの国でも通じる容姿というのは、旅において貴重ぞ」

「ありがとうございます……」

言い切ってから、くっとう喉奥が引きつった。焼けるように、じわじわと胸が熱くなる。……泣いてはいけないのに。

涙を堪えてじっと俯いていると、ファラマの小さな手が背中に置かれた。

「悲しみは流してしまえ。これからは、泣く暇も無いほどに過酷じゃろうからな」

ふっと顔を上げると、冗談を言いながらも優しさを崩さぬ、彼女の顔があった。アンジャハティは思わず笑ってしまう。けれど、笑顔で細めた瞳の端から涙がこぼれ落ち……、そうならばあとは堪えなどきかなくなった。

ファラマの腕に縋り声を嗄らすまで泣いて、もう本当に泣くのはこれが最後だと、何度も自分に言い聞かせる。

さようなら、ディアス。裏切ってしまうと、ごめんなさい。

「アンジャハティさま、お疲れではありませんか。そろそろお休みくださいませ」

どれくらいの時間が経っただろう。すっかり辺りは暗くなり、気づけば回廊に橙色に揺らめく蠟燭が灯されていた。

「ではわたくしも戻ろうぞ。気分は落ち着いたようじゃからな、休むとよい」

垂れ幕をめくって、しずしずと入りきた侍女に微笑んでから、アンジャハティはファラマに向かい、「そういたします」と答えた。栗色の薄い瞳を柔らかく細めて頷き、ファラマは長椅子から立ち上がる。

「……ああ、そなたには礼も言わんとな」

「お礼……ですか？ 感謝しきれぬのは、私のほうですのに、」

ファラマは行きかけた背中を小さく竦めてから、ゆっくりと振り返る。

「そなたの世話をやくのは存外楽しいものであった。おかげで最近は、自分の寝台でぐっすり眠れる」

「あ、」

アンジャハティは目を開いて、静かに頷いた。

ファラマファタと出会ったのはハレムにあつらわれた、皇帝の私室に向かう庭でのこと。毎夜、別の女の人生を壊してゆく“夫となるはずだった男”を……彼女は日夜じっと見据えていた。冷え込む夜をたった独りで、静かに過ごす辛さは

どれほどのものか。けれど彼女の口から皇帝に対する憎しみが漏れ出ることは一度もなかった。ぼんやりと灯りの見える室を見つめていたのは、湖面のように静かな瞳だった。

「そなたを世話するのがこれほど楽しいなら、そなたの子を抱くのはもっと楽しく、喜ばしいことであつたらうな。わたくしはこのハレムからは、死ぬまで出ぬ。じゃがそなた等のことは、遠く離れても案じておるぞ」

アンジャハティは微笑んで、深々と頭を下げる。

「最後まで、子供のように甘えてしまい、申し訳ございませんでした」

ファラマが室を出て行くと、奥から先ほどの侍女ページスフが現れる。リマ王国の血を持っているだけあり、肌の色は薄く髪色も艶やかな黒だ。生粋のメルトロ一人とはまた違い、雪のような白さと麦穂に似た濃金ではないが、鼻筋に浮かぶわずかなそばかすが、彼女の色の白さを際立たせている。

「葡萄の果実酒でございますわ。明日を出発に控えては、なかなかお眠りになれないでしょうから」

目の前で礼をとると、赤っぽい、甘い匂いのする液の入った杯を差し出して、彼女はにっこりと笑んだ。

ありがとうと頷いて、アンジャハティは杯を一気に飲み干した。甘い味と酸味の向こうに、ほろ苦いような独特の味を感じる。葡萄の果実酒を飲むのは初めてだった。酒独特の味よりも、苦味と舌の痺れが気になる。

「ふひぎがあじ……」

とっさに口を抑えて、アンジャハティは表情を固める。

舌が回らない。酔った云々ではなく、嫌な痺れがびりびりときているのだ。

しまった――……、

「ジャーリヤ・アンジャハティ?!」

「うぐ……っ」

襲い来る激痛は、まるで鈍器で乱れ打つように、下腹に狙いを定めている。飲み込んだ液体が、ごうごうと煮えたぎるように感じる。

「お腹……が、」

腹を抱えてしゃがみ込み、つと足を伝う一線の赤い雫を見たとき、アンジャハティは叫んでいた。

「いやああああああ!!」

「ジャーリヤ・アンジャハティ!! 誰か……誰………きゃああ!」

ページスフの悲鳴が聞こえて、どさり、目の前に何かが転がる。それが先ほどまで、笑顔で自分に給仕してくれていた少女だと気づいて、アンジャハティは慌てて目線を上に上げた。

「誰ぞの仕業か、腹の子は降りたようだな。だが念には念を入れねばならない。姫よ、許せ」

簡易の鎧を着て体型と顔を隠した男たちが数人、アンジャハティを取り囲んでいた。

「い……いや…」

ずるずると立ち上がり、男たちの隙間から逃げようと駆け出す。――が、焼けるような痛みがざっくりと背中に走り、アンジャハティは前へとつんのめって倒れた。

背中を斬られたのだと悟るまで、しばらく時間を要した。恐る恐る振り返った視線の先に、血のしたたる湾刀を構える男の姿が目に入る。

「ひっ」

「悪く思うな、ジャーリヤ・アンジャハティ。我々はなんとしても、」

悲鳴を上げる隙もなく、刃が腹へと下りてくる。

もうだめだ――死を覚悟して、アンジャハティは両目を固く結んだ。

「なんとしても、我が公子を玉座に――」

忘れようと思ったはずなのに、真っ暗な瞼のうらには、最後にみたディアスの真剣な顔が、焼きついて離れなかった。

眩しさにまぶたを突かれて、アンジャハティは目を覚ました。

重しを乗せたような体のだるさと、腹に感じる鈍い痛み。

顔をゆがめてそろそろと開けた細い視界から、一気に光が入り込む。

「うう……う」

死んでいなかった。……覚悟したはずなのに。思い出した途端にからだは激しく震えだす。ゆっくりと目をつむって息を吐きながら、考えたくないと思った。腹に走る鈍い痛みが、得も言えぬ喪失感をあたえている。けれどそのぼんやりと

した理由すら、考えたくはない。

「ディアス……」

愛しかった名前。裏切った人。彼は今ごろ、どうしているのだろうか。

——会いたい。イクパルから逃げようとした自分には……彼を待つことができなかった自分には、もう愛を告げる資格はないのに。それでも会いたいなんて、都合のいい話だ。あの優しいままの彼ならば、きっと許して笑ってくれる。そう思えてしまう自分に嫌気を感じて、アンジャハティは目を閉じた。眠って気持ちを落ち着かせよう、そう思った矢先。

ふわり、黒い影が瞼に落ちた。その暗さに覗き込まれたのだと察して、ふたたび目を開けると、思いも寄らぬ顔が視界に映る。

濃い茶の髪、きりと伸びた眉と、その下にならぶ切れ長の瞳を持つ少年。まだ声変わりも終えぬような、あどけなさが残っている。

「だっ大丈夫ですか？」

まさか目を開けるとは思わなかったのだろう。驚いた表情を浮かべて、少年は飛び退く。

恐怖を与えぬようにだろうか。とっさにとられた控えめな距離。それが、思えばこの少年の性格をすべて映していたのだ。

——ああ、この子は。

直感のようなものが、こめかみの辺りを貫いた。心配げに返事を待つ彼の顔立ちに、かすかながらも“面影”を見てしまう。

「ええ……」

大丈夫だと、いったい何に対してなのか力なく頷いたアンジャハティを見つめて、少年はにっこりと笑った。きつめの顔立ちをしているのに、なんて柔らかく笑う子だろう。

「不躰なことをしてしまっておめんなさい。でもよかった、僕の母はあなたのようになって、そのまま目覚めなかったものですから」

心配で。そう呟く少年には、微塵の穢れも感じられない。自分をとり巻く陰謀、そしてその陰謀の刃が、アンジャハティやディアス……はたまた三人もの皇子に向けられたことを、露とも知らぬ顔。

「コンツ……エトワルト公子」

“エトワルト”。テナンの名はみな、メルトロージミタものばかり。似ているのは、イクパルへの

反骨からか、それとも単に、とおい昔タントルアス王の支配を受けたという、隔絶された島国だからこそその名残だろうか。

アンジャハティは掠れた声で、少年の名を口に乘せた。罪深い……けれど罪などまったく無い、その名を。

「はい。お初にお目にかかります、アンジャハティ・トスカルナ姫」

「あの、ここは」

見覚えのない部屋だが、てっきりハレムの一室なのだと思いこんでいた。男子禁制のハレムに、この少年が現れるはずがない。となると、ここがどこなのか、途端にわからなくなる。

「ここはワルダヤ・ハサリ・サプリズ中佐の宮です。中佐が姫をハレムからお救いし、こちらに」

「ワルダヤ…」

見覚えのない室に納得するものの、今度はワルダヤとは誰だったか思い出せずに首をひねる。曇った顔のままのアンジャハティを見て、少年は微笑んだ。

「お忘れになりましたか？ 一度だけ、お会いしたことがあると伺ってます。ハレムの裏庭で」

「……もしや、ギョズデジャーリヤ・ファラマファタの」

——ワルダヤ・ハサリ。そうだ、以前ファラマに連れゆかれた裏庭で、軍人じみた男性と会ったのだった。お見知りおきをと言われたものの、それがすっかり記憶の外だったとは。

「ごめんなさい、話すことを禁じられていたので直接ご挨拶していません。お会いできますか、お礼を申し上げなくては」

「お伝えしようと思っていたところです。走って呼んでまいりますね」

「ありがとうございます、エトワルト公子」

「いいえ。……あ、それと」

「はい？」

「僕はもう、テナンには住んでいないので、よろしければ字のほうでお呼びくださいませんか」

コンツェと。笑ってそう言い残し、少年は室を抜けて走っていく。

「ワルターさんっ！ 姫が！」

「……コンツェ」

回廊から聞こえてくる声にわずかに笑みながら、アンジャハティはよほどイクパルらしい名を口にした。

憎むべき対象を見つけたら、もっと激しい感情が噴き出すと思っていたのに。いざ目の前にすると、怒りどころか悲しみさえも、すんと落ちていってしまった。

ディアスが投獄された、すべての元凶である少年。——いや、元凶をいうならばもっと別の何か。テナン公が正妃を差し出したという夜、アンジャハティが第一王子を拒んだ夜会。皆が皆、この自分でさえ原因の一端を担っている。

「泣いているかと思えば、存外静かですね」

ひとり感傷に浸っていると、室の入り口に美しい白銀の髪が立っていた。それを見つけてアンジャハティは顔を背けたが、そんなあからさまな態度にもかかわらず、現れた人物はつつか

と歩いてくるのだった。

「お元気そうで安心しましたよ。かれこれ……四年ぶりでしたか」

「兄上、こんなところへお出でになってよろしかったのですか？　ここはサプリズ宮なのでしよう」

皇帝宮のハレムではなく、一貴族の宮なのに。

兄とは、もう久しく会っていなかった。ともに学び育ったはずの彼は、いつのまにかその心を野心に浸けてしまったのだ。愛人の子というだけでトスカルナを継がせなかった父に抗するよう、彼は家を出て行った。ハレムに、一番権力に近いその場所に。性別を捨ててまで。

「心配することはありません。これでも宦官長にまで上り詰め、多少の自由は利くのです。これを飲みなさい。あの薬は、身体に負担が大きい」

「……薬？」

理解者だと思っていた。突然できた兄ではあったが、優しくしてもらった記憶もたしかにある。肉親というつながりに抱いた、ずっと守ってもらえるという甘え。けれど彼は、アンジャハティとトスカルナ家、そして母を、彼と関わる者すべてを捨て去り、権力の世界へと行ってしまった。ただ父に、認められたいがためだけに。

「兄上……まさか、あなたなのですか」

アンジャハティの頬を伝い始めた涙を黙って見つめながら、兄――ウズルダンが静かに言った。

「半分は」

「どうして……！」

「アンジャハティ。お前は皇帝の子を産んで、それでどうするつもりだったのです」

「そんなこと、」

「傷が癒えたらここを去りなさい。お前は死なずに、真実を見すぎている」

「わかっていますわ、テナン公国ですね？　黒幕は、すべてあの公王がおこなったと言うのでしょうか。さっきの公子が、皇帝の嫡子だから！！」

振り上げた手を掴まれて、見上げると兄の悲痛な顔が目に入った。冷たい仮面のような顔立ちなのに、こんな表情ができるのかと思えるぐらい。

「……黙りなさい」

掴まれた手が、きりきりと痛い。

「第四皇子を解放するために、お前の子は邪魔になる。私にはそれだけです」

「どういうことなのですか？　兄上はわたくしに薬を盛っただけなのでは？　あの鎧の者たちも、あなたの差し金なのですか！」

「そう思いたければ、思えばいい」

白い頬が皮肉げにゆがむのを見て、アンジャハティは激昂した。

「けっきょく、あなたは権力だけなのですからね！」

そのためには、妹を殺しても構わないとさえ思えるのか。怒りに震えだしたアンジャハティを見下ろして、ウズルダンは息を吐いた。

「私を憎めばいい。四公などへ憎しみをぶつけるのはやめなさい。そうしていれば、お前は今後とも死なずに済む」

「――いい加減にしないかウズルダン。妹君を落ち着かせてやれ」

仕切り幕を潜り出て、大柄な男が顔を出した。ワルダヤ・サプリズ――暗がりで見えなかったその姿をようやく確認して、アンジャハティは納得する。面立ちに、ファラマファタの名残があったのだ。

強く鋭利な骨格と、意志の固そうな栗色の瞳、ファラマほどではなくも色の濃い肌。あきらかに、彼女と血縁を持つことをただよわせている。名前こそイクパル本土のものだが、その血筋にテナンが混じることには間違いなかった。

「緊急ですので、ご挨拶はのちほど。――アンジャハティ姫、実質、貴女はまだ暗殺されたことになっております。ここへお運びしたのも、生存の事実を隠すため。いつ事が公になるか分かりませんが、そうなるとまたお命が危ない」

「ならばもう、危ないのではなくて？ わたくしの兄が首謀者のようですから」

その首謀者は、今ここにいてアンジャハティの生存を確認しているのだから。

皮肉を交えて吐き出したアンジャハティを困ったように見つめて、ワルダヤは肩をすくめた。

「まったく、そんなことを申し上げたのですか、こいつは。……失礼、姫。こいつは口が足りない奴ですが、今回は貴女を守ろうとしてのもあったのです。無論、首謀者もこいつではない。腹の子が降りさえすれば、貴女は暗殺されずに済んだのですから。けれど一足遅かったようだ。まさか奴らとはち合わせるこ

とになるとは」

「……どうい、」

「首謀者を言うことはできません。いや、……もうお察しでしたか。けれど口には出せない。その位、大きいということですよ姫。そのために貴女は“死んだまま”、この国から逃げて頂く必要がある」

「もとから……逃げる予定でしたのに」

「――そう、御子を身ごもったまま逃げるご予定だった。ですがそれこそ、人知れず殺される危険を増す結果になった」

ワルダヤはゆっくりと深い息をして、アンジャハティと目線を合わせるために跪く。横に伸びた形のいい眉をひそめて、彼は続けた。

「もう遺言になってしまいましたが。ファラマファタ様の手配で、貴女を逃がす手順は未だ残っております。それを使い、今日中に」

「遺言……？」

「はい。乗り込んだ奴らから貴女を助けるため、知らせに走ったようです。血だらけのままウズルダンの元に。けれどもう、その時には助けられる域を越えていました。……これを貴女にと」

手渡されたのはいつか、ファラマが見せてくれた銀色の鍵だった。檻のようなハレムから“逃げる”日のために覚えておけと。

「そんな、」



自分のせいで、またも大切な命を無くしてしまった。あんなにも親身に、痛みをわかってくれた女性なのに。恩返しもできぬまま、死んでしまうなんて……。

「姫、手筈の者が貴女を逃がすため帝都に参っております」

ワルダヤはアンジャハティの肩に手を置いて、言った。

「どうか何も知らぬまま、お逃げください」

あの日失った物は、決して一つではなかった。

友を失い、臨月の子を失い、その後遺症で二度と子をもうけることのできぬ体になり……ディアスとの未来は当然のことながら無くなった。

亡きファラマファタの意向通り、放浪癖のひどかったグラフィアネ・テリゼアシダ・シマニの下で五年の歳月を逃亡し――彼女の下で暮らすうち、自然と医者を目指していた。

暗殺が未遂に終わったことは時を置かずして広まり、事実上「失踪」になった娘を父宰相は勘当。さらに皇家トスカルナ籍からの除名を受けて、結果的には皇籍の剥奪とまでになった。

五年後に戻ってきたのも本来はグラフィアネの放浪の一つ。だが突然「自分は歳だからもう放浪はやめることにした」と言い出すと、当のグラフィアネは帝都にどんと腰を落ち着けてしまったのだ。

しかし、まるで図ったようにアエドゲヌ帝は死んでおり、ようやく折れた元老たちの手でディアスは解放された。地位を取り戻し玉座に身を置いた彼は、驚くほどの変貌を見せる。

鋭い顔は崩されることが決してなくなり、どこか猛獣じみた印象に変わって。優しげな顔を、一切見せることがなくなった。長い投獄のせいで痩せているかと思えば、以前より体格が筋肉質になった気さえする。まるで「闇」そのものを体現してしまったかのような新皇帝は、しかし噂とは違って狂ってはおらず、周囲も驚くほど着実に政務を取り仕切っていた――最初の半年は。

グラフィアネは名前からも知れる通り、テナン公国の王族。もはや帝都で何もすることがなかったアンジャハティは、彼女の後見を受けて軍に上がり、軍医となる。

時を同じくして父である宰相が亡くなり、どこをどう画策したのやら、その後釜にはちゃっかりと兄ウズルダンの姿があった。その頃からだろうか――ディアスが政務を執らなくなり、ハレムに通いつめるようになったのは――……

\* \* \* \* \*

「アンジャハティ」

呼ばれて、顔を上げる。

長い回想から目覚めて、アンは小さく笑った。“アンジャハティ”などとは、なんて懐かしい響きだろうか。

昔日のディルージャ皇子は、見る影もなく消え去った。ただ、その身に深い闇を宿し、何を考えているのかわからぬ冷たい笑みだけが、今の彼の笑顔になった。あんなに豊かだった表情は、ちらとも顔を見せない。

「……わかりました。継ぎましょう、トスカルナを」

色褪せ始めた過去の記憶に一度ふたを閉めて、アンは答えた。

「私は子孫を残すことはできませんので、トスカルナの血は名ばかりになりましょうが」

薔薇を眺めていたディアスはその言葉で振り返り、頷く。

思えば、変わった彼を見て、自分も女であることを捨てたのかもしれない。軍に入り髪を切りつめ、男のような口調になって。獄中の彼に何が起こったのかはわからない。けれど互いに変わった様を見合ったとき、自然と親しげな笑いがこみ上げたのは覚えている。「久しぶり」と、苦もなく口を出た言葉。皮肉や冗談さえも。

様々な噂は飛び交うけれど、彼の空白の歳月をアンは知らない。ディアス自身、誰にも語ろうとしなかったせいもある。ワルターに聞いたこともあったが、「三日は気分が悪くなるぞ」と言われてしまい、詮索もやめた。

「養子をとることを認めよう。本来ならばジャーリヤに産ませた私の子を下賜すべきなんだが」  
苦い表情を顔にのぼらせ、ディアスは言う。

「いいえ。養子にはバツソスあたりからと考えてますので。陛下の血筋がなくとも結構ですよ」  
彼は即位以来、子ができていない。不能なのだと言った者がいたが、アンはそうは思わなかった。彼自身わざと作らぬのか、別の手によりわざと出来ぬよう細工されているのか……そのどちらか。いや、両方なのかもしれない。少なくとも前者にはアン自身、覚えがある。後者は言わずもがな、だ。あんなに色に富む生活を送っていて、子が出来ないその裏には、少なからず「兄」が関わっていることに疑いはない。

人生は五十年。折り返しにも差し掛かるような年齢で、しかも皇帝という立場に就きながら、彼らはいったい何を恐れているのだろうか。

もうじき二十四にもなる、回想の中からは十ほども歳をとった彼を、アンはじっと見つめた。  
「何だ。……ああ、これか」

視線を受けて目を細めたディアスは、得心がいったように首筋を覆う外套の襟を立てる。そんなところはまったく見ていなかったのだが、彼の手から隠される前に、くっきりと歯形が残るのをアンは見つけてしまっていた。

「歯形ですか？」

噛みつかれるほどのことを、したのだという証拠。一瞬しか見えなかったが、傷はすでに薄く、治りかけている。なのにまだ痛むのか、ディアスは首元を抑えた手でさすっていた。

「また随分と手荒なことを、」

「手荒だったかもしれんな。噛まれた上にしっかり血まで吸われては」

冗談なのか皮肉なのか。けれどそれを語る横顔に、かつての彼の面影を見て――アンは驚く。どこか面白がるような、柔らかな顔。

――消え去ったのでは、なかったのか。

「陛下、お相手は――」

震えた声で問うたアンを、わずかな時間じっと見据え、彼は声を立てて笑い始めた。

「虎か豹か。さあ何だと思う」

さきほどの柔らかい顔はどこへやら、皮肉げな表情しか見受けられない。

「はあ、タイムですか？」

虎(タイム).....この人はとうとう別の世界へ行ってしまったのだろうか。アンは一抹の不安を覚えながら、首を横に振る。

「ご冗談を。またバツソスでもジャーリヤを連れてきたと聞きましたよ。ヒーハヴァティ・ウィエンラ公女でしたか」

どちらにせよ、彼の冷たく固まってしまった心を溶かす者が現れたのだとしたら――、それは嬉しいことだった。

悔しいけれど、あまりに時が経ちすぎた自分たちでは、もうやり直しはきかないから。

「そうだ、フェイリットをご存じありませんか。兄の所で侍女をしているはずなんですが、一向に姿が。トスカルナ籍に戻ることをお許し頂けるなら、あの子は私が引き取りますので」

年端もいかぬ女の子をひとり、いつまでもあの冰山男の下に置くわけにもいきまい。

しかし言ってしまうってから、アンは気づく。そもそも彼はフェイリットを知らなかったのだ。あの竜狩りの夜に一度は会っているが、それは名前すら名乗らぬささいな時間だった。

「あ、フェイリットというのは、」

「.....今夜あたり行くだらう。お前のところに一番に行くと意気込んでいたからな」

去り際にそう残して、ディアスの背中が遠くなる。

「.....って、陛下！？　なんで知って.....」

「だが、引き取るというのは考え直せ」

アンはきょとんと肩を落として、眉を寄せる。

まさか。

彼の右手に無造作に握られる蕾の薔薇を見つめて、アンは額に手を当てた。――蕾か、耳が痛い。そう彼は、言わなかっただろうか。

「嘘でしょう、」

.....本当なら、これはあの子を問いつめる必要があるかもしれない。

最後に怪我の傷を診てから、もうふた月にもなっていた。ぱったりと見えなくなって、随分と久しい。

「来るといっても診療所と宮、どっちなんだ？　いや、もうこんな時間だからトスカルナ宮か。母上に知らせないと.....」

料理をたくさん作ってやろう。砂漠を長く旅してきたなら、帝都の料理は恋しいはずだから。――しかし、脳みそが股の間にぶら下がってるような奴だぞ.....あのエロ皇帝は。いいのか、フェイリット？

アンは困惑に眉をひそめつつ、母に知らせるために庭園から回廊へと上がる。

「そういえば、コンツェも来ると言っていたな.....ちょうどいい、皆で再会を祝おう――」

アンジャハティであった頃より、自分(アン)には大切な人たちがいる。慕ってくれる部下たち、治療に訪れる兵たち、そして家族と友人たち.....彼らと共に過ごす今。それはなんと満たされた

時間だろう。

「――アン！ ただいま！」

名を呼ぶ軽やかな声を遠くに聴いて、アンは足を止める。

まだ少女だったあのころ、強くなりたいた願った。その願いは、果たして叶ったかどうか。

――いや、弱くてもいい。自分を見失わなければ、大切な人を守れるはず。それが強さに変わるなら、弱いままで。

夜会に震え、憂鬱になっていた紅い鳥。イクパルを越えて羽ばたいて、また戻ってこれたのだから。

アンは笑みを浮かべて、現在の自分を想った。

「――おかえり」

【夜会に鳴く深紅の鳥・完】

---

それから三日後、かの公国は独立を唱い――宣戦を布告する。  
新王が即位したのは、さらにひと月の時を経てのことだった。

アンと別れてしばらく、コンツェは最初の城門をくぐった。

フェイリットを捜すには、同僚であるトリノを見つけたほうが早い。彼なら行動が習慣化しているし、今のこの時間なら練兵場近くで見つけることができるはず。そうしてくぐった城門から、皇帝宮につながる中央の道は上らず、コンツェは左へと反れて軍轄の地区を目指していた。

まばらに行き交う人は、軍衣を纏っている者も、そうでない者も入り混じる。元々が関係者の料理屋や宿が並ぶ区域なので、城下から仕入れを上げるために民の出入りの制限は緩やかなのだ。フェイリットと二人、テナンへ旅立つ前に酒を呑んだく <sup>ティカ・ティク</sup> 赤い鳩 > 亭も、この辺りの奥にある。

「イムタナか、しばらく食ってないな」

島国テナンと本土のイクパルでは、海に隔てられるせいか食文化も大きく異なる。テナンの食事はまず手では食わず、香辛料も目立って使うことがない。イムはパンと呼び、タナはスープと呼ぶ。味も内容もまったく違うが、領土にされた歴史のあるメルトロウ王国に、どこか似ているのは確かだ。

香辛料の効いたタナの匂いが、夕時の食欲を刺激する。アシュの具合がよくなっていたら、一緒に食いにこよう。そんなことを考えながら、コンツェは練兵場へとたどり着いた。

その厩舎のある区画を前にして、まばらな人波のあいだから見覚えのある背中を見つける。

「……あ、」

ターバンを巻き、乳色の短い衣装を覆うその姿は、けれどトリノではありえなかった。健康的に日焼けをしているが、肌は明らかに白く北方の色。ほんのりと赤く色づいた手で、どこで転んだのか全身についた土埃を払っている最中だ。

トリノではない。……あれは間違いなく“彼女”。

立ち止まって、コンツェは惚けるように目を開く。

「フェイリット……」

言うや否や、駆け出すほうが早かった。近づく気配に振り返る彼女が、即座に目を丸くする。

「わっ!？」

手を伸ばし肩を引き込んで、コンツェはその小さな身体を抱き締めた。

逢えるとは思わなかった。こんな道すがら、しかも彼女の仕事とする小姓の動きは宮殿が主なのだ。そんな立場にいるはずの彼女に、偶然歩いていて出くわすことはまずない。

「コン……ツェ、」

胸板で押しつぶされそうなくぐもった声が名を呼ぶ。コンツェは慌てて腕を弛めて、しばらくぶりの透き通った瞳を見つめた。空よりも薄く、水のように透明な輝きは、向こう側の透ける色硝子の純色に、どこか似ている。

「元気だったか」

「うん、コンツェも。よかったね、戻ってきたんだね」

はにかむように笑うその頬を、なんとなく摘んでみる。土まみれの、やわらかい頬を延ばさ

れて、フェイリットは眉をひそめた。

——やばいな……、可愛い。

しばらく離れていたせいなのか、なんだか前より可愛く見える。伏せがちに瞬かれる瞳を飾るのは、濃金の睫毛。滲み出る雰囲気、不思議に色づいて感じられるのは何故だろう。剥げ落ちそうな理性を必死に抑えて、コンツェは摘んだ頬をそっと離れた。

「……ただいま」

不本意そうな彼女の顔は、この一言で笑みに変わった。帰ってきたわけではない。彼女に逢って連れゆくために戻ってきた。……そして、シアゼリタを殺したのは帝国なのかを立証するために。

ただいま、という言葉は“彼女たち”に対してこそ相応しい挨拶だ。

「おかえり」

フェイリットは伏せていた目をこちらに向け、にっと歯を見せた。後ろ手に手を組む彼女を、笑いながらも一度腕の中におさめる。

「うへえ！ 苦し！」

「潰れたら責任とるよ」

「ひやはははは」

ひとしきり笑い、じゃれつきながら、そこで初めてコンツェは首を傾げる。

「お前……背、のびた？」

変わった変わったと感じていたものは、これだったのだ。

違和感の根源は、アシュケナシムとの差だ。彼よりひと回りも小さいはずのフェイリットの頭が、胸板を過ぎるまで届いている。年頃とはいえ、あまりにも伸びるのが早い気もする。

「え！ 初めて言われた！ 本当？ 伸びた?!」

嬉しそうに声を張ると、フェイリットは二三歩下がって自分の頭に手を乗せた。空中でその手がこちら側に突き出されているところを見ると、どうやら背くらべをしているらしい。懸命な眼差しでしかめっ面をつくり、その手を動かす様は、なんだか見ていて愛らしい。

「そんなんじゃ余計わかんないだろ」

こちらから近づいて、ほら、と身体を引き寄せる。こつん、と胸にあたる彼女の額の上を指して、コンツェは笑った。

「やっぱり伸びたな。あんまりアシュと変わ……」

「アシュ？」

「……あ、ええと……、アシュケナシム」

思わず挙げてしまった彼女の“弟”の名。けれどそれを聞いてなお深く考えるそぶりもなく、フェイリットは笑って首を傾げたのだった。

——まさか弟のことを、知らないのだろうか。

「いや、なんでもない」

「テナンの人？ あ、これからアンの所に行こうと思ってたんだよ。一緒にいかない？」

「アン？」

そう、と頷いてフェイリットは笑顔になる。

「わたしもね、しばらくアデプにいなかったんだ。黙って出ちゃったから、心配かけてるかもでしょ。やっぱりアンにはお世話になってて、会いたいし」

ほんのり頬を赤らめて話す彼女を見て、少しだけアンが羨ましく思える。自分の話題を口にするとき、彼女はこんなに嬉しそうな顔をしてくれるだろうか。

どこに行ってたんだ？ や、何をしに行ってたんだ？ などという質問が、コンツェの頭を占めることはなかった。この時間聞いていたなら――何かが。

いいや、きっとどちらにせよ、何も変わらなかった。

なぜ彼女を傷つけることになったか。なぜ彼女を失うことになったのか。なぜ。

.....その分かれ道は、思い返せばきりがなかったと、後になってコンツェは気づく。

「実はさっき、アンにはばったり行き逢ったんだ」

「そうなの？ じゃあ、行かない？」

コンツェが頷くと、フェイリットは残念そうに首をすくめて笑った。

「残念、またイムタナ食べにいこうね！ 今度はわたしがごちそう.....」

「おいそこのチビッコ！」

彼女が言い終わるのを待たず、盛大な怒鳴り声が路地裏から聞こえてくる。

「てめえが奢んのは今日！ 今だ！ おせえ、どこで油売ってやがる」

うわっと肩をすくめ、フェイリットは思い切り顔をしかめて見せた。

肩で風を切るようにして路地裏の店から男が出てくる。

真っ黒な肌に、見るからに悪そうな目つきが余計にぎらぎらしている。ターバンを巻き着衣も民草の出で立ちだが、軍衣を着ていなくとも彼が兵であることは間違いなかった。

「馬上から跳び蹴りなんて卑怯ですよ！」

土まみれの小姓衣を、男の前ではたばた煽りながらフェイリットは毒づく。

「けむい、煽んじゃねえよ。きまりなんて誰が作った？」

「きまりじゃなく常識です」

「戦場じゃ卑怯もなにも勝った方が偉いんだぜ。敗者は黙って搾取されるもんだ。だろ？ エトワルト王子様」

矛先が唐突に向けられて、コンツェは目を瞬く。

「王子様？」

首を傾げるフェイリットを見やり、ようやく伝えていないことを思い出す。自分がテナン公国の第五公子であるという素性を。

何度か周りに言われたはずだが、そのたびに彼女は何らかの怪我で朦朧としていた。おそらく今になっても、把握はできていないだろう。

「あ、ええとフェイリット」

「と、言うわけでだ。王子様、お前も搾取されろ。酒盛りすんぜ。フェイリット、てめえは軍医



んところに逃げんじゃねえぞ」

断る、という選択肢はなかった。人質さながら、引きずり込まれるようにして店に追いやられ、あれよという間に酒を酌まれる。後ろからついてきたフェイリットが、「あーあ、」と額に手を当てるのが見えた。

「よう、フェイリット……と、まあ、今日は吊い酒だ、あんたも存分に祝ってけ」

顔を半分だけ包帯で覆う男が、近づいてきて酒を足す。言っていることの矛盾を指摘すべきか迷って、コンツェは困ったように苦笑した。

こんなに賑やかな時間を過ごしたのは、暫くぶりのことだった。見知らぬ男たちと酒を交わしながら、コンツェとフェイリットは、いつの間にか大仰に笑っていた。

黒紅色の幕を捲り、ウズルダンは皇帝の背中を見つけた。

玉座の裏——彼の私室となっている空間は薄暗く、たった一つ灯された燭台の明かりは窓ペリの床に置かれている。真夜中をとうに過ぎていたが、バスクス帝は未だ正装を身に纏ったまま。窓に目を向け、回廊ごしの月を見上げていた。

「お戻りでしたか」

足元を照らす蠟燭の灯火を眺めながら、ウズルダンは皇帝の背中へと近づいていく。

どこかへ出掛ける姿が見えたため、ウズはてっきり彼がアンを追って行ったのだと思っていた。だがこの様子を見ると、考えていたような“こと”は、なにも起こらなかったのだろう。

「ああ」

一言だけ、呟くようにバスクス帝は応えた。

「美しい庭だった。いい趣味をしているな」

じっと注視していなければ見落とすほど小さく肩をすくめると、彼が皮肉げに振り返る。そこにいつもの顔を見つけて、ウズは深々と息をついた。

「いつかの日のための研究です。灌漑<sup>ファラジ</sup>は頭の中だけで、組み立てられるものではありませんので」

庭の薔薇を見た。ということは、アンと会っていたのは間違いない。背にした窓から二三歩いて、バスクス帝は肩を揺らし笑う。

「好きでなければ、長く続けることはできん。立派な趣味だよ」

反論しようとするものの、開けた口からは空気だけが漏れていく。趣味だと言われて、否定できない自分が情けない。

「……如何様にも。ところでハレムの件ですが」

「ああ、決まったか」

羽織っていたローブを、無造作に脱ぎ捨てるバスクス帝を見ながら、ウズは首を縦に動かす。

「こちらです」

縮小するハレムに、新たに設ける予定の妾妃たち。ウズはその名前を記した皮紙を懐から引き抜き、バスクス帝へと差し出した。

「……若いな。一番下は十四歳か」

「テナン公女、シアゼリタ・ロアです。若いとはいえ並べれば“六歳差”ですし、たとえ兄妹でも血のつながりはありません。まあ、テナン公国には公女が一人しかおりませんので、仕方の無い選択だったわけですが。他にイリアス公国から第三公女シトラン・ガダ、ドルキア公国から第五公女ウルヴァシア・ウルーピー、そしてバツソス公国からヒーハヴァティ・ウィエンラ、」

名前を読み上げると、バスクス帝は難しい顔で溜め息をつく。

「……タブラ＝ラサをどうするか」

「タブラ＝ラサ？ 勿論含めるのでは」

タブラ＝ラサことメルトロー王国第十三王女、サディアナ・シフィーシュ。かの国の王女を持

っていれば、いずれ外交に有利だ。それを踏まえて筆頭のジャーリヤにしたはずで、今さら躊躇う理由などどこにもない。年齢的に考えれば、彼女はシアゼリタより適任でもある。

「そうだな」

苦い顔で小さく笑い、バスクス帝はターバンに手をかける。彼がその長い布をほどくのを眺めながら、ウズはふと口を開いた。

「そういえば、タブラ＝ラサはどちらへ？」

「ああ、アンの顔を見に行くと言っていたが。今日はそのまま泊まって来るだろう」

「……自由ですね」

彼女とともに来たギョズデジャーリヤ・ウィエンラは、すでにハレムの一室に身を置いている。本来ならば、籠の鳥とも呼ばれるジャーリヤ。小姓をさせていた頃ならともかく、その自由は普通ならば与えられることのない待遇だった。

「飛び回らせていたほうが、あれは面白くてな」

……思ってもみない表情で、彼はそう言った。柔らかな、見たことのない微笑。

ウズは驚きを隠せずに、バスクス帝の顔を見続ける。

「それは、」

どういう意味なのか。

……そう問おうとした瞬間だった。

「陛下！ 陛下！！ おいでになられますかな！」

玉座の間から、時刻にそぐわぬ声が聴こえる。バスクス帝と顔を見合わせて、ウズは玉座の間へとつながる仕切りを潜り抜けた。

「――お前は」

後ろからバスクス帝が続くのを確認しつつ、ウズは眼下の来客を見やる。

「トゥールンガ」

玉座を前に膝をついた男は、バスクス帝の名を呼ぶ声に顔を上げる。

「陛下！ 売国奴を処断致しました。お聞きください、テナン公国は極秘裏にメルトローと同盟を組んでおったのです！ ひとりきりの公女をかの国の宰相に娶せてまで！ これは歴然とした裏切り行為。公女の首を取り、晒す用意が整えてあります。陛下、ご命令を！」

まくしたてるようなトゥールンガの声が鳴り止むと、しんと静かな空気が降りる。

シアゼリタの首を取った。この耳が狂っていないなら、確かに彼はそう言った。

「それは本当か」

低い声が、問いかけるように響き渡る。ぎんぎんと耳をつくトゥールンガの声とは違い、それは背筋がのびるような威圧的な音だった。

萎縮するように肩を低く下げると、トゥールンガは何度も頭を上下にして頷く。

「も、勿論、……私は忠実な陛下の僕。偽りを言うことがありましようか？」

気を取り直したのか、言っているそばから、まるで誇らしいとでも言うように胸を張り彼は答えた。

「……ウズルダン、確認を」

玉座に座ることも無く、バスクス帝はじっと男の額を見続けている。彼の言葉が本当ならば...  
...事態は一気に危ぶまれる。

「御意」

格式張った拝礼をとると、ウズは玉座の段差を降りはじめた。

「事実が分かり次第、この者の元帥位を剥奪。帝国法に則り処刑しろ」

「そ、そそそそんな陛下、私は.....！」

慌てたように立ち上がり、トゥールンガが後じさる。それを追い立てるように立ちはだかり、ウズは彼の腕を掴み取った。

「命令を請うのが遅かったな。例えテナン公女がメルトロローに嫁いだという事実があったとしても、シアゼリタは王族。そしてお前は元帥とはいえ、一介の貴族に代わりない。支配階級の公爵家一族を処罰できるのは、陛下と、定められた者たちのみ。お前がとるべき行動は、いち早く予に状況を報せることだった」

「へ.....陛下」

気が抜けたように呟くと、トゥールンガは膝の力をがくりと無くした。その腕を無理やり引き上げ、ウズは眉をひそめる。

「近衛！」

声をあげると、すぐさま湾刀を下げた兵たちが現れだした。

「今の会話の口外を禁じます。この男を命が下るまで軟禁しておきなさい」

ウズの命令を黙って聞きながらも、捕らえるべき人物が“帝国元帥”であることに、近衛士たちは一様に驚いた様子を見せる。

「承知致しました」

トゥールンガを引き渡された近衛士が、さっと軍式の礼をとる。驚きに顔を染めていないところを見ると、おそらく彼が隊長か。

ウズが頷くのを待って、嫌がるトゥールンガを引き摺りながら警備の近衛たちは去っていった。

「.....あれではテナンに立派な大義名分がついたな」

シアゼリタが殺された。それが帝国元帥によるもので、彼が「陛下の御為にやった」とでも言えば、テナンは公女を殺された報復を謳うだろう。

かねてより独立の時期を見計らっていたかの国にとって、これはまたと無い機会だ。

「ですが、おそらく元帥自身は手を下していないでしょう。公女がメルトロローへ嫁ぐなどとは、あの男が嗅ぎつけられる題目ではない。テナンの自作自演か、あるいは」

「――メルトロローの張った罠に落ちたわけだな」

テナン公国が、まさかメルトロロー王国の裏の見た援助に乗るとは。

「ええ。事実を調べます」

独立に手を貸す。例えそう囁いたとして、メルトロローの狙いは明らかに鉄。良質な鉱山を持つテナンは、確かに他国からみれば涎の出る宝石だ。

甘い援助の裏側には、間違いなく新たな支配者の顔がある。

「シアゼリタの暗殺が真実で、帝国側が関与した証拠があがったなら、二三日にも奴らの動きがあるだろう。まるであらかじめ、予測していたようにな」

苦々しい。今にもそう吐き捨てそうな顔で言い、バスクス帝はどさりと玉座に座り込む。

「困りましたね……これでは当初の予定が。まさかシアゼリタ公女が殺されるとは」

「コンツ・エトワルトは、まだこのことは知らんはずだ。あちら側につかれては、総崩れだぞ」

――バスクス帝を殺害させた四公爵を集め、均等な処断をもとに、テナンから籍を抜いたコンツ・エトワルトを帝都出身の新皇帝と認めさせる。その当初の計画は、テナン公国の反乱ひとつで水の泡だ。

反乱の理由が“公女暗殺の報復”であれば尚更、鍵となるはずのコンツ・エトワルトは得られない。あの優しさが取り柄のような青年は、かならずや妹の死を悲しむはず。

「イクパル諸代の汚濁と八年前の罪の払拭は、夢物語に終わるか」

「いえ、そうはさせません。コンツ・エトワルトを帝都領域から出さぬよう計らいます。シアゼリタ暗殺の報を、ぎりぎりまで留めましょう。この国は、なんとしても生まれ変わらなければならない」

そうはさせない。この長い月日を、何のために費やしてきたというのだ。ウズは強い眼差しで、玉座の上の彼を見上げる。

「――そうだな」

息をつくとき、バスクス帝は視線を受け止めるように、深くゆっくりと頷いて見せた。

\* \* \* \* \*

回廊に漏れるわずかな明かりを踏み、フェイリットは立ち止まった。

深夜をすぎた皇帝宮は、さすがに人気も見当たらない。そのはずが、まだ起きている人がいるのだろうか。あまり立ち入ることのなかった中央区で、フェイリットは好奇心のまま、光の漏れ出るその仕切りに手をかけた。

「……あれ、」

手触りの硬い幕を引き上げて、口を開ける。

玉座を見上げるように、その手前の段差で立つバスクス帝の背中だった。フェイリットの来訪にも気づかず、ずっと同じ姿勢でどこかを見つめている。

「陛下」

このまま気づかせずに立ち去るべきか、声をかけるべきかを迷った末、フェイリットは後者を選んだ。

背中に小さな声を聞いて、バスクス帝は上げていた顔をそっと足元に下ろす。音はなかったが、吐き出すような溜め息で彼の肩がわずかに下がるのが見えた。

「……いたのか」

そう呟いて振り返る、疲れたようなバスクス帝の顔。フェイリットは小さく目を細めてから、頷いた。

「お休みにならないんですか」

深夜までほっつき歩いていた自分と言える台詞ではなかったが、それでも時刻は明け方に近い。いつから彼がそうしていたのかは分からないものの、そろそろ眠ったほうがよいのは分かる。

バスクス帝はフェイリットの問いかけに、ゆっくりと苦笑した。

「ああ、そうだな。……楽しかったか」

「はい」

酔いすぎて気の大きくなったマムルークたちと、なんと宰相家に乗り込んでしまった。などとは、フェイリットの口から言えたものではない。

「それはよかったな」

頷くバスクス帝が、ふと思立ったように歩み寄る。

「ひ、ぐあっ?!」

掴み取るように抱き寄せられ、咄嗟に空気を飲んでしまった。

「どっ……」

喉奥でむせそうになりながら、どうしたんですか——そう問おうとして、フェイリットは口を噤む。

頭を掴み背中を搔く、一步踏み出されたならその重みに負けそうなほどの深い抱き方。こんなに縋るような体重のかけ方を、彼は今までしたことがなかった。

「あ、の」

フェイリットは身体の横に忘れていた手を浮かせて、そっと彼の背中にまわす。ローブも羽織らぬその身体は、風を掴んだように冷たかった。

「フェイリット」

「はい」

「抱いていいか」

「は、え？」

耳元で問われた低い声に、はっと目を開ける。

「陛下……？」

「ディアスだ、フェイリット。私の名前は、ディルージャ・アス」

何があったのだろう。口元までのぼった疑問は、声に出すことはできなかった。

力強いその腕が、まるでなにも聞くなと言うように。

——それなら今は……なにも訊かない。

「ディアス」

フェイリットは、問いかけや返事のかわりにその名をささやき、まわした腕に力を込めた。

彼女が目を閉じ夢をみるまで、彼は何も言わなかった。

「……すまない、フェイリット」

最後に寄せたその弦きは、静かな部屋に響くことなく、消えてゆく。

――手を尽くした策が使えなくなった。私の死は、どうやら無駄になるかもしれん。

\* \* \* \* \*

「おはようございます、ウズさま。ただいま戻りましたー」

捲り上げた深緑の垂れ幕は、肌触りがよく軟らかい。いつの間にか新しくなったそれを掴んだまま、フェイリットは関心したように幕をひらひらさせた。

「わあ、綺麗ですね」

「タブラ＝ラサ……なぜここに？」

横から声を受けてはっと気づき、膝を折って礼をとるが――上げた顔でフェイリットが見たのは、意外だと言わんばかりに眉をひそめる、ウズの顔だった。

「え、戻ってきちゃ駄目でした？」

小姓の仕事に戻りますーそうバスクス帝に告げたら、意外なまでにあっさり許可がでた。あまりにも軽い二つ返事で、ひょっとすると当初から、バツソス行きが終われば小姓に戻される予定だったのでは？ そんな解釈までしていたのだ。

「――そんな目で私を見るのはやめなさい。おまえはギョズデジャーリヤなのだと言ったはずです。バツソスに行って自覚も湧いたかと思えば、」

余計にぼさとして。という最後の言葉が、ウズの口中からぼそぼそと聞こえ漏れてくる。あえてはっきりと口に出さなかったのは、その言葉の途中で、フェイリットが伏礼をとったからだ。

「宰相閣下、」

床を見つめたまま、フェイリットは固い声押し出した。

蔓の様子が描かれる絨毯の、濃い茶の複雑な線を膝元からたどり、ゆっくりとウズの座る卓の足下まで視線を動かす。

「……リマ王国、メルトロー王国、ガスエト自治国、フレイ・マダリ皇国、ローフォン共和国、ケタンラタ王国、ミタフェル大国、ワゴス王国、フルマゼート王国、メキサ王国、北ジオロール連邦、南ラノロール連邦、アルタ法国、ハプトグ王国……このアルケデア大陸には、イクパル帝国を含めても十五の国々が存在しています」

突然の言葉に、ウズは申し分のないほど不可解な顔をした。

アルケデア大陸は、三つの大きな陸地が、何本かの人工の橋で繋がれてできている。厳密には“三大陸”となるはずだが、どの時点で齟齬が生まれたのか、その三つをすべて含んで“アルケデア

大陸”と呼ぶのが慣例となっているのだった。そしてそのすべての国々を数えると、十五カ国。統治者のはっきりとしない国を含めたなら、きつともっと数が増えることだろう。

「――もし、わたしがそのすべての国の言語を話せるといったら、信じますか」

そこまで言ってから、フェイリットは頬を笑みに緩めて笑う。

「ご存知なんですよね」

一言だけ言いおいて、フェイリットはさっと視線を上げた。

「何を」

明らかに驚いたような表情が、ウズの顔を一瞬かすめる。

彼が何を知っているのか。

それを疑えばきりが無い。けれどバスクス帝がタントルアスの肖像画を提示できたように、その側にいたウズは当初から、フェイリットの素性がメルトロウにあることを確実に知っていたはず。

「メルトロウの13番目なのだろう、って。陛下に訊かれたんです。ここに来るまで、わたしはタントルアスなんて大昔の人で、自分には全然関係がないと思ってましたから。あ、でも王女っていう自覚も、あんまり無いんですけど」

――イクパルをメルトロウに燃やさせないために、サディアナ・シフィーシュには何ができますか。

バツソスで、バスクス帝にぶつけた問い。サディアナ・シフィーシュという人間が、イクパルを護るためにはどうしたらよいのか。そうして得られた彼の答えが、“次の皇帝のジャーリヤとなれ”だった。その提示に対して、フェイリットは未だ彼に答えていない。

けれど選ぶまでもないこと。自分がそばに居続けたいのは、他ならぬ彼だけなのだから。

「わたし、陛下を手伝いたいんです」

「手伝う？」

「はい。ジャーリヤならわたしの他にもたくさんいる。タブラ＝ラサでいるより陛下のためになることがあるのなら、わたしは喜んでハレムを出ます」

もしも竜になったなら、大陸の端から端まで、無尽に行きかうことができる。それはまだできないけれど、今ここでハレムに閉じこもってしまっただけでは、彼の役には立てないのだ。

「ウズさまのお仕事をこれまで通り補佐できたら、陛下の為にはなりませんか……？」

「……お前は……まさか、バスクス帝を好いているのですか」

ウズは驚きを含む声で、噛み砕くほどゆっくりと問うた。

その唐突な質問にフェイリットは言葉をつまらせると、とたんに頬を真っ赤に染める。けれどその赤い顔のまま、次にはぱっと晴れやかに微笑み、はっきりと頷くのだった。

「好きです」

\* \* \* \* \*

「……そのまま隠れているおつもりですか」



横の衝立をわずかにずらすと、なんとも複雑な面持ちのバスクス帝が、片手で顔を押しさえて立っている。

ウズは溜め息をつくと、爽やかな風がぬけた後の、ゆるる垂れ幕に目を移した。

「いい歳してそんなところに隠れて、こっそり照れないで欲しいものですね。気味が悪い」

毒づいてやると深い溜め息が聞こえ、ウズは肩を揺らして笑う。

「何とでも言え」

本人がいらないからと気を抜いたのだろう。彼女が話した懇願の言葉は、裏を返せばすべてがバスクス帝に向く。

——タブラ＝ラサでいるより陛下のためになることがあるのなら、わたしは喜んでハレムを出ます。

あんなに人生をかけた“告白”を、ウズは初めて聞いた気さえした。その台詞を耳にした当人がこの状態では、どうにも様にはならないが。

「どこが宜しいのですか、あの娘」

メルトローの王女だという肩書きを好んでいるわけではあるまい。そもそも“王女らしさ”など皆無の野生児で、これまで彼と噂になった女たちとは、控えめに見ても方向性が間逆だ。確かに愛らしいといえば愛らしいが、“女”という視点で見ると話は別にも思える。

「……さあな」

バスクス帝はその問いを鼻先で軽く笑って、衝立から身体を離れた。そのままウズのつく卓に浅く腰をつけると、ひとつ間を置いて口を開く。

「にしても、あれも分からんやつだ。まさか大陸中の言葉をとは」

「ええ、相当な教育を受けてきたとしか思えません。メルトローの13番目といたら、末子も末子。いったいメルトローは、そんな末子に何を継がせるつもりだったのでしょ」

メルトローの次期王と言われているのは、御年39歳の第一王子だ。丞相位についている男も、まだまだ壮年にさえ届かぬ年齢。後継には不足しないその情勢の中で、高水準の教育を末子の王女に与える理由が、いくら考えても浮かばない。末子の王女といたら、政略結婚のために駒として育てられるのが専らだというのに。その教育は、淑やかさを全面に押し出した、教養と呼ぶに近いもの。

「十五カ国とは、教養の範疇とは考えられんな。かといって、あれは工作に向いた性格でもない」

「あの条件を喫んで頂けただけで、よしとしましょう。いるはずの<sup>スフィル</sup>零番目が謎のままでは、他のギョズデが怪しむでしょう。姿を曝す必要はなくても、食事が運ばれていたり、ハمامに入浴していたりと、証明できる事実は必要です」

小姓の立場を温存する代わりに、“大浴場に毎日通うこと”、“少なくとも昼食はハレムの部屋でとること”、鍵をいちいち開けなくてもいいように、出入りは“伽の扉”から行うこと——これら三つの条件をウズは提示したのだった。「籠」に縛られてすごすより、時間的にはずっときつい。ハレムにいたなら、のんびりバスクス帝を待って時をすごせるというのに、それでも彼女は好まなかった。

「ああ。それにしても、私の役に立ちたいなら、私の小姓になりたいと言うべきだろう。なぜお前のところに、」

「.....それは私のほうが、陛下よりも仕事をしているように見えるからでしょうね」

事も無げに言いやると、バスクス帝は肩を竦めて苦笑した。

実際は、表立った政務をウズが引き受け、目に付かぬような政務をバスクス帝が行うという二人羽織だったのだが。夜中にウズの執務室にこもるバスクス帝の姿を、彼女も何度か目にしているはず。それでも“こちら側”に来るといふのなら、おそらく気づいてはいないのだろう。政務にまったく手をかけない愚鈍な皇帝は、そうして鼻で笑うのだった。

「コンツ・エトワルトは？」

「じきに到着するかと。どちらで接見なさいますか」

今のうちに説得しなくてはならない人物。こちらから呼び出そうと構えていたら、コンツ・エトワルト自身から謁見の伺いがのぼってきた。となると、これはまたとない機会だ。コンツをテナンから切り離し、帝国側に留めて皇帝の玉座を見張らせるために。

「中央区ではなく、皇帝宮にする」

――お許しを頂いたこと、陛下にも話してきます。

そう意気込んで出て行った少女は、今ごろはきっと彼の室だ。彼女に“真実”を見せるため、バスクス帝は皇帝宮を選択したのだろう。ウズは首だけで頷いて、腰を落ち着けていた椅子から立ち上がった。

「私はトゥールンガの様子を見て参ります。調査の報告があがってきましたら、そちらに向かいましょう」

イクパル帝国軍近衛師団中隊長——という階級は、皇帝に謁見することはまず絶対がない位。コンツェは深いため息を吐き出して、鏡の中の自分と対峙する。

「……似合わないな」

写っているのはテナン公国の公子の姿。剣と蠍の紋様を背に、深い群青のローブを纏い、腰にさす剣は、イクパルの湾刀よりずっと反りがない片刃だ。深い切り傷を負わせることを目的に、産出した鉄をふんだんに使って打たれた鋭利なもの。膝頭まで覆う革の長靴<sup>ちょうか</sup>も、メルトロローの形にととても近い。

「似合ってるよ、どこから見ても王子様だ」

皮肉なのか贅辞なのか、アシュケナシムが笑っている。そう言う彼は侍従に扮して、顔を完全にヴェールで覆い、空色の目だけをきょろきょろとさせていた。

「王子って柄じゃないよ俺は。肩書きだけなら荷が重すぎる」

イクパル帝城の一室。本来ならばテナン公王に与えられた公爵の間で、コンツェはだらだらと準備に没る。

三門をくぐり室内に通されて、早一刻もの時間が費やされていた。皇帝を待たせるなどと、本当ならしてはならないこと。なのに“向こう側”から催促の達しもないなんて、どう受けとればよいのか見当もつかない。

「肩書きなんてそんなものだと思うけど。わくわくしないの？ お兄さんに逢うんでしょ」

「……お前だって知ってるはずだ。バスクス二世の醜聞を」

さして会いたくもない……というより、敢えて会いたくない気持ちが強い。昇進を拒んでいた理由は他にもあったが、本当はこれが一番の理由なのだ。

「そりゃあね。女ばかり困って、するべき義務に手もかけない。暗殺計画、上がってるんだろ？ テナンが発ったら、他公国も足並みを揃えるものね。……まあ、同じ王族として恥ずかしいよ。たぶん僕の方が、よほどうまくやれる」

「そういう“兄”を持って、わくわくなんてしないだろ」

コンツェの辛辣な口調に、アシュケナシムは悪びれない声で明るく笑う。

「そうだね」

同じ血を持つ事実上の“兄弟”は、どうしようもなく愚鈍な男。母を弱らせ父から奪い、国に疲弊をもたらした先帝アエドゲヌの、女への執着をしっかりと引き継いでいる皇帝なのだ。

幼い頃テナン王に連れられ一度だけ、コンツェはまだ皇子であったバスクス二世に目通りしたことがあった。しかしそれは謁見というより、「通り過ぎる」と言ったほうが正しい表現だ。即位以来公然と隠れているバスクス帝の顔を、実際は四公王でさえ克明に覚えていることはないはず。

「行くよ」

中隊長としての方が、まだましであった。まさかこの自分がテナン公国の公子として皇帝に目通りすることになるなど。思ってたさえないなかったのだ。

「行ってらっしゃい。僕はこの部屋で待機ね」

手をひらひらさせる彼に苦笑を向けて、目の前の幕を捲り上げる。

「……お前、」

驚いた声を出し、コンツェは足を止める。見下ろしたその場所に、膝をついて頭を下ろし、トリノが畏まっていたのだ。

「お待ちしておりました。玉座までお連れ致します」

「……ずっとここに居たのか」

顔をしかめて、跪くトリノの頭をじっと見つめる。

「自分の足で出てくるまで、ここでお待ちするように言いつかりましたので」

コンツェは面食らって口を開けたが、何も言わぬままほぞを噛んだ。どうりで、催促が無いはずだ。余裕を見せられているのか、それとも譲歩されているのか。

「それは、宰相だな」

愚鈍な皇帝の右脇に立つ男の存在を、忘れていた。ウズの命令だろう、というコンツェの問いに、トリノはただ沈黙する。

「……わかった。連れていけ。もう覚悟はできてる」

\*

「バスクス二世陛下におかれましては……」

儀礼通りの謝辞を長々と述べて叩頭すると、すぐさま表をあげろと声がかかる。目を合わさぬよう僅かに額を下に向けて、コンツェは顔を上げた。

「恐いのだろう」

ふ、と笑う皇帝の吐息が聞こえる。突然かけられた声に、何のことかと心中で首を傾げるが、「私の顔を、見たことが無いと聞いている。いや、ずっと、見ないようにしてきたか」

コンツェは思わず、下げていた目線を上げてしまった。

目に映るのは彫りの深い、鋭さを掻き集めたかのような顔。女狂いの政治知らずと聞いていたから、さぞかし優男なのだろうと思っていたのに。これは……、

「どうだ、鏡を持って来させたほうがよいか」

その言葉によろやく真意を汲んで、コンツェは苦笑した。

「いいえ、必要ありません。ここへ来るまで、さんざん鏡と睨み合っただけだったので」

似ていない——バスクス帝と、自分とは。

容姿も性格も、おそらくは女の好みすら。安堵に気がするすると抜けていく。今までいったい何年、自分はこんなに小さな——似ているかもしれないという不安に、凝り固まって生きてきたのだろう。自分の父がテナン公でないと、知ったときとは逆の衝撃に揺さぶられる。

「何も涙の再会を望んでお前を呼んだのではない」

バスクス帝は立ち上がって、何歩か歩く。見下ろすような位置に立ち、コンツェを見つめる。

「父帝は、色々不穏な種を撒きすぎた。私が無能でいられるのも、もうさして時間がなくなって

しまった。お前は選ばねばならん。私か……いや、イクパルかテナンかを」

「……は、」

驚きをこめて、皇帝の顔を見つめる。選べとは……どういう意味なのか。国を捨ててイクパルの軍役に就けというならば、公子としての謁見など通らぬはず。テナンが帝国に対して独立を宣言しようとする今、そのつながりは戦争でしかない。選んだら、どちらかで戦わなければならないのだ。

「今すぐとは言わん。だが必ず選べ。私は気は長いつもりだが、そうは言ってもらえん状況にある」

鋭い眼光の奥に潜む静かな炎。それを人は何と呼ぶのかわからない。野心、英知、策謀……父はこの男を、無能だと言い切っただけではいなかっただろうか。

「……はい」

ふと見やると、玉座の向こう——ほとんどこちらからは死角になる——薄布の仕切りの裏に、思いもよらぬ人物を見る。

ウズの下で小姓をしているはずの少女。あの仕切り布の後ろは……陛下の寝室しかない。

「フェイリット」

擦れた声で思わず口に乘せたのを、バスクス二世は気づいただろうか。

「下がってよい」

そう言われて、来たときと同じように礼をする。下がり際、再び仕切り布の方へ目を移したが——彼女の姿はもうなかった。

\* \* \* \* \*

「驚いたか」

滅紫の仕切り布がふわりと開いて、バスクス帝が姿を見せる。まるでこちらの反応など、もとよりわかっているような眼差し。

フェイリットは怒りを込めて、バスクス帝の黒い瞳を見上げた。

「驚きましたよ！」

コンツェがバスクス帝の弟だなんて——驚くも何も、いったいどういうことなのかわからなかった。

コンツェはテナン公国の第五公子で、生まれたときからテナン育ちのはずだ。バスクス帝と異母弟だとしたら、彼が生まれて三年後、先帝がコンツェの母親と関係を持ち、しかもそれが公表されることなくテナン王の嫡出として生まれていることになる。

バスクス帝は小さな息をひとつつくと、ゆっくりと肯いて見せた。そうしてフェイリットの前に立ち、

「簡単に言えば、私の父がテナン公妃に手を出した、というわけだ」

低い声で言い放つ。

「そして公妃は懐妊に気づいたのちも、父の側室としてハレムに入宮するのを拒絶した」

「.....」

聞きながら、フェイリットは自分の口がぽかんと開いていることに気づく。

あっさりと言うが、実は大変なことだ。コンツェの母親がテナン公妃——つまりテナン王の正妃だというなら、それを皇帝がやすやすと寝取ってしまったということになる。

権力を傘に.....なのだろう。

「何だか.....」

女好きだった先帝、女狂いを演じる現帝.....因果なのか宿命なのか。ここまで知ってしまうと、いっそ笑えてさえる。そう思いつつバスクス帝を見上げると、こちらの複雑な思いなどなんのその、着替えなど始めている。

「あ、お手伝いします」

フェイリットは彼の背中へまわって、手をのばした。

広い背に纏う衣裳は、まるで砂漠にひろがる陽の隠れた夜空の色。紫だけれど、どちらかというところと藍に近い深い色だ。腰の紐を解いて、衣裳をすると引き下ろす。

「“何だか”？」

美しい布地が取り払われたそこに、背をのたうち醜くただれた瘢痕が現れる。.....これが本来のバスクス帝なのだ。牢獄に五年の歳月を過ごし“狂った”とされた皇子は、父親の死を以って皇帝へと返り咲く。図れぬ理知とその信念を隠し持ちながら。

「“何だか似ている”か」

ふと、前をむいたままのバスクス帝がつぶやく。

「いいえ。ええと、でも陛下、陛下もずいぶん女好きだってアング」

「ふん、女好きとは」

振り返りざまに手を掴まれて、フェイリットは思わず身を引く。

「お前も本人を前によく口が開くな」

バスクス帝の低い声がゆったりと返される。まるで伽喃を紡ぐような、やわらかな口調だった。

「ほ、本来なら喜ばしいことです。一国の長が女好きじゃなければ、跡目は生まれえないし、そうしたら国も続かなくなるし、栄えなくなるし.....」

「そう思うか」

「お、思います」

「本当に？」

近づけられた眼差しから、フェイリットは目を反らして肯いた。

本当なはずがない。バスクス帝が他のジャーリヤと楽しそうに語らう姿は、顔をそむけても胸が痛い。彼の視線が他へ移ろうだけで、こんなにも苦しいのに。

「本当です、って、え？」

唐突にも抱き上げられて、フェイリットは首を横に振る。

「とっ！ な！！ ディアス！」

「もう何を言っているのかわからんな」

暴れようとするフェイリットの背中をポンポンと撫でて、バスクス帝は寝台へと腰掛けた。その膝に抱いたまま乗せられ、黒の瞳が目前に迫る。

「私は、お前の夫たるには不足か？」

重なる唇を拒むことを忘れてしまう。フェイリットは目を見開いて、頭の中が白く霞んでいくのを感じた。

今、物凄いことを言われた気がするのに、ままならない呼吸のせいで頭がまったく回らない。ずるずると寝台に寝かされて、気づくとバスクス帝が見下ろしていた。

「あ、の……陛下」

切れ切れの息でそう言うが、彼はただ目を細めただけだった。

——コンツェがバスクス帝の弟……。

そして父親が先帝アエドゲヌなら、コンツェには帝位の継承権が与えられているはず。

では、彼が目論む次の皇帝は、コンツェなのだ。

「……何を考えている」

——一年の頃もちょうどよかろう。

そうバスクス帝が言ったのはいつだったか。けれど、はっきりと覚えている。選ぶべくもない、お前は新しい皇帝に組し、メルトローとの繋がりを持つと、言われたのだ。

けれどコンツェは、どちらを選ぶのだろう。

「フェイリット」

覗き込まれて、フェイリットははっとする。バスクス帝はどうやらずっと、のし掛かったままこちらを眺めていたらしい。

「あっ！ ええと。陛下のこと考えてました」

本当のことだったが、バスクス帝はふっと眉をひそめると、仕方ないような顔をして息をついた。

「……目の前にいるだろう」

額の髪を梳いて、頬を撫でていく大きな手をそっと捕まえる。

「ディアス、」

その手を抱きしめるようにして、フェイリットは目を閉じた。

「あなたがそうしろと言うなら、わたしは何でもします」

ゆっくりと目を開けると、バスクス帝は笑った。柔らかく目を細めて、ため息のような息をつく。

「この状態で男にそういうことを言うなら、覚悟はしているのだろうか」

「は……？ いいえ！ そういうことじゃなくて！」

契約を結ぶには、どうすればいいのだろうか。渦巻いていく彼の道が、死へつながらぬ為にはどうすれば。

—そのことばかりを考えながら、フェイリットは彼の肩すじにしがみついた。



“それ”が納められていたのは、精密でうつくしい曲線の描かれる、純白の貝殻装飾ロカイユの箱だった。

「コンツ・エトワルトは？」

「謁見を終えて二刻ほど前にお帰りになりました」

「そうか」

ウズはトリノの報告を横に聞きながら、足早に皇帝宮の廊をすぎてゆく。報告を終えたトリノが、なにも言わずとも後ろについて来るのは、この手に抱える箱が何であるかを理解している証拠だ。

軟禁状態にあった元元老院議長にしてイクパル帝国元帥・トゥールンガは、すべての肩書きを没収されて監禁へと移った。ウズが彼の室を訪れた時、卓にうなだれるようにしてつくその姿の脇に、その“箱”は並んでいたのだ。

“箱”——すなわち、テナン公女シアゼリタの首が。

「陛下の下へ急ぐのです。この箱が我々の手にあってはまずい」

「はい」

公女暗殺の罪人としてトゥールンガをテナン公国に輸送する。そんなことをしたら、おそらく事態は悪化するだけ。これは向こうの策略なのだ。テナン公国に身柄を引き渡した途端、トゥールンガは命を乞うために「暗殺を命じたのはバスクス二世だ」と言いはるだろう。そしてそれを、テナン公国側も望んでいる。バスクス二世がテナンの公女を殺したとあれば、彼を糾弾する恰好の大義名分となるからだ。そうなればもう、戦争をしても皇帝を殺しても、テナン公国が“正義”。この立ち位置では、玉座を奪われても報復などもっての外。

“篡奪は当然のことだった”と、世論ができあがるのは目に見えている。

「陛下」

ウズは一声かけながら、玉座の間の仕切り幕を引き上げて身をくぐらせた。室の中にバスクス帝の姿はなかったが、時を待たずにその私室へとつながる仕切り幕が、ぱさりと鳴る。

「どうした」

タブラ＝ラサが共に居るはずの私室から来たわりに、着衣の乱れが目につかない。とっくに身支度を終えていたのか、行為に及ばず彼女が下がったのか。トゥールンガに付きっきりだったせいで、彼らの動向が把握できない。

「タブラ＝ラサは」

その所在を問う質問に、バスクス帝は苦笑して答えた。

「眠っている。……その箱は、」

そして気づいたように視線をよこし、彼は眉をひそめる。ウズはそれに頷きながら、両手に持った箱を彼の方へと掲げた。

「首です、シアゼリタ公女の」

ウズの言葉を耳に、彼は一瞬だけ時を止めて固まる。

「——そう、か」

まるで苦いものでも飲み込むかのように、彼の蜂谷(こめかみ)が動く。低い声を口にし、玉座からの段を降りてくる皇帝の姿を、ウズは黙って見守った。

「こうなってしまっちは、隠蔽も公表も得策ではない。裏の動きをすべて明らかにせん限りな」

「では、」

目前に立ったバスクス帝が、小さな息で肩を動かす。

隠蔽も公表もできない。ならばいったい、どうすれば。

けれど、絡み合った糸にもかならず解き目はあるはずだ。トゥールンガに首を“運ばせて”、テナン公国がしたかったのは何なのか？ 目的が必ずや……、

「トリノ」

はっと気づくように目を開くと、バスクス帝はウズの後ろに控える小姓へ顔を向ける。

「コンツ・エトワルトは、」

先程ウズが問うたのと、全く同じ質問。いきなり言葉をかけられた当のトリノは、驚いたように口を開ける。

「二刻ほど前に帰られました」

「それは、城を出る姿を見届けた、ということか？」

「いえ、見たわけでは」

「…見とらんわけだな」

そのやり取りを見ながら、ウズは片手の甲を額にあてる。

――やられた。何ということか……！

「私の落ち度です」

わけがわからない、という顔でこちらを見やるトリノに、ウズは首を振って制止をかける。

「つまりは、」

バスクス帝はその足で仕切り幕へと近づき、金糸で縫われた白い布を掴み上げる。荒々しい動作の向こうには、しん、と静まった廊が続くばかりだ。

そこに居ただろう人物は、もはやこの城にはいない。

「狙いはこれか。奴らは最初から、妹殺しを私に押し付け、敵対させるつもりだった」

“シアゼリタの首を持ったウズが、皇帝に直に見せにゆく”

この構図こそが、バスクス帝が主謀であることを裏付ける証拠。この構図をそのままコンツ・エトワルトに見せたなら、彼は間違いなく頭に血を上らせる。

テナン公国とイクパル皇帝の、対立の縮図のできあがりだ。

「……コンツ・エトワルトを捕らえますか」

「いや。捕らえて“違う”と弁明したところで、もう奴は信じぬだろうよ」

トゥールンガを、もっと早く問い詰めるべきだったのだ。策略と見抜きながら、まんまと脚を絡め取られて。なんたる失敗を仕出かしてしまったのか。

「陛下！」

突如、慌たましい金具の音が室の前で立ちどまる。こちらからはバスクス帝の背中だけしか見えないが、その彼が何かに目を向けたのはわかった。金具の音の正体は、どう考えても武装した兵士。この次に起こることを予測して、ウズは顔をしかめて唸った。

「トゥールンガが死んでいます！ 毒を煽ったように見られますが、我々が調べた時点では、そのような物は所持しておりませんでした」

監禁されていた身なら、持ち物は着衣を残しすべて取り上げられた状態にあったはず。だがそれでも、いったい薬をどこから、という疑問は口に出ない。トゥールンガを動かした何者かが、彼に飲ませたに違いないからだ。

バスクス帝がその拳を握り締めるのを見つけて、ウズは止めていた足を前に踏み出した。彼の隣に並び立つと、目前に膝をつく兵の姿がようやく目に入る。

「トゥールンガの遺体は？」

「我々は数人単位で元帥……いえ、元・元帥閣下を監視しておりました。報告に上がったのは自分だけです。遺体は他の者たちが見張りを。誰も近づけぬよう命令はしてあります」

「そうですか」

ひとつ頷いて、ウズは横を見やっした。彼の判断も、自分の判断も、ここまでくれば変わりはないが。一度へまをした身で、これ以上の命令は下せない。

バスクス帝は大きく息を吸って、吐き出すように次の言葉を続けた。

「トゥールンガは自殺した。遺書は無いだろうが、その隣に首があれば一目瞭然。ロカイユの箱を奴の隣に戻せ。状況が揃ったらテナンへ伝令を送る」

我が国の元帥が、独断で公女を殺害した。遺書は無いが、首を持って自殺しているのが発見された。――そう公表するしか、もはや道は無いようだった。言い逃れにしか聞こえなくとも、これが事実。トゥールンガが死に、彼を裏で操った存在が霞んでしまった以上、もはや真実を提示することはできない。

「そのように手配します」

ウズは頭を下げると、玉座の間をあとにした。トゥールンガの手に、再び持たせるロカイユの箱を抱えて。

テナン公国はおそらく、この弁明に耳を貸さない。トゥールンガが単独の犯人だという主張は、ほぼ間違いなく通らないだろう。だが、だからといって“無実”の態度を崩してしまったら、そこで自分たちは終わるのだ。なにも成さぬまま、犬死にすることにさえなる。

「トリノ。お前はタブラ＝ラサに付き添って、いつも通りハレムへ行きなさい」

後ろからついてくるトリノに、振り返ることなくウズは告げる。素直さ丸出しのタブラ＝ラサに知れては、後々が厄介だ。

何か起こったのだ、という非日常は、単調な毎日を過ごすハレムの住人にとって、甘い蜜にも代わるもの。もし彼女がこのことを知り、何らかの反応を示してしまったなら、敏感な他のジャーリヤたちはすぐに気付く。寵愛を受ける スフィル・ギョズデジャーリヤ 零番目の妾妃 の様子がおかしい。それはそのまま、“皇帝、もしくは皇帝宮で何かが起こったのかも”という疑念を浮かび上がらせる。

「承知致しました」

すっと衣擦れの音を残すと、トリノは身を返して去って行った。

タブラ＝ラサとは仲が良いのか、仕事の合間にもしょっちゅう連れ立つ姿を見かける。しかし――友情と命令、どちらに重きを置くべきか、履き違えるトリノではなからう。

ウズは考えるまま、歩き去るその背中を振り返った。

\* \* \* \* \*

謁見を終えて部屋に戻ると、長椅子に膝を抱え凭れるアシュケナシムが目に入る。

「帰るぞ、アシュ」

長椅子の前に立ち、コンツェは覗き込むようにして声をかけた。

「アシュ？」

閉じられた瞼を彩る、金色の睫毛。それがほんのわずかに震えて、吐息のような空気が彼の口から漏れた。

じっと動かない彼が眠っていることによりやく気づいて、コンツェは首を竦める。

「よほど疲れてたんだな」

こんなところでうたた寝してしまうなんて。

その俯けた頬にかかる柔らかな巻き毛を見やっ、コンツェは自嘲する。見るほどに“彼女”に似通う姿に、どうしても目がいってしまう。

あわ雲のように癖のある巻き毛と、象牙色の額に頬はやわらかな桃色、小さな鼻は王族に似合わずつんと上向き、唇は厚くも薄くもないが、頬と同じくやさしい桃色に染まっている。うつくしい、という形容より、可憐だとか愛らしいとかで、誤魔化される容姿だ。髪が長く動作に緩慢さがみられる分、アシュケナシムの方が“女性的”に映り、機敏で颯爽としているフェイリットがその逆に見えてしまうかもしれないが。髪を同じく揃え、唯一異なる瞳の色を閉じて動きを止めても、コンツェには見分けられる自信があった。

あの時見たフェイリットの姿を、気のせいだと思いたい。なにより皇帝の“寝室”に、宰相の執務につく小姓が居てはおかしいからだ。

――貴族も皇族も王族も、まっぴらごめんだわ。

以前、はっきりとそう豪語していた彼女が、その最たる位置にいる皇帝――それも彼女からみたら敵国の先導者と、寝室に居るような真似はしないだろう。

「選べ、か」

もう、とっくに選んでいることだ。自分には、故郷であるテナン公国を、捨て去ることはできないとわかったから。

「大佐に指輪を返して、フェイリットを説得して……軍務の引き継ぎなんて、悠長にしてられないだろうな」

帝国と決別すると伝えたら、バスクスは自分を捕らえるだろうか。それを考えたなら、選択した意思を伝えることなく、一刻も早くここから去るべきだ。

けれど安らかに寝息をたてるアシュケナシムを、無理やり起こす気持ちにはなれなかった。

体調不良をこれ以上悪化させないためにも、彼には休息が必要なはず。

コンツェは少しだけ空きのある長椅子の端に腰をつけて、ひと息に肩を揺らした。

そうしてふと、入り口にかかる幕の下に、何者かの足が並ぶのが見える。

「コンツ・エトワルト殿下」

その声を聞いて、コンツェは「ああ、」と口を開く。

「トリノ？」

「はい。お見送りに参りました。お帰りになられますか」

「ああ、これから帰るが、案内はつけなくていい。宮殿はだいたいわかるから。ありがとう」

仕切りの幕から姿を出すことなく、形式的な挨拶を述べてトリノは去っていった。

“コンツ・エトワルト殿下”——あんな呼び方を、彼は前からしていただろうか。不思議に思うのに、なぜだか記憶がかすれている。中隊長、とか、コンツェさん、とか……呼ばれていたのではなかったか。

そんなことを考えながらも、コンツェは室内にあった書棚から、本を一冊取りだした。普段は本など手にもかけないが、アシュケナシシムが自然と目を覚ますまで、暇がつぶせたらそれでいい。

父……いや、義父・テナン王のものと思われるその本は、随分と古く色あせている。木材の貴重さから、羊皮や布地を代用することの多いイクパルで、このように装丁された本が見られることはまずない。こんなに貴重なものを国に持ち帰らず、テナン王はこの室内で読んでいたのだろうか。

「……メルトロローの古代記か」

しばらくぱらぱらと流し読んで、ふとコンツェはその手を止めた。

「こ、」

目に写り込む、一枚の挿し絵。

その絵の下に、テナンの古い文字で一文、“タントルアスと竜”。

「エトワルト」

コンツェがその開いた本を取り落とした途端、アシュケナシシムはぱっちりと目を開いて言った。

「居たよ」

寝ぼける風もなく発したアシュケナシシムを、コンツェは気の動転したままに見つめる。

「見つけた」

何かを言おうと口を開けるが、空気だけが漏れてゆく。“居た”というのが何を指すのか。その疑問まで辿り着けるのに、しばらくの時間を要してしまう。

「居たって、何がだ？」

コンツェのその問いに、アシュケナシシムはすぐには答えなかった。こちらを見つめたまま、眉をひそめる。

「シアゼリタ」

そんな、夢だろう？ そう言って笑おうとするものの、コンツェはアシュを見やって、いよいよ

よ顔色をなくした。彼の素振りに冗談じみたものは感じられない。

「彼女が誰によって殺されたのか、君には突き止める使命があるだろう？ 急ごう、玉座の間だ」

言うや否や、立ち上がるアシュケナシシムを目で追う。

「何でわかる？ あ、おい！」

飛び出してゆく彼の背中に声を上げながら、コンツェはその後に立ち走った。

先ほどまで眠っていた筈なのに、その足取りはしっかりとして迷いが無い。それはこの宮殿のつくりを、完全に把握しているかのような素振りだ。

彼が滑走というに近い走りを止めたのは、先ほどまでコンツェが謁見していた室――玉座の間の手前。

「アシュ、」

「しっ、黙って」

彼の手のひらに口を押さえられ、コンツェは目を瞬く。気配を消して、アシュケナシシムはそっと仕切りの幕に手をかけた。

「――……その箱は、」

ふと、室内の音が耳に入る。この低い声は、さきほど聞いたばかりのもの。イクパル帝国皇帝、バスクス二世の声だった。

箱、という言葉に目を細めて、コンツェはそっとアシュの開けた仕切りの隙間に目をやる。

玉座に立つバスクスと、それに向かう宰相ウズルダンの背中。ついで彼が掲げるようにして持ち上げた、貝殻装飾ロカイユの純白の箱……。

「首です、シアゼリタ公女の」

ウズの言葉を耳に、コンツェは喉奥から捻るような呻きを漏らす。

「そうか」

皇帝の返答は、何の感慨も抱かぬように、あっさりとしていた。

金糸で縫われる仕切りから、アシュケナシシムが手を離す。

「エトワルト」

冷たいなにかで思いきり頭を殴ったら、今のようになるだろうか。彼の気遣いの声さえ聞くことなく、コンツェは怒りに拳を震わせた。

シアゼリタは、やはり――バスクス二世が。

「行こう、あいつらこっちに向かってくる」

冷たい衝撃に頭を抱え、ただ引き摺られるままに帝城をあとにする。

城下は夕方の色合いに満ちて、息をのむほどに美しかった。夕焼けが照らす土色の民家は、城の建つ高台からしか見下ろすことができない。

「両殿下、」

その前方に、忽然と立つ人物を見つけて、コンツェとアシュケナシシムは足をとめた。

「お前は……アロヴァイネン伯」

覚えていた名前を口にして、コンツェは顔をしかめる。

「あなたは聡明なお方だと聞き及んでおります。よもやこのご相談が、決して貴国の不利益にはならぬことも、すでにご承知でしょうね」

「.....なんのことだ」

「そうして、解らぬ、存ぜぬと繰り返してこられたのですが、もうあなたには立つ背すら無いことも、ご理解頂かねばなりません。振り返れば帝国が、前方からは我々が、そして両脇からは貴国の重鎮方があなたを取り囲んでいるような状況です。どの手を取るかはあなた次第ですが――無知の仮面をお脱ぎくださいエトワルト王子。どれが一番利に適うのか、おわかりのはず。共に手を取り、イクパルを滅するのです。.....シアゼリタ王女を殺した、イクパル帝国を」

それはあまりに見計らった発言だった。テナンを捨てろと皇帝に言われたことも、シアゼリタを殺した犯人も、そして内々にテナン公国から立太子を迫られていることも.....考えてみたなら、彼が知るはずはないのに。

けれど冷静になれぬまま、怒りに震えるコンツェが深く思慮することはなく、

「当たり前だ」

きつい眼差しをわずかに歪めて、そう応えたのだった。

たった一人のテナンの王女。ひとつも血が繋がらないのに、兄と慕ってくれた優しい妹だ。彼女の無惨な死を、決して許しはしない。

アロヴァイネンは小さな紙にその旨を走り書き、口笛で呼んだ鷹の脚にくくりつける。

「サディアナ王女を連れ帰る手筈は整えてあります。あなたが立太子すると同時に、我々テナン・メルトロー連合は彼らに宣戦布告する。共に参りましょう」

――鷹が空に飛び立った。

その報せがテナンにつく頃、彼は王太子の冠を戴く。

そして、この青空に続く平穏が、夢の日々とも感じられるほどに.....遠い場所へと向かうのだ。

テナン公国第五公子――いや、第五王子コンツ・エトワルト・シマニの立太子の報せは、こうして瞬く間に広がっていった。

風を取り込もうと開け放した回廊から、黒い影が射し込んだ。

刺繍をしていたアジクムは、ふと自然に目を上げる。

「アジクム」

その声に発作的に立ち上がると、手にあった布がはらりと床に落ちてゆく。そこに来た人物を理解して、なおさらにアジクムは唇を震わせた。

「……陛下」

五度の寵を受け、もっとも <sup>ギョズデ・ジャーリヤ</sup> 側室 に近いと言われてきた。バスクス帝を離さぬために、彼が居ないときでさえ身を立てに駆けずり回る。そんな努力をしてきたというのに、今や各国から集められた女たちが、いとも簡単にギョズデの地位を得ている始末。自分はといえば、今夜中にも <sup>ハレム</sup> 後宮を去らねばならない身というのに。

身の振り先は、帝都アデプに住まう子爵家のひとつ。資産は持っているけれど、俗にいう成り上がりの家だった。当然ながら後妻で、すでに子は十人もいる老人の元。転落、というに相応しい、一夜にして転がり落ちた自らの命運が口惜しい。

「しばらくぶりだな」

彼は厳しい顔をほんの少し緩めて、回廊からこちらに一步踏み出る。書面ひとつと伝令の宦官一人。それで別れが済まされるのだと思っていたが、そうではなかったらしい。

「ええ」

アジクムは頷くと、恨みごとひとつ言わぬまま微笑んだ。

バスクス帝を誘惑する衣装も、いざなう香もつけてはいない。ハレムを去れと言われた身で、彼が訪ねてくるとは思いもよらなかった。けれどそれでも、

「寂しい夜ばかりでしたわ」

アジクムは微笑むと、艶やかな仕草でその胸板に身を添わせた。目先にあった彼の手をそっと持ち上げ、唇を寄せて闇色の瞳を見やる。

「思い出してただけて？」

愚鈍と言われているけれど、底の知れぬ理知がある。思えばそれに気づいてから、アジクムは彼に従順になった。この男の関心さえ引き寄せられれば、故郷である小国チャダは存続できる。彼の子を産めば、それはなおのこと。

「わたくしを」

彼の手に唇をあてたまま、片手で結わえていた髪を解き、身体をおおう衣装を下ろす。挑戦的に微笑めば、彼はきっと乗ってくる。そう計算して。

滅多に微笑まぬその目をゆっくりと細めると、バスクス帝は指でアジクムの唇を割った。

「アジクム。お前に、ギョズデ・ジャーリヤになる覚悟はあるか」

口腔を弄ぶ指に夢中になりかけて、はっと目を上げる。そこに厳しい眼差しを見つけ、アジクムは啞然となった。

<sup>ギョズデ・ジャーリヤ</sup>  
「側室 ……？ このわたくしが？」



指が抜かれて解放されても、動くことはできなかった。静かに頷く彼を見て、身体が震えてよろめく。ずっとずっと、喉から手が出るほどに欲していた地位。子爵の後妻となったなら、もう二度とその道は開かれない。

後じさったあとで、力の抜けた膝に引きずられ倒れそうになった。寸でのところをバスクス帝に抱え止められて、アジイクムは自分の足先を見下ろす。

「……追い出されるものとばかり」

ぼんやりと呟いて、自分を抱える人を見上げた。

「そういう訳にはいなくなっただけ」

苦笑、というのに相応しい笑みを唇にのせると、バスクス帝はアジイクムを抱える腕に力を込める。縋っていた身体を起こされて、地面に足がついてから、アジイクムは堪えていた息を吐き出した。

「お前が <sup>ギョズデ・ジャーリヤ</sup> 側室 に就くと言え、チャダ小国との絶対の国交を保障しよう。猶予はないが、決められるか？」

答えはもちろん決まっている。アジイクムは頷くまま、バスクス帝を銀朱の垂れ幕の中へ引き込んだ。

\* \* \* \* \*

廊の両わきを挟んで幾本も吊るされる、鬱金色の細い金属の糸。からだに触れればしゃらんと音をたて、橙色の照明を浴びるままに煌めきを増す。

「トリノもさまになってきたねえ」

皇帝の寝室から後宮へ <sup>ハレム</sup> とつながる廊を歩きながら、フェイリットは肩をすくめた。

背が高くなった、とコンツェに言われて喜んでいたのは一昨日にもなるが、それにも増して彼は伸びた。横並びだった身長に差をつけられて、フェイリットは胡乱そうに側を歩くトリノを見やる。

宦官の纏う漆黒の長衣が、青年へと近づいた姿によく似合っていた。

「僕は前から伸びてましたよ。フェイリットが気づかなかっただけで」

そうしてすんなりと笑う顔に疑問を解かれて、フェイリットはしぶしぶ首を傾げる。

「そうかなあ」

「そうそう。バツスは楽しかったですか」

「楽しかったよ、砂漠で水脈を探したんだ。いくつか見つけてきたから、あとは掘るだけ。地図もつくった」

「へえ、前から好きそうでしたしね、地理やら井戸やら」

手をのばし、天井から垂れる鳴り糸にしゃらしゃらと触れながら歩く。

腕をかすめる糸先の房が、くすぐったくて気持ちよかった。楽しげにしていると、それをトリ

ノが邪魔するように前方に立つ。

「わ、ひどい」

腕をかすめるはずの鳴り糸が、トリノのせいでこちらに来ない。楽しみを奪われて、フェイリットは負けじと彼の長い衣の裾を引っばった。

「っと！ 転んだらどうするんですか」

「転んじゃえ」

二人で掴みあい笑っていると、ふと離れたところから鳴り糸の音がある。はっとなって振り返り、フェイリットはその先を見やった。

「陛下？」

寝室に見えなかったから、ウズのところに居るのだとばかり思っていた。よもや後宮<sup>ハレム</sup>で出くわすなんて。

「愉しそうだな」

赤墨色のローブを纏い、湾刀まで履いている。その姿が目の前に来て、フェイリットは遠慮がちに笑った。

「ええと、こんにちは」

帝都に戻ってからというもの、昼日中に顔を合わせることがなくなってしまった。そのせいか、なんだか気恥ずかしい。朝はウズのところで小姓の仕事をし、昼食を食べるためにハレムに足を伸ばす。昼食を終えたらすぐにとって返し、今度は奴隷軍にいるシャルベ<sup>マムルーク</sup>シャの元、馬の世話や鍛錬をしていた。

いつもならとっくに飛びついている首元を見上げて、フェイリットは肩をすくめる。今日に限って、なぜだか彼も“おいで”とは言わなかった。

「これから昼食か」

「はい。面倒だったんですが、ここで食べるとゆっくりできるんですよ。半刻ぐらいですけど」

ウズの元では、もっと時間を削られる。半刻というのは、短いようで長い休憩なのだ。鼻息を荒くして吐き出すと、バスクス帝は口元を緩めて笑ってくれる。伸ばされた手が頭に触れて、薄いヴェールごしに撫でていった。

「すまないな、供にできたらよかったのだが。これから四公と謁見がある」

「四公？ ホスフォネト公王もいらっしゃるんですか」

「……どうだろうな。あの男は腰が重い」

どこか暗い表情。厳しい眼差しのその向こうに何かあるような気がして、フェイリットは彼をじっと見つめる。それは玉座の間に立ち尽くしていたあの夜からの、小さな違和感だった。結局、なにも語らぬまま夜を明かして今に至る。

「陛下、」

何かあったのですか。その言葉を飲み込んで見上げると、彼は片方の眉を上げた。

「わたし忘れてました。まだ賭けの報酬、はらってなかったですね」

「報酬？」

大きく頷いて、フェイリットは歯を見せて笑う。

「肩揉みです」

バスクス帝の強張った顔が、心と力を抜いて優しげに緩む。

「そうだったかな」

肩揉み——それは遊戯盤を習った初めの夜に、報酬として賭けた小さな代償だった。あの夜勝ったはずの彼が、褒美としてくれた気の荒い月毛の馬は、今や軍一の駿馬だ。

どうしてハレムに居たのか。四公をどうして呼んだのか。ホスフォネト王の名を出したとき、顔色を曇らせたのは何故か……。本当に訊きたいことを、やはり言葉にできぬまま。

「では夜にな。楽しみにしている」

最後にもう一度、フェイリットの頭に手を置いて、バスクス帝は過ぎてゆく。

離れていく背中を見ながら、フェイリットは自らの頭に手を乗せ、そっと息をついた。

白塗りの陶磁で壁をかこんだ室は、ゆるやかな丸みをもった円状であった。

見上げた丸い天井からは、たくさんの黒紅色の垂れ幕が下がり、視界のほとんどを遮っている。それは普通に歩いたなら、垂れ下がる布に身体を絡めてしまうほどの間隔。彩りを添える意味合いより、守備の目論みがつよい装飾の一つだが、実際にここで乱闘が起きたなら、敵も味方もなくごった返すであろうことは誰が見ても予想がついた。

元老院の議会が催されていたこの室は、帝城の北区で唯一、屋根が半球に盛りあがる“塔”の形状をしている。かつては円形の壁に沿うよう議席がいくつも置かれていたが、その光景ももはや凍結までの話だ。

垂れ幕を避けて敷かれた中心部の絨毯には、三人の男たちが重苦しい沈黙に支えられ腰をつけていた。人数分の絨毯は、人ひとりが大の字で手足を広げても、余りあるほどに広い。居合わせた三人は互いに顔を知り、他愛のない雑談を交わせるほどの間柄であるはずだった。しかし今、そこに居る誰しものが口を閉ざし、会話など忘れてしまったように沈黙の時間を堪えている。

沈黙の原因の一端は、“空白の席”。三人の男たちは、その誰も座らぬ絨毯を眺め、みな一度は顔を曇らせた。群青と黍色の毛が複雑に折り込まれた図案は、<sup>さそり</sup>蠍の紋を抱き込む。それは間違えるはずもなく、独立の噂の上がる島・テナン公国が用いる図案。

「……先帝の即位以来、ですか」

いよいよ沈黙も小一時間にさしかかり、耐えかねるように乾いた声を、三人のうちのひとりが上げた。

「……ホスフォネト公は、先帝の崩御にはお越しになりませなんだからな」

沈黙を破った男——バツソス公王ホスフォネトに、隣国のイリアス公王ジルドゥラが口を返す。

先帝の即位を最後に、顔を合わせたのはもう何十年も前になる。昔は同年の雰囲気が漂っていたはずなのに、今はどうにもバツソス公王ホスフォネトに“老い”を感じるができなかった。同じく七十にもさしかかる年齢で、彼の横顔はどう身繕っても四十代の半ば。イリアス公王ジルドゥラはホスフォネトの横顔を見やりながら、渋るように首を傾げる。

「なにか秘術でも会得なされたか」

ふと呟くように言ったジルドゥラの言葉に、ホスフォネトは小さく息をついて笑った。

「竜でも喰えば、よい秘術となりましょうが」

皮肉らしくもない、苦々しい顔をして返すホスフォネトに、ジルドゥラの脇に居たドルキア公王、イジャローテが鼻を鳴らす。

「さんざん踊らされたその竜狩りも、空言だったというではないか。お蔭でどこかの慌て者が、尻尾を出して独立なんぞと騒ぎおる」

「おやおや、そのようなことを仰ってよいのですかな。聞くところによれば、貴国の旗印も、よもやどこかの慌て者に変えられようとしておるとか。いやはや人の噂とは恐ろしいものですな」

「ふん、たかが噂じゃ」

ジルドウラの言及に、ドルキア公王イジャローテが頑として腕を組む。

「海風に流された“煙”が、昨今なんとも息苦しくてかなわんでな。どこぞで火が焚かれているのではと思ったまで」

鼻で笑って、ジルドウラは返した。

「ほう、エルベ海の“豊かな”海風が、よもやイリアスくんだりまで届くとは。驚いたものじゃな」

「なんだと？ 言わせておけば、」

「それはこちらの言い分ぞ」

立ち上がろうとしたイジャローテが、ふとその動きを止めて横を見る。突然の所作につられ同じ方角を見やれば、そこには黒のターバンに黒のローブを纏い、腰に履く湾刀まで漆黒の男が、こちらを見下ろして立っているのだった。

「……陛下」

――まるで喪服だ。

おそらく居合わせた者の誰しものが、彼の姿を見てそう思ったことだろう。陛下、と声を出したイジャローテは、けれどその先につなげるべき挨拶の儀へ、身体を動かすことができなかった。

政治には一切手をかけず、女の寝所にばかり通う皇帝。そう耳にすれば、ふ抜けた優男なのだと想像するのが人の常。けれど目の前に立つ喪服の皇帝は、よもやふ抜けたと言うには相応しくなかった。

眉間には浅くはない皺が、そして眼差しには隙がなく、じっとこちらを見据えている。肉食の獣に対峙したかのような緊迫を肝に感じて、ドルキア公王イジャローテはようやくその身を平伏させた。

「儀礼はいらん」

短く言うと、バスクス帝は自らの席である一段奥まった位置へは行かず、立ったままで言葉をつなげる。

「テナン公女シアゼリタ・ロアの訃報は、よもや届いているだろう」

テナン公女の暗殺。その訃報は、なによりも早く各国の中枢へと届けられた。

――そう、なによりも早く、異常な確かさをもって。

「どのように届いているのか、配慮はせん。ただ一つだけ言う。これから話すことが事実であり、真実に近いものであることは、」

小さな間を開けた後、その鋭い目がわずかに伏せられ上がる。

「――保証する」

深く、落ち着いたある静かな声は、先帝のアエドゲヌとよく似ている。ただその異常に強い眼差しは、父親とはまったく別の方向を見つめていた。玉座の上の安寧や保身ではなく、彼自身を襲った過去と……おそらくは自らのすすむ道筋を。

八年前、異母兄弟を殺害した容疑をかけられて、監獄に送られるまま“狂った”と判断された、最後の皇子。それがバスクス二世だった。暗殺の魔の手を逃れ、唯一イクパル帝国を継承できる立場についたはずの彼は、“刑を覆せば報復で殺されるだろう”という忠言のせいで、父帝に恐れられるまま五年の歳月を監獄で暮らした。

父であり、当時の皇帝だったアエドゲヌは、己の座る椅子だけが大切だった。次々に息子たちが死に、その容疑がまた自らの息子にかかっても、真実を突き止めようと動く男ではなかったのだ。

「シアゼリタ・ロア公女は知っての通り、暗殺された。状況が示す判断は無数に存在するだろう。たとえば、この私が暗殺の指示を出した、などだ。……残念なことに、否定できる証拠も犯人を示すことのできる証拠も、今のところ何もない。提示できる事実は、元・元老院議長であり、元・元帥であったトゥールンガが、公女の首を保持したまま自害しているのが発見された——ということのみ」

三人の公王たちは、何も言わずに目前に立つ皇帝を見上げていた。

バスクス二世を監獄へ入れろと提言したのも、彼が狂ったから出すべきでないと押し切ったのも、玉座を狙い、あわよくば報復を企むはずだと忠言したのも、たったひとり。

ここには居ない、かの国の公王だ。

「ハレムを縮小した。お前たちの公国から、公女をひとりずつ選抜しギョズデ・ジャーリヤに仕立てたのは、テナン公王——シマニから先帝アエドゲヌの血をひくコンツ・エトワルトを引き剥がし、ギョズデを人質にこの帝国の玉座に座らせるためだった。お前たち四公王に私を殺させ、コンツ・エトワルトに報復させる形でな。……だが、水面下に進めるはずのこの計略を、私がここで口にした意味が、わからぬお前たちではないだろう」

——計略は、成功の日の目を見ぬままに終わる。そのことを言外に口に出し、バスクス二世は鋭い眼をまぶたの内に覆い隠す。

「この事実を話した上で、お前たちに自由をやろう。テナン公国に与し独立の加担をするもよし、ここで予と無様に足掻くのもよし」

喪服の意味は、シアゼリタ公女への敬弔なのか、それとも自らの死の暗示なのか。

テナン公国がメルトロー王国と手を組んだのは、もはや周知の事実。大陸に富を誇るあの大国とまともにやりあったなら、死は必然となるだろう。示された自由の中に、皇帝であるはずの彼の選択肢は、どこにもない。

「たしかに……陛下が狂われていると判断し、先帝に忠言したのはシマニです。が、その忠言に同意の署名を記したのは、我々三人であることは言い逃れできません」

ホスフォネトは小さな息を肩について、ゆっくりと立ち上がった。

先日、バツソス公国で忠誠を誓ったことに、偽りはない。彼女と彼女の愛する人間に、残りの余生を捧げてよよいと思えたからだ。

「それ故、儂にその自由は必要ございませぬ」

立ち上がった視野の隅で、残る二人が下を向く姿をとらえる。

何も言わぬまま頷き、ローブを翻して去っていく皇帝を見届けながら、ホスフォネトは彼の座らなかつた玉座を目に焼き付けた。

赤く、忌々しい色の城。またここに来てしまったと思いながらも、カランヌは一番内側に位置するイクパル帝城の門前で、広がる赤砂岩の光景を眺めていた。

依然とまったく違うのは、この城を見上げる人物が自分ひとりではないということ。

カランヌは自らよりも長い間、城の全景を見つめていた青年の背中に目を向ける。

「さて……これからのことを話しましょうか。エトワルト王太子殿下」

「ああ、」

彼は前を向いたまま頷いて、ゆっくりとこちらに振り返る。その顔はとても静かで、今は悩みも怒りも感じさせない。どこか晴れ晴れとしたようにさえ見える表情で、コンツ・エトワルトは続けた。

「伯の言葉通りに動こう。ただ、その呼び方はやめてくれないか」

「呼び方？」

困ったように眉をひそめて、エトワルトは首を傾げる。

「“王太子殿下”。なんだか自分じゃないみたいだ」

エトワルトの呟きを聞いて、少し離れた場所にいたアシュケナシムが声をたてて笑う。

「慣れるよ」

イクパルの民が纏うローブで身を包みターバンを巻いたその姿は、長い髪を隠していることもあってか、この国で過ごすサディアナの面影を映している。カランヌは並ぶ二人の顔を見ながら、小さく息をついて笑った。

「サディアナ王女の輸送用に、艦を一隻用意致しました。明日の朝には港に到着する予定です」

「で、僕たち三人がイクパル皇帝のところへ乗り込めばいいんだね。僕の役どころは？ サディアナにそっくりな動けばいいんでしょ？」

おっとりした動きを常にしているアシュが、急に機敏に動き出す。

「演じる必要はありませんが、とにかく任せて頂きます。三人、ではなく、皇帝の元へ出向くのは私とアシュケナシム殿下で。エトワルト殿下は、一足先に港に向かっていて下さい」

三人で向かうとばかり思っていたのか、カランヌの言葉にエトワルトは驚いたような顔をする。

「俺は行かなくてもいいのか」

「ええ、貴方はテナン側についたと知れた時点で、拘束される可能性がある。それをお忘れにならず、あまり目立たぬよう港までお急ぎください。迎えの艦にはメルトロ王国の第二王子殿下が同乗されていますから、親交を深めてくださるといいでしょう。これから何かと協力しなくてはならない関係にありますので」

「わかった。向こうで落ち合おう」

港までは半日ちかくの道のりだ。しかし、馬を使わなければ半日で近づけないため、“目立たないように”というのは不可能になる。明日の朝、という期限を話しているから、おそらく彼は馬

を使った移動を選ばない。

軽く頷いて駆け出してゆくエトワルトの背中に、アシュが手を振っている。

「よかったね。残ってたら、きっと素直には動かなくなるよ。姉さん、荒れるだろうから。ああ、食べられたらどうしようかな」

サディアナの輸送は、おそらく無理やりになる。最悪の場合、鎖でつないで変化も逃走もできないように拘束しなくてはならない。そんな光景を、エトワルトが黙って見ているはずはない。推測にすぎないが、嫌がる彼女を連れ戻すのを、きっと諦めてしまうだろう。

食べられたらどうしよう、と言いながら、アシュの顔はどこか嬉しそうだ。うきうきとターバンを外して、束ねていた長い癖のある巻き毛を直している。十六年生きてきて、初めて目にする“姉”の姿。嬉しいという気持ちは、かつて自分にもあったものだ。

「どんな奴だろうね、イクパルの皇帝」

「ご覧になったことがあるのでは？」

アシュケナシムはよく、カランヌの視野を盗み見していた。まるで成り替わったように見えるという彼の能力は、何度かバスクス二世を目にしたカランヌの目線も、当然体感しているはず。

「あったかなあ。ああ、真っ黒い男だったのは覚えてる。あんまり優しそうじゃないよね、眉間に皺寄せてさ」

言いながらローブを脱いで、中に着こんだ衣装の襟首をただす。開襟の上衣に上着を重ね、細身の下衣に長いブーツを履くその姿は、乗馬をするのに適した出で立ちでもある。公式の場でも認められている、“王子”の姿。しっかりと装飾の施された上着にかかる金の髪は、今は紐を解いて美しい波を広げている。

歩きながらさっさと身支度を整える彼を見ながら、カランヌは軽く肩をすくめた。

「召使いがいなければ、着替えのひとつも出来なかった方とは思えませんね」

薔薇の棘に囲まれた、彼を十五年隠し続けてきた塔での暮らし。そこでの王子然とした彼の高飛車な態度が、いつしか和らいだ気さえする。自らもローブを脱ぎ、“メルトロ一式”の正式な衣装を整えながら、カランヌは横を見つめる。

「信じられないよね。でも、僕にはエトワルトの方が信じられなかったよ。身の回りのことを、何ひとつ侍従にさせてない。爪を切ってるのを見かけて、卒倒しそうになったくらいだ」

「彼は元は軍人です」

それも、公国の公子という身分には考えられぬほど下級の軍人。彼に目立った地位が与えられなかったのは、それを本人が一番嫌ったからだと聞いている。

一番嫌った地位を、流れのままに引き寄せてしまった王太子というのも、皮肉な話。

「軍人か、そうだったっけ。ちょうどいいじゃないか。これからのことを考えればさ」

カランヌの複雑な思いもよそに、今度は器用に手首の釦をかけはじめたアシュは、さして気にしたふうもなく笑った。



そっと押し開いた垂れ幕のむこうで、バスクス帝が振り返る。彼は寝台に腰かけて脚を組み、何かの描かれた羊皮を手に開くところだった。

「来たか」

頬を緩ませるその笑顔に頷いて、フェイリットはバスクス帝の目前へと近づいてゆく。

「それ、地図ですか？」

「ああ」

彼の隣に腰かけると、フェイリットは首を傾げた。

ウズの小姓だったころ、その部屋で何度も目にしたイクパル全土の地図。連なるアルマ山脈を北に、西のエルベ海域に浮かぶ島国テナン、大陸のふちに位置する公国ドルキア、寄り添う小国チャダ、中心部の公国バツソと、東の境目にある公国イリアス。けれどそれだけではない。バスクス帝の手にある地図は、藩属するすべての公国が載るほか、イクパルを囲む周辺の大国——メルトロー王国やリマ王国まで詳細に描かれたものだった。

「わあ、こんなに詳しく描かれてるの初めて見ました」

彼の腕元まで身を乗りだすと、左手が肩にまわされる。力に従い身をあずけ、フェイリットは離された地図の片方をつかんだ。

「こうして見ると良い立地なんだが。見てみる。東と北はアルマ山脈、西と南は海洋に挟まれているだろう。本来なら、ここは容易に踏み込めぬ自然の防壁に守られた要塞だ」

バスクス帝が囁みしめるように言うのを、フェイリットは頷いてつなげる。

「けれど資源の乏しい国に自然の防壁があったら、それはただの檻とかかわらないですよ。せめて南の大陸と貿易ができたらいいのに」

バスクス帝が言ったとおりの“防壁”を、フェイリットは指でなぞる。砂漠で見上げた、太陽を背負うアルマ山脈の大きさは、羊皮の上では表しきれない。指でなぞった山脈から沿岸をたどれば、海に浮かぶ小さな国が目に入る。

「ああ。周囲と隔絶せずこの地で国力を保とうとするなら、たしかに船で海を越えるのが一番いい。昔はイクパルにも最強の艦隊があったようだしな」

「最強の艦隊...」

地図から顔を上げれば、彼の吐息が首すじにかかり、次いで唇が押しつけられる。フェイリットは首をすくめてバスクス帝を見やり、彼の口に手をあてた。

「イクパルの艦隊って？」

「ずいぶん昔の話だ。最盛期の皇帝が一代で作りあげた海軍だったが、たしかどこかの王に軒並み潰されたのだったかな。最強の艦隊を名乗ってはいたが、実際はそんなものだろう。その残党があつまって今の——まあ、単なる密輸業船だが——イリアスの海賊になった」

「.....それって、海軍が海賊になったってことですか？」

海軍と海賊といえば絵に描けるほどはっきりと、対局に分かれて存在するものだ。けっして混じりあわない水と油の境目がなくなるなんて。

「そうだ。もしもイクパルが海洋国と戦争になったなら、私は間違いなく海賊に戦闘要請をしなければならん。そのなけなしに借りた海賊たちの武力も、他国の軍には遠く及ばないだろうが」

首すじをたどっていたバスクス帝の唇が、徐々に肩へとおちてくる。自然と倒される背中で寝台のやわらかさを感じて、フェイリットは自分を見おろす顔を見つめた。

「あの、わたし、肩揉みに来たんですよ」

見上げた顔が、悪戯げに笑う。

「肩より、私はこっちのほうが好い」

「なっ、」

近づく顔を両手で抑えて、フェイリットはしかめ面をする。

「賭け、わすれてないですよ！ わたしだけまだ何も」

身体の横で、地図が寝台からすべり落ちる。その音に気をとられて目をやれば、隙をついた彼に唇を捕らえられる。

触れあうだけの優しいくちづけ。バスクス帝はからかうように口元を緩めると、フェイリットの胸元に目を落とした。

「私の他にも、お前に贈り物をするやつがいるようだな」

「えっ？ あ、」

視線を追って自らの胸元を見て、フェイリットは目を瞬いた。バツソス公国の王、ホスフォネットから譲り受けた球体の首飾りが、衣装のすき間からころがり出していたのだ。琥珀とも黄金とも表しがたい不思議な色の珠を、ホスフォネットはエレシンスの“眼”なのだと語った。

「これは……ええと、」

珠をつなぐ細い鎖をつまむと、フェイリットはバスクス帝の顔をそっと窺う。

エレシンスの眼の説明を、どうすればいいものか。彼に会うときはいつも、外すかジルヤンタータに預けるかして、その目には触れないようにしてきたのだ。

固まるように動かなくなったフェイリットの手を、バスクス帝が珠ごと握る。

「――まったく。出会った時からだったが、お前は謎だらけだ」

手を握ったまま、彼はゆっくりと苦笑した。その顔がどこか寂しそうに思えて、フェイリットは彼を見つめる。

「出会ったとき？」

「ああ。不思議な色の瞳だった」

「そ！ それって光っ……じゃない、ええと。北に行けば、こういう色的人是はたくさん、わ」

近づく彼の唇が、そっと目尻に触れる。くすぐったさに目を閉じれば、瞼にもやわらかな温もりが感じられた。

「“俺”もおまえも秘密ばかりだ。だが、ひとつだけ言えることはある。……おまえは一人だけだ。いくら似ている奴がいようがな。だからおまえも、己の存在はひとつだけなのだというのを忘れるな」

唇を離してから、耳元で囁かれた言葉。

後から思い出すならば――、それは彼が、その日見た「真実」を示す断片だった。

「そうだな。久々にセルトでもするか」

「え、そんな急に。これからですか？」

けれどフェイリットには、気づけるはずもなかったこと。

「なんだ、復習が必要なほど忘れたか」

翌朝に目を覚まし、隣のぬくもりが見当たらないことに気づいてから、

「わっ忘れてないですよ！ 陛下の戦略なら、しっかり覚えてます。今度こそ負けません」

.....それは唐突に訪れる。

\* \* \* \* \*

小走りに回廊を駆けながら、トリノは額に浮かんだ汗に手の甲をあてる。

相変わらずのつよい日差しは、泉のある庭から差し込んで視界を白く浮かせていた。

——なんなんだ、一体。

裸足のトリノに足音はないが、それを追うように硬い音が二つ、背後に連なり迫っていた。窺うように顧みた背後に、トリノはちらりと目を配る。

長身で、色の白い二人の男。ローブはイクパルのように胸部までを覆わず、肩すじを沿って踝に垂れ、衣装は襟の高い腰丈の上衣と、腿の形にぴたりと沿うような黒の下衣を纏っていた。しゅらしゅらと鳴るローブの飾りは、反射の光で思わず目を閉じてしまうほど強くかがやいている。

ハレムにフェイリットを送り届け、自らの仕事に戻るために皇帝宮への回廊を歩いていたトリノは、目前を遮るように現れた二人の男に度肝を抜かれた。

「メルトロー国王の使者として参りました」

ひとりの男が温和にそう言い、宝石のように混じり気のない鶯色の目を細める。明らかに北方生まれとわかる白い顔は紺碧の布で覆われており、鶯色の目の男も、もうひとりの空色の目の男も、トリノにはどんな表情なのか判断することはできなかった。

「使者？ そのような話は窺っておりませんが」

前触れもなく唐突に現れた二人に、トリノは当然の答えを返した。他国の、それも敵国とお互いが定めている国の使者が来訪するとなれば、厳密な審議と調整が行われているはず。軍属の小姓を一時的に離れてから、トリノはそういった事情にもっとも近い“宰相”の側に付いている。二人に返した返答通り、メルトローから使者が来ることなど、トリノは耳にしていなかった。

「でしょうね。正式な申し入れをしたなら、我々は追い返されるか、三月も審議に時間を割かれてしまったことでしょう」

鶯色の目の男が答えて、懐に手を差し込む。凶器かと身構えるものの、その手が掴んで翳したのは手のひらほどの小さな羊皮紙だった。

「メルトロー国王の御璽です。無下に断れば、両国の関係は悪化の一途を辿りましょう。わかりませんか？ あなたには謁見の許可を願っているのではない。バスクス二世陛下のいらっしゃる場所へ、お連れ頂きたいのですよ」

小姓であるお前に、有無を判断できるものではない。そうはっきりと示された上に、国家間の関係の話題まで出されては、断ることができない。諦めるように駆けだして、いっそ二人が撒けたらいい――そんなことまで考えるが、バスクス帝のいるであろう北区の元老の間は、もはや目と鼻の先。

「陛下！！」

滑り込むようにしてバスクス帝のいる元老院の幕を抜け、トリノは跪く。

そこに並んでいたはずの公王たちは、半刻ほど前すでに控えの間に下がっていた。テナンという“蠍”が針をかまえた現状で、ただ黙って滅びゆく帝国に組するべきなのか、今ごろ決断に迫られていることだろう。空席の絨毯が四枚敷かれたままの目前で、トリノは膝の近くに額を落とし伏礼する。

「どうした。フェイリットは？ 喧嘩でもしたか」

来客を返し、寛いでいたのだろう。玉座に身を預け、凭れるように目を閉じていたバスクス帝が、トリノの様子を見て眉をうごかす。

「今はハレムに……」

父親の言うような台詞に、トリノはわずかに口ごもる。けれどすぐに首を振って、背後を窺った。振り返るその先で、ずっと自分を追っていた足音がとうとう追いついてくる。

「陛下、メルトローからの使者が、国王の御璽を持って参りました」

トリノが口を開くのとほとんど同じく、仕切りの幕をくぐり出た二人の人物が、まったく同じに膝を折り、胸に手を当てて礼をする。滑稽に見えそうなものなのに、その拝礼は完璧としか言えぬほど揃い、優雅だった。

「突然の謁見をお許し願えますね。イクパル帝国皇帝ディルージャ・アス・ルファイドウル・バスクス二世陛下」

波打つ金の髪と、すらりと伸びた長い四肢。しなやかな動きをみせる手は、先ほど目にした御璽つきの証書を掴み、掲げている。

「……メルトローの、」

低い声を途中で区切り、バスクス帝がふと黙る。トリノはメルトロー一人に向けていた目を離して、バスクス帝を振り返った。

「名乗る必要もございませんか？ それとも、お聞きでない？」

振り返り見たバスクス帝はほんの一瞬、驚きを隠せぬ目で二人を見る。

「メルトロー国王付参謀カランヌ・トルターダ・アロヴァイネン。爵位は伯爵でございます」

トリノが再び使者たちを見やったとき、彼らの顔を覆っていたはずの覆面は、いつの間にか外されていた。バスクス帝の驚いた顔に、ようやく頭が理解する。紺碧の布が取り除かれた二人の顔は、自分たちの“見知る”人物とあまりにも近く似通っていたからだ。驚きとともに、訳のわからない疑問が浮かんで離れない。

「メルトロウ王国第十三王女、サディアナ・シフィーシュ殿下をお迎えに参りました」

なぜ似ているのか。同じ国の人間だから、という理由では片づけることのできない、血縁を感じさせる顔だち。特に空色の目の男のほうは、緩やかな巻き毛を結って背に垂らし、白みのある顔は女のように繊細だった。目が合ってふわりと笑うその顔を見ては、反射的にも笑みを返すようになってしまう。鶯色の目の男よりも、フェイリットと混同するほどに背丈や雰囲気は瓜二つ。

二人の顔をまじまじと眺めたあとでトリノが見やると、バスクス帝はすでにいつもの鋭い顔に戻っていた。

「……話には聞いたことがあるが。サディアナ王女は幽閉されているはずだ」

ふと鼻で笑って、バスクス帝は首を横に動かした。“知るわけがない”というその態度は、よもや完璧だ。

メルトロウ王国のサディアナ王女といえば、諸外国に流れる噂はたったのひとつ。“醜い容姿を嘆いた王が、城の塔に隠している”というもの。あまりにも有名で、民草の話の種になることさえ少なくはない噂なのだ。

だが、そこまで考えてトリノは首を傾げる。繋がる共通点が、“サディアナ王女”の存在に集まっていく。メルトロウ国王の御璽を持つ、二人の使者。それが“サディアナ王女を渡せ”と言い張っている。消去法で考えても、トリノの知る顔の中で北方の血を持つ少女は、たった一人。

——……まさか。

「幽閉、ですか。確かに、サディアナ・シフィーシュという存在は、一度も人の目に触れてはおりませんが、」

バスクス帝の返答を聞いて、鶯色の目の男——アロヴァイネンは仕方ない、とでもいうように小さく肩を動かして、目を細めた。

「“フェイリット”という名前を使って、この国のどこかに紛れ込んでいるのは確かです。それも、バスクス二世陛下。貴方のすぐそばに」

その言葉を聞いて、バスクス帝は黙ったまま怪訝に眉を動かした。

「見当もつかん」

「……そうですか。ならば、我が王は交換条件をお出しになります」

怪訝に眉を動かして、バスクス帝が目を細める。

「サディアナ王女と思わしき人物をお渡し戴けるなら、我が国は貴国に中立の誓いを立てましょう。——……わかりますね？ もうご存じでしょうが、テナン公国との同盟の話を、白紙にしてもよい、と言っているのです。なにせ我が国は、テナン公国の独立に賛成の立場をとっておりますので、資金の援助や武器調達の援助は惜しまぬつもりでおります」

アロヴァイネンの言葉を噛むようにしばらく黙ったあとで、バスクス帝は唇の端を吊り上げ、歪んだ笑みを頬に浮かべた

「独立の賛同は、テナンの誇る鉄が目当てか。産鉄を他国に頼るメルトロウにとって、テナンは是非とも欲しい国であろう。だがそう考えると、末の王女の身柄を同じ天秤にかけてつり合うとは、どうにも思えん話だな」

その言葉に、アロヴァイネンは声を立てて笑った。“可笑しくてたまらない”とでもいうような馬鹿にした笑い声に、聞いているトリノまで顔が固まる。フェイリットと似ている、と感じた最初の印象が、なんだか腹立たしい。こんな笑い方や表情を、彼女は絶対にしないだろうに。

「さあ、それは私の知るところにはございませんよ。我が王はサディアナ殿下を溺愛なさっておりますので、鉄なぞとは比べようもないものなのでしょう」

アロヴァイネンはそう言うと、手に持っていた御璽のついた証書を、元通りに丸めて紐でくくってゆく。

「サディアナ王女をお渡し戴けるか否か、一夜の猶予を与えましょう。ですが返答を待つ代わりに、艦一隻をイクパル漁港に碇泊させる許可を願えますか」

「艦？」

「ええ。メルトローの港まで、そう遠い距離ではありませんが。サディアナ王女には一刻も早くお越しいただきたいので軍艦を」

護衛にもなりますしね、と薄い唇を笑みに引き上げ、アロヴァイネンは続ける。

「ああ、ご安心下さい。あなた方が早まって攻撃を仕掛けたり、王女を隠したりしないかぎり、艦が“防衛手段”をとることはございませんので」

軽い口調で脅迫じみた内容を言いきると、アロヴァイネンは立ち上がった。しっかりと紐で結ばれた巻紙をトリノに渡し、元居た場所に戻ってゆく。

「よいお返事を」

美しい姿勢でメルトロー式と思われる礼を残すと、二人は来た時と同じく、連れだって幕を抜けていった。

「……あの、陛下」

カツカツと鳴り響く、長靴の床を蹴る硬い音が遠ざかるのを待ってトリノが口を開くと、バスクス帝は深い息を吐きだした。

「なんだ」

「サディアナ王女は……」

サディアナ王女は、フェイリットなのか。浮かんだ疑問の答えを言えぬままバスクス帝の顔を見上げると、彼はわずかに首を動かして頷く。

「そうだ。だが、あれには言うな。自分が戦争の火種になることを、なによりも嫌っていたからな」

サディアナ王女を渡さなければ、戦争になる。

それは政治に疎いトリノにさえ、考えられる結果だった。バスクス帝は間違いなく、この話を受けるだろう。トリノは息をついて伏礼をとると、ゆっくりと立ち上がった。

「御意に」

愛も告げず、別れも言わず、抱き合うこともせず――その夜、彼らはひたすらに遊戯盤セルトで競い、笑いあっていたという。

——その光景を目の当たりにしていたなら、自分は泣いていたかもしれない。

自らの足で、去ってゆく華奢な背中を、トリノは最後まで見ていることができなかった。

「どういうことですか——！」

来る、と予想していた人物は、その予想を遥かに超えた速さで目の前に現れた。

珍しく息を切らせ、肩を上下に震わせて、燃えるような赤い髪からは透明な雫がはたはたと降りおりる。

「アンジャハティ」

宥めるような声色で、けれど確固たる圧力をもってウズルダンが彼女を迎えた。

「どういうことか、という問いはお前の疑問に対する答えを求めているのですか？ それとも、“決定された事項”への抗議か？」

「どちらもです！！！」

肩で息をし汗を流しているその姿だが、この距離を駆けつけて来たからというよりは、彼女の内心の焦りを表すように見える。確かに、それは無理もないこと。“サディアナ王女を渡さなければ、イクパル帝国を滅ぼす”——暗にそう言い放ったメルトロローの使者に、皇帝は一刻の時も置かず返答を出した。

そして、帝国存亡の危機を救うために我々が選んだ道は、彼女にとっては裏切りでしかなかった。それは固く結んだ友情に、亀裂を生むには十分な大きさ。

ウズルダンは自室の窓辺に近い場所に椅子を動かし、そこに座るよう妹を促した。

「こんなのは……こんなのは望んではいない。私はフェイリットが可愛いんだ」

しおれるように椅子へと腰を落ちつけると、アンジャハティは似つかわしくないほど弱い声を漏らした。

「フェイリット——タブラ＝ラサは“死んだ”。空白の零番目の妾妃《スフィル・ギョズデジャーリヤ》に——アンジャハティ・トスカルナ、お前が抜擢されたのです」

零番目の妾妃《タブラ＝ラサ》が死に、アンジャハティ・トスカルナがその位を受け継いだ。

その公的な発表は、程なくして示された。

\* \* \* \*

頬をなでてゆく優しい手。それを追うように目を覚ましてから、ただの風だと気づいた。

「お気がつかれましたか」

間を置かず、低い声が頭の上から降りかかる。聞き慣れたその声の主を目をやって、フェイリットは微笑んだ。

「おはよう、ジル。珍しいね、ここまで起こしにくるなんて」



ハレムから隠し通路が続いているとはいえ、バスクス帝の寝所は女人禁制である皇帝宮の玉座の間の裏手だ。ジルヤンタータが寝所の内にまで単独で入り込み、寝ているフェイリットに声をかけることは、あまり勧められたことではない。

「どうしたの」

寝台から身を起こしてジルヤンタータのただ事ではない顔を見つめる。

「お逃げください」

「え——？」

「メルトロ王国が、貴女を渡すようにと公式な申し立てをしてきました」

ジルヤンタータの顔は、蒼白を通り越してもはや表しようのない色をしていた。

「どういうこと？ ディア、……陛下は何と？」

「殺すようにと」

「え、メルトロからの使者を?!」

「いいえ、貴女を、です」

一瞬の間をおいて、フェイリットは口を開けた。

言葉が出なかったわけではなく、もう頭が働かなかったとっていい。ジルヤンタータが言い放った単語の一つ一つが、するすると滑って理解の枠を超えてゆく。

「わたし、を」

殺す……。

彼とは昨夜、楽しく遊戯版で競い合ったばかりだ。

「イクパル帝国にとって、貴女を渡すことは、事実上の降伏に値します」

フェイリットはジルヤンタータの落ちついた低い声に、ようやく頷いて見せた。

戦っても負ける相手なのは確か。しかし国の体面を保つこともまた、存亡に関わる重大なことから。「渡せ」と言われて「はいどうぞ」では、周囲の国々に甘く見られる。何百年と守り続けた、イクパルの国土が侵されることにもなりかねない。けれど、

「陛下は……」

頬を伝った涙が、太ももに落ちて流れていった。

「わたしを殺すの」

ディアスを、バスクス二世帝を愛している。この感情は、理性ではどうにも押し込められるものではない。心が通じたと思っていたのは、自分だけであったのか。

殺すと、簡単に切り捨てられる存在だったことが痛ましくて仕方がなかった。

こんなにも簡単に、こんなにも呆気なく。

「逃げた先で死んだと言うつもりでしょう。ですがこれは、逃げさえすれば生死はどうでもよいのと同じこと。体面を守ればいいのですから。フェイリット、お逃げください、一刻も早く」

のろのろと立ち上がると、潤んで見えない視界の向こうに、黒い影を見つけてしまう。フェイリットは小さく足を踏み出して、けれど彼の元へ駆け寄るのを拒んだ。

「陛下」

愛する人のその手に、大きな彎刀が握られていたから。

「ほんとうですか」

「ああ」

「わたしを殺す？」

「そうだ」

「陛下、」

「もういいだろう。黙れ」

冷酷な一蹴だった。憤りを超えた空虚のような冷たいものが、頭を這うようにして覆っていく。フェイリットはただ、首から下げた琥珀色の珠を引き千切り、彼に力なく投げつけた。それしか投げるものがなかったから。けれどそれさえも、彼には届かず床に転がる。

「目を閉じろ」

――振りかざされた刃を避けるのは容易だった。加減されていたのか、自分の方が上わ手だったのか。

けれどわたしは、その刃を受け止めようと目を閉じた。愛する人が、目の前から消えてしまう。そんな苦しみを、もう二度と味わいたくなかった。

サミュンを失った悲しみを、溶かしてくれた存在。彼を失うくらいなら、その手にかかり命を絶つ方が、よほど幸せに思えたから。

首を裂いて血が噴き出す。そんな光景を脳裏に描き、刃がこの身を貫くのを待つ。

けれども、いくら経っても痛みが来ない。

痺れを切らして目を開けると、そこにはもう、バスクス二世帝の姿は無かった。

隣で崩れ落ちるように泣くジルヤンタータが一言、

「お逃げください、メルトロー王国へ《、、、、、、》」

絞り出すように、そう言った。

\* \* \* \* \*

バスクス二世帝との謁見から翌日、思いの外あっさりと、サディアナ王女は帰還に従った。

用意してきた頑丈な鎖の手枷も、轡も、檻さえも“必要ない”と自らで示して。

## Icpal 火炎の王



<http://p.booklog.jp/book/17676>

ご覧いただきありがとうございました。

著者：耳子

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mimicko/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/17676/reaction/>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/17676>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.

# 帝国周辺地図

